



Title	エゾオオカミをめぐる歴史と文化 : 日本における研究史およびオオカミ観形成過程の検討
Author(s)	梅木, 佳代
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第13710号
Issue Date	2019-09-25
DOI	<a href="https://doi.org/10.14943/doctoral.k13710">https://doi.org/10.14943/doctoral.k13710</a>
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/93129">https://hdl.handle.net/2115/93129</a>
Type	doctoral thesis
File Information	Kayo_Umeki.pdf



博士論文

エゾオオカミをめぐる歴史と文化：

日本における研究史およびオオカミ観形成過程の検討

北 海 道 大 学

大 学 院 文 学 研 究 科

歴 史 地 域 文 化 学 専 攻

指 導 教 員 佐 々 木 亨

氏 名 梅 木 佳 代

## 要旨

本稿は、エゾオオカミを事例として、日本のオオカミに関わる言説およびオオカミ観の変遷過程について、文献資料上の情報から検討を試みることを目的とする。

エゾオオカミ (*Canis lupus hattai*) は、かつて北海道、サハリン、択捉島、国後島に生息したハイイロオオカミ (*Canis lupus*, 以下オオカミと表記) の亜種である。日本列島内には、ほかに本州・四国・九州に生息していたニホンオオカミ (*Canis lupus hodophilax* あるいは *Canis hodophilax*) が存在したが、どちらのオオカミも明治時代に絶滅したとされる。

日本在来のオオカミに向けられる関心は高く、これまでも多くの取り組みや情報発信が行われてきた。しかし、日本のオオカミをめぐる研究状況は、社会的にも学術的にも「百家争鳴」状態にあって、「混迷」していると指摘を受ける状況にある。筆者は、この混迷した状況は、明治時代以来およそ 150 年間にわたって発信・蓄積されてきた情報が、まったく整理されていないことに起因すると考える。過去の日本国内ではオオカミと人はどのように関わりあってきたのか、その実態を明らかにするためにも、過去から現在への研究や言説の動向を踏まえた議論が必要と考える。

とくに、これまでのエゾオオカミに関する議論では、北海道内にオオカミが生息していた期間の情報や資料が非常に少ないことが前提とされてきた。しかし、学術的な議論の中ではそうした前提を踏まえたうえで「仮説」として提示された情報が、繰り返し参照されるうちに単純化され、「結論」として新規の議論に供されている。どこまでが事実に基づく内容なのか、具体的な検討と確認が行われなければ、各分野や時代的な背景に応じて納得しやすい認識が先行し、それによって不適切な議論が生じる可能性が危惧される。そうした実態を明らかにしていくためにも、過去から現在への歴史的な議論の経緯の明確化と、変遷の有無を把握する必要があると考える。

日本のオオカミに関する従来議論の流れを把握し、同時に過去の情報の拡充を進めることができれば、日本人が野生動物としてのオオカミに対する理解を過去から断絶させているのか否か、もし断絶が起きているとすれば、どの時点で何が変化したのかを明らかにしていくことも可能となると考える。これは、日本国内における人と動物の関係史の一端を解き明かすことにつながると同時に、1990 年代に提案された、日本列島内へのオオカミ「再導入」をめぐる議論において、将来にわたってその是非を検討し、適切かつ妥当な意志決定を図っていくためにも必要な作業といえる。

野生生物を過去の生息地に移植・再導入する取り組みは、海外では 1970 年代から積極的に実施されてきた。現在では、過去に失われた自然を復元し、再生することを目的とした「自然再生事業」の一環としても重要な手法であると位置づけられている。日本へのオオカミ再導入は、おもに生物多様性および生態系の保全にくわえて、多額の被害をもたらす獣害防除などの観点から検討されているという。絶滅によって日本列島内のオオカミが不在となっていることは事実であり、これは、将来にわたる生物多様性の保全や自然再生のありかたを考えるうえで常に解決すべき問題点であり続ける。再導入という手法の有効

性が完全に否定されないかぎり、問い返しが続けられるだろう。ただ、北半球全体を分布域とするオオカミは、地球上の現生哺乳類の中でもとくに環境への適応度合いが高いことで知られている。環境に合わせて多様な生態を示す種にあつては、新たに導入された地域でどのような行動・生態をみせるのか推測することは難しい。この点について妥当な推測を行うためには、過去に日本列島内に生息していたオオカミに関わる情報を集約して検討する必要があると考える。

以上を踏まえて、本稿は、明治時代以降に日本国内で発表された日本のオオカミに関する文献と、その記述内容を分析・考察の対象とし、日本人とオオカミの関係性について現在までの状況を確認する。まず、明治時代以来の研究動向を確認するために、国内で発行された日本のオオカミに関わる文献を可能なかぎり網羅的に確認することを目指した。対象資料の収集は、オンラインの検索サービスおよびデータベースを利用して基礎資料を収集し、そのうえで各地の図書館等の施設を利用して広く文献の渉猟を行った。研究史の検討に際して必要となるのは日本のオオカミに関する知見の提示や考察・議論を行った文献であり、これまでに970件の文献を収集し、分析対象として位置づけた。

一方、エゾオオカミと人との関わりについて分析を行うためには、既知の文献に加えて新たな対象資料を収集する必要がある。また、北海道におけるエゾオオカミをめぐる歴史・文化を検討していくためには、アイヌ民族と和人の双方の記録を参照することが望ましいと考えた。そこで、本稿では、和人側の情報を得るために、北海道内の自治体が刊行する「市町村史」を対象とした調査を行った。一方、アイヌ民族側の情報については、アイヌ民族の口承文芸の内容、研究者である更科源蔵による刊行文献、および更科がアイヌの人々から聞き取った情報をまとめた記録『コタン探訪帳』、『コタン探訪日記』を対象として調査に取り組み、オオカミとの関わりに言及がある情報を抽出・収集した。本稿の執筆にあたって収集と確認を行った資料は、本文中では言及することができなかったものも含め、すべて巻末の資料編にまとめ、再現・検証性の確保につとめた。

本稿の章立てとしては、まず序章において研究背景、問題の所在、研究目的を確認し、議論に取り組むにあたって必要となる手法、構成を確認した。

第1章では、日本におけるオオカミの研究史の検討を行った。年代ごとの主要な取り組みや動向を明確化し、オオカミをめぐる議論がどのように進展してきたか確認した。結果として、日本のオオカミをめぐる研究史には、2度の画期と呼べる時期が存在することを明らかにすることができた。また、特定の言説が、エゾオオカミ・ニホンオオカミに対する意識や考え方を変化させてきた可能性についても検討した。なお、第2章以降の議論はすべて第1章の内容を前提として取り組むこととする。

第2章では、北海道内の市町村史を対象としてオオカミに関する記述を抽出し、その整理と分析に取り組んだ。従来、エゾオオカミは、おもに明治時代に入ってから北海道に持ち込まれた家畜に対して甚大な被害を出した害獣だったと理解されてきたが、本稿では、実際には江戸時代から家畜ウマに対する食害が起きていたことを確かめた。また、家畜に対する被害だけでなく、開墾や道路建設などの状況下では、人がオオカミに対して「恐怖感」や「脅威」を感じていたことを示す記録も存在した。実際の事例を踏まえたうえで、

今後の議論では北海道における和人とエゾオオカミの関係性について、あらためて検討していく必要性を提示した。

第3章では、アイヌ民族とオオカミのかかわりについて検討した。近代以前の北海道におけるアイヌ民族とオオカミは、互いの存在を脅かすことなく平和に共存共栄していたと考えられてきた。しかし、そのように記述される状況が、実際にはどのような資料・媒体から得た情報を元として描き出されてきたのかは明確ではなかった。先行する言説を踏まえたうえで、アイヌ口承文芸にあらわれるオオカミの表現、さらに聞き取り調査記録の内容と照らし、アイヌ民族とオオカミの関係性について、和人の研究者による情報のコントロールが行われていた可能性を指摘した。

第4章では、研究史における論点と、各章における議論・検討の結果として得られた知見とを集約した考察を行った。従来、エゾオオカミは「日本の」オオカミであるニホンオオカミに関する議論を支え、傍証する存在としての価値を付与されてきた。ニホンオオカミと関わる論点のみが注目され、掘り下げられ、本州以南でも同様の事態が起きていたとする前提に立ってエゾオオカミ側の情報が利用されている。しかし、実際には明治初期の北海道においてオオカミに向き合った「入植者」である人々の置かれていた状況は本州以南とは大きく異なり、容易に比較検討するべきではなかったと考える。従来の日本の2種のオオカミをめぐる議論は、日本列島内すべてが均質であるべきとする視角からなされていたが、「日本人とオオカミ」という巨視的なとらえ方をしてきたからこそ、細部の特徴や地域ごとの特異性をそぎ落とし、混迷した状況を生み出す結果に繋がってきた。そうした取り組み方は改められるべきと考える。

終章では、これまでの議論を総括し、本稿における結論と今後の課題とすべき点を述べている。

本稿における議論を通して、従来は明治時代に入ってから起きたとされるエゾオオカミと人との間の軋轢が江戸時代後期まで遡ることを確認したが、さらに当時の人々は、エゾオオカミがもたらす家畜被害のみならず、大型の肉食獣である存在そのものを脅威とみなしていたことも示唆された。とくに明治時代には、故郷を離れて入植した先で強い脅威や困難に直面することは、入植者にとってはこのままでは生活を続けていくことができないという危機感を大きくあおられる事態だったと推測される。家畜被害の有無にかぎらず北海道内の多くの地域でオオカミが捕殺されたのは、脅威の根源となる存在を取り除くことが目指されたためだったと考える。

エゾオオカミが絶滅して不在となってから100年を超える空白期間が生じている。現在、その結果としてオオカミをめぐる歴史・文化の断絶が生じ、野生動物としてのオオカミの「正しい姿」を理解することが困難となっているとする指摘がある。しかし、本稿では、過去から大きく断絶しているのは、むしろ害獣観に基づくオオカミへの理解であると考察した。北海道における人とオオカミの関係性については、海外からの主義、思想や技術の流入さえなければオオカミとは平和に共存できたとする理想論が語られ、現実や、過去の実態がなおざりにされてきた。都合の良いように歴史を修正してきたということもできる。

過去の人々は、エゾオオカミと向き合った際にどのような困難と直面していたのか。北

海道におけるエゾオオカミ，和人，アイヌ民族，お雇い外国人など，複雑に絡み合った要素や背景についてより具体的に分析し，共存していくためには何が必要だったのかを明らかにしていくことが，今後の研究では必要となると考える．

# 目次

## 要旨

<b>序章</b>	<b>1</b>
第1節 研究の背景	1
1. エゾオオカミをめぐる現状	1
2. 問題の所在	6
第2節 研究の目的	6
第3節 手法	7
第4節 本論文の構成	9
1. これまでの取り組み	9
2. 章立て	9
第5節 凡例	11
<b>第1章 日本におけるオオカミの研究史</b>	<b>16</b>
第1節 資料および時期区分	16
1. 資料の収集方法	17
2. 文献リストの作成について	18
第2節 1868（明治元）年—1930年代	18
1. 明治時代前期（1867～1890年）：近代動物学におけるオオカミの定義	19
2. 明治時代後期（1891～1912年）：日本のオオカミを表わす名称の変化	19
3. 1910年代（1913～1920年）：エゾオオカミの絶滅に対する認識	20
4. 1920年代（1921～1930年）：「ヤマイヌ」の絶滅について	21
5. 1930年代（1931～1940年）：専門家による研究活動の開始	22
第3節 1940年代—1980年代	23
1. 1940年代（1941～1950年）：ニホンオオカミに付与される特異性	24
2. 1950年代（1951～1960年）：オオカミ生残説の台頭	24
3. 1960年代（1961～1970年）：分類学上の定義の問い直し	25
4. 1970年代（1971～1980年）：実態とイメージの分離	26
5. 1980年代（1981～1990年）：情報の単一化	26
第4節 1990年代—現在	27
1. 1990年代（1991～2000年）：「再導入」という新たなテーマ	27
2. 2000年代（2001～2010年）：議論の活発化	28
3. 2010年代（2011～現在）：既存情報の再検討	29
第5節 現状の到達点	31
1. 従来の変向	31

2. 問題点と今後の展望	32
<b>第2章 自治体史におけるエゾオオカミの記述</b>	<b>38</b>
第1節 市町村史を対象とした調査	38
1. 対象資料の選定	38
2. 資料の収集方法	39
3. 資料の性質について	40
第2節 エゾオオカミに関する記述	42
1. 全体の傾向	42
2. 各地域に見られる記述の動向	45
第3節 エゾオオカミと人との関わり	76
1. 和人とオオカミの関係性	76
2. オオカミによる人的被害	85
第4節 絶滅経緯	90
1. 市町村史の記述を用いた検討	90
2. 江戸時代の状況を踏まえた経緯把握の必要性	93
<b>第3章 アイヌ民族とオオカミの関わり</b>	<b>101</b>
第1節 アイヌ文化におけるオオカミの位置づけ	101
1. カムイとしてのオオカミ	101
2. 和人による先行研究が抱える問題	103
3. アイヌ民族によるオオカミの狩猟	104
第2節 アイヌ口承文芸にあらわれるオオカミ	105
1. 対象資料	105
2. 口承文芸にあらわれるアイヌのオオカミ猟	107
第3節 情報発信者による取捨選択	113
1. 対象資料	114
2. 刊行文献に見られる記述	115
3. 「更科ノート」に見られる記述	117
<b>第4章 エゾオオカミをめぐる情報とその位置づけ</b>	<b>122</b>
第1節 ニホンオオカミの傍証的存在としての価値	122
第2節 絶滅の責任を問う議論	125
第3節 オオカミ観の断絶と連続	127
<b>終章 結論と今後の課題</b>	<b>129</b>
第1節 結論	129
1. 第1章 日本におけるオオカミの研究史	129

2. 第2章 自治体史におけるエゾオオカミの記述	130
3. 第3章 アイヌ民族とオオカミの関わり	130
4. 第4章 エゾオオカミをめぐる情報とその位置づけ	131
第2節 今後の課題と展望	132
1. 史的展開を記述するうえでの硬直性	132
2. 研究史関連資料の詳細な検討と分析	133
3. エゾオオカミと人の関わりについて	133
<b>謝辞</b>	<b>135</b>
<b>参照文献一覧</b>	<b>136</b>
<b>北海道内「市町村史」一覧（五十音順）</b>	<b>148</b>
<b>初出一覧</b>	<b>164</b>
<b>資料編</b>	
1. 日本国内で発行されたオオカミに関わる文献リスト	1
2. 市町村史におけるオオカミの記述	54
3. 付表① 調査対象「市町村史」一覧	111
4. 付表② アイヌ口承文芸一覧	119
5. 付表③ 「コタン探訪帳」中に確認できるオオカミに関する記述	122

## 序章

エゾオオカミ (*Canis lupus hattai*) は、かつて北海道、サハリン、択捉島、国後島に生息したハイイロオオカミ (*Canis lupus*, 以下オオカミと表記) の亜種である。日本列島内には、ほかに本州・四国・九州に生息していたニホンオオカミ (*Canis lupus hodophilax* あるいは *Canis hodophilax*<sup>1)</sup>) が存在したが、どちらのオオカミも明治時代に絶滅したとされる。本研究は、このうちエゾオオカミを議論の対象とし、北海道のオオカミをめぐる歴史と文化を明らかにしようと試みるものである。博士論文である本稿では、明治時代から現代までの期間を対象とし、オオカミが絶滅し、不在となった後も展開を続けるオオカミ観<sup>2)</sup>の実態を把握することを目指した。

本章では、博士論文の内容と立ち位置を明確にすることを目的とし、研究背景と意義、研究の目的、研究手法、本論文の構成について概要をまとめる。ただし、本論部分との重複を避けるため、研究手法の詳細は各章で述べることとする。

## 第1節 研究の背景

### 1. エゾオオカミをめぐる現状

#### 1-1. オオカミについて

オオカミは、食肉目イヌ科イヌ属に分類される大型の野生動物である。北アメリカ・ユーラシアの両大陸にわたり、アフリカやインドなど赤道付近から北極圏にいたるまで北半球全体に広く生息する<sup>3)</sup>。オオカミはイヌ科 (*Canidae*) 野生動物中では最大種であり、「人類最古の友」と称されるイエイヌ (*Canis lupus famirialis* あるいは *Canis familiaris*) の原種であるとされてきた<sup>4)</sup>。おもに有蹄類を捕食対象とするが、地域によっては小動物、果実、昆虫なども食性に含む<sup>5)</sup>。カナダなど一部地域には魚食性の集団が存在することも知られている<sup>6)</sup>。ゴミ捨て場などに依存して生活することもある<sup>7)</sup>。

オオカミは、分布域内の多くの地域で人と対立・緊張関係にある。これは人が「財産」として飼育管理するウマ (*Equus caballus*)・ウシ (*Bos taurus*)・ヒツジ (*Ovis aries*) などの家畜をオオカミが多く食害し、損害を生じさせることによる。オオカミが人に対して直接の危害を加える機会は限られるともいわれるが、大型の肉食獣であるがゆえに人との軋轢を避けることは難しい<sup>8)</sup>。とくに狂犬病に罹患した個体や人慣れにより適切な距離感を失った個体は人身被害をもたらすことがあり<sup>9)</sup>、オオカミが人や社会にとって脅威となりうる野生動物であることは事実である。また、捕食者としてのオオカミは、生態系において大きな影響力を持つと同時に、人にとってはシカなどの同じ獲物を狩猟対象とする「生態学的な意味での競合相手」でもあるとされ<sup>10)</sup>、現代では適切な距離を保ちつつ共存していくためのマネジメント計画が多くの地域で課題とされている。

## 1-2. 日本在来オオカミの絶滅

日本列島内には、他地域の集団から種、あるいは亜種レベルで区別される2種類のオオカミが生息していたが、どちらも明治時代に絶滅したとされる。主として北海道に分布したエゾオオカミでは、1896～1903（明治29～36）年<sup>11</sup>の記録が最後のものとして知られる。本州・四国・九州に分布したニホンオオカミの絶滅年は1905（明治38）年であり、エゾオオカミはより早い段階で姿を消したことになる。

日本国内における2種類のオオカミの絶滅という事態は、明治維新後に全国規模で発生したという鳥獣の乱獲、国土開発・開拓の進展による生息域の縮小と分断、オオカミの主要な餌動物の減少、さらにジステンパーなど外来伝染病の影響など、さまざまな背景を有する要因が複合的に影響して起きたものと理解される<sup>12</sup>。ただし、北海道のエゾオオカミおよび東北地方のニホンオオカミに限っては、明治時代以降「家畜を襲う害獣」や「皇化普及ノ妨害」<sup>13</sup>として、積極的な駆除の対象とされていたことが知られている。これらの地域のオオカミは、過度の狩猟圧が影響して絶滅したといえる。

とくにエゾオオカミについては、開拓使が1877（明治10）年に布達した「有害鳥獣獲殺」制度の実施が、北海道内の個体群の絶滅に直接的な影響を及ぼしたと理解されてきた<sup>14</sup>。明治時代初期の北海道では、オオカミおよびエゾヒグマ（*Ursus arctos yesoensis*、以下ヒグマと表記）による家畜被害が頻発していた。そのため、過去の行政機関である開拓使は両種を有害獣とみなし、駆除・獲殺に対して手当金の支給を定めた。この制度については、主として山田伸一により以下の情報が明らかにされている<sup>15</sup>。

北海道でこの制度が実施されていた1877（明治10）年から1888（明治21）年にかけて、記録上では最低でも1,827頭のオオカミが獲殺されたという。この期間における手当金の支給金額は一定ではなく、1878（明治11）年にはオオカミ7円、ヒグマ5円に金額が引き上げられ、さらに1882（明治15）年の札幌県ではオオカミの獲殺に対する額は1頭につき10円に達している。一方で、ヒグマは1頭3円に引き下げられる形での変更がなされた。オオカミの獲殺に対する手当金支給額の引き上げについて、その背景にはヒグマと比較した際の「商品価値、狩猟者の多寡、狩猟の難易、被害の大きさ」が介在したという。ヒグマに比べると、オオカミは毛皮や肉の利用価値が低く、自発的な狩猟者の増加を期するには、獲殺に対する支給金額の引き上げが必要だったとされる。当時、オオカミ・ヒグマのいずれについても、実際に人畜に被害をもたらした個体に限らず獲殺が進められていた。なお、当時の実態解明とあわせて、アイヌ民族が手当金の支給を目的としてオオカミを積極的に獲殺するようになった可能性も指摘されている。

こうした具体的な状況や経過は近年になって明らかにされたが、北海道のエゾオオカミが明治時代に公的な駆除の対象とされていたことは、明治時代当時から刊行文献上での言及が続けられてきた<sup>16</sup>。そのため、人為的な駆除によってエゾオオカミが絶滅に至ったことは、北海道の歴史の中に明確に位置づけられ、広く知られてきたといえる。

### 1-3. 日本国内へのオオカミ再導入の検討

日本国内ではすでに絶滅したオオカミだが、その存在に対する人々の関心は高く、明治時代以来およそ 150 年にわたってさまざまな形での情報発信や行われてきた。とくに 1990 年代に日本国内へのオオカミの「再導入」が提案され、日本オオカミ協会が主導する検討が続けられていることは、直接の賛否も含めて多様な議論の展開をもたらした。

絶滅した野生生物をかつての生息域に移植・再導入する取り組みは、海外では 1970 年代から積極的に実施されてきた<sup>17</sup>。現在では、過去に失われた自然を取り戻すことを目的とした「自然再生事業」の一環としても重要な手法であると位置づけられている<sup>18</sup>。日本オオカミ協会会長の丸山直樹によると、日本へのオオカミ再導入は、おもに生物多様性および生態系の保全、多額の被害をもたらす獣害防除などの観点から検討されているという<sup>19</sup>。シカ (*Cervus nippon*) やイノシシ (*Sus scrofa*) など、国内在来の野生動物の生息数増加によって農林業などへの被害が多発・深刻化する現状への対策として、おもに有蹄類を捕食することが知られ、かつ日本在来の野生動物でもあったオオカミを導入することが目指されている。この手法に関しては、否定・懐疑的な見解<sup>20</sup>も呈されているものの、2014 (平成 26) 年には第 186 回国会・環境委員会において石原伸晃環境大臣 (当時) による言及もみられ<sup>21</sup>、社会的にも広く認知されている。

北海道でもオオカミの再導入を検討する動きが起こり、注目されたことがある。2001 (平成 13) 年、知床国立公園の「100 平方メートル運動・トラスト」の「第二次復元対象生物」にオオカミが取りあげられた。そこから数年にわたり、知床博物館および知床財団が中心となってオオカミ再導入をめぐる精力的な議論と報告に取り組んでいる<sup>22</sup>。とくに 2005 (平成 17) 年 7 月に開催された第 9 回国際哺乳類学会議・シンポジウム「知床とイエローストーン：代表的な国立公園における哺乳類管理の比較」では、知床地方へのオオカミ再導入の可否が主要な議論のひとつとされ、日米双方の研究者による検討が行われた<sup>23</sup>。2005 (平成 17) 年の知床地域の世界自然遺産登録に関わって新聞などメディアにも取り上げられ、広く報じられている<sup>24</sup>。このときの議論は、知床半島における「オオカミの収容力」・「導入後のオオカミの管理」・「社会的受容」いずれの面からもオオカミの再導入は困難である、とする判断に至っている<sup>25</sup>。また、とくに知床世界自然遺産管理計画におけるエゾシカの管理手法としてのオオカミ再導入については、以下のような言及も確認できる。

エゾシカの個体数削減のためにオオカミを導入することについても議論があった。しかし、エゾシカ管理手法としてのオオカミ導入の是非を、与えられた 3 年間で決定することができないこと、また、オオカミ導入によるシカ個体数の抑止効果は未知であり、導入実験は知床半島規模では収まらないことから、管理手法としては採択しなかった<sup>26</sup>。

ここで述べられているオオカミ導入によるシカの個体数抑止効果については、おもに

北米を中心として、捕食者オオカミの存在が生態系、とくに被捕食者である有蹄類の個体数に対してどのような影響を与えるのかを観測・分析する長期的な研究が行われ、情報の蓄積が進んでいる<sup>27</sup>。今後、日本にも適用可能な理論や技術が報告される可能性もあると考える。

絶滅によって日本列島内にオオカミが不在となっていることは事実であり、将来にわたる生態系・生物多様性の保全や自然再生のありかたを考える上では、常に解決すべき問題点であり続ける。再導入という手法の有効性が完全に否定されないかぎり、問い返しが続けられるだろう。ただ、北半球全体を分布域とするオオカミは、地球上の現生哺乳類の中でもとくに環境への適応度合いが高いことで知られる種でもある<sup>28</sup>。環境に合わせて多様な生態を示す種にあっては、新たに導入された地域でどのような行動・生態をみせるのか推測することは難しい。この点について妥当な推測を行うためには、過去の北海道におけるエゾオオカミに関わる情報を集約して検討する必要がある。

#### 1-4. 日本における人とオオカミの関係性をめぐる議論

絶滅したエゾオオカミ・ニホンオオカミは、かつては人々の生活に深く根ざした野生動物だったと考えられる。過去の日本列島で、人とオオカミの間にはどのような関係性が築かれていたのかという問いは、オオカミが絶滅して長い時間が経過した現在でも繰り返し提唱され続けている。ただし、その一方で、各地に多くの民話や伝説が残存し、継承され、現在でもオオカミにまつわる民俗儀礼を実施する地域も存在する。過去から受け継がれてきた、連続性のある要素もみられるのが現状といえる。

前述した知床へのオオカミ再導入に関する議論の中では、多くの問題提起がなされていた。その中に、今後も継続して日本のオオカミに関する議論に取り組んでいくにあたって、重要な課題となると考える以下の指摘がある。

100年を超える北海道のオオカミの不在は、現代の人々のオオカミへの理解を困難にしている。再導入の是非は科学的検討だけで済まされるものではなく、最終的には社会全体が判断すべきものであろう<sup>29</sup>。

100年を超えるオオカミの不在を経て、たしかに現代の日本人は野生のオオカミを目にする機会を失っている。エゾオオカミを実在する野生動物として認識していた世代と、現代を生きる筆者らとの間には断絶が存在している。これは時間的な断絶であり、野生動物との接触を重ねる中で築かれてくるはずだった歴史・文化の断絶でもある。しかし、実態として日本人のオオカミ観は過去からどのように変化したのか、変化したとすればどのような要素が該当するのかは明確とはいえない。

日本人のオオカミ観について、近年では、西欧的な文化・思想が流入した明治維新を契機として大きく転換したとする説が受容されている。また、外部からもたらされた変化によって、自然やオオカミを含む野生動物に対する人々の認識や態度も変わり、

絶滅という事態を引き起こしたとする傾向もみられる。

日本では、明治政府による外来文化政策によって、実像を失った日本人の伝統的オオカミ観はすっかり塗り替えられてしまった。この一世紀、日本人は反オオカミ観をモチーフとする文芸に何の疑いも持たずに慣れ親しんできたのである<sup>30</sup>。

ただし、日本人のオオカミ観に変化が起きた時期や要因については、多くの異説も確認できる。

狼に対する一般民衆の観念の変化である。すなわち、古代から「大口の真神」とたたえられ、また、田畑を荒らす猪鹿を退治する農耕の守護者として崇められてきたニホンオオカミも、その神格を喪失する時機が到来したのである。それは享保十七年（1732年）以来、海外からの狂犬病の侵入と、その流行によって急激に起こった。穏和とさえ思われていた狼は、にわかに危険きわまりない猛獣と化した<sup>31</sup>。

ここでは、古代から続いてきた日本人のオオカミに対する態度は、江戸時代になって狂犬病が国内に侵入・流行したことを契機として急変したと述べられている。これに対して、東北地方では狂犬病が侵入する前からオオカミと人の間に軋轢が生じていたとする指摘も存在する。

狼も獺も絶滅する以前には、人びとから敬われ、愛される面があったことが、種々の民俗事例からうかがわれる。しかし、その一方で、人の生活や生業を害して嫌われることもあった。古くから、こうした功罪の両面を人びとが意識していたと思われる。それにも関わらず、ある時代から負の側面、すなわち人に害を及ぼす害獣であることが強調されるようになる<sup>32</sup>。

過去の日本人とオオカミの関係性、その実態をめぐる言説には曖昧さがある。現状では明治維新が「転換点」として仮定されているが、実際に日本全体に反映できる仮説なのか、具体的な検討は行われていない。分野や時代的な背景に応じて納得しやすい認識が先行し、それに基づく議論が行われてきた可能性がある。かつて2種のオオカミを一度に絶滅させたという結果だけをみるならば、日本人は「共存を目指す上で望ましくないオオカミ観を有していた」と述べることもできる。過去の日本国内ではオオカミと人はどのように関わりあってきたのか、その実態を明らかにするためにも、過去から現在への歴史的な経緯の明確化と、変遷の有無を把握する必要がある。

## 2. 問題の所在

絶滅した日本在来のおオカミに対して向けられる関心は高く、これまでも多くの取り組み・情報発信が行われてきた。多種多様なテーマ、レベルにおける取り組みがあり、議論が展開される分野も多岐にわたる。ただし、その現状は、日本のおオカミをめぐる議論は社会的にも学術的にも「百家争鳴」状態にあつて「混迷」しているとする指摘<sup>33</sup>を受けるものとなっている。

実際に、これまでに行われてきた多数の取り組みの全体を確認することは非常に困難といえる。さらに、個々の論点における定説・異説がどの程度存在し、それぞれ何を論拠として展開してきたのか、その現状の到達点がどこにあるのかも容易には把握できない。筆者は、このような混迷した状況は、明治時代以来およそ 150 年間にわたつて発信・蓄積されてきた情報が、まったく整理されていないことに起因すると考える。たとえば、「おオカミ」に焦点をあて、従来の動向を概観したうえで問題点や今後の課題を整理した例として、中村生雄による「おオカミをとおして見る人と自然」<sup>34</sup>や、吉川圀男による「ニホンおオカミ研究の現状と今後」<sup>35</sup>があるが、その際に参照した先行研究・文献資料の範囲設定や条件については説明がない。現状に至るまでの動向や研究成果が把握できず、継続して仮説の検証や結論の更新をかさねていくことが不可能な状況にあつては、研究全体の進展は見込めない。今後のためには、これまでに蓄積されてきた情報を可能なかぎり集約し、把握する必要がある。

また、とくにエゾおオカミに関する研究・議論においては、北海道内におオカミが生息していた期間の情報・資料が非常に少ないことが常に議論の前提とされてきた<sup>36</sup>。しかし、学術的な議論の中ではそうした前提を踏まえたうえでの「仮説」として提示された記述が、繰り返し参照されるうちに単純化され、「結論」として新規の議論に供されている状況にある。くわえて、こうした現状にありながら、エゾおオカミに関する情報や文献を体系的に収集し、質・量ともに拡充しようとする試みはごく一部にとどまってきた。エゾおオカミに関する研究では、既存の知見に関する妥当性の評価が求められると同時に、検討対象となりうる情報や事例の数を増やすことが優先的に目指されなければならない。

日本のおオカミに関する従来の議論の流れを把握し、同時に過去の情報の拡充を進めることができれば、日本人が野生動物としてのおオカミに対する理解を過去から断絶させているのか否か、もし断絶が起きているとすれば、どの時点で何が変化したのかを明らかにしていくことも可能となると考える。これは、将来にわたつて日本へのおオカミ再導入の是非を検討し、適切かつ妥当な意志決定を図っていくためにも必要な作業といえる。

## 第 2 節 研究の目的

本稿は、エゾおオカミを事例として、日本人のおオカミに関する言説およびおオカ

ミ観の変遷過程について、文献資料上の情報から検討を試みることを目的とする。

前節までに述べたとおり、日本のオオカミに関する研究史は整理されていない。したがって、本稿では、まず明治時代以来の研究動向を概観することを試みる。オオカミに関心をもつ人々の取り組みや、その成果として発信される情報が、どのように展開してきたのかを文献資料上の記述から確認する。日本列島内のオオカミが絶滅したとされてから100年以上にわたって蓄積されてきた言説の内容を把握することで、日本人のオオカミ観が更新され、変遷を経てきた可能性について検討することが可能となると考える。

さらに、日本のオオカミをめぐる研究史を把握したうえで、エゾオオカミに焦点を絞った議論に取り組む。従来、エゾオオカミは明治時代に公的な駆除政策が必要となるほどの家畜被害をもたらした「害獣」としての面に焦点が当てられ、さまざまな議論に供されてきた。しかし、当時の人々にとってのエゾオオカミが、家畜を襲う有害獣以外の側面を持たなかったのかという点をはじめ、より広範な関係性については判然としないのが実情といえる。現代世界が直面しているさまざまな環境問題、あるいは生物多様性の保全、野生生物との共存といった多くの課題に対して、明確な「失敗例」といえるエゾオオカミの絶滅とその後の展開<sup>37</sup>は、より具体的に理解され、位置づけられる必要があると考える。とくに日本国内では、人間社会と野生動物の間の軋轢が強まりつつある現状にあって、野生動物との共存および適切な距離・関係の構築を目指すために、人と動物の関係史を理解する重要性が意識されている<sup>38</sup>。また、日本人の動物観は時代とともに変化してきたとする方向性の議論<sup>39</sup>も深まりつつある中で、絶滅したエゾオオカミをめぐる歴史・文化を明らかにしていく作業は重要であるといえる。こうした状況を踏まえて、本稿では、エゾオオカミについて新たに分析対象となる事例を収集し、人とエゾオオカミがどのような場面で接触していたのかを確認する。当時の人々がどのような態度をもってエゾオオカミと対峙したのか、それが現在では不明確となっているのはなぜか、和人とアイヌ民族それぞれの事例を対象に含めて検討し、日本におけるオオカミに関する言説のありかたを分析する。

百家争鳴と称されるほど混迷した日本のオオカミをめぐる状況を整理し、全体の進展に寄与するために、本稿では、エゾオオカミを事例として日本人のオオカミに関する言説およびオオカミ観の変遷過程を検討し、本州以南の各地の事例とどのような相異点、共通点が存在するのかを明確化することを目標とする。

### 第3節 手法

本稿は、明治時代以降に日本国内で発表されたエゾオオカミ・ニホンオオカミに関する文献とその記述内容を分析・考察の対象とする。

研究史の検討に際しては、オオカミに関わる文献を可能なかぎり偏りなく、かつ網羅的に確認するため、対象資料の収集をオンラインの検索サービスおよびデータベー

ス<sup>40</sup>を利用して行った。収集方法の概要としては、まず各サービスにおいてオオカミをあらわす主要な和名<sup>41</sup>を用いて検索を行い、書誌情報を抽出した。続けて、抽出した情報に基づき、図書館において文献の内容確認と収集を行った。さらに、入手した文献の内容を確認し、情報・意見の典拠として記載される資料についても必要に応じて確認・収集を行った。文献資料の抽出・収集は、2012（平成24）年から開始し、現在まで継続して行っている。研究史の検討に際して必要となるのは日本のオオカミに関する知見の提示や考察・議論を行った文献資料であり、これまでに970件の文献を収集した。本文中ですべての文献に言及することはできないが、収集した資料はすべて「日本国内で発行されたオオカミに関わる文献リスト」にまとめ、資料編に掲載した。

エゾオオカミと人との関わりについて分析を行うためには、既知の文献に加えて新たな対象資料を収集する必要がある。また、北海道におけるエゾオオカミをめぐる歴史・文化を検討していくためには、アイヌと和人の双方の記録を参照することが望ましいと考えた。

そこで、本稿では、和人側の情報を得るために、北海道内の自治体が刊行する「市町村史」を対象とした調査を行った。この調査は、自治体レベルでの和人とオオカミの関わりについて事例が収集できることを期待し、全道から均一に情報を抽出することを目標として取り組んだ。市町村史の収集には、札幌市中央図書館のホームページ上で公開・更新が続けられている札幌市作成のリスト「北海道内の市町村史」（2018年8月版<sup>42</sup>）を利用した。北海道における旧自治体区分である212市町村分369件分の調査を行い、結果として、118市町村分153冊でオオカミに関する記述を確認した。調査対象とした369件分の市町村史は、本文末の「北海道内『市町村史』一覧（五十音順）」に記載し、オオカミの記述の有無は資料編「付表① 調査対象『市町村史』一覧」に掲載した。なお、調査を通して確認できた、市町村市中のオオカミに関連する記述は、同じく資料編「市町村史におけるオオカミの記述」に概要をまとめた。

一方、アイヌ民族側の情報は、口承文芸の内容および研究者による調査・聞き取りの記録を対象として調査に取り組み、オオカミとの関わりに言及があるものを抽出・収集した。従来、アイヌ民族とオオカミの関係性の考察には、主として和人が書き残した記録が利用されてきた。しかし、その中には和人側の認識が反映され、差別的フィルターやバイアスが介在する可能性があることが知られている<sup>43</sup>。本稿では、そうした影響を可能なかぎり避けることを意識して対象資料を設定した。

アイヌ民族の口承文芸資料の収集にあたっては、1980年代までに刊行されたアイヌの口承文芸テキストをほぼ網羅するとされる『日本昔話通観 1: 北海道（アイヌ民族）』<sup>44</sup>を利用して、基礎となるテキストの確認と抽出を行った。また、併せて文献渉猟による補完的な収集を進め、結果として、オオカミが登場するテキストは68件収集できた。これらのテキストは資料編「付表② アイヌ口承文芸一覧」にまとめて記載した。

また、アイヌ民族に対する聞き取り調査記録として、更科源蔵による『コタン探訪帳』19冊および『コタン探訪帳日記』1冊（いずれも弟子屈町図書館所蔵）を対象資料とした。本稿ではとくに、アイヌ民族とオオカミの関わりの中なかでも「狩猟」に焦

点をあて、公に刊行されている更科の著作の内容と、『コタン探訪帳』中にみられた記述とを照らしたうえで、先行研究にみられる解釈が妥当であるか確認を試みた。『コタン探訪帳』中のオオカミに関する記述については、資料編「付表③『コタン探訪帳』中に確認できるオオカミに関する記述」に概要を一覧化して掲載した。

## 第4節 本論文の構成

### 1. これまでの取り組み

筆者は、大学院において「エゾオオカミをめぐる歴史と文化」をテーマとして研究に取り組んできた。

2011（平成23）年度に執筆した修士論文「エゾオオカミをめぐる歴史と文化：北海道アイヌのオオカミ観についての考察」では、アイヌ民族の口承文芸を調査対象としてオオカミ観に関わる要素を抽出し、情報整理と分析を行った。くわえて、従来知られてきた要素と口承文芸の内容との紐付けを行い、先行研究で議論の対象となる要素が、どのような状況であられるものなのかを明確化した。

2013（平成25）年度に執筆した研究論文Ⅰ「エゾオオカミをめぐる歴史と文化：日本国内のオオカミに関する情報の蓄積とその変遷」では、明治時代以来の日本国内で蓄積されてきたオオカミに関わる研究・情報の整理に取り組んだ。北海道における人とオオカミの関係性をめぐる研究を、従来の研究史の中に位置づけることを目的として過去の動向を確認し、北海道に地域を限定した議論に取り組む必要があることを提唱した。

修士論文・研究論文Ⅰの執筆を通して、エゾオオカミに関わる従来の議論では、北海道に渡った和人とエゾオオカミとの間にどのような関わりが存在したのかという点への言及がほとんどみられないことが明らかとなった。そこで、2015（平成27）年度に執筆した研究論文Ⅱ「エゾオオカミをめぐる歴史と文化：市町村史におけるオオカミの記録の整理と検討」では、絶滅したエゾオオカミに関わる情報を新たな媒体から収集して集約・分析し、そこから過去の実態を解明することを目指した。研究論文Ⅰで対象とした「日本のオオカミ」から、エゾオオカミと近代北海道の和人にあらためて対象を絞り込み、該当する事例を抽出して整理・検討を行った。北海道における和人とエゾオオカミの関わりのある事例を解明することは、最終的には本州以南における事例の比較対象を得ることにもつながると期待して取り組みを進めてきた。

博士論文である本稿の執筆にあたっては、上記の議論の成果を統合したうえで議論を行うことを目指すこととする。

### 2. 章立て

本稿では、第1章で日本におけるオオカミの研究史の検討を行った。年代ごとの主要な取り組みや動向を明確化し、オオカミをめぐる議論がどのように進展してきたか

を確認した。日本のオオカミをめぐる研究史には、2度の画期と呼べる時期が存在する。また、特定の言説が、エゾオオカミ・ニホンオオカミに対するイメージや意識を変化させてきた可能性について検討した。これまでの研究史を検討した結果として明らかにできた問題点および今後の展望についても言及する。なお、第2章以降の議論はすべて第1章の内容を前提として取り組むこととする。

第2章では、北海道内の全市町村史を対象とし、オオカミに関する記述の抽出・分析を行った。従来、エゾオオカミは、おもに明治時代に入ってから北海道に持ち込まれた家畜に対して甚大な被害を出した害獣だったと理解されてきたが、実際には、江戸時代から家畜ウマに対する食害が起きていた。また、家畜に対する被害だけでなく、開墾や道路建設などの状況で、人がオオカミに対して「恐怖感」や「脅威」を感じていたことを示す記録も存在した。実際の事例を踏まえたうえで、北海道における和人とエゾオオカミの関係性について、あらためて検討していく必要性を提言する。

第3章では、アイヌ民族のオオカミ観について検討した。近代以前の北海道におけるアイヌ民族とオオカミは、互いの存在を脅かすことなく平和に共存共栄していたと考えられてきた。しかし、そのように記述されるアイヌのオオカミ観が、実際にはどのような資料・媒体から得た情報を元として描き出されてきたのかは明確ではなかった。由来が不明確な情報を用いながら著述や議論が繰り返されてきたのであれば、過去の実態から乖離している可能性が危惧される。ここでは先行研究の概要を踏まえたうえで、アイヌ口承文芸にあらわれるオオカミの表現、聞き取り調査記録の内容を確認し、和人数研究者による情報のコントロールが行われていた可能性について言及した。

第4章では、研究史における論点と、各章における議論・検討の結果として得られた知見とを集約した考察に取り組む。従来、エゾオオカミは「日本の」オオカミであるニホンオオカミに関する議論を支え、傍証する存在としての価値を付与されてきた。ニホンオオカミと関わる論点のみが注目され、掘り下げられ、本州以南でも同様の事態が起きていたとする前提に立ってエゾオオカミを位置づけていた。しかし、実際には明治初期の北海道においてオオカミに向き合った「入植者」である人々の置かれていた状況は、本州以南とは大きく異なり、容易に比較検討すべきではなかったと考える。従来の日本の2種のオオカミをめぐる議論は、日本列島内すべてが均質であるべきとする視角からなされていたが、「日本人とオオカミ」という巨視的なとらえ方をしてきたからこそ、細部の特徴や地域ごとの特異性をそぎ落とし、混迷した状況を生み出す結果に繋がってきた。そうした取り組み方は改められるべきと考える。

終章では、これまでの議論を総括し、本稿における結論と今後の課題とすべき点を述べる。

## 第5節 凡例

本稿における用語，表記，資料の扱いについては，以下の凡例に従う。

### [1] オオカミの分類と名称について

本稿では，ニホンオオカミを *Canis lupus hodophilax*，エゾオオカミを *Canis lupus hattai* と位置づけ，どちらもオオカミ *Canis lupus* の地域的な亜種と仮定する理解<sup>45</sup>を基本とする。また，文献上の「オオカミ」・「狼」と「ヤマイヌ」・「豺（豺）」・「山犬」については，双方を同一種とみなす見解<sup>46</sup>に従った。

名称については，本文中では原則としてオオカミ，エゾオオカミ，ニホンオオカミ，とカタカナに統一した。また，日本国内では時代や地域によって「ヤマイヌ」や「オオイヌ」などの和名が用いられ，「狼」，「おほかみ」，「オウカミ」等の表記の違いや揺らぎもみられるが，これらは本文では事例紹介など必要な際のみ「」書きで記載した。なお，第2・第3章では北海道を対象地域とするため，とくに注記や指摘を行わない場合はエゾオオカミのみを指す。そのほかの章では，言及に際して亜種区分が必要な際にはニホンオオカミ，エゾオオカミと表記する。

### [2] アイヌ民族について

本稿で議論の対象とする「アイヌ」・「アイヌ民族」は，北海道島および千島列島のうち択捉島までを文化圏とする集団<sup>47</sup>を指す。

### [3] アイヌ民族の口承文芸について

本稿で扱う口承文芸は，広く「語り手が口頭で演じるのを聞いて，楽しみ味わうことで伝えられてきた文芸」<sup>48</sup>と定義される中でも，とくに「物語性を持った口承文芸」<sup>49</sup>のみを指す。ジャンル分類については「神謡」，「英雄叙事詩」，「散文説話」とする中川裕・志賀雪湖・奥田統己による「アイヌ文学」<sup>50</sup>の分類を参照した。

### [4] 引用・要約文の表記について

本文・資料編ともに，文献資料からの引用文の文字表記は原則として原文に従った。ただし，変換できない文字や旧字は通用文字に改めた。特殊用語，異体字・当て字はそのまま使用した。変換不可能な文字は一部画像で代用した。判読できない文字については□を用いて表した。なお，引用文中の傍線は，すべて筆者によるものである。

引用文中においては原文を忠実に表現することに努めたが，要約文として紹介・言及する際には，誤字であることが明確な場合は断ることなく補正を行った。文意が取れず，推測も困難な場合，あるいは疑義のある用語については，該当箇所には脚注番号を付し，脚注欄にて適宜言及した。

## 【5】 アイヌ語表記について

アイヌ語の表記は、原則としてテキスト上の表記に従った。本文中で言及する際には、関連するテキスト中で用いられる語句を「」（ローマ字表記のみの場合は“”）書きで引用として示した。

なお、対象とする資料により「ホロケウ・カムイ」や「ウォセ・カムイ」など名称・表記が異なるオオカミのカムイについて、野生動物としてのオオカミと区別するために、議論の中で示す際は「オオカミ神」という名称に統一した。

## 【6】 年号表記について

本文中の暦年はいずれも西暦表記を優先し、()内に和暦元号・年を付記した。

## 【7】 本文中の図表について

文中で用いる図表には、章ごとに連続番号を付し、典拠がある場合はその都度の併記を行った。

## 【8】 資料編について

本稿で使用した文献、および本文における議論とは直接関わらないものの背景・検討材料となるデータおよび文献資料については、すべて資料編にまとめ、本論文の巻末に添付した。

なお、資料編にまとめた各資料は、本稿中の以下の章節で参照・利用する。

1. 日本国内で発行されたオオカミに関わる文献リスト [第1章：全体]
2. 市町村史におけるオオカミの記述 [第2章：全体]
3. 付表① 調査対象「市町村史」一覧 [第2章：全体]
4. 付表② アイヌ口承文芸一覧 [第3章：第2節]
5. 付表③ 「コタン探訪帳」中に確認できるオオカミに関する記述 [第3章：第3節]

<sup>1</sup> 本州産のニホンオオカミを独立種 (*Canis hodophilax*) とするか独立亜種 (*Canis lupus hodophilax*) とするか、分類学上の位置づけをめぐることは、現状では亜種 (*C. l. hodophilax*) とみなす見解が主流ではあるが、結論には至っていないという[増田隆一 2018「序章：食肉類の中の哺乳類学」『日本の食肉類：生態系の頂点に立つ哺乳類』東京大学出版会, p.11]. 2012(平成24)年にはDNA系統解析の結果「ニホンオオカミが、大陸に生息するタイリクオオカミやアメリカ大陸のハイロオオカミとは離れた存在であり、孤立化した集団である」ことが示された[石黒直隆 2012「絶滅した日本のオオカミの遺伝的系統」『日本獣医師会雑誌』65(3), p.227]. 2014(平成26)年には歯帯の形態的相違の検証によりニホンオオカミを独立種 (*C. hodophilax*) に分類するのが妥当であるとする見解も示されている[中村一恵 2014「ニホンオオカミとアカオオカミの起源と種分化に関する考察」『神奈川県立博物館研究報告：自然科学』(43), p.29].

<sup>2</sup> 石田戠は『日本の動物観：人と動物の関係史』において、「人が動物をどのように考えているかを動物観とよぶとすれば、『動物観』は動物の存在を意識し始めるとともに成立する概念である」と述べている。本研究で用いる「オオカミ観」は、この「動物

- 観」の概念を踏まえた上で、人がオオカミという動物をどのようなものとしてとらえ、どのように関わろうとしたかという意識および態度・行動を含む、オオカミに対する考えかたを指すこととする[石田戠 2013 「序章 動物観の系譜」『日本の動物観：人と動物の関係史』東京大学出版会, p.3].
- 3 桑原康生 2014 『オオカミの謎：オオカミ復活で生態系は変わる！？』誠文堂新光社, pp.132-133.
- 4 イエヌの原種については複雑な議論が展開され、多くの仮説が提示されている。猪熊壽は先行研究を紹介しながら「オオカミかイエヌの祖先であるという説」、「オオカミのほかにもジャッカルやコヨーテの血が混じっているとするもの」、「ディンゴのような原始的なイエヌに似た野生のイエヌ(すでに絶滅したかもしれないが)から進化したとする説」、「イエヌの祖先は不明であるとする考え方」の4つに分類した[猪熊壽 2001 『アニマルサイエンス③イエヌの動物学』東京大学出版会, pp.15-16]. 現状では, *C. l. familiaris* としてオオカミの亜種とする分類が一般的だが、否定される場合もある[コッピンジャー, レイモンド 2016 『イエヌに「こころ」はあるのか』原書房].
- 5 前掲註 3, p.39.
- 6 スーザン・マグラス 2015 「海辺のオオカミ」『ナショナル ジオグラフィック日本版[2015年10月号]』21(10), pp.126-141. Da rimont, Chris T., Paul C. Paquet, and Thomas E. Reimchen.2008 "Spawning salmon disrupt trophic coupling between wolves and ungulate prey in coastal British Columbia" *BMC Ecology*8:14 <https://bmcecol.biomedcentral.com/articles/10.1186/1472-6785-8-14> (2019年5月30日最終確認).
- 7 Luigi Boitani 2003 "Wolf conservation and recovery" in L. David Mech and Luigi Boitani, eds. *Wolves: Behavior, ecology, and conservation*, University of Chicago Press. p.329.
- 8 Adrian Treves[竹田直人訳] 2011 「第16章 保護地域周辺の野生動物との軋轢における人間事象」『野生動物と社会—人間事象からの科学』文永堂出版, p.220.
- 9 Steven H Fritts, Robert O. Stephenson, Robert D. Hayes, and Luigi Boitani 2003 "Wolves and Humans" in L. David Mech and Luigi Boitani, eds. *Wolves: Behavior, ecology, and conservation*, University of Chicago Press, p.303. ここでは、オオカミによる人身事故の記録を整理する中で、"Most incidents were attributed to self-defense, defense of other wolves, rabies, or aggression toward people who were accompanied by dogs. [...] Among the thirteen biting incidents recorded in cases of unprovoked aggression, eleven involved wolves that were habituated to humans". 「(オオカミが人を攻撃した)ほとんどの事例は、自己防衛のため、他個体を防衛するため、狂犬病のため、あるいはイエヌを連れてきた人に対する攻撃によるものだった。(中略)理由が不明確な13件の咬傷事例のうち、11件は人慣れたオオカミが関与していた」[筆者訳]と言及がある.
- 10 エリック・ツイーメン 1995 『オオカミ：その行動・生態・神話』白水社, p.135.
- 11 エゾオオカミの絶滅年について、従来は犬飼哲夫による「明治廿九年に箱館の毛皮商松下氏が狼皮を若干輸出したことが記録に残る」[犬飼哲夫 1933b 「北海道産狼とその滅亡経路」『植物及動物』1(8), p.13]という言及から1896(明治29)年とされてきたが、この記述の典拠を検討した山田伸一は「1896年から1903年までの間に同店が北海道産オオカミの皮を加工・販売したことになる(輸出とは言い切れない)」とコメントしている[山田伸一 2002 「オオカミ・ヒグマ・カラス：明治期北海道における『有害害獣獲殺手当』をめぐって」『北海道開拓記念館調査報告』(41), p.86].
- 12 平岩米吉 1981 『狼—その生態と歴史』池田書店, pp.247-249.
- 13 中沢智恵子 2008 「明治時代東北地方におけるニホンオオカミの駆除」『フォレスト・コール』(13), pp.18-21.
- 14 八田三郎 1913 「北海道の狼：口絵及図版」『動物学雑誌』(291), n.pag. 犬飼哲夫 1933a 「絶滅した北海道の狼」『日本犬』2(1), p.1. など.
- 15 山田伸一 2011 『近代北海道とアイヌ民族：狩猟規制と土地問題』北海道大学出版会, pp.115-160.
- 16 遅くとも1910(明治43)年には、八田三郎や村田庄次郎による言及がある[八田三郎 1910 「動物の分布上北海道の位置」『動物学雑誌』(256), pp.43-47, 日本動物学会. 村田庄次郎 1910 『札幌博物館案内』維新堂].
- 17 磯崎博司・羽山伸一 2005 「欧州における生態系の保全と再生」『環境と公害』34(4), pp.17-18.
- 18 羽山伸一 2006 「再導入という自然再生事業」『地域再生の環境学』東京大学出版会, p.98.
- 19 丸山直樹 2014 「第4章 オオカミ復活の必要性」『オオカミが日本を救う!：生態系での役割と復活の必要性』白水社, p.57.
- 20 北海道へのオオカミの再導入を検討する立場から「困難」と表明するのは、米田政明 2006 「知床に再導入したオオカミを管理できるか」『知床博物館研究報告』(27), p.7. など. また、本州以南にニホンオオカミが生残する可能性を検討すべきとする立場から疑義を呈するのは、宗像充 2017 『ニホンオオカミは消えたか?』旬報社, p.188.
- 21 衆議院 2014年「第186回国会・環境委員会：第8号(平成26年4月18日(金曜日))」[http://www.shugiin.go.jp/internet/itdb\\_kaigiroku.nsf/html/kaigiroku/001718620140418008.htm](http://www.shugiin.go.jp/internet/itdb_kaigiroku.nsf/html/kaigiroku/001718620140418008.htm) (2019年5月30日確認).

- 22 米田政明 2006 「知床に再導入したオオカミを管理できるか」『知床博物館研究報告』(27), pp.1-8]や, 亀山明子・仲村昇・宇野 裕之ほか 2005「オオカミ(*Canis lupus*)の保護管理及び再導入事例について」『知床博物館研究報告』(26), pp.7-46]など
- 23 このシンポジウムの内容は、『世界自然遺産 知床とイエローストーン:野生をめぐる二つの国立公園の物語』[デール・R・マッカーロー, 梶光一, 山中正美編 2006 知床財団]としてまとめられ, 刊行されている。
- 24 北海道新聞 2005 「シカ増加抑制策:米の研究を報告 知床との比較シンポ」『北海道新聞』(2005年8月5日朝刊34面)や, 小林裕幸 2005 「守れ世界遺産:海外では<1>:オオカミは救世主」『朝日新聞』(2005年11月5日夕刊1面)など。
- 25 米田政明 2006 「知床に再導入したオオカミを管理できるか」『知床博物館研究報告』(27), 知床博物館, p.1.
- 26 梶光一 2007 「知床世界自然遺産地域のエゾシカ保護管理計画:管理すべきか, 遷移に委ねるべきか」『生物の科学:遺伝』61(5), pp.18-21.
- 27 ダグラス・スミスほか 2006 「7. イエローストーン国立公園へのオオカミ再導入」『世界自然遺産 知床とイエローストーン:野生をめぐる二つの国立公園の物語』, 知床財団, pp.73-86.
- 28 バリー・ホルスタン・ロペス 1984 『オオカミと人間』 草思社, p.22.
- 29 山中正実・梶光一 2006 「イエローストーンからの提言を受けて」『世界自然遺産 知床とイエローストーン:野生をめぐる二つの国立公園の物語』 知床財団, pp.175-182.
- 30 丸山直樹 1998 「ニホンオオカミについて」『別冊太陽』(103), pp.150-156.
- 31 平岩米吉 1981 『狼:その生態と歴史』 築地書館.
- 32 村上一馬 2013 「人馬を喰う狼, 狼を獲る人びと」『東北歴史博物館研究紀要』(14), pp.28-29.
- 33 「日本における“オオカミ問題”は, 社会的にも学術的にも百家争鳴状態といわざるをえず, オオカミへの関心が深まれば深まるほど, その混迷状態は際立っていくほかなさうなのである」[中村生雄 2010 『日本人の宗教と動物観:殺生と肉食』 吉川弘文館, pp.103-104].
- 34 中村生雄 2010 『日本人の宗教と動物観:殺生と肉食』 吉川弘文館, pp.101-141.
- 35 吉川國男 2004 「ニホンオオカミ研究の現状と今後」『狼:伝承と科学』 野外調査研究所, pp.49-58.
- 36 梅木佳代 2016 「エゾオオカミ研究史の検討」『北海道大学大学院文学研究科研究論集』(15), 北海道大学文学研究科, p.40.
- 37 過去のエゾオオカミの絶滅は, 現代の北海道において不完全な生態系を生じさせている。また, その結果として, 将来にわたってどのような影響が生じるか不明確という事態を招き, 多くの不利益を生み出し続けている。適切な対応および解決方法が必要とされる問題であり, 「自然から財を取り出して利益を得る人たちと, その結果として資源枯渇や災害などのしっぺ返しを受ける人たちは必ずしも同一ではなく, むしろ受益者と負担者が乖離することが大きな問題である。この受益者と負担者の乖離は, 小さな地域環境の問題から, 地球スケールの環境問題まで, いつでもどこにでも存在し, その具体的な対処方法の確立こそが問題を解決に向かわせる大きな鍵となる」[湯本貴和 2011 「新たな技法が描く環境史」湯本貴和編『環境史をとらえる技法』 文一総合出版, p.7]とする指摘に合致する状況と考える。野生動物の絶滅への「具体的な対処方法」を導き出すための事例としての位置づけを得るためにも, 絶滅後の経過・展開を把握することは重要である。
- 38 中澤克明 2009 「シンポジウム『動物と中世社会』の成果と今後の課題」『考古学と中世研究 6 動物と中世一獲る・使う・食らう』 高志書院, p.277.
- 39 瀬戸口昭久 2013 「第7章 『野生』をめぐる動物観」『日本の動物観:人と動物の関係史』 東京大学出版会, pp.154-156.
- 40 主として利用したのは, 「国立国会図書館検索・申込サービス(国立国会図書館オンライン)」 <https://ndlonline.ndl.go.jp/#/> (2019年5月30日最終確認), 「CiNii Articles 一日本の論文をさがす」 <http://ci.nii.ac.jp/> (2019年5月30日最終確認), 「Webcat Plus」 <http://webcatplus.nii.ac.jp/> (2019年5月30日最終確認)。
- 41 検索ワードとするオオカミの主要な和名の抽出にあたって, 菱川晶子「オオカミ:名称についての一考察」[2003, 『伝承文化研究』(2), pp.18-42]および中村一恵「江戸中期・諸国産物帳に記載されたイヌ属動物の名称」[2005, 『神奈川県立博物館研究報告:自然科学』(34), pp.69-73]を参照した。
- 42 札幌市中央図書館 2018 「北海道内の市町村史」 <https://www.city.sapporo.jp/toshokan/sapporosiryo/sap-top.html> (2019年5月30日最終確認)。
- 43 本田優子 2009 「アイヌ口承文芸にみられる『史実』と交易」『北海道立アイヌ民俗文化研究センター研究紀要』(15), p.39.
- 44 稲田浩二・小澤俊夫 1989 『日本昔話通観 第1巻北海道(アイヌ民族)』 同朋社出版。
- 45 増田隆一 2018 「序章:食肉類の中の哺乳類学」『日本の食肉類:生態系の頂点に立つ哺乳類』 東京大学出版会, pp.1-20.

- 
- 46 『本草和名』は豺皮の条で「一名野狂，和名於保加美」とし、『倭名類聚抄』も「狼一名豺」として，狼と豺を同じ動物としているが，中世以降の『本朝食鑑』、『大和本草』、『和漢三才図会』、『本草綱目啓蒙』等はいずれも狼と豺を別物とし，その相違点を狼には蹠があって水を渡る事が出来るが，豺には蹠がない事をあげている．しかし蹠に相当する指の間の皮膜は家犬にもあるので，その有無によって狼と豺を識別する事は出来ず，現在は狼と豺とは同一種と見なされている」[梶島孝雄 2002 『資料 日本動物史』 八坂書房，p.526].
- 47 佐々木利和 2001 『アイヌ文化誌ノート』 吉川弘文館，p.13.
- 48 北海道立アイヌ民族文化研究センター他編 2009 『アイヌ文化紹介小冊子 6: ポン カンピソシ』北海道立アイヌ民族文化研究センター，p.6.
- 49 中川裕 2001 「アイヌ口承文芸テキスト集 2: 白沢ナベロ述 主人を助けられなかった犬」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』(4)，p.77.
- 50 中川裕・志賀雪湖・奥田統己 1997 「アイヌ文学」『岩波講座: 日本文学史 第17巻 口承文学 2・アイヌ文学』岩波書店，pp.183-263.

## 第1章 日本におけるオオカミの研究史

本章は、科学的な学問が志されるようになった明治時代以降の日本国内において、オオカミをめぐる言説や研究がどのように展開してきたのか、年代ごとに把握することを目的とする。

かつて日本に生息したエゾオオカミ・ニホンオオカミは、両種ともすでに絶滅したとされ、その実態に関する情報は絶対的に不足している。絶滅年からすでに100年以上の時間が経過した現在では、野生動物としての日本のオオカミそのものに関する情報不足が研究上のもっとも大きな障害といえる。しかし、その一方で、日本のオオカミに関する研究では、研究者から指摘を受けるほど混沌とした事態が生じてもいる。

本稿では、このような状況は、根本的な情報不足が意識されながらも、過去からどのような段階を踏んで情報が蓄積・検討されてきたのか、その経緯が把握されたことがないために生じていると考える。たとえば、日本列島内のオオカミは、近代科学が導入され、科学的な学問が志されるようになった明治時代を30年ほど経たずして絶滅した。しかし、生残の可能性があった明治年間にオオカミがどのような学問領域、あるいは社会的な興味関心の対象とされていたのか、明言することは難しい。どの時点からオオカミという動物が日本国内で専門的な議論や研究の対象とされてきたのか、また、どのような情報が発信・蓄積されてきたのかという観点をもって、従来の流れを整理する取り組みが必要であると考えられる。

明治時代以来、日本のオオカミに関わる議論・言説は多数蓄積されてきた。しかし、長期にわたる研究史を有しながらも、その情報整理がこれまで行われていないのは、非常に大きな問題といえることができる。今後も研究が進められていくにあたって、現在までに蓄積されてきた情報を整理することは、大きな意義を持つと考えられる。広く知られる知見のみから議論が進められる事態や、過去の議論・経緯を踏まえたうえで将来に向けた課題を設定したり、問題意識を共有したりすることができない状況は、早急に解決が目指されるべきである。

したがって、本章では、オオカミに関わる文献を可能なかぎり偏りなく、かつ網羅的に確認したうえで研究史の整理と検討を試みる。以下の節では、年代ごとに主要な動向を明確化し、オオカミをめぐる議論がどのように展開してきたか確認していく。

### 第1節 資料および時期区分

本稿では、日本のオオカミをめぐる全体的な研究動向を把握するために、オンライン上の検索サービス、データベースの利用を中心とした資料の収集を試みた。現在までに、日本国内で発行された970件のオオカミに関わる記事・文献を分析対象として収集している。

これらの資料について内容を確認すると、日本のオオカミをめぐる研究には、2度の

画期と呼べる時期が存在し、エゾオオカミ・ニホンオオカミに対するイメージや意識を変化させてきたと考えられる。本稿では、1868（明治元）年以来、日本のオオカミをめぐる議論がどのような展開をみせ、後の時代に影響を与えていったのかを概観するが、調査・分析の結果を踏まえて以下3つの時期に区分して情報を整理していくこととする。

- (1) 1930年代以前（1868～1940年）：日本国内におけるオオカミの位置づけが定まり、専門の研究者による研究活動が始まるまで
- (2) 1940年代から1980年代（1941～1990年）：国内の絶滅が確実視されたうえでの議論が展開する
- (3) 1990年代以降（1991～現在まで）：オオカミの「再導入」に関わる議論が開始される

このうち(1)と(3)が研究史上の画期に該当すると考える。(2)については、日本のオオカミに関する情報が一般社会に広く普及・定着する一方で、それに伴う一般化・単一化が進んだ期間といえる。次節以降では、この時期区分を利用して議論を進めるが、より具体的な動向を確認するために、さらに10年ごとに期間を区切って展開する。

## 1. 資料の収集方法

本章の執筆にあたって、明治時代から現在までの間に日本国内で発行されたオオカミに関わる資料を網羅的に調査し収集することを試みた。現在から遡って追及する以上、過去のすべての資料を把握することは困難であると考えられたが、すくなくとも全体的な資料の量と、そこから従来の動向・展開を概観することが可能かどうかを確認する必要があると考えて作業に取り組んだ。以下では、調査の方法および結果として収集できた資料の概要を紹介する。

### 1-1. オンライン検索サービス・データベースの利用

本章において対象とする文献資料は、既存のオンライン検索サービス・データベースを用いて収集した。書誌情報および所在確認に利用したのは、「国立国会図書館検索・申込サービス（国立国会図書館オンライン）」、「CiNii Articles ー日本の論文をさがす」、図書・雑誌総合目録「Webcat Plus」である<sup>1</sup>。

### 1-2. 検索に利用した名称

上記のサービスを利用して、ニホンオオカミ・エゾオオカミの双方を含むことができる「オオカミ」および漢字表記での「狼」をキーワードとして検索した。くわえて、

日本におけるオオカミの異称として知られる「ヤマイヌ」・「山犬」・「豺」, 「オイヌ」・「御犬」, 「大口真(眞)神」を用いた検索, ならびに歴史的仮名遣い「おほかみ」・「オホカミ」・「於保加美」による補完的な検索も行った。検索ワードとするオオカミの主要な和名の選定に際して, 菱川晶子による「オオカミ: 名称についての一考察」<sup>2</sup>および中村一恵「江戸中期・諸国産物帳に記載されたイヌ属動物の名称」<sup>3</sup>を参照した。

これらのサービスを利用した資料の主要な調査は, 2012(平成24)年6月に開始し, 2013(平成25)年10月に完了した。これ以降は, 必要に応じて検索を行い, 新たに刊行される資料のチェックを継続して行っている。

### 1-3. 補完的な文献渉猟

検索サービスの利用によって抽出した資料の内容を確認後, さらに各資料の文中および参考文献等のリストに記載がある資料についての確認を進めた<sup>4</sup>。書誌情報に基づき, 国立国会図書館, 札幌市中央図書館, 奈良県立図書情報館, 北海道立図書館, 北海道大学附属図書館, 和歌山県立図書館において実際に文献の内容確認と収集を行った。ただし, 入手が困難な一部の資料については, 「国立国会図書館デジタルコレクション」<sup>5</sup>, 海外に所蔵がある文献については電子図書館 Biodiversity Heritage Library<sup>6</sup>を利用して閲覧した。

## 2. 文献リストの作成について

文献調査の結果として得られた資料は, すべて文献リストに登録して管理・利用した(資料編: 「日本国内で発行されたオオカミに関わる文献リスト」)。リストへ登録するにあたって, 日本のオオカミに関する考察や個人の思考を読み取ることができる内容を持つ文献を1件としてカウントした。とくにコメント等がなく, 伝承や事例の紹介のみを目的とした文献は除外した。共著の書籍や報告書については, 執筆を担当した章が明確に確認・区別できる場合のみ, 著者ごとに担当した章をそれぞれ1件として扱った。以上の調査・作業結果として, 現在までに文献リストに登録できた資料の合計は970件である。

## 第2節 1868(明治元)年—1930年代

本節から第4節までは, 1868(明治元)年から2019(令和元)年現在までの日本のオオカミをめぐる研究動向の全体について整理を試みる。主観による分析対象の偏りを防ぐため, 動向確認の対象期間を10年ごとに区切り, 各年代における研究内容・動向を検討した。ただし, 本節では, 確認できる資料の数が限られた明治年間は, 前期[1868(明治元)年~1890年]と後期[1891年~1912年]に区分する。ともなうて, 1910年代は1913(大正元)年~1919(大正8)年を対象期間とする。

## 1. 明治時代前期（1867～1890年）：近代動物学におけるオオカミの定義

明治時代における日本のオオカミに関する著述は、1874（明治7）年の翻訳書『動物学』<sup>7</sup>および1875（明治8）年の『動物訓蒙』<sup>8</sup>が最初期の事例といえる。日本の近代動物学において、日本のオオカミは「東欧羅巴産」の「狼（オホカミ） Wolf」とは区別され、日本産の「豺（ヤマイヌ）」として登場した。「ヤマイヌ」の学名として“*C. hodophilax*, Sieb.”が、「オオカミ」を指す学名として“*C. lupus*, Linn.”が使用された<sup>9</sup>。ただし、これは学問上の位置づけてあり、これまでの先行研究でも指摘されてきたように、実態としては、近世以前から用いられてきた「狼」の名称でもニホンオオカミを指すことができている。

田中芳男による『動物訓蒙』には、当時の一般的な「ヤマイヌ」に対する生態的な理解をうかがわせる次の4点の記載がある。①小型の獣を獲物とする肉食獣であること、②イヌとは大きさにより区別されること、③強暴だが通常は人里に近付かない動物であること、④冬および春の積雪によって飢餓状態に陥ると里に出没して人や馬を襲うことがあること。オオカミは冬から春にかけて被害をもたらす存在として認識されていた。くわえて、オオカミが村里に近い山林で出産した場合には、村民が「食餌」を与えることがあるとする言及もみられる。これは主として関東以北に広く分布する「産見舞い」<sup>10</sup>の民俗であると推測される。田中芳男は日本への近代動物学の導入に際して活躍し、多くの業績を残した人物であるが、当時の人々の行為とオオカミを「敬ス」理由を「人ヲ害セザラシムル」ことを主意とすると解釈したことには注意したい。

1887（明治20）年の『廢物利用：經濟秘宝 すたれ物用ゐ方』には、海外の事例を参考とした「犬と狼の利用法」が紹介されており、「狼の皮」および「牙」が「いろいろに利用すべき」ものとして紹介されている。イヌでは「肉」の利用に言及があるのに対し、オオカミではそれがなく、利用法の違いがうかがえる。また、当時はオオカミを利用しようとする意識があったことを示唆する事例といえる。

明治時代前期の「狼」の存在感は薄いですが、学教教育の場ではよく題材として取りあげられている。1883（明治16）年に発行された『小学中等作文稽古本』<sup>11</sup>では、文題の中に「豺狼」の項がある。

豺ト狼トハ共ニ山中ニ棲ム性猛ニシテ甚タ暴戾ナリ（中略）共ニ他獣ヲ生食シ又人ヲ害ス故ニ悪悍ナル人ヲ称シテ豺狼ト云フ

当時の人々にとって「豺狼」はいずれも比喩として使われるほど卑近な存在ではあったが、良いイメージと結びつく動物ではなかったと考えられる。

## 2. 明治時代後期（1891～1912年）：日本のオオカミを表わす名称の変化

明治時代後期は、日本に生息した2種類のオオカミの絶滅年を含み、日本のオオカミをめぐる研究史を検討する上では重要な期間といえる。しかし、生息状況の変動など明確に言及する事例は確認できていない。

この年代には、民俗学の領域で、オオカミに言及する記事が複数みられる。とくに南方熊楠の論考には、紀伊半島を中心とした地域の民俗にあらわれるオオカミに関する比較的まとまった情報が確認できる。南方は自身の著述以外にも、出口米吉<sup>12</sup>や山口笑<sup>13</sup>、さらに時代を降ると柳田国男<sup>14</sup>や平岩米吉<sup>15</sup>ともオオカミについての議論・討論を交わしており、オオカミの民俗を学術的に理解し位置づけようとする流れの端緒と考えることができる。

また、日本のオオカミを指す和名の変化が確認できる。1891（明治24）年の『動物圖解説』<sup>16</sup>や1904（明治37）年の『哺乳動物正図：説明』<sup>17</sup>では、ニホンオオカミに対して「狼」という名称が用いられているのに対し、1911（明治44）年の『動物写真画帖』には次の文が記載されている。

狼は犬の所属であります、犬よりも大きくて、長さ五尺以上、高さ三尺以上あります。常に深山に棲んで兎や鹿を襲ひ、冬になると雪の中から、隊を組んで人里に出て羊や犢を掠め、時に旅人や狩人を咬み殺す事もあります。日本にもおほかみと云ふものがゐりますが、それは本當の狼ではなく、狼の一種豺であります<sup>18</sup>

明治時代中期までは、「豺」と「狼」のどちらを用いてもニホンオオカミを指すことができていた。しかし、明治時代末から大正時代にかけて、「豺」のみが「日本産のオオカミ」を指すことができ、「狼」は海外産のオオカミのみを指す表記であるとして使い分けられるようになっていく。これらの名称の使い分けにより、エゾオオカミは海外産の「狼」に含まれ、本州以南のニホンオオカミを「豺」に限定する形での呼び分けが際立つようになる。遅くとも1910（明治43）年には、エゾオオカミを指して「本州に棲む『やまいぬ』（豺）とは別種にして大陸の『おほかみ』に等し」<sup>19</sup>とする記述が確認できる。なお、日本列島内に生息するオオカミを「狼」と「豺」の和名をもって呼び分ける必要が何故生じたのか、その経緯について明確に検討した事例はこれまでに見いだせていない<sup>20</sup>が、その背景には、当時の海外における分類学上の議論や、ブラキストン線の発見などが影響していた可能性もあると考える<sup>21</sup>。

### 3. 1910年代（1913～1920年）：エゾオオカミの絶滅に対する認識

大正時代に入ると、「豺」の表記が「山犬」に改められる。これは、後年の阿部余四男による説明をみると、「豺（豺）」が「志那製の漢字」<sup>22</sup>だったことが問題であったという。当時の国語国字問題が影響しての変化だったと考えられる。この時期以降、「豺（豺）」の文字は、以降は辞書・辞典等の記載を除き、一般的には使われなくなっていく。

1913（大正2）年に発行された「北海道の狼」<sup>23</sup>の中で、当時の北海道帝国大学に籍を置く動物学者であった八田三郎は「狼の害は中々大きかつたので、懸賞法など用ひて、其撲滅にひたすら従事した甲斐あつて」北海道にはすでに剥製以外のオオカミが残っていないとする旨を記述した。これは、動物学者による「絶滅宣言」に等しい一

文だったと考えられる。この「狼」の「撲滅」報告が、本州以南のニホンオオカミの状況に対する注意を喚起した可能性もある。

1918（大正7）年には「山犬」について次のような言及がなされた。

諸君は狼に就いて色々恐ろしい話を聞いたことがあるでせう。然し我が国で本當の狼の居る所は樺太と北海道だけで、其の外の所ではまだ見つかったことがありません。それならばよく話に出る狼は何を指してゐるのだらうかといふと、夜分山犬を指したのだらうと思はれます。（中略）本州にも極めて珍しい獣となつてしまひました。少くなつた原因は銃獵の盛になつたことにあるのでせうが、其外に山犬仲間に伝染病が流行したことや、昔は山に捨てていた牛馬の死骸を今日では色々の方面に利用するので、彼等の食物が足りなくなつたことにもよるだらうといはれています<sup>24</sup>

ここでは、「山犬」が「極めて珍しい獣」となっている、つまりは減少していることが認識されている。また、その原因について、「銃獵」、「伝染病」、「食物」の不足と考えられていたことがわかる。食物について、シカやイノシシの減少ではなく、「牛馬の死骸」の減少と関連づけられている点が興味深い。

なお、ここで「諸君は狼に就いて色々恐ろしい話を聞いたことがあるでせう」と言及されている中には、明治時代に使用された教科書『小学読本』第2巻<sup>25</sup>に採用された訓話「むかし、一人の男児ありて」から始まる、いわゆる「狼少年」の話を含むと考える。原典であるイソップ童話では、オオカミは「ヒツジの群れ」を食べ尽くすが、日本では「嘘をついた少年」が食い殺される結末になるパターンが広く知られている<sup>26</sup>。ニホンオオカミが実在していた明治時代初期から昭和時代<sup>27</sup>まで、子どもを襲うオオカミの姿は教材として活用され続け、広く認識されていたと考えられる。

#### 4. 1920年代（1921～1930年）：「ヤマイヌ」の絶滅について

1920年代になると、本州以南の「山犬」は「殆ど絶滅」したと記載されるようになる<sup>28</sup> <sup>29</sup>。また、1926（昭和元）年には、奈良県鷲家口で捕殺された個体が「最後の個体」であった可能性が高いとする記述が確認でき、情報が普及しはじめていたことがわかる<sup>30</sup>。1924（大正13）年の「日本石器時代の犬科動物私見」<sup>31</sup>には「何しろ当今はヤマイヌは一向獲られないことで困つて居つた」という表現がみられ、生体を捕獲しようとする動きがあったようである<sup>32</sup>。

1919（大正8）年の「史蹟名勝天然記念物保存法」の制定と関わり、日本国内に生息する稀少な動植物の調査が行われる中で、この時期に日本のオオカミの生残状況を把握しようとする公の動きがあったことを指摘する文献もある<sup>33</sup>。日本のオオカミは結果として記念物指定は受けていないが、指定に向けた動きはあったことがうかがえる。

## 5. 1930年代（1931～1940年）：専門家による研究活動の開始

1930年代は、日本のオオカミをめぐる研究史において、大きな画期を形成すると考える。特徴的なのは、エゾオオカミ・ニホンオオカミの両亜種について、日本国内における分類学上の位置づけが定まったこと、専門家による研究活動が開始されたことの2点である。

日本国内におけるオオカミの位置づけについて、まず北海道・サハリンのオオカミが、1931（昭和6）年に発表された“Notes on Yesso Wolf”<sup>34</sup>をもって、オオカミ *Canis lupus* のうちの絶滅亜種エゾオオカミ *C. l. hattai* として位置づけられた。この分類は、現在に至るまで変動していない。一方、本州以南のオオカミでは、それまで用いられてきた和名「山犬」が「日本狼」へと大きく転換した。1930年代以前にも「日本狼」の名称を用いた例は複数存在しているが、個人的な使用表明の域を出ず、明治時代から用いられてきた「豺」・「山犬」との置換は起こらなかった。しかし、1930年代以降、オオカミをはじめとするイヌ科動物を専門として活動する平岩米吉が、「日本狼」の和名を用いて多くの論考を発表するようになる。この時期から「日本狼」の名前が周知されるようになり、一方で「通称」としての位置づけを付与された「ヤマイヌ」が、やがては顧みられなくなっていく。平岩は「日本狼」の提唱者ではないが、和名転換の流れを導いた人物ということができる。

専門家による研究活動として、阿部余四男、犬飼哲夫、岸田久吉、斉藤弘（弘吉）、平岩米吉など、オオカミを研究対象のひとつと位置づける研究者の論考発表が目立つ。しかし、なかでも平岩米吉が日本国内のオオカミについて情報収集・発信を始めたことは、全体の動向にも大きく影響した。1930年代から1980年代までの日本のオオカミをめぐる研究・取り組みにおいて、平岩米吉は、非常に強い影響力を持っていた。現在では、平岩の業績として広く知られるのは書籍としてまとめられたものが主体だが、1963（昭和38）年発行の『犬と狼』および1981（昭和56）年の『狼—その生態と歴史』は、日本のオオカミに関する議論では必ず言及され、必読文献となっている。さらにさかのぼって平岩自身が主宰を務めた『動物文学』<sup>35</sup>や、同様にオオカミに関わる議論が展開される場となっていた雑誌『日本犬』<sup>36</sup>等の誌上における活動を含めて俯瞰すると、研究の幅・量ともに、その業績を越えられる人物は存在しない。

平岩米吉の活動は、初期の著作である1934（昭和9）年の「狼」で述べているように「古来、狼は人を食ふものと極められてゐるが、この思想には根本的な誤謬が存在する」<sup>37</sup>ことを広く周知・定着させることを目指していた。およそ半世紀にわたる研究活動の中でも、一貫して、オオカミに関わる「最も大きいと思われる誤解」<sup>38</sup>として、人を襲う猛獣であるとみなす伝承・人々の意識をあげつづけた。この点について、野生動物としてのオオカミに対する当時の一般的な認識は、「害獣」観を基本とするものだったと考えると、平岩は対照的な主張をしたことになる。ただ、ここには、当時まだ生残する可能性があったニホンオオカミを保護する意図もあったと考えたい<sup>39</sup>。大正・昭和年間に入っても、オオカミと思われる動物を捕殺したとする報告は断続的に確認できる。とくに警察による「狼狩」<sup>40</sup>は、地域の治安維持も目的に含んでいたと考えら

れ、危険な猛獣であるオオカミは、すみやかに駆除すべき存在と見なされていたことがうかがえる。そうした状況を改めるには、一般的な認識から変えていく必要があったと理解できる<sup>41</sup>

ただし、平岩の著作については、美化・正当化されていて客観的資料とは言いがたいとする評価も確認できる<sup>42</sup>。たしかに、ニホンオオカミに関する平岩の主張は主観が強く、異なる立場からの検証が困難な情報・議論も多い。とくに、情報収集を進める中で多くの狼害の記録に触れ、それらを提示しながらも、日本人はオオカミに神格を付与し、古来より特殊な状況が生じなければ友好的な交渉を保ってきたとする主張を通し続けるなど、都合のいい方向に導こうとする傾向もみられる。

群棲するも、多くは人を害せず、むしろ猪、鹿等の害を防ぐ良獣として尊ばれ、一種の神格が与附されている。蓋し、「狼」は「大神」の意に外ならぬのである。近世に於ける甚しき狼害の記録は享保年間(自一七一六年至一七三六年)の南海、畿内、東海に於けるもの、安永年間(自一七七二年至一七八六年)の肥後、豊後、日向に於けるもの、天明年間(自一七八四年至一七八六年)の奥州に於けるもの等があるが、いづれも狂犬病に罹つた狼の横行で、狼の歯には毒があると云ふ思想の如きも勿論これに胚胎している<sup>43</sup>

柳田国男もまた、平岩と同時期に日本人とオオカミの関係性について議論を展開した。柳田は、日本では「狼を志那風に兇猛無比の害敵と視たのは、さう古くからの事では無かつた」<sup>44</sup>と言及し、日本人がオオカミを害獣したのは中国からの影響であったと論じている<sup>45</sup>。日本人がニホンオオカミを「害獣」と見なし、絶滅させた背景には、国外からもたらされたオオカミ観が介在したとする言説は1930年代になってあらわれる。これは、ニホンオオカミに関する「誤解」を解くことを目指していた平岩の著述傾向と合わせて、以降の動向に大きく影響を与えたと考えられる。

ただ、こうした傾向があらわれはじめた背景として、戦時下であった当時の動物観のありかた<sup>46</sup>や議論、さらには皇室と関わったオオカミの影響なども考慮する必要があるだろう。1934(昭和9)年、当時の満州国皇帝から秩父宮家に雌のマンシュウオオカミが贈られた。現在では言及される機会はほとんどないが、「御庭の狼:皇室と御日常」<sup>47</sup>には、「兇悪」なはずのオオカミが大人しく従い、「尊い御徳の一端」を描き出す存在として描写されている。「ヤマイヌ」から「“ニホン”オオカミ」へと名称を改めたことも含め、戦時下における「オオカミ」の位置づけは、時代背景を踏まえた慎重な検討が必要といえる。

### 第3節 1940年代-1980年代

1940年代以降、「日本のオオカミ」は人を襲う猛獣などではなく、過去には日本人と好ましい関係性を築いていたとする位置づけを強めていく。同時に「憎むべき」害獣

としての位置づけは徐々に曖昧・不明確になっていく。

また、とくに戦後になると、ニホンオオカミが絶滅したことを前提として、過去の歴史や実態の解明に取り組むか、まだ生残していることを前提として痕跡調査に基づく議論に取り組むか、情報発信の際の姿勢が大きく二分される。オオカミの絶滅をめぐって対立しあう見解は、それぞれメディアや大衆紙にも取りあげられ、一般にも広く知られるようになる。オオカミに関する情報が普及し、興味関心を抱く人々が増える一方で、メディアを通して繰り返し発信される中で情報の単純化・単一化が進んだ時期でもあった。

### 1. 1940年代(1941~1950年): ニホンオオカミに付与される特異性

1940年代前半は、従前の議論を受けて、過去の日本人とニホンオオカミとの関係性が世界でも特異なもの、かつ平和で好ましいものであったと位置づけようとする傾向が続いていた<sup>48</sup>。平岩や柳田が主導した言説に対し、「日本人の本当の狼観は、記紀時代のそれが正統であらう」<sup>49</sup>といった追従する意見が確認できることから、オオカミに関心を持つ人々に広く受容されていたと考えられる。ただ、その一方で「信仰や恐怖の大きな対象となつた霊獣、或は害獣としての日本狼の全貌を、伝承の中に求め、且、明らかにせんとする企図は、狼にはなむけるうつろなる哀歌や、徒らなる懐古主義ではなく、文化史上の意義、誠に深いものがあるわけである」<sup>50</sup>とし、都合のいい解釈や情報の改変に対する注意喚起と思われる指摘も確認できる。

この年代、大戦中から終戦期にかけての文献数は当然ながら限られる。しかし、戦後になると、1948(昭和23)年に東京大学で、1949(昭和24)年には和歌山大学で、それぞれニホンオオカミの剥製標本が相次いで発見された。1950(昭和25)年、末松四郎は新たに発見された和歌山大学産の剥製を用いて「新『やまいぬ』標本」<sup>51</sup>と題した報告を行った。ここでは剥製の状態を紹介するとともに、オオカミをあらゆる和名が羅列され、その中に「齋藤氏は和名 ニツポンオオカミ 学名 *Canis lupus japonicus* とするのが正しいとされている」とする記述がみられる。さらに「この方の権威齋藤弘吉氏(日本動物愛護協会理事)によると昔から称えられていた名称(和名)は、オオグチノマガミ(大口眞神)、オオカミ(大神、大咬)、オホカミ、オオホカミ、ヲライヌノトラガラ、オホカメ、オニ、オイヌ、ヤマイヌ、ヤマノイヌ、ヤマヲガラ等と呼ばれ」とひとまとめで紹介しているが、過去にエゾオオカミ含む海外のオオカミを「狼」、ニホンオオカミを「豺・山犬」として呼び分けていた事実には言及されない。日本のオオカミの和名は1930年代まで長い時間を経て変遷してきたが、戦後になると過去の経緯が顧みられなくなり、その結果として名称が統一される過程までが忘失されてきた可能性が考えられる<sup>52</sup>。

### 2. 1950年代(1951~1960年): オオカミ生残説の台頭

1955(昭和30)年、斐太猪之介による『炉辺動物記』<sup>53</sup>が刊行された。この著作を皮切りとして、ニホンオオカミ「生残説」が社会に向けて強く発信されはじめる。斐

太は、「学者の中で、日本中の深山を渡り歩いて調べた結果、いないと断定している人はいない」という前提に立ってニホンオオカミの生残説を提唱した。しかし、ニホンオオカミの生残を証明するための情報のみを発表する斐太の著作の内容をみると、「自説」の強化を重視する方向性を有していたことをうかがわせる。

オオカミの目撃談や生残を信じる言説は、戦前までにも多々発信されていたが、戦後の状況は、そうした情報がオオカミの研究に直接は携わらない一般社会から反響と支持を得た点で異なっていたと考える。また、従来は長期にわたって生残の証拠を確認できないという事実を踏まえて「絶滅した」とする記述が行われてきたのに対して、1950年代以降は、確認できないだけで生き残っている可能性もあるという期待に基づいて生残説が強く支持されていく。伝承やフィールドサインだけでオオカミが生残していることを証明することは不可能であるという点については、理由や実例とともにすでに何度も指摘されていた。しかし、以降の議論には、そうした過去の蓄積・指摘が反映されないまま展開していく傾向がみられ、個々の論者の間の乖離が進んでいったと考えられる。

1950年代末になると、「日本に本来オオカミと云はれる動物がいたか否かは、明かではないと云はれる」とする前提に立ち、「動物学上のオオカミ」と「民間で云ふオオカミ」を別の存在として位置づけるなど、多くの混乱をはらんだ言説が見られるようになる<sup>54</sup>

### 3. 1960年代（1961～1970年）：分類学上の定義の問い直し

1960年代前半には、とくに大きな動向は確認できていないが、民俗学や社会学の領域では山村調査が盛んに行われた時期であり、狼信仰に関わる資料が多く見いだされていた。なかでも秩父地方におけるオオカミの頭骨・遺骸の発見が相次ぎ、直良信夫は新たに発見された複数の頭骨の計測値を通して、本州にもシベリアオオカミと同等の大きさをもつオオカミが生息していた可能性を検討している<sup>55</sup>。

1969（昭和44）年、「ナヅに包まれるニホンオオカミ：新しい視野でこの"珍獣"の追及を」<sup>56</sup>と題した記事が雑誌『科学朝日』に掲載され、ニホンオオカミが「未知の種」である可能性が提唱された。今泉は頭骨を用いた形態学的な観点から、「ニホンオオカミはどうか大陸のオオカミの単なる亜種ではなさそうに思われる」、「恐らく未知の種を構成するものであろう」と論じ、同時にエゾオオカミについては「独立性の疑わしい」と指摘した。今泉の発表を受けて、動物学者である小原秀雄は同年『日本野生哺乳動物記』にオオカミをテーマとした記事を掲載<sup>57</sup>して賛同を示している。

分類学上の定義が、独立種・固有種であるとする方向へと進む一方で、ニホンオオカミを「未知の種」とする表現は、多様な解釈を生じさせた。斐太猪之介は、1969（昭和44）年に「ニホンオオカミはいまもいる？：“珍獣”の正体を追う」<sup>58</sup>と題した記事を発表した。ここでは日本のオオカミが中国の「豺」や「狼」、さらには海外の「ウルフ」とも異なる、まったく独自の生物であったとする点に焦点を当てている。現生のオオカミの生態や事例と照らしてニホンオオカミの生態や歴史を比定しようとしてき

た従来の動向に対して、ニホンオオカミは分類学・動物学的にも特異な存在であったとする流れが生じていくことになる。

#### 4. 1970年代（1971～1980年）：実態とイメージの分離

1970年代には、日本におけるオオカミのイメージは、過去の実体（実態）からかなり乖離したものとして普及していたと考えられる。1970（昭和45）年に刊行された『日本狼のゆくえ：いまやまぼろしの動物』<sup>59</sup>では、生物学者である高島春雄が、日本のオオカミについて「民俗学的にやるならともかく、動物学的研究は無理」だとコメントしたことが紹介されている。この当時、ニホンオオカミはすでに動物学では研究対象とはできないとみなされるほど曖昧な、あるいは過去の動物であると位置づけられていたといえるだろう。

1974（昭和49）年の「民話に踊る動物たち」<sup>60</sup>では、日本民話に登場するオオカミは「愛と自由をもとめてやまぬ山の王者」として紹介された。仔オオカミや「同胞」を「護ろう」とする姿や母オオカミの「愛情深さ」など、擬人化したように感じられる要素も付与されている。過去の研究事例やオオカミが生残した時代の記述とは大幅に異なる言説が受容されていたと考える。

また、「送り狼」という民俗語彙が、親切を装って女性を送って行こうとする男性を指す新たな意味を獲得し、広く用いられるようになったのもこのあたりの年代であったと推測される<sup>61</sup>。過去に蓄積された情報や野生動物としてのオオカミの実態を伴わない、主観的な「イメージ」が先行して語られる状況が生じていたと考える。

#### 5. 1980年代（1981～1990年）：情報の単一化

1981（昭和56）年、平岩米吉による『狼—その生態と歴史』<sup>62</sup>が刊行された。個別の研究によって徐々に更新される部分もあるが、以降はこの著作の内容がニホンオオカミの定義に等しくなる。ただ、著者の平岩自身が、1930年代以来およそ半世紀にわたってオオカミに関わる議論を主導する立場にあったためか、個々の議論の経過や言説の変遷過程については言及がない。膨大な情報量を有する一方で、事例に対する平岩自身の結論のみを示す内容は、そこに依拠した議論を増加させ、情報の単一化が進展する結果にもつながってきたと考える。平岩が提示してきた言説が、どのような経緯を辿って導き出されてきたものなのかを確認し、あらためて検討を試みる余地はあると考える。

1983（昭和58）年には、和歌山大学が所蔵するニホンオオカミ剥製の「改作」が行われた。この剥製改作の目的については、以下の説明がある。

非常に貴重なものであるにもかかわらず、剥製の製作技術が稚拙で形態が不自然なことは大変残念に思われた。また戦前、戦中の管理も不十分であったためか大へん汚れていて、このままの状態でこれから長時にわたって保存できるかどうかむつかしいと考えられた。さらに、学術的には、最も重要である頭骨が、剥製の

中に入っていて、利用できないことも問題であった<sup>63</sup>

この結果は複数の報文にまとめられ、以降の研究に供されている<sup>64</sup>。「不自然」さをもつ剥製資料を、より「オオカミ」らしいと思える姿へ改めようとしたといえるが、一方で平岩米吉は「旧作は拙作にはちがいないが、これほど狼らしさを失ったものではなかった」<sup>65</sup>と指摘する。国立科学博物館所蔵の剥製も過去に改作が施されたことが知られており<sup>66</sup>、ニホンオオカミの剥製は修正を経て、より適切と思われる外見へと改められてきた点には注意を要する。

1985（昭和60）年、千葉徳爾は、日本人とオオカミの関係性には、ヨーロッパから伝来したオオカミ観が影響している可能性を指摘した<sup>67</sup>。千葉は、明治時代以降の日本人への影響を論じているが、かつては柳田国男が「志那風」とした議論を踏襲し、その根源とされる先がヨーロッパに置き換わったといえることができる。

日本人のオオカミ観を追及しようとする、外来のものとして、あるいは外部由来の影響を受けて生じていた正統ではないものとして排除すべき要素が検討される傾向がある。「外来」のイメージや要素が、かつては排除されることなく普及して一般化していたのは、受容にいたる素地があったと考えることもできる。しかし、そうした方向性へ向かう議論は、日本のオオカミを対象とする中ではほとんどあられない。

#### 第4節 1990年代—現在

1990年代は、日本のオオカミをめぐる研究史上2つ目の画期を形成していると考えられる。1980年代まで、日本在来のオオカミは、過去には存在していた「絶滅動物」とのみ位置づけられ、研究や議論には閉塞感があったのではないかと推測する。現存する標本資料の少なさにより、過去の記録や伝承を主要な分析対象としなければならず、歴史学や民俗学などの限られた学問領域でしか研究に取り組むことができないと見なされていた。オオカミを実際に目にすることができていた世代が減少する中であって、その記憶とともにさらに忘失が進んでゆく「幻の」動物となりつつあったと考える。

しかし、1990年代に入って日本にオオカミを「再導入」という手法・構想がもたらされ、広く知られるようになった。日本のオオカミは、日本列島内に復元・復活しうる可能性をもつ野生動物として、新たな位置づけを獲得した。オオカミを再導入するという構想そのもの、またその是非をめぐっては、賛否両論と複雑な議論が存在する。ただ、新たな話題と多くの論点を得たことで、オオカミに対して向けられる興味関心が高まった。さらに、過去の実態を把握・復元することで将来の構想に反映できる可能性が生じ、研究価値の向上や議論の活発化にも繋がったと考える。

##### 1. 1990年代（1991～2000年）：「再導入」という新たなテーマ

オオカミの絶滅が意識されるようになった大正時代以降の日本国内では、過去の文化や記録を正確に伝え、残していくことが目的とされてきた<sup>68</sup>。そこでは、過去に共存

に失敗したという事実をどのように理解し位置づけるかが問われてもいた。それに対して、1990年代に入って「再導入」という手法と構想が社会に向けて提示されたこと、日本のオオカミが今後復活しうる可能性をもった存在であるとする位置づけを得たことは、日本列島内で人とオオカミは「これから」共存していくことが可能なのかという新たな問いと視角をもたらし、大きな画期となったと考えられる。

絶滅したオオカミを再導入するという構想は、自然生態系を「復元」・「再生」させるという考え方に基づいている。絶滅した野生動物を復活、あるいは再生させるために再導入するという考え方自体は、1980年代には日本国内にもたびたび紹介されていた<sup>69</sup>。しかし、日本でオオカミ再導入をめぐる議論が活発化したのは、1993（平成5）年の「日本オオカミ協会」の設立と、1994（平成6）年に実際にオオカミの再導入を実現させたアメリカのイエローストーン国立公園における“Wolf project”<sup>70</sup>の紹介が契機となったと考える。流れを主導する機関が立ち上げられたこと、実際の大規模なプロジェクト実行例が示されたことで、日本でも同様の展開が可能なのではないかという期待をもって議論が進められていったといえる。

国内外におけるオオカミ再導入に関わる動向・情報の周知にともなって、野生動物としてのオオカミ、絶滅した日本のオオカミに対する注目も高まった。自然科学系の一般雑誌で特集記事が組まれる機会が増え、『シンラ』誌上では、19回にわたる連載「山根一眞の動物事件簿一狼」という規模の大きな企画がみられた。くわえて、2000（平成12）年には、ニホンオオカミの「再発見」がマスメディアを通して大きく報じられた<sup>71</sup>。この年代から、ニホンオオカミは本当に絶滅したのか、鮮明な写真をともなって問い直す事例がみられるようになり、同時に何をもってニホンオオカミと識別するべきなのか、過去の標本資料や記述の内容が詳細に検討し直される機会が増加する。

こうした動向を反映したオオカミに対する社会的な関心の高まりは、1998（平成10）年に神奈川県立生命の星・地球博物館で開催された「オオカミとその仲間たち：イヌ科動物の世界」<sup>72</sup>など、オオカミを主要なテーマとした企画展の開催にも結び付いていたと考えられる。

## 2. 2000年代（2001～2010年）：議論の活発化

2000年代を通して、日本オオカミ協会は、各種のメディア媒体を通じて生態系における「オオカミの役割」を説き、増加の一途をたどる獣害対策のためにオオカミの再導入が必要であることを提唱した。また、2004（平成16）年には『日本の森にオオカミの群れを放て』、2007（平成19）年には『オオカミを放つ』などの専門的な書籍<sup>73</sup>が刊行され、再導入に対する知見の普及が目指されていた。

しかし、オオカミに対する社会的な関心の高さが持続する一方で、2000年代後半に入ると日本への再導入については否定的な見解が多くみられるようになる。ニホンオオカミが、他地域の集団から種レベルで区別される可能性があるなら、海外から移植するオオカミは、日本国内では「外来種」となるのではないかとする観点から疑問視、あるいは否定的な意見が提示された<sup>74</sup>。また、北海道側では、実際に再導入が可能かど

うか独自に検討を行っていた知床博物館が、「もし日本でオオカミの再導入を行うとするならば、北海道、中でも道東地域の国立公園がその最有力候補地」としながらも、「人との軋轢」、「社会的側面」、「再導入に関する法制度」、日本における「野生動物・国立公園の保護管理体制の脆弱さ」等の問題を抱えていることを理由として「現実的に再導入を実行できる体制は残念ながら我が国には存在していない」<sup>75</sup>とする結論を打ち出している。

2004（平成14）年、中村一恵は「ニホンオオカミの頭骨記録」と題して、これまでに確認されているニホンオオカミの頭骨76例の一覧を作成・報告した。さらに翌年には「江戸中期・諸国産物帳に記載されたイヌ属動物の名称」として98例のオオカミの名称をまとめた論考を発表した。このほかにも、同じ2004（平成14）年中の栗須健による『日本人とオオカミ：世界でも特異なその関係と歴史』、松谷みよ子による『現代民話考10 狼・山犬 猫』、2006（平成18）年の工藤利栄による『狼が遺したもの：北東北の民俗を中心に』など、これまでに知られている資料や情報を集約する取り組みが増加する。さらに2009（平成21）年には、ブレット・ウォーカーによる『絶滅した日本のオオカミ：その生態と歴史学』、菱川晶子による『狼の民俗学：人獣交渉史の研究』が発行された。前者は環境歴史学における日本のオオカミ、後者はオオカミをめぐる民俗を集約し分析を行った。2010（平成22）年、中村生雄が著した『日本人の宗教と動物観：殺生と肉食』は、日本のオオカミに関する総説的な概観を試み、日本のオオカミに関わる問題を考える上で課題とするべき点を明確化している。日本のオオカミをめぐる事例を精力的に記録・集約し、議論に取り組む流れが形成されたのは、過去の日本における人とオオカミの関係性をあらためて確認する必要性が生じたことと無関係ではないと考える。再導入の検討に関わる議論の中では、オオカミの移入復活を果たすために「日本の人々の合意を得ること」<sup>76</sup>を目指し、「本来、日本にはオオカミを危険な害獣とみる概念はなかった」ことを前提とする展開がみられた。従来の研究動向の中で示されてきた言説ではあるが、実態として正確なのか、将来にわたる日本人とオオカミの関わりを検討するためにも、あらためて確かめるべきとする動向を導くきっかけとなったのではないだろうか。

### 3. 2010年代（2011～現在）：既存情報の再検討

2011（平成23）年から2019（令和元）年現在にかけても、オオカミを主題とした論考や文献の発表・出版が続き、日本人とオオカミの関係性に対する関心の高さは継続されていると考える。日本のオオカミに関わる従来の事例を整理・再検討し、新たに位置づけ直そうとする傾向も引き続き確認される。従前から変化した点をあげるとすれば、おそらくは「日本へのオオカミ再導入」の可否を根底の問題意識としながらも、直接的には言及しない事例が多くみられるようになったことがあると考える。とくに近世の東北地方における人とオオカミの関わりについて、かつて数百年にわたり強い軋轢が生じていた状況をあらためて描き出す例がみられる。

村上一馬は、近世盛岡藩におけるオオカミの人身被害21件89人分の記録を確認・

集約し、オオカミが人を襲う時期（7～9月の夏季）と、人がオオカミを捕獲する時期（12～2月の冬季）とが明確な逆相関と認められることを分析し、「人も狼も、相手を獲りやすい時期に捕獲していたからであろう」と論じている。さらに「狼が人だけを喰い、馬を食わない動物であったとしたら、はたして絶滅に至ったのだろうか」という問題提起を行い、近世期の人とニホンオオカミのあいだには、ウマをめぐる敵対関係が存在したことを明示した。一方、東北時代のオオカミについて、研究史の流れを遡ると2010（平成22）年に発表された「明治時代東北地方におけるニホンオオカミの駆除」があり、ここでは明治時代の東北地方ではオオカミによる人身被害の記録は確認できないと指摘がある。また、ここでは、同地方のオオカミが明治時代に絶滅にいたった理由として、明治初期に発生した野生鳥獣の乱獲の影響を受けて、減少した山野の獲物の代わりに家畜を襲って害獣と見なされたこと、オオカミ自体も乱獲の対象とされたこと、とくに毛皮の利用価値により狩猟されたこと、という3点があげられている。ニホンオオカミと人との関係性は、同じ地域でも時期によって変動し、後世から見たときに印象が異なる可能性があることをうかがわせる状況といえる。

過去にはオオカミを対象とした研究は不可能だとする言及がみられた動物学分野においても、新たな議論や取り組みが進められている。2012（平成24）年には、日本のオオカミについての遺伝的系統が示された<sup>77</sup>。本州・四国・九州の個体群については、捕獲地による集団間の遺伝的差異はみられない均一な集団であったとしながらも「日本に棲息していたニホンオオカミが、大陸に生息するタイリクオオカミやアメリカ大陸のハイロオオカミとは離れた存在であり、孤立した集団であることを示している」ことが提示された。一方、エゾオオカミについては「カナダのユーコン地方のハイロオオカミと塩基配列が完全に一致した」という。石黒の遺伝子解析の結果を踏まえつつ、2014（平成26）年には「ニホンオオカミとアカオオカミの起源と種分化に関する考察」<sup>78</sup>が発表された。ここでは、歯の形態的な特徴から、ニホンオオカミが原始的なオオカミであり、ハイロオオカミよりも北米大陸のコヨーテ（*Canis latrans*）やアメリカアカオオカミ（*Canis rufus*）に近縁であった可能性が提示されている。遺伝子解析の結果、ニホンオオカミがタイリクオオカミとは異なる集団であったとする結果が判明し、1990年代以降は異説とされることが多かった独立種説を裏付けるような仮説を導出したことは、今後のニホンオオカミをめぐる議論、位置づけに影響を与えると推測される。

以上のように、明治時代から現在までの日本のオオカミをめぐる研究史を整理し、動向を概観した結果、日本列島内からオオカミが絶滅した後にも日本人とオオカミの関係史は続いていること、さらには研究者による議論、あるいは社会背景による影響を受けながら大きく変容を続けてきたということが確認できたと考える。とくに、研究動向、主要分野、個々の研究におけるテーマや論点はもとより、二度の大きな画期を経て日本人のオオカミ観そのものが大きく変化してきた可能性については、先行研究などで言及されたことはない。この点を明らかにできたことは、本稿における成果

として位置づけることができると考える。

## 第5節 現状の到達点

前節まで、日本のオオカミをめぐる明治時代以来の議論の動向について、年代ごとの展開を整理・確認してきた。本節では、それらの結果を踏まえたうえで、従来の動向から確認できた問題点、そして日本のオオカミに関する研究における今後の課題・展望についてまとめる。

### 1. 従来動向

明治時代から1910年代にかけては、おもに日本のオオカミの名称と分類が検討された時期と位置づけることができる。明治年間(1868～1911年)は、日本国内にオオカミが実際に生息していた時期を含むが、この間に発行された研究には日本のオオカミを対象とし、実際の生体観察や記録をとまなう取り組みは確認できなかった。オオカミの生息数の減少や絶滅の可能性が検討され、その存在に対する国内の関心が高まったのはおもに大正時代以降といえる。

1910年代から1920年代にかけては、日本産の「豺」を、名称を用いて「日本固有の動物」であることを明確化しようとした点が大きな特徴といえる。本州以南の「豺」を、広義の「狼」から分離させ、「山犬」として固有性を強調しようとした。現在では「ヤマイヌ」は主としてニホンオオカミの俗称や地域的に用いられた呼称であったとみなされている。その認識に基づいて、これまでに使用されたことが確認できるオオカミをあらわす名称分布を地図上に再現し、地域的な特徴を検討しようとする試みもみられる。しかし、日本産のオオカミの名称を「ヤマイヌ」に統一しようとした時期が存在したこと、そして百科事典や図鑑にも記載され、学問上の正式な和名として扱われていた情報であること、そうした位置づけがどの程度の影響力を有したかを評価しなければ、データとして利用することは困難であると考えられる。

1930年代には、日本のオオカミをめぐる議論が活発化し、さまざまな定義や仮説の提唱が盛んに行われた。この年代において、オオカミを専門とする研究者が登場したこと、また、従来検討が続いていた日本のオオカミについて定義が明確化されたことは、以降の動向に大きな影響を及ぼしている。とくに、それまで「狼(オオカミ)」は海外産の動物であり、日本産の動物は「豺・山犬(ヤマイヌ)」と称するべきとされていた和名が、突然「日本狼」へ統一される方向へと転回したこと、くわえて、明治時代以来の基本になっていた、オオカミは家畜・人に危害を加える「害獣」であるとする認識が否定されたことなど、重要な変化が多くみられた。したがって、1930年代は、日本のオオカミをめぐる研究史全体の大きな画期と位置づけることができると考える。

1940～1980年代にかけて、日本のオオカミは過去には日本人と好ましい関係性を築いていた動物であるとする位置づけが強まった。その一方で、「憎むべき」害獣としての位置づけは、曖昧・不明確になっていく。また、とくに戦後になると、ニホンオオ

カミが絶滅していることを前提として過去の歴史や実態の解明に取り組むか、生残を前提として痕跡調査に基づく議論に取り組むか、議論や情報発信の際の姿勢が大きく二分された。オオカミの絶滅をめぐって対立しあう見解は、それぞれメディアや大衆紙にも取りあげられ、一般にも広く知られるようになる。オオカミに関する情報が普及する一方で、情報の単純化・単一化が進んだ時期でもあった。こうした状況が進むにつれ、すでに失われた野生動物を研究対象とすることに学術的な意義・価値を見いだすことが難しくなり、閉塞感がもたらされたのではないかと考える。とくに動物学の領域では、研究者の実際の発言からも、日本のオオカミを研究対象とすることは困難であるとみなされていたことがうかがえる。

1990年代は1930年代と並ぶ大きな画期となったと考える。新たに「再導入」というテーマが加わったことにより、絶滅した日本のオオカミは、他地域から近縁種を移植することによって再生しうる存在という位置づけを獲得した。新たなテーマの導入によって研究事例は明確に増加した。現在では、オオカミの再導入に関する賛否を中心としながらも、結論をそこに留めない新たな議論も確認できる状況が生じている。また、過去の実態解明を目指す取り組みも、多様な視角から数多く実施されているということができる。

## 2. 問題点と今後の展望

ここまで、日本のオオカミをめぐる研究史を整理してきたが、その結果として、主流となる研究動向にエゾオオカミの事例がほとんど含まれないことが明らかとなった。本稿で、「日本のオオカミ」を対象とし、同一の条件で文献資料の調査を実施したが、収集できたのは本州以南のニホンオオカミに関する文献が主体となった。エゾオオカミは、名称的にも分類上でも「大陸側のオオカミの地域的な亜種であり、とくに貴重ではない」と見なされ、日本国内におけるオオカミの研究や議論から除外される傾向があると考えられる。

これまでの研究動向では、次の4点が、エゾオオカミ側の事例が全体に影響した、あるいは「日本のオオカミ」をめぐる議論の主体となった事例といえる。①ニホンオオカミより先に、経緯の一部にお雇い外国人が関わる形で絶滅に至ったこと、②その「絶滅宣言」に等しい報告記事がニホンオオカミの状況に危機感をもたらした可能性があること、③絶滅後にニホンオオカミとは亜種レベルで区別される分類上の位置づけが与えられたこと、④オオカミの再導入の可否を主体的に検討する地域が存在し、その経過が注目されたこと。エゾオオカミ側に焦点を絞れば、より具体的な動向と流れが確認できるが、「日本のオオカミ」をめぐる議論には直接的な関わりを持たない。

これは、エゾオオカミ側の研究が進んでいないことにも原因があると考えられる。ニホンオオカミに関する議論において、エゾオオカミの事例を参照し、本州以南でもおそらく類似の状況が生じていたと論じられることがある。しかし、たとえば地域レベルや特定の時代・時期区分ごとの比較をすることはできない。これは、エゾオオカミ側の研究に厚みがないためである。エゾオオカミに関わる議論では、従来概要のみにと

どまっけていて、決して十分に検討されているとはいえない点も多い。とくに、人とオオカミの関わりについては、絶滅に至る経緯を除くとほとんど把握されていない。和人側の事例収集と議論はまったく行われておらず、アイヌ民族側の検討も十分とはいえる状態にないのは大きな問題と考える。

一方、日本のオオカミをめぐる研究全体では、野生動物としての実態を明らかにするためにも、人との関係史を明らかにするためにも、地域ごとの仮説の積み重ねが必要と考える。とくに人との関わりについては、従来、東北から九州までの事例を用いつつ「日本人とニホンオオカミ」について総括的な議論に取り組もうとする傾向がみられた。たとえば、天明8(1788)年、古川古松軒が、東北地方を旅した際の紀行文「東遊雑記」巻之二十一<sup>79</sup>に「夜中、狼に逢ふ時には、狼殿、油断なく鹿を追ふてくだされといんぎんに挨拶して通る事ことなり」と記した事例は有名だが、この一例を過去の「日本人とニホンオオカミ」の関係性の基本であると位置づけ、議論の対象とするような状況が続いてきた。ひとつの事例を基本と位置づけるためには、共通性のある例が全国に広くあらわれる必要がある。全体の結論を導く前に、個別地域の議論と仮説の提示を重ねたうえで、広範に存在したといえる事象なのか検討に取り組むことが目指されるべきだったと考える。とくに、北海道のエゾオオカミについては、本州以南の事例の比較対照に絶えうるだけの質・量の拡充を目指していくことで、ニホンオオカミに付与されがちな「特異性」を相対化できる可能性をもった事例と位置づけることができると考える。

以上を踏まえ、本稿の以下の章では、当時の人々がどのような態度をもってエゾオオカミと対峙したのか、和人とアイヌ民族それぞれの事例を集約し、北海道の事例をもって日本におけるオオカミに関する言説のありかたを分析することを目指していくこととする。

<sup>1</sup> 文献調査に際して、2012(平成24)年の開始時点では、主として「国立国会図書館蔵書検索・申込システム(NDL-OPAC)」(<https://ndlopac.ndl.go.jp>)を、補完的にNII学術コンテンツ・ポータル「GeNii」(<http://ge.nii.ac.jp/>)を利用しており、多くの文献はこの段階で確認・収集したものである(研究論文I提出の段階で736件)。しかし、「GeNii」が2014(平成26)年3月、「国立国会図書館蔵書検索・申込システム(NDL-OPAC)」が2018(平成30)年12月にサービスの提供を終了したため、以降は後継サービスの利用に切り換えを行った[国立情報学研究所 GeNii 担当 2014 「【お知らせ】学術コンテンツ・ポータル(GeNii ジーニイ)の終了等サービスの一部見直しについて」<http://www.nii.ac.jp/content/2014/02/2014-02-03.html> (2019年5月30日最終確認)および国立国会図書館 利用者サービス部 サービス企画課 2017 「NDL-OPAC がリニューアルします」[https://www.ndl.go.jp/jp/library/news/170707\\_01.html](https://www.ndl.go.jp/jp/library/news/170707_01.html) (2019年5月30日最終確認)]。

<sup>2</sup> 菱川晶子 2013 「オオカミ:名称についての一考察」『伝承文化研究』(2), pp.18-42.

<sup>3</sup> 中村一恵 2005 「江戸中期・諸国産物帳に記載されたイヌ属動物の名称」、『神奈川県立博物館研究報告:自然科学』(34), pp.69-73.

<sup>4</sup> データベース検索において検出されず、文献中の記載・紹介から探索することで得られた資料は、おもには民俗誌や地誌等におけるオオカミに関する部分的な議論や考察である。しかし、中には日本のオオカミを主体としながらも、ごく少数で刊行された冊子や個人発行の資料等、入手困難な資料も複数存在した。このような入手方法が限られるような資料については、図書館等で公に公開された実物を確認し、内容を目にすることが可能な文献のみを文献リストに追加し、本稿における考察対象とした。

- 5 国立国会図書館「国立国会図書館デジタルコレクション」<http://dl.ndl.go.jp/> (2019年5月30日確認).
- 6 Biodiversity Heritage Library <http://www.biodiversitylibrary.org/> (2019年5月30日最終確認).
- 7 ブロムメ [田中芳男訳] 1874『動物学』博物館.
- 8 田中芳男 1875『動物訓蒙:初編(哺乳類)』博物館.
- 9 ブロムメ[田中芳男 抄訳・中島仰山 画] 1874『動物学:上』[国立国会図書館デジタルコレクション <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/832779> (NDL 請求記号:4-68)2019年5月30日最終確認].
- 10 「狼の産見舞など」と稱して、秋の末に赤飯を炊いて、山に持つて行つて狼に贈る風も弘く行はれて居た。それから又此獣の害が急に激しくなると、誰か狼の巢を荒らしたものがあつたらうと謂つて、彼等の爲に安産の祝宴を催したといふ例もあり、さういふことをすれば狼が喜ぶものと思つて居た。三峯山中の御子立ての神事といふのも、やはり亦産養ひの作法であつた。斯うして何かといふと人間の誕生と同じ祝ひをしたのは、多分山の神の信仰に基くものであらうが、一つには又此野獣が、特に産育の際になつて食物を求めに、里を荒らしに来ることを経験して居たからであらう[柳田国男 1931「狼史雑話」『日本犬』1(2), 日本犬保存会, p.18].
- 11 曾我部信雄・宮地森城編 1883『小学中等作文稽古本:記傳文2級』梅原亀七.
- 12 出口米吉 1909「小児と魔除」『東京人類學會雜誌』(274) pp.136-143, 東京人類学会. 南方熊楠 1909「出口君の『小児と魔除』を読む」『東京人類學會雜誌』(278) pp.292-312, 東京人類学会.
- 13 山中笑 1910「本邦に於ける動物崇拜」『東京人類學會雜誌』(288) pp.217-229. 南方熊楠 1910(1971)「本邦における動物崇拜」『南方熊楠全集:2』平凡社, pp.81-82.
- 14 南方熊楠 1911(1972)「明治四十四年九月十三日 柳田国男宛書簡」『南方熊楠全集:8』平凡社, p.93. など複数.
- 15 志村真幸 2005「ニホンオオカミは『いつ』絶滅したのか?」『熊楠研究』(7), 南方熊楠顕彰会, pp.42-60.
- 16 著者不明 1891『動物圖解説』金港堂, p.123.
- 17 塚本岩三郎 1904『哺乳動物正図:説明』東京造画館, p.7.
- 18 渡辺銀太郎 1911『動物写真画帖』新橋堂, p.29.
- 19 村田庄次郎 1910『札幌博物館案内』維新堂, p.9.
- 20 当時の新聞記事には、語感に基づいて海外産のオオカミを「豺」と表記した例が見られる。「昨年の暮海軍水兵に重傷を負はせし上野動物園の象は(中略)横濱のアラン、オーストン方清国人長聖道より四五日前寄附の手續きに及びし狼は丈二尺頭より尾先まで三尺餘の代物なるが是は清国陝西陝西省西安府太白山にて未だ産れたばかりのところを西洋人が生捕り昨年三月中より普通の里犬同様人手にて飼養せり(中略)同園に来てより早くも園長に見覚えコレコレと呼ばば立り手を出せば舐めるなど可愛らしく見ゆれども流石に素性が素性なれば食事だけは物凄く何でもボリボリと噛砕く音に身の毛自ら悚立つとなり因に記す園長は狼の字より豺の方が穏当ならんと附札には豺(やまいぬ)と記したりとぞ」[東京朝日新聞 1896「大象と狼」『東京朝日新聞』1896年1月20日6面]. また、平岩は「ヤマイヌ」という名称ではイヌと混同される場合が増え、混乱を避けるために必要だったと読み取れる言及を行っている[平岩米吉 1994[原著 1935]「日本狼」『動物文学』(7), 築地書館 n.pag.].
- 21 梅木佳代 2016「エゾオオカミ研究史の検討」『北海道大学大学院文学研究科研究論集』(15), p.38.
- 22 「やかましういへばヤマイヌは志那には居ない種類であるから、豺とか狼とか云ふ志那製の漢字そのままを当ててはいけないうわけで、しいて漢字を用いるなら山犬とか日本狼とか云ふべきであらうが、日本の古書に依る狼とか豺とか云ふ内には此のヤマイヌを指して居つたものが沢山いることは争われないことである[阿部余四男 1933「ヤマイヌに就て」『日本犬』(2), 日本犬保存会, pp.13-21].
- 23 八田三郎 1913「北海道の狼:口絵及図版」『動物學雜誌』(291), 日本動物学会, n.pag.
- 24 太田順治 1918『世界動物園』自学奨励会, pp.25-26.
- 25 師範学校ほか原編 1875『小学読本:第2巻』巻菱潭[国立国会図書館デジタルコレクション <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/868233> (2019年5月30日最終確認), NDL 請求記号:特 33-778].
- 26 「此の寓話は、言ふ迄もなく、虚言の悪しきことを戒めんが為につくられたるものなり。而して、修身書に記されたるものは、イソップ物語の蘆よりも更に痛切に虚言の恐ろしきものなる事を感じせしめんが為めに、『其の子供が終に狼のために噛み殺されたり』と作りかへられたるものなるべし。されば、イソップ物語の蘆は、前記の如くなれども教授者は、決して、之に従ふを要せず、教科書の記す所に拠りて児童に紹介するを可とす」[相島亀三郎 1912『尋常小学修身書例話原拠:附・参考資料並教授上の注意』宝文館, p.17]
- 27 菱川晶子 2009『狼の民俗学:人獣交渉史の研究』東京大学出版会, p.270.
- 28 内田亨 1925『萬有科學体系』新光社萬有科學体系刊行部 pp.568-569.

- 29 岸田久吉 1925『哺乳動物図解』日本鳥学会, pp.233-234.
- 30 「現時之を實見したる者あるを聞かず、或は已に絶滅し盡きたるにあらざるか、最後の記録としては明治三十七年マルコム・アンダーソンと云ふ人が奈良県鷲家口に於て牡を買取り、トーマス氏之を記述されたものであらう」(※1904(明治37)年とあるが、実際は1905(明治38)年)[緑衣山人 1926「マヤイヌとオオカミ」『庭園』8(12), 日本庭園協会, p.27].
- 31 阿部余四男 1924「日本石器時代の犬科動物私見」『動物学雑誌』(433), 日本動物学会, pp.485-488, .
- 32 「今日では本県内には全く見られなくなった様であるが、若し現に居ることが確かであるとすれば、是非保存したいものである」、確実に豺の居る事を知って居る人があって、之を保存することが出来れば、学術上の金鶏勲章である」[矢澤米三郎 1929『信濃天然記念物:信濃郷土叢書』信濃郷土文化普及会, p.33-38]という記述からは、オオカミをその希少性から「保存」する方向へ向かう意識があったことが推察できる。絶滅の可能性が意識されながらも捕獲が試みられたことについては、当時の「保護」「保全」の意識の問題とみなすこともできるが、ニホンオオカミの実体の把握、分類に際して確固たる生体資料が必要とされた点も考慮しなければならない。
- 33 岸田久吉 1960「千島群島の哺乳動物相」『鳥獣集報』17(2), 林野庁, pp.283-306.
- 34 Kishida Kyukichi 1931 “Notes on Yesso Wolf” *ANSANIA: Journal of Arachnology and Zoology* (25), pp.72-75.
- 35 1934(昭和9)年から2014(平成26)年まで継続して発行された雑誌『動物文学』(築地書館)は、1930年代当時の日本において、オオカミに関わる最大の議論の場だった。昭和初期の動物文学会には、八田三郎、犬飼哲夫、黒田長礼、岸田久吉、長谷部言人、柳田国男、松山義雄など当時活躍していた研究者が名を連ね、多くの記事や論考を投稿している。さらに平岩は、「狼(山犬)に関する各地の実話及説話を求む」と題した記事を1936(昭和11)年から繰り返し掲載し、オオカミに関する情報の募集を呼びかけている。『動物文学』の誌上は、呼びかけに応じて送付される各地域のオオカミに関する情報・伝承と、研究者である平岩による真偽の判定や批評が同時に公開される場でもあった。このような場が設けられていたことにより、1930年代を境としてオオカミをめぐる議論・著述の数が飛躍的に増加する。
- 36 1932(昭和7)年から現在まで刊行される雑誌。日本犬保存会発行。
- 37 平岩米吉 1934「狼」『文藝春秋』12(2), p.157.
- 38 前掲註 36, p159.
- 39 平岩米吉 1939「狼と山犬の辯」『動物文学』(6), 築地書館, pp.52-53 築地書館。
- 40 「大正九年頃、小生は群馬県碓氷郡安中待ち、吾妻炭礦株式会社、鉱業代理人を致して居りました。其の辺には黒炭(亜炭の上質のもの)の廢鉱が沢山あり、それは浅間から東の方へ低い山脈といふより丘陵をなして数里、その殆ど尽きる處にあります。其處の出来事ですが、その頃から三四年前附近の飼養の豚が度々取られるので安中警察で附近の狩猟家を動員して狼狩を催したさうであります。其の際は結局無為に終わりましたが、私の住居した前々年(大正七年頃)安中の大工某が右の小山脈の峠を越えての仕事帰りに狼(山犬?)の牝牡を目撃して安中の狩猟家に此の由を伝へたのであります。が誰も本気にしない打ちに秋間(安中在)の湯屋の主人が単独で附近を一週間に亘つて狩り、最後に、其の牝牡に遭遇して牝一頭を打ち止めたのです」[丹波茂彦・平岩米吉 1939「狼を撃取った話」『動物文学』(55), 築地書館, pp.28-29].
- 41 1939(1939)年「狼を見たといふ話」[138]の註記部分に「序に申し添へておくが、日本狼の実体を確認するために、濫りに捕殺或は捕獲の計画を立てることは、如何なる理由、如何なる目的を以てするも、是非とも差し控へて頂きたい。それは、萬一にも残存している場合、かへつて絶滅を促進するやうなものだからである。昭和十年九月の野知里氏の報告を、最近まで逡巡して発表し得なかつたといふのも、偏へに私のさういふ婆心からであつたのだ。日本狼残存の希望が、未だ全く皆無でないとするならば、我々の講究しなければならないのは、実にその保護と保存の方法であると信ずる」
- 42 志村真幸 2018『日本犬の誕生:純血と選別の日本近代史』勉誠出版, p.4.
- 43 平岩米吉 1935(1994)「日本狼(山犬)」『動物文学』(7), 築地書館, n.pag.
- 44 柳田国男 1969[原著 1931]「狼と鍛冶屋の婆」『定本柳田国男集:8』ちくま書店, p.235.
- 45 「我々日本人が平和なる約款の下に、所謂大口眞神と交際して居た期間は久しいもので、其餘波はなほ現代にも及んで居る」、前掲註 43, p.235.
- 46 「昭和十二(1937)年、イギリスのスピットヘッドで行われたジョージ六世戴冠記念観艦式に、わが国からも、はるばる妙高型重巡足柄が参加したが、その艦影を目して、イギリスのマスコミは「飢えた狼を見るようだ」と評した。この言葉はさっそく日本にも伝えられ、「飢えた狼」とは、いかにも俊敏、強力な巡洋艦にふさわしい形容で、これはとりもなおさず、わが国重順の優秀性を認めた表現であると受け止められた。爾来、この言葉は、日本の重順を語る場合によく引用されて有名になったが、実をいうと、これは決して褒め言葉ではなかつた」[石渡幸二 1984『艦船夜話』出版協同社]
- 47 松平俊子 1994[原著 1939]「御庭の狼:皇室と御日常」『動物文学』(57), 築地書館, pp.65-66.
- 48 「以前狼の数の野山に多かつた時代にも、狼は悪い人しか食はぬといふ信頼を我々は持つて居た。それに安んじきれない者が少しづつ増加すると共に、現実にも彼等の狂暴性が証明せられるやうになつて、今我々の伝説は面白いまでに混乱して居る。さうしてもう一匹も日本には居ないなどと断言する人が飛出す頃になつてから、却つてこの写真のやうに、狼の活躍する舞台が広がつて来たのである。(中略)この写真に見える畠の作物は馬鈴薯らしく、もう一つの方はたしかに玉葱であ

- る。斯ういふ新時代の生産物に、もう絶滅したといふ狼が干与して居るといふことは、私には単なる心理上の現象としか見られない。つまりは世につれて、大口真神の信仰も進化して居るのである」[柳田国男 1970[原著 1947]「関東の民間信仰」『定本柳田国男集: 31』筑摩書房, pp.185-194].
- 49 蘆谷蘆村 1940(1994)「説話に現れた狼の属性について」『動物文学』(68), 築地書館, pp.22-26.
- 50 松山義雄 1943「狼(山犬)」『山村動物誌』山岡書店, p.74.
- 51 末松二郎 1950「新『やまいぬ』標本」『和歌山大学学芸学部学芸研究: 自然科学』(1), 和歌山大学学芸学部, pp.85-87.
- 52 1949(昭和 24)年, ニホンオオカミは「世界最小」の「ホンドオウカミ」として, エゾオオカミは「オウカミ中最大の亜種」のひとつ「エゾオウカミ」として[今泉吉典 1949『日本哺乳動物図説』洋々書房, pp.149-152], 特別な価値が付与された。ここでも、従来とは異なる和名が用いられていたことに注意したい。1945(昭和 20)年 8 月の終戦直後から, 連合国軍最高司令官総司令部(GHQ)によって軍国主義的及び極端な国家主義的思想の排除が徹底して実施されていた。同じ期間に「ニホンオオカミ」の名称使用が避けられていた, あるいは控えられていたのだとすれば, 軍国主義・国家主義的な要素とみなされることを考慮する必要をもつ名称だったと認識された可能性がある。
- 53 斐太猪之介 1955『炉辺動物記』中央公論社。
- 54 近藤喜博 1959「オオカミ談義」『藝林』10(4), 藝林会, pp.50-56.
- 55 直良信夫 1960「秩父地方産オオカミの頭骨」『秩父自然科学博物館研究報告』(10), 秩父自然科学博物館, pp.1-16.
- 56 今泉吉典 1969「ナゾに包まれるニホンオオカミ 新しい視野でこの"珍獣"の追及を」『科学朝日』29(7) pp.104-108 .
- 57 小原巖 1984「絶滅した日本のオオカミ」『動物と自然』14(11), ニュー・サイエンス社, pp.2-6.
- 58 斐太猪之介 1969「ニホンオオカミはいまもいる?: "珍獣"の正体を追う」『科学朝日』29(6) 104-109 朝日新聞社。
- 59 原野農芸博物館 1970『日本狼のゆくえ: いまやまぼろしの動物(原野農芸博物館図録・第 5 集)』原野農芸博物館。
- 60 瀬川拓男 1974「民話に踊る動物たち: 8 オオカミ」『科学朝日』(64), 朝日新聞社。
- 61 朝日稔 1977『日本の哺乳動物』玉川大学出版部。
- 62 平岩米吉 1981『狼: その生態と歴史』築地書館。
- 63 宮本典子・牧岩男 1983「ニホンオオカミ剥製標本の改作と新しくとり出された頭骨について」『和歌山大学教育学部紀要自然科学』(32), 和歌山大学教育学部, pp.9-16.
- 64 宮本典子・牧岩男 1983「ニホンオオカミ剥製標本の改作と新しくとり出された頭骨について」『和歌山大学教育学部紀要自然科学』(32), 和歌山大学教育学部, pp.9-16. 宮本典子 1991「和歌山大学所蔵のニホンオオカミ剥製標本からとり出された頭骨について」『和歌山大学教育学部紀要: 自然科学』(40), pp.55-60. 宮本典子 2001「現存する 6 体のニホンオオカミの剥製とその頭骨に見られる形態の研究」『和歌山大学教育学部紀要: 自然科学』(51), pp.23-32.
- 65 平岩米吉 1983「日本狼剥製の改作と頭骨の計測」『動物文学』49(2), 動物文学会, p.9.
- 66 平岩米吉 1981『狼—その生態と歴史』池田書店, p.212.
- 67 「明治・大正期以来の日本の子供たちは, もうニホンオオカミの姿を見たこともなかったから, 大半はこうしたヨーロッパ伝来の人獣交渉譚をきかされて, その狼に対するイメージを育ててきたのである。そのほかにも狼についての認識を培ったものにグリム童話『狼と七匹の子羊』とか『赤頭巾』などがあつた。いずれも狼は悪者としてえがかれており, 子供たちは日本人人獣交渉史よりもヨーロッパの人獣交渉史によって, 狼という動物の認識を身につけたのであつた。これがその心の発達の上にとどのような作用を及ぼしたのか, それは今後の研究課題なのだが, 少なくとも今日の日本人の対動物観, とくに野生動物のそれについては若干の関係があるかと思う。つまり, それらへの憎しみ, もっと端的には『邪魔者は殺せ』といった単純な自然への見方につながるものではなからうか」[千葉徳爾 1985「人獣交渉史の視点—秩父山地のオイヌ信仰を通して」『歴史手帖』(137), 名著出版, p.35].
- 68 ただし, 「ニホンオオカミの正しい記録の整理こそ, 日本人の手に課せられた重大な責務である」[平岩米吉『狼—その生態と歴史』池田書店, p.2]とする意識も存在したと考えられる。
- 69 丸山直樹 1994「IUCN オオカミ専門家会議」『フォレスト・コール』(1), 日本オオカミ協会, pp.10-13.
- 70 フィッシャー, ハンク[朝倉裕・何部成美訳] 2015『ウルフ・ウォーズ』白水社。
- 71 西田智 2007『ニホンオオカミは生きている: 九州, 祖母山系に狼を追う』二見書房。
- 72 神奈川県立生命の星・地球博物館 1998『特別展図録オオカミとその仲間たち: イヌ科動物の世界』神奈川県立生命の星・地球博物館。
- 73 吉家世洋・丸山直樹 2004『日本の森にオオカミの群れを放て』ビイング・ネット・プレス。
- 74 小金澤正昭・須田和樹 2009「オオカミ復活の道を探る: Yes, No, それぞれの立場から(第 14 回長崎・佐世保大会テーマセッション報告 5)『ワイルドライフ・フォーラム』14(1), 野生生物保護学会, pp.14-15.

- 
- 75 加藤由香・山中正実 2006 「合同シンポジウム専門家会議コメント要約」 デール・R・マッカーローほか編『世界自然遺産 知床とイエローストーン:野生をめぐる二つの国立公園の物語』知床財団, pp.160-164.
- 76 吉家世洋 2007 『日本の森にオオカミの群れを放て』ビイング・ネット・プレス, p.136.
- 77 石黒直隆 2012 「絶滅した日本のオオカミの遺伝的系統」『日本獣医師会雑誌』65(3), 日本獣医師会, pp.225-231.
- 78 中村一恵 2014 「ニホンオオカミとアカオオカミの起源と種分化に関する考察」『神奈川県立博物館研究報告:自然科学』(43), 神奈川県立博物館, pp.23-32.
- 79 竹内利美・森嘉兵衛・宮本常一編 1969 『日本庶民生活資料集成 第三巻:探検・紀行・地誌 東国編』三一書房, p.558.

## 第2章 自治体史におけるエゾオオカミの記述

本章では、過去の北海道内における和人とエゾオオカミの関わりを明らかにすることを目的とする。とくに、北海道内各地の歴史において、エゾオオカミに関するどのような記録が存在してきたのか、市町村史の記述から明らかにすることを旨とする。

市町村史は、和人が主体となって作成・記述に取り組んだ文献といえる。従来のエゾオオカミをめぐる議論では、和人ととの接点や関わりについて言及されることはほとんどなかった。本州以南で人とニホンオオカミと共存できていたことを前提に、おそらく北海道でも同様だったであろうとする推測程度で、具体的な検討は行われてこなかったといえる。そのため、本章では和人が書き残してきた資料からエゾオオカミに関する記録を抽出し、その内容を整理することを通して、北海道における和人とオオカミの関わりのあるかたを検討する。

第1節では、本章における議論の前提として、市町村史におけるオオカミの記述の収集方法と、その資料としての性質について記述した。第2節では、実際の調査結果を踏まえて、各市町村史中に確認できたオオカミに関わる記述について地域ごとの整理と展開を行った。第3節では、前節までの内容と先行研究における議論を踏まえて「和人とオオカミの関わり」「絶滅経緯」についてまとめと考察を行い、最後に今後の課題を示した。

### 第1節 市町村史を対象とした調査

市町村史は、地域の概要や事件を通史的に記録した資料である。本節では、明治時代に絶滅したエゾオオカミに関する新たな情報を求めるにあたって、北海道内の市町村史を対象とした調査を行った。以下では、まず対象資料の選定について説明し、続けて実際の資料の収集方法、収集した資料の性質について述べる。

#### 1. 対象資料の選定

エゾオオカミに関する情報は、開拓使による有害鳥獣獲殺手当制度に関する文書類を除くと、従来ほとんど蓄積はみられず、所在の有無も明らかではない。開拓使による手当制度は、1877（明治10）年に開始され、1889（明治22）年には有害獣による被害の減少を理由として廃止されたことが知られている。くわえて、先行研究において、確実にエゾオオカミといえる最後の公式な記録は1896～1902（明治35）年のものとされてもいる<sup>1</sup>。そのため、北海道内でエゾオオカミに関する信憑性の高い記録<sup>2</sup>を求めるのであれば、1900年代よりも前の資料を対象とすることになる。

今後、人とオオカミの関係についての議論を深めていくためにも、エゾオオカミに関する情報を新たに見だし、蓄積していく作業は必須である。また、エゾオオカミと和人の関わりについて、歴史的な展開を明確化することができれば、北海道における人と野生動物の関係史におけるひとつの事例として位置づけることができるように

なる。

本稿では、今後の研究に資するため、北海道内市町村史を調査・検討の対象として、オオカミに関わる情報を求めた。市町村史を選んだのは、北海道内の全市町村における地域の歴史をできるかぎり均質に確認するためである。市町村史は、各自治体のなりたちから現在までを通史的に把握する資料である。したがって、明治時代初期から中期の状況にも言及があると期待できる。

社会学の立場から自治体史の編集・刊行について研究した高田知和によると、市町村史は自治体との合意のもとにつくられる資料であるため、その記述にはある程度の公共性が求められるという<sup>3</sup>。かつてオオカミによる家畜被害が存在し、地域の人々の生活が脅かされたのであれば、現代の野生鳥獣による獣害や災害のように、その被害の具体的な情報が自治体の記録として記されている可能性が高い。さらに、筆者自身の従来の取り組みのなかで市町村史を利用した際に、地域内に記録がある生物の生息状況をまとめた項目が立てられる傾向があることを確認していた。このことから、過去の絶滅動物ではあってもエゾオオカミに関する言及も期待できると考えた。

2015（平成27）年、研究論文Ⅱを執筆した後の調査において、北方保護自然研究所が刊行する『ふるさとの自然』No. 62-64<sup>4</sup> 誌上で1999（平成11）年から2000（平成12）年にかけて掲載された、黒沢強による連載記事「エゾオオカミ・哀しからずや」を発見した。執筆経緯には「たまたま、地方史を読み目に止まったところをメモしてあったので、地方別にまとめて見た次第」とあるが、本稿と同様に市町村史におけるエゾオオカミの記述に注目して集約を試みる内容であった、字史の記述や他史料・関連文献からの参照・参考事項にも言及がある。ただ、これらの記事を先行研究としてみると、記述内容を要約してまとめる作業が主体となっており、項目立てでの整理や議論に積極的に取り組んでいるわけではないということが出来る。そのため、本稿では、先行する取り組みが存在することを意識しつつ、より多くの事例の集約・整理を行い、検討することを目指した。

## 2. 資料の収集方法

本稿では、北方領土を除く旧14支庁212の市町村<sup>5</sup>から刊行された資料を検討の対象とする。現在の北海道内の自治体数は179だが、いわゆる「平成の大合併」後に発足した市町村のみを対象とした場合、新たな自治体史の刊行に至っていなければ対象から除外される市町村が生じた。これに対して、2004（平成16）年から始まった「平成の大合併」より前の行政体制である212市町村であれば、いずれの市町村からも自治体史あるいはそれに類する資料が刊行されていたことが確認できた<sup>6</sup>。そのため、北海道内の各地域の歴史を広汎に把握することを目的とし、現在の実際の行政区分とは異なることを意識しつつ過去の行政区画を利用することとした。

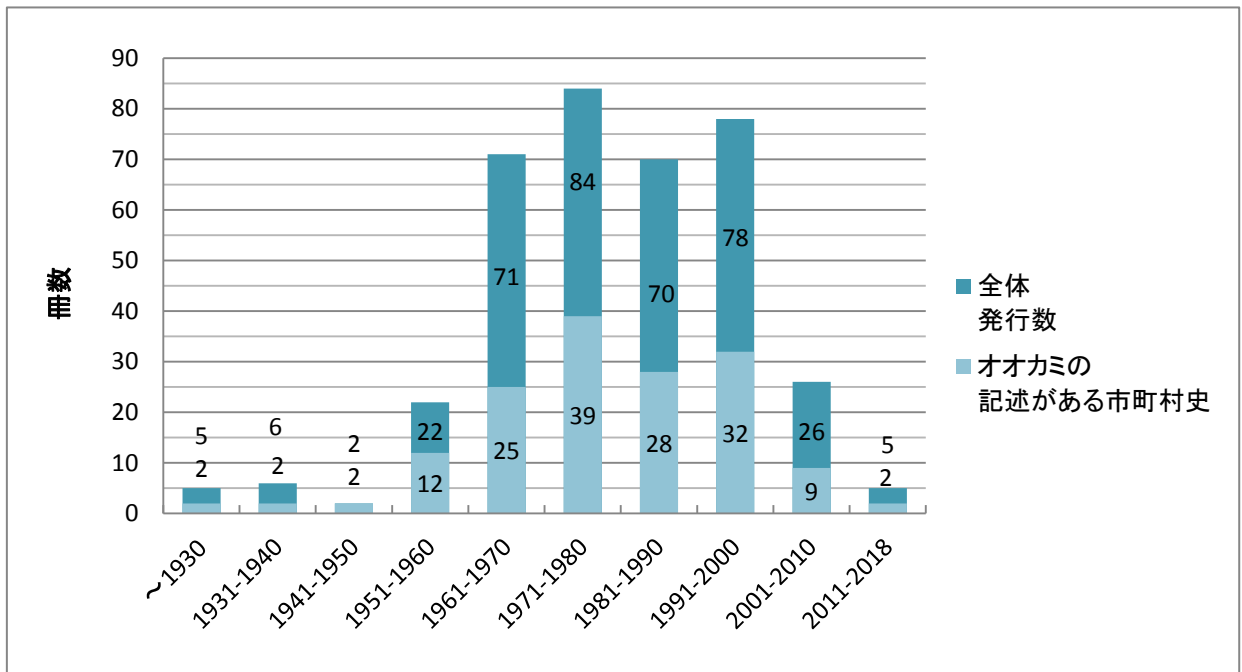
市町村史の収集方法として、2015（平成27）年の研究論文Ⅱの執筆段階までは、北海道教育大学附属図書館による『北海道市町村区史・誌一覧』<sup>7</sup>を参照して必要な資料の所在を確認した。以降は、札幌市中央図書館のホームページ上で公開・更新が続け

られている札幌市作成の「北海道内の市町村史」リスト<sup>8</sup>(現時点では2018年8月版)、を参照しながら、資料の所在確認と収集を続けてきた。実際の資料収集には、北海道大学附属図書館北方資料室、北海道立図書館北方資料室および札幌市中央図書館の所蔵資料を中心とした。

市町村史については、開基とされる時点を基準とした「五十年史」、「百年史」の刊行が行われる例、通史を把握した上で「現代史」に該当する巻を定期的に刊行している例、さらには同一のタイトルで版を重ねる、「続編」や「新編」として全体を更新して刊行されることもあるなど、同一の自治体から複数の市町村史が刊行されているのが通例といえる。本稿では、複数の版が刊行されている場合、可能なかぎり多くの版を確認することを心がけたが、上述した3館において確実に内容確認が可能な資料の入手を優先した。

### 3. 資料の性質について

本稿における調査対象とした資料の発行年代を、【図1】に表した。グラフ中の濃色部分に示される数字が調査対象とした市町村史の発行冊数、淡色部分がそのうちオオカミに関する記述が確認できた資料の冊数である。横軸は市町村史の発行年代を10年ごとに区切っている。



【図1】本稿で調査対象とした市町村史の発行年代とオオカミの記述

資料の発行数全体をみると、1960年代に急激な増加が確認できる。北海道内の市町村史については、昭和30(1955)年ごろから20年ほどにわたる「出版ブーム」があったことが知られ<sup>9</sup>、資料数の増加はこの影響を受けた結果と考えられる。エゾオオカミに関わる記述がある市町村史の発行年代には、とくに偏りはみられなかった。これは絶滅動物として、また大型の肉食獣や過去の有名な害獣として意識される機会が多いためと考える。

出版ブームのころに刊行された市町村史は、その編纂に際して1949(昭和24)年に設立された「北海道郷土研究会」の影響を受けているとされる。この研究会は、北海道の歴史文化研究に取り組む全道的な組織であり、河野廣道、更科源蔵、高倉新一郎などの著名な研究者が活動に参加していた<sup>10</sup>。本稿の対象とする市町村史の中にも、これらのメンバーが監修者として位置づけられる、あるいは内容の編集・執筆を担っている例が多くみられた。また、昭和年間に発行された市町村史の多くが、歴史・文化・言語学的な内容を主体としているのは、研究会メンバーの専門分野であったためと推測できる。自然科学的な知見に立った事象の分析・検討は、時代を下るにつれ多くあらわれるようになる。ただし、どの年代においても、野生動物としてのエゾオオカミの記述については、大半が歴史・生態の概要を示すものに留まりがちであった。

地域にかつて生息した野生動物としてエゾオオカミが紹介される場合、多くの市町村史で、事典的な記述を簡単にまとめたものとなっていた。さらには、実際に記録のある動物種の学名・和名を単にリスト化する、本文中で名称を列記するのみという市町村史も多い。また、研究者や専門家が監修・編集に携わる、分担執筆するなどの作業形態を基本とすることもあってか、専門の動物種についてのみ深い記述があり、その他の動物種との差が浮き彫りになる場合もあった。

1977(昭和52)年に発行された高倉新一郎による『北海道市町村史編集の手引き』は、「地方史」としての市町村史の編集について、心構えから準備、各種手続き、刊行後の後始末までが考え方とともにマニュアル化されたものといえる。その中に、北海道内の市町村史の多くが共通して抱える問題について、以下の指摘がある。

歴史の浅い道内の町村史の多くが開村以前のことを北海道史からながながと引用し、住民が住みついてからのことは制度変遷を主として簡単に記述しているにすぎないものが多かった。これは本末転倒であった。住民が自分達の生活体験をとりあげ解決の資料とするのが町村史の役割でないか<sup>11</sup>。

市町村史中、エゾオオカミに関する記述についても、この指摘と同様の事情を抱えている。とくに、有害獣としてのオオカミの駆除、そして絶滅にいたるまでの経過は、地域によって「開村以前の事」か「住民が住みついてからの事」かの違いがあるものの、多くは既存の文献からの引用か、あるいは全面的に依拠した記述・検討に終始していた。エゾオオカミの存在や過去の絶滅を認識し、それに関わる問題意識はあっても、地域独自の視点をもって議論に持ち込むには至っていないということができ

る。

高倉が述べるように、市町村史は全体として引用に関する問題を抱えた資料といえる。たとえば、エゾオオカミの絶滅過程を説明する上では、新冠の「御料牧場」における被害の状況や、お雇い外国人の関与、毒薬を用いた駆除の実施過程が多々引用・紹介される傾向がみられた。本来、この一例のみをもって道内全域のオオカミの減少・絶滅を論証することは困難なはずである。対象となる地域によっては同様の事態が起きていたのだろうとする理解に至る可能性もあるかもしれないが、そうした判断によらず、「エゾオオカミといえば新冠牧場の被害」という連想によると考えられる事例も複数みられた。何らかの裏付けをもって述べられていると考えられる内容でも、とくに編集者や執筆担当者からのコメントがないまま羅列的に紹介される場合もあった。全体でみると、新たな論点の提示や地域的な事例の掘り起こしが進められている地域や、聞き取り調査などの際に積極的にオオカミに関する質問を織り込んでいる地域もあるが、多くの問題を抱えた資料群であることを意識しつつ利用する必要があると考える。

## 第2節 エゾオオカミに関する記述

前節第2項内に記したとおりの方法で資料を収集し、本稿では、212市町村分369冊の市町村史の調査を行った。その結果として、118市町村分153冊でエゾオオカミに関する記述が確認できている【表1】。旧212市町村のうち、半数を超す市町村が、自治体の歴史を記述する際に絶滅したエゾオオカミに言及しているといえる。ただ、エゾオオカミに関する記述があっても、概要的・辞書的な内容に留まる例が多いことはすでに述べた。この点について、具体性のある内容や地域的な資料紹介があるかという条件を設けて評価し、分析対象としうる資料に絞り込むと、調査で見出すことができた118市町村分の資料の中でも、さらに数は限定される。このことから、北海道内の市町村史は、道内全域の全体的な傾向や数量的な分析には適するが、議論の材料とするには注意が必要であり、弁別して利用する必要がある資料群といえる。

なお、本稿における調査・収集の結果について、実際に確認した369冊の市町村史は、すべて本文末の「北海道内『市町村史』一覧（五十音順）」に記載した。オオカミについて言及があった資料については、書誌ごとのより詳細な情報およびオオカミに関する記述内容を引用、あるいはキーワードを用いてまとめた「市町村史におけるオオカミの記述」一覧を作成し、本稿の資料編に含めた。

### 1. 全体の傾向

本稿による調査を通して、北海道内市町村史におけるオオカミに関する記述は、古生物学・考古学の対象となる先史時代、江戸時代後期から明治時代中期以前、さらには現代的な価値観にもとづく分析・考察まで幅広い項目および時間軸にあらわれることが明らかとなった。

【表1】オオカミに関する記述が見られた市町村

圏	旧支庁	記述あり	記述なし
道央	石狩地方 旧石狩支庁 10 市町村 [6 市 1 町 3 村]	石狩市, 江別市, 札幌市, 新篠津村, 千歳市[5]	厚田村, 恵庭市, 北広島市, 当別町, 浜益村[5]
	空知地方 旧空知支庁 27 市町村 [10 市 16 町 1 村]	赤平市, 芦別市, 歌志内市, 上砂川町, 北村, 栗山町, 砂川市, 滝川市, 秩父別町, 月形町, 奈井江町, 長沼町, 南幌町, 沼田町, 美唄市, 北竜町, 幌加内町, 三笠市, 妹背牛町, 夕張市, 由仁町, 深川市[22]	岩見沢市, 浦臼町, 雨竜町, 栗沢町, 新十津川町[5]
	後志地方 旧後志支庁 20 市町村 [1 市 13 町 6 村]	小樽市, 京極町, 黒松内町, 寿都町, ニセコ町, 蘭越町[6]	赤井川村, 岩内町, 神恵内, 喜茂別町, 共和町, 倶知安町, 積丹町, 泊村, 仁木町, 古平町, 真狩村, 余市町, 留寿都村, 島牧村[14]
	合計 : 57	33	24

	旧支庁	記述あり	記述なし
道南	渡島地方 旧渡島支庁 17 市町村	大野町, 長万部町, 上磯町, 砂原町, 鹿部町, 戸井町, 榎法華村, 七飯町, 函館市, 松前町, 八雲町[11]	恵山町, 木古内町, 知内町, 福島町, 南茅部町, 森町[6]
	檜山地方 旧檜山支庁 10 町	今金町, 江差町, 上ノ国庁, 北檜山町, せたな町, 大成町[6]	厚沢部町, 奥尻町, 熊石町, 乙部町[4]
	胆振地方 旧胆振支庁 15 市町村	虻田町, 白老町, 壮瞥町, 洞爺村, 伊達市, 苫小牧市, 登別市, 穂別町, 室蘭市[9]	厚真町, 追分町, 大滝村, 豊浦町, 早来町, 鶴川町[6]
	日高地方 旧日高支庁 9 町	浦河町, えりも町, 様似町, 静内町, 新冠町, 平取町, 門別町[7]	日高町, 三石町[2]
	合計 : 51	33	18

	旧支庁	記述あり	記述なし
道北	上川地方 旧上川支庁 24 市町村	愛別町, 旭川市, 音威子府町, 名寄市, 東神楽町, 東川町, 比 布町, 美深町, 風連町, 南富良 野市[10]	朝日町, 上川町, 上富良野 町, 士別市, 下川町, 占冠 村, 鷹栖町, 当麻町, 中川 町, 中富良野町, 美瑛町, 富 良野市, 和寒町, 剣淵町[14]
	留萌地方 旧留萌支庁 9 市町村	遠別町, 天塩町, 幌延町, 増毛 町, 留萌市[5]	小平町, 初山別村, 苫前町, 羽幌町[4]
	宗谷地方 旧宗谷支庁 10 市町村	枝幸町, 猿払村, 豊富町, 稚内 市[4]	歌登町, 中頓別町, 浜頓別 町, 利尻町, 利尻富士町, 礼 文町[6]
	合計 : 43	19	24

	旧市町	記述あり	記述なし
道東	網走地方 旧網走支庁 26 市町村	網走市, 興部町, 北見市, 訓子 府町, 小清水町, 斜里町, 白滝 村, 滝上町, 端野町, 東藻琴 村, 丸瀬布町, 湧別町, 留辺蘂 町[13]	生田原町, 遠軽町, 雄武町, 置戸町, 上湧別町, 清里町, 佐呂間町, 津別町, 常呂町, 西興部村, 美幌町, 女満別 町, 紋別市[13]
	釧路地方 旧釧路支庁 10 市町村	阿寒町, 厚岸町, 釧路市, 釧路 町, 標茶町, 弟子屈町[6]	音別町, 白糠町, 鶴居村, 浜 中町[4]
	十勝地方 旧十勝支庁 20 市町村	足寄町, 池田町, 浦幌町, 帯広 市, 清水町, 大樹町, 忠類村, 豊頃町, 広尾町, 本別町, 芽室 町, 陸別町[12]	音更町, 上士幌町, 更別村, 鹿追町, 士幌町, 新得町, 中 札内村, 幕別町[8]
	根室地方 旧根室支庁管内 5 市町	根室市, 別海町[2]	標津町, 中標津町, 羅臼町[ 3]
	合計 : 61	33	28

【表1】に示したように、地域的な多寡をみると、どの地域も資料数に対する記録の有無はほぼ等しいといえる。ただ、その中でも、旧後志支庁（20市町村中14町村が記録なし）、旧上川支庁（24市町村中14市町村が記述なし）、旧宗谷支庁（10市町村中6町村が記述なし）の3地域は、他地域と比較して少なく、また、内容的にも充実しているとは言いがたい傾向がみられた。本稿で対象とした資料では、早期から和人地として展開してきた道央・道南地方のほうが、エゾオオカミに関するより多くの記述・情報を有する傾向があると考えられる。

## 2. 各地域に見られる記述の動向

以下では、本稿における調査の結果として得られた市町村史中のオオカミに関する記述内容について整理する。ただし、便宜上「道中部」、「道南部」、「道北部」、「道東部」、さらに旧支庁ごとに分けて展開し、市町村史上の記載に基づいて地域的な傾向を概観していくこととする。

### 2-1. 道央

ここでは旧石狩・空知・後志支庁内の51市町村を対象とする。

#### [1] 石狩地方

旧石狩支庁管轄の10市町村のうち、5つの市村でオオカミの記述が確認できた。中でも特徴的な内容は、石狩市・札幌市・千歳市の市町村史にみられた。

#### 石狩市：狼害がない地域

1985（昭和60）年の『石狩町史 中巻1』には、明治15（1882）年に石狩・厚田間の原野が牛の放牧地として利用された理由のひとつとして、ヒグマ・オオカミの害がなかったことを紹介する。記述に際して、資料に乏しく、詳述することはできないことわりつつ、以下の記載を行っている。

石狩厚田間ノ原野ニ於テ三十万坪ノ地ヲ相シテ茲ニ放牧セリ此地タルヤ草生茂ノ美ナラサルモ位置高燥ニシテ熊狼ノ害ナク一牛ノ病患ニ罹ルモノナシ十二月ニ至テ更ニ当別ノ原野苦場内川ヲ距ル三四町許ノ所ニ移シ冬間舎中に飼養セリ<sup>12</sup>

放牧地の中にも、ヒグマやオオカミ、大型肉食獣による被害を免れる地域があったようである。オオカミによる家畜被害は、全道一律に起きていたとされるが、実際には地域的な多寡や傾向があり、人々も認識していたと推測する。

#### 札幌市：交易における利用、オオカミが確実に生息地した地域の記録

札幌市の市町村史にはオオカミに関する記述が多く、内容的にも特徴的であるとい

うことができる。他地域の記述内容と比較すると、とくに和人とエゾオオカミが接触する機会が多く、関わりが深い地域だった可能性が考えられる。

1911（明治44）年の『札幌区史』をみると、札幌は開基の頃から「熊、鹿、狼、狐、其他野獣の巢窟たり」<sup>13</sup>と称されている。未開の地と見なされていたこと、もともとは多くの野生動物が生息する土地であったことがうかがえる。地域の動物について、「札幌産動物の札幌博物館所蔵標本」を紹介しながらまとめる中に、白石産のエゾオオカミの剥製標本について言及がある。札幌市は、道内で唯一、剥製標本とされた個体の存在をもって過去のエゾオオカミの生息が確実に証明できる地域でもある。

1927（昭和2）年の『札幌村史』では、移民生活の概況を次のように記述している。

当時移住農夫の最も苦しむ所は熊、狼、毒蛇にあらずして鹿なりき、熊狼の出没は常なしと雖も容易に人を害せず却つて人を見て逃る、鹿は人を害せずと雖も常に群を為し来たりて畠圃を襲ひ穀菜を食い尽す、為めに作付地の四圍には鹿圍なるものを作るの必要ありき<sup>14</sup>

開拓期の生活では、ヒグマやオオカミ、毒蛇など人に直接危害を加えることができる力をもつ動物よりも、シカによる作物の食害のほうが深刻だったと考えられる。これは、エゾシカにより毎年数十億円規模〔平成29年度の北海道では、野生鳥獣による農林水産業被害総額は47億円、このうちエゾシカによる被害金額は39億3千万円<sup>15</sup>〕にのぼる農林業被害を蒙っている現代に通じる状況といえよう。

1953（昭和28）年の『札幌市史：政治行政編』は、「札幌地方には罽・狼・いたち・狐・鹿・兎等の獣や、さまざまの鳥類が住んでいて、これはアイヌの食糧・被服の資源となり、和人と重要な交易品ともなつた」<sup>16</sup>と記述する。これは、1989（平成元年）年に刊行される『新札幌市史 第1巻：通史1 札幌の誕生』において、「発寒番所」（現在の札幌市西区）に、ヒグマ・オオカミ・ワシなどを捕獲して皮羽を「軽物交易物」として収集する役割があったと、より具体的に説明される。江戸時代以前、ここでは、オオカミを含む鳥獣が、アイヌ・和人の双方にとって価値のある存在だった述べられる。しかし、商品や交易品としてのオオカミの利用については、常に安定した価値を有していたかどうか疑問視されることも多い。開拓使による文書でも、「狼ハ其価甚タ輕微ニシテ之ヲ獲ルモ獵者ニ益ナキ」<sup>17</sup>と言及されることがあった。そのため、「資源」や「交易品」とされる動物群に含まれている札幌市史上の言及は珍しいといえることができる。

1958（昭和33）年の『札幌市史：産業経済編 附：自然環境編』では、オオカミに対する獲殺手当制度の紹介がある。「十年九月熊狼捕獲奨励を達し、十一年三月捕獲給与金を定め、これによって畑を荒らし人畜をおそう熊・狼の絶滅に努力した」とヒグマ・オオカミの獲殺奨励金制度の概要を説明している<sup>18</sup>。また、「狼」については個別の項目を立てて具体的な情報をまとめている。

**狼** かつて北海道に住んでいた狼はいわゆるシベリヤ狼で、現にカラフトや大陸に住むものと同種である。本州産の日本狼よりは二倍も大形で、重さも三十五キロに達する。毛色は夏は灰色、冬は灰白色に変る。開拓前には鹿を食っていたので、アイヌはユクコイキ即ち鹿を狩るものと称した。時にはアイヌの犬をおそったこともあるが、しかしヨーロッパ狼のごとく人をおそって惨虐を行うことはなかった。

ところが開拓期に入って鹿の猟獲が多くなり、彼らの食餌が欠乏するとこんどは馬をおそい、ことに子馬がねらわれた。日高の新冠牧場のごときはこのために一時は存亡の岐路に立たされたほどであった。そこで狼退治に力を注ぎ、ストリキニーネを使って毒殺したり、猟獲者には奨励金を交付したりした。手稲村の記録によれば「明治十九年熊十八頭、狼三十一頭、その手当金五百三十四円」となっている。

このため狼は逐次減少して、明治二十一年には奨励金を廃した。しかし翌年札幌付近でも四頭を捕獲した記録がある。標本は北大附属博物館に残されたもの以外にはなく、その雄は明治十二年の白石村産、雌は明治十四年の豊平村産である<sup>19</sup>。

犬飼哲夫の論文をはじめ、先行する文献の内容を詳しく調査し、反映した内容といえることができる。とくに、「手稲村」の記録<sup>20</sup>や奨励金廃止の後にも附近で4頭の捕獲記録がある点、剥製の産地などに関する部分は地域独自の記録といえる。

### 千歳市：産物としてのオオカミ、駆除の記録分析

千歳市は、「市史」と名がつく資料を3度刊行している。1969（昭和44）年の『千歳市史』および1983（昭和58）年の『千歳市史 増補』では、明治天皇の行幸について述べる中で、オオカミの存在に言及されていた。1881（明治14）年の明治天皇の行幸に際して「御昼所」となった島松村、「御泊所」の「千歳村」、それぞれの村勢について作成された資料が掲載されるが、その中に「陸産物」として島松村で1頭、千歳村で2頭の「狼」の記載があったという<sup>21</sup>。「産物」として記載されていることから、有害鳥獣の獲殺とは別に扱われることがあった可能性も考えられる。

2010（平成22）年の『新千歳市史』では、オオカミ・ヒグマの獲殺手当金支給の制度について独自の考察と分析が行われている。とくに獲殺手当が導入された理由について、以下の考察は興味深い。

明治初年の段階では、熊皮や熊肝は鹿皮などと共に一定の商品価値を持つものとされていたが、明治十年代以降になると、熊や狼の生息すること自体が北海道への移住・開拓の上で一種の阻害要因とみなされるようになってきた

（略）

熊よりも狼の方が高額な奨励金だったのは、熊自体に奨励金とは別に商品価値があったためであるが、それと共に熊よりも狼の被害を重視したためであろう<sup>22</sup>

さらに、札幌本庁管内における千歳郡内の狩猟者によるオオカミとヒグマの捕殺比率を比較し、オオカミでは1割以上を占めていたと分析している。全道の記録に対して自治体の位置づけを確認し、独自の分析を進めようとする取り組みは他の市町村ではあまりみられない。

石狩地方におけるオオカミの記述は、北海道内の市町村史の中でもとくに具体性のある情報といえる。とくに札幌市、千歳市では独自の資料の追及・分析にも取り組んでいる。ただ、興味深いのは、両市とも捕殺と利用、そして害獣としての獲殺手当支給の制度に言及がある一方で、オオカミによる被害の実態に関しては不明確なままという点である。被害の様相と駆除・獲殺の進展は合わせて展開していたのではないかと考えるが、石狩地方においてオオカミがもたらした被害の実態は、市町村史の内容からは明らかにできない結果となった。

## 【2】 空知地方

旧空知支庁管轄の27市町村（10市16町1村）中、22市町村でオオカミに関する記述がみられた。オオカミに関する言及がまったくみられなかったのはわずか5市町だが、内容としては概要的なものも多く、個別具体的な記述は限られた。

### 芦別市：情報の貸借事例として

1994（平成6）年の『新芦別市史 第1巻』は、「芦別市域におけるオオカミの記録は残念ながら現時点では手許にはない」<sup>23</sup>としながらも、多くの資料を引用し、オオカミの存在について解説している。直接の資料がないために、北海道における「絶滅野生動物の代表」としてエゾオオカミの概要を述べた後、近隣の滝川市や上川地方の記述を紹介し、芦別市域にオオカミが存在したことを裏付けようと試みている。

オオカミに関する実際の記録が存在しない場合、記録が存在する近隣の市町村のものを「借りて」紹介する手法が用いられる点は興味深い。オオカミの存在に関心を寄せているが、市内には実際の記録がみつからないという状況を明示しているといえる。

### 奈井江町・沼田町：エゾシカの減少によるオオカミの絶滅

この2町の町史では、オオカミの絶滅はシカの激減によって引き起こされたと論じられる。

『奈井江町史』

鹿についての文献はあまりないが、明治十二年まで全道にわたって棲息し、その数も相当なものであったようだが、同年大雪に見舞われ、全滅に近い状態となったという。またこの頃多く棲んでいたエゾオオカミも食糧であるこの鹿がいなくなったので絶滅したともいわれる<sup>24</sup>

『新編沼田町史』

鹿の減少によって、それまでたくさん棲んでいたエゾオオカミも、食糧である鹿がいなくなり、やむなく人里に出没して家畜や馬を襲うようになった。しかしそれも鹿のように集団の群れを襲って食うような訳にはゆかず、オオカミは食糧難が原因となり明治三十年ころ絶滅してしまっ<sup>25</sup>

どちらも人の手によるオオカミの獲殺を意識していない。当地においてはシカ、オオカミの捕殺は行われなかったと解釈しているとも考えられる。ただ、この2町以外にも、オオカミの絶滅経緯や理由について異なる印象を受ける記述がみられる場合があり、執筆担当者の認識や解釈を反映した結果と思われる。

**上砂川町・砂川市・秩父別町・美唄市：獲殺制度による絶滅**

同じ上川地方内の上砂川町、砂川市、秩父別町、美唄市の市町村史中には、獲殺手当制度の紹介がみられる。

『新上砂川町史』

山野のシカを主食としたエゾオオカミは、シカの激減により積極的に牧場の放牧馬を襲うようになった。このため開拓使は捕獲奨励金制度づくり、一〇年間に一三〇〇頭を捕殺、そのため明治二〇年代の初期に狼は絶滅した<sup>26</sup>

『秩父別町史』

大陸から渡ってきて、かつては本道に多数生息していたが、和人の渡道以後は年々減少し、えさとなる鹿も減ったため、明治中期には絶滅した模様である。オオカミの被害を防ぐため、開拓使はその駆除を奨励し、足四本で10銭<sup>27</sup>の賞金を出したということである<sup>28</sup>

『美唄市史』

明治19年に捕らえたエゾオオカミの数は全道で432頭、なかでも美唄を含めた空知地方が最も多くなっている<sup>29</sup>

なお、美唄市では、後年発行された『美唄市百年史：通史編』では、記述内容が以下のように変化していた。

エゾシカも同様、明治の初期には美唄地域も行動範囲にはいていたが、気候による環境変化のため激減し、その影をひそめてしまった。同時にまたエゾシカを食餌としていたエゾオオカミの方は、絶滅してしまった<sup>30</sup>

ここでは、奈井江町・沼田町と同様、過去のオオカミの獲殺はなかったとも受け取れる簡略な説明になっている。同一地域内であっても、時期によってオオカミの絶滅が人の手によるものか否か、認識が変わった可能性がある。

### 夕張市：オオカミが多く生息した山

空知地方の市町村史の中でも、もっとも具体的な情報といえるのが夕張市と月形町のものである。1981（昭和56）年の『夕張市史 増補改訂 上』には、市内の旧地名の由来について古老談話を交えながら紹介する中に、次のような記述がある。

わしらがいる附近は、昔フシコベツ部落（長沼町舞鶴）と呼んでいました。わしの祖先の川村家は、昔オサツにいたが、さけとりが禁漁になったんで、いま住んでいる所が、土地もいいし、湧水もきれいだというんで、仲間七、八件が集団で入ったわけです。それは婆さんが元気なころでしたね（明治五年ころ）。わしの母が言うのには、夜になって、くまがくるみの実をかじるガリッ、ガリッ、という音を聞いたときは、恐ろしくて、夜はろくろく眠れなかった、と。また、わしの親父は、よく言っていたことに、昔は、山にはおおかみがものすごくいた。それらがおおぜい群れをなして、しかを襲って、それを餌にしていた。しかし、ある年のこと（明治十二年ごろか）、大雪が降ってからは多くのしかが死に絶え、その餌をとることができなかつたんで、おおかみが全滅した。その後は、わずかに残ったしかが生き延びて、その子孫が日高で増えたんですね<sup>31</sup>

明治初年までは夕張、長沼町付近の山にオオカミが多数生息していたという。明治時代初期の記憶であれば、実際にオオカミであった可能性も高いと考えられる。ここでは捕獲や駆除に言及はなく、大雪によるシカの減少によりオオカミが全滅したと認識されている。かつては多く生息していたが、害獣として人に影響を及ぼす存在ではなかったと認識されていたと考えることもできる。

### 月形町：狼害の地域的な多寡

1985（昭和60）年の『月形町史』では、集治監建設に着手した頃に月形村付近に生息していた動物の盛衰について、過去の資料からの引用によって紹介されている。本

文中では、典拠を『月形村沿革史』としているが、各図書館に所蔵されている同名の資料中には記載が確認できなかった。そのため、以下は孫引きとなってしまいが、『月形町史』から引用する。

鹿ハ移住後曾テ見ルコトナキモ其ノ落セル角ハ往々之ヲ見タリ熊ハ比較的尠カリシモ時々出没シタリ分村前今ノ浦臼ニテハ人ニ重傷ヲ負タルノミ又銃殺シタル者ハ数頭ナルモ現今ニ至リテハ附近ニ於テハ全ク出没セス狼ハ室蘭方面ニ多ク石狩地方ハ尠シ狼ノ害ハ最モ甚シク実ニ恐ルヘキモノナリ故ニ開拓使ニ於テ狼一頭銃殺シテ其四肢ヲ差出ス者ニハ金拾円熊一頭ヲ獲タル者ニハ金五円ヲ与ヘタル程ナリ明治十五年後是ヲ廃止セラル漸次減少シテ奨励ノ必要ナキに依レリ<sup>32</sup>

ここでは、1880（明治13）～1881（明治14）年頃には、オオカミは室蘭方面に多く、石狩地方は少ないと述べられている。また、オオカミによる害が「最モ甚シク実ニ恐ルヘキモノ」と言及する。しかし、この記述のように、どうやら強く害獣視しているらしい様子をうかがうことはできても、市町村史の中には具体的な状況やどのような被害があったのかが理解できるような記録はなかなか見いだせない場合が多い。実態を理解するためには、異なる資料を用いて保管する必要があるといえる。

空知地方におけるオオカミの記述は、他地域の資料からの引用や情報借用が多い点、また、オオカミの絶滅に人が関わらなかったとする内容が散見される点が特徴といえる。大雪によりシカが減り、シカが減ったことでオオカミも減ったという描写には、迷惑を蒙る人の存在や、オオカミにとってシカに代わる獲物としてのウマが登場しない。自然の推移による絶滅という完結した形とも受け取れる。

### 【3】後志地方

旧後志支庁管轄の20市町村のうち、オオカミに関する記述が確認できたのは、7市町村となった。しかし、いずれの記述も具体性をともなう内容ではなく、獲殺制度が存在したとする史実への簡易な言及や、引用資料へのコメントのみに終始する。

1977（昭和52）年の『京極町史』は、松浦武四郎の日誌中にみられる「豺」を目撃したとする記事について、「罴熊豺狼（ひぐま、やま犬や狼）を見たというのは大げさとしても、当時の川筋の情景が浮かんでくる」<sup>33</sup>と評している。これらの動物が生息していたとは考えられないとみなしたようである。

地域内に具体的なオオカミに関する記録があっても重視する必要がないと判断された結果なのであれば、その点をもって特徴的ということはできる。こうした記述の状況に対して、石狩地方にはエゾオオカミと人の関わりについて具体的な記述が多くみられたのは前述したとおりである。隣接する地域でありながら、人々の関心が向けられるか向けられないかが分かれる様子がうかがえるのは興味深い。しかし、どのよう

な理由・要因が介在した結果なのか、現段階では背景などを明らかにすることができなかった。

## 2-2. 道南

ここでは旧渡島・檜山・胆振・日高支庁内の51市町村を対象とする。

### [1] 渡島地方

旧渡島市町管轄の17市町村中では、11の市町村でオオカミに関する記述が確認できた。

#### 戸井町：本州と共通するオオカミ観

1973（昭和48）年の『戸井町史』は、オオカミについて大幅に紙幅を割き、当地における絶滅過程について述べている。語り口調での記述であり、客観的・具体的な記述とはいえないが、海峡を挟んで「対岸」にあたる下北半島にもオオカミが多く生息していたことに触れている点は、他地域にはない特徴といえる。

また、海を越えた下北の民話を紹介する中で「戸井には昔から下北の人々が移住したので、子や孫に故郷下北の狼の話を聞かせたものである」<sup>34</sup>と言及がある。道南、とくに和人地においては、本州以南と共通したオオカミ観が存在し、語り継がれてきたことが確認できたと考える。

#### 八雲町・長万部町・鹿部町：オオカミとの遭遇

2013（平成25）年の『八雲町史 三訂 上巻』では、典拠は示されないが、開拓当時はオオカミやヒグマが頻繁に出没する環境にあったと述べられる。

明治一一年遊楽部原野に旧尾張藩士が入植した当時では、なお原生林が生い茂り、オオカミ、ヒグマなどがひんばんに出没する状況であった<sup>35</sup>

長万部町、鹿部町の市町村史でも、地域の開発・発展の様子と関わるオオカミの記述がみられる。1977（昭和52）年の『長万部町史』は、1874（明治7）年の電信架線工事に関する記事中でオオカミの存在に言及する。

明治八年三月、長万部に電信局が開設され一般公衆電報の取扱いが始ったことは前にも書いた。電信線架設の測量や架線工事は、箱館・森間は本道に沿って順調に進んだが、森・室蘭間の噴火湾海岸は険しく困難であったらしい。点在するアイヌ部落のほかは人跡未踏の自然で、川の流れにそい、尾根づたいに歩かねばならず、昼も位密林や身のたけをこす雑草の中は案内なしでは歩けなかった。熊

の足跡におびえ、夜は狼の遠ぼえにからだを固くし、ぶよや蚊にも苦しめられた。  
こうして明治七年十一月に完了した架線は全長四七七、七kmであった<sup>36</sup>。

1994（平成6）年の『鹿部町史』でも、脅威としてのオオカミの存在に言及がある。

むかし郷土鹿部の陸路は、東隣り臼尻より海岸伝いに黒羽尻を山越えして四里六丁余、西隣り砂原へは出来澗より険しい崖を避けて遠く山野を踏分けて四里一五丁余りだった。多くは舟便で海路行き来した。海路はエトモ（室蘭）へ渡海した。折戸川の奥にトメの温泉が知られていたが、大沼、茅部峠越えは、山深く熊や狼が出て危険で箱館への往来はいまだ開かれていなかった<sup>37</sup>。

この『鹿部町史』の中には、さらに明治時代の「本願寺道路」開削に関しても、次のとおり記述がある。

明治二年、東本願寺現如上人、北海道開拓のため新道開削を新政府に願出て許可された。翌三年七月十一日、西照寺住職ら軍川に着き、難儀してトメの沢より駒ヶ岳中腹を砂原に至った。熊や狼の危険に備えて銃をもって切開きの工事に従事した。延長十八キロの本願寺道路は、砂原、鹿部、軍川間の直線道路として利用された。昭和四年の噴火で降灰降石に深く埋もれて今は道すじを確かめる術もないが、山仕事の人々に永く利用されたという<sup>38</sup>。

早くから開発が進んでいた地域でも、明治時代までオオカミやヒグマの生息域が残されており、峠越えや道路開削などの折にはそこに踏み込むことで実際に遭遇する機会となっていたようである。原拠となる資料には言及がないが、当時の人々はそうした状況を危険・脅威と感じていたこと、予め備えていたと推測できる。

### 上磯町：文化年間の鉄砲貸付

渡島地方にはオオカミの捕殺や駆除に関する記述が多く見られる。1975（昭和50）年刊行の『上磯町史 年史編』は、文化7（1810）年に害獣を撃ち払うために鉄砲を貸し出す制度が存在したことを記している。

文化年間（一八〇四―一八一七）市在人家接近に熊狼出没するときは、期を定め、証書を取り鉄砲を貸付する規定を作ったが文政五年（一八二二）松前氏復領と同時にこの法も有名無実になった<sup>39</sup>

文化年間に実施されたというこの法あるいは規定は、少なくとも和人地周辺で運用されていた。『上磯町史』が典拠としている文献は1953（昭和28）年の『北海道山林史』

だという。この文献を実際に確認したところ、たしかに同一の文章の記載がみられたが、そこからさらに原典まで辿ることはできなかった。

「熊狼」の出没に際して鉄砲を貸し付けるということは、害獣に対する打ち払い、あるいは銃殺による駆除が公に認められていたと理解できる。本稿における調査では、文化年間の例を探し出すことはできなかった。ただ、『恵山町史』の中に、1854（嘉永7）年のものとされる「五人組帳（前書）」の中に次の一文が確認できた。

一、鉄砲濫りニ打申間敷候。勿論在々ニ而前々より鉄砲拝借罷在、熊猪鹿等之為防打候儀は格別、其渡世ニあらず、獵師に事寄、慰の殺生可致ため鉄砲打候之儀、致間敷事<sup>40</sup>

鉄砲をみだりに撃つことを禁止する条項であり、村々では以前から鉄砲の拝借があること、熊、猪、鹿などを防ぐために撃つことを認めるとする一方で、生活のためではない、あるいは獵師であることにかこつけて慰みの殺生をするために鉄砲を撃つようなことはしてはならないと定められている。ただ、前述したとおり『恵山町史』の中では1854（嘉永7）年に施行されていたものであるとされており、「文化年間（1804～1817年）」に作られた規定であるとする記述とは合致しない。

この「五人組帳」が制定される対象として「五人組制」があり、この制度自体は1724（享和7）年から実施されていた可能性もあること、さらに幕府が東西蝦夷地を直轄した3年後の1810（文化7）年3月に実施されたものが明文として残されていることに言及した研究がある<sup>41</sup>。とくに資料が残った1810（文化7）年の実施が知られているとなると、『上磯町史：年史編』における記載とも合致すると考えられる。本稿は、この論説に全面的に依拠することになるが、先行研究で存在が指摘されてきた「熊狼」に対する「法」「規定」とは、その内容における類似性から、「熊猪鹿」などの獣に対して「鉄砲を貸付」、「為防」に発砲することを認める内容を制度化したものであるとしての「五人組制」、その規定となる「五人組帳」の内容を指していたと考えておきたい。

江戸時代の北海道でも、本州以南と同様に、ヒグマやオオカミによる被害や危険性が生じた際には願い出て鉄砲を借り受け、使用することができていた。北海道における人とオオカミの関係では、幕末には武器をもっての追い払い、あるいは撃ち取る必要がある状況が生じていたと考える。

### 榎法華町：オオカミの捕獲を命じる指令

1989（平成元）年の『榎法華村史』では、本文よりも年表にオオカミに関わる多くの情報が記されていた。

1878（明治11）年

駒ヶ岳近傍より狼を二頭生獲し東京博物館に差出すように十八大区長、総代に

指令あり<sup>42</sup>

1880（明治13）年9月

この年、一月より九月までに、樞法華村で狼に害され死傷する馬五頭，傷を受けたもの一頭，熊害により死傷するもの一頭<sup>43</sup>

明治時代，オオカミは害獣として獲殺される以外にも，博覧会などの展示観覧用に捕獲されることがあった．実際に仔オオカミが捕獲され，東京，あるいは箱館・札幌等で飼育されていた記録もある．猛獣として，あるいは珍しい動物としてなのか目的は判然としないが，見世物としての価値はあったと考えられる．

### 松前町：新聞で紹介された狼害の具体例

1988（昭和63）年『松前町史：通説編 第1巻下』では，明治時代の畜産と関連づけてオオカミの獲殺制度を説明・紹介している．

近世から明治初期にかけての馬を主体とする畜産業の最大の隘路は，狼と熊の馬に対する被害であった．明治十四年八月二十日の『函館新聞』雑報によれば，「福島郡にて狼害の馬二十五頭，熊害の馬二十四頭，通計四十九頭此の価格金九百六十五円，同津軽郡にて狼害の馬八頭（熊害無し），此の価格百一十円五十銭，…」とあって，熊害と同様に狼の馬に対する害が多かったことを示唆している．さらに二十年七月二日の『函館新聞』では，「六月中松前郡に於て獲殺せし猛獣ハ原口村ヲクスエ沢に於て狼六頭熊六頭獲殺」とあり，さらに二十二年一月二十二日の同新聞では，「客歳七月より十二月まで松前郡に於て獲殺したる狼の数ハ三十一頭，熊十一頭此の手当金額百二十六円なり獲殺人ハ主ニ勇払石狩辺の旧土人なりといふ」とあってこの時点まで狼害が多く，勇払や石狩付近の旧土人の狩猟の名手を招いて駆除するという状況であった．しかし，二十三年から二十四年の大雪と厳冬のためか，以後北海道の狼は絶滅したといわれている<sup>44</sup>

当時はオオカミによる被害の状況が新聞記事をとおして伝えられていたことがわかる．また，ここではオオカミ・ヒグマを駆除するために遠方から招かれたアイヌの「狩猟の名手」が駆除に従事したこと，7月から12月の6カ月で31頭ものオオカミを撃ち取ったことを紹介する一方，大雪・厳冬のためにオオカミが絶滅したと述べられている点は興味深い．状況としては，多くのオオカミを撃ち取った結果，以降は周辺地域でオオカミの姿が見られなくなり，被害もなくなったと理解できる．また，オオカミの被害を防ぐためにアイヌ猟師に依頼したという言及は，後述する壮瞥町の事例との共通性をうかがわせるが，オオカミの獲殺は一般には困難なのか，それとも別の理由があるのかは気にかかる．

### 七飯町：槍を使ったオオカミの刺殺

1976（昭和51）年の『七飯町史』には、鶴之郷の開祖とされる「寺谷第吉」を紹介する中で、オオカミを捕殺したことに言及がある。

第吉は文化十四年青森県鱒ヶ沢に生まれ、天保十年二十二歳の時箱館に渡り、今の海岸町で五町歩の土地を手に入れたが、数年後これを金五円（五両）と清酒五升（一升七銭）で売却、鶴野七曲開発に入植したと言う。この時鶴野には人家がなく、四、五軒になったのは、相当後日で、当時ここには狐と狼が多く、これらに随分悩まされたが、狼は手やりで刺殺したが、狐については、荒草の中に食物を置いたりして捕らえた。その後狐を祀る鳥居や仮のほこらを建て、氏神として稲荷神社を奉安した<sup>45</sup>

寺谷第吉による鶴之郷の切り開きは安政元年のこととされており、道南地方では明治時代以前からオオカミに対する捕殺、害獣観が存在したことをうかがわせる。ただし、寺谷の出生地とされている青森県鱒ヶ沢は、弘前藩領内に存在した。江戸時代の弘前藩はオオカミによる人身・家畜被害が多かったことが知られ、1663（寛文3）～1867（慶応3）年にかけてのオオカミによる死傷者は84人にのぼるといふ<sup>46</sup>。害をなすオオカミは捕殺するべきとする考え方やその手法が、本州方面から持ち込まれた可能性も検討されるべきだろう。

### 大野町：馬頭観音とオオカミ

1970（昭和45）年の『大野町史』にみられる記述は珍しい。民間信仰とオオカミの存在を関連づけて次のように述べている。

世の中には慈悲柔和な、観音さまの気持ちも、通じないものがあり、どのようなよい導きも、解することのできないものもある。このような慈悲の気持ちも、柔和な相も通じないものには、馬頭観音が必要となる。馬頭観音は安全をみだし、危害を及ぼす悪魔を屈服させ、世の中を平和にする役目を持ち、これがとりもなおさず、大慈悲と説かれている。おもうにむかしのエゾ地時代は、人間世界の悪魔よりも、家畜の筆頭にある馬に危害を与える悪魔は熊であり、おおかみであったので、先祖の人たちのそばくで純真なねがいは、馬頭観音でなければならなかったことが容易に推察でき、これが馬頭観音信仰の原型となったものと考えられる<sup>47</sup>。

本州以南には、多様な「狼信仰」が存在することが知られている。しかし、北海道においては確認されず、管見のかぎりでは、過去に存在していたかどうかを検討された

こともない。

本稿の調査段階では、各市町村史の神社や信仰に関わる章で狼信仰に関する記述がみられないか期待したが、結果として確認できたのは『大野町史』のこの記述のみとなった。

### 砂原町：移動動物園でオオカミを見る

エゾオオカミに関する情報ではないが、『砂原町史 第一巻 通史編』の「砂原村学校年表」には、1912（大正元）年の修学旅行で矢野動物園を見学したとする記載がある。現代でいうところの「移動動物園」であるこの施設については本文中にもとくに説明はないが、そこで展示されていたライオン、トラ、ダチョウ、エミューにオオカミを含めて「珍奇なもの」と称されている。1880年代にはまだ北海道に多く生息していたオオカミが、その30年後には「珍奇な」存在とみなされていたことがわかる記述といえる。

渡島地方では、害獣としての獲殺記録を含め多様な情報が得ることができた。明治時代以前から和人地としての歴史を有し、移住や出稼ぎなど人の出入りもあって複雑な地域であるが、生活をめぐり、あるいはウマをめぐり、オオカミとの軋轢の歴史が長く続いてきた可能性が提示されたといえる。また、木古内町は、犬飼によって過去の狼害が激しく家畜の放牧ができない時期があった<sup>48</sup>とも述べられてきたが、『木古内町史』の中にはオオカミに関する記述は確認できなかった。

### [2] 檜山地方

旧檜山支庁管轄の10町では、7町でオオカミに関する言及が確認できた。しかし、具体的な記述はみられず、渡島地方と比較すると記述の量・質ともに非常に少ないといえる結果となった。

### 今金町：開村時すでに話のみの存在

1991（平成3）年の『今金町史 改訂 上巻』は、明治10（1877）年に猛獣獲殺に関する規定が設けられてからはとくにオオカミが少なくなったと言及する。

動物分布の上から、特色ある生物がこの地方に住んでいる状態は殆どみられないが、北海道では明治一〇年（一八七七）「猛獣獲殺に関する規定」が設けられてから以降は特に狼は少なくなり、やがて絶滅したといわれるので利別村開村の頃には話として聞くことはあっても実際に捕獲したことはないと考えられる<sup>49</sup>

1947（昭和22）年に今金町と改称した「利別村」は、1893（明治26）年に開村したと

いう。時期的にオオカミの話を書くことはあっても、実際の捕獲の記録はないと推測している。記述の内容からは背景や状況などを明らかにすることができず、不明確な部分が多いが、早い段階で生息数を減らし、存在感を失っていたと考えておきたい。

### [3] 胆振地方

旧胆振支庁管内の15市町村中で、オオカミに関する記述がみられたのは9市町村である。同地方ではオオカミに関する地域性のある情報が多くみられた。

#### 洞爺村：道路開削時における遭遇①

1976（昭和51）年『洞爺村史：本編』は、1994（平成6）年の『鹿部町史』と同様に、東本願寺による新道開削について解説する中で、秋にオオカミの群れと戦ったと記している。

東本願寺がこのとき手がけた道路はここだけでなく、新設三本、改修一本の都合四本であるが、そのうちで最も多くの費用と労力を使ったのが、伊達村長流（今の伊達市長和）から有珠山中を経て壮瞥滝の町の星野坂草刈山を通過して東湖畔に出、湖に沿って洞爺村へ、そして留寿都、中山峠をこえて札幌に至る三十七里（一〇八キロメートル）の街道であった。この工事の記録には、狭い谷間や断崖のような場所を夏は毒虫に襲われ、秋は狼の群れとたたかい、木をあつめて火をともして暖をとり、樹かげに露をしのぎ、石を枕にし、雪をしとねにして、イバラを拓き、草むらを刈り、モッコをかついで土を運び、オノをふるって木を倒し堤を築き橋をかけた<sup>50</sup>。

鹿部町の記述と比較すると、オオカミの群れと戦った季節が「秋」に限定されているが、具体的な典拠や、どのような種類の資料にあらわれる情報なのかは言及されない。1972（昭和42）年の『新稿伊達町史 上巻』も、開墾当時の生活を述べる中に、毎夜のようにオオカミの遠吠えを聞きながら作業をしていたとする記載がある。

明治初期、たしかに人がオオカミやヒグマの生息域に直接踏み込む必要がある作業が多かっただろう。とくに道の切り開き時における障害としてのオオカミ・ヒグマの表現は定型的な表現だった可能性があるが、それだけ両者の存在が強く意識される機会ともなっていたと推測できる。

#### 室蘭市：道路開削時における遭遇②

1981（昭和56）年に発行された『新室蘭市史 第1巻』にも、道路開削という状況と関係したオオカミの存在に言及がある。

絵鞆半島や室蘭が全く未開の地であったわけではない。これよりさき幌別郡を支配していた片倉小十郎は明治三年七月に角田藩石川邦光が支配を免ぜられた後、この室蘭郡をも支配しており、輪西、チリベツの両村は、邦光の旧臣らの手でわずかながら開墾していた。そのころ絵鞆半島は無人の陸地で熊、狼をはじめ野犬がたむろしていたが、片倉小十郎は漁場を開く計画を試みた。

同年九月、国分喜右門、片岡慶次郎を遣し、アイヌ七人を率いて幌別郡鷺別村字トリエより室蘭港、絵鞆に通じる里道を測量した。が、十一月に入り、寒さがきびしく、かつ雪のため測量を中止し、翌四年雪どけを待って移住者十人、アイヌ二十人を募り、河田新太郎、大野勇治らを中心に測量させ、里道十二里二十二町を開いた。だが、熊、狼などの出没を恐れ定住するものはいなかった。この里道は、両側の下水溝はわずか五～六寸の深さにして、橋は丸太を並べただけで、山腹はほんのわずか切り下げた粗末なもので、夏は雑草で道路を見失うほどのものだった<sup>51</sup>。

道路を通す工事の中でも、開通した後も、オオカミやヒグマの存在、あるいは遭遇の可能性が人の行動を制限した。市町村史を含む複数の文献に、北海道のオオカミもヒグマも人を目にすれば逃げ出す、とする記述が残っているが、身の安全を考えれば、人々がその生息地の中に積極的に留まろうとしない態度は理解できる。

ヒグマについては、1878（明治11）年の札幌丘珠事件が、明治時代の文献でもたびたび言及されている。当時、野生動物の存在、出没状況の周知、あるいは実際の事件に基づく危険性について注意喚起がなされていたことがわかる。オオカミについては、仮にエゾオオカミがニホンオオカミと比べて大型だったことを度外視するとしても、第1章で検討したように江戸時代から人を襲い、ときに食い殺すこともある獣だと考えられてきた存在である。被害の実態がなくても、存在そのものが人々にとって脅威となっていたらろうと想像できる。

### 虻田町：生息数の多寡と捕獲の有無について

1962（昭和37）年の『虻田町史』は、かつてのオオカミとシカの動態が由来となった地名を紹介する。

ユクウンコッ 役場前から日鉄鉱業所へ行く途中の、左手の沢。鹿のいる沢という意。冬になると鹿が集まるところで、鹿を狙って狼もたくさんいたという。（昼は有珠岳で昼寝をしていて、夜になると鹿をとりに降りて来たという）<sup>52</sup>

ウケンシリ 町はずれの崖の名で、悪い山という意味。悪いという場合、足場が悪くて歩きにくいとか、川の場合などは、水質が悪くて飲めないというように、自分たちの生活に都合の悪いという意味で、この場合も上ることも歩くこともで

きないところ、おまけに地獄穴のある気持の悪い山という意味である。ユクウン  
ユツにいる鹿が狼に追われて、峯伝いに逃げてきて、よくこの崖から追いおとさ  
れて死んだという<sup>53</sup>

どちらもオオカミの名前とは直接関わらない。地名から辿ることは困難な情報といえる。オオカミの生息数が多かったことに加えて、オオカミとシカの土地の利用についてうかがえる記述内容も貴重である。シカを襲うオオカミの動向を、当時の人々が意識・注視していたことがうかがえる。

ただ、ここではオオカミが多く生息していたとしながらも、明治19（1886）年の状況として次のように解説がある。

明治十九年は獣害が多く、「北海道庁勸業年報」では「但し獣害をこうむり、その収穫を減ず」と報じ、熊だけでもこの年五頭とっているが、この当時は有害獣殺獲手当というのがあって、熊は一頭について三円の手当を与えられたもので、五頭とって金一五円の手当をもらっている。狼は熊のように獲っても皮なども金にならなかったため、熊よりも手当が多く五円を与えられることになっていたが、狼を獲った記録はない<sup>54</sup>

市町村史にあらわれるこの2つの情報を統合すると、オオカミが多く生息していても、積極的な狩猟の対象とならなかった可能性がある。地名由来の情報については年代が明確ではないため、直接の比較はできないが、オオカミの生息数と実際に獲殺された記録の多寡のあいだに相関性があったのか、疑問をもたらす記述ともいえる。

### 登別市：古老座談会における情報の掘り起こし

『登別町史：開基百年記念』では「部落史編」におけるオオカミへの言及が目立った。

明治二十一年（一八八八）には役場から有害獣の報告記録が出されている。これによれば熊の害は四月下旬から十一月下旬で、狼出没常なしといっている。鹿を食糧とする狼は、鹿のたくさんいた幌別にもいたことは想像に難くない。また登別牧場では明治十六年、熊及び野犬に馬二頭をたおされた記録がある。同年には幌別だけで八頭の熊が獲殺されている<sup>55</sup>。

多数のシカが生息していた状況から、オオカミもいただろうと推測しているが、記録上では確認できていないようである。このほか、1969（昭和44）年に幌別で開催された「古老回顧座談会」でもオオカミの話題が取りあげられている。この座談会は「登別町史を編さんするに先だって、古くから本町に居住し、開拓に苦勞された古老の方々

を囲んで、往時を語」<sup>56</sup>ることを趣旨としており、ここでは司会の側から「鹿と狼の関係ですが、狼は鹿を主食にして繁殖していた時代が北海道にあるそうですが、その狼についてご記憶はないですか」と問いかけている様子が確認できる。幌別地区内ではオオカミはいなかったようだとする回答を得ているが、回答者の1人は「明治二十三年頃の話」として、「伊達の町で狼に追われたことが何回もある」伊達在住の人物の話あげている。

同様に、1965（昭和40）年に登別温泉で開催された「古老座談会」でも、司会の側から「狼はいなかったですか」と問いかけがなされている。このときは結果としてすべての出席者から否定されているが、町史の編纂に際して、積極的に絶滅したエゾオオカミに関わる地域の記憶・記述を掘り起こそうとした姿勢がうかがえる。

### 苫小牧市：他地域での捕獲の影響

1975（昭和50）年の『苫小牧市史 上巻』は、貝塚から出土する骨に基づき、過去の生息を推測している。

北海道を代表したもうひとつの猛獣エゾオオカミは、明治二十八年の記録を最後に絶滅したが、植苗貝塚から多量の貝殻にまじってエゾオオカミの骨が発見され、かつて苫小牧付近でもエゾオオカミが徘徊していたことを証明している。エゾオオカミはエゾヒグマのように冬眠せず、また集団行動をする習性が絶滅への道をはやめた<sup>57</sup>

このほか、苫小牧市内では柳館貝塚からもオオカミが出土し、「キツネとかオオカミなどは食糧というよりはむしろ、衣服の素材として捕獲されるものと思われる」<sup>58</sup>とも考察されている。

また、明治初期の牧畜業をまとめる中で、1883（明治16）年の『民間牧畜実況取調復命書』<sup>59</sup>を引用し、苫小牧村と植苗村について、「熊狼」の害が甚だしく、毎年数十頭のウマの被害があったこと、千歳附近で数十頭の熊狼を獲殺したために被害が減少したことが述べられている。千歳近辺での狩猟数の増加が苫小牧での牧畜業に益をもたらしたと推察されているが、苫小牧市域での駆除・狩猟との関連性はなかったのかは検討されていない。

### 壮瞥町：アイヌ民族によるオオカミの捕殺

1979（昭和54）年の『壮瞥町史』には、1884（明治17）年に記録が残るオオカミの出没に関する情報が詳述されている。「壮瞥穴<sup>60</sup>」におちたオオカミを発見し、引き上げる過程で撲殺（銃殺としている箇所もある）して検分したとする内容である。

鹿は明治十三年より次第に減じ二、三にして跡を絶ち、狐は白、黒、三毛、普

通の四種が見受けられたが、白、黒、三毛は一四年頃より次第に減少し、二十年頃よりは稀に見られる程度となった。狼は十七年よりは早く跡を絶ってしまった。熊も開発が進むにつれて年々奥地に潜むためか部落の出没は減少の傾向となり、蛇なども青大将が散見される程度となって、日常の外出なども次第に安堵感が増してきた<sup>61</sup>

「十七年よりは早く」という表現は、これ以降に確実な記録がないためだろう。このオオカミについては、古老座談会の項目中でも「滝之下の壮警穴の中に、何か落ち込んでいるので、アイヌを連れてきて撃たせたところ、狼であったという実話がある」<sup>62</sup>と言及され、さらに以下のように詳しい説明が記載される。

或る時（明治十七年頃）私（佐藤喜重）の父が、今の中学校の裏辺りの畑に行ったら、例の壮警穴の中から、ウーウーという唸り声が聞こえるので、通りがかりのアイヌに聞いた処、アイヌは暗い穴の中をのぞき込んで、これは狼に違いない。捕ってやると特異のロープで輪を作り穴の中に五米程下げてやって、うまく首をしめて引張り上げたが、危険なので撲殺して見たところ、全く絵にある狼と寸分変わらないものであった<sup>63</sup>

ところどころで記述内容に齟齬があるが、アイヌに「依頼して」オオカミを撃たせた、あるいは「通りがかり」のアイヌがオオカミを捕殺した、と言及されている。どちらの場合であっても、アイヌ民族と結びついて理解される必要がある事例といえよう。

北海道内の多くの市町村史で、開拓期から昭和初期にかけて北海道に移住した和人が、近隣のアイヌに依頼して地域に出没するヒグマを捕獲してもらったとする記述がある。ある程度はステレオタイプに基づく情報も含まれるだろうが、その可能性も含めて、開拓期にはそのような対応が常態と化していたと理解されているといえる。

壮警町におけるこれらの記述は、既出の松前町の事例と併せて、ヒグマに限らずオオカミの場合も同様だった可能性を示唆するものでもある。

ここまでみてきたとおり、胆振地方の市町村史では、編纂に際してオオカミに関する記録を掘り起こそうとする姿勢がうかがえる。また、探せばそれに応じる事例が存在した様子からも、オオカミの存在が強く意識される地域と考えることができる。

#### [4] 日高地方

旧日高支庁管轄の9町では、うち7町にオオカミに関する記述が確認できた。また、馬産地として知られ、全体として、エドウィン・ダンとエゾオオカミとの攻防の経緯が有名な新冠牧場に言及しない市町村史はない。ただ、馬産とオオカミとの関わりについては、地域独自の情報や考察よりも既存の文献からの引用を利用する傾向が目立

った。

北海道内でも牧馬をめぐる人とオオカミの攻防でよく知られる地域だが、市町村の歴史を記述する中では、オリジナルの情報や検討・考察の類いは、管見のかぎりではみられなかった。

### 静内町：馬産地における狼害の背景

1975（昭和50）年の『静内町史 増補改訂版』では、明治初期の畜産について説明する中で、オオカミによる被害がどのような状況で生じていたかをうかがわせる記述がみられる。

静内地方には野馬といって、野生の馬が群をなして山野を横行しており農作物に大きな被害を与え（中略）開拓当初の開拓者がいかにこの野生の馬に悩まされたかを物語っている。明治五年開拓使が新冠牧場を創設したのは北垣国道が日高沿岸を巡察した債、静内地方が牧野に適していることを知り、これを黒田長官に進言した結果によるものである。面積およそ二億余万坪を撰び、当時日高管内に散在していた野馬二千二百六十二頭を集めて放牧したのであった。これにより野馬の被害も防ぐことができた。

一方馬匹の改良にも留意し、明治八年南部地方から種牡馬十余頭を購入、漸次改良に着手した。しかし何分ただ山野に散在した野馬を集めたものだから、ときどき脱柵して逃げるものがあったり、狼、犬などの害を受け、蕃殖の被害も甚だしいものがあった。またこの年白老、幌別の牧場が廃止されたため、二百八十一頭を静内に移したので馬市を開いて不良馬三百五十頭を売払った<sup>64</sup>。

ウマは家畜であると同時に農業、あるいは開拓初期の生活における害獣でもあった。明治時代の入植者は、ウマを管理する立場にあると同時に被害を被ってもいた。また、当時の飼育管理の体制に問題があり、オオカミやイヌによる襲撃・食害を招く事態を生じさせてもいたことがわかる。

### 新冠町：最後のオオカミの記録について

ウマをめぐる人とエゾオオカミが対立したことが知られる新冠の御料牧場を擁する町だが、市町村史ではエドウィン・ダンの手記を元にして事態の経過を追うに留め、独自の議論やコメントはみられない。

1996（平成8年）の『続新冠町史』では、町内に記録がある動植物を紹介する中でオオカミについて見出しを立て、次のように述べている。

エゾオオカミは、明治一二年の記録的な大雪でエゾシカが餓死や透視で激減したとき、大挙して新冠の官営牧場の馬を襲った。そのため、ストリキニーネによ

る毒殺作戦がとられ、絶滅に追い込まれた。最後の一頭が仕留められたのは明治末期のこと、新冠においてであると言われている<sup>65</sup>

新冠においてエゾオオカミの最後の一頭が仕留められたとする情報は、エゾオオカミを解説する一般書などでも言及されることがある。しかし、伝聞体で記されることが大半であり、根拠となる資料や情報は確認できていない。市町村市中でも原拠となる資料に言及は見られなかった。

### 2-3. 道北

ここでは旧上川・留萌・宗谷支庁内 43 市町村を対象とする。

オオカミに関する具体的な記述や情報がみられた道央・道南と比較すると、道北地方では、記述はされても概要的な内容にとどまる傾向が強い。

#### [1] 上川地方

旧上川支庁管轄の 24 市町村中、オオカミに関する記述が確認できたのは 10 市町村であった。上川地方は、他地域と比べると本格的な開拓が始まった時期が遅く、このために、オオカミに関わる情報も限られる結果となったと考えられる。旭川市のみ、具体的かつ情報源が確認できる信憑性の高い情報が提示されるものの、その周辺地域では大部分がその記述を引用・参照した内容となっている。結果として、自治体ごとの違いが把握しにくい状況が生じているといえることができる。

#### 旭川市：オオカミの出没とアイヌ民族による飼育

1931（昭和 6）年にまとめられた『旭川市史稿 上巻』には、「当時尚ほ熊狼の害」と題した章が設けられ、オオカミと人の距離が近かった時代について次のように説明がある。

測候所開設の頃は、其の附近に千古斧斤の入らざる処女林鬱蒼として繁茂し、鹿・熊・狼の類時々出没したれば、之を見て或いは壮快を覚ゆることなきにあらざりしも、概して淋しく凄く、殊に夜中は往々恐怖を感ぜしことありたりと其の一例として当時の測候所員豊蔵銚吾の談に拠れば、観測を開始して未だ幾日も経ざるに夜々狼観測所の付近に來り、地に伏して吠えしが、其の声高く低く長く響きて甚だ凄ければ、観測者は銃を放ちて之を逐い、然る後庭に出でて観測し、斯の如きもの数夜におよびたることあり。狼の忠別附近に後を絶ちたるは明治二十三年頃なりしと云ふ。又兎は甚だ多く、北見新道の成りし頃は、早朝路上に出で居るを以て、銃を携え路傍の溝を潜行して之を撃つ時は、容易に数頭を得、鷺も亦來り、殊に秋季鮭の遡上する時多く來り、鮭も数多遡上したれば、アイヌは丸

木舟二艘を並べ、其間に網を張りて流れ下り、網に触るゝものを漁獲し、或いは「マレツプ」と称する漁具にて突きて取り夜は鼻出でゝ鮭を捕へ食したりと云ふ。

水測所開設以来、水測に従事したる杉谷宇右衛門の談に、夜臥床中狼来り、小屋に干し置きし川魚を取り、喰ひつゝあるを認めたりと<sup>66</sup>

夜中の就寝中にオオカミが小屋に忍び込み、干してあった川魚を食べていたという。大胆なキツネがするような行動だが、当時、そのような行動をみせる動物がオオカミであると見なされた点は興味深い。人を恐れず、油断すると人家の中にまで入り込む存在とされていた可能性もある。

1994（平成6）年の『新旭川市史 第1巻：通史1』は、エゾオオカミが明治中期までは全道に生息していたこと、エゾシカとオオカミの盛衰の関係性、1887（明治20）年に着工した樺戸監獄所の囚人による新道建設作業においてオオカミ・ヒグマとの遭遇があったことなどを紹介する。

**野生動物の盛衰** 日本人の伝統的自然観は、松尾芭蕉が「風雅におけるもの、造化にしたがひて、四時を友とす」（笈の小文）と述べているように、自然の四季折々を友とするものであった。ここでは花鳥風月を愛で、自然と融合するのが風雅の精神であって、アイヌ民族のように、獣まで取り込み、彼らを畏敬するような思想は消えてしまっているように思われる。したがって、人間に害を与えるような熊や狼はさっさと駆逐さるべきものであった。また肉・皮革・角等が珍重され、群棲して捕獲しやすいエゾシカは、明治初期毎年一〇万頭余殺され、明治十一年（一八七八）には鹿肉の缶詰工場さえ建設された。皮肉にも翌十二年二月の記録的な大雪のため、シカの大量斃死に見舞われ、工場は閉鎖された。その後捕獲と保護が繰り返され、最近やや増加傾向の中で、作物被害が問題化されている。

エゾシカを餌としていたエゾオオカミは、シカの減少で家畜を襲うようになった。たちまちオオカミの組織的な駆除作戦が開始された。捕獲に賞金が掛けられ、毒殺まで行われた。群れをなす習性もあって、明治中期ついに絶滅してしまった<sup>67</sup>。

ここでは、和人の自然観について解釈し、「熊や狼」に向けられた態度が論じられている。実際に、明治時代の資料上の記述では、オオカミやヒグマは「未開」の象徴であり、「文明開化」を妨げる存在とされている。オオカミによる家畜被害の有無が不明確な地域であっても、この観点から排除すべき害獣と見なされていた可能性が高いといえる。

2002（平成14）年の『新旭川市史 第2巻：通史2』では、1894（明治27）年以前の上川アイヌの生活に関してエゾオオカミの子を飼育していた記録への言及がみられる。

豊蔵の回想によると、この時期にあっても上川アイヌと交易を行う商人は依然として「鈴木亀吉一人ノミ」であったという。

(略)

鈴木との交易品には鮭製品は記されていないから、伝統的な漁法で漁獲された鮭は自家消費用に貯蔵されたものであろう。近世にいうところの『飯料稼』と同様の漁撈活動である。陣羽織を着した『長者』が長官を迎える様子は、近世にあって場所の『役土人』が幕吏等を迎えるそれと変わらない。エゾオオカミの子を飼育し、激流の航行に際しては舷側を連打して安全を祈る。いずれも近世以来の伝統的な状景といってよいだろう。このように、明治中期、とりわけ給与予定地に『割渡』を受ける明治二十七年以前の上川アイヌは、伝統的文化の中でその生活を展開していたととらえられるのである。

その一方で、近代的対応の側面を確認することもできる。先に見たように、鈴木との交易では「西洋鉄砲」・「火薬」が入手されており、生業活動の一方の柱である獣皮生産の主要な手段であった毒矢の使用が、明治九年開拓使により禁止されて以降、鉄砲による狩猟へ移行していく様子が見えてくる。

ここで上川アイヌがエゾオオカミの仔を飼育する背景や状況については検討されず、元となる資料の本文中にも確認できなかった。

明治時代のアイヌ民族がオオカミ、あるいはオオカミの仔を飼育していたこと、そしてオオカミを送り儀礼の対象とされていたことが知られている。この2つの情報は自然と結びつけて理解されることもあるが、実際には、全道的に飼育型のオオカミ送りがあったのか、事例に基づく論証がされたことはない。何を目的とした飼育だったのかは議論の余地がある。とくに、明治時代にはオオカミの獲殺に対して手当金の支給があったこと、それは幼獣に対しても同様だったことも併せて検討する必要があると考える。

上川地方の多くの市町村史では、「上川離宮建設地調査報告書」にある野生鳥獣の生息状況が引用され、その内容をもって記録がある動物種と見なされていた。個々の市町村ではなく「上川」という拡大地域で全体をとらえようとする傾向があるようにも思われるが、旭川市神楽岡に関する報告書の内容が、上川地方全域の傾向をカバーできるとは考えがたい。今後の調査では、より確実な情報の掘り起こしが必要となると考える。

## [2] 留萌地方

旧留萌支庁管轄の9市町村中、オオカミに関する記述が確認できた町村は5箇所となった。既存の文献からの引用や概要をまとめた内容が主体である。

### 増毛町：産物記録と有害獣としての獲殺

2006（平成18）年に発行された『新增毛町史』には、明治時代の天塩国増毛郡でオオカミが産物として記録されたことに言及がある。開拓使の酒井忠郁は、1879（明治12）年の巡行および各地の状況について、「北海道巡行記・根室北見天塩国巡行記 乙：明治十二年（一八七九）」に詳細に記し、その中に物産・禽獣として「狼」1頭の記載があるという。

ここでは、オオカミは有害鳥獣ではなく「物産」に数えられているが、興味深いのは、『開拓使事業報告書第二編』<sup>68</sup>の「有害鳥獣獲殺及蝗害表」をみると、同じ1879（明治12）年の増毛郡の有害鳥獣獲殺としてオオカミ1頭の記録がある点である。同じ年に「物産」と「有害鳥獣獲殺」の双方に記されたオオカミが同一のものか別個のものかは気にかかる。資料上の限界から現段階では判断できないが、今後それぞれの記録を拡充しての検討を試みたい。

### 豊富町：地域的な生息数の多寡①

1986（昭和61）年の『豊富町史』は、天塩・北見の道東地方にはオオカミが少なかった可能性について論じている。

オオカミ（*Canis lupus hattai*） 本道のオオカミは家畜として移入した馬、牛、豚などを群をなして襲い、牧場経営が成り立たないほどの被害を及ぼしたことから、開拓使（道庁の前身）は捕獲奨励金（年次によって金額が異なるが、一頭につき二円から十円を支給）を出してまで、オオカミの駆除を奨励した。それが原因で明治二十年代の終りには北海道のオオカミは全く絶滅してしまった。天北一帯は冬季間オオカミの主餌であったシカがいなかったこともあって（天北一帯のシカは積雪多い冬季間は、十勝地方に移動し越冬していた）もともとオオカミの生息数が少ない地域であったが、前記の理由により、ここも明治二十年代末には絶滅したと見てよい<sup>69</sup>

冬季間にエゾシカが移動して不在となることと関連づけて、オオカミが少ない地域だったと述べられているが、とくに過去の実態を踏まえているわけではないようである。また、詳しくは後述するが、稚内市の市町村史中には、「天北」としてひとくくりにされる地域のうち、北見地方にはオオカミが多かったとする記録が紹介されている。

北半球全域に分布するオオカミは、一般的には肉食獣として知られている。しかし、実際には、ジェネラリストと称される多様な食性と高い環境適応力を持ち、赤道直下から北極圏までのさまざまな地域に適応して生き抜くことができる種といえる。そのため、北海道内の特定の地域にオオカミの生息が可能であったか否かを判断することは非常に難しい。資料や情報を用いた詳細な環境復元や、裏づけとなるデータがなければ断言することは困難であると考えられる。

### [3] 宗谷地方

旧宗谷支庁管轄の10市町村中では、オオカミに関わる記述がみられたのは4市町村となった。留萌方面と同様に、オオカミに関する記述について具体的な記述は少ない地域といえる。

#### 稚内市：地域的な生息数の多寡②

1968（昭和43）年の『稚内市史』は、1875（明治8）年に松本十郎が行った、宗谷までの巡視内容について紹介している。ただ、この巡視行および「手記」については、「北海道巡回日誌」の内容とする文献<sup>70</sup>もあるが、典拠の存在が確認できなかった。

十郎のこの巡視の路程は石狩、天塩、北見であり、枝幸まで行った。六月十三日札幌を発ち、同二十三日天塩から宗谷に入った（中略）十郎は、このとき枝幸まで行ったが、それまでの路程については

北見等一等熊狼ノ夥多ナルトコロ、海浜ノ草根掘り喰フ跡、殆ンド畑ノ区域ヲ立ルガ如キナリ。白昼ト雖モ往々見ルコトアリト云フ

と書いている。巡視の際アイヌの厚司を着たり、十勝川の濁流を素裸になって泳ぎ切ったり十郎は、厚司判官とかハダカ判官といわれ、下僚やアイヌに親しまれていたが、熊や狼の出没するところも恐れずに駆け抜け、まさに開拓判官にふさわしいものがあつた<sup>71</sup>。

北見周辺には「熊狼」が多数みられるとするこの記述は、前述した『豊富町史』における、天北一帯にはエゾシカがいないのでオオカミも少なかったらうとする理解とは食い違う。「草根掘り喰フ跡」とする記述からはヒグマの生態が想起され、実際はヒグマのみを指しつつ「熊狼」と書かれた可能性もある。

ただ、エゾオオカミについては魚や海獣類を食べている様子が江戸時代・明治時代に観察されており、必ずしもエゾシカのみ依存していたわけではない。さらに、近年では実際にエゾオオカミの一部の個体群がサケなど海産物を利用していたことが科学的にも裏付けられている<sup>72</sup>。ここではとくに海岸環境であることから、検討の余地があると考えられる。

#### 2-4. 道東

ここでは旧網走・釧路・十勝・根室支庁内の61市町村を対象とする。

## [1] 網走地方

旧網走支庁管轄の26市町村では、このうち13市町村にオオカミに関わる記述が確認できたが、網走市を例外として、ほとんどが概要的な記述や資料の引用に終始する。

### 網走市：オオカミ皮の価格と価値

1958（昭和33）年の『網走市史（上巻）：先史時代篇・原始時代』では、北見沿岸の旅行者やその旅行記について述べる中で、脅威としてのオオカミの存在に言及がある。

北見沿岸には難所は少なかったが、それは他に比較してのことで、谷口青山の説明にも見られるように、道らしい道があったわけではなく、その旅行は難渋をきわめた。アイヌの踏みかためた跡をゆけば、鹿の飛びだしてることがあり、熊や狼の危険も少なくはなかった<sup>73</sup>

この地域においても、やはり道南方面と同様に、オオカミが交通上の障害としてみなされていたことがうかがえる。過去の北海道では、オオカミは馬や家畜に被害をもたらす存在であると同時に、家畜とは直接関わらない状況であっても、人々にとって脅威となる存在として描写されてきたと考えられる。

1971（昭和46）年の『網走市史（下巻）：開拓時代篇』には、1880（明治13）年の「北見四郡物産高表」の中に含まれていたオオカミ皮について紹介がある。

アイヌの狩猟による鳥獣の肉や皮革も豊富であった。十二年書上げには、網走郡で毎年シカが二百頭ほど捕れるが、みな土人の食用であると記されている。オオカミなどもまだ残っており、その皮は一枚一円もした。クマの四～五円にはおよばないが、カワウソと同格である<sup>74</sup>

この指摘については、1878（明治11）年、開拓使による『取裁録』にみられる、根室県において「当管内熊狼ヲ獵獲スル歳々寡少ナラス」<sup>75</sup>とする文言に基づいて考えたい。

道央・道南方面では、オオカミは獲ってもたいして利用価値がない獲物であると見なしていたというが、道東方面では異なっていた。ヒグマに並ぶほどではないにしても、産物として狩猟される場合もあったと考えられ、資源としてのオオカミに対する認識が、当時の北海道内で均一なものではなかった可能性が示唆される。

## [2] 十勝地方

旧十勝支庁20市町村中、オオカミに関する記述が確認できたのは12市町村となっ

た。この地方の特徴は、被害の様子や当時の生息数に関する具体的な記述があることといえる。晩成社や依田勉三と関わる文脈に多くあらわれることから、原拠となる資料が広く普及していることによると考えられる。

### 足寄町：手当金の記録

1973（昭和48）年の『足寄町史』は、「十勝国中川郡」の産業統計資料を掲載し、そのうち安骨（チャシコツ）村には「狼 二頭 手当十四円」<sup>76</sup>と記載がある。

明治十四年には中川郡に九十二戸・五百九十一人（男二八二・女三〇九）のアイヌが住んでいて、五百八十一反のアツシを織り、五百一反を反当り六十五銭で瓜、鹿一万九百八十二頭を捕獲して一頭一円そこそこで売り、獺・狐・狼・熊などをとり、馬八頭を生産していたことになる。収入が良すぎるようであるが、これは鹿が記録的な豊猟であったためで、この年は一月から六月までの半年に、一戸平均百二十頭も捕獲している。このようなことは、わが国の狩猟史上にも例を見ない、異常な現象である。

「手当」と表現されていることから、有害獣として獲殺し届け出たオオカミに対して支給された金額が記載されていると考えられる。ただ、この安骨村以外の地域からはオオカミは出ていない。偶発的な駆除だった可能性もある。

### 池田町：「人畜が受けた被害」

1988（昭和63）年『池田町史 上巻』は、北海道内全体における獲殺制度について、その概要を述べている。

本道開拓始めの頃の畜産振興、特に牧場経営に対して大きな阻害となっていたのが熊、狼、野犬などの有害獣であった。人畜、耕作物などに被害を与える有害鳥獣の獲殺は、熊、狼、野犬、鳥などに対し励行されたが、多くの開墾入植地で被むった熊の被害は旧幕藩時代以来引続き、多数に上った。また、狼も全道にわたって棲息して居て人畜が受けた被害はわずかでは無かった<sup>77</sup>

「人畜が受けた被害」とする表現は人身被害を含んでいるようにもみえる。オオカミに対して強い害獣感をもった記述といえるが、典拠は不明である。

### 浦幌町：アイヌがオオカミを撃たない理由について

1971（昭和46）年の『浦幌町史』には、古老談話としてまとめられる聞き取り記録

の中で、アイヌがオオカミを撃たない理由について言及がみられた。1899（明治32）年に留真に入地したという川端梅吉を訪ね、開拓当時の話として、オオカミに関わる以下の情報を聞き取っている。

狼もいたが、ほとんど獲っていないという。アイヌの古老の話に、「狼は自分の神様である。狼がおさえた犬を、助けてくれと頼むと、必ず離してくれるので、決して撃たなかった」という逸話がある故かも知れない<sup>78</sup>

この前後の内容をみても、オオカミを「ほとんど獲っていない」主体が誰なのかははっきりしない。しかし、読み方によっては、アイヌのオオカミ観が和人のオオカミの捕獲に影響を及ぼすことがあったとも受けとれる。

### 清水町：狼害の有無の認識

2005（平成17）年の『清水町百年史』は、「エゾオオカミの挽歌」と題した項目を設け、エゾオオカミに関して大きく紙幅を割いて情報をまとめている。その中で、晩成社の依田勉三が1886（明治19）年に初めて牧場を開設した頃の状況が次のように説明されている。

晩成社の依田勉三が明治一九年、当縁村オイカマナイ（現大樹町生花苗）に初めて牧場を開いたころ、四、五〇頭のオオカミの遠吠えが聞こえたという記録が残っているが、牧場がオオカミに襲撃されたということはなく、十勝地方でもこれを最後にエゾオオカミの消息が絶えている<sup>79</sup>。

実際には、十勝地方でもオオカミによる牛馬への襲撃があったようだが、日高地方、あるいは後述する釧路地方と比較すると、深刻な被害事例への言及はみられない。人々の生業に影響を及ぼすほどの狼害が発生しなかったのだとすれば興味深いが、その背景や理由について議論の対象とできるほど明確な言及や情報はない。

### 【3】 釧路地方

旧釧路支庁管轄の10市町村中では、6つの市町村でオオカミに関する記述が確認できた。この地方ではオオカミによる被害状況について市町村市中で言及され、他地域と比較すると強く意識されてきたようである。とくに厚岸町では近世の事例が、標茶・弟子屈においては明治時代初期の事例が詳しく記述されている。

### 厚岸町：幕末期の人とオオカミの関わり

2012（平成24）年に発行された『新厚岸町史：通史編 第1巻』では、厚岸町国泰寺

の寺務日誌『日鑑記』にみられる記述をもとにした、幕末期のアッケシ場所における動物に関する話題の中でオオカミが取り上げられている。

野生の動物では熊と狼が登場する。熊・狼が出没し、人間や馬が被害に遭ったことはしばしば記載される（「三代霊雲日鑑記」文化十三年九月十六日<新暦十一月五日>・「七代真州日鑑記」嘉永三年十一月十七日<新暦十二月九日>など）。秋から冬にかけてのことなので、餌を求めて人里に出てきたための出来事であったのかもしれない。狼は「山犬」とも表記され、アイヌが二匹の「地犬」を連れて駆除したことが見える（「五代文道日鑑記」天保七年八月二十日）。「地犬」は北海道犬（アイヌ犬）のことであろう。蝦夷狼は明治の後半に絶滅したとされるが、絶滅の半世紀ほど前の様子を記すものとして注目されよう。このころは、狼は人間と遭遇する頻度が比較的高かったことも知られよう。

熊・狼などの駆除は殺生行為であるが、そのことに批判めいた記述はなされていない。

（略）

なお、日常的に目にしていたであろうエゾシカやキタキツネなどの記載が見られないのは、それらは害獣ではなかったからなのかもしれない。ただ、栽培作物に対するエゾシカの被害記録が見られないのは、当時は山中に鹿たちの食糧が豊富であり、オオカミなどの天敵により適正な数が維持されていたためと考えられる<sup>80</sup>。

『新厚岸町史』の資料編に収録されている「日鑑記」の内容を確認したところ、オオカミに関する記事は「五代文道日鑑記 16」と「七代真州日鑑記 2」に1件ずつ確認できる。

「五代文道日鑑記 16」における記述は、アイヌによるオオカミの「駆除」とされている。1836（天保7）年8月の「領内廻島日鑑記」における「ヲツチシ番屋」における目撃の記述である。

一、今朝当番家ニ而死したる山の犬始而一見致し候処、右山の犬臥し居候処、地犬弍疋夷人召連けしかけ喰殺させ候与申事ニ御座候<sup>81</sup>

「山の犬」はオオカミの別称とされている。これに「地犬」をけしかけた理由が不明ではあるが、廻勤中の記述者がオオカミをはじめて見たと述べていることと合わせて興味深い事例といえる。アイヌ民族が飼育するイヌがオオカミに襲われることがあったことは知られていたが、アイヌが飼い犬をオオカミにけしかけて殺させる事例はまったく知られていない。

「七代真州日鑑記 2」には、1850（嘉永3）年にウマを襲ったオオカミと、それに対する人々の対応のそれぞれの描写が確認できる。

十一月十六日

詰所会所之近所へ狼二疋程来迎、夜中頻ニ鉄砲ヲ発威之。

十七日

先達而中々近所之山ニ狼之足跡アリ。馬茂少損有之ニ付、会所ノ廻江不殘引出集置候処、右ヲ伺ニ昨夜出タル由。今朝足跡鎮守下通ノ浜・台場道・会所井泉ノ奥、所々改見出候趣、早朝右ヲ遠走追退之為通詞和夷人数十人召連、三方江手分ケシ太鼓ヲ打、玉込ノ鉄砲頻ニ発、山江所々少宛放火追退之、今夜近所へ不出<sup>82</sup>

この記述からは、現れたオオカミに向けて太鼓をならし、玉込め済みの鉄砲を頻りに放つ盛大さ、さらに山に火を放つという徹底した対応ぶりがうかがえる。鉄砲についてはウマを襲うよりも前、姿をみせた段階から威嚇のためにオオカミに向けて発砲されていた。しかし、それでも被害を防げていない。

この事例は、江戸時代後期には、すでに人とオオカミのあいだには家畜被害とそれに対する捕殺という形で軋轢が生じていたことを明確に示している。これまで、オオカミによる被害としては、明治時代以降、とくに近代的な牧畜業が開始された後のもののみが広く知られてきた。しかし、実際には、それ以前からオオカミに対する捕殺が行われ、害獣視もされていたと考えることができる。明治時代以降の躊躇のない捕殺、集団全体を根絶やしにするような捕殺圧をかける事態とのつながりを断じることができないが、その前段階として、害獣とみなす意識は存在していたことが確認できたといえる。

### 標茶町：生業に影響する規模の狼害について

1978（昭和53）年の『標茶町史考：後篇』には、1883（明治16）年に「豺狼」がウマを襲い、24頭に被害を出したことが紹介されている。

佐野孫右衛門が明治九年に跡佐登硫黄山の試掘の許可を得て、この本格的採掘に着手した時、硫黄を釧路まで搬出する方法として、山元から標茶まで駄背による方法をとった

（略）

この駄送のために、箱館を中心として馬産の先進地江差、福山、鹿部、値田内、白老等道南地方から当時の有料馬を移入したのは既述の通りである。

明治十六年を記録した河野文書に

「人夫百二十人、馬二百頭、舟十一艘ヲ使用ス」とあり、根室県赤壁二郎、酒井純明の明治十六年巡回記録に、釧路より塘路を経て熊牛に向う際、

「標茶ヨリ陸路熊牛村此間四里許ヲ経テ熊牛台（現在の磯分内、南弟子屈付近）

ニ至ル道のり凡五里総テ佐野孫右衛門ノ修設ニ□ル現ニ百□頭ノ硫黄ヲ駄送スルヲ見ル」と述べ、更に「佐野氏所有馬百四十頭馬追人ノ所有馬五十余頭、飼料ハ皆此平野ノ草ニ□ル豺狼馬ヲ害スル事一特ニ甚ダシク死傷已ニ二十四頭」と記している。当時の標茶附近には河岸に数戸の旧土人の茅屋や物置、倉庫があるのみで、全く無人の境であった。鬱蒼たる原始林の小径を、硫黄の吠を背にした駄馬が一群又一群と延々二十数群続き、これに赤壁等県官の一港が遭遇したのである<sup>83</sup>

これとは別に、1998（平成10）年の『標茶町史 通史編 第1巻』には、母馬をオオカミに喰い殺され、自身も肉を食い取られた子馬について「熟視スルニ忍ヒス」と言及する日誌の内容を紹介している<sup>84</sup>。

開拓期の生活や産業にウマはなくてはならない存在であり、とくに釧路地方では民馬に対する深刻な被害の様子が記述される。従来の狼害に関する情報とは様相や印象が異なる事例が多く紹介されている。

#### 弟子屈町：馬を襲うオオカミの描写

1949（昭和24）年の『弟子屈町史』は、オオカミは人家の前までウマを追ってくるような状況にあったことを紹介する。

この狼の為硫黄運搬の駄馬が荒されたことは先の報文にも見える通りであるが、実際はもつとひどかつたらしく、当時駄送に従事してゐた人の話によると、一晚に五頭も六頭も斃され、しまひには家の前までも追つて来て馬を斃すといふ有様で、とても駄送の仕事ができなくて引上げてしまったといふことであるところをみると、高山鉄道の敷設を促進させたかげの力として、或いはこの狼の被害も全く縁のないことではないかとも想像されるのである<sup>85</sup>

標茶町の市町村史中にみられた記述内容とあいまって、オオカミがもたらす被害の実情を具体的に想像させる描写といえる。当時のウマはさまざまな作業における動力であり、移動・移送手段でもあった。その存在を失うことで、生活が成り立たなくなるような状況も生じていた。ここではその結果として、オオカミの被害を受け付けない鉄道が導入された面もあるのではないかと述べているが、町史が編まれた1940年代には、いまだオオカミと人との共存の困難さが強く認識され記憶されていたことがうかがえる。

#### [4] 根室地方

旧根室支庁管轄の5市町村中、オオカミに関する記述が確認できたのは、2市町のみ

であった。また、どちらも概要的な記述である。

### 別海町：オオカミとシカの関わり

1978（昭和53）年の『別海町百年史』では、エゾシカの衰退について述べる中で、エゾオオカミに関する記述が確認できる。

エゾシカは奈良の鹿よりも体格は一廻り大きい、体型はスマートで、とくに雄ジカの角は立派で、ヒグマやキツネ等よりも人に好感を抱かせる動物である。かつては、北海道の山野には、この平和な動物が多数群をなして生息し、人間に美味しい肉を提供していたという。明治初期にはシカ肉の缶詰が生産されていたほどであったというが、このエゾシカの衰退は、乱獲と明治十年代の記録的な大雪で、そのとき推定十萬頭にもものぼる鹿が餓死したといわれている。

このエゾシカの大量餓死は、根室地方でも同様であったらしく、開拓の初期にはシカの骨と角が散乱して耕作に大いに苦勞したという口伝が残っている。またエゾシカを獲って生きていたオオカミは餌動物の減少を境に絶滅へと歩んでいったといわれる。

エゾシカはその後も絶滅の危機が何度か訪れたが、オオカミの絶滅ときびしい保護策によってしだいに増殖し地方によっては雄鹿に限って捕獲が許可されるようになって<sup>86</sup>

本稿で調査対象とした市町村史で、1970年代にオオカミが絶滅したことでエゾシカが「増殖」した、として両事象を関連づけて指摘しているのは、この『別海町百年史』のみだった。一度は減少したエゾシカが再び増加してきたことが早い段階から意識できる地域であることと関わりと考えられる。

市町村史中にあらわれるオオカミに関する記述は、やはりエゾシカの生息数の多寡と関連づけられる。絶滅過程も同様である。しかし、地域によってエゾシカの生息数の増減には違いがあり、オオカミの動向のすべてを餌動物であるエゾシカと関連づけた議論のありかたが妥当なのか、検討する必要もあると考える。

以上、市町村史中に確認できたエゾオオカミに関する記述を整理してきたが、和人との関係性について、これまでには知られてこなかった事例を多々確認することができた。また、市町村史は、和人が自分たちの暮らす地域の歴史についてまとめた資料といえるため、アイヌ民族とオオカミの関わりについて言及する事例は期待していなかったが、想定していたより多くの記録が確認できる結果となった。ただ、何らかの議論に供することが可能な数ではないため、アイヌ民族とエゾオオカミの関係性を分析・検討するためには別の資料と併せて利用する必要がある。

和人側の記録としても、決して充分といえる分量ではない。あくまで地域の歴史の

記録であるため、全体としての背景や細部が不明確な例も多い。しかし、これまではウマを襲う害獣としての側面ばかりに焦点を当てられてきたエゾオオカミについて、より多様な検討に取り組むために必要な情報は得られたと考える。

### 第3節 エゾオオカミと人との関わり

前節まで、市町村史中にみられるオオカミの記述について、地域ごとに展開して整理を行ってきた。本節では、ここまでに確認できた事例と情報について、従来の定説的な言説との比較検討を行いながら、「和人とオオカミの関係性」および「絶滅経緯」についてまとめていく。

#### 1. 和人とオオカミの関係性

市町村史における記述をみると、北海道における和人とエゾオオカミの関わりは、オオカミがもたらす被害の程度を軸として展開していたと考える。とくに、エゾオオカミによる被害は、[1] 家畜である馬をめぐるもの、[2] 人的被害、この2つに大別することができる。

エゾオオカミがもたらす人的被害については、これまでほとんど注目されてこなかった。家畜被害は激烈だったが、人に直接の危害を加えた明確な記録が残っていないため、人身被害の不安はなかったと理解する向きもあった。また、第1章で言及したように、日本のオオカミについては「人を襲うオオカミ」のイメージは誤ったものであるとする前提に立った議論が行われてきた歴史がある。そうした背景と、そもそも検討対象となる事例の少なさがあいまって、これまで和人にとってのエゾオオカミの危険性は、議論の対象とされてこなかったと考えられる。ただ、直接危害を加えられることがなければ、人的被害は「ない」と言い切れるのだろうか<sup>87</sup>。この点について、以下ではエゾオオカミによる被害を区分し、個々に検討する必要があることを提示する。

##### 1-1. 北海道の馬とエゾオオカミ

これまで、エゾオオカミは明治時代になって牧場に囲い込まれた牧馬を獲物と見なして執拗に襲うようになり、そのことが契機となって、和人とエゾオオカミのあいだに深刻な軋轢が生じたと理解されてきた<sup>88</sup>。その背景として、明治時代に入ってから和人によるエゾシカの乱獲が起きたことがあげられていた。乱獲にくわえて大雪による餌不足や行動阻害の影響を受けたエゾシカの頭数が激減し<sup>89</sup>、エゾオオカミは獲物を求めて牧場のウマを狙うようになったのだらうと論じられてきた。

現代的な視点に立ってみると、大雪はさておくとしても、毎年数万頭規模でエゾシカを狩猟し、際限のない乱獲の対象としたからこそエゾオオカミが通常は想定できないほどの被害をもたらす、悪因悪果と呼べる状況が生じたと思いたくなる。また、そ

の結果として、オオカミを絶滅させなければ牧場経営が立ちゆかないとする意見<sup>90</sup>が受容され、公的な駆除・獲殺制度が敷かれた。さらには、アメリカでオオカミの駆除に利用されていたことが知られる毒薬「ストリキニーネ」<sup>91</sup>を、海外から取り寄せてまで開拓使が確保し、ウマの死骸に塗布することで北海道内のエゾオオカミを根絶することにつながった<sup>92</sup>。非常に納得しやすい経過、スムーズなストーリーが形成されてきたといえる。

しかし、その一方で、本稿における調査の結果、エゾオオカミによるウマへの被害は、江戸時代から確認できることがわかった。エゾオオカミは、エゾシカが減少した明治時代になってはじめてウマを獲物とみなすようになったわけではない。遅くとも幕末期には、エゾオオカミは和人の居住地に侵入してウマを襲い、害獣とみなされていた。接近するエゾオオカミに対して、和人側は鳴り物、手槍、ときには火や鉄砲をもって追いはらい、駆除してきた。本稿では、限られた事例からではあるが、その「前段階」としての状況が展開していたことを明らかにすることができたと考える。両者の間に、従来考えられてきたよりも長く緊張関係、敵対する状況が生じていたのだとすれば、それをもとに従来の理解に検討を加える必要があると考える。

## 1-2. 市町村史に見る狼害の様相

明治時代のエゾオオカミによる家畜被害については、全道的に被害が発生する状況にあったと考えられる傾向が強かった。被害状況や経過にインパクトのある新冠御料牧場の事例はよく知られ、日本における人とオオカミの関係性を示す事例としてだけでなく、北海道史や産業・牧畜史などの中でも多々言及される。道内全域でこれと同様の規模の大きな被害状況が発生したために、制度としてオオカミの駆除・獲殺が必要だったとみなされてきた。

しかし、実際に市町村史の記録をみていくと、オオカミの被害には地域によって偏りがあったと考えられる。これは、先行研究における指摘<sup>93</sup>を裏付ける結果でもある。くわえて、同じ地域内でも環境によってオオカミの被害に強弱があった可能性もある。石狩地方には、オオカミが多く生息していたとする言及もみられる中で、「被害がない」ことを理由として放牧地として利用されていた地域も存在していた。北海道への入植・開拓にあたって、人々は手当たり次第に土地を切り開いていたわけではない。獣害が起きうるかどうか土地利用における条件として検討されていた。

家畜被害に関する記述の内容をみると、オオカミによる家畜被害として、新冠以外の複数の地域で、ウマに対する数十頭規模での被害が起きていた。弟子屈町では、オオカミは人家の前までウマを追いかけてきて襲っていたとされていた。また、オオカミは捕らえやすい仔馬や仔牛を積極的に獲物と見なした可能性が高いが、体の一部が欠損した、あるいは大きな傷を負って半死半生となった状態を目にして「熟視するに忍びず」と称した例もある<sup>94</sup>。そうした記述が市町村史中に引用されるのは、過去のエゾオオカミによる被害の実情について、感情をとまなう理解が得られるためだろう。当時は、オオカミがもたらす被害の大きさにより、ウマが主体となる駄送の仕事がで

きる状態にないと判断し、入植した地域から引き上げる人々も出ていたという。この記述からは、ウマを失ったことによる経済的な損失に加え、仕事を断念させるほどの精神的なダメージを与えていた可能性もうかがえる。また、人の眼前であつても家畜を襲うような状況は、オオカミに対する人々の恐怖感をより強化し、煽る結果につながっていたと考えられる。

エゾオオカミによる家畜被害には多様な側面がある。当時の人々にとって、ウマは財産としての価値をもつ家畜というだけではなく、遠方への移動・移送手段であり、開墾作業や生業において欠かすことのできない動力でもあつた。その存在を失うことは、人々に精神的な影響をもたらし、仕事を奪い、地域から人口を流出させる結果にもつながっていた。当時の人々の情動を記録・数値の上からうかがうことはできないが、多くの場合は新たに入植したばかりの土地でそうした事態に直面していただろうことは、北海道における人とオオカミの関わりを考えて行くうえでは重要であり、意識される必要があると考える。

### 1-3. 蝦夷地のウマの飼育形態とその変化

エゾオオカミがウマを「獲物」として認識するための環境もまた、明治時代以前から徐々に形成されてきた可能性がある。北海道内では、江戸時代にはすでに1万頭を超えるウマが飼育されていたという。

道路が悪く、海上の交通機関が未だ発達しなかつた當時に於て、馬は交通上、拓殖上極めて重要なものであつた。故に本道に於ては、舊くより馬を飼育し、又前幕領時代に於ても是が繁殖普及に努めたので、文政五年の有珠岳の噴火により、及び弘化二年二月の大雪等により、有珠・虻田牧の馬を多く失ひ、又其飼育法は頗る原始的なものであつたに拘らず、次第に増加し、安政年間には既に一萬餘頭に達して居た<sup>95</sup>

ここで「其飼育法は頗る原始的」と称されている飼育形態は、いわゆる「野飼」を指す。文字どおり、厩舎などではなく野山に放たれた状態が通常で、それでいて人が飼育者・管理者の立場にあるという飼育形態である<sup>96</sup>。

江戸時代の北海道において、ウマは、夏期になると人に捕らえられて荷物の運搬や乗馬として利用されるが、冬期になると野に放されて自力で冬を生き抜く「半野生馬」であつたという。現在「北海道和種馬（いわゆる道産子・道産馬）」と呼ばれるウマのルーツは14世紀後半頃まで遡ると考えられている<sup>97</sup>。毎年、漁期になると東北地方からの出稼ぎ漁民がウマを連れて渡海し、道南、道東での海産物運搬のために利用する。しかし、漁期が終了して引き上げる際には、連れてきたウマを山野に放って帰った。放たれたウマは山野の野草や枯れ草などを食物として冬を生き延びる。そして翌春まで生き残っていたウマは、漁期の開始と共にふたたび戻ってきた漁民によって捕らえられて使役され、秋にはまた山野に放たれる。こうした状況が続くうちに、ウマは自

然に繁殖するようになり、北海道の冬季の環境にも耐えられる性質を備えた個体が増え、現在の道産馬の祖先が形成されたという<sup>98</sup>。

さらに時代を下り、和人の本格的な定住が開始されてからも、蝦夷地のウマは必要なときは人がとらえて使役する家畜でありながら、農期・漁期が終わると野山にはなたれる「野馬」として生きる半野生馬であり続けた。最上徳内による「蝦夷草紙」〔寛政2（1790）年〕にも、「松前所在島一國は、牛馬を飼ず。野飼して飼いおくなり」<sup>99</sup>とする言及がみられる。近世期に北海道島内を旅した人々の旅行記や紀行文には、外にもこうしたウマの存在が多々描写・言及されている。

なお、北海道の歴史の中で、こうした飼育形態に置かれていたウマが、ヒグマ、オオカミ、アイヌ犬による被害を受けていたことはよく知られている。市町村市中でも、同一の記述が多く確認できた。この典拠となるのは次の記述と考えられる。

馬は、和人の居住地に於ては、人民が随意に之を飼育して居たが、蝦夷地にあるものは皆各場所の備馬で、悉く官有に属し、官より場所請負人に委託されたものであつた。而して各場所の備馬は、漸次増殖して、安政元年には東蝦夷地千六百四頭<安政元年巡見記>西蝦夷地留萌以北四場所百八十七頭<村垣公務日記に據る、各場所調によれば百六頭>となつて居たが、場所請負人は多く馬の増殖を厭ひ、或は是を虐使し、且つ四季放牧して、管理・飼育を怠つたため、馬體は漸次退化して瘠小となり、又冬期大雪に會ふ時は食物を得る事が出来ずして斃死するものが多く、其他熊・狼等の害を被り、或は蝦夷犬に咬殺されるものも少くなかつた<sup>100</sup>

この『新撰 北海道史：第二卷通説一』の記述を利用して、ウマ、オオカミに関する記述を行っている市町村史は散見されるが、エゾオオカミ側の議論に参照される機会はほとんどない。

野飼形態によるウマの飼育は、明治時代まで続けられたが、そのあいだにこれら野飼のウマが農業被害をもたらすこともあり、害獣として位置づけられることもあったという事実は興味深い。開拓期の状況について、『登別町史：開基百年記念』には次のような記述がみられる

この頃の開拓者の暮しにふれてみる。家屋や食物が不自由であつたのは当然のこととして、開拓当初は今では想像もできない苦勞があつた（中略）熊や鹿の害は実にひどく、熊に対しては一頭三年の獲殺手当が出されている。放牧の半野生馬にも苦しめられた。かわつたものではからすがいる。からす一羽四錢、からすの卵一個四錢の手当を出して退治に努めた<sup>101</sup>

ここでは野生の鳥獣による被害と「放牧の半野生馬」による被害が併記され、両者を同一視していると考えられる。開拓・開墾におけるウマの存在の重要性にはすでに言

及した。しかし、明治時代の北海道において、ウマは使役する家畜であると同時に農作物を食い荒らして被害をもたらすという、さらに多面的な存在であったと考えられる。

なお、ウマによる農作物への被害について言及する例は江戸時代から確認でき、野飼状態の牛馬の多さや、その被害を防ぐため柵を設置する必要があったことに言及される場合もある。

#### 1-4. 北海道の野生動物が置かれていた状況

松浦武四郎の旅行記には、幕末の渡島半島における野飼の牛馬に関する記述が確認できる。たとえば、「初航蝦夷日誌 卷之五」では「野飼の馬并牧牛多くし而初而此道を通るもの驚かざるはなし」<sup>102</sup>とし、「初航蝦夷日誌 卷之四」では「畑には柵を高く結たり。是は馬を皆野飼にするが故ニ其の入らぬやうニ結しもの也」<sup>103</sup>とも言及がある。野飼の家畜による農作物の食害を防ぐためには、畑の周りに高い柵をめぐらせる必要があったという。

こうした状況を鑑みると、家畜と野生動物のあいだを行き来する半野生馬は、野生動物にとって利用しやすい獲物となっていた可能性が考えられる。実際に、江戸時代のヒグマによるウマの捕殺事例は枚挙に暇がない。木村謙次による「蝦夷日記」には「稀ニ木草とりニ行時件ノ熊草ノ深キ所に潜ミ近付テ馬ヲ窺片手ヲ延馬ヲ握ミかつき手足三本ニ而山へ走去ルト云」<sup>104</sup>という記述がみられる。和種馬のなかでも小型の道産馬は、ヒグマにとって捕らえやすい獲物だった。ウマの分布域はおそらくは和人地の周辺だったと考えられるが、当時の生態系においてエゾシカとニッチを共有していたとも考えられる。

従来、エゾオオカミはエゾシカを主要な獲物としてきたと理解されてきたが、一方でエゾシカは決して常に安定した生息数を保つ存在ではなかったことも知られている。市町村史中では、『木古内町史』に次のように過去の状況と典拠がまとめられている。

鹿は昔おびただしく生息していたので、蝦夷は弓または仕掛弓やわななどでこれをとった。そして肉は食用とし、とくに鮭とならんで冬季の重要な食料であり、皮は衣服とし、余りがあると売却した。正徳のころ鹿の数は著しく減少したというが、のちまた繁殖し（正徳五年追而差出候書付）、寛延二年正月、松前資広が西野に狩りをしたときは、獵夫五百八十人を使って、八十余頭の鹿を得たという。天明のころふたたび減少し（平帙東著作 東遊記）、世俗では南部、津軽に渡ったためだといっているが（申原正峰著 夷諺俗話）おそらくは大雪のため餓死したものであろう<sup>105</sup>

エゾシカが、人為的な影響を受けなくても、冬季大雪などの影響により個体数を大きく増減させることがあった事実については、現在では広く認識されている<sup>106</sup>。気候や環境的な影響を受けてエゾシカが増加と減少を繰り返す中であって、エゾオオカミは

シカを除くほかの陸獣、魚や海産物など異なる食糧源を利用して生残してきたと考えられる。その中で、ヒグマと同様に半野生馬を獲物とみなして利用していた可能性もある。

エゾオオカミがもたらした被害の大きさが知られる新冠の御料牧場で飼育されていた官馬<sup>107</sup>に、もともとはこうした野にあるウマだったとされている。

静内地方には野馬といって、野生の馬が群をなして山野を横行しており農作物に大きな被害を与え（中略）開拓当初の開拓者がいかにこの野生の馬に悩まされたかを物語っている。明治五年開拓使が新冠牧場を創設したのは北垣国道が日高沿岸を巡察した債、静内地方が牧野に適していることを知り、これを黒田長官に進言した結果によるものである。面積およそ二億余万坪を撰び、当時日高管内に散在していた野馬二千二百六十二頭を集めて放牧したのであった。これにより野馬の被害も防ぐことができた<sup>108</sup>

かつて半野生下で生きてきた北海道の野飼のウマは、次第に牧場に集められて人の管理下に置かれるようになり、やがては存在しなくなる。エゾオオカミに関する議論の多くは、北海道への家畜ウマの導入は明治時代になってからだったという前提に立てなされてきた。しかし、これは過去の状況を正確に反映していない。そうした認識が生じたのは、明治時代以降に野飼のウマが急激に数を減らし、その存在が認識されなくなったことと関わるのではないだろうか。

松林順らは、北海道内のヒグマの歴史的な食性がこの200年で大きく変容したことを指摘する<sup>109</sup>。中でも道南地方のヒグマの個体群は、食物資源利用全体のうち陸上動物の利用の割合を過去の56%から5%にまで減少させてきたという。ヒグマの大規模な食性変化は、明治政府による開発の本格化に起因する生態系の変化、そしてエゾオオカミの絶滅が影響したことによると論じられる。

**Brown bears in Hokkaido are rarely capable of hunting adult deer by themselves; however, studies in Yellowstone ecosystems have shown that bears can usurp wolf-hunted ungulates when bears and wolves inhabit the same location because wolves cannot compete against larger brown bears<sup>110</sup>.**

ここでは北米イエローストーン国立公園におけるオオカミの生態研究の結果を参照し、ヒグマとエゾオオカミが同じ地域に生息する場合には、ヒグマがオオカミの獲物を横取りすることで食物資源を得ていた可能性を検討している。北海道のヒグマが肉食から草食へと食生を変化させたのは、元来肉食であり、積極的にシカを狩って利用していたエゾオオカミの絶滅が間接的に作用したと推測されている。

しかし、ヒグマの食性変化には、エゾシカと同時に野飼のウマが存在しなくなったことも無関係だったとは思えない。また、この報告をみるかぎり、ヒグマの食性変化

とエゾシカ生息数の増減には関連性がないと考えられる。現代、エゾシカは生息数を回復させ、その増加、過密化による植生への影響が問題化している<sup>111</sup>。人が適切にマネジメントしていくことが重要視されるほどの状況にあるが、ヒグマの食性には影響していない。その一方、近世期の記録には、野飼のウマを捕食するヒグマの様子が多々残されている。エゾオオカミがエゾシカを主要な獲物として利用できていただろう状況でも、ヒグマは積極的に狩りをして獲物を得ていた。明治時代にも、ヒグマ自体がウマを襲う害獣として認識され続けていた。そうした状況を鑑みると、かつて、半野生馬は北海道の自然生態系・食物網を構成する一員であり、ヒグマにとって、ひいてはエゾオオカミにとっても食糧資源として多々利用されていた可能性が考えられる。

### 1-5. 野飼いの馬の減少

明治時代に問題視されたエゾオオカミによる「牧馬」に対する捕食は、人が北海道内のウマの管理方法を改めた結果だったといえる。半野生馬が多数生息し、エゾオオカミがそれを通常の獲物として認識していた場合、エゾシカの減少によってオオカミが「やむなく」捕食対象をウマに切り変えたという前提は再検討される必要が生じると考える。過去の北海道で、もともとウマがエゾオオカミの主要な獲物のひとつとして存在していたのであれば、エゾシカが減少する一方でウマが残っている状況において、オオカミやヒグマは当然のようにウマについたのではないか。

厚岸町の記録をみるかぎり、北海道内でも江戸時代からエゾオオカミが野にあるウマを獲物とすることがあった。また、本州以南でも、オオカミは放牧されたウマを襲うことが知られていた。さらには、当時の北海道における「牧場」は、単に原野や原生林の一部を柵で囲ったにすぎない環境だったという<sup>112</sup>。そうした環境にあって、野にあるウマを一箇所に駆り集めて集合させる一方で、被害防除のための対策が充分ではなかったらしい点は不可解である。被害を予測できなかった、あるいは必要な対策が事前に講じられないままだったのは何故か、議論が必要と考える。

1967（昭和42）年『登別町史：開基百年記念』には、「古老談話」の中に明治期の馬の害、エゾシカの減少、牧場の実態について言及した箇所がある。やや長くなるが以下に引用する。

古老座談会

幌別会場

とき 昭和四十年五月二十日

（略）

三好 鹿の話ですがね、これは私日野久橋さんからよく聞いているんですが、人がたくさん入って来たからいなくなったということではございません。大雪が降ったことがあります。その前に官馬、あとで官馬と分かったのですが、誰れの馬か持主のない馬、雄と雌とはなしたものですから、子っコが増えるでしょう。そうすると、駒にはつかないが母馬がくればとねっこも

ついている。二歳っ子もついている、はなはだしい時は三歳っ子もついている。そんなものが帰ってくると、ついて来たんだからこれは俺の馬だ(笑い)ということでした。そして畑を少しつくっても、馬や鹿が来て畑を荒らして作物がとれなくなると、旧仙台藩士の人がいついた。馬のことは道庁のほうで、誰の馬ともつかないものを売ったって売れないので、それで集めたんです。白老の萩野にね。官有の牧場というものをこさえて、そこへ集めたものが、幌別ばかりでなく、ほうぼうから集めたものが大体一千七八百頭あったそうですよ、官馬としておいてあったそうです。野生といっても、ほんとの土産子の馬が……。それが大雪の降った時にどうにもならなくて、ほとんどまいったわけで、その時に鹿もまいったのだそうです。

司会 何年頃ですか？

三好 それは明治十何年ですよ。

司会 十年代ですか？

前川 宮武の爺さんの書いたものには、誰のものとも分からない馬が畑を荒らして困る。何百頭という馬が出て来て荒らして困る。やはり三好さんのいわれたように今でいう道の方で始末してくれたということですね。

司会 買い上げたんでなくて、ただ集めてそこへもってたと……

三好 欲しい人がくれというと、くれるんですから(笑い)

司会 なかなかおもしろいですな。

(略)

司会 そもそも最初は人間が使ったものなんでしょうね、その馬は、

三好 それはそうでしょう。

司会 そうして柵をしないで放しておった、と……

佐野 駅通用として、官馬として来た馬です。

司会 それが放しているうちに野合して、増えていったと……

佐野 駅通用の官馬が幌別に四十頭くらいおった。使い道がありますから、そのくらいはあずかってたわけですがそれ以外は性の荒い馬というものは野放しにしておきましたので、それがどんどん増えまして、始末に困って一ヶ所に集めてもらうようにしたが、それでもまだ沢山残っていたんです。やはり鹿がいなくなったのと同じ年に、全部死んでしまって、来馬川や幌別川に死体が山を築いていたそうです。その時には、雪が深くて笹を掘って食うことも出来ませんので、来馬川や幌別川にまよい込んだのだそうです。そうして川縁にあるくわの木を三・四寸くらいまで食べたそうです。

司会 皮をですな。

佐野 幹をです。それですから、いかに自分が生きなければならないかということは、動物でもすごいものだということを私らが感じました。

大雪によりエゾシカの大量死が起きたことはよく知られているが、ウマもまた同様の事態にあったことがわかる。野生動物の動態を考えるためには、エゾシカだけでなく、ウマもまた明治時代初期に激減していたことを考慮する必要がある。エゾオオカミは、エゾシカの激減によりウマを「新たな獲物」とみなしたのではなく、もともとエゾシカとウマのどちらも利用していたが、両者がともに減少した中で、人の保護下でより多く生残したウマの利用を続けようとした可能性も考えられる。

以上は市町村史中に確認できた情報のみによる推測の域をでない議論だが、明治時代の北海道で野生動物が置かれていた状況については、野飼のウマを含めてあらためて検討していく必要がある。エゾオオカミおよびヒグマによる甚大な被害を受けたという牧場だが、石狩市の市町村史中にみられたように、もともとはヒグマやオオカミによる被害を受けにくいとみなされていた地域だった可能性もある。より多くの対象とそれぞれの事情に目を向け、過去の状況を検証していかなければならないと考える。

#### 1-6. 益獣・神獣とみなされなかったエゾオオカミ

野飼のウマが農作物を害する害獣としての面も有していたことは前述のとおりだが、この状況は、日本人のオオカミ観を検討するうえでも興味深い。本州以南のニホンオオカミは、家畜を襲う点では「害獣」と見なされるが、農作物に被害をもたらすシカやイノシシなどを獲物として狩り捕食するという点では、農民にとって「益獣」としての面をもつと位置づけられてきた。この位置づけが、日本の「狼信仰」を支えてきたという<sup>113</sup>。

一方、北海道では、畑を荒らす害獣には、野生のエゾシカ、ヒグマに加えて野飼状態の家畜が含まれていたことになる。

河津組頭は官園を設け、松、杉、クワ、コウゾなどの苗木を仕立て、これで垣をつくって牛馬の入るのを防ぎ、安政四年には内部を開墾して苗木、薬草などを植え薬園と称した<sup>114</sup>

とくに所有者がいない牛馬がもたらす被害は、野生動物がもたらす作物被害と同様に補償や補填を期待することができないものと考えられる。こうした被害に対して、害をもたらす家畜の側を管理するのではなく、柵や垣を設けることで被害を防除しようとしていた様子も、野生動物への対応と共通する。

道南の和人地では、本州以南と同様に畑作が営まれ、その畑が野生あるいは半野生の獣によって荒らされる事態が起きていた。しかし、いずれの地域でも、こうした害獣を防除する視点からエゾオオカミの存在に注目した例は確認できなかった。

なお、市町村史中には、害獣としてヒグマを祀ったとする例があらわれる。

ヒグマは明治の末頃までは町内の至る所に出没し、人畜に危害を与える唯一の猛獣のため、人から恐れられていたばかりでなく、秋の多食期には農作物をも食い

荒らし相当あばれまわっていた。古老によると、「明治三十四年頃、家のまわりにクマが出たため、ガンガンをたたきながら便所に入った」（石狩高岡，松田 清氏談）とか、「明治三十五年頃，クマが作物を荒らして困るので，熊の神社を作り祭った」（高岡五ノ沢，岩本宗吉氏談）とか「明治三十八年頃，六歳の時，家で餅を作っている時，クマが家の中に入ってきたので母親に抱かれて逃げた」（美登位，新居徳市氏談）とか，クマにまつわる話は多い<sup>115</sup>

エゾオオカミに関しては，このような「鎮める」ための形でも，農作物を荒らす獣を狩る益獣としての形でも，信仰の中に取り込まれた様子はみられない。前述した『浦幌町史』中には，アイヌ民族がオオカミを神として位置づけていること，そのオオカミ観の影響を和人が受けることがあった可能性をうかがわせる事例<sup>116</sup>がみられたが，広く一般的な傾向としてみられたかどうかは不明確である。『大野町史』においては，馬を襲う害獣として馬頭観音が怒りを向ける対象にこそオオカミが含まれたいと推測がみられ，害獣としてのオオカミが和人の信仰形態の中に位置づけられていたといえる。

これまで，本州以南の狼信仰が北海道に伝播・展開した可能性を検討した例は確認できていない。エゾオオカミが和人にとって益獣と見なされなかった背景については，北海道では明治時代まで農業が展開せず，そのためにエゾシカは皮や肉などとして利用に供される資源であり，人とエゾオオカミはその存在をめぐって競合する関係にあったためではないかと考えられてきた。しかし，本研究における調査では，本州以南と同様に野生鳥獣による農業被害に言及がある一方で，北海道に移り住んだ和人が，益獣，あるいは神獣としてエゾオオカミを位置づけた事例は確認できないという結果となった。オオカミの存在に対して，ただちに名称として結びつけられる「大神」，あるいは益獣としての位置づけが想起されるわけではないようである。

ただ，エゾシカと同様に農業被害をもたらしていたことで知られる野飼の牛馬については，「半野生」という位置づけにあることから，それを襲って利用するエゾオオカミの立場を単純に「益獣」とはみなすことができなかつた可能性もある。エゾオオカミが作物を荒らす野馬を襲った場合，構図としては作物を荒らす害獣を捕食したのだとしても，人からは「家畜を襲った」と認識されるという複雑な構図を描くことになる。

## 2. オオカミによる人的被害

オオカミによってもたらされる被害は，おもに家畜を襲うことによってもたらされる経済的な被害と，人を殺傷する直接的な人身危害とに大別される<sup>117</sup>。人はこれらの被害に対して防除や駆除を行い，そこに人とオオカミの相互の軋轢が生じることになる。しかし，市町村史の記述を整理する中では，人とエゾオオカミが遭遇した場合，直接的な危害・被害に限らず，より多様な形での影響が存在したのではないかと考えられる。

## 2-1. 脅威としてのエゾオオカミ

明治時代初期の北海道では、エゾオオカミと人とが遭遇する機会が意外に多かったようである。現代では、人と野生動物が共存していくためには両者の空間的な住み分けが前提となると理解されているが、本格的な開拓・切り開きが行われはじめたばかりの時期の北海道では、その前提がそもそも成り立たない状況にあった。市町村史中の記述をみると、道路開削・工事などのためにエゾオオカミの生息地に踏み込まなければならない状況では、人々は常にエゾオオカミ、あるいはヒグマの存在を警戒し、その危険性を意識し続けていたことがうかがえる。

エゾオオカミについては、これまで明治時代当時から人に危害を加えない存在であるとみなされてきた可能性が指摘されている。実際に、開拓使による公文書上でもそうした言及が確認できる<sup>118</sup>。しかし、実際の人身被害の記録の有無と、肉食獣であり、しかも身近なイヌなどと比べるとかなり大柄なエゾオオカミに対峙した人々が喚起する感情とは、区別して論じられるべきと考える。

現代の北海道では、ヒグマがもたらす人的被害について、①生息域に立ち入った人間に対して恐怖感や傷害を与えるもの、②人間の居住域に出没して恐怖感や損害を与えるもの、③農地などに現れて農作物や家畜を食害するもの<sup>119</sup>と、より細分化して検討・議論の対象とされている。ヒグマの生息域では、その潜在的危険性は常に念頭におかれており、①～③はいずれもエスカレートすれば重大事故につながりかねない状況を指している。それぞれの被害について、根本的解決を図ることが人とヒグマの共存を目指すために必要であるとも述べられる。

このように被害を細分化して分析し、適切な対応策を検討しようとするヒグマに関わる現代の状況を鑑みると、過去のエゾオオカミに対しては、さまざまな種類の被害に対して、一律で「獲殺」および「駆除」という大雑把な対応をしていたといえよう。また、排除というもっとも強い方策での対応に終始したことが、実際の状況の詳細をうかがい知ることにも困難な状況に繋がってもある。エゾオオカミによる人的被害状況の実態については、現代的な視点をもって細部を検討する必要があると考える。

## 2-2. オオカミによる人的被害についての検討

以下では、エゾオオカミによる過去の人的被害の実態を検討する。ここでは、ヒグマによる被害の区分を参照し、そのうち、①生息域に立ち入った人間に対して恐怖感や傷害を与える、②人間の居住域に出没して恐怖感や損害を与える、の2点について検討した。③については、これまでも検討が進められているといえるため、本稿では除外した。

### 2-2-1. エゾオオカミによる人的被害:①生息域に立ち入った人間に対して恐怖感や傷害を与える

エゾオオカミの生息域に入り込んだ人々に対し、恐怖感を与えるほどオオカミが接

近する状況が生じていたことは、市町村史中の記述に散見された。相手がエゾオオカミであってもヒグマであっても、大型肉食獣と人が不意に接近・遭遇する状況は、事故につながる可能性が高い。「熊や狼の危険に備えて銃をもって切開きの工事に従事」<sup>120</sup>として身を守る武器を携えて作業に取り組む一方、「熊の足跡におびえ、夜は狼の遠ぼえにからだを固くし」<sup>121</sup>て恐怖感とたたかい、「里道十二里二十二町を開いた。だが、熊、狼などの出没を恐れ定住するものはいなかった」<sup>122</sup>など、苦勞して切り開いた道も思うように利用できないような状況が生じていたのであれば、ヒグマと並んでエゾオオカミもまた、その存在だけで人の行動を制限する存在だったといえる。

1888（明治21）年の北海道毎日新聞に掲載された「上川道路開鑿の實況」と題された記事には次のような記述が見られる。

石狩國空知郡より同國上川郡忠鼈に至る道路開削の實況を聞くに該道路線に當る地は元來土人も住居せぬ所にて眞に熊狼狐狸の巢窟なるか上に蚊虻群を為して人に迫り其工事の困難なる到底普通工夫の克く為し得る處にあらす爰に於て樺戸監獄署典獄安村治孝氏岩村前長官の命を請け囚徒を役して此苦行に就かしめたり蓋し囚徒は往の犯罪を償はんと欲する情實あるを以て艱苦を忍ひて業を励み土工の進歩を見る容易なればなり然れとも其實際に至つては工事の半は突然熊狼に出逢ひ蒼皇其場を避るか如きは最も恐るべく最も厭ふべき事にて剩え晝夜の別なく毒蟲襲來し夜間は天幕外數ヶ所に焚火を為し交番して害蟲を防くといへとも猶ほ被害を免れず<sup>123</sup>

工事中に突然オオカミやヒグマと遭遇してあわててその場から離れることがもっとも恐ろしくもっとも厭うべきことと言及されている。これは、現代の北海道でも、ヒグマによる人身被害、とくに死亡事故が起きると「人々のヒグマに対する恐怖の念を駆り立て、その痕跡が発見されただけでも農作業を中止したり外出できなくなってしまうたりと、精神的な要因からの経済被害などの実害が発生」<sup>124</sup>することがあるという知見に通じるものがある。遭遇と避難を繰り返すうちに恐怖感が刷り込まれ、また一時的に作業が止まることで工事の進行も滞ることを厭わしいと感じていると考えられる。

現代、人と野生動物が共存するためには空間的に住み分けることが必要であると理解され、「人里の周りには住民が狩猟採集に利用する里山があり、奥山地域との間で緩衝地帯の役割を果たしていた。文化と定義の差こそあれ、これは世界でほぼ共通の、人と野生動物との棲み分けであった」<sup>125</sup>と述べられる。その一方で、『新旭川市史 第1巻：通史1』では「古老による入植時の回想は、往昔の姿を鮮やかに物語っている（中略）開拓初期の人々の生活は、まるで野生動物との同居の状態であった」<sup>126</sup>と論じられていたように、開拓期の北海道は、人々と野生動物の「棲み分け」が可能な状態ではなかった。

北海道の開拓は何の緩衝地帯を設けずに自然の中に人が入り込んで開墾・開発を進

める状態のものであり、野生動物からの精神的な被害・負担の割合が高かった。家畜や直接の人身被害を受けなくても、精神的な負担をもたらす相手を取り除こうとする意識につながる可能性は考えられる。エゾオオカミに関してはこうした面からの害獣視、害獣としてのオオカミ観が強化された可能性がある。

### 2-2-2: エゾオオカミによる人的被害: ②人間の居住域に出没して恐怖感や損害を与える

市町村史の中には、エゾオオカミの側から人の居住地に接近・出没するパターンも確認できた。江戸時代の事例でもある『厚岸町史』<sup>127</sup>におさめられた『日鑑記』の記述は、その代表例といえる。人々はウマを狙って接近してきたオオカミに対して多くの人員を動員して対峙し、鉄砲や鳴り物でおどし、火を放ってまで追い払おうとしていた。オオカミを遠ざけるために多大な労力がかけられているといえる。

このほか、『弟子屈町史』の人家の前までウマを追いかけて来ていたとする事例<sup>128</sup>、『旭川市史稿 上巻』の干してあった川魚を目当てに屋内に侵入したという事例<sup>129</sup>でも、エゾオオカミはみずから人の居住地まで入り込んでいる。また、『壮瞥町史』において、「壮瞥穴」に落ち込んで捕獲されたオオカミは、人が行き交う居住地に入り込み、人に対して不審感を与えたことで捕殺された事例と位置づけられるだろう。さらにここでは、オオカミが和人の居住地に入り込み、それに気づいた和人がアイヌの狩猟者に捕獲を「依頼した」構図を示している。人の居住域に出没したオオカミを獲殺することと、オオカミの生息域に自ら踏み込んでオオカミを獲殺することとは、狩猟に従事する人物にとっては印象が異なると考えられる。居住域に出没するオオカミを捕獲してほしいという、オオカミに「侵入」された側の依頼があった場合、そのオオカミの捕獲は自分のためではなく他人のための行動となる。

この点について、山田伸一<sup>130</sup>は、アイヌ民族による活発なオオカミ猟は獲殺に対する手当金の支給を目的としていた可能性、および明治時代以前のオオカミに対する狩猟活動のありかたを変化させた可能性について言及し、こうした変化に対して個人や集団の内面で抵抗感を覚えることはなかったのかと問題を提起している。市町村史の記述をみると、アイヌ民族によるオオカミやヒグマに対する狩猟の中には、自分自身の生活のため以外にも、和人の側から乞われて従事していた事例が含まれている。とくに開拓期におけるヒグマへの対応に関しては、次のような言及も確認できる。

われわれ移住者にとって話には聞いて来たものの、人畜に害を与える熊の存在には、まったく恐怖させられたものであった。熊が出たとなると、その道の専門家、広尾又吉、広尾シトケサン、アカヤナマキリと、いつた人に依頼して退治して貰うよりはなかつた。

彼らは最初古物の村田銃や火縄銃を持っていて、これを使うか、「アマツポ」によつて捕殺したものである<sup>131</sup>。

このように和人の手に負えないヒグマの駆除をアイヌ民族の狩猟者に依頼している例は、市町村史の中に多数確認された。有害鳥獣獲殺に従事したアイヌのうち、どの程度が移住者から「依頼されて」狩猟に従事していたのか、その割合を明らかにすることは資料の性質から現状では困難と考える。

開拓期のアイヌ民族によるオオカミ猟は、獲物を捕獲して収入を得ることを目的としたものと、自力では「猛獣」に対して適切な対処ができずに困窮する和人を救済するためのものに大別されると考える。このような共助的な行動が、双方の意識の中でどのように位置づけられていたのかも、北海道における人とオオカミの関係性を検討する上では把握しておく必要がある。

ここまであげてきた事例をみるかぎり、エゾオオカミが人の居住地に入り込んだのは、おもに食料を得るためだったと考えることができる。このほか、北海道内の記録として1893(明治29)年には牛馬屠殺場に出没するオオカミを銃殺した新聞記事<sup>132</sup>や、土葬を荒らしたことに言及する次のような記録を残す文献<sup>133</sup>も存在する。

昭和一一年八月二六日、月寒、厚別、平岸方面の古老をまねき、松崎町長司会、町史編さん員の奥野氏ら出席して、座談会を開いた事がある。

(略)

金巻 月寒川は自然のままであった。高台には、かしわ、がんび、赤だも、たも等の雑木があった。当時しかは住んでいなかったが、しかの角は相当に採集した。くまは明治二三年頃まで出たが、人には危害を加えず、性質は比較的温順なものであった。おおかみは当時いなかったが、おおかみが土葬をあらした例がある。

岡田 自分の来た時<sup>134</sup>にはしかが相当いた。おおかみに襲れた事もあった。

「あらした」という言葉の指す行動の詳細が曖昧ではあるが、オオカミが土葬された人の遺骸を掘り起こして食料としていた可能性が考えられる。オオカミによる墓荒らしは本州以南でもみられ、防除のための方策が講じられてきた歴史がある<sup>135</sup>。

また、一般的に、墓を掘り返して人の遺骸を食べる動物に対して、それが人を獲物とみなす最初の段階にあり、後にはいわゆる「人食い」になるとする理解が存在する。この認識については、『小樽市史 第1巻』にあるイヌに関わる記述を通して、明治時代の北海道でも人口に膾炙していた可能性がうかがえた。

十二年七月忍路へ千二百石積ノ和船八幡丸ガ入港シタガ、航海中二十七歳ノ「チカ」(船役)ガ病死シタノデ、善光寺出張所時代ノ寺へ屍体ノ入棺ヲ頼ミニ来タ。屍体ハ堅クナツテ居ルノデ、取敢ヘズ始末シテ入棺ハシタガ、医師ノ診断ガナクテハ火葬モ出来ナイト云フので、三浦元碩ト云フ医者ノ検診ヲ受ケタ所ガ、「コレラ」ト云フノデ急ニ大騒ギトナリ、村ノ検疫ヤ消毒ガ始マリ(中略)日々全市

高島方面カラモ患者ガ運バレ、中ニハ旧土人モアリ、終熄迄ニハ五十七名ノ死亡者ガアツタ。偶々火葬ニ附シター屍体ガ野犬ノ襲フ所トナリ、人肉ノ臭気ニ馴レタ犬族ガ各所ニ徘徊シ、翌十三年小樽ニ出テ市内ヲ騒ガシ、無常堂ノ小僧ガ節分ノ夜ニ咬殺サレタガ、或ハ是等犬族ノ仕打ナラント考ヘラレル<sup>136</sup>

人肉を食べ、その「臭気」に慣れた動物は人を襲うようになってもおかしくないとする理解が明確に読み取れる。オオカミに関しては推測の域を出ないが、埋葬された遺骸を荒らすような事例が北海道内で発生し、その事態が認識されていたとすれば、人々はオオカミによる人身被害を予期して警戒していた可能性もある。

開拓期の北海道において、人に対してエゾオオカミがもたらした被害は、家畜被害に留まらない多様なものであったといえる。直接の人身被害よりは話題として取りあげられる頻度が少なく、そのために記録として残る機会も限られたと考えられるが、過去における人とエゾオオカミの関わりの実態を解明するためには検討していく必要がある。

#### 第4節 絶滅経緯

従来、エゾオオカミによる家畜被害と、その対応策としての駆除・獲殺は全道的に展開されてきたという前提にたった議論が主体となってきた。しかし、狼害・熊害が起きないとされる地域や、明治30年代以降になって移住者が入地した地域も存在し、全道でくまなくエゾオオカミによる被害がみられ、害獣としての獲殺が展開されていたとは一概にはいいきれない。エゾオオカミの駆除は、必ずしも各地域の家畜への被害の程度・有無と関わるものではなく、被害がない地域でも進展したと考えられる。

本節では、エゾオオカミの絶滅経緯について、市町村史の記述を踏まえながら検討する。

##### 1. 市町村史の記述を用いた検討

本稿で整理分析の対象とした市町村史では、北部よりも南部に、内陸部よりも沿岸部の市町村に、より具体的なエゾオオカミに関する記述が見いだされた。これは開拓の進展、和人の入植・居住時期に関わる傾向と推測する。とくに道南方面では、道路の改作や工事のために人がオオカミの生息域に入り込む状況が多々生じていたが、必要な作業を行う際の障害としてオオカミが認識されることが多かった。また、和人地として長い歴史を有する渡島・檜山地方では、明治時代以前から人とオオカミの接触があったことが明確に確認できた。鉄砲をもつての打ち払い、害獣として捕殺した記録もみられた。北海道内では、これまで考えられてきたよりも長期にわたり、人とエゾオオカミのあいだには軋轢が存在したことを、実際の記録・事例に基づいて明確化できたと考える。

エゾオオカミの駆除については、現代的な視角に立ってみれば、北海道内からひとつの種を根絶させるほどの「行き過ぎた」行為であったということができ、さらにそれが制度を確立してまで営まれたのは、西欧的な思想や功利主義、資本主義など外来の要因が強く影響した結果であったと位置づけることも可能である。しかし、市町村史の中に描写される明治時代の人々の視角は、そうした分析的な理解とは異なっていると感じられた。

入植者にとって、切り開いたばかりの新たな土地・環境において遭遇する困難な障害や想定外の被害は、このままでは、あるいは再び起きたら生きていけないという危機感を喚起するものだった。この先に安定した生活があるのか不明確な状況にあって、起こりうる被害は可能なかぎり未然に防がれるべきであり、実害をもたらす存在は排除する必要があったと理解できる。そうした視角や価値観に応じて、潜在的な危険性をもつエゾオオカミの駆除制度が成立したと考えられる。制度を敷き、運用した開拓使など行政機関の考え方には、従来論じられてきたような外来要素の取り込みや反映があった可能性は高い。しかし、実際にエゾオオカミの獲殺に従事した人々の活動にまでそうした要素が浸透していたとは考えがたい。また、オオカミを害獣と位置づけ、捕殺に対して報償を与えることで人々に駆除を進めさせるという形での排除・根絶を目指す構造そのものは、東北地方では江戸時代から存在していた<sup>137</sup>。したがって、賞金をあててオオカミ獲らせるという枠組みを、ただちに外来の要素や主義思想と結びつけることはできない。くわえて、島嶼環境において特定の野生動物種を人為的に撲滅することを目指し、実際に島内から一掃するという行為も、日本国内では1700年代にすでに行われていたという<sup>138</sup>。

絶滅動物としてのエゾオオカミは、北海道で急激に展開した「近代化」に適応できず、変化の潮流を乗り越えられなかった野生動物として象徴的な位置づけを確立している。その中でも、「ストリキニーネ」を使用した大規模なオオカミの「毒殺」の実施が注目され、大きく取り上げられる傾向がある。たしかに、毒薬を用いたオオカミの駆除が新冠牧場で実施されたことは事実である。しかし、新冠以外でオオカミに対して同様の方法を実施した地域は、本稿で対象とした市町村史の中には確認できなかった。

北海道内の市町村史中では、昆虫やネズミ類などの章動物から、イヌやヒグマなどに対して薬剤散布による駆除・薬殺が行われていた例が多々例示されている。たとえば、上ノ国の桂岡で松前謙によって営まれた「松前牧場」に関する記述の中には、以下の言及が確認できる。

放牧の馬は、一二、三頭から二〇頭であったが、牧夫は熊の出るころになると夕方馬屋に入れ、近くに飼料の畑を交錯していた。牧場というものの周りにはうっそうたる原始林であるし、よく熊が出た。三十七年八月の夜、牧舎のすぐ下の畦の端で、青毛二歳和種の牝馬がたおされた。翌朝、無残に右の後肢を貪り食われた馬の死骸を見つけた牧夫の藤太郎は、早速このことを讓に報告した。讓は愛馬

芦毛の馬に鞭うって駈けつけ、ただちに死馬の肉の肥えたところを幾個所も切りさき、そこにストリキニーネを塗り付け馬はその場から少しも動かさずに置き、牧舎に一泊した。翌朝、牧夫が現場へ行って見ると果して大きな熊がたおれていた<sup>139</sup>

北海道では、1874（明治7）年に、毒性含有薬品を勝手に取り扱うことを禁止する布達が発されている<sup>140</sup>。人畜に障害のある毒性を含む薬品を使用する際には区戸長に申し出て許可を得る必要があったが、上記のような記述をみると、動物の駆除・薬殺にはたびたび使われていた様子うかがえる。

人畜に被害を与えるばかりか、狂犬病の媒体になる野犬を掃討することと、飼い犬を登録し、狂犬病予防注射を施し、そして放し飼いしないことは“車の両輪”に例えられる。

しかし古くは掃討が主になって経過したところがある。たとえば昭和一四年の歳出決算書に「野犬毒殺費三七円七八銭」と記録されているし、また戦後も“野犬狩り”は積極的に行われた。二三年の記録では捕獲四四頭、内返還八頭、処分三六頭（薬殺三〇、撲殺六）。また二四年には大がかりな村全域の“野犬狩り”となって一六一頭を処分（薬殺一四一、撲殺二〇）している。記録によればストリキニーネが用いられており、この屠犬売払い代九〇〇円、毛皮売払い代八〇〇円の雑収入があった。じっさいこの年には六人が野犬に咬まれており、めん羊五頭、山羊二頭が傷を負い、兎七羽、鶏五羽が死んでいる。村は犬の放し飼いを禁じる厳しい通達を出した<sup>141</sup>。

市町村史の中には、害獣とされる動物の薬殺についても、地域の過去の記録として淡々と記述・紹介が行われる。キツネやヒグマに対する発破・口発破を用いた爆殺が行われていたことにも言及がある。現代では非難の対象となるような行為が行われていたとしても、そうした事実を秘匿するような姿勢はさほど強くないように感じるが、エゾオオカミに対して毒薬を仕掛ける形での駆除が実施されていたことをうかがわせる記述は確認できていない。したがって、現段階では、新冠以外の地域でのストリキニーネを用いたオオカミの駆除は、少なくとも公的な記録として残される、あるいは表に出てくる形では実施されていないと推察できる。

エゾオオカミは、近代化を象徴するような、薬剤を用いた無差別の大量殺戮の対象となったのではなく、おそらくは近世以前と同様に、1頭1頭が人の手で駆除された結果として絶滅した。明治時代に入って急激に開拓が進んだ内国植民地という独特の位置づけをもつ北海道の特性と結びつき、日本における人と動物の関係史の中では非常にセンセーショナルな事例として扱われてきたが、和人とエゾオオカミの関係性、またエゾオオカミの絶滅をめぐる状況は、明治時代以前から段階を踏んで進展してきたものと考えられる。

## 2. 江戸時代の状況を踏まえた経緯把握の必要性

北海道におけるオオカミと人との関わりについて、ブレット・ウォーカー<sup>142</sup>は「両者は北海道において当り前の生存競争を演じていたとみるべきだろう」と指摘する。この指摘には納得できるが、そこからさらに、日本人とオオカミが多く生態上の、あるいは社会性を有する動物としての共通点を有するがゆえに「両者間の『競争的排除』が北海道で経済（そしてそれが日本の近代化という社会的政治的目標と結び付いた）分野で行われた」とする議論には、疑問が残る。オオカミそのものには資源や商品としての価値がないが、家畜を襲って経済的な損失を生じさせる存在であるために、公的機関が賞金を出す制度を設けて駆除を推奨するという構造は、たしかにウマを中心とした経済分野における競争と排除だったとすることができる。しかし、本章で述べてきたように、エゾオオカミの絶滅は、江戸時代以前の和人とオオカミの関わりかたと連続性を有する事象であると考えられる。明治維新を契機としてもっとも大きく変わったのは、人々のオオカミ観ではなく、オオカミの駆除に猟銃を自由に使えるようになったこと、つまり狩猟従事者数の増加と、猟銃自体の性能が向上したことだったのではないだろうか。

近年、日本における人とオオカミの関係性をめぐる歴史の解明が進み、地域によっては数百年にわたり、オオカミの駆除に対する報奨金制度を設けていたことが明らかになっている。また、牛馬を襲い、ときには人にも危害をもたらすオオカミに対抗し防除するために、人々は鉄砲の使用を希求してきた。

明治時代にはいると、江戸時代の鳥獣に関する法制が撤廃されると同時に全国的な鳥獣の乱獲が起きたことが知られている<sup>143</sup>。狩猟が実質的に自由化されたことにより、当時は高い商品価値を付与されていた大型鳥類、エゾシカ、ニホンアシカなどは急激に生息数を減らしていった。銃猟が一般に解禁されただけでなく、火縄銃よりも高い性能をもつ村田銃の開発や洋式銃の輸入・流通といった要因も、野生動物の乱獲に拍車をかけた<sup>144</sup>。この背景として廃仏思想の高まりとともに殺生禁断の戒律がゆるんだこと、従来の禁猟政策に対する反動があったことが指摘されている<sup>145</sup>。

ただ、エゾオオカミ・ニホンオオカミについては、一般的に商品として高い価値を有していたわけではなく、これまでも多く指摘されているように、手当金の支給など捕獲奨励策が講じられないかぎり積極的な狩猟対象とはならなかった。その点を鑑みると、従前までと比べてもっとも大きな変化は、害獣としての駆除・捕殺に際して、江戸時代には容易には行うことができなかつたものが、その規制を解かれた点であると考えられる<sup>146</sup>。

本稿では、北海道内でも明治時代以前からオオカミを捕殺し、火や鉄砲をもって防除に努めていたことをうかがわせる事例を確認した。害獣として対峙した際には手槍での刺殺もあったようだが、本州以南と同様に、オオカミやヒグマの接近が盛んになり危険な状況が生じれば、願い出て鉄砲を借り受けることができる制度も敷かれてい

た。

日本人とオオカミのあいだには、適切な距離を保つことができない状況が生じることがあり、人の側が身を護り安全を確保するためには武器を持って排除に出る必要があったといえる。また、生活に必要な牛馬への被害を防ぐためにオオカミをコントロールしなければならない状況も生じ得た。牧畜民のように家畜の頭数、飼養そのものが財産とはならなかったかもしれないが、日本では稲作農耕が重要な生業として営まれてきたからこそ、動力や移送手段となる牛馬は必要であり、高い価値を有していた。それを襲うオオカミは防除する必要があった。

ただ、オオカミを銃で捕殺するためには、その性能の向上が必要だったと考えられる。オオカミはヒグマやシカなどに比べると小柄であり、動きも素早いため撃ち取ることは難しく、たとえば1663（寛文3）年、宇都宮藩内高原山（現在の栃木県日光市・塩谷郡付近）において男女併せて63人を襲ったというオオカミに対し、藩が足軽隊を組織して討伐に乗り出したが、10日かけても成果をあげることができなかったという<sup>147</sup>。狩猟の困難さがあるために、褒美を与えてオオカミの捕獲を奨励していたと述べられることもある<sup>148</sup>。

江戸時代に使用されていた火縄銃<sup>149</sup>などでは、慣れない猟者には撃ち取ることが難しかったオオカミだが、日本国内への洋銃の輸入が進み、猟銃の改良・普及につれて捕獲される割合が高くなっていったと考えられる。

日本人は古来オオカミと対立しあう面を有していた。ただ、封建社会における規制の下にあって、多くの場合は家畜被害、あるいは人身事故などの実害が生じてからでなければ、オオカミを駆除することはできなかった。明治時代になると、そうした規制から解放され、被害を未然に防ぐための捕殺も可能となった。さらに当時は「和魂洋才」とうたわれたように、猟具である銃の性能も、海外からの輸入などにより次第に向上した。オオカミのような素早く、手強い相手であっても高い確率で仕留めることができるようになった状況が、絶滅という自体に繋がっていったのではないだろうか。

従来の規制に対する反動としてオオカミを狩猟対象とした場合や、経済的な利益を求めて獲殺に従事した人々も存在したと考えるが、自治体史の記録をみると、明治時代に北海道に入植した和人とエゾオオカミの間の軋轢は、新たな環境、開墾して得た土地で生き抜くためのものであったように見受けられた。このままの状況では、あるいは来年も同じ状況が生じたとしたら生きていくことができなくなるという切実な状況において、当時の人々とエゾオオカミは対立している。

エゾオオカミの絶滅について、大正時代にはその「撲滅」が人々に望まれた事態であったかのように報じられた。しかし、時代を下るにつれ、明治維新後に流入した近代的・西欧的な価値観のもとに引き起こされた事態であると理解されるようになった<sup>150</sup>。これらの議論では、オオカミと人との関わりが、明治維新を契機として江戸時代から大きく転換したとする前提に立っている。しかし、江戸時代から何がどのように変化したのか、具体的には検討されてこなかった。

日本における人とオオカミの関係史を明らかにしていくためには、社会的な構造の分析に加えて、実際にエゾオオカミと対峙し、エゾオオカミの獲殺に従事した人々が置かれていた状況について、より実体的な把握が必要であると考えられる。

- 1 山田伸一 2002 「オオカミ・ヒグマ・カラス:明治期北海道における「有害鳥獣獲殺手当」をめぐる」『北海道開拓記念館調査報告』(41), p.87.
- 2 もっとも大きな問題として、既存の知見としてしられるエゾオオカミの絶滅年のあとに「オオカミ」に関わる記録があらわれた場合、それが実際にオオカミだったのか、イエヌと混同しているのか、判断できないことがあげられる。野生動物であるオオカミと、家畜であるイエヌは、外見上は似ていても性質・生態などに大きな相違があることが知られ、議論の中では可能なかぎり区別する必要がある。しかし、たとえば北海道内のエゾオオカミの絶滅年以降に、北海道内で「オオカミ」を目撃したと言及する記録が見出された場合、その描写が詳細で、実際にエゾオオカミである可能性が高いと考えられても、標本資料などの生物学的な証拠を伴わなければエゾオオカミとして識別することは不可能なのが現状である。
- 3 高田知和 2014 「地域史誌の作られ方:自治体史と字誌(区史)を素材にして(日本出版学会:2013年度秋季研究発表会)」<http://www.shuppan.jp/shukihappyo6-201310.html>. (2019年5月30日最終確認).
- 4 黒田強 1999a 「エゾオオカミ・哀しからじや」『ふるさとの自然』(62), pp.14-16. 黒田強 1999b エゾオオカミ・哀しからずや」『ふるさとの自然』(63), pp.7-11. 黒田強 2000 「エゾオオカミ・哀しからじや」『ふるさとの自然』(64), pp.18-19.
- 5 北海道内の市町村数は、1952(昭和27)時点で最高数278を記録したが、1953(昭和28)年10月に「町村合併促進法」が施行されたのち大幅に減少し、212市町村となった[北海道庁 2017 「道内市町村数の変遷一覧表」 <http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ss/scs/gyousei/history01.htm> (2019年5月30日最終確認)]. この行政体制は、1973(昭和48)年から2004(平成16)年の平成の市町村大合併まで30年間にわたって続き[北海道・支庁制度研究チーム 1998 「支庁制度研究結果報告書」 <http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ss/cks/grp/13/kenkyuhoukokusho.pdf> (2019年5月30日最終確認)], この間に1967(昭和42)年の開道百年記念を契機とした各種の記念事業、および各市町村の開基50周年から100周年を記念としての自治体史刊行が多く行われた。
- 6 北海道教育大学附属図書館旭川分館閲覧係編 2002 『北海道市町村区史・誌一覧』北海道教育大学附属図書館旭川分館.
- 7 この一覧は、明治時代以降2002(平成14)年3月までに刊行された北海道内市町村区史(誌)を網羅的に収録している、北海道内における各市町村の合併は、2004(平成16)年12月1日に従来の函館市・戸井町・恵山町・樺法華村・南茅部町を編入した「函館市」の発足を端緒としているため[北海道 2009 「北海道の市町村合併の状況:平成21年10月5日現在」 <http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ss/cks/gappei/index.htm> (2019年5月30日確認).], それ以前に刊行された資料を調査するために参照・利用するのは妥当であると判断した。
- 8 札幌市中央図書館 2018 「北海道内の市町村史」 <https://www.city.sapporo.jp/toshokan/sapporosiryu/sap-top.html> (2019年5月30日最終確認).
- 9 北海道立図書館北方資料室編 2013 「講演会・資料で語る北海道の歴史講演録『北海道の出版文化史～昭和時代を中心に』講師:出村文理氏」『北の資料』(128), pp.12-13
- 10 前掲註9, pp.12-13.
- 11 高倉新一郎 1977 『北海道市町村史編集の手引き』北海道史研究協議会, p.6.
- 12 石狩町 1985 『石狩町誌 中巻1』石狩町, p.317.
- 13 札幌区 1911 『札幌区史』札幌区, p.9.
- 14 加藤清英編 1927 『札幌村史』札幌村, pp.40-41.
- 15 北海道 2018 「野生鳥獣による被害調査結果について(平成29年度分)」 <http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ks/skn/higai.htm> (2019年5月30日最終確認).
- 16 札幌市史編集委員会編 1953 『札幌市史:政治行政編』札幌市, p.22.
- 17 田辺安一 2008 『お雇い農業教師エドウィン・ダン:ヒツジとエゾオオカミ』北海道出版企画センター.
- 18 札幌市史編集委員会編 1958a 『札幌市史:産業経済編附:自然環境編』札幌市, p.11.
- 19 札幌市史編集委員会編 1958b 『札幌市史:文化社会編』札幌市, pp.583-584.

- 20 さらに詳しい記録として、「明治十九年中ノ川廣島左右股等を稱して西野と名づく、當時猛獸の害を時々受く依つて懸賞で捕獲を奨励したとの事で一例を上げれば次の様である。明治十九年、熊十八頭狼三十一頭を捕獲し此の手當金五百三十四圓を要した、明治十九年頃の五百圓と言へば中々の大金である如何に農民が難澁されたかが想像も難からず」[大谷勝雄 1951『手稲町誌』手稲町役場, p.37. 養輪早三郎編 1968『手稲町誌:上』札幌市, p.133].
- 21 『長沼町の歴史 上巻』[長沼町史編さん委員会編 1962, 長沼町]および『長沼町九十年史』[長沼町史編さん委員会編 1977, 長沼町]には、『千歳市史』と同様に、明治天皇の行幸に際して記された村勢資料中に、陸産物としてのオオカミの記録が紹介される、
- 22 千歳市史編さん委員会編 2010『新千歳市史』千歳市, pp.563-564.
- 23 芦別市 1994『新芦別市史:第1巻』芦別市, p.20.
- 24 奈井江町史編さん室編 1975『奈井江町史』奈井江町, p.15.
- 25 沼田町編 1982『新編沼田町史』沼田町, p.105.
- 26 上砂川町史編纂委員会 1988『新上砂川町史』上砂川町, p.10.
- 27 この「錢」は「円」の誤りと考えられる。
- 28 秩父別町史編さん委員会編 1987『秩父別町史』秩父別町, p.39.
- 29 美唄市史編さん委員会編 1970『美唄市史』美唄市, p.30.
- 30 美唄市百年史編さん委員会編 1991『美唄市百年史』美唄市, p.38.
- 31 夕張市史編さん委員会編 1981a『夕張市史:増補改訂;上』夕張市, p.138.
- 32 月形町史編さん委員会編 1985『月形町史』月形町, p.127.
- 33 京極町史編さん委員会編 1977『京極町史』京極町, p.406.
- 34 戸井町史編纂委員会編 1973『戸井町史』戸井町, p.406.
- 35 八雲町 2013a『八雲町史:三訂;上巻』八雲町, p.629.
- 36 長万部町史編集室編 1977『長万部町史』長万部町, p.207.
- 37 鹿部町史編集室編 1994『鹿部町史』鹿部町, p.870.
- 38 前掲註 37, pp.880-881.
- 39 上磯町史編纂委員会編 1975『上磯町史:年史編』上磯町, p.83.
- 40 恵山町史編纂室編集 2007『恵山町史』恵山町, p.641.
- 41 宇川隆雄 1988『北海道宿駅(駅通)制の研究:上巻(江戸時代編)』宇川剛也。
- 42 楸法華村編 1989『楸法華村史』楸法華村, p.1258.
- 43 前掲註 40, p.1259.
- 44 松前町史編集室編 1988『松前町史:通説編 第1巻下』松前町, p.539.
- 45 七飯町 1976『七飯町史』七飯町, pp.235-236.
- 46 村上一馬 2013「人馬を喰う狼, 狼を獲る人びと」『東北歴史博物館研究紀要』(14), p.21.
- 47 飯田吉次郎編 1970『大野町史』大野町役場, pp.751-752.
- 48 犬飼哲夫 1933a「絶滅した北海道の狼」『日本犬』2(1), 日本犬保存会, pp.1-7.
- 49 今金町史編集委員会編 1991『今金町史:改訂;上巻』今金町, p.158.
- 50 洞爺村編 1976『洞爺村史:本編』洞爺村, p.437.
- 51 室蘭市総務部総務課編 1981『新室蘭市史:第1巻』室蘭市, p.650.
- 52 虻田町 1962『虻田町史』虻田町役場 p.173.
- 53 前掲註 52, p.174.
- 54 前掲註 52, p.489.
- 55 登別町史編纂委員会編 1967『登別町史:開基百年記念』登別町, pp.434-435.
- 56 前掲註 55, p.1191.

- 57 苫小牧市 1975『苫小牧市史;上巻』苫小牧市, p.170.
- 58 前掲註 57, p.264.
- 59 この『民間牧畜実況取調復命書』がどのような資料なのか, 実物を見つけることができていない。『苫小牧市史;上巻』[前掲註 57]でも, 1940(昭和 15)年刊行の『苫小牧町史』からの引用となっている点を踏まえると, 現存しないか, あるいは資料名が適切ではなかった可能性がある。
- 60 「壮警穴」について「今の滝之上町第三(旧宇星野)の辺には, 到る処に壮警穴といわれる, 直径一尺くらいから三尺位の深い穴が, 畑や道路に, ぽっかり口をあけて, 通行人や農夫を困らせたものである, これは昔大木が樽前山爆発の際降った荒い火山灰に埋もれ, その上に有珠岳の細かい灰がかぶさって, 長い年月を経て, 地中で木が腐って, 自然に穴になったものと推定される, 馬耕などの時, 馬がこの穴に落ちて困ったこともあったという」[壮警町史編さん委員会編 1979『壮警町史』壮警町, p.1560]
- 61 壮警町史編さん委員会編 1979『壮警町史』壮警町, pp.164-165.
- 62 前掲註 62, p.1551.
- 63 前掲註 62, p.1556.
- 64 静内町史編纂委員会編 1975『静内町史;増補改訂版』静内町, pp.653-654.
- 65 新冠町史編さん委員会編 1996b『続新冠町史』新冠町, p.32.
- 66 旭川市 1931a『旭川市史稿;上巻』旭川市, pp.123-124.
- 67 旭川市史編集会議編 1994『新旭川市史 第1巻:通史1』旭川市, pp.95-96.
- 68 大蔵省 1885『開拓使事業報告』大蔵省.
- 69 豊富町史編さん委員会編 1986『豊富町史』豊富町史編さん委員会, p.23.
- 70 宇仁義和 2010「知床・斜里の近世年表」『知床博物館研究報告』(31), p.70.
- 71 稚内市史編纂室 1968『稚内市史』稚内市, pp.256-257.
- 72 松林順 2017「絶滅したエゾオオカミ(*Canis lupus hattai*)の食性復元」[日本生態学会第64回全国大会(2017年3月, 東京)講演要旨] <http://www.esj.ne.jp/meeting/abst/64/I02-03.html> (2019年5月30日最終確認).
- 73 網走市史編纂委員会編 1958『網走市史(上巻):先史時代篇・原始時代』網走市, p.270.
- 74 網走市史編纂委員会編 1971『網走市史(下巻):開拓時代篇』網走市, pp.37-38.
- 75 前掲註 17, p.443.
- 76 足寄町町史編纂臨時専門委員会編 1973『足寄町史』足寄町, p.139.
- 77 池田町史編集委員会編 1988『池田町史 上巻』池田町役場, p.563.
- 78 浦幌町史編さん委員会編 1971『浦幌町史』浦幌町, pp.825-826.
- 79 清水町史編さん委員会編 2005『清水町百年史』清水町, p.67.
- 80 厚岸町史編集委員会編集 2007『新厚岸町史:資料編 第3巻』厚岸町, pp.742-743.
- 81 厚岸町史編集委員会編集 2003a『新厚岸町史:資料編 第1巻』厚岸町, p.845.
- 82 厚岸町史編集委員会編 2012『新厚岸町史:通史編 第1巻』厚岸町, p.266.
- 83 弟子屈町史編さん委員会編 1981『弟子屈町史』弟子屈町, pp.382-383.
- 84 明治 16(1883)年に御用掛赤壁二郎, 酒井純明が提出した「釧路巡回復命書」に添付された日記中にある, 7月 11の「標茶ヨリ陸路熊牛村ヲ経テ熊牛台ニ至ル道程」についての記載中に「豺狼ノ馬ヲ害スルヤ昨年来特ニ甚シク死傷已ニ二十四頭偶々母馬ハ喰殺サレ其子ハ臀肉ヲ喰ヒ取ラルヽニ遇フ其慘状殆ト熟視スルニ忍ヒス蓋馬ノ害ヲ被フル此ノ如ク其レ甚シキモノハ鹿ノ減少ヲ来セシヨリ或ハ一ノ原由トナラン歟」の部分を含む引用あり[標茶町史編さん委員会編 1998『標茶町史通史編 第1巻』標茶町, pp.383-384]
- 85 更科源藏編 1949『弟子屈町史』弟子屈町, pp.20-21.
- 86 別海町百年史編さん委員会編 1978『別海町百年史』別海町, p.88.
- 87 現生のオオカミが, 基本的には人を襲うよりも避けようとする性質をもつ野生動物であることは, 長期の観察事例の積み重ねにより裏付けられている。ただ, その一方で, 実際にオオカミが生息する地域では, 例外的な事態が起こりうる可能性も理解されている。東北地方では, 数百年にわたりさまざまな理由からオオカミによる多くの人身被害が引き起こされてきたこと, 人がオオカミの捕食対象とされてきた歴史があったことが解明されつつある[前掲註 46, p.9]. 狂犬病, 人慣れ, 飢饉による死

- 人の増加と人肉食の機会の増加など種々の要因と結びつけて述べられ、オオカミは本質的には人には危害を加えないが、特殊な条件下では人身被害も起こり得た、と理解されるようである。
- 88 ダン, エドウィン 1963 『エドウィン・ダン:日本における半世紀の回想』エドウィン・ダン顕彰会, p.45.
- 89 宇野裕之 2009 「エゾシカの現状と課題」斜里町立知床博物館編『しれとこライブラリー10:知床の自然保護』北海道新聞社, p.81.
- 90 「事実に於て局面は非常に切迫して来て、我々は狼の全軍を退治してしまふか、或いは新冠での馬匹計画を廃棄してしまふか、二途の何れかを撰ばなければならなくなつた」[ダン, エドウィン(Dun, Edwin) 1930 「狼とバツタ」[孤筍生(西川吉之助)訳]『太湖』(56), p.6].
- 91 ストリキニーネは、もともと伝染病マラリアの特効薬として使われていたが、黒田清隆がアメリカでは鳥獣退治に使用されていることを知り、開拓使の事業展開で用いられるようになった薬品だった[前掲註 17, p.139]
- 92 犬飼哲夫 1932 「北海道の動物の由来とその変遷」『北海道郷土史研究』日本放送協会北海道支部, pp.48-49. pp.32-50
- 93 「信用できるアメリカの被害数(コヨーテとオオカミによる)と比較すると、北海道の馬牧場が蒙った被害は甚大で、かつ地域が著しく偏っていたようだ」[ブレット・ウォーカー 2009 『絶滅した日本のオオカミ:その生態と歴史学』北海道大学出版会, p.180].
- 94 梅木佳代 2016 「特集 北海道レッドリストの現状と課題1 哺乳類:絶滅してしまったオオカミ」『モーリー:北海道ネイチャーマガジン』(42), 北海道新聞野生生物基金, pp.14-15.
- 95 北海道庁編 1990[原著:1937]『新撰 北海道史:第二巻通説一』北海道庁, p.768.
- 96 宇川隆雄 1988 『北海道宿駅(駅通)制の研究:上巻(江戸時代編)』宇川剛也. 山森芳郎・有馬洋太郎・岡村純編 1993 『図説:日本の馬と人の生活誌』原書房.
- 97 前掲註 96, p.88.
- 98 前掲註 96, p.93.
- 99 大友喜作 1972 『北門叢書第1冊:赤蝦夷風説考・蝦夷拾遺・蝦夷草紙』国書刊行会, p.328.
- 100 北海道庁編 1937 『新撰北海道史:第二巻通説一』北海道庁, p.768.
- 101 登別町史編纂委員会編 1967 『登別町史:開基百年記念』登別町, p.1201.
- 102 吉田武三 1970 『三航蝦夷日誌:松浦武四郎:1845-1849(弘化2-嘉永2年)』吉川弘文館, p.227.
- 103 前掲註 102, p.172.
- 104 山崎栄作 1986 『蝦夷日記:[木村謙次 1798-1799(寛永10-11)年]』第一印刷, pp.176-177.
- 105 木古内町史編さん委員会編 1982 『木古内町史』木古内町, p.284.
- 106 宇野裕之 2009 「エゾシカの現状と課題」斜里町立知床博物館『しれとこライブラリー10:知床の自然保護』北海道新聞社, p.81.
- 107 洋種馬もいた.
- 108 静内町史編纂委員会編 1975 『静内町史 増補改訂版』静内町, p.653.
- 109 総合地球環境学研究所 2015 「北海道のヒグマ,肉食から草食傾向へ. 明治以降の開発が影響か:考古試料の安定同位体分析から」[http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/research/research\\_results/2014/documents/150327\\_1/01.pdf](http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/research/research_results/2014/documents/150327_1/01.pdf) (2019年5月30日最終確認).
- 110 Matsubayashi, Jun., Junko O, Morimoto, Ichiro, Tayasu, Tsutomu Mano, Miyuki Nakajima, Osamu Takahashi, Kyoko Kobayashi & Futoshi Nakamura 2015 “Major decline in marine and terrestrial animal consumption by brown bears (*Ursus arctos*)”[ヒグマの動物質利用の激減] p.5.
- 111 前掲註 106.
- 112 木村盛武 1989 『野生の事件簿:北の動物たち』北海道新聞社.
- 113 ウォーカー, ブレット. L. [浜健二訳] 2009 『絶滅した日本のオオカミ:その生態と歴史学』北海道大学図書刊行会.
- 114 七飯町 1976 『七飯町史』七飯町, p.63.
- 115 石狩町 1972 『石狩町誌 上巻』石狩町, pp.63-64
- 116 浦幌町史編さん委員会編 1971 『浦幌町史』浦幌町. pp.825-826.
- 117 亀山明子 2006 「北海道におけるエゾオオカミ絶滅の歴史と知床国立公園におけるオオカミ再導入の可能性について」『世界自然遺産 知床とイエローストーン:野生をめぐる二つの国立公園の物語』知床財団, pp.87-89.

- 118 前掲註 17.
- 119 山中正実・青井俊樹 1988 「ヒグマ」『知床の動物』, 北海道大学図書刊行会, pp.181-223.
- 120 鹿部町史編集室 編 1994 『鹿部町史』 鹿部町, p.881.
- 121 長万部町史編集室編 1977 『長万部町史』 長万部町, p.207.
- 122 室蘭市総務部総務課編 1981 『新室蘭市史 第1巻』 室蘭市 p.650.
- 123 北海道毎日新聞 1888年12月4日付, 第419号.
- 124 北海道渡島支庁地域政策部環境生活課自然環境係 2006 『北海道らしい野生動物とのつき合い方プロジェクト検討報告書—野生動物とのよりよい関係を築くために—The Challenge of Making a Good Relationship with Wildlife in Hokkaido』 北海道渡島支庁地域政策部環境生活課自然環境係.
- 125 小平真佐夫・岡田秀明・山中正実 2006 「観光, ヒグマ, 人の暮らし: 知床におけるヒグマ個体群の動態・分散傾向とその管理」『世界自然遺産 知床とイエローストーン: 野生をめぐる二つの国立公園の物語』 知床財団, pp.238-242.
- 126 旭川市史編集会議編 1994 『新旭川市史 第1巻: 通史1』 旭川市, p.91
- 127 厚岸町史編集委員会編 2012 『新厚岸町史: 通史編 第1巻』 厚岸町, p.266.
- 128 前掲註 35.
- 129 前掲註 66.
- 130 山田伸一 2002 「オオカミ・ヒグマ・カラス: 明治期北海道における『有害鳥獣獲殺手当』をめぐる」『北海道開拓記念館調査報告』(41), pp.67-92.
- 131 広尾町史編纂委員会編 1960 『広尾町史』 広尾町, p.1008.
- 132 「金色の狼 札幌遊園地先の牛馬屠殺場へ 近頃数匹の狼出没し 牛馬の骨を入れ置く穴に入りて骨を喰ひ散らすより 近隣の某なるもの 去る廿七日穴の上へ陥穽を構え置きしに 三匹の狼出で来りて内一匹が陥穽に罹りて穴に落ち 他ハ早くも逃げ去りしより 某ハ隙さず之を銃殺して引き上げ見しに 大さ犬程にて全身に金色の長き毛(長サ6寸餘)を被ひ 極めて見事のものなりと」『讀賣新聞』1903年4月10日朝刊4面].
- 133 豊平町史編さん委員会 1959 『豊平町史』 豊平町役場, pp.806-807.
- 134 明治4(1871)年に入植した人物[豊平町史編さん委員会 1959 『豊平町史』 豊平町役場, p.806].
- 135 「狼弾き」が有名と思われるが, ほかに「程野では新仏が出ると, 狼に死骸を掘り出されないため, 夜の間墓場で一週間は大火を焚いて, 狼の来襲を防いだが, そのために墓場は, 居宅に近い方が便利だったらしい. 狼害の全く絶えた今日でも, 程野では埋葬一週間は, 墓地で大火を焚く風習だけは残っている. また程野には, 墓場の土饅頭に鎌をさす風習があるが, これも狼よけのためとされている」[松山義雄 1977 『狩りの語り部: 伊那の山峡より』 法政大学出版局, pp.173-174]など地域ごとの違いもある.
- 136 小樽市 1958 『小樽市史 第1巻』 小樽市, pp.694-695.
- 137 村上一馬 2013 「人馬を喰う狼, 狼を獲る人びと: 『盛岡藩家老席日記 雑書』から」『東北歴史博物館研究紀要』(14), 東北歴史博物館.
- 138 対馬では, 「猪鹿追話」により, イノシシが絶滅し, シカも一時期激減したという[渡瀬庄三郎 1912 「元禄寛永年間に於ける対馬羆猪の事跡」『動物学雑誌』(281), 動物学会, pp.15-26. 対馬市役所 「～対馬のイノシシ・シカの歴史～」 [http://www.city.tsushima.nagasaki.jp/policy/post\\_123.html](http://www.city.tsushima.nagasaki.jp/policy/post_123.html) (2019年5月30日最終確認)].
- 139 松崎岩穂 1962 『続 上ノ国村史』上ノ国町 pp.284-285.
- 140 前掲註 17, p.139.
- 141 日高町史編纂委員会編 1977 『日高町史』 日高町, pp.769-770.
- 142 前掲註 113.
- 143 林野庁編 1969 『鳥獣行政のあゆみ』 林野庁 p.6.
- 144 三戸幸久 1992 「東北地方北部のニホンザルの分布はなぜ少ないか」『生物科学』44(3), 農山漁村文化協会, pp.141-159.
- 145 前掲註 143.
- 146 江戸時代, 鉄砲使用が規制され, 地域によっては獣害があっても実弾を使用しての鳥獣駆除が許されない場合もあった [武井耕一 2010 『鉄砲を手放さなかった百姓たち: 刀狩りから幕末まで』 朝日新聞出版].

- 147 平野哲也 2014 「江戸時代の下野における野生獣の防除と利用」『栃木県立文書館研究紀要』(18), 栃木県立文書館, p. 67. pp.85-104
- 148 前掲註 46, p.20.
- 149 火縄銃の場合, 標的にうまく命中させるためには 100 メートル以内に近付く必要があり, それ以上の射程距離となると命中確度は低下するとされる[所荘吉 1969 『火縄銃』 雄山閣出版]
- 150 梅木佳代 2016 「エゾオオカミ研究史の検討」『北海道大学大学院文学研究科研究論集』(15), pp.35-67, 北海道大学文学研究科.

## 第3章 アイヌ民族とオオカミの関わり

本章では、アイヌ民族とオオカミの関わりについて、新たな媒体を用いた情報の集約と検討を行った。アイヌ民族とオオカミの関係性について述べる先行研究には、言説の食い違いがみられ、その中で矛盾する説明がなされるなど複雑な状況にある。

本稿では、情報整理を試みる必要があると考え、アイヌ民族の口承文芸資料、和人研究者によって刊行された文献資料、アイヌ民族に対する聞き取り調査記録の内容を集約し、アイヌ民族とオオカミの関わりがどのように記述されてきたのかを確認した。

### 第1節 アイヌ文化におけるオオカミの位置づけ

#### 1. カムイとしてのオオカミ

アイヌ民族の世界観において、オオカミはカムイとして位置づけられる。

アイヌ民族の伝統的世界観では、無機物も含めあらゆるものに靈魂が宿っていると考える。それらは多様で個性に富むが、とくに強い霊力を持ち、人間への影響力が大きいものをカムイと呼ぶ。さらに人に対して親和的か無関心（または敵対的）かによって、前者をペケレカムイ「清い神＝善神」、後者をニツネカムイ「硬い神＝悪神」と呼ぶ。もともと、善神の怒りを買えば不幸に見舞われ、また悪神が人を掬うこともある。善悪の区分は人との関係によって変化する相対的なものである<sup>1</sup>

日本人の信仰対象である神仏に対する認識と比較した場合、アイヌ民族のカムイに対する認識は、ここで述べられるように「相対的」なものであり、また、人と対等な存在として位置づけられている点で異なるといえる。本稿では、カムイと人は対等な存在として互いに礼を尽くす関係性を基本とするという理解を基本として議論を進める。

先行研究において、オオカミはカムイの中でも概して格が高い神であるとされることがある。金田一京助は、アイヌ民族の山の神についてまとめる論考の中で、オオカミを含めて次のように説明する。

アイヌの山の神は、熊であり、狼であり、また木でもある。熊はすべてキムンカムイ（山に棲む神——山の神）で、その一等の大將はヌプリ・コロ・カムイ『嶽を領する神』と呼ばれる。北海道の分水嶺に空に聳ゆる神山があって、そこに住する最も東寄りの神がヌプリパウンクル『嶽の上の人』で狼であり、中央のが『嶽を領する神』で熊であり、嶽の下のがヌプリ・ケシ・ウンクルでこれは一等疍瘡の強い荒い神、即ち羆である<sup>2</sup>

アイヌ文化では、広く「東」側が神聖視されていたことが知られ<sup>3</sup>、「ヌプリ・コロ・カムイ『嶽を領する神』」の中でも「最も東寄りの神」とされるのがオオカミであるという。また、オオカミをヒグマよりも地位や格の高いカムイとして位置づける地域があったとされている。どのような理由からそうした位置づけを与えられたのかについては、明確な説明がないために不明だが、地域によっては他の動物神よりもオオカミが人に親和的であったか、より重視されていたと考えることができる。オオカミをヒグマの祖先と見なしたり<sup>4</sup>、ヒグマに襲われた人間をオオカミが助けてくれることがあるとする伝承がみられたり<sup>5</sup>することから、ヒグマと関わる点において価値を見いだされていた可能性もある。

アイヌ民族とオオカミの関わりについて、従来の議論では、こうしたオオカミの格の高さ、人に対して親和的なカムイであるとする言説とともに、アイヌはオオカミを捕獲しなかったと論じられることがある。

アイヌにおいては、各地でオオカミが神格化され、その神が伝承化され、また毒矢で殺してはいけないという一連の思想が広く分布してきたようであり、民族誌としてその位置づけは比較的明確であるように思われる<sup>6</sup>

オオカミは自分たちで鹿をとって食べていても人間がたまたま通りかかり咳払いするとその肉をゆずるといふ。逆に熊は自分が獲った獲物を人間に横取りされると村まで取り返しに来るほど執着心が強く恐ろしいものとしている。だからアイヌはけして狼に矢を向けてはならないと戒められている。又熊に襲われた人間を熊から救うなどの話が伝承されるなどアイヌとは良き隣人のようであった<sup>7</sup>

このほか、アイヌはオオカミを毒矢では殺さなかった、あるいは捕殺をしなかったと理解できる記述は多く、アイヌとオオカミの関わりを述べる記述の中に広汎にあらわれる。しかし、その由来や典拠を辿ろうと試みると、もともとのアイヌ側の事例や話者が不明確な事例が多く、納得のいく検証をすることが困難な状況にある。たとえば、犬飼哲夫は次のような記述を行っている。

アイヌも昔はオオセカムイと言ひまして一匹打ち殺すとその仲間が澤山に集つて来ましたので気味悪がつて余り捕らなかつたのであります。そこで狼は当時の旅人を盛んに威嚇していたのであります<sup>8</sup>

ここでは、オオカミの捕殺を前提とし、しかし、一頭を打ち取ると他の個体が集まってくることで、つまり危険性があることが意識されているといえる。この論文が発行された1932（昭和7）年以前に聞き取られた内容であり、その結果を元に述べていると考えられる。

犬飼哲夫の論考は、エゾオオカミに関する生態・歴史・文化のいずれのカテゴリー

においても基礎基本と位置づけられ、もっとも参照される機会が多い記述と考えられる。アイヌ民族とオオカミの関係性を議論する上でも同様だが、ここでは話者が語ったのは説話や口頭伝承の内容だった可能性もあり、どのような文脈だったのかが判然としない。

## 2. 和人による先行研究が抱える問題

アイヌとオオカミの関わりについて著述や議論に取り組む文献は、決して少なくない。ただ、時代を遡るほど、重要な情報を記してはいても、その話者や地域、典拠が不明確なことが多いという問題を抱えている。近年の文献では、この問題は解消されているが、典拠が不明確なまま定説と化している場合も多く、実態を反映しているのか疑問が残ることがある。

くわえて、各時期の社会的な流れや議論の動向を反映して、議論の目指す方向が変動している可能性が考えられる。アイヌとオオカミをめぐる記述でも、同一の著者の言説が変化している例が散見される。たとえば、動物考古学者として著名な直良信夫は、エゾオオカミに関する情報収集を積極的に行い、1938（昭和13）年には幌茂尻のアイヌから独自の聞き取りを行って<sup>9</sup>。しかし、著作中の記述を確認すると、およそ20年間のなかで大きく変化している。

『日本哺乳動物史』[1944（昭和19）年]

オホカミはごく最近まで（せいぜい百年程前）北海道に棲息していたのであつたが、之はアイヌによつて狩りつくされた<sup>10</sup>

『日本産狼の研究』[1965（昭和40）年]

故杉山氏の話によると、アイヌ人自体も、狼を神としてあがめ奉る風習が非常に強く、したがって捕殺することをあまり行わなかつた。アイヌの神体の中に、狼の頭骨がきわめて稀なのは、こうした意味からだということである<sup>11</sup>

ここではほぼ正反対のことが述べられている。この食い違いについて、『日本哺乳動物史』の内容は、明治時代に官主導で行われた有害鳥獣獲殺制度に関わる事態について述べられており、一方の『日本産狼の研究』では、アイヌ民族自身の認識として研究者に伝えたアイヌがいたと考えることも可能ではある。ただし、明確な言及はない以上、想像の域を出ない。

アイヌ民族にとって、オオカミはカムイとして位置づけられる存在である。しかし、実態としてどのような関わりがあつたのか、和人側の記述内容には揺らぎがあり、これまで検討されてきた内容から追及していくことには困難さがあるといえる。とくに、アイヌがオオカミを狩猟対象としていたのかという点については、さまざまな解釈や食い違いが生じており、どのように結論づけるべきなのかが明確ではない点で特徴的といえる。たとえば、和人の側からみた「オオカミを殺さない」行為と、アイヌ文化

の核ともいわれる送り儀礼において動物を殺すことでその皮をまとっていたカムイを解放し、神の国へと送り返す、その際の「オオカミの死」について、区別されないままに語られることで生じる混乱もあると考えられる。上記の直良の記述でも、オオカミを崇めるがゆえに捕殺しない、そのために頭骨が残らない、と論じられているが、アイヌ民族の送り儀礼において頭骨が重要な構成要素であることは議論をまたない。

これまでは、アイヌ民族がオオカミを捕殺しなかったこと、その一方で送り儀礼の対象としてきたことが併記され、しかしそれぞれ何を理由とした行為・結果なのかが明確な区別がされないまま議論に供されてきたといえる。

このほかにも、1933（昭和8）年の犬飼哲夫の論文により、オオカミを飼育していた地域・事例が紹介され、ヒグマやシマフクロウのような飼育型の送り儀礼が行われていたとも受け取れる記述がある<sup>12</sup>。現代では、動物学やその周辺分野で紹介される際には、それが普遍的なアイヌ民族とオオカミの関わりであるかのような描写となってもいる。しかし、オオカミについて飼育型の送り儀礼が行われていたという明確な記録はなく、細部が曖昧なまま議論に供されているのが実態といえる。

### 3. アイヌ民族によるオオカミの狩猟

アイヌ民族はオオカミを狩猟の対象としていたのか、という疑問を解決することは、過去の人とオオカミの関係性を検討するためだけではなく、エゾオオカミの絶滅過程の細部を検討するためにも重要と考えられる。エゾオオカミの絶滅には、和人による主導があり、アイヌ民族は其中でオオカミを狩猟する形で関わっていたことがすでに明らかにされている。記録をまとめた山田伸一は、次のような問題提起を行っている。

神を「送る」儀礼をきちんと行うならば、猟獲したヒグマ・オオカミによって現金を受け取ること自体は、アイヌ民族の宗教観と特に矛盾を生むことはないように思われる。とは言え、生息数に大きな影響を与えるような活発なオオカミ猟に対し、個人の内面で、あるいは集団の内部で何の抵抗感もなかったのだろうかという点は、気になる問題である<sup>13</sup>

ここでは、アイヌ文化における動物と人の関わりが前提とされている。たしかに山田が述べるように、送り儀礼の体系に則ることで、アイヌはカムイへの礼儀をつくすことができる。結果として、それまではオオカミを積極的な狩猟対象とはしていなかった場合でも、心情的な葛藤を解消することが可能であると考えられる。ただ、従来いわれてきたようなオオカミの狩猟を禁じる、あるいは戒める意識や規範がアイヌ側に存在していた場合、葛藤の度合いはより大きかったことになり、どのような意識から駆除活動に従事したのかも大きな疑問となる。本来はタブーとされる行為を強制されていたのであれば、当時のアイヌ民族の生活破壊、文化断絶の一面を担っていた可能性も生じてくる。

こうした議論の曖昧さや矛盾を解消するためには、和人による有害鳥獣獲殺が開始される以前、アイヌ民族がオオカミとどのように関わってきたのかを明らかにしていく必要があると考える。とくに本稿では、オオカミの狩猟や捕殺を禁じる意識が実際に存在していたのか、また、あったとすればそれはどのような理由によるものなのかを検討する。

## 第2節 アイヌ口承文芸にあらわれるオオカミ

本節では、アイヌ民族とオオカミの関わり、とくに狩猟活動に関する描写を口承文芸の中から抽出し、整理検討を行う。以下では、まず資料の収集と性質について述べ、対象資料中に確認できたオオカミの狩猟、および人とオオカミの敵対描写を元とした検討結果を整理することとする。

### 1. 対象資料

#### 1-1. 収集方法

本稿における調査・分析では、現在までに一般に刊行されているアイヌの口承文芸資料を対象とした。対象とする地域については、北海道アイヌの口承文芸に限定した。これは、サハリンアイヌが有していたオオカミ観と、北海道アイヌが有していたオオカミ観が同一のものではないと考えられるためである<sup>14</sup>。

オオカミがあらわれるテキストに調査対象を限定するための手順として、まずは1980年代までに刊行されたアイヌの口承文芸のテキストをほぼ網羅する『日本昔話通観 1 北海道 (アイヌ民族)』<sup>15</sup> (以下『日本昔話通観』) から基礎資料の抽出を行った。同書にアイヌ民話として収録されている1,718件のテキストの内容を確認した結果、オオカミが登場する内容のテキストは71件存在した。次に、これらの71件の典拠を確認し、元となったテキストを調査した。実際に文献をあたったうえで、ローマ字、あるいはカタカナ表記でアイヌ語の原文が併記されているテキストのみを抽出した。これは、北海道アイヌがオオカミを指す際に用いる名称「ホロケウ」あるいは「ホロケウ・カムイ」の使用を確認するためである<sup>16</sup>。また、重複を避けるため、話者あるいは採録された地域を市町村単位で特定できることを確認しつつ絞り込みを行った。結果として、この段階では35件のテキストにまで絞り込むことができた。

ここまでの作業を終えたうえで、『日本昔話通巻』では把握することができない、1980年代以降に刊行された文献を補完的に収集する作業として、おもに図書館を利用した文献渉猟に取り組んだ。ここまでと同様に、アイヌ語原文、オオカミの名称、話者・採録地域の特定ができることを条件とし、すでに収集した口承文芸と重複していないテキストであることを確認しながら調査を進めた。この調査・作業の結果として、『日本昔話通巻』からは捕捉することができない33件のテキストを抽出し、オオカミがあらわれる口承文芸として追加することができた。

本稿では、オオカミが登場する 68 件のテキストを基礎資料と位置づけるが、このうちアイヌによるオオカミの狩猟・捕殺の描写がみられたのは 6 件である。

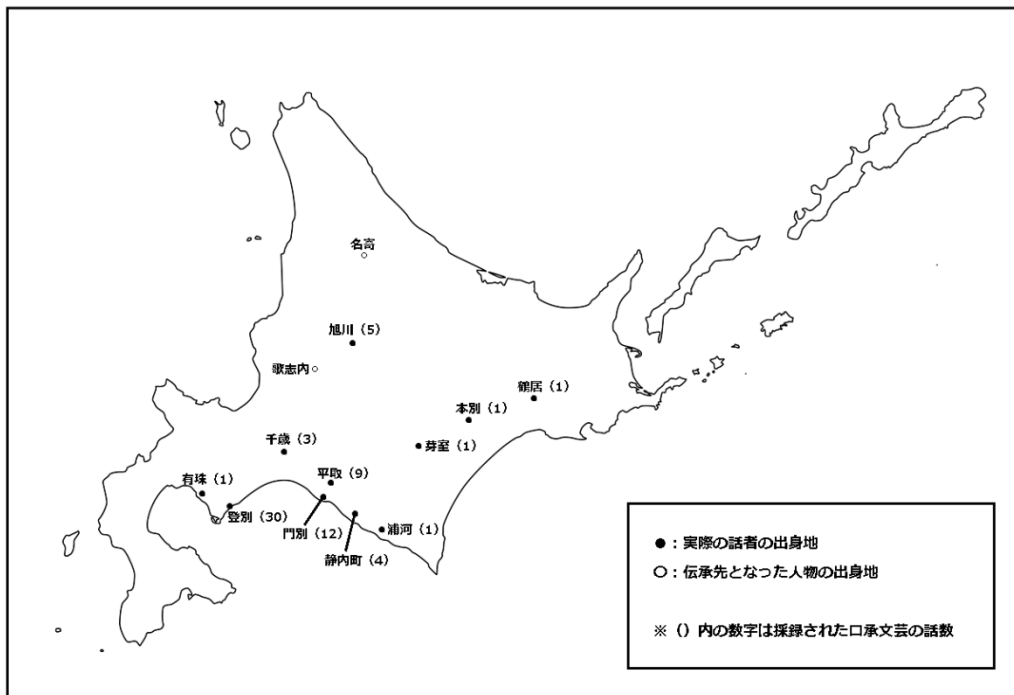
## 1-2. 資料の性質

### 1-2-1. 対象年代

本研究における調査で確認できた口承文芸は、同一話者が伝承する複数のテキストを含む。そのため、話者総数は 24 名となる。それぞれの話者の生年を確認すると、おおよそ 1880～1900 年頃を中心としている [資料編：「付表②アイヌ口承文芸一覧」参照]。したがって、今回の分析対象とするテキストの内容にあらわれるのは、おおよそ近世末～明治時代以前のアイヌのオオカミ観となると考える。

### 1-2-2. 対象地域

話者および伝承先となった人物の出身地が特定できる資料の分布について、市町村単位でみると、旭川、有珠、歌志内、浦河、静内、千歳、鶴居、名寄、登別、平取、本別、芽室、門別の 13 か所となった【図 1】。分布上では道央・道南・道北・道東にわたり、広域をカバーできているといえる。しかし、地域ごとのテキスト数をみると、北海道南部、とくに胆振・日高地方に集中して分布しており、数の上での偏りがある。特定の地域でオオカミを登場させる傾向があることを反映した可能性もあるが、本稿



【図 1】口承文芸話者の出身地

で対象として設定した条件により、制約された結果ともいえる。今後は、和文のみで記録されるテキストも対象に含めるなど、対象を拡げることで資料数を増やしていくことで他地域の事例・情報の補完を試みる。

なお、本稿で議論の対象とする68件のテキストは、すべて資料編「付表② アイヌ口承文芸一覧」にまとめた。以下では、議論の対象とするテキストを【資料〇〇】と番号で示す。資料番号は、「付表② アイヌ口承文芸一覧」に記載の番号と対応する。

## 2. 口承文芸にあらわれるアイヌのオオカミ猟

本稿で対象としたテキストの内容を確認した結果、「アイヌ民族はオオカミの狩猟を行わなかった」あるいは「狩猟を禁じる何らかの意識が存在した」ことに言及する事例は確認できなかった。

具体的には以下に展開整理していくが、いずれの口承文芸でも人々がオオカミを捕殺することに躊躇する様子はみられない。無意味に殺すことはないが、必要に応じてオオカミを猟することは、伝承の中では肯定されている。むしろ、オオカミは人を襲い殺すこと、ときには村を壊滅させるほどの被害をもたらすことがあり、可能であるならば対抗しなければならない存在であると考えられる結果が得られた。なお、殺した後の遇し方には注意が必要であると理解できる内容のテキストが存在した。結論として、アイヌ民族にとって、オオカミを狩猟対象としない、あるいはオオカミ猟を禁じる意識は、少なくとも全道一円で常にみられたものではなかったといえる。

以下では、口承文芸の中に確認したオオカミの狩猟・捕殺に言及があるテキストの内容について展開する。また、関連する要素として、オオカミの送り儀礼の描写および人と敵対するオオカミの描写があるテキストについても併せて内容を確認した。

### 2-1. オオカミの狩猟・捕殺が見られる口承文芸

本稿で対象とする口承文芸資料68編中、オオカミ捕殺の表現がみられたのは6件となった。口承文芸中の内容を整理すると、テキスト中のオオカミの位置づけには次のパターン<sup>17</sup>があると考えられる。

- (1) 天の国と関連づけられる高位のオオカミ神（人間の姿を持ち、強い力を持つ）
- (2) 動物神としてのオオカミ（獣の姿であられ、人格を有する場合と有していない場合がある）
- (3) イヌとしてのオオカミ（イヌとして描写されるが本性はオオカミである）
- (4) 憑き神としてのオオカミ（刀や木彫りに宿り、必要に応じてオオカミあるいはオオカミの要素を持つ化け物のような姿に具現化する）

このうち、オオカミを狩猟・捕殺する内容のテキストは(4)以外のパターンで確認できた。本章第1節で述べたように、アイヌ民族の世界観において動物を殺すことは、その動物の皮をまとめて人間界を訪れていたカムイを解放し、神の国へと送り返すこ

とである。また、カムイは人と対等であるため、オオカミのほうに落ち度があつて殺された場合、本来神々の国へ帰るはずの魂を湿地の国（地獄）に落とされるという罰を受けることになる。同様に、人の側に落ち度がある場合も死後の処遇で報いを受けることになる。そのため、オオカミの捕殺に抵抗感やタブーがあるとすれば、「カムイとして復活できない」という理由付けと関連すると考えられる。

### 【資料1】「神々や妖怪に欺かれた姉を救ったオタスの子供の話」

美しい姉が人に化けた神や妖怪に欺かれて次々と結婚し、主人公である少年の「私」がその招待を見破っては退治していくという展開のテキストである。ここにあらわれるオオカミは、「豊猟を告げる雄たけびを上げて、山から下」り、「人間のうちでも人の上に立つべき人」と描写される。狩のうまさ、遠吠えや人格描写などは妖怪と呼ばれるカニやウグイなどが化けた人間とは異なる存在であることを悟らせる。しかし、夜に火を灯して見ることで正体が大きなオオカミであると露見し、棍棒で叩き殺される。殺される際、ほかの動物は少年の一撃で死ぬが、オオカミは「あばれたので、そこへ何度も打ち」という描写があり、ヒグマには劣るが、弱弱しくはない存在として描かれている。

このテキストでは主人公の姉はクマのカムイと結婚する結末となるが、決着がついた後に熊神からの頼みで死んだオオカミを送る「ホプニレ hopunire」,「ホプニカ opunika」の描写がある。しかし、オオカミはここでは「ただの幣」で送られ、棒で叩き殺すことができるカムイであることとあわせて、熊神ほどの位にはない存在とみなされると考えられる。

### 【資料10】「ユカラ 8」

「ユカラ 8」は、主人公であるポイヤウンペの息子を守る「育ての姉」が、実際にはオオカミ神であるという位置づけでオオカミが登場する。この育ての姉は、ポイヤウンペの名声に嫉妬心を抱き、ポイヤウンペとその妻を殺したという素性を持つ。

テキスト中、人の姿に化けているオオカミ神の姿について、口が大きく裂け、目が輝いている、骨を食べる、手足が大きいなど特徴的な描写がある。おそらくはアイヌからみたオオカミ外見や特徴となる要素を反映した描写であると考えられる。

拾ったポイヤウンペの息子を大切に育てていたが、育ての姉が両親を殺したことを知ったポイヤウンペに復讐として小屋ごと焼き殺される<sup>18</sup>。

### 【資料11】「ユカラ 12」

このテキストは物語の途中から開始される。主人公であるポイヤウンペに対して、ポイヤウンペには許嫁がいることを知りながら横恋慕したオオカミの娘が戦いを挑んでくる。オオカミの娘は「6人の女6人の男は／年寄りたちといっしょに」<sup>19</sup>と一族郎党を率いてあらわれ、戦いの後に「地獄（ポクナモシリ）」に突き落とされる。

オオカミは、男は槍や刀、女は短刀を用いて戦う描写があり、男女の別なく武器を

持って戦う存在であると描かれている。武器を持った人間と対等に戦うことができる存在と考えられるが、ポイヤウンペは「首をいっぺんになで切り」にし、ひどく叩くことで地獄に突き落とされている。

### 【資料 35】「若きテクペニ神がオタサム村を撃つ物語」

このテキストでは全、編を通してオオカミが登場し活躍するが、描かれるのはオタスッ人とオオカミ神たちとの大規模な戦争である。

オオカミ神に関わる部分に注目して要約すると、オタスッ人の許嫁であるオタサム女に、人を守るために天から降ろされていたオオカミ神の弟が言い寄る。それを目撃したオタスッ人が、オオカミ神の弟を殺した。しかしその殺し方（「蘇生できない殺し方」）が普通ではなかったために、オオカミ神の弟は二度とこの世へ帰ってこられなくなってしまい、裏の国土へ降っていった。それを知った天の国の神々や、位の低いオオカミ神が、オタスッ人を殺そうと動き始める。ここでオオカミ神は「仲間が多い」と称されている。しかし、オタスッ人の父が祭っていた天の国の狼神の妹が、事前にあらわれて事情を明かす。やってきた位の低いオオカミたちは次々と人に化けて槍や短刀でオタスッ人側と戦う。オオカミ神の妹はオタスッ人の味方となり、敵方のオオカミたちからの罵倒を受けつつ戦い、結果としてはオオカミ側が負けて湿地の国に落とされる。オタスッ人はオオカミたちの謝罪を受け入れて和解し、狼神の妹はオタスッ人の妾となる。

このテキストのみを用いて、オオカミと人との間に規模の大きな闘争があったと直截的な解釈を行うことはできないが、カムイとしてのオオカミに人と争うことがあるという性質を付与し、仲間が多い<sup>20</sup>ことから手ごわい相手として描写されているのは興味深い。

このテキストには複数のオオカミが登場し、それぞれの位置づけが異なる。名称をみるかぎり、上位に位置づけられるオオカミと下位に位置づけられるオオカミがあることがわかり、統括されているようである。最も位置づけが高いのは、「最も高い天の国の shirikun kanto otta」／「本当の狼神 shihorkew kamui」／「殿犬神 tonotase<sup>21</sup> kamui」とされるカムイである。続いて通常の”horkeu kamui”があり、さらに「人間国土の Ainu moshiri／深い山 Kimun iwor／狩場にいる Iwor so kasha／普通の仲間 Use utari」という位置づけとなるようである。また、人間国土にいる普通のオオカミたちにとって、天上のオオカミは、仲間のうちでも「頭の神 saba ne kamui」,「私共が仕える神 ahekote kamui」とであると位置づけられ、天上世界と地上世界に上下関係が存在すると考えられる<sup>22</sup>。

ここでは「蘇生できない殺し方」という表現がみられるが、具体的にはどのようなものかわからない。ただし、それが人とオオカミの戦争を生じさせるきっかけとなっている。後述する【資料 65】にあらわれる描写と合わせて、オオカミを殺したことでなく、その方法と処遇が問題となっているといえる。

### 【資料 61】「狩人の旦那（大将）の自叙 Matanki-tono yaieyukar」

このテキストでは、和人がオオカミを鉄砲で撃ち殺し、その後丁重に祭ることでオオカミからの加護を受けている。“Matanki-tono”は「和人の狩人」を指すという<sup>23</sup>。和人がオオカミと角力をし、勝負がつかずに動けずにいた。すると、オオカミの息が「自分を祭ってくれれば、自分の力、早く走る力を与えよう」という意味を持って聞き取れたため、和人はオオカミを鉄砲で撃ち殺し、丁寧に魂送り（hopunire）をした。その後、和人はオオカミ神を懇ろに祭り続け、長者となり、子孫に狼神の祀りを営めば長者となって反映することができると言い残してこの世を去った。

1932（昭和7）年に採集された神謡だが、採集者である久保寺逸彦は「和人の身の上話であるという点が特殊である」と特異な内容であることに言及している。伝承地が日高地方であること、オオカミを鉄砲で撃ち取るのは和人であること、狼神から授かった力で和人とその子孫が長者として栄えていくことなど、過去の現実を強く反映したと思われる要素が多々あらわれていると考える。力比べでは勝負が付かず膠着していたものが鉄砲を持ち込むことでオオカミ神が死ぬという結末と、きっかけはオオカミ神の側から「よく私を祈り、祭ってくれるなら、汝に、一生涯恵みを与えてやろう」と申し出ている点も示唆に富むといえる。かつて力ある存在だったオオカミ神を和人が次々と撃ち取っていく様子を描写し、そこに両者の約款が介在するのだととらえたとも考えることもできる。また、祈りと引き替えにオオカミ神を撃つことで富を得て長者となっていく存在は、和人の獵師の子孫であるとみなすことで昇華されるものがあつたのかもしれない。さまざまな解釈が可能な神謡といえる。

### 【資料 65】「オオカミ神と村おさ」

【資料 65】は、物持ちの村長に大切に育てられているイヌ（オオカミ神）が主人公であり、仲間のオオカミたちに遊びに誘われて丸一日狩りをしなかった罰として主人である村長に「薪の燃え尻」で打ち殺される描写がある。死骸はゴミ捨て場に放置された。同じ仕打ちを二度受けたオオカミ神は怒り、海にいる首領に事情を伝えてアイヌの村を滅ぼしている。最後に「だから／簡単に／イヌを／殺しても／沖の方へ／向けてはならないものだ／オオカミの先祖のいる／山の方へ行くことを教えるものだ／って話よ」と話がまとめられ、録音・編集者である萱野茂による「海の方にいるイヌは病気を司り、山の方にいるイヌの総元締めはアイヌを助けると考えていたと思われる」と注釈がある。

オオカミ（イヌ）を殺すこと自体は躊躇されないが、その後の扱いは適切でなければならないという教訓を伝えていると考えることができる。

## 2-2. 口承文芸中にあらわれるオオカミの捕殺方法

アイヌ民族の口承文芸において、人がオオカミを殺す描写では棒などの道具で打ち殺すか、刀で切るという方法がとられるようである。飛び道具は和人が使う鉄砲のみとなった。また、【資料 1】、【資料 10】、【資料 65】では火を使っている。【資料 1】で

はオオカミの正体を露見させていることから、火を苦手とする動物であるとする認識があったのかもしれない。

なお、後述するが、更科源蔵による聞き取り調査記録兼フィールドノートである『コタン探訪帳』内の記述には、オオカミと火を関連づける言及はみられなかった。口承文芸にのみあらわれる要素の可能性があり、今後さらに調査対象を拡げて確認していく必要がある。

### 2-3. オオカミを「送る」描写

オオカミの捕殺・狩猟の描写があるテキストをみてきたが、【資料 1】、【資料 35】、【資料 61】には、殺したオオカミを「送る」描写がみられた。アイヌ民族によるオオカミの送り儀礼については、実際に行われていたことを示す資料が現存する。北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園・博物館本館、新ひだか町静内郷土館、およびサンクトペテルブルグ人類学・民族学博物館において、送り儀礼に使用された痕跡のあるエゾオオカミの頭骨が確認されている。

前項でみてきたテキストのうち、【資料 61】にあらわれる送りの描写は特徴的である。狩人がオオカミを殺した後に「その骸を背負ひて山を下る／帰り来て／我が家に／下り着きたり／それよりして／大口の真神(狼の神)を／懇ろに／魂送りしてやりたり」<sup>24</sup>という表現がみられる。これは、山での獲物をコタンに迎えて送る際の表現<sup>25</sup>と合致する。また、「魂送り」という言葉のアイヌ語原文を確認すると「ホプニレ hopunire」という言葉が用いられている。

口承文芸に現われるクマ送りの表現を考証した児島恭子<sup>26</sup>によると、「ホプニレ」という言葉が指すのは、クマ送りの儀礼の中でも、「クマの頭をイナウで飾り付けて送る」ことであるという<sup>27</sup>。これまでに収集されている送り儀礼に使用されたというオオカミの頭骨資料から裏付けられると同時に、オオカミの送り儀礼の実際を垣間見ることができる記述と考えられる。

オオカミの送りに関する表現では、ほかに【資料 49】では、妻だったオオカミ神の娘が死んだ後、その抜け殻であるオオカミの死骸を送ることを「イワクテ」<sup>28</sup>と表現している。また、【資料 3】で、養い親であるイヌ（オオカミ神）が死んだ際に、左の目玉と右の目玉を入れ替える「互いの（目玉を）迎えるという姿にこしらえた」という特殊な表現もみられる。テキストの訳注ではこの表現の理由は不明とされているが、オオカミを送る際の作法や手順には地域的な差があったことが口承文芸の内容からも示唆される。

なお、児島には口承文芸における送りに関する表現について以下の指摘を行っている。

江戸時代にはイヨマンテという行事名がみられますが、いくつもある送りを示す言葉のなかでオマンテという言葉のみがイヨマンテとなって、すべての地域のアイヌの儀礼名になるのは不思議です。口承文芸においては、送り儀礼を指す言

葉は固まっています。

(略)

なぜイオマンデとっていなかったのか説明されていませんが、アイヌ語ではイオマンデに限られていないのでクマ送りと表現されていたと解釈するのはうがちすぎでしょうか<sup>29</sup>

本稿で対象とした口承文芸のうち、オオカミの送りに関わる描写があるテキストでも、この指摘と同様に用語は一貫していなかった。上記の児島による指摘を受けつつも、現在一般に飼育型の送り儀礼として認識される「イヨマンテ」にあたる送りのパターンも、本稿で対象としたテキストの中には確認できなかった。

犬飼哲夫が著作の中でたびたび言及していたために、過去にはオオカミでも飼育型の送り儀礼が存在したのだろうと見なされることが多い。しかし、結果として該当する描写はみられず、むしろ人の元に「イヌ」としてあらわれるパターン、あるいは人間の姿で主人公のパートナーや両親としてあらわれるパターンのいずれにおいても、オオカミ（イヌ）は地上での死を迎えてから送られる描写となっていた。

カムイとして位置づけられるオオカミの中でも、人にとってもっとも親和的な存在は、口承文芸の中では「イヌ」と呼ばれ、実際にアイヌの元ではイヌとみなされるようである。ただ、この存在は、普通のイヌとは異なり単独でヒグマを仕留めてきたり、他のイヌから吠えかかられたり、実際には異なる存在であることが描写あるいは言及されることで区別できると考えられる。

#### 2-4. 人と敵対するオオカミ

人にとって親和的なオオカミの姿がイヌとみなされるのに対して、一方的に人を襲い殺すようなオオカミは人格を伴わず、カムイとしての意志や思考を持つとは思えない描写をされる可能性がある。人がオオカミを狩猟・捕殺する描写が確認できた6件のテキストでは、いずれも人をだましたり、危害を加えたりしたオオカミとその死の因果関係が明確といえる。【資料 65】は、「村長」の態度は横暴だが、それでもイヌ（オオカミ神）が仲間のオオカミと遊ぶことに熱中して獲物をもたらさなかったために撃ち殺されたという理由の説明がある。

【資料 12】「狼から逃れた娘」および【資料 53】「狼の襲撃から危うく難を逃れた女の話」では、大勢のアイヌの女性がオオカミの群れに襲われ、食い殺される事件が描かれる。アイヌ口承文芸として非常に異質な内容の口承文芸と位置付けられており<sup>30</sup>、オオカミとアイヌの人々との間にこうした事件・事故が起きていた可能性が明確に表現されているといえる。

どちらのテキストもほぼ同様の内容となっている。ウバユリを掘るために女たちが集まって山へ向かい、夜は山中の狩小屋に泊まる。寝静まった頃、1頭のオオカミが小屋の中まで侵入してきて、人々の匂いを嗅いで回る。それを主人公の女性が焼き串で鼻を突き刺して撃退する。オオカミは表に飛び出して遠吠えを繰り返し、激しく吠

えたてる。語り手の女性はもう一人の仲の良い女性と舟で逃げ出して村へ戻り、助けを求めたが、戻った頃には狩小屋で寝ていた他の女性たちは食べられて骨しか残っていなかった。オオカミに食べられた女性たちのことを忘れられず、叙述者は年をとってしまった、という内容である。

この2件のテキストの中で、オオカミは人格を持たず、人との意思疎通を行わない。オオカミが人を攻撃する前、においを嗅ぎ回るという行動に対して人が攻撃を加え、「先に手を出した」と受け取れる表現はあるが、その後のオオカミ側の対応は一方的であり、人の側の行為とつりあう報復とはいえない。

【資料12】【資料53】のほか、【資料63】【資料66】でも、人を攻撃対象とみなすオオカミが描写されるが、登場人物はいずれもオオカミから全力で逃げるという手段を選択している。イヌ以外の家畜を飼育することはなかったとされる北海道アイヌは、オオカミと対立することはなかったといわれることがある。むしろ、オオカミは狩った獲物を人に授けてくれることがあるという点で、獲物を占有しひどく執着するヒグマとは異なるとされ、その親和的な態度をもって良いカムイとして高い地位を与えられるとも論じられる。ただし、そうした均衡とは別のイメージが存在し、口承文芸の中に残されていることも今後の議論に反映していく必要があると考える。

以上にみてきたとおり、本稿で対象としたテキストでは、「アイヌ民族はオオカミの狩猟を行わなかった」、あるいは「狩猟を禁じる何らかの意識が存在した」ことを明確に読み取ることができる例は確認できなかった。【資料35】および【資料65】の表現からは、オオカミを捕殺する際、あるいは捕殺後の遇し方には注意を必要とする可能性をうかがわせるが、オオカミのみに関わる条件などがあるわけではないようである。

検討対象となる事例がごく少数であるために全体的な結論をのべることはできないが、少なくとも全道一円に普遍的にみられる認識ではないと考えたい。

しかし、現在では、アイヌはオオカミを狩猟しなかったとする先行研究が存在し、広く受容されている事実がある。どのような理由からこうした状況が生じたのかを検討するため、次節では情報が発信された際の状況やその背景を確認する。

### 第3節 情報発信者による取捨選択

本節では、アイヌ民族とオオカミの関わりをめぐる言説について、更科源蔵によって発信された情報と、その発信の過程を確認する。更科は、アイヌ民族・文化に関する著作を多数発表・刊行した人物として知られる。アイヌ関連の文献の多くが、その著作を参考文献として紹介・言及しているといえる。そのため、研究者からは、現在広く知られている言説の形成・普及に深く関わった人物と推測されている<sup>31</sup>。

日本国内で刊行されたオオカミに関わる文献を集約する作業を通して、北海道アイヌとエゾオオカミの関係性について、まとまった記述を行ってきたのも更科源蔵であ

ることが確認できている。しかし、これまでにその言説や記述された情報の内容が検証されたことはない。そのため、実際にどのような経過を辿って情報が発信されてきたのか確認する必要があると考えた。

本節では、対象資料の性質について説明し、現在までに刊行されている文献の内容と、「更科ノート」の通称で知られる『コタン探訪帳』『コタン探訪日記』の内容について整理を行った。

## 1. 対象資料

更科源蔵は、アイヌ民族とオオカミの関係性について多くの情報をまとめ、従来の議論に影響を与えてきたと考えられる。その情報の発信過程を確認することを目的とし、ここでは刊行された文献上の記述と調査段階で残された記録上の情報の双方を集約して整理することを試みる。

### 1-1. 刊行文献

資料の選定に際して、第1章における文献収集の結果に基づきながら、まずは更科源蔵の著作の中から、アイヌ民族とオオカミについてまとまった言及・議論が確認できる以下の文献を抽出した。

1942（昭和17）年 『コタン生物記』 北方出版社。

1946（昭和21）年 『北方動物記』 柏葉書院。

1967（昭和42）年 『カメラ紀行：アイヌの神話』 淡交社。

1976（昭和51）年 『コタン生物記Ⅱ：野獣・海獣・魚族篇』 法政大学出版局。

1982（昭和62）年 『アイヌの民俗：上』 みやま書房。

本稿では、このうち1942（昭和17）年の『コタン生物記』と1976（昭和51）年の『コタン生物記Ⅱ野獣・海獣・魚族篇』の内容を確認する。なお、『コタン生物記Ⅱ：野獣・海獣・魚族篇』は、更科源蔵と、資料整理を手伝った長男の更科光との共著による書籍である。

### 1-2. 『コタン探訪帳』

弟子屈町図書館が所蔵・管理する『コタン探訪帳』19冊、『コタン探訪日記』1冊（以下は総称として「更科ノート」と表記）は、更科源蔵のフィールドノートおよび調査記録として知られる。収録されているのは、1950年代から1970年代にかけて更科が取り組んだアイヌ民族・アイヌ文化に関する聞き取り調査の結果である。およそ350人から聞き取った情報が整理されて収められており、アイヌ民族の研究者や北海道地域文化を対象とする研究者から高い評価を受けている<sup>32</sup>。

本稿では、「更科ノート」の内容を調査することで、刊行される文献の内容およびその前提としてどのような事例や情報を収集していたのか、また、著作に利用・反映さ

れなかった情報の有無が確認できると考えた<sup>33</sup>。

本資料の調査は2015（平成27）年10月23日・24日にかけて実施した。結果として、『コタン探訪帳』19冊の中には56件のオオカミに関する記載が確認できた。『コタン探訪日記』1冊の中にはオオカミに関する記載は確認できなかった。これら内容は必要事項およびオオカミに関わる記載の要約をリストにまとめ、巻末の資料編「付表③『コタン探訪帳』中に確認できるオオカミに関する記述」に掲載した。

### 1-3. 資料の性質

上述のとおり、本稿で対象とする資料は、『コタン生物記』、『コタン生物記Ⅱ：野獣・海獣・魚族篇』、「更科ノート」の3種類の文献とする。これらの資料の関係性をまとめると、まず1942（昭和17）年に刊行された『コタン生物記』があり、その内容を加筆修正して書き改めたものが、1967（昭和42）年に刊行された『コタン生物記Ⅱ：野獣・海獣・魚族篇』となる。一方、この約30年のあいだに「更科ノート」が作成されている。つまり、更科ノートの内容を踏まえて『コタン生物記』を改訂し、刊行された文献が『コタン生物記Ⅱ：野獣・海獣・魚族篇』と考えることができる。なお、『コタン生物記Ⅱ：野獣・海獣・魚族篇』は、全編を書き改めるにあたって動植物267項目の内容を書き直し、230項目を追加したことが知られるが<sup>34</sup>、オオカミの項目に記述される内容にも変化が確認できた。民族的記述でもあり同時に多くの読み手を想定して書かれていることから、内容には著者自身の意識や動物観も反映されて表れていると考えられる。

くわえて、1981（昭和56）年から1984（昭和59）年に刊行され、「報告書」としての位置づけを有する『更科源蔵アイヌ関係著作集』Ⅰ～Ⅹの内容と比較すると、『コタン生物記Ⅱ：野獣・海獣・魚族篇』の内容は、一般の読者向けにわかりやすくまとめて書かれているといえる。また、動物種を単位としてまとめられている図鑑のような体裁でもあることから、動物学など他分野からも参照されやすいと考えられ、より大きな影響力をもつ文献といえる。

## 2. 刊行文献に見られる記述

1942（昭和17）年の『コタン生物記』には「狼（しべりやおほかみ）*Canis lupus* オンルブシカムイ」の見出しが立てられ、以下にオオカミに関する記述がまとめられている。

鹿をとつてコタンの糧道をひらいてくれたオンルブシカムイ（狼）は、鹿を獲ってくれるばかりでなく、いたづらをすると恐ろしい復讐をされるので、一段とえらい神様にもしたやうだ。もしも毒矢で狼を獲ると、その仲間が集つてきて恐ろしい危害の底に突き落とされてしまふ。だから人間の毒矢で獲られた狼は神様になることが出来ず、天の仲間のところへ帰ることも出来なくなり、したがって生まれかはれないから、絶対狼に毒矢を向けてはならないと固く戒められてゐる。

恐ろしい者に対して無鉄砲な行動をいましめるために、かうした神様へは礼をあつくすべきだと伝へのこすのである。

ここでは、アイヌの人々がオオカミを神格化する理由について、(1) 鹿を獲ってくれるため、そして(2) いたづらをすると怖ろしい復讐をされるため、の2点があげられている。オオカミは人に対して親和的な面、敵対的な面の二面性を持ち、その両面からの神格化がされていたと読み取ることができる。

また、オオカミの捕殺について、「毒矢」の言葉があるが、毒矢をもってオオカミを獲ることを戒める説明は明快といえる。オオカミを毒矢で射ると、射られたオオカミの仲間が集まってくる。この「集まってくる」理由は明言されないが、射られたオオカミの仲間が、毒矢を用いた人間に危害を加えるという事態が生じることになる。その結果、「仲間のオオカミに人に危害を加えさせた」という罪を犯すことになったオオカミは、天の神々の世界へ帰れなくなる。射た人間によって送り返してもらうことができないためにカムイに戻れず、生まれ変わることもできない。つまりは再びオオカミの肉体をまとして人間世界を訪れることができない状況に置かれ、関わった存在すべてにデメリットのみがもたらされるという理解がされているといえる。

アイヌ民族の世界観に基づき、オオカミを不適切な手法で殺すと、オオカミも人間も等しく不幸な状況に陥る結果になるために、オオカミを毒矢で狙うような無鉄砲をいさめているとすれば理解しやすい。最後の「かうした神様へは例をあつくすべきだと伝へのこすのである」の一文は、もとは神謡や散文説話形式での伝承だったのではないかとも思わせる。

オオカミを神格化する理由も、毒矢で射てはならない理由も、さらには人間側が余計な手出しをするとオオカミからの報復があるという因果関係も明確に説明され、アイヌ民族とオオカミの関係性の一端を解説する文章として過不足なくまとまっているといえるのではないかと考える。

一方、1976（昭和51）年の『コタン生物記Ⅱ』の内容を確認すると、大幅に内容を書き改めていることがわかる。項目見だしは「オオカミ」のみとなった。

狼のことを釧路地方ではオンルプシ・カムイ（狩りをする神）と呼び、十勝地方ではユクコイキ・カムイ（鹿を獲る神）と呼んでいる。この神様は鹿を獲って満腹になると、人間を呼んで残りの肉をさずけてくれるからである。また狼が鹿を獲って食べているところに行きあっても、咳払いすると獲物を置いて人間に席を譲ってくれるものであるという。そしてもしこの神様を毒矢で殺したりすると、他の神々のように復活をすることができないから、絶対に毒矢を向けてはいけないと、固く戒められている。この動物はたとえ弓矢で獲ったところで皮も肉も役にたたず、逆に仲間を呼び集めて、集団で危害を加えたものに襲いかかってくるから、無鉄砲を戒めたものである。

オオカミを神格化する理由については、オオカミとシカの結びつきが強く意識した方向で強化されているといえる。捕らえた獲物のシカを人間に分け与えてくれるカムイであるという、伝承の内容と実際のアイヌ語名称が結び付いたことでより理解しやすくなった。一方、『コタン生物記』側では明記されていた、人と敵対的な面をもつことについての記述が削除され、読み取れなくなっている。「一団とえらい神様」という文言がみられないことから、他のカムイとの差別化を控えた可能性もある。

ただし、代わりに「たとえ弓矢で獲ったところで皮も肉も役にたたず」という一文が追加され、その部分と人に対して敵対的な面をもつことが結び付けられている。価値のないものに手を出して、無用な危険を引き寄せないようにという教訓に変化したように読み取れる。『コタン生物記』と同様に「無鉄砲」を戒める意図の文になっているが、もともとはその前に示される毒矢を用いたオオカミの捕殺とその結果に結びつく結論であり、かつての意図は分解されたことで不明確となっているといえる。

また、毒矢で射ることによりカムイとして復活することができない動物である部分も独立した文章となった。結果として、どのような理由から毒矢の使用が禁じられ、また、なぜ他の動物とはちがってオオカミだけが復活できないという特殊性を有するのか、理由を読み取ることができない。

シカとの結びつきが明確化された一方で、毒矢の使用はもとより、オオカミを狩猟すること自体を諷めているように受け取れる記述となっている。『コタン生物記』の内容からは明確に読み取ることができていた「人間側から余計な干渉をすれば報復を受ける可能性があり、それがオオカミの側にも不利益となる」ことが、『コタン生物記Ⅱ』では曖昧にされているのは不可解といえる。

現在、アイヌとオオカミの関係性、その中でもとくに狩猟の有無について、情報が曖昧で食い違うような状況が生じているのはここに起因するのではないかと考える。ここまでみてきた違いを踏まえると、どちらの文献を参照するかによって異なる情報を得ることになる。しかも、「無鉄砲を戒める」という全体の方向性は変わらないまま、細部だけが改編されているために、とくに意識せずに両方の文献に目を通していた場合は、さらに曖昧になりやすい状況が生じているといえる。文献を用いた研究や議論に取り組む場合、多くは知見の更新を予期してより新しい版を利用しようとすると考えられる。しかし、この場合は時期を遡った版の内容のほうが、省略・分解されておらず、アイヌの世界観に基づいた理解がしやすい記述となっている。

こうした内容変更がなされた理由は明確にはわからないが、著者の側が意図的に変更を加えた可能性と、聞き取り調査を重ねる中で変更が必要となる事例や情報を得ていた可能性が考えられた。この点について確認するために、「更科ノート」の内容と比較検討を行った。

### 3. 「更科ノート」に見られる記述

前項までの内容を踏まえて、「更科ノート」からオオカミに関わる項目を抽出した。「更科ノート」全体では、オオカミに関わる記載は56箇所を確認できている。これは、

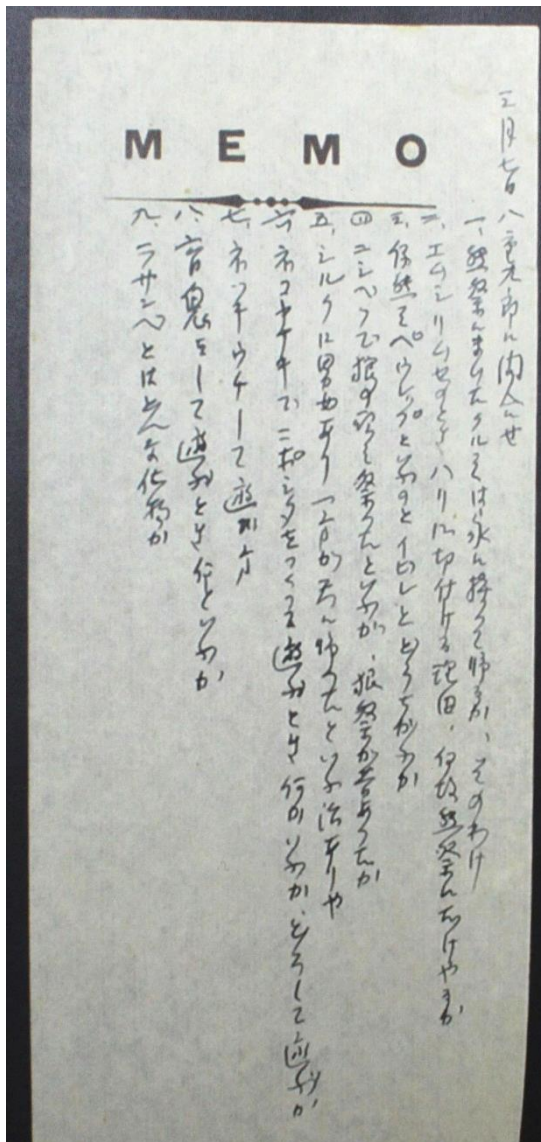
巻末の「付表③ 『コタン探訪帳』中に確認できるオオカミに関する記述」に概要をまとめた。それぞれ複数の項目を含む記述もみられたが、オオカミを狩る、祭るなど捕殺を伴うと思われる記述は11件が確認でき、以下の【表2】に示した。

【表2】更科ノート中に確認できたオオカミに言及する事例

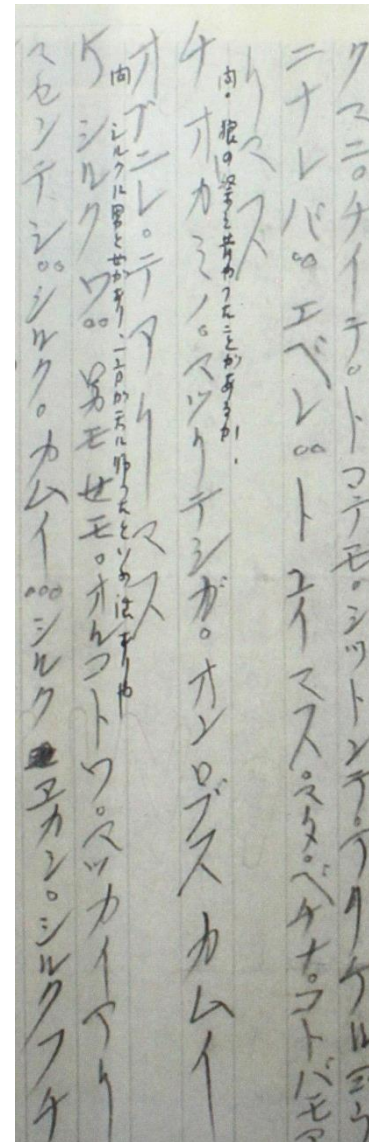
項目番号	ノート上の日付	調査地	内容
6	昭和27年 6月7日	名寄	Horokeu Kamui とると祭る Kotan kara Kamui ともいう
7	昭和28年 5月22日	標茶虹別	狼の頭も祭った
11	昭和28年 7月1日	鶴川村鯨部落	Iomande するもの Horukeu Kamui
14	日付不明	上士幌?	広川石太郎 この父がよく狼をとった
17	昭和30年 3月7日	—	三月七日 八重九郎に問合せ(略) 「四、ニシベツで狼の児を祭ったといふが、狼祭りが昔あったか」【図1】
18	—	鶴居	(八重九郎からの返答) 「オーカミノ・マツリテシガ・オンロブス カムイ オブニレ・テアリマス」【図2】
19	昭和30年 8月17日	塘路	<u>狼の子を送ったことがあった</u>
25	—	東静内	Horkeu tono
26	昭和32年 8月13日	荷負	狼(ホルケウカムイ) 犬のやうにやしなつてゐて送った。
34	昭和35年 6月23日	虻田	狼(horukeu Kamuy) まちがつて獲ると送る飼ったことはきかない
36	昭和36年 4月12日	雪裡	狼 飼はないが(オ口の先祖は)狼が犬に交尾してできた仔を飼つてゐた。よく狩ある。もしとるとていねいに送った。

オオカミを「獲る」、「送る」・「祭る」対象とする記述は多くみられることがわかる。管見のかぎり、1961(昭和36年)の雪裡での記録がもっとも新しいものとなるが、オオカミを獲るとする記述は調査期間中継続して聞き取っていたようである。

また、1955(昭和30)年3月には、過去に「狼祭」があったかどうかを八重九郎に手紙で問い合わせしており【図1】・【図2】、関心を寄せていたことがうかがえる。



【図1】更科源蔵からの問い合わせ内容



【図2】八重九郎からの返答

しかし、オオカミの狩猟はしない、あるいは禁じると明言する記述は、管見のかぎりでは「更科ノート」中に確認できなかった。筆者は、調査記録の中に、刊行文献側の既述内容を変更する必要性が生じるような記録があるのではないかという仮説を立てていたが、証明することはできなかった。

従来、アイヌ民族とオオカミの関わりに関する議論には、曖昧さや食い違っているように読み取れる部分があった。これは、更科源蔵の著述の内容を確認すると、時代を下るにつれて著述される内容に変化があったためと推測される。それも、エゾオオカミに関しては、早くに刊行された文献のほうがアイヌ民族の世界観と合致する解説

がみられる結果となった。更科源蔵の著作は、アイヌ民族とオオカミの関わりについて考える際に利用されることが多く、このことが、従来の議論に影響を及ぼしてきた可能性があると考えられる。

アイヌ口承文芸の内容を確認すると、アイヌ文化において、オオカミは人を援助し、力を与えてくれる神であると同時に、人と争い、危害を加える姿が伝承される存在だったといえることができる。アイヌ民族にとって、オオカミは常に人に親和的・好意的な存在であるとは限らなかった。捕らえた獲物を譲ってくれる、あるいは狩猟能力に長けたイヌを通して人の生活を助けてくれるカムイである一方で、場合によっては人に対して危害を加える相手として、両者の関係性には緊張感が介在したといえる。伝承の中で相対化され、対等であることが強く認識される関係性は、現実の軋轢や緊張感を昇華させるためのものでもあると考える。

伝承において登場するモチーフとしての人とオオカミの関係は、アイヌ側が「望む形」に現れていると考えられるが<sup>35</sup>、この点において、伝承中のオオカミとイヌの関係性は興味深い。ヒグマについては「飼い熊送り」を描写する伝承が確認され、クマはクマであり続ける。それに対して、オオカミでは人の元で育ったオオカミは基本的にイヌとして生きて死ぬ様子である。神々の国へ送り返されるのは人間世界で死を迎えた後のことである。伝承中にイヌとしてあらわれるオオカミが、本性はオオカミであっても生を終えるまではイヌとして暮らすことができるらしい様子は、通常イヌをカムイとしては扱わないとされるアイヌ民族側の意識に照らして妥当であるように考えていた。しかし、本稿における調査では、「更科ノート」の中には「オオカミの子を送った」とする記録が確認できた。

こうした状況から、オオカミの飼育は、比較的近年になって生じた行為だった可能性があるのではないかと考える。市町村史の記録では、幕末にはオオカミ皮が軽物交易品に含まれていたという言及がみられ、さらに明治時代から施行された有害鳥獣獲殺に関わる制度は、きわめて短期間とはいえずオオカミに従来はなかった新たな金銭的な価値を付与した。アイヌ民族とオオカミの関わりのあるありかたについて、今後は本稿で対象とした種々の資料・事例をさらに増やすことを意識しながら検討を重ねたい。

- 
- 1 北原次郎太・大阪拓 2014 「7つのキーワードで知るアイヌの世界観」 北原次郎太監修『アイヌの世界を旅する』平凡社、p.1.
  - 2 金田一京助 1927[1993] 「山の神考」 金田一京助全集編集委員会編『金田一京助全集:12巻』三省堂。
  - 3 内山達也 2007 「アイヌの方位観:神窓方位と埋葬頭位に関する一試論(平取を中心として)」『物質文化』(4), p.16.
  - 4 犬飼哲夫 1933 「北海道産狼とその滅亡経路」『植物及動物』1(8), p.12.
  - 5 ジョン・パチェラー 1995[原著 1901] 『アイヌの伝承と民俗』青土社、p.157.
  - 6 池田貴夫 2009 『熊祭り:文化観をめぐる社会情報学』第一書房。
  - 7 北海道観光振興機構アイヌ文化部会ワーキンググループ 2009 『ガイド教本・アイヌ民族編<動物編>』北海道観光振興機構、p.7.
  - 8 犬飼哲夫 1932 「北海道の動物の由来とその変遷」『北海道郷土史研究』『北海道郷土史研究』(1), pp.32-50.
  - 9 「同村幌茂尻アイヌの古老から、明治初年に於ける同地方のエゾオホカミの野生ぶりを聞き出すことが出来た。今それによってみると、明治一五、六年頃までは、まだ根室半島一帯にも棲息していて、稀に一、二頭の時もあつたが、多くは数頭群れを

- なして現はれ、附近の牧場の仔馬を襲つたり、森の中で鹿を捕殺したりしていた。耳は立耳で毛が長く、背は茶褐色、腹面は淡褐色、尾は絶対に巻く事なく、肩高は約一米、頸が比較的短く、胴体はよく肥つて丸みをもっていた。家犬のやうに、ワン、ワン吠えるのではなく、狼特有のウオー、ウオーであつて、常に鹿、特に仔鹿を常食としていたのであつた。明治一五年、屯田兵として、入地した人の話では、此の狼が多数棲息して、よく附近の牧場の飼馬を襲撃していたが、妙な事には人には少しも害を及ぼす事がなく、アイヌ等を見かけると、狼の方でさつさと逃げ出してしまつた、といふ事である。で、ある人が、この山で狼の仔を一頭捕獲したので飼養してみたが、仲々人に馴れないで、いつも地中に孔を穿つて、その仲にかくれていたといふ」[直良信夫 1940「北海道の狼」『動物文学』(61), pp.80-81.]
- 10 直良信夫 1944『日本哺乳動物史』養徳社, p.99.
  - 11 直良信夫 1965『日本産狼の研究』校倉書房, p.210.
  - 12 犬飼哲夫 1933「北海道産狼とその滅亡径路」『植物及動物』1(8), pp.12-13.
  - 13 山田伸一 2013『近代北海道とアイヌ:狩猟規制と土地問題』北海道大学出版会, p.140.
  - 14 北海道アイヌが使う“horkew”という言葉は“オオカミ”のみを指すが、サハリンアイヌにおける“horkewpo”という語は“青年”を指す[知里真志保 1976『知里真志保著作集別巻1:分類アイヌ語辞典植物編・動物編』平凡社]. したがって、現在の筆者の語学力ではテキスト上にあらわれるアイヌ語の内容を正確に判断するには及ばないため、サハリンアイヌの口承文芸を調査の対象外とした[知里真志保 1956『地名アイヌ語小辞典』北海道出版企画センター, および、知里真志保 1973『知里真志保著作集:第2巻』平凡社].
  - 15 稲田浩二・小澤俊夫 1989『日本昔話通観 第1巻北海道(アイヌ民族)』同朋社出版.
  - 16 日本語訳文では「オオカミ」とされていても、アイヌ語原文で「セタ」と表現されており、話者や採録者による言及・補足が確認できないテキストについては今回の調査対象から外した。これは筆者の現在の知識では、登場する動物がオオカミなのかイヌなのかを明確に特定できず、誤訳を参照する可能性を避けるためである。
  - 17 梅木佳代 2015「口承文芸にあらわれるアイヌのオオカミ観:先行研究との比較を中心に」『北海道民族学』(10), pp.38-55, 北海道民族学会.
  - 18 【資料1】でも火がオオカミの正体を露見させていることから、オオカミ、あるいはオオカミ神を撃退するためには火を用いるのが有効と考えられていたのかもしれない。
  - 19 北海道静内町教育委員会 1994『静内地方の伝承IV一織田ステノの口承文芸(4)一』北海道静内町教区委員会, p.236.
  - 20 戦の描写においても、オオカミ神について「本当・仲間持つ人 shiyu tar korokuru」という表現が見られ、群れをつくる動物だという認識がうかがえる。
  - 21 “tonoseta”の可能性はあるが、原文に従って転記した。
  - 22 こうした同じ動物のカムイについて、順位をつけて呼ぶことがあるのかという点については、「話のあやだと思えますね。話の都合上、あんまり位の高くないやつを出すよりも位の高いとか何とか言った方が格好がつくんでしょ。ただし、あの奥山にいるやつ選んで、そこにいるやつ選ばないのでもないし、奥のほうはおっかなくなくて、近くにいるのがおっかないというわけでもない。だからこれは、話の筋書き上、そうした方がよいから、そうやるんだと思えますね」と述べている。単純にアイヌのオオカミに対する認識や何らかの知見が反映されたと解釈することはできない[萱野茂 1974『ウエベケレ集大成:第1巻』アルドオ].
  - 23 久保寺逸彦・佐々木利和編 2004『アイヌの神話』草風館, pp.200-302.
  - 24 久保寺逸彦編 1977『アイヌ叙事詩:神話・聖伝の研究』岩波書店, p.422.
  - 25 藤村久和 1995「アイヌの動物観」河合雅雄・埴原和郎編『動物と文明』朝倉書店.
  - 26 児島恭子 2007「口承文芸・文献資料にみられる送り儀礼」『アイヌのクマ送りの世界』同成社,
  - 27 前掲註 25, p.37.
  - 28 萱野茂 1974『ウエベケレ集大成』アルドオ, p.111.
  - 29 前掲註 25, p.38.
  - 30 中川裕 2000「アイヌ口承文芸テキスト集1 白沢ナベロ述 狼から逃れた娘」『千葉大学 ユーラシア言語文化論集』(3), 千葉大学ユーラシア言語文化論講座, p.54., pp.52-66.
  - 31 本田優子 2007「樹皮を剥ぎ残すという言説をめぐって:更科源蔵の記録に基づく一考察」『北海道立アイヌ民族文化センター研究紀要』(13) 北海道立アイヌ民族文化センター, p.19.
  - 32 「昭和20年代から40年代にかけてのまとまった聞き取り記録は他に例を見ず、個別具体的なアイヌ文化の伝承者からの最後の記載と評価できる内容」[齊藤玲子 2002「更科源蔵氏『コタン探訪帳』の概要について:弟子屈町立図書館所蔵ノートの紹介」『北海道立北方民族博物館研究紀要』(11), p.80]
  - 33 「更科の著作は、論文として執筆したものでなく、いわゆる『読み物』として書かれたものが大半であるため、その出典を明らかにしていない場合が少なくない。特に昭和20~30年代のものよりも、後年(40年代以降)著されたものにその傾向がみられる」[前掲註 30:p.85].
  - 34 高田中 2015『更科源蔵文学資料紹介:原野行-4』n.pag.
  - 35 「アイヌのレトリックの世界において、和人と関係は、アイヌの欲望するように現れる。両者が現実、同じ時間と空間において接触していた事実は明らかであっても、それを再構成する際に、そのような過去の『現実』は和人の欲望と、アイヌの欲望との狭間において言語化されることはない」[坂田美奈子 2011『アイヌ口承文学の認識論—歴史の方法としてのアイヌ散文説話』御茶の水書房].

## 第4章 エゾオオカミをめぐる情報とその位置づけ

本章では、第1～第3章で展開し整理してきた内容を集約し、エゾオオカミをめぐる情報とその位置づけについて検討する。

第1章でみてきたとおり、現在受け入れられている日本人のオオカミ観は、明治時代以降の議論を受けて徐々に変化してきたものということができる。現在では、オオカミとの親和的な関係性こそが「本来の日本人」とオオカミの関わり主体であるとされる。敵対的な関係性は否定され、あるいは主要なものではなかったとみなされる傾向が強い。本稿では、エゾオオカミ・ニホンオオカミが絶滅した後にもっとも大きく変化したのは、親和的なニホンオオカミのイメージが強化されたことだと考える。

こうした研究上の状況をふまえて、第2章では市町村史に残る記録を整理し、入植地においてエゾオオカミと遭遇し、その脅威に向き合わなければならなかった和人の状況を確認した。開拓期の和人とエゾオオカミの間には、ウマをめぐる対立だけに収まらない軋轢が生じていた。

また、第3章では、従来は親和的な関係性にあると理解されてきたアイヌ民族とオオカミの間にも、敵対的といえる関係性が生じる場面があり、非親和的・攻撃的な面が存在することが確かめられた。ただし、そのような描写は、時代を下るにつれて把握しにくくなる状況が生じてもいた。この背景として、情報発信者によるコントロールが行われていた可能性が考えられる。

全体を通して、北海道におけるエゾオオカミと人との関係性は、過去には対立しあい、軋轢や葛藤を抱えることもあった事実が、時代をくだるにつれて不明確になりつつあったということができる。研究史上の動向から、本州以南のニホンオオカミの場合も、各地で同様の事態が起きているのではないかと推察する。以下では、このような過去の実態を不鮮明にし、修正しようとする流れがなぜ生じているのか考察する。

### 第1節 ニホンオオカミの傍証的存在としての価値

日本のオオカミをめぐる従来の研究史・議論の経過をみると、その言説の主流はニホンオオカミを中心として展開してきたものだったということができる。多くの研究者が、過去の「日本のオオカミ」について議論に取り組もうとして、結果としてニホンオオカミに関わる議論に取り組んできた。同じ日本のオオカミであるはずだが、エゾオオカミが日本のオオカミをめぐる議論の主体とされる機会は限られてきた。動物学者による絶滅宣言や、分類学上の位置づけの確定など、動向のうえでは先んじることがありながら、最終的には「海外のオオカミ」の亜種にすぎないとする意識によって、ニホンオオカミと比べると貴重さ・重要さで劣ると位置づけられてきたように思われる。

ただ、興味深いのは、エゾオオカミそのものはそうした位置づけに置かれながら、

過去の状況説明に利用できそうな情報はニホンオオカミ側の議論に積極的に反映されている点である。日本のオオカミをめぐる研究全体の中で、エゾオオカミはニホンオオカミの傍証的存在として価値を与えられる存在だったとすることができる。とくに、近代化を通じて、また、オオカミの絶滅という事象を通じて、日本が一時的に西欧的な思想文化を受容したこと、それが失敗であったことを証明する存在であることが望まれていたように思われる。

この場合、種によって位置づけや扱いが異なり、客観性を維持できていない点も問題だが、意図せずに個別地域の事例を全体に共通するものとして反映させようとする姿勢が、より危うい問題をはらんでいると考える。日本のオオカミそれぞれの研究動向を確認すると、個別の事例をもって「全体」を描き出そうとする傾向がある。絶滅により情報不足が意識される中であっては、可能なかぎり事例を集約する必要はあるのだろうが、過去の実態を描き出すにあたって、まずは全体を明らかにしたうえで、細部を照らすことは可能なのだろうか。

北海道では、お雇い外国人であるエドウィン・ダンが、オオカミの駆除に毒薬ストリキニーネの使用を提言したことは広く知られる。同様に、日本全体でも西欧的な主義思想のもとにオオカミを害獣として駆除しようとする動向があったとされることが多い。しかし、北海道以外でもオオカミの駆除に外国人が積極的に関与した、あるいは何らかの提言や発案を行ったという事実は確認できない。日本全体で起きていた事態であると考え、議論に反映させるのであれば、少なくとも本州側でも外国人が何らかの形でオオカミの駆除政策に対し、発言・提案をしていたという事実を踏まえる必要があると考える。北海道側の状況を受けて、本州側でも同様の事態が展開していたことが、事例に基づいて論証される必要がある。

その一方で、近年では、明治期の北海道で開拓使による駆除制度が策定されるよりもかなり早い時代から、オオカミの捕獲に対する報奨金の給付や毒餌を用いた駆除が行われていた東北地方における過去の状況が広く知られるようになっていく。江戸時代の東北地方には、オオカミの駆除に対して報奨金を与える制度や、駆除を専門に担う猟師「狼取」が存在していた。ただ、1930年代からニホンオオカミの研究の主流を形成してきた平岩米吉も、前近代の東北地方における人とオオカミの軋轢を著作中で紹介していた。しかし、そこからニホンオオカミと人との敵対的な関係性を主体的に論じる動向は生じていない。これは、従来強い影響力をもってきた平岩の著述が、オオカミによる人身被害の記録を、享保年間になって日本に持ち込まれた「狂犬病」のせいだったとする議論に集約させていく傾向をもつためではないかと考える。

荒々しく馬をおそった狼を「病犬」と呼んだのも不思議ではなく、そしてそのような野獣を仕留めた若ものを郷土の勇者として、その情景を描いた額を神社へ奉納したのも、あるいは当然であったのかもしれない<sup>1</sup>。

「病犬」は、狂犬病に罹患したオオカミやイヌを指す。オオカミが人に対してもたら

す被害について平岩が行う記述は、全体の中でもとくに主観的であり、また、情報を操作するような文章構成となる様子がみられる。たとえば、狼害の有無を地名で見分ける話題の中で、はじめは「狼が多い地方では、その良い面があらわれると、狼を祀る神社ができ、また、悪い方面が目立つと、狼という名のつく地名となって残る」と紹介するが、その後例示していく地名に音だけがオオカミと通じるものの実際は関わりのないものなどを織り交ぜ、「なお、狼という地名は残っていても、じっさいの狼とは全く関係のないこともある」と結ぶなど、読み手の印象を操作するような文章も確認できる<sup>2</sup>。

こうした傾向は、平岩が、ニホンオオカミが生き残っていれば保護につなげたいと考えていたために、オオカミは危険な獣であるというイメージを打ち消す意図を持って行っていた可能性もある。ただ、個人的な背景として意図的に情報をコントロールする必要があったとしても、それが広く受容されるようになると、混乱が生じる原因となっていく。

ニホンオオカミをめぐる議論では、こうした特定の意図をもった言説が社会的な状況と合致して広く受容されることで、その後の研究事例や動向に影響を与えていると考えられる。その結果が、混沌とした研究史の現状なのではないだろうか。オオカミに関してどのような議論があり、個々の研究者が何を目指していたのかを把握しないままに先行研究として位置づけると、必ずしも過去の実態を分析・反映しているとは限らない点を議論に集約させてしまいかねない状況が生じてもいる。

また、ニホンオオカミが、すでに絶滅した動物であり、分類学上の位置づけも独立種とされたり独立亜種であるとされたり、二転三転して定まらずにいることが混迷した状況を助長している。現生する野生動物であれば、通常は対象となる動物と人の「現在の」関係性に焦点が当てられ、そこで問題が生じているのであれば、過去を振り返ることで問題解決の、あるいは共存のための方法を探ることができる。さらには実在する個体や集団の存在をもって、現状に至る状況・情報や、蓄積されてきた議論の妥当性を見直すことも可能である。しかし、日本のオオカミの実態は曖昧であるうえに、長い間、問題とされるのは常に「過去」における人との関わりだった。その問いを解決するための答えも、過去の事例の中に求められてきた。結果として、情報発信者が曖昧模糊とした中から、好ましい事例や情報を取捨選択することができる状況にあるといえる。ひとつの事例について一度言説の方向性が固定化されてしまえば、その妥当性を検討することは困難となる。事実、「ニホンオオカミが人を襲い、害獣と見なされていたのは狂犬病による影響であり、本来は人を襲うことのない動物だった」とする従来の言説は、近年になって東北地方の人とオオカミの激しい軋轢の状況が明確化されるまでは主流であり続けた。これまでも、ニホンオオカミが有する益獣／害獣としての二面性・両義性を指摘する例は多く存在してきたが、例外的な事例として位置づけられ、益獣・神獣としてのニホンオオカミという議論の前提を転換させるには至らなかった。

日本のオオカミをめぐる議論において、ニホンオオカミが好意的な位置づけに置か

れ、その状況が支持され続ける傾向があるのは、その存在や関わりのある過去の歴史・文化を描出する試みの中に、実際には日本人のありかた、あるべき姿を描き出そうとする面が含まれていたためではないかと考える。この点において、筆者は、エゾオオカミ側の歴史・文化の記録の掘り下げに取り組み、ニホンオオカミとの比較検討が可能となるレベルを目指して情報を充実させていくことが有効な解決策に繋がるのではないかと考える。

これまで、エゾオオカミがニホンオオカミの傍証的な存在として価値づけられてきたのは、生息するオオカミの種類が厳密には違ったとしても、歴史・文化の展開や人々の生活は、北海道も本州以南と同様の水準にあったと暗黙裡に見なされていたためと考える。日本列島内すべてが均質であるべきとする視角をもってなされてきた検討だったともいえるが、実際には容易に「日本のオオカミ」とまとめて検討すべきではなかったと考える。明治初期の北海道においてオオカミに向き合った和人は入植者であり、その状況は本州以南とはかなり異なっていた。本稿では、北海道全体という広汎な地域が対象ではあったが、地域の歴史である市町村史を調査することで、内国植民地として開拓が開始された初期の北海道における人とオオカミの関係性がうかがえる事例が収集できた。

エゾオオカミと和人の間には、これまで考えられてきたよりも、より緊張感を伴う関係性が存在していた。ニホンオオカミ側では主流とされる親和的な面はほとんどあらわれず、状況的には想定もできない様相だったといえる。また、アイヌ民族側にもオオカミとの非親和的な関係性が存在することを、事例の調査と整理を通してあらためて確認することができた。北海道では和人とアイヌ民族という2つの異なる民族が、それぞれのオオカミ観に基づいてエゾオオカミと関わってきた。

民族、地域、時代による多様性が顕著な北海道という地域において人とオオカミがどのように関わってきたのか、その解明を進めることは、あらゆる事例を用いて「日本のオオカミ」という全体像をまず描き出そうとする傾向がみられる従来の取り組みを相対化できる可能性がある。とくに、日本人のイメージとニホンオオカミの実態が切り離せず、より望ましい情報を吸い上げて利用しがちとなる問題に対しては、エゾオオカミの事例を反証として活用もできる。個別の地域における過去の状況を整理し、実態を把握した上で、あらためて全体に反映させられる要素があるのか検討する必要があると考える。

## 第2節 絶滅の責任を問う議論

日本のオオカミをめぐる議論には、オオカミが絶滅するような事態を引き起こしたのは誰だったのか、あるいは何だったのかという、「責任」の所在を求める方向性がみられる。この議論は、大正時代から繰り返されてきたものであり、現在まで検討が続けられてきても、おおまかに「鳥獣の乱獲」、「伝染病」、「開発による生息地の分断・狭小化」などがあげられたうえで、そうした要因が「複合的」に影響し合った結果だ

った、とするまとめにとどまっている。明治時代の獲殺手当制度の存在が知られる北海道、江戸時代からの軋轢の様相が知られる東北地方のみが例外といえるが、どちらも馬産地、あるいは内国植民地という他にはない特色をもつ地域でもあり、例外として議論から除外する理由はそれで充分だった。しかし、常に同じ答えを導き出すことにしかならない問いは改められるべきであると考える。

オオカミの絶滅に言及する際に、その原因について「多くの要因が複合的に影響したため」とする文言に次いで頻出するのは「近代化の影響を受けた結果だった」とする解釈を示すものである。ここには「外」からもたらされた変化によるものだったという見解を共有していることを確認するための符丁合わせのような印象が生じている。本稿第3章で言及した、アイヌ民族とエゾオオカミの関係性が不明確になっている状況も、この「オオカミが絶滅するような事態を引き起こしたのは誰だったのか」という問いと関係してくる可能性があると考える。

有害獣として位置づけられたオオカミの駆除に従事した人々の中に、実際にアイヌ民族が含まれていたことは事実である。当時の北海道で、エゾオオカミの駆除に実際に従事したのは、入植者やアイヌの人々だったことは疑いようがない。しかし、近年ではそれが明確な情報やデータをともなって検討されるようになってきているが、過去にはほとんど触れられてこなかった。一方で、エゾオオカミの絶滅には、クラークやダンなど当時のお雇い外国人の提言が、獲殺制度の成立につながる形で影響したこと、毒薬を使った駆除の実施にいたったことは明確に指摘され続けてきた。その結果として、きっかけと結末だけが明らかな状況が生じている。お雇い外国人の提言によって毒薬ストリキニーネが大量に集められ、それが北海道中に散布された結果、エゾオオカミは自ら毒入り肉を口にして絶滅していったかのような文脈があらわれることもある。なぜ、エゾオオカミの獲殺に従事した人々の実態が不明確なままにされていたのか。

狩猟採集民であると広く認識されるアイヌ民族が、北海道で絶滅したエゾオオカミの駆除に関わっていたという事実は、エゾオオカミを絶滅させたのはアイヌであるという理解や議論に向かう可能性が考えられる。事実、昭和年間にはエゾオオカミがアイヌによって狩り尽くされたと述べる例も存在した。「狩り尽くす」という表現は不適切だが、アイヌがオオカミを狩猟対象とすることはあった。しかし、時代を下るにつれて、アイヌの人々はオオカミに弓矢を向けることをしなかった、とする情報発信がされるようになる。記録に残る更科源蔵のアイヌ民族との接し方や言説を鑑みると、野生動物を狩り尽くした否かという攻撃的な議論に巻き込まれないように配慮した結果だったと考えることもできる。聞き取り調査で得ていた結果と、刊行される著作中に記述される内容とが合致しない状況に、何らかの問題意識が影響していた可能性はある。

その一方で、和人優位の近代日本社会においてアイヌ民族がオオカミ猟に従事していたのは何のためだったのか、という疑問が呈されると、過去の制度化された有害鳥獣駆除の実施や、そこに和人が携わっていた事実も芋づる式に明示されることになる。

日本人とニホンオオカミは古来より特異な関係性を築いてきたとされる議論が主流となって展開・受容されてきた研究史の状況を踏まえると、もともとはアイヌ民族が暮らしていた北海道内に踏み込み、エゾオオカミが絶滅に至るような状況や制度を生じさせた主体が和人であったことが、あらためて明確化されるのは避けたかったと考えることも可能ではある。

日本人が絶滅させた野生動物を、あらためて功罪両面をもつ存在であるとみなすことは難しい。これまでは、絶滅させたという事実に対する罪悪感によって、かつて「害獣」とみなしていたことを「過去の過ちだった」と位置づけ、その責任が誰にあったのかを明確化しようとする方向に向かいがちだったのではないかと考える。しかし、研究史上のエゾオオカミの位置づけをみるかぎり、そうした状況が妨げとなって議論が進まず、情報がコントロールされる事態が起きていた可能性も示唆される。エゾオオカミをめぐる過去の実態を曖昧にし、都合の良いように歴史を修正しつつあったということもできるだろう。

北海道における人とオオカミの関係性については、海外からの主義思想や技術の流入さえなければ両者は平和に共存できたとする理想論が語られ、現実や過去の事実がなおざりにされてきた。人とエゾオオカミの歴史を述べる中では、「エゾオオカミは絶滅したが、アイヌの人々はかつてオオカミをカムイとして敬い、平和に共存していた」と説明する例が多々みられるが、日本に暮らす一部の人がオオカミを神と位置づけて大切にしていたことは、明治時代にエゾオオカミを絶滅させた結果に対する免罪符になるわけではない。過去の人々がオオカミと向き合った際にどのような困難と直面していたのかを明らかにする必要がある。今後は、エゾオオカミ、和人、アイヌ民族、お雇い外国人と複雑に絡み合った関係性と要素を分解し、共存していくためには何が必要だったのかを考えていくことができる問いを設定する必要がある。

### 第3節 オオカミ観の断絶と連続

現代、100年を超えるオオカミの不在によって、日本人のオオカミ観が変化した可能性が指摘され、「正しく」オオカミを理解することを困難にしていると述べられる。日本のオオカミに関わる研究史を概観し、明治時代以前の時間軸も含む市町村史の内容を調査した結果、たしかにオオカミ観は変化していると考えることができる。

実在した時代には、一般的には害獣として位置づけられていたオオカミだが、絶滅した後になって神獣としての位置づけ・価値が日本国内で広く認識されるようになったと思われる。この背景には、西欧的な思想や要素を必ずしも好ましいものとして受け取らなくなった日本国内の思潮の展開があると考えられる。また、近代化・高度経済成長を経て、懐かしまれる対象となった「自然と調和して生きていた時代」の象徴のひとつとして、オオカミは日本における新たな位置づけを得てきたように思われる。

しかし、過去の実態としてはどうだったのか。明治時代の北海道では、入植者である和人がオオカミを神獣視していた例は見いだせていない。北海道に入植した和人は、

エゾオオカミを「狼」と称したが、その「大神」に通じる名称をもって、ただちに益獣・神獣としての位置づけと結び付けられることはなかったようである。市町村史の記録をみるかぎり、慣れない土地で安定した生活を手に入れるためには、種々の実害をもたらすオオカミは排除されるべき存在とみなされていた。敬遠して共存するだけの余裕は持つことができなかつたと考えられる。明治時代には、農作物を荒らすエゾシカ・野飼の牛馬が激減し、牧馬を襲うオオカミの危険性が有害獣獲殺制度を通して広く認識されるようになっていた。オオカミに対する強い害獣視はそうした状況下であらためてあらわれたと考えることもできるが、記録を遡ると、遅くとも江戸時代末期には、和人とエゾオオカミは敵対的な緊張感が主体となる関係性を築いていた。

従来「日本のオオカミ」をめぐる議論の主流とはなれず、微妙な位置づけを得ていたといえるエゾオオカミだが、これまでは、本州以南と同様に神使・神獣として見なされていた可能性もないとは言い切れず、曖昧ながら「本来は」共存できる存在だったはずという期待があった。しかし、地域や名称、分類上の問題を踏まえつつも、本稿をとおしてみてもかぎり、エゾオオカミの事例からは、日本人が常に親和的・友好的なオオカミ観を主体とするとはいえないことが確認できたと考える。

エゾオオカミ・ニホンオオカミが絶滅した後になって、「山犬／豺」でもあった存在は、「大神」と結びつく和名に統一された。人を襲うオオカミのイメージは誤りであるとする認識が普及し、その霊性や神性が研究者によって繰り返し一般に提示されるようになっていく。かつては地域ごとに、オオカミと対峙した際に利用できる多様な知識や知恵、所作などが存在したはずだが、現在では失われている。オオカミは神獣であり、人を襲うことはないとする言説が広く支持されるようになることは、かつては害獣としての認識も強く持たれていた、実在する野生動物としてのオオカミのイメージを曖昧にしてきたともいえる。

害獣としてのオオカミ観も、神獣・益獣としてのオオカミ観も、オオカミが実在した前近代からの連続性を有するものだが、本稿では、より断絶の度合いが強いのは害獣としてのオオカミ観であると考えられる。なかでも、害獣としてのオオカミにどのように対応すべきかを伝える知識は、過去から完全に断絶している。オオカミを益獣や神使として位置づける狼信仰は現在も広く受容され、多くの人々の心の拠り所となっているが、日本では、近代化が展開する中で恐怖感や畏れにもとづく対象の神格化は前近代的なものともみなされ、非合理的・非科学的な態度ともされてきた<sup>3</sup>。もしも不意にオオカミと遭遇することがあれば、大型の肉食獣の存在を脅威と感じるだろう。しかし、そうした人間を襲い殺す力をもつ野生動物の存在とどのように向き合うべきなのか、現代に復元することは困難である。

<sup>1</sup> 平岩米吉 1981『狼—その生態と歴史』池田書店, p.144.

<sup>2</sup> 前掲註 1, pp.161-170

<sup>3</sup> 桑子敏雄 2012『『空間の履歴』から読みかえる環境思想』『日本の環境思想の基層:人文知からの問い』, pp.43-44.

## 終章 結論と今後の課題

本稿では、絶滅したエゾオオカミをめぐる歴史と文化を明らかにすることを目的とし、主として明治時代以降の文献を用いて「絶滅後」のオオカミの位置づけの変遷と現在に至るまでの経過を整理してきた。本稿における検討を通して過去から現在にいたる過程を整理した結果、日本のオオカミは絶滅した後に害獣から益獣へと大きく位置づけを変化させてきたことが明らかとなった。

本章では、第1節で各章の結論をまとめ、第2節では今後の課題と研究の展望について述べる。

### 第1節 結論

以下では、本稿第1章から第4章までの結論をまとめていく。

#### 1. 第1章 日本におけるオオカミの研究史

第1章では、日本のオオカミを対象とした議論に取り組むにあたって、研究史の確認と概要の提示を行った。

明治時代以来の全体の流れをみる中では、日本のオオカミをめぐる研究には2つの画期があることを確認した。ひとつは1930年代であり、とくに日本国内におけるオオカミ2種の分類学上の位置づけが確定したことが特徴といえる。以降の議論は、「日本のオオカミ」であるニホンオオカミと、そこから除外され、しかしそれによって独立性を保つエゾオオカミという主・従の位置づけに基づいた展開がみられる。「日本のオオカミ」であるところのニホンオオカミは、その後の戦時下での国威発揚の一環として日本人の特異性を論じる議論と結びついていくが、同時に従来のおオオカミ観の中心となっていた非親和的な害獣としてのオオカミの位置づけが、時代を下るにつれて不明確となっていく結果にもつながった。くわえて、1930年代は、日本のオオカミを専門の研究対象に含む研究者が活動を開始した。積極的に情報を収集・発信する動向が生じたことで、日本のオオカミをめぐる議論が大きく盛り上がった時期でもあった。

1940年代から1980年代までは、日本人と日本固有のオオカミ、その間に築かれていた世界でも特異な関係性という主観的な認識が生じ、広く普及した時期といえることができる。しかし、どのような要素に固有性が発露し、世界に存在しない特異なものなのか、客観的な説明はなされない。戦後になると、新たにニホンオオカミを定義できる可能性を有する資料も発見されたが、それを用いて過去の情報を再検証する動きはみられなかった。本州以南のニホンオオカミ生残説が雑誌などのメディアを通じて注目を集め、一般に広くオオカミをめぐる議論が認識された時期だが、その一方で情報の単純化・単一化が進んで時期でもあった。

1990年代、日本のオオカミを「復元」することを目的として、オオカミの再導入が

提唱されたことが研究史上2つめの画期となったと考える。これまでになかった新たな話題と論点を得たことで、日本人がオオカミに向ける関心の度合いが大きく高まった。その一方で、過去の人とオオカミの関係性を問い直す内容の研究事例が増加し、人とオオカミの非親和的な関係性の実態が再び認識されてきている。再導入計画が論じられる中では、日本人と日本のオオカミの親和的な関係性が前提とされる傾向があり、それに対して野生動物としての日本のオオカミがかつて有していた善悪あるいは功罪の二面性があらためて注目され、取り上げられるようになったと考えられる。

## 2. 第2章 自治体史におけるエゾオオカミの記述

第2章では、絶滅したエゾオオカミが地域の歴史の中でどのような存在としてみなされてきたのか、北海道内の各市町村史にみられる記述の整理と検討を行った。

これまで、エゾオオカミは明治時代以降に北海道に持ち込まれた家畜に対して甚大な被害を出した害獣であったと理解されてきたが、実際には江戸時代から被害が生じている状況にあったことが確認できた。また、オオカミによる家畜被害については、おもに新冠牧場における事例が広く知られてきたが、新冠以外の複数地域における被害の状況も明らかとなった。さらに家畜に対する被害だけでなく、開墾や道路の切り開きなどの場面で突然接近・接触したオオカミが、人に対して強い脅威や恐怖感をもたらしていたことを示す記述も確認できた。北海道における人とオオカミの関わりについては、害獣としてのオオカミの位置づけが中心となってきたことが示唆された。

家畜を襲う害獣としての面に焦点を当てられることが多かったエゾオオカミについて、実際にはより多様な側面をもっていた可能性についても検討した。大型の肉食獣であるエゾオオカミに対して、当時の人々は家畜を襲う害獣としてだけでなく、人に対する潜在的な危険性を持つ存在として向き合っていたと考えられる。エゾオオカミと和人との間に生じていた軋轢は明治時代に入って生じたのではなく、江戸時代以前の前段階があった。北海道における人とオオカミの関係史をより詳細・具体的に明らかにするためには、今後、北海道内の郷土史・字史へと調査の対象を広げ、さらなる事例の集約・分析に取り組む必要がある。

## 3. 第3章 アイヌ民族とオオカミの関わり

第3章では、アイヌ民族とオオカミの関係性について、先行研究の内容から基本となる位置づけの確認を行った。

アイヌ民族がオオカミの狩猟を行わなかったと理解できる記述に注目し、実態として何らかのタブーが存在していたのか確認することを目指した。アイヌ民族の口承文芸のうちからオオカミ猟の様子が描写されるテキスト6編を抽出し、内容の整理検討を行った。しかし、結果として、口承文芸中の描写には、アイヌがオオカミの狩猟を行わないこと、あるいは狩猟を禁じるような言及は見いだせなかった。

それでは、現状ではなぜアイヌ民族がオオカミを狩猟しなかったという言説が普及しているのかという疑問について、更科源蔵による刊行された文献と聞き取り調査記録の内容を分析対象として検討を行った。結果として、更科源蔵による刊行文献の内容は、刊行時期によって変化していた。その変化の理由を、更科源蔵が取り組んだ聞き取り調査の記録である「更科ノート」[『コタン探訪帳』19冊『コタン探訪帳記』1冊]の内容に求めた。検討の結果、更科はアイヌ民族からオオカミの狩猟を行うとする内容の聞き取り結果を得ていた。しかし、刊行文献には反映させず、むしろ後年の著作からはアイヌ民族がオオカミの狩猟に価値を見いだしていなかったと読みとれる記述を行っていたことを明らかにできた。アイヌ民族とエゾオオカミに関する議論では更科源蔵の著作が参考にされていることが多く、既存の情報にみられる曖昧さや食い違いは、このような記述内容の大幅な変更があったことに由来するものである可能性について考察した。

#### 4. 第4章 エゾオオカミをめぐる情報とその位置づけ

第4章では、日本のオオカミの研究史、エゾオオカミに関する先行研究の内容、市町村史中にみられた和人のオオカミ観、口承文芸および聞き取り記録の中に確認できるアイヌ民族のオオカミ観をそれぞれ統合し、北海道においてオオカミをめぐる言説がどのように位置づけられ、変遷を経てきたのかを考察した。

これまで、日本人とオオカミはもともと親和的な関係性にあり、それを変化させたのは西欧由来の要素であったと理解されてきた。オオカミは害獣として恐れられるより、神獣として尊ばれるべき野生動物であり、そしてそのように認識できることこそが本来の日本人のあるべき姿だとされる。しかし、研究史の整理を行った結果では、そうしたオオカミ観はオオカミの絶滅後に生み出され、戦時体制下において受容・普及されたものだった。また、とくに北海道を事例としてみた場合、人とオオカミは非親和的・敵対的な関係性を中心として関わっていた。本稿における対象資料のうちには、本州以南であらわれる狼信仰などの人がオオカミに対して向ける親和的な態度はあらわれない。

本稿における議論を通して、従来は明治時代に入ってから起きたとされるエゾオオカミと人との間の軋轢が江戸時代後期まで遡ることが確認されたが、当時の人々はオオカミがもたらす家畜被害のみならず、大型の肉食獣である存在そのものを脅威とみなしていたことも示唆された。とくに明治時代には、故郷を離れて入植した先で強い脅威や困難に直面することは、入植者にとってはこのままでは生活を続けていくことができないという危機感を大きくあおられる事態だったと推測される。家畜被害の有無にかぎらず北海道内の多くの地域でオオカミが捕殺されたのは、脅威の根源となる存在を取り除くことが目指されたためだったと考える。

北海道はエゾオオカミが絶滅して不在となってから100年を超える空白の期間を抱えている。その結果として断絶が生じ、人々のオオカミに対する理解が困難となって

いる状況があるとする指摘があるが、本稿では断絶しているのは害獣観に基づくオオカミ観であると考察した。

北海道における人とオオカミの関係性については、海外からの主義思想や技術の流入さえなければオオカミとは平和に共存できたとする理想論が語られ、現実や過去の実事がおざりにされてきた。現状では、エゾオオカミをめぐる過去の文化を曖昧にし、都合の良いように歴史を修正しつつあったと評価できる。

過去の人々がオオカミと向き合った際にどのような困難と直面していたのか、エゾオオカミ、アイヌ民族、和人、お雇い外国人と複雑に絡み合った関係性と要素を分解し、共存していくためには何が必要だったのかを考えていくことが必要だったと考える。

## 第2節 今後の課題と展望

本研究では、主として明治時代以降の期間を対象とし、刊行された文献資料を集約することを通じて、人とエゾオオカミの関係史のうち、絶滅後の状況確認と実態の解明を行った。とくに歴史・文化面からの検討に努めたが、以下にはとくに至らなかった点をまとめ、今後の課題とする。

### 1. 史的展開を記述するうえでの硬直性

本稿では、エゾオオカミをめぐる歴史と文化をテーマとし、文献上の記述内容を批判することを通じて過去から現在までの史的展開および情報内容の変遷過程を整理・検討した。なかでも第1・第2章では、刊行された文献を対象とし、その内容から日本のオオカミの研究史と、北海道内の自治体史内に確認されるオオカミに関わる記述動向を整理把握することを目指した。両者は時間軸の上で重複する部分が多く、複合的な検討も可能であったが、研究史側では年代ごとの動向をまとめることにこだわったため、柔軟な議論に取り組めなかった。結果として分裂し、相互に補い合うことのできない議論となっている。今後は市町村史側の記述内容を研究史側の経過や変遷に照らし、研究動向から影響を受けた内容を把握することで相互補完的な議論に取り組みたい。

また、本稿では日本のオオカミが絶滅した後になって、親和的なオオカミ観が強化され、敵対的なオオカミ観には断絶が生じていると考察した。この点について、研究史を検討する中では、親和的なオオカミ観が盛んに取り上げられ、提唱されてきたことが確認できているが、一方でそうした状況を危惧していると理解できる言及、敵対的なオオカミ観やその両義性に注目して議論に取り組む文献も存在した。野生動物の絶滅という歴史的な事象に対して、どのような姿勢で向き合い、位置づけようとするのかは個人によって異なると考えるが、今後は主要なオオカミの研究者個人がどのよ

うに議論を展開させてきたのか、そこにはどのような要素が影響したのかも可能なかぎり確認し、より柔軟に、史的展開の把握に努めたい。

## 2. 研究史関連資料の詳細な検討と分析

本研究において日本国内のオオカミ研究史の検討を試みたが、その前提として、これまでオオカミに関わる研究や議論の流れがまとめられたことがないという状況があった。また、とくに本州以南のニホンオオカミに関する研究では、対象が絶滅した動物であることから、生物学の領域よりも人文学・社会学における研究や著述事例が多くなることを予期していたが、全体像の把握・予想ができないまま資料の収集を開始した。

網羅的な収集を目指し、結果として研究史の検討に十分といえるだけの文献が収集できたと考える。しかし、中にはオオカミに関する意見とはいっても、根拠が書かれていない、または近隣資料とのつながり、ひろがり期待できないメモや手記的な資料も多く含まれた。書き残された記述は資料の性質によらず貴重だが、全体数が想定以上に増加したことで資料の全体と概要を抑えることに集中し、各資料の内容の詳細な検討に不足が生じた。以降は収集した資料の適切な分類と分析を試み、個々の資料までを明確に見渡せる形での議論とアウトプットの方法を検討していく必要がある。

## 3. エゾオオカミと人の関わりについて

北海道において過去に展開していたエゾオオカミと和人・アイヌ民族の関係性について、刊行されている文献・口承文芸・聞き取り調査の記録を用いて事例収集に取り組んだ。しかし、条件設定が複雑で、対象資料に限られる結果となった。アイヌ語原文によりオオカミであることを確かめることができるもののみを収集すると、今回のように数件のみが該当する結果となるが、「オオカミ」のみに注目して無作為に収集すると、イヌとの区別が明確ではない資料が大量に含まれることになる。本稿においては、确实といえるテキストを優先して絞り込んで使用した。しかし、今後はさらにオオカミとイヌの区別が曖昧な前近代の事例を対象に含めていくことを考えているため、資料を適切に弁別し妥当な事例を用いて利用する方法を模索していく必要がある。

日本のオオカミと人の関係史の把握は、対象が日本列島内ではすでに絶滅動物であるという点において、人と動物の関係史の中でも異色の事例といえるのではないかと考える。本稿では、動物種そのものが野生下には存在しなくなっても、人々のオオカミ観は変化し続けていることを確認した。動物の絶滅は、過去に共存に失敗した結果と位置づけることができるが、そうした過去を踏まえた上でも、人々はオオカミに関心を持ち続け、狼信仰や民俗行事を存続させている。また、過去にはオオカミを害獣としてみなし、敵対的なオオカミ観が一般的だったと思われるのに対して、絶滅後から徐々に益獣や神獣としての位置づけを主体とする親和的・好意的なオオカミ観へ変

化させてきたことがわかった。情報発信者による意図的なコントロールの結果を多々影響として受けてはいるが、共存の失敗例を日本人がどのように位置づけ、理解し、実態を持たない存在とどのように今後の関わりを保とうとするのかという点は、日本列島における人と動物の関係性を検討する上で示唆に富む事例と位置づけていくことが可能であると考えられる。今後の研究では、エゾオオカミの事例の掘り下げと議論の深化に努めつつ、近世以前の情報の集約を試みる。明治時代に起きたオオカミの絶滅の前段階としてどのような状況が生じていたのか、より詳細な情報把握を目指していく。

## 謝辞

2008年に卒業論文「エゾオオカミ絶滅考」を執筆したことをきっかけに、修士課程からはあらためて「エゾオオカミをめぐる歴史と文化」をテーマとして取り組んできた本研究を、ようやく論文としてまとめることができました。非常に長い時間がかかりましたが、研究活動や調査を通じて、本当にとってもたくさんの方々にお世話になりました。

本論文の執筆は、多くの方々からいただいたご指導・ご教示、ご協力がなければ叶いませんでした。この場を借りて厚くお礼申し上げます。

北海道大学大学院文学研究科北方文化論講座（現・北海道大学大学院文学院人文学専攻文化多様性論講座博物館学研究室）・佐々木亨教授には入学以来終始暖かなご指導とご鞭撻をいただきました。研究対象としてのエゾオオカミとどのように向き合っていくべきか、姿勢がなかなか定まらずに迷走を続ける中でも常に穏やかに励ましていただき、また適切なお指示をいただけたことで本論文を書ききることができました。本当に心より感謝申し上げます。

北海道大学大学院文学院人間科学専攻地域科学講座地域科学研究室・池田透教授、北海道大学大学院文学院人文学専攻文化多様性論講座文化人類学研究室・小田博志教授には、本論文の審査にあたり、副査としてご指摘・ご助言を賜りました。厚く御礼申し上げます。

北海道大学大学院文学院人文学専攻歴史学講座日本史学研究室・谷本晃久教授には、北海道史に関わる研究視角について、また資料の収集や分析に際しても非常に多くのご助言とご指導をいただきました。深く感謝申し上げます。

修士・博士課程における種々の活動に際して多くのご協力をいただき、また野生動物について話す中でいつも多くのことを学ばせていただいている久井貴世氏に心より感謝いたします。

オオカミの森 Howlin' Ks Nature School・桑原康生氏、北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園・加藤克先生、北海道博物館・山田伸一氏、近畿大学農学部（当時）・上村友久氏には、研究に関わる貴重なご意見や資料をご教示いただきました。本稿執筆に関わる調査に際して、弟子屈町図書館・牧原大輔様に大変お世話になりました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

同じ北方文化論講座（現・文化多様性論講座博物館学研究室）所属のみなさま、先輩である小坂みゆき氏には様々な面で支えていただきました。みなさまのおかげで充実した日々を過ごすことができている。また、動物園で飼育されるオオカミの観察を続け、各地でのイベント参加を通してオオカミの情報普及を目指す「狼祭実行委員会」のみなさま、中でも小野寺香織氏にはお世話になりました。オオカミを間近に、そして継続して観察することで、記録上のオオカミを相対化できる可能性に気づかせていただきました。ここに記してお礼申し上げます。

本研究に取り組むにあたり、ここに名前を記せなかった方々にも支えられて活動を続けることができました。お世話になったすべての方々に、心より感謝申し上げます。

## 参考文献一覧

### 1. 日本語文献

- 相島亀三郎 1912 『尋常小学修身書例話原拠：附・参考資料並教授上の注意』 宝文館.
- アイヌ無形文化伝承保存会編 1982 『アイヌ無形民俗文化財記録：英雄の物語』 アイヌ無形文化伝承保存会.
- アイヌ無形文化伝承保存会編 1983 『アイヌ無形民俗文化財記録：アイヌの民話 1』 アイヌ無形文化伝承保存会.
- アイヌ無形文化伝承保存会編 1983 『人々の物語：Fables of men (アイヌ無形民俗文化財記録第3輯)』 アイヌ無形文化伝承保存会.
- 朝日稔 1977 『日本の哺乳動物』 玉川大学出版部.
- 旭川市 1931a 『旭川市史稿；上巻』 旭川市.
- 旭川市史編集会議編 1994 『新旭川市史 第1巻：通史1』 旭川市.
- 芦別市 1994 『新芦別市史：第1巻』 芦別市.
- 蘆谷蘆村 1994 [原著 1940] 「説話に現れた狼の属性について」『動物文学』(68), pp.22-26, 築地書館.
- 足寄町町史編纂臨時専門委員会編 1973 『足寄町史』 足寄町.
- 厚岸町史編集委員会編 2012 『新厚岸町史：通史編 第1巻』 厚岸町.
- 厚岸町史編集委員会編集 2003a 『新厚岸町史：資料編 第1巻』 厚岸町.
- 厚岸町史編集委員会編集 2007 『新厚岸町史：資料編 第3巻』 厚岸町.
- 網走市史編纂委員会編 1958 『網走市史（上巻）：先史時代篇・原始時代』 網走市.
- 網走市史編纂委員会編 1971 『網走市史（下巻）：開拓時代篇』 網走市.
- 阿部余四男 1924 「日本石器時代の犬科動物私見」『動物学雑誌』(433), pp.485-488, 日本動物学会.
- 虻田町 1962 『虻田町史』 虻田町役場.
- 飯田吉次郎編 1970 『大野町史』 大野町役場.
- 池田貴夫 1999 「ヒグマをとりまく猛獣群の民族学的位置づけ：北東アジアにおけるツキノワグマ，オオカミ，トラとの比較」『北海道開拓記念館研究紀要』(27), pp.95-112, 北海道開拓記念館.
- 池田貴夫 2009 『熊祭り：文化観をめぐる社会情報学』 第一書房.
- 池田透 2009 「生物の再導入・移植問題を考える」『北海道の自然』(47), pp.82-85, 北海道自然保護協会.
- 池田町史編集委員会編 1988 『池田町史 上巻』 池田町役場.
- 石井清輝 2007 「消費される「故郷」の誕生：戦後日本のナショナリズムとノスタルジア」『哲学』(117), pp.125-156, 慶應義塾大学.
- 石狩町 1972 『石狩町誌 上巻』 石狩町.
- 石狩町 1985 『石狩町誌 中巻1』 石狩町.
- 石黒直隆 2012 「絶滅した日本のオオカミの遺伝的系統」『日本獣医師会雑誌』65(3), pp.225-231, 日本獣医師会.
- 石城謙吉 2005 「『100平方メートル運動の森・トラスト』と絶滅種の復元」『知床博物館研究報告』(26), pp.25-27, 知床博物館.
- 石城謙吉・中川元 2005 「肉食獣再導入問題をめぐって」『知床博物館研究報告』(26), pp.29-36, 知床博物館.
- 石田戠 2013 「序章 動物観の系譜」石田戠・濱野佐代子・花園誠・瀬戸口明久編 『日本の動物観：人と動物の関係史』 pp.1-16, 東京大学出版会.
- 磯崎博司・羽山伸一 2005 「欧州における生態系の保全と再生」『環境と公害：自然と人間の共生を求めて』34(4), pp.15-20, 岩波書店.
- 稲田浩二・小澤俊夫 1989 『日本昔話通観 第1巻北海道（アイヌ民族）』 同朋社出版.
- 犬飼哲夫 1932 「北海道の動物の由来とその変遷」『北海道郷土史研究』(1), pp.32-50, 日本放送協会北海道支部.
- 犬飼哲夫 1933a 「絶滅した北海道の狼」『日本犬』2(1), pp.1-7, 日本犬保存会.
- 犬飼哲夫 1933b 「北海道産狼とその滅亡経路」『植物及動物』1(8), pp.11-18, 養賢堂.

- 犬飼哲夫 1963<sup>1</sup> 「発刊に寄せて」阿部泰三編『熊百訓』 n. page. 山音文学会.
- 猪熊壽 2001 『アニマルサイエンス③イヌの動物学』 東京大学出版会.
- 今泉忠明 2007 『野生のイヌの百科』 データハウス.
- 今泉吉典 1949 『日本哺乳動物図説』 洋々書房.
- 今泉吉典 1960 『原色日本哺乳類図鑑』 保育社.
- 今泉吉典 1969 「ナゾに包まれるニホンオオカミ:新しい視野でこの"珍獣"の追及を」『科学朝日』29(7), pp.104-108, 科学朝日.
- 今泉吉典 1998 『哺乳動物進化論』 ニュートンプレス.
- 今金町史編集委員会 編 1991 『今金町史:改訂;上巻』 今金町.
- 煎本孝 2010 『アイヌの熊祭り』 雄山閣.
- ウォーカー, ブレットL. [浜健二 訳] 2009 『絶滅した日本のオオカミ:その生態と歴史学』 北海道大学図書刊行会.
- 宇川隆雄 1988 『北海道宿駅(駅通)制の研究:上巻(江戸時代編)』 宇川剛也.
- 内田亨 1925 『萬有科学体系』 新光社.
- 内山達也 2007 「アイヌの方位観:神窓方位と埋葬頭位に関する一試論(平取を中心として)」『物質文化研究』(4), pp.11-36, 城西国際大学物質文化研究センター.
- 宇仁義和 2010 「知床・斜里の近世年表」『知床博物館研究報告』(31), pp.63-72, 知床博物館.
- 宇野裕之 2009 「エゾシカの現状と課題」斜里町立知床博物館『しれとこライブラリー10:知床の自然保護』, pp.80-87, 北海道新聞社.
- 梅木佳代 2016 「特集 北海道レッドリストの現状と課題1 哺乳類:絶滅してしまったオオカミ」『モーリー:北海道ネイチャーマガジン』(42), pp.14-15, 北海道新聞野生生物基金.
- 梅木佳代 2016 「エゾオオカミ研究史の検討」『北海道大学大学院文学研究科研究論集』(15), pp.35-67, 北海道大学文学研究科.
- 浦幌町史編さん委員会 編 1971 『浦幌町史』 浦幌町.
- 恵山町史編纂室編集 2007 『恵山町史』 恵山町.
- 大蔵省 1885 『開拓使事業報告第三編』 大蔵省.
- 太田順治 1918 『世界動物園』 自学奨励会.
- 大谷勝雄 1951 『手稲町誌』 手稲町役場.
- 大谷洋一 2002 「調査報告:松島トミさんの口承芸4」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』(8), pp.89-128, 北海道立アイヌ民族文化研究センター.
- 大塚一美訳 1984 『キナラブック口承説話「犬=狼神に育てられたオタサム人の自叙」』 アイヌ口承芸術学習会.
- 大友喜作 1972 『北門叢書第1冊:赤蝦夷風説考・蝦夷拾遺・蝦夷草紙』 国書刊行会.
- 長万部町史編集室編 1977 『長万部町史』 長万部町.
- 小樽市 1958 『小樽市史 第1巻』 小樽市.
- 小原巖 1984 「絶滅した日本のオオカミ」『動物と自然』14(11), pp.2-6, ニュー・サイエンス社.
- 小原秀雄 1969 「日本野生哺乳動物記 2:オオカミ」『自然』24(11), pp.76-81, 中央公論社.
- 小原秀雄 1969 「日本野生哺乳動物記 3:オオカミその2」『自然』24(12), pp.80-86, 中央公論社.
- 開拓使編 1973 [原著 1884] 「北海道志(下)卷之三十四物産」大蔵省.
- 梶光一 2007 「知床世界自然遺産地域のエゾシカ保護管理計画:管理すべきか, 遷移に委ねるべきか」『生物の科学:遺産』61(5), pp.18-21, 北隆館.
- 梶島孝雄 2002 『資料 日本動物史』 八坂書房.
- 片野ゆか 2006 『狼との対話:愛犬王 平岩米吉』 小学館.
- 加藤清英編 1927 『札幌村史』 札幌村.
- 加藤峰夫 2005 「絶滅種の人為的導入に関する法制度および社会的側面の課題:オオカミとカワウソを例として」『知床博物館研究報告』(26), pp.47-54, 知床博物館.
- 加藤由香・山中正実 2006 「合同シンポジウム専門家会議コメント要約」『世界自然遺産 知床とイエローストー

- ン：野生をめぐる二つの国立公園の物語』 pp.160-164. 知床財団.
- 神奈川県立生命の星・地球博物館 1998 『特別展図録オオカミとその仲間たち：イヌ科動物の世界』 神奈川県立生命の星・地球博物館.
- 兼平賢治 2013 「南部馬にみる近世馬の一生」『環境の日本史2：人々の営みと近世の自然』, pp.146-151. 吉川弘文館.
- 上磯町史編纂委員会編 1975 『上磯町史：年史編』 上磯町.
- 上砂川町史編纂委員会 1988 『新上砂川町史』 上砂川町.
- 亀山明子・仲村昇・宇野裕之・梶光一・村上隆広 2005 「オオカミ (*Canis lupus*) の保護管理及び再導入事例について」『知床博物館研究報告』(26), pp.37-46, 知床博物館.
- 亀山明子 2006 「北海道におけるエゾオオカミ絶滅の歴史と知床国立公園におけるオオカミ再導入の可能性について」『世界自然遺産 知床とイエローストーン：野生をめぐる二つの国立公園の物語』 pp.87-89, 知床財団.
- 萱野茂 1998a 『萱野茂のアイヌ神話集成2：カムイユカラ編II』 ビクターエンタテインメント.
- 萱野茂 1998b 『萱野茂のアイヌ神話集成8：ユカラ編II』 ビクターエンタテインメント.
- 萱野茂 1998c 『萱野茂のアイヌ神話集成9：ユカラ編III』 ビクターエンタテインメント.
- 萱野茂, 環太平洋民族文化保存研究会編 1974 『ウエペケレ集大成：アイヌ民族の生活教典 第1巻』 アルドオ.
- 金成マツ, 金田一京助筆録・訳注 1963 『アイヌ叙事詩ユーカラ集II』 三省堂.
- 金成マツ, 金田一京助筆録・訳注 1963 『アイヌ叙事詩ユーカラ集3：PONSAMORUNKUR (小和人), KAMUIKARSAPA KAMUIKARTUMAM (神造頭・神造洞)』 三省堂.
- 金成マツ, 金田一京助筆録・訳注 1964 『アイヌ叙事詩ユーカラ集4：KEMKA KARIP (朱の輪)』 三省堂.
- 金成マツ, 金田一京助筆録・訳注 1965 『アイヌ叙事詩ユーカラ集5：NISHIMAKUNMAT (ニシマク姫)』 三省堂.
- 金成マツ, 金田一京助筆録・訳注 1966 『アイヌ叙事詩ユーカラ集6：IYOCHIUNMAT (余市姫)』 三省堂.
- 金成マツ, 金田一京助筆録・訳注 1966 『アイヌ叙事詩ユーカラ集7：UCHIU NINKARI (耳輪の曲), AKEUSUTU IWENRESU (悪伯父物語)』 三省堂.
- 金成マツ, 金田一京助筆録・訳注 1975 『アイヌ叙事詩ユーカラ集9：KINA CHISHINAP MUN CHISHINAP (草人形), TUPESAN KAMIMANIT OTUMIOSHMA (八串の肉串いくさ物語)』 三省堂.
- 環境省自然環境野生生物課希少種保全推進室編 2014 『レッドデータブック 2014：日本の絶滅のおそれのある野生生物：1 哺乳類』 ぎょうせい.
- 菊池勇夫 2012 『東北から考える近世史—環境・災害・食糧, そして東北史像』 清文堂出版.
- 木古内町史編さん委員会編 1982 『木古内町史』 木古内町.
- 岸田久吉 1925 『哺乳動物図解』 日本鳥学会.
- 岸田久吉 1936 「絶滅したエゾオホカミの學名と記載」『蘭山會機関雑誌 LANSANIA : Journal of Arachnology and Zoology』(79), pp.129-130, 蘭山會.
- 岸田久吉 1960 「千島群島の哺乳動物相」『鳥獣集報』17(2), pp.283-306, 林野庁.
- 北原次郎太・大阪拓 2014 「7つのキーワードで知るアイヌの世界観」北原次郎太監修『アイヌの世界を旅する』 平凡社.
- 木村盛武 1989 『野生の事件簿：北の動物たち』 北海道新聞社.
- 京極町史編さん委員会編 1977 『京極町史』 京極町.
- 金田一京助 1993 [原著 1927] 「山の神考」『金田一京助全集：第12巻』 pp.609-613, 三省堂.
- 金田一京助全集編集委員会編 1993 『金田一京助全集 第九巻 アイヌ文学III』 三省堂.
- 金田一京助全集編集委員会編 1993 『金田一京助全集 第十巻 アイヌ文学IV』 三省堂.
- 工藤利栄 2006 『狼が遺したもの：北東北の民俗を中心に』 北方新社.
- 久保寺逸彦編 1977 『アイヌ叙事詩：神謡・聖伝の研究』 岩波書店.
- 久保寺逸彦・佐々木利和編 2004 『アイヌの神謡』 草風館.
- 栗栖健 2004 『日本人とオオカミ：世界でも特異なその関係と歴史』 雄山閣.
- 黒田強 1999a 「エゾオオカミ・哀しからじや」『ふるさとの自然』(62) pp.14-16. 北方保護自然研究所.
- 黒田強 1999b エゾオオカミ・哀しからずや」『ふるさとの自然』(63), pp.7-11. 北方保護自然研究所.

- 黒田強 2000 「エゾオオカミ・哀しからじや」『ふるさとの自然』(64), pp.18-19. 北方保護自然研究所.
- 桑子敏雄 2012 「『空間の履歴』から読みかえる環境思想」明道友彌編『日本の環境思想の基層：人文知からの問い』 pp.43-44. 岩波書店.
- 桑原康生 2014 『オオカミの謎：オオカミ復活で生態系は変わる！？』 誠文堂新光社.
- 小金澤正昭・須田和樹 2009 「オオカミ復活の道を探る：Yes, No, それぞれの立場から」『ワイルドライフ・フォーラム』14(1), pp.14-15, 「野生生物と社会」学会.
- 児島恭子 2007 「口承文芸・文献資料にみられる送り儀礼」『アイヌのクマ送りの世界』 同成社.
- コッピンジャー, レイモンド, マーク・ファインスタイン [柴田譲治訳] 2016 『イヌに「こころ」はあるのか：遺伝と認知の行動学』 原書房.
- 小林裕幸 2005 「守れ世界遺産：海外では<1>：オオカミは救世主」『朝日新聞』2005年11月5日夕刊1面.
- 小平真佐夫・岡田秀明・山中正実 2006 「観光, ヒグマ, 人の暮らし：知床におけるヒグマ個体群動態・分散傾向とその管理」 デール・R・マッカロー, 梶光一, 山中正実編『世界自然遺産 知床とイエローストーン：野生をめぐる二つの国立公園の物語』 pp.66-72, 知床財団.
- 近藤賢三 1887 『廃物利用：経済秘宝 すたれ物用み方』 経済雑誌社.
- 斎藤弘吉 1964 『日本の犬と狼』 雪華社.
- 斎藤玲子 2002 「更科源蔵氏『コタン探訪帳』の概要について：弟子屈町立図書館所蔵ノートの紹介」『北海道立北方民族博物館研究紀要』(11), pp.79-107, 北海道立北方民族博物館.
- 坂田美奈子 2011 『アイヌ口承文学の認識論—歴史の方法としてのアイヌ散文説話』 御茶の水書房.
- 佐々木利和 2001 『アイヌ文化誌ノート』 吉川弘文館.
- 札幌区 1911 『札幌区史』 札幌区.
- 札幌市史編集委員会編 1953 『札幌市史：政治行政編』 札幌市.
- 札幌市史編集委員会編 1958a 『札幌市史：産業経済編附：自然環境編』 札幌市.
- 札幌市史編集委員会編 1958b 『札幌市史：文化社会編』 札幌市.
- 更科源蔵 1942 『コタン生物記』 北方出版社.
- 更科源蔵 1946 『北方動物記』 柏葉書院.
- 更科源蔵編 1949 『弟子屈町史』 弟子屈町.
- 更科源蔵 1960 「狼興亡史他」 長尾宏也編『日本山岳風土記』 pp.273-282, 宝文館.
- 更科源蔵 1967 『カメラ紀行：アイヌの神話』 淡交社.
- 更科源蔵 1981 『アイヌ伝説集』 みやま書房.
- 更科源蔵 1981 『アイヌの神話』 みやま書房.
- 更科源蔵 1982 『アイヌの民俗：上』 みやま書房.
- 更科源蔵 1982 『アイヌ文学の謎』 みやま書房.
- 更科源蔵 1983 『コタンの童話』 みやま書房.
- 更科源蔵・更科光 1976 『コタン生物記Ⅱ：野獣・海獣・魚族篇』 法政大学出版局.
- 更科源蔵・谷本一之 1965 『アイヌ伝統音楽』 日本放送出版協会.
- 澤井春美 1997 「本別コタンとサマイクルカムイのウチャシコマ」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』(3), 北海道立アイヌ民族文化研究センター.
- 静内町史編纂委員会編 1975 『静内町史；増補改訂版』 静内町.
- 鹿部町史編集室 編 1994 『鹿部町史』 鹿部町.
- 清水町史編さん委員会編 2005 『清水町百年史』 清水町.
- 志村真幸 2005 「ニホンオオカミは『いつ』絶滅したのか？：平岩米吉と南方熊楠」『熊楠研究』(7), pp.42-60, 南方熊楠顕彰館.
- 末松四郎 1950 「新『やまいぬ』標本」『和歌山大学学芸学部学芸研究：自然科学』(1), pp.85-87, 和歌山大学学芸学部.
- スミス, スミス., ダニエル・スターラー, デブラ・ガーンジー, エド・バングス 2006 「7. イエローストーン国立公園へのオオカミ再導入」 デール・R・マッカロー, 梶光一, 山中正実編『世界自然遺産 知床とイエローストーン：野生をめぐる二つの国立公園の物語』 pp.73-86, 知床財団.

- 瀬川拓男 1974 「民話に踊る動物たち：8；オオカミ」『科学朝日』(64) 朝日新聞社.
- 瀬戸口昭久 2013 「第7章 『野生』をめぐる動物観」 石田戡・濱野佐代子・花園誠・瀬戸口明久編 『日本の動物観：人と動物の関係史』 pp.145-156, 東京大学出版会.
- 壮瞥町史編さん委員会編 1979 『壮瞥町史』 壮瞥町.
- 末松四郎 1950 「新『やまいぬ』標本」『和歌山大学学芸学部学芸研究：自然科学』(1), pp.85-87, 和歌山大学学芸学部.
- 杉村キナラブック 1969 『キナラブック・ユーカラ集 (旭川叢書第3巻)』
- 壮瞥町史編さん委員会編 1979 『壮瞥町史』 壮瞥町.
- 高倉新一郎 1977 『北海道市町村史編集の手引き』 北海道史研究協議会.
- 高倉新一郎編 『日本庶民生活資料集成：第四巻 探検・紀行・地誌 北辺篇』 三一書房.
- 高田中 2015 『更科源蔵文学資料紹介：原野行-4』 n.pag., 弟子屈町教育委員会.
- 武井耕一 2010 『鉄砲を手放さなかった百姓たち：刀狩りから幕末まで』 朝日新聞出版.
- 竹内利美・森嘉兵衛・宮本常一編 1969 『日本庶民生活資料集成 第三巻：探検・紀行・地誌 東国編』 p.558-565, 三一書房.
- タッジ, コリン 1996 『動物たちの箱船——動物園と種の保存』 朝日新聞社.
- 田中芳男 1875 『動物訓蒙 初編 (哺乳類)』 博物館.
- 田辺安一 2008 『お雇い農業教師 エドウィン・ダン：ヒツジとエゾオオカミ』 北海道出版企画センター.
- ダン, エドウィン [Dun, Edwin] 1930 「狼とバツタ」[孤笛生 (西川吉之助) 訳]『太湖』(56), p.6, 太湖社.
- ダン, エドウィン 1963 『エドウィン・ダン：日本における半世紀の回想』 エドウィン・ダン顕彰会.
- 秩父別町史編さん委員会編 1987 『秩父別町史』 秩父別町.
- 千歳市史編さん委員会編 2010 『新千歳市史』 千歳市.
- 千葉徳爾 1985 「人獣交渉史の視点—秩父山地のアイヌ信仰を通して」『歴史手帖』(137), pp.35-40, 名著出版.
- 知里真志保 1956 『地名アイヌ語小辞典』 北海道出版企画センター.
- 知里真志保 1973 『知里真志保著作集：第2巻』 平凡社.
- 知里真志保 1976 『知里真志保著作集別巻1：分類アイヌ語辞典植物編・動物編』 平凡社.
- 知里幸恵著訳, 北道邦彦編注 2003 『注解アイヌ神謡集』 北海道出版企画センター
- ツィーメン, エリック 1995 『オオカミ：その行動・生態・神話』 白水社.
- 著者不明 1891 『動物圖解説』 金港堂.
- 塚本岩三郎 1904 『哺乳動物正図：説明』 東京造画館.
- 月形町史編さん委員会編 1985 『月形町史』 月形町.
- 弟子屈町史編さん委員会編 1981 『弟子屈町史』 弟子屈町.
- 戸井町史編纂委員会編 1973 『戸井町史』 戸井町.
- 東京朝日新聞 1896 「大象と狼」『東京朝日新聞』 1896年1月20日6面.
- 洞爺村編 1976 『洞爺村史：本編』 洞爺村.
- 所荘吉 1969 『火縄銃』 雄山閣出版.
- 榎法華村編 1989 『榎法華村史』 榎法華村.
- 苫小牧市 1975 『苫小牧市史：上巻』 苫小牧市.
- 豊富町史編さん委員会編 1986 『豊富町史』 豊富町史編さん委員会.
- 豊平町史編さん委員会 1959 『豊平町史』 豊平町役場.
- 奈井江町史編さん室編 1975 『奈井江町史』 奈井江町.
- 直良信夫 1940 [1994] 「北海道の狼」『動物文学』(61), pp.80-81, 築地書館.
- 直良信夫 1941 「根室地方に於けるエゾオホカミ」『日本産獣類説話』 pp.126-128, 山岡書店.
- 直良信夫 1944 『日本哺乳動物史』 養徳社.
- 直良信夫 1960 「秩父地方産オオカミの頭骨」『秩父自然科学博物館研究報告』(10), pp.1-16, 秩父自然科学博物館.
- 直良信夫 1965 『日本産狼の研究』 校倉書房.
- 中川裕 1991 「トゥ ミク ミク 悪党カワウソとオオカミ」母と子のアイヌ語教室 (第11回) 教材.

- 中川裕 1997 『アイヌの物語世界』 平凡社.
- 中川裕 2000 「アイヌ口承文芸テキスト集1：白沢ナベロ述 狼から逃れた娘」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』(3), pp.52-66, 千葉大学.
- 中川裕 2001 「アイヌ口承文芸テキスト集2：白沢ナベロ述 主人を助けられなかった犬」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』(4), pp.77-94, 千葉大学.
- 中川裕 2006 「アイヌ口承文芸テキスト集7：白沢ナベロ述 狼が人間の母親に虐待された」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』(9), pp.219-256, 千葉大学.
- 中川裕・志賀雪湖・奥田統己 1997 「アイヌ文学」久保田淳・栗坪良樹・野山嘉正・日野龍夫・藤井貞和編集『岩波講座：日本文学史 第17巻 口承文学2・アイヌ文学』岩波書店, pp.183-263.
- 中澤克明 2009 「シンポジウム『動物と中世社会』の成果と今後の課題」小野正敏・五味文彦・萩原三雄編『考古学と中世研究6：動物と中世一獲る・使う・食らう』pp.277-298, 高志書院.
- 中沢智恵子 2008 「明治時代東北地方におけるニホンオオカミの駆除」『フォレスト・コール』(13), pp.18-21, 日本オオカミ協会.
- 中沢智恵子 2010 「明治時代東北地方におけるニホンオオカミの駆除」『野生生物保護』12(2), pp.19-38, 野生生物保護学会.
- 長沼町史編さん委員会編 1962 『長沼町の歴史 上巻』長沼町.
- 長沼町史編さん委員会編 1977 『長沼町九十年史』長沼町.
- 中村生雄 2010 『日本人の宗教と動物観：殺生と肉食』吉川弘文館.
- 中村一恵 2004 「ニホンオオカミの頭骨記録」『神奈川県立博物館研究報告：自然科学』(33), pp.91-96, 神奈川県立生命の星・地球博物館.
- 中村一恵 2005 「江戸中期・諸国産物帳に記載されたイヌ属動物の名称」『神奈川県立博物館研究報告：自然科学』(34), pp.69-73, 神奈川県立博物館.
- 中村一恵 2014 「ニホンオオカミとアカオオカミの起源と種分化に関する考察」『神奈川県立博物館研究報告：自然科学』(43), pp.23-32, 神奈川県立博物館.
- 七飯町 1976 『七飯町史』七飯町.
- 新冠町史編さん委員会編 1996b 『続新冠町史』新冠町.
- 西田智 2007 『ニホンオオカミは生きている：九州，祖母山系に狼を追う』二見書房.
- 日本野生動物医学会 2007 「日本産野生動物における再導入ガイドライン」『Japanese journal of zoo and wildlife medicine』12 (2), pp.xxv-xxix, 日本野生動物医学会.
- 日本放送協会編 1965 『アイヌ伝統音楽』日本放送出版協会.
- 日本哺乳類学会 1997 『レッドデータ：日本の哺乳類』文一書房.
- 沼田町編 1982 『新編沼田町史』沼田町.
- 登別町史編纂委員会編 1967 『登別町史：開基百年記念』登別町.
- 蓮池悦子編・訳 2009 『平成二十年度アイヌ民俗文化財（ユウカラシリーズ31）アイヌ英雄叙事詩（アトゥイヤの女 レポッペトント キモッペトント）』北海道教育委員会.
- 蓮池悦子編・訳 2010 『平成二十一年度 アイヌ民俗文化財（ユウカラシリーズ34）アイヌ英雄叙事詩 金の小さな耳輪（コンカニ ポンウチウ ニンカリ）』北海道教育委員会.
- 高橋靖以訳 2011 『平成二十二年度 アイヌ民俗文化財（ユウカラシリーズ38）アイヌ英雄叙事詩 背鰭長の鯨（シヤシベタンネ）』北海道教育委員会.
- 長谷川善和 1979 「日本産食肉獣の概要」『哺乳類科学』(38), pp.23-28, 日本哺乳類学会.
- バッチェラー, ジョン 1995 [原著 1901] 『アイヌの伝承と民俗』青土社.
- 八田三郎 1910 「動物の分布上北海道の位置」『動物学雑誌』(256), pp.43-47, 日本動物学会.
- 八田三郎 1913 「北海道の狼：口絵及図版」『動物学雑誌』(291), n.pag., 日本動物学会.
- 羽山伸一 2006 「再導入という自然再生事業」淡路剛久監修, 寺西俊一・西村幸夫編『地域再生の環境学』pp.97-123. 東京大学出版会.
- 原野農芸博物館 1970 『日本狼のゆくえ：いまやまぼろしの動物（原野農芸博物館図録・第5集）』原野農芸博物館.

- 菱川晶子 2003 「オオカミ：名称についての一考察」『伝承文化研究』(2), pp.18-42, 國學院大學伝承文化学会.
- 菱川晶子 2009 『狼の民俗学：人獣交渉史の研究』 東京大学出版.
- 斐太猪之介 1955 『炉辺動物記』 中央公論社.
- 斐太猪之介 1969 「ニホンオオカミはいまもいる?：“珍獣”の正体を追う」『科学朝日』29(6), pp.104-109. 朝日新聞社.
- 日高町史編纂委員会編 1977 『日高町史』 日高町.
- 美唄市史編さん委員会編 1970 『美唄市史』 美唄市.
- 美唄市百年史編さん委員会編 1991 『美唄市百年史』 美唄市.
- 平岩米吉 1934 「狼」『文藝春秋』12(2), pp.157-159, 文藝春秋社.
- 平岩常吉 1994 [原著 1935] 「狼と山犬の辯」『動物文学』(6), pp.52-53, 築地書館.
- 平岩米吉 1942 『犬と狼』 築地書館.
- 平岩米吉 1946 「日本狼・解説」『動物文学』(99), pp.1-13, 築地書館.
- 平岩米吉 1981 『狼—その生態と歴史』 池田書店.
- 平岩米吉 1983 「日本狼剥製の改作と頭骨の計測」『動物文学』49(2), pp.9-11, 動物文学会.
- 広尾町史編纂委員会編 1960 『広尾町史』 広尾町.
- 平野哲也 2014 「江戸時代の下野における野生獣の防除と利用」『栃木県立文書館研究紀要』(18), pp.85-104, 栃木県立文書館.
- フィッシャー, ハンク [朝倉裕・何部成美訳] 2015 『ウルフ・ウォーズ』 白水社.
- 福田信正 1948 「東大農学部収蔵のヤマイヌの標本」『採集と飼育』(10), pp.348-350, 日本科学協会.
- 藤村久和 1995 「アイヌの動物観」河合雅雄・埴原和郎編 『動物と文明』 朝倉書店.
- 別海町百年史編さん委員会 編 1978 『別海町百年史』 別海町.
- 北海道 1953 『北海道山林史』 北海道.
- 北海道渡島支庁地域政策部環境生活課自然環境係 2006 『北海道らしい野生動物とのつき合い方プロジェクト検討報告書—野生動物とのよりよい関係を築くために—The Challenge of Making a Good Relationship with Wildlife in Hokkaido』 北海道渡島支庁地域政策部環境生活課自然環境係.
- 北海道開拓記念館 1975 『民族調査報告：資料編Ⅲ』 北海道開拓記念館.
- 北海道観光振興機構アイヌ文化部会ワーキンググループ 2009 『ガイド教本・アイヌ民族編<動物編>』 北海道観光振興機構.
- 北海道教育大学附属図書館旭川分館閲覧係編 2002 『北海道市町村区史・誌一覧』 北海道教育大学附属図書館旭川分館.
- 北海道教育庁社会教育部文化課編 1979 『昭和五十三年度 アイヌ民俗文化財ユーカラシリーズⅠ：金の下駄(カニ ピラッカ)』 北海道教育委員会.
- 北海道教育庁社会教育部文化課編 1980 『昭和五十四年度 アイヌ民俗文化財ユーカラシリーズⅡ：細糸 柔糸(カノカムペ カリテムペ)』 北海道教育委員会.
- 北海道教育庁社会教育部文化課編 1981 『昭和五十五年度 アイヌ民俗文化財ユーカラシリーズⅢ：細糸 柔糸(カノカムペ カリテムペ)』 北海道教育委員会.
- 北海道教育庁社会教育部文化課編 1982 『昭和五十六年度 アイヌ民俗文化財ユーカラシリーズⅣ：細糸 柔糸(カノカムペ カリテムペ)』 北海道教育委員会.
- 北海道教育庁社会教育部文化課編 1983 『昭和五十七年度 アイヌ民俗文化財ユーカラシリーズⅤ：鹿男の勇者私を助ける(シ ユク ラメトク イカオ ピウキ)』 北海道教育委員会.
- 北海道教育庁社会教育部文化課編 1984 『昭和五十八年度 アイヌ民俗文化財ユーカラシリーズⅥ：鹿男の勇者私を助ける(シ ユク ラメトク イカオ ピウキ)』 北海道教育委員会.
- 北海道教育庁社会教育部文化課編 1984 『昭和58年度 アイヌ民俗文化財口承文芸シリーズⅢ：知里幸恵ノート』 北海道教育委員会.
- 北海道教育庁社会教育部文化課編 1985 『昭和五十九年度 アイヌ民俗文化財ユーカラシリーズⅦ：踊ろう跳よう物語(一)(メノコ ユカラ ホリピアシナ テレケアシ ナ)』 北海道教育委員会.
- 北海道教育庁社会教育部文化課編 1985 『昭和63年度 アイヌ民俗文化財調査報告書(アイヌ民俗調査Ⅷ 静内・

- 浦河・様似地方』北海道文化財保護協会。
- 北海道教育庁社会教育部文化課編 1985 『昭和59年度 アイヌ民俗文化財口承文芸シリーズIV：知里幸恵ノート』北海道教育委員会。
- 北海道教育庁社会教育部文化課編 1986 『昭和六十年度 アイヌ民俗文化財ユーカラシリーズVIII：踊ろう跳よう物語（二）（メノコ ユカラ ホリピアシナ テレケアシ ナ）』北海道教育委員会。
- 北海道教育庁社会教育部文化課編 1986『昭和60年度 アイヌ民俗文化財口承文芸シリーズIII：知里幸恵ノート』北海道教育委員会。
- 北海道教育庁社会教育部文化課編 1987 『昭和六十一年度 アイヌ民俗文化財ユーカラシリーズIX：踊ろう跳よう物語（三）（メノコ ユカラ ホリピアシナ テレケアシ ナ） 星上姫（一）（ノチウカ ウン マッ）』北海道教育委員会。
- 北海道教育庁社会教育部文化課編 1988 『昭和六十二年度 アイヌ民俗文化財ユーカラシリーズX：星上姫（二）（ノチウカ ウン マッ） 急流川の女が自分の憑き神を鹿にした（一）（チワシペトウンマッ トウレンペへ ユクネカラ）』北海道教育委員会。
- 北海道教育庁社会教育部文化課編 1989 『昭和六十三年度 アイヌ民俗文化財ユーカラシリーズXI：急流川の女が自分の憑き神を鹿にした（二）（チワシペトウンマッ トウレンペへ ユクネカラ）』北海道教育委員会。
- 北海道教育庁社会教育部文化課編 1989 『昭和63年度 アイヌ民俗文化財調査報告書（アイヌ民俗調査VIII 鶴川・有珠地方）』北海道文化財保護協会。
- 北海道教育庁生涯学習部文化課編 1987 『アイヌ民俗文化財口承文芸シリーズVI：久保寺逸彦ノート』北海道教育委員会。
- 北海道教育庁生涯学習部文化課編 1988 『アイヌ民俗文化財口承文芸シリーズVII：久保寺逸彦ノート』北海道教育委員会。
- 北海道教育庁生涯学習部文化課編 1989 『アイヌ民俗文化財口承文芸シリーズVIII：久保寺逸彦ノート』北海道教育委員会。
- 北海道教育庁生涯学習部文化課編 1990 『アイヌ民俗文化財口承文芸シリーズIX：久保寺逸彦ノート』北海道教育委員会。
- 北海道教育庁生涯学習部文化課編 1990 『平成元年度 アイヌ民俗文化財ユーカラシリーズXII：急流川の女が自分の憑き神を鹿にした（三）（チワシペトウンマッ トウレンペへ ユクネカラ） おぼ・妹（一）（ウナラペ・トゥレンシ）』北海道教育委員会。
- 北海道教育庁生涯学習部文化課編 1991 『平成二年度 アイヌ民俗文化財ユーカラシリーズXIII：おぼ・妹（二）（ウナラペ・トゥレンシ）』北海道教育委員会。
- 北海道教育庁生涯学習部文化課編 1992 『平成三年度 アイヌ民俗文化財ユーカラシリーズXIV：おぼ・妹（三）（ウナラペ・トゥレンシ） 湖口のひと、救いに来る物語（一）（トプトウンクル イエイカスイ）』北海道教育委員会。
- 北海道教育庁生涯学習部文化課編 1993 『平成四年度 アイヌ民俗文化財ユーカラシリーズXV：湖口のひと、救いに来る物語（二）（トプトウンクル イエイカスイ） 沖の岬に住む悪い性の女（一）（レブンノッウンマッ ウェンオソイウンマッ）』北海道教育委員会。
- 北海道教育庁生涯学習部文化課編 1994 『平成五年度 アイヌ民俗文化財ユーカラシリーズXVI：沖の岬に住む悪い性の女（二）（レブンノッウンマッ ウェンオソイウンマッ）』北海道教育委員会。
- 北海道教育庁生涯学習部文化課編 1994 『平成5年度 アイヌ民俗文化財口承文芸シリーズXII：八重九郎の伝承(2)』北海道教育委員会。
- 北海道教育庁生涯学習部文化課編 1995 『平成六年度 アイヌ民俗文化財ユーカラシリーズXVII：) 若きチクペニ神がオタサム村を撃つ物語（ヤイラブポンチクペニカムイ オタサムコタン キクカラ）』北海道教育委員会。
- 北海道教育庁生涯学習部文化課編 1997 『平成8年度 アイヌ民俗文化財調査報告書（アイヌ民俗調査XVI：補足調査3）』北海道教育委員会。
- 北海道教育庁生涯学習部文化課編 2002 『平成十三年度 アイヌ民俗文化財（ユーカラシリーズ24）オキクルミが私・ポイヤウンペに伝言を寄こした（オイナカムイ アトゥイコロカムイ ウイテクワヤンケ） カニ

- シリの若者をのろった狼（カニシリウクル ウレシヨッカラネアカラ）』北海道教育委員会。  
 北海道教育庁生涯学習部文化課編 2003 『平成十四年度 アイヌ民俗文化財（ユーカーラシリーズ 25）わが甥 我を争わす（アカラクフ イウコイキレ）』北海道教育委員会。  
 北海道教育庁生涯学習部文化課編 2004 『平成十五年度 アイヌ民俗文化財（ユーカーラシリーズ 26）海の妖精 十二人の兄妹（アトゥイコシンプク イワンイリワクネ イワントゥレシネワ アイペレ）』北海道教育委員会。  
 北海道教育庁生涯学習部文化課編 2005 『平成十六年度 アイヌ民俗文化財（ユーカーラシリーズ 27）隠された人食い刀（ムッケ イペタム） 六代をきたおじいさん 自ら育つ（イワンアイヌシキリ エポソ エカシ アイコレス）』北海道教育委員会。  
 北海道教育庁生涯学習部文化課編 2006 『平成十七年度 アイヌ民俗文化財（ユーカーラシリーズ 28）私を助ける為に神が大鯨を頼んだ（レプン エカシアニスク） 自分を振って回り歩く（シ スイエ アプカシ カリ アプカシ）』北海道教育委員会。  
 北海道教育庁生涯学習部生涯学習推進局文化・スポーツ課編 2007 『平成十八年度 アイヌ民俗文化財（ユーカーラシリーズ 29）白い幣棚に黒い幣棚が打ち重なる物語（レタラパイイナウサン クンネパイ イナウサン ウオウシ）』北海道教育委員会。  
 北海道教育庁生涯学習部生涯学習推進局文化・スポーツ課編 2008 『平成十九年度 アイヌ民俗文化財（ユーカーラシリーズ 30）私のおばが草小舟にわたしを乗せて流す（アコロ ウナラペ キナポンチプ イオレ ワイモムカ）』北海道教育委員会。  
 北海道静内町教育委員会 1993 『静内地方の伝承IV—織田ステノの口承文芸（3）』北海道静内町教区委員会。  
 北海道静内町教育委員会 1994 『静内地方の伝承IV—織田ステノの口承文芸（4）』北海道静内町教区委員会。  
 北海道新聞 2005 「シカ増加抑制策：米の研究を報告 知床との比較シンポ」『北海道新聞』2005年8月5日朝刊 34面。  
 北海道庁編 1990 [原著 1937] 『新撰 北海道史：第二巻通説一』北海道庁。  
 北海道毎日新聞 1988 「上川道路開鑿の實況」『北海道毎日新聞』1888年12月4日付 [第419号]。  
 北海道立アイヌ民族文化研究センター編 2000 『アイヌ文化紹介小冊子：ポン カンピソシ（6）ウエネウサラ 口頭文芸』北海道立アイヌ民族文化研究センター。  
 北海道立図書館北方資料室編 2013 「講演会・資料で語る北海道の歴史講演録『北海道の出版文化史～昭和時代を中心にして』講師：出村文理氏」『北の資料』（128），p.12-13，北海道立図書館北方資料室。  
 本田優子 2007 「樹皮を剥ぎ残すという言説をめぐる：更科源蔵の記録に基づく一考察」『北海道立アイヌ民族文化センター研究紀要』（13），pp.15-27，北海道立アイヌ民族文化センター。  
 本田優子 2009 「アイヌ口承文芸にみられる『史実』と交易」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』（15），pp.39-56，北海道立アイヌ民族文化研究センター。  
 マグラス，スーザン 2015 「海辺のオオカミ」『ナショナル ジオグラフィック 日本版 [2015年10月号]』21(10)，pp.126-141，日経ナショナルジオグラフィック社。  
 増田隆一 2018 「序章：食肉類の中の哺乳類学」増田隆一編『日本の食肉類：生態系の頂点に立つ哺乳類』pp.1-20，東京大学出版会。  
 増田隆一編 2018 『日本の食肉類：生態系の頂点に立つ哺乳類』東京大学出版会。  
 マッカーロー，R・デール，梶光一，山中正美編 2006 『世界自然遺産 知床とイエローストーン：野生をめぐる二つの国立公園の物語』知床財団。  
 松崎岩穂 1962 『続 上ノ国村史』上ノ国町。  
 松平俊子 1994 [原著 1939] 「御庭の狼：皇室と御日常」『動物文学』（57），pp.65-66，築地書館。  
 松谷みよ子 2004 『現代民話考 10：狼・山犬 猫』筑摩書房。  
 松前町史編集室編 1988 『松前町史：通説編 第1巻下』松前町。  
 松山義雄 1943 『山村動物誌』山岡書店。  
 松山義雄 1977 『狩りの語り部：伊那の山峡より』法政大学出版局。  
 丸山直樹 1994 「IUCN オオカミ専門家会議 オオカミ国際シンポジウム」『フォレスト・コール』（1），pp.10-13，日本オオカミ協会。

- 丸山直樹 1998 「ニホンオオカミについて」『別冊太陽』(103), pp.150-156, 平凡社.
- 丸山直樹 2014 「第4章 オオカミ復活の必要性」丸山直樹編『オオカミが日本を救う! : 生態系での役割と復活の必要性』pp.56-77, 白水社.
- 丸山直樹・須田知樹・小金澤正昭編 2007 『オオカミを放つ: 森・動物・人のよい関係を求めて』白水社.
- 三戸幸久 1992 「東北地方北部のニホンザルの分布はなぜ少ないか」『生物科学』44(3), pp.141-159, 農山漁村文化協会.
- 養輪早三郎編 1968 『手稲町誌: 上』札幌市.
- 宮本典子・牧岩男 1983 「ニホンオオカミ剥製標本の改作と新しくとり出された頭骨について」『和歌山大学教育学部紀要: 自然科学』(32), pp.9-16, 和歌山大学教育学部.
- 宮本典子 1991 「和歌山大学所蔵のニホンオオカミ剥製標本からとり出された頭骨について」『和歌山大学教育学部紀要: 自然科学』(40), pp.55-60, 和歌山大学教育学部.
- 宮本典子 2001 「現存する6体のニホンオオカミの剥製とその頭骨に見られる形態の研究」『和歌山大学教育学部紀要: 自然科学』(51), pp.23-32, 和歌山大学教育学部.
- 宗像充 2017 『ニホンオオカミは消えたか?』旬報社.
- 村上一馬 2013 「人馬を喰う狼, 狼を獲る人びと: 『盛岡藩家老席日記 雑書』から」『東北歴史博物館研究紀要』(14), pp.28-9, 東北歴史博物館.
- 村田庄次郎 1910 『札幌博物館案内』維新堂.
- 室蘭市総務部総務課編 1981 『新室蘭市史: 第1巻』室蘭市.
- 門別町郷土史研究会編 [鍋沢元蔵筆録] 1965 『門別町文化財調査シリーズ第1集 クト°ネシリカ: お化けの憑物, 魔物の憑物, アイヌ叙事詩』門別町郷土史研究会.
- 門別町郷土史研究会編 [鍋沢元蔵筆録・扇谷昌康脚注] 1969 『門別町文化財調査シリーズ第4集: アイヌの叙事詩』門別町郷土史研究会.
- 八雲町 2013a 『八雲町史: 三訂; 上巻』八雲町.
- 柳田国男 1969 [原著: 1931] 「狼と鍛冶屋の姥」『定本柳田國男集: 第八巻』筑摩書房.
- 柳田国男 1970 [原著: 1939] 「狼話雑話」『定本柳田國男集: 第二十二巻』筑摩書房.
- 山崎栄作 1986 『蝦夷日記』[木村謙次 1798-1799 (寛永 10-11) 年] 第一印刷.
- 山田伸一 2002 「オオカミ・ヒグマ・カラス: 明治期北海道における『有害鳥獣獲殺手当』をめぐる」『北海道開拓記念館調査報告』(41), pp.67-92, 北海道開拓記念館.
- 山田伸一 2011 『近代北海道とアイヌ民族: 狩猟規制と土地問題』北海道大学出版会.
- 山中正実・梶光一 2006 「イエローストーンからの提言を受けて」デール・R・マッカロー, 梶光一, 山中正実編『世界自然遺産 知床とイエローストーン: 野生をめぐる二つの国立公園の物語』pp.175-182, 知床財団.
- 山根一眞 1996a 「山根一眞の動物事件簿—狼: 第3回: DNA 鑑定のとある朗報」『シンラ』(27), pp.115-122, 新潮社.
- 山森芳郎・有馬洋太郎・岡村純編 1993 『図説: 日本の馬と人の生活誌』原書房.
- 夕張市史編さん委員会編 1981a 『夕張市史: 増補改訂; 上』夕張市.
- 湯本貴和 2011 「新たな技法が描く環境史」湯本貴和編『環境史をとらえる技法』pp.4-7, 文一総合出版.
- 吉家世洋・丸山直樹 2004 『日本の森にオオカミの群れを放て』ビイング・ネット・プレス.
- 吉川國男 2004 「ニホンオオカミ研究の現状と今後」野外調査研究所編『狼: 伝承と科学』pp.49-58, 野外調査研究所.
- 吉田武三 1970 『三航蝦夷日誌』[松浦武四郎: 1845-1849 (弘化2-嘉永2年)] 吉川弘文館.
- 米田政明 2006 「知床に再導入したオオカミを管理できるか」『知床博物館研究報告』(27), pp.1-8, 知床博物館.
- 讀賣新聞社 1903 「金色の狼」『讀賣新聞』1903年4月10日朝刊4面.
- 緑衣山人 1926 「マヤイヌとオホカミ」<sup>2</sup>『庭』8 (12), p.27, 日本庭園協会.
- 林野庁編 1969 『鳥獣行政のあゆみ』林野庁.
- ロペス, バリー・ホルスタン 1984 『オオカミと人間』草思社.
- 早稲田大学語学教育研究所アイヌ語研究会編著 1999 『アイヌ語音声資料 10 カタカナ版—川上まつ子さんの昔

- 話と神謡（ペナコリ）』早稲田大学語学教育研究所。  
 渡瀬庄三郎 1912 「元祿寛永年間に於ける對馬獺猪の事跡」『動物学雑誌』(281), pp.15-26, 動物學會。  
 渡辺銀太郎 1911 『動物写真画帖』 新橋堂。  
 稚内市史編纂室 1968 『稚内市史』 稚内市。  
 Treves, Adrian [竹田直人訳] 2011 「第 16 章 保護地域周辺の野生動物との軋轢における人間事象」『野生動物と社会—人間事象からの科学』 pp.217-231, 文永堂出版。

## 2. 英語文献

- Boitani, Luigi. 2003 “Wolf conservation and recovery” in L. David Mech and Luigi Boitani, eds. *Wolves: Behavior, ecology, and conservation*, pp.317- 340, University of Chicago Press.
- Fritts, Steven H. Robert O. Stephenson, Robert D. Hayes, and Luigi Boitani. 2003 “Wolves and Humans” in L. David Mech and Luigi Boitani, eds. *Wolves: Behavior, ecology, and conservation*, pp.316-289, University of Chicago Press.
- Harper, Francis. 1945. *Extinct and vanishing mammals of the Old World*. New York, American Committee for International Wild Life Protection.
- Ishiguro, Naotaka. Yasuo Inoshima, Nobuo Shigehara, Hideo Ichikawa, Masaru Kato. 2010 “Osteological and Genetic Analysis of the Extinct Ezo Wolf (*Canis lupus hattai*) from Hokkaido Island, Japan” *Zoological Society of Japan* (27), pp.320-324, Zoological Society of Japan.
- Ishiguro, Naotaka. Yasuo Inoshima, Nobuo Shigehara 2009 “Mitochondrial DNA Analysis of the Japanese Wolf (*Canis lupus hodophilax* Temminck, 1839) and Comparison with Representative Wolf and Domestic Dog Haplotypes” *Zoological Society of Japan* (26), pp.765-770, Zoological Society of Japan.
- Kishida, Kyukichi 1931 “Notes on Yesso Wolf” in 蘭山會編 *LANSANIA: Journal of Arachnology and Zoology* (『蘭山會機関雑誌』) 25, pp.72-75, 蘭山會。
- Marquis of Tweeddale, Arthur 1878 “On a new Philippine Genus and Species of Bird”, *Proceedings of The Zoological Society of London*. pp.114-120, Zoological Society of London.
- Matsubayashi, Jun. Junko O. Morimoto, Ichiro Tayasu, Tsutomu Mano, Miyuki Nakajima, Osamu Takahashi, Kyoko Kobayashi, Futoshi Nakamura 2015 “Major decline in marine and terrestrial animal consumption by brown bears (*Ursus arctos*)” [ヒグマの動物質利用の激減], *Scientific Reports* (5), pp.1-7. Springer Nature.
- Newell, Josh. 2004 *The Russian Far East: A Reference Guide for Conservation and Development* Daniel & Daniel Pub.
- Pocock, R.I. 1935 “The race of *Canis lupus*”, *Proceedings of the Zoological Society of London*. 105(3), pp.647-684. Zoological Society of London.
- Sato, Yoshikazu. Hidetsugu Nakamura, Yuka Ishifune, Noriyuki Ohtaishi 2011 “Short Communication; The white-colored brown bears of the Southern Kurils” *Ursus* 22(1), pp.84-90. International Association for Bear Research and Management.
- Zoological Society of London 1878 “On a new Philippine Genus and Species of Bird”, *Proceedings of The Zoological Society of London*. 46(1), pp.114-120. Zoological Society of London.

## 3. インターネット情報

- 国立国会図書館 「国立国会図書館検索・申込サービス (国立国会図書館オンライン)」 <https://ndlonline.ndl.go.jp/#/> (2019年5月30日最終確認)。
- 国立国会図書館 「国立国会図書館デジタルコレクション」 <http://dl.ndl.go.jp/> (2019年5月30日確認)。
- 国立情報学研究所 (NII) 「CiNii Articles 一日本の論文をさがす」 <http://ci.nii.ac.jp/> (2019年5月30日最終確認)。
- 国立情報学研究所 (NII) 「Webcat Plus」 <http://webcatplus.nii.ac.jp/> (2019年5月30日最終確認)。
- 札幌市中央図書館 2018 「北海道内の市町村史」 <https://www.city.sapporo.jp/toshokan/sapporosiryosap-top.html> (2019

- 年 5 月 30 日最終確認).
- 衆議院 2014 「第 186 回国会・環境委員会：第 8 号（平成 26 年 4 月 18 日（金曜日）」  
[http://www.shugiin.go.jp/internet/itdb\\_kaigiroku.nsf/html/kaigiroku/001718620140418008.htm](http://www.shugiin.go.jp/internet/itdb_kaigiroku.nsf/html/kaigiroku/001718620140418008.htm)（2019 年 5 月 30 日確認）.
- 総合地球環境学研究所 2015 「北海道のヒグマ，肉食から草食傾向へ，明治以降の開発が影響か：考古試料の安定同位体分析から」 [http://www.kyoto-u.ac.jp/research/research\\_results/2014/documents/150327\\_1/01.pdf](http://www.kyoto-u.ac.jp/research/research_results/2014/documents/150327_1/01.pdf)（2019 年 5 月 30 日最終確認）.
- 高田知和 2014 「地域史誌の作られ方：自治体史と字誌（区史）を素材にして」（日本出版学会：2013 年度秋季研究発表会） <http://www.shuppan.jp/shukihappyo6-201310.html>（2019 年 5 月 30 日確認）.
- 対馬市役所 「～対馬のイノシシ・シカの歴史～」 [http://www.city.tsushima.nagasaki.jp/policy/post\\_123.html](http://www.city.tsushima.nagasaki.jp/policy/post_123.html)（2019 年 5 月 30 日最終確認）.
- ブルムメ [田中芳男 抄訳・中島仰山 画] 1874 『動物学：上』 [国立国会図書館デジタルコレクション] <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/832779>（NDL 請求記号：4-68）2019 年 5 月 30 日最終確認）.
- 北海道 2009 「北海道の市町村合併の状況：平成 21 年 10 月 5 日現在」  
<http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ss/cks/gappei/index.htm>（2019 年 5 月 30 日確認）.
- 北海道 2018 「野生鳥獣による被害調査結果について（平成 29 年度分）」 <http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ks/skn/higai.htm>（2019 年 5 月 30 日最終確認）.
- 北海道・支庁制度研究チーム 1998 「支庁制度研究結果報告書」  
<http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ss/cks/grp/13/kenkyuhoukokusho.pdf>（2019 年 5 月 30 日最終確認）.
- 北海道観光振興機構アイヌ文化部会ワーキンググループ 2009 『ガイド教本・アイヌ民族編＜動物編＞』  
[https://www.visit-hokkaido.jp/assets/file/document/2016/03/data2\\_file\\_22.pdf](https://www.visit-hokkaido.jp/assets/file/document/2016/03/data2_file_22.pdf)（2019 年 5 月 30 日確認）.
- 北海道庁 2017 「道内市町村数の変遷一覧表」 <http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ss/scs/gyousei/history01.htm>（2019 年 5 月 30 日最終確認）.
- 松林順 2017 「絶滅したエゾオオカミ（*Canis lupus hattai*）の食性復元」 [日本生態学会第 64 回全国大会（2017 年 3 月，東京）講演要旨] <http://www.esj.ne.jp/meeting/abst/64/I02-03.html>（2019 年 5 月 30 日最終確認）.
- Biodiversity Heritage Library <http://www.biodiversitylibrary.org/>（2019 年 5 月 30 日最終確認）.
- Darimont, Chris T., Paul C. Paquet, and Thomas E. Reimchen. 2008 "Spawning salmon disrupt trophic coupling between wolves and ungulate prey in coastal British Columbia" *BMC Ecology* 8:14  
<https://bmcecol.biomedcentral.com/articles/10.1186/1472-6785-8-14>（2019 年 5 月 30 日確認）.
- UNEP<sup>3</sup>・WCMC<sup>4</sup> "CITES Trade Database" <http://trade.cites.org/>（2019 年 5 月 30 日確認）.
- Yellowstone Forever "Yellowstone Wolf Project" <https://www.yellowstone.org/wolf-project/>（2019 年 5 月 30 日確認）.

<sup>1</sup> 確認できているのは 1973 年刊行の第 7 版.

<sup>2</sup> 「ヤマイヌとオホカミ」の誤植と考えられるが，原文のまま記載する.

<sup>3</sup> UNEP: United Nations Environmental programme（国際連合環境計画）.

<sup>4</sup> WCMC: World conservation Monitoring Centre（世界自然保全モニタリングセンター）.

## 北海道内「市町村史」一覧（五十音順）

### 凡例：

- (1) 212 市町村名の五十音順に一覧を作成した。
- (2) 同一の市町村から複数の資料が刊行されている場合は、刊行年順に記載を行った。
- (3) 212 市町村化以前の自治体名については、合併後の自治体に含めた。

### 1. 愛別町

愛別町史編集委員会編 1969 『愛別町史』 愛別町.

### 2. 赤井川村

赤井川村教育委員会編 1981 『郷土のあゆみ：追録再版』 赤井川村.

### 3. 赤平市

赤平市編纂委員会編 2001a 『赤平市史 上巻』 赤平市.

赤平市編纂委員会編 2001b 『赤平市史 下巻』 赤平市.

### 4. 阿寒町

阿寒町史編纂委員会編 1966 『阿寒町史』 阿寒町.

阿寒町史編纂委員会編 1986 『阿寒町百年史』 阿寒町.

### 5. 旭川市

旭川市 1931a 『旭川市史稿 上巻』 旭川市.

旭川市 1931b 『旭川市史稿 下巻』 旭川市.

旭川市史編集委員会編 1959 『旭川市史 第1巻』 国書刊行会.

旭川市史編集委員会編 1981a 『旭川市史 第2巻』 国書刊行会.

旭川市史編集委員会編 1981b 『旭川市史 第3巻』 国書刊行会.

旭川市史編集委員会編 1972a 『旭川市史 第5巻』 旭川市.

旭川市史編集委員会編 1972b 『旭川市史 第6巻』 旭川市.

旭川市史編集会議編 1993 『新旭川市史 第6巻：史料1』 旭川市.

旭川市史編集会議編 1994 『新旭川市史 第1巻：通史1』 旭川市.

旭川市史編集会議編 1996 『新旭川市史 第7巻：史料2』 旭川市.

旭川市史編集会議編 1997 『新旭川市史 第8巻：史料3』 旭川市.

旭川市史編集会議編 2002 『新旭川市史 第2巻：通史2』 旭川市.

旭川市史編集会議編 2006 『新旭川市史 第3巻：通史3』 旭川市.

旭川市史編集会議編 2009 『新旭川市史 第4巻：通史4』 旭川市.

旭川市史編集会議編 2012 『新旭川市史 第5巻：通史5』 旭川市.

### 6. 朝日町

朝日町編 1981 『朝日町史』 朝日町.

北海道士別市編 2008 『統朝日町史』 北海道士別市.

### 7. 芦別市

芦別市 1994a 『新芦別市史 第1巻』 芦別市.

芦別市 1994b 『新芦別市史 第2巻』 芦別市.

### 8. 足寄町

足寄町町史編纂臨時専門委員会編 1973 『足寄町史』 足寄町.

## 9. 厚岸町

- 厚岸町史編纂委員会編 1975 『厚岸町史 上巻』 厚岸町.  
 厚岸町史編集委員会編 2012 『新厚岸町史：通史編 第1巻』 厚岸町.  
 厚岸町史編集委員会編 2003a 『新厚岸町史：資料編 第1巻』 厚岸町.  
 厚岸町史編集委員会編 2003b 『新厚岸町史：資料編 第2巻』 厚岸町.  
 厚岸町史編集委員会編 2007 『新厚岸町史：資料編 第3巻』 厚岸町.

## 10. 厚沢部町

- 厚沢部町史編纂委員会編 1969 『桜鳥 第1巻：厚沢部町の歩み』 厚沢部町.  
 厚沢部町史編纂委員会編 1981 『桜鳥 第2巻：厚沢部町の歩み』 厚沢部町.

## 11. 厚田村

- 厚田村 1969 『厚田村史』 厚田村.

## 12. 厚真町

- 厚真村 1956 『厚真村史』 厚真村広報委員会.

## 13. 網走市

- 網走市史編纂委員会編 1955 『網走小史』 網走市役所.  
 網走市史編纂委員会編 1958 『網走市史（上巻）：先史時代篇・原始時代』 網走市.  
 網走市史編纂委員会編 1971 『網走市史（下巻）：開拓時代篇』 網走市.

## 14. 虻田町

- 虻田町 1962 『虻田町史』 虻田町役場.  
 虻田町史編集委員会編 1981 『物語虻田町史 第2巻：江戸時代編』 虻田町.  
 虻田町史編集委員会編 1983 『物語虻田町史 第5巻：洞爺湖温泉発展史』 虻田町.  
 虻田町史編集委員会編 1986 『物語虻田町史 第4巻：産業編』 虻田町.  
 虻田町史編集委員会編 2001 『物語虻田町史 第3巻：教育・文化編』 虻田町.  
 虻田町史編集委員会編 2004 『物語虻田町史 第1巻：行政編・資料編』 虻田町.

## 15. 生田原町

- 生田原町 1981 『生田原町史』 生田原町.  
 続生田原町史編さん委員会編 1997 『生田原町史 続』 生田原町.

## 16. 池田町

- 池田町史編集委員会編 1988 『池田町史 上巻』 池田町役場.  
 池田町史編集委員会編 1989 『池田町史 下巻』 池田町役場.

## 17. 石狩市

- 石狩町 1972 『石狩町誌 上巻』 石狩町.  
 石狩町 1985 『石狩町誌 中巻1』 石狩町.  
 石狩町 1991 『石狩町誌 中巻2』 石狩町.  
 石狩町 1997 『石狩町誌 下巻』 石狩町.

## 18. 今金町

- 今金町史編集委員会編 1991 『今金町史 改訂 上巻』 今金町.  
 今金町史編集委員会編 1994 『今金町史 改訂 下巻』 今金町.

## 19. 岩内町

- 岩内町 1966 『岩内町史』 岩内町.

**20. 岩見沢市**

岩見沢市史編さん委員会編 1963 『岩見沢市史』 岩見沢市.  
岩見沢百年史編さん委員会編 1985 『岩見沢百年史』 岩見沢市.

**21. 歌志内市**

歌志内市史編さん委員会編 1964 『歌志内市史』 歌志内市.

**22. 歌登町**

歌登町 1980 『歌登町史』 歌登町.

**23. 浦臼町**

浦臼町史編さん委員会編 1967 『浦臼町史』 浦臼町.

**24. 浦河町**

浦河町町史編さん委員会編 2002 『新浦河町史 上巻』 浦河町.  
浦河町町史編さん委員会編 2002 『新浦河町史 下巻』 浦河町.

**25. 浦幌町**

浦幌町史編さん委員会編 1971 『浦幌町史』 浦幌町.

**26. 雨竜町**

雨竜町史編集委員会編 1969 『雨竜町史』 雨竜町.

**27. 江差町**

江差町史編集室編 1977 『江差町史 第1巻：資料編1』 江差町.  
江差町史編集室編 1978 『江差町史 第2巻：資料編2』 江差町.  
江差町史編集室編 1979 『江差町史 第3巻：資料編3』 江差町.  
江差町史編集室編 1981 『江差町史 第4巻：資料編4』 江差町.  
江差町史編集室編 1982 『江差町史 第5巻：通説1』 江差町.  
江差町史編集室編 1983 『江差町史 第6巻：通説2』 江差町.

**28. 枝幸町**

枝幸町史編纂委員会編 1967 『枝幸町史 上巻』 枝幸町.  
枝幸町史編纂委員会編 1971 『枝幸町史 下巻』 枝幸町.  
枝幸町史編纂委員会編 2010a 『枝幸町史 第3巻』 枝幸町.  
枝幸町史編纂委員会編 2010b 『枝幸町史 第4巻』 枝幸町.

**29. 恵山町**

恵山町史編纂室編 2007 『恵山町史』 恵山町.

**30. 恵庭市**

渡辺茂編 1979 『恵庭市史』 恵庭市.

**31. 江別市**

渡辺茂編 1970 『江別市史 上巻』 江別市.  
渡辺茂編 1970 『江別市史 下巻』 江別市.

**32. えりも町**

渡辺茂編 1971 『えりも町史』 えりも町.

**33. 遠軽町**

遠軽町編 1977 『遠軽町史』 遠軽町.

遠軽町編 1998 『遠軽町百年史』 遠軽町.

**34. 遠別町**

遠別町 1957 『遠別町史』 遠別町.

**35. 追分町**

追分町史編さん委員会編 1986 『追分町史』 追分町.

**36. 雄武町**

日塔聰編著 1962 『雄武町の歴史』 雄武町.

**37. 大滝村**

大滝村企画財政課編 1985 『大滝村史』 大滝村.

**38. 大野町**

飯田吉次郎編 1970 『大野町史』 大野町役場.

**39. 奥尻町**

奥尻町町史編さん委員会 1997 『新奥尻町史 上巻』 奥尻町.

奥尻町町史編さん委員会 2003 『新奥尻町史 下巻』 奥尻町.

**40. 置戸町**

置戸町史編纂委員会編 1985 『置戸町史 上巻：戦前編』 置戸町.

**41. 興部町**

興部町史編纂委員会編 1961 『興部町史』 興部町.

**42. 長万部町**

長万部町史編集室編 1977 『長万部町史』 長万部町.

**43. 小樽市**

渡部義頭 1914 『小樽区史』 左文字書房.

小樽市 1958 『小樽市史 第1巻』 小樽市.

小樽市 1963 『小樽市史 第2巻』 小樽市.

小樽市 1964 『小樽市史 第3巻』 小樽市.

小樽市 1966 『小樽市史 第4巻』 小樽市.

小樽市 1967 『小樽市史 第5巻』 小樽市.

小樽市 1969 『小樽市史 第6巻』 小樽市.

小樽市 1993 『小樽市史 第7巻：行政編 上』 小樽市.

小樽市 1994 『小樽市史 第8巻：行政編 中』 小樽市.

小樽市 1995 『小樽市史 第9巻：行政編 下』 小樽市.

**44. 音威子府町**

音威子府村史編さん委員会編 1976 『音威子府村史』 音威子府村.

**45. 音更町**

音更町 1980 『音更町史』 音更町.

**46. 乙部町**

乙部町 1979 『乙部町抄史：前編・後編』 乙部町.

**47. 帯広市**

帯広市史編纂委員会編 1984 『帯広市史』 帯広市役所.  
帯広市史編纂委員会編 2003 『帯広市史』 帯広市.

**48. 小平町**

小平町史編集室編 1976 『小平町史』 小平町史編集室.

**49. 音別町**

音別町史編さん委員会編 1985 『音別町史』 音別町.

**50. 上磯町**

上磯町史編纂委員会編 1975 『上磯町史：年史編』 上磯町.  
上磯町 1997a 『上磯町史 上巻』 上磯町.  
上磯町 1997b 『上磯町史 下巻』 上磯町.

**51. 上川町**

上川町 1966 『上川町史』 上川町.

**52. 上士幌町**

上士幌町史編さん委員会 1970 『上士幌町史』 上士幌町.  
上士幌町史編さん委員会 1992 『上士幌町史 追補版』 上士幌町.

**53. 上砂川町**

上砂川町史編纂委員会 1988 『新上砂川町史』 上砂川町.

**54. 上ノ国町**

松崎岩穂 1956 『上ノ国村史』 上ノ国町.  
松崎岩穂 1962 『上ノ国村史 続』 上ノ国町.

**55. 上富良野町**

上富良野百年史編纂委員会編 1998 『上富良野百年史』 上富良野町.

**56. 上湧別町**

上湧別町 1968 『上湧別町史』 上湧別町.

**57. 神得内村**

神恵内村編 1972 『郷土かもえない』 神得内村.

**58. 木古内町**

木古内町史編さん委員会編 1982 『木古内町史』 木古内町.

**59. 北檜山町**

北檜山町 1981 『北檜山町史』 北檜山町.

**60. 北広島市**

松原太郎・「広島町の歩み」刊行会編 1972 『広島町の歩み』 「広島町の歩み」刊行会.  
北広島市誌編さん委員会編 2007 『北広島市史：上巻』 北広島市.  
北広島市誌編さん委員会編 2007 『北広島市史：下巻』 北広島市.

**61. 北見市**

北見市 1981 『北見市史 上巻』 北見市.  
北見市 1983 『北見市史 下巻』 北見市.

**62. 北村**

北村編 1985a 『北村史 上巻』 北村.

北村編 1985b 『北村史 下巻』 北村.

**63. 喜茂別町**

喜茂別町史編さん委員会編 1969 『喜茂別町史』 喜茂別町.

**64. 京極町**

京極町史編さん委員会編 1977 『京極町史』 京極町.

京極町史編さん委員会編 1998 『追補京極町史』 京極町.

**65. 共和町**

共和町史編さん委員会編 1960 『共和町史』 共和町.

**66. 清里町**

清里町史編纂委員会編 1978 『清里町史』 清里町.

**67. 釧路市**

釧路市編 1936 『釧路郷土史考』 釧路市.

渡辺茂 1957 『釧路市史』 釧路市.

釧路市 1974 『新釧路市史 第1巻：自然・先史篇・近世篇・政治・行政篇』 釧路市.

釧路市 1972 『新釧路市史 第3巻：社会・文化篇』 釧路市.

釧路市 1973 『新釧路市史 第2巻：産業・経済篇』 釧路市.

**68. 釧路町**

釧路町史編集委員会編 1990 『釧路町史』 釧路町役場.

**69. 倶知安町**

倶知安町史編纂委員会編 1961 『倶知安町史』 倶知安町.

**70. 熊石町**

熊石町史編さん委員会編 1987 『熊石町史』 熊石町.

**71. 栗沢町**

栗沢町史編さん委員会編集 1964 『栗沢町史』 栗沢町史.

**72. 栗山町**

丹野岳二 1940 『角田村史』 角田村.

栗山町史編さん委員会編 1971 『栗山町史』 栗山町.

**73. 黒松内町**

黒松内町編 1987 『黒松内町史 上巻』 黒松内町.

黒松内町編 1993 『黒松内町史 下巻』 黒松内町.

**74. 訓子府町**

訓子府村史編さん委員会 1951 『訓子府村史』 訓子府村.

**75. 剣淵町**

剣淵町編 1979 『剣淵町史』 剣淵町.

剣淵町史編さん委員会編 1999 『剣淵町史 続史1：百年のあゆみ』 剣淵町.

**76. 小清水町**

- 小清水町史編纂委員会編 1955 『小清水町史』 小清水町.  
小清水町史編さん委員会編 2000 『新小清水町史』 小清水町.

**77. 札幌市**

- 札幌史學會 1897 『札幌沿革史』 札幌史學會.  
札幌区 1911 『札幌区史』 札幌区.  
加藤清英編 1927 『札幌村史』 札幌村.  
札幌村史編纂委員会編 1950 『札幌村史』 札幌村.  
札幌市史編集委員会編 1953 『札幌市史：政治行政編』 札幌市.  
札幌市史編集委員会編 1958a 『札幌市史：産業経済編 附：自然環境編』 札幌市.  
札幌市史編集委員会編 1958b 『札幌市史：文化社会編』 札幌市.  
札幌市教育委員会編 1989 『新札幌市史 第1巻：通史1 札幌の誕生』 札幌市.  
札幌市教育委員会編 1991 『新札幌市史 第2巻：通史2 札幌のおいたち』 札幌市.  
札幌市教育委員会編 2002 『新札幌市史 第5巻：通史5（上）』 札幌市.  
札幌市教育委員会編 2005 『新札幌市史 第5巻：通史5（下）』 札幌市.  
札幌市教育委員会編 1987 『新札幌市史 第6巻：史料編（1）』 札幌市.  
札幌市教育委員会編 1986 『新札幌市史 第7巻：史料編（2）』 札幌市.

**78. 様似町**

- 様似町史編さん委員会編 1992 『様似町史 改訂』 様似町.  
様似町史編さん委員会編 1993 『新様似町史』 様似町.

**79. 更別村**

- 更別村史編さん委員会編 1972 『更別村史』 更別村.

**80. 猿払村**

- 猿払村史編さん発行委員会編 1976 『猿払村史』 猿払村.

**81. 佐呂間町**

- 佐呂間町史編纂委員会編 1966 『佐呂間町史』 佐呂間町.

**82. 砂原町**

- 砂原町史編さん室編 2000 『砂原町史 第一巻：通史編』 砂原町.

**83. 鹿追町**

- 鹿追町史編纂委員会編 1978 『鹿追町史』 鹿追町.

**84. 鹿部町**

- 鹿部町史編集室編 1994 『鹿部町史』 鹿部町.

**85. 静内町**

- 静内町史編纂委員会編 1975 『静内町史 増補改訂版』 静内町.  
静内町史編さん委員会編 1996a 『静内町史 増補改訂版 上巻』 静内町.  
静内町史編さん委員会編 1996b 『静内町史 増補改訂版 下巻』 静内町.

**86. 標茶町**

- 標茶町史編纂委員会編 1966 『標茶町史考 前篇』 標茶町.  
標茶町史編纂委員会編 1978 『標茶町史考 後篇』 標茶町.  
標茶町史編さん委員会編 1998 『標茶町史 通史編 第1巻』 標茶町.

標茶町史編さん委員会編 1998 『標茶町史 通史編 第2巻』 標茶町.  
標茶町史編さん委員会編 2006 『標茶町史 通史編 第3巻』 標茶町.

**87. 士別市**

士別町・志村幸治 編 1969 『士別町史』 士別町.

**88. 標津町**

標津町史編纂委員会編 1968 『標津町史』 標津町.

**89. 士幌町**

士幌村史編纂委員会編 1962 『士幌村史』 士幌村.

**90. 島牧村**

島牧村教育委員会編 1990 『島牧村史』 島牧村.

**91. 清水町**

清水町史編さん委員会編 2005 『清水町百年史』 清水町.

**92. 占冠村**

占冠村 1963 『占冠村史』 占冠村.

**93. 下川町**

下川町史編纂委員会編 1968 『下川町史』 下川町.

**94. 積丹町**

積丹町史編さん委員会編 1985 『積丹町史』 積丹町.

**95. 斜里町**

斜里町史編纂委員会編 1955 『斜里町史』 斜里町.

**96. 初山別村**

初山別村史編集室編 1972 『初山別村史』 初山別村.

**97. 白老町**

白老町町史編さん委員会編 1992a 『新白老町史 上巻』 白老町.

白老町町史編さん委員会編 1992b 『新白老町史 下巻』 白老町.

**98. 白滝村**

白滝村史編さん委員会編 1971 『白滝村史』 白滝村.

**99. 白糠町**

白糠町史編集委員会編 1987 『白糠町史 上巻』 白糠町.

白糠町史編集委員会編 1989 『白糠町史 下巻』 白糠町.

**100. 知内町**

知内町 1986 『知内町史』 知内町.

**101. 新篠津村**

新篠津村史編さん委員会編 1975 『新篠津村史』 新篠津村史.

**102. 新得町**

新得町史編さん委員会編 1990 『新得町史』 新得町.

**103. 新十津川町**

新十津川町 1966 『新十津川町史』 新十津川町.

**104. 寿都町**

寿都町教育委員会編 1974 『寿都町史』 寿都町.

**105. 砂川市**

砂川市編纂委員会編 1991 『私たちの砂川市史 上巻』 砂川市.

砂川市編纂委員会編 1991 『私たちの砂川市史 下巻』 砂川市.

**106. 瀬棚町**

瀬棚町史編纂委員会編 1991 『瀬棚町史』 瀬棚町.

**107. 壮瞥町**

壮瞥町史編さん委員会編集 1979 『壮瞥町史』 壮瞥町.

**108. 大樹町**

大樹町 1969 『大樹町史』 大樹町.

**109. 大成町**

大成町史編集委員会編 1984 『大成町史』 大成町.

**110. 鷹栖町**

鷹栖町編 1973 『鷹栖町史』 鷹栖町.

**111. 滝川市**

江部乙村史編纂委員会・鞍田武夫 編 1932 『江部乙村史』 江部乙村.

滝川市史編さん委員会編 1962 『滝川市史』 滝川市.

**112. 滝上町**

滝上町史編さん委員会編 1976 『新撰 滝上町史』 滝上町.

**113. 伊達市**

渡辺茂 1972a 『新稿 伊達町史 上巻』 伊達町.

渡辺茂 1972b 『新稿 伊達町史 下巻』 伊達町.

伊達市史編さん委員会編 1994 『伊達市史』 伊達市.

**114. 端野町**

端野町 1965 『端野町史』 端野町.

端野小史編集委員会編 1987 『端野の夜明け：端野小史第1集』 端野町.

端野小史編集委員会編 1989 『端野の夜明け：端野小史第2集』 端野町.

端野小史編集委員会編 1990 『端野の夜明け：端野小史第3集』 端野町.

端野小史編集委員会編 1993 『端野の夜明け：端野小史第4集』 端野町.

**115. 秩父別町**

秩父別町編 1964 『秩父別町史』 秩父別町.

秩父別町史編さん委員会編 1987 『秩父別町史：正』 秩父別町.

**116. 千歳市**

更科源蔵編 1969 『千歳市史』 千歳市.

千歳市史編さん委員会編 1983 『千歳市史 増補』 千歳市.

千歳市史編さん委員会編 2010 『新千歳市史』 千歳市.

**117. 忠類村**

忠類村史編さん委員会編 2000 『忠類村史』 忠類村.

**118. 月形町**

月形町史編さん委員会編 1985 『月形町史』 月形町.

**119. 津別町**

津別町 1954 『津別町史』 津別町.

**120. 鶴居村**

鶴居村史編さん委員会編 1987 『鶴居村史』 鶴居村.

**121. 天塩町**

天塩町史編さん委員会編 1971 『天塩町史』 天塩町.

新編天塩町史編纂委員会 1993 『新編天塩町史』 天塩町.

**122. 弟子屈町**

更科源藏編 1949 『弟子屈町史』 弟子屈町.

弟子屈町史編さん委員会編 1981 『弟子屈町史』 弟子屈町.

**123. 戸井町**

戸井町史編纂委員会編 1973 『戸井町史』 戸井町.

**124. 当別町**

当別町史編さん委員会編 1972 『当別町史』 当別町.

**125. 当麻町**

当麻町史編集委員会編 1975 『当麻町史』 当麻町教育委員会.

**126. 洞爺村**

洞爺村編 1976 『洞爺村史：本編』 洞爺村.

洞爺村編 1976 『洞爺村史：資料編』 洞爺村.

**127. 常呂町**

常呂町史編さん委員会編 1969 『常呂町史』 常呂町.

**128. 樞法華村**

樞法華村編 1989 『樞法華村史』 樞法華村.

**129. 苫小牧**

苫小牧市 1975 『苫小牧市史 上巻』 苫小牧市.

苫小牧市 1976 『苫小牧市史 下巻』 苫小牧市.

苫小牧市 1977 『苫小牧市史 資料編 1』 苫小牧市.

**130. 苫前町**

苫前町史編さん委員会編 1982 『苫前町史』 苫前町.

**131. 泊村**

泊村教育委員会・泊村史編纂委員会編 1967 『泊村史』 泊村.

泊村教育委員会・泊村史編纂委員会編 2001 『泊村史 II』 泊村.

**132. 豊浦町**

豊浦町史編纂委員会編 1972 『豊浦町史』 豊浦町.

**133. 豊頃町**

豊頃町史編さん委員会編 1971 『豊頃町史：本編』 豊頃町.

**134. 豊富町**

豊富町史編さん委員会編 1986 『豊富町史』 豊富町史編さん委員会.

**135. 奈井江町**

奈井江町史編さん室編 1975 『奈井江町史』 奈井江町.

**136. 中川町**

中川町 1975 『中川町史』 中川町.

**137. 中札内村**

中札内村史編纂委員会編 1968 『中札内村史』 中札内村.

**138. 中標津町**

中標津町 1981 『中標津町史』 中標津町.

**139. 中頓別町**

中頓別町史編纂委員会編 1997 『中頓別町史』 中頓別町.

**140. 長沼町**

長沼町史編さん委員会編 1962 『長沼町の歴史 上巻』 長沼町.

長沼町史編さん委員会編 1962 『長沼町の歴史 下巻』 長沼町.

長沼町史編さん委員会編 1977 『長沼町九十年史』 長沼町.

**141. 中富良野町**

中富良野町史編さん委員会編 1986 『中富良野町史 上巻』 中富良野町.

中富良野町史編さん委員会編 1986 『中富良野町史 下巻』 中富良野町.

**142. 七飯町**

七飯町 1976 『七飯町史』 七飯町.

**143. 名寄市**

名寄市 1971 『名寄市史』 名寄市.

名寄市史編さん委員会編 1999 『新名寄市史 第1巻』 名寄市.

名寄市史編さん委員会編 2000a 『新名寄市史 第2巻』 名寄市.

名寄市史編さん委員会編 2000b 『新名寄市史 第3巻』 名寄市.

**144. 南幌町**

南幌町史編纂委員会 1962 『南幌町史』 南幌町.

**145. 新冠町**

新冠町史編さん委員会編 1966a 『新冠町史』 新冠町.

新冠町史編さん委員会編 1996b 『続新冠町史』 新冠町.

**146. 仁木町**

仁木町教育委員会編 2000 『新仁木町史』 仁木町.

**147. 西興部村**

西興部村史編纂委員会編 1977 『西興部村史』 西興部村.

**148. ニセコ町**

狩太町史編纂委員会 1960 『狩太町史』 狩太町.  
ニセコ町史編さん委員会編 1982 『ニセコ町史』 ニセコ町.

**149. 沼田町**

沼田町編 1982 『新編沼田町史』 沼田町.

**150. 根室市**

根室市編 1968 『根室市史 上巻』 根室市.  
根室市編 1968 『根室市史 下巻』 根室市.

**151. 登別市**

登別町史編纂委員会編 1967 『登別町史：開基百年記念』 登別町.

**152. 函館市**

函館区編 1911 『函館区史』 函館区.  
函館市 1974 『函館市史：史料編 第1巻』 函館市.  
函館市 1975 『函館市史：史料編 第2巻』 函館市.  
函館市 1980 『函館市史：通説編 第1巻』 函館市.  
函館市 1975 『函館市史：通説編 第2巻』 函館市.  
函館市 1997 『函館市史：通説編 第3巻』 函館市.  
函館市 2002 『函館市史：通説編 第4巻』 函館市.  
函館市 1978 『函館市史：別巻：亀田市編』 函館市.  
函館市 1998 『函館市史：銭亀沢編』 函館市.

**153. 羽幌町**

羽幌町史編纂委員会編 1968 『羽幌町史』 羽幌町.

**154. 浜頓別町**

浜頓別町史編集委員会編 1995 『浜頓別町史』 浜頓別町.

**155. 浜中町**

浜中町役場編 1975 『浜中町史』 浜中町.

**156. 浜益村**

石橋源 編著 1980 『浜益村史』 浜益村.

**157. 早来町**

早来町史編集委員会編 1973 『早来町史』 早来町.  
早来町史編集委員会編 1998 『早来町史 続刊』 早来町.

**158. 美瑛町**

美瑛町郷土史研究会編 1957 『美瑛町史 第1巻』 美瑛町.  
美瑛町郷土史研究会編 1959 『美瑛町史 第2巻』 美瑛町.  
美瑛町郷土史研究会編 1970 『美瑛町史 第3巻』 美瑛町.  
美瑛町郷土史研究会編 1980 『美瑛町史 第4巻』 美瑛町.  
美瑛町郷土史研究会編 1991 『美瑛町史 第5巻』 美瑛町.

**159. 東神楽町**

堀口喜三郎編 1973 『東神楽町史』 東神楽町.

**160. 東川町**

東川町史編集委員会 1975 『東川町史 第1巻』 東川町.

東川町史編集委員会 1995 『東川町史 第2巻』 東川町.

**161. 東藻琴村**

東藻琴村史第二巻編さん委員会編 1972 『東藻琴村史』 東藻琴村.

東藻琴村史第二巻編さん委員会編 1999 『東藻琴村史 第2巻』 東藻琴村.

**162. 日高町**

日高町史編纂委員会編 1977 『日高町史』 日高町.

**163. 比布町**

比布町史刊行委員会編 1964 『比布町史』 比布町.

比布町史編さん委員会編 1985 『比布町史 第2巻』 比布町.

比布町史編さん委員会編 1997 『比布町史 第3巻』 比布町.

**164. 美唄市**

美唄市史編さん委員会編 1970 『美唄市史』 美唄市.

美唄市百年史編さん委員会編 1991 『美唄市百年史』 美唄市.

**165. 美深町**

美深町史編さん事務局 編 1971 『美深町史』 美深町.

**166. 美幌町**

美幌町史編さん委員会編 1972 『美幌町史』 美幌町.

**167. 平取町**

渡辺茂・河野本道編 1974 『平取町史』 平取町.

**168. 広尾町**

広尾町史編纂委員会編 1960 『広尾町史』 広尾町.

**169. 風連町**

風連町史編さん委員会編 1967 『風連町史』 風連町.

**170. 深川町**

深川市 編 1994 『新深川市史』 深川市.

**171. 福島町**

福島町史編集室編 1993 『福島町史 第1巻：史料編』 福島町.

福島町史編集室編 1995 『福島町史 第2巻：通説編 上巻』 福島町.

福島町史編集室編 1997 『福島町史 第3巻：通説編 下巻』 福島町.

**172. 富良野市**

富良野市史編纂委員会編 1968 『富良野市史 第1巻』 富良野市.

富良野市史編纂委員会編 1994 『富良野市史 第2巻』 富良野市.

富良野市史編纂委員会編 1973 『富良野市史 第3巻』 富良野市.

**173. 古平町**

古平町史編さん委員会編 1973 『古平町史 第1巻』 古平町.

古平町史編さん委員会編 1977 『古平町史 第2巻』 古平町.

古平町史編さん委員会編 1998 『古平町史 第3巻』 古平町.

**174. 別海町**

別海村役場総務課企画係 1966 『別海村小史』 別海村  
別海町百年史編さん委員会編 1978 『別海町百年史』 別海町.

**175. 北竜町**

北竜町編 1968 『北竜町史』 北竜町.

**176. 穂別町**

穂別町史編さん委員会編 1968 『穂別町史』 穂別町.  
穂別町史編纂委員会編 1991 『新穂別町史』 穂別町.

**177. 幌加内町**

幌加内町史編さん委員会編 1971 『幌加内町史』 幌加内町.

**178. 幌延町**

白山友正編 1974 『幌延町史』 幌延町.

**179. 本別町**

本別町史編さん委員会編 1977 『本別町史』 本別町.  
本別町史編さん委員会編 1992 『本別町史：追補』 本別町.

**180. 幕別町**

幕別町史編纂委員会編 1967 『幕別町史』 幕別町.

**181. 増毛町**

新增毛町史編さん委員会編 2006 『新增毛町史』 増毛町.

**182. 真狩村**

真狩村史編さん委員会編 1965 『真狩村史』 真狩村.

**183. 松前町**

松前町史編集室編 1977 『松前町史：史料編 第2巻』 松前町.  
松前町史編集室編 1979 『松前町史：史料編 第3巻』 松前町.  
松前町史編集室編 1980 『松前町史：史料編 第4巻』 松前町.  
松前町史編集室編 1984 『松前町史：通説編 第1巻上』 松前町.  
松前町史編集室編 1988 『松前町史：通説編 第1巻下』 松前町.  
松前町史編集室編 1993 『松前町史：通説編 第2巻』 松前町.

**184. 丸瀬布町**

丸瀬布町史編集委員会編 1974 『丸瀬布町史 上』 丸瀬布町.  
丸瀬布町史編集委員会編 1974 『丸瀬布町史 下』 丸瀬布町.  
丸瀬布町史編集委員会編 1994 『新丸瀬布町史 上巻』 丸瀬布町.  
丸瀬布町史編集委員会編 1994 『新丸瀬布町史 下巻』 丸瀬布町.

**185. 三笠市**

三笠市史編さん委員会編 1993 『新三笠市史：通史編』 三笠市.

**186. 三石町**

三石町史篇さん委員会編 1971 『三石町史』 三石町.

**187. 南茅部町**

南茅部町史編集室編 1987 『南茅部町史 上巻』 南茅部町.

南茅部町史編集室編 1987 『南茅部町史 下巻』 南茅部町.

**188. 南富良野町**

南富良野町史編さん委員会編 1991 『南富良野町史 上巻』 南富良野町.

南富良野町史編さん委員会編 1991 『南富良野町史 下巻』 南富良野町.

**189. 鵠川町**

鵠川町史編集委員会編 1968 『鵠川町史』 鵠川町.

**190. 室蘭市**

室蘭市総務部総務課編 1981 『新室蘭市史 第1巻』 室蘭市.

室蘭市総務部総務課編 1983 『新室蘭市史 第2巻』 室蘭市.

室蘭市総務部総務課編 1985 『新室蘭市史 第3巻』 室蘭市.

室蘭市総務部総務課編 1981 『新室蘭市史 第4巻』 室蘭市.

**191. 女満別村**

女満別町史編さん委員会編 1969 『女満別町史』 女満別村.

**192. 芽室町**

芽室町 1982 『芽室町八十年史』 芽室町.

**193. 妹背牛町**

妹背牛町編 1979 『妹背牛町史』 妹背牛町.

**194. 森町**

森町 1980 『森町史』 森町.

**195. 紋別市**

紋別市史編纂委員会編 1960 『紋別市史』 紋別市.

**196. 門別町**

門別町史編纂委員会編 1995 『新門別町史 上巻』 門別町.

門別町史編纂委員会編 1995 『新門別町史 中巻』 門別町.

門別町史編纂委員会編 1996 『新門別町史 下巻』 門別町.

**197. 八雲町**

八雲町 2013a 『八雲町史 三訂 上巻』 八雲町.

八雲町 2013b 『八雲町史 三訂 下巻』 八雲町.

**198. 夕張市**

更科源蔵・富樫曾太郎編 1959 『夕張市史』 夕張市.

夕張市史編さん委員会編 1981a 『夕張市史 増補改訂 上』 夕張市.

夕張市史編さん委員会編 1981b 『夕張市史 増補改訂 下』 夕張市.

**199. 湧別町**

湧別町史編さん委員会編 1965 『湧別町史』 湧別町.

**200. 由仁町**

由仁町史編纂委員会編 1994 『由仁町史 上巻』 由仁町.

由仁町史編纂委員会編 1994 『由仁町史 下巻』 由仁町.

**201. 余市町**

- 余市教育研究所 1966 『余市郷土史 第1巻：余市漁業発達史』 余市町教育研究所.  
余市教育研究所 1968 『余市郷土史 第2巻：余市農業発達史』 余市町教育研究所.  
余市教育研究所 1982 『余市郷土史 第3巻：余市文教発達史（戦前）』 余市町教育研究所.

**202. 羅臼町**

- 羅臼町史編纂委員会 1970 『羅臼町史』 羅臼町.

**203. 蘭越町**

- 蘭越町史編集委員会編 1964 『蘭越町史』 蘭越町.

**204. 陸別町**

- 陸別町広報広聴町史編さん室編 1994 『陸別町史：通史編』 陸別町.  
陸別町広報広聴町史編さん室編 1994 『陸別町史：別巻』 陸別町.

**205. 利尻町**

- 利尻町史編集室編 2000 『利尻町史：通史編』 利尻町.

**206. 利尻富士町**

- 利尻富士町史編纂委員会編集 1998 『利尻富士町史』 利尻富士町.

**207. 留寿都村**

- 留寿都村史編集委員会編 1969 『留寿都村史』 留寿都村.

**208. 留辺蘂町**

- 留辺蘂町役場編 1964 『留辺蘂町史』 留辺蘂町.  
新留辺蘂町史編さん委員会編 1985 『新留辺蘂町史』 留辺蘂町.

**209. 留萌市**

- 留萌市編 2003 『新留萌市』 史留萌市.

**210. 礼文町**

- 礼文町役場企画室編 1972 『礼文町史』 礼文町.

**211. 稚内市**

- 稚内市史編纂室 1968 『稚内市史』 稚内市.

**212. 和寒町**

- 和寒町編 1975 『和寒町史』 和寒町.

**市町村合併後刊行資料**

- 大空町編 2018 『大空町史』 大空町.

## 初出一覧

本研究に関連する論考の初出は以下のとおりである。

### 序章

書き下ろし

### 第1章 ニホンオオカミの研究史

書き下ろし

### 第2章 自治体史におけるエゾオオカミの記述

書き下ろし

### 第3章 アイヌ民族とオオカミの関わり

梅木佳代 2015 「口承文芸にあらわれるアイヌのオオカミ観：先行研究との比較を中心に」『北海道民族学』(10), pp.38-55, 北海道民族学会.

### 第4章 エゾオオカミをめぐる情報とその位置づけ

書き下ろし

### 終章

書き下ろし

# 資料編

# エゾオオカミをめぐる歴史と文化：

日本における研究史およびオオカミ観形成過程の検討

## 資料編目次

1. 日本国内で発行されたオオカミに関わる文献リスト -----	1
2. 市町村史におけるオオカミの記述 -----	54
3. 付表① 調査対象「市町村史」一覧 -----	111
4. 付表② アイヌ口承文芸一覧 -----	119
5. 付表③ 「コタン探訪帳」中に確認できるオオカミに関する記述 -----	122

# 1. 日本国内で発行されたオオカミに関わる文献リスト

資料 番号	形態	著者	出版年 (西暦)	出版年 (和暦)	論文名/該当記事名/見出し名	雑誌名 書籍名	巻	号	頁	出版社	エゾ オオカミ	ニホン オオカミ
1	参照	田中 芳男	1875	明治8	ヤマイヌ 豺	動物訓蒙 初編(哺乳類)	—	—	—	博物館	—	○
2	記事	山奈 宗真	1882	明治15	狼害豫防法:巖手縣陸中國西閉伊郡横田村	大日本農会報告	—	9	46	大日本農会	—	○
3	記事	曾我部信雄 宮地 森城 編	1883	明治16	豺狼	小学中等作文稽古本:記傳文2級	—	—	—	梅原亀七	—	○
4	記事	開拓使編	1884	明治17	豺	北海道志	—	—	387	歴史図書社 [1973]	○	—
5	記事	西野古海 編	1886	明治19	孝子病狼ヲ殺シテ父ヲ救シ話 孝女狼ヲ撃殺シテ父ノ難ヲ救シ話	修身口授用書 上	上	—	—	中外堂	—	○
6	記事	西野古海 編	1886	明治19	狼情ヲ知テ人ノ命ヲ助シ話	修身口授用書 下	下	—	—	中外堂	—	○
7	記事	近藤 賢三	1887	明治20	犬と狼との利用法	廢物利用:經濟秘宝 すたれ物用み方	1	—	36-37	經濟雜誌社	—	○
8	参照	—	1891	明治24	狼 Wolf	動物圖解説	—	—	10-11	金港堂	—	○
9	記事	岡田 信利	1891	明治24	ヤマイヌ 豺	日本動物総目録:有脊椎部	—	—	123	金港堂	—	○
10	記事	秋山 直三	1892	明治25	上野動物園飼養豺剖検記事	中央獸醫會雜誌	5	1	31-38	中央獸医会	—	○
11	記事	栗田 寛	1903	明治36	大口眞神原	古風土記逸文考証	1	—	26-27	大日本図書	—	○
12	記事	竹内 楠三	1904	明治37	狐及び狼の心理	動物の心	—	—	321- 331	大学館	—	○
13	参照	塚本 岩三郎	1904	明治37	狼 オホカミ	哺乳動物正図 説明	—	—	7	東京造画館	—	○
14	記事	石倉 重継	1906	明治39	御眷属の事	三峯山誌	—	—	11-20	關勝閣書房	—	○
15	記事	出口 米吉	1909	明治42	小兒と魔除	東京人類學會雜誌	—	274	136- 143	東京人類学会	—	○
16	記事	南方 熊楠	1909	明治42	出口君の『小兒と魔除』を読む	東京人類學會雜誌	—	278	292- 312	東京人類学会	—	○
17	記事	南方 熊楠	1910 (1971)	明治43	本邦における動物崇拜	南方熊楠全集	2	—	81-82	平凡社	—	○
18	記事	南方 熊楠	1910 (1971)	明治43	本邦に於ける動物崇拜【補遺】	南方熊楠全集	2	—	96-98	平凡社	—	○

資料番号	形態	著者	出版年 (西暦)	出版年 (和暦)	論文名／該当記事名／見出し名	雑誌名 書籍名	巻	号	頁	出版社	エゾ オオカミ	ニホン オオカミ
19	記事	八田 三郎	1910	明治43	動物の分布上北海道の位置	動物学雑誌	—	256	43-47	日本動物学会	—	—
20	記事	村田 庄次郎	1910	明治43	動物標本類	札幌博物館案内	—	—	9	維新堂	○	—
21	記事	山中 笑	1910	明治43	本邦に於ける動物崇拜	東京人類學會雑誌	—	288	217- 229	東京人類学会	—	○
22	論文	南方 熊楠	1911	明治44	俗伝:山神オコゼ魚を好むということ	東京人類學會雑誌	—	299	—	東京人類学会	—	○
23	記事	南方 熊楠	1911 (1972)	明治44	明治四十四年九月十三日 柳田国男宛書簡	南方熊楠全集	8	—	93	平凡社	—	○
24	記事	南方 熊楠	1911 (1972)	明治44	明治四十四年九月二十七日 柳田国男宛書簡	南方熊楠全集	8	—	101- 104	平凡社	—	○
25	参照	渡辺 銀太郎	1911	明治44	狼	動物写真画帖	—	—	29	新橋堂	—	○
26	記事	相島 亀三郎	1912	大正元	うそをいふな(狼に噛まれた子供)	尋常小学修身書例話原拠:附・参考資料並教授上の注意	—	—	14-18	宝文館	—	○
27	記事	荒井 涙光	1912	大正元	狼の道徳	因縁大鑑:明治説教	—	—	426- 428	森江書店	—	○
28	記事	南方 熊楠	1912 (1971)	大正元	神狼の話	南方熊楠全集	2	—	276	平凡社	—	○
29	記事	南方 熊楠	1912 (1971)	大正元	戦争に使われた動物	南方熊楠全集	3	—	114- 163	平凡社	—	○
30	記事	青木 文一郎	1913	大正2	A Hand-List of Japanese and Formosan Mammals	Annotationes Zoologicae Japonenses (『日本動物学 叢報』)	8	2	261- 353	Tokyo: Zoological Society of Japan	○	○
31	記事	八田 三郎	1913	大正2	北海道の狼:口絵及図版	動物学雑誌	—	291	口絵	日本動物学会	○	—
32	記事	南方 熊楠	1913 (1971)	大正2	紀州俗伝 四	南方熊楠全集	2	—	331- 336	平凡社	—	○
33	記事	南方 熊楠	1913 (1972)	大正2	大正二年六月二十七日 柳田国男宛書簡	南方熊楠全集	8	—	375	平凡社	—	○
34	記事	西川 三五郎・片山 春帆	1914	大正3	猪と狼	事物変遷画及解説:補充教材資料黒板画応用	—	—	424	以文館	—	○
35	記事	北海道廳	1914	大正3	狂犬病	北海道衛生誌	—	—	560- 584	北海道廳	—	○
36	記事	南方 熊楠	1914 (1972)	大正3	大正三年十一月二十一日 柳田国男宛書簡	南方熊楠全集	8	—	465- 469	平凡社	—	○

資料番号	形態	著者	出版年 (西暦)	出版年 (和暦)	論文名／該当記事名／見出し名	雑誌名 書籍名	巻	号	頁	出版社	エゾ オオカミ	ニホン オオカミ
37	記事	南方 熊楠	1916 (1972)	大正5	大正五年一月十九日 柳田国男宛書簡	南方熊楠全集	8	—	559- 560	平凡社	—	○
38	記事	金田一 京助	1917 (1992)	大正6	人が動物に化ける話	金田一京助全集	12	—	674- 677	三省堂	○	○
39	記事	南方 熊楠	1917 (1971)	大正6	山の神について	南方熊楠全集	2	—	307- 309	平凡社	—	○
40	記事	太田 順治	1918	大正7	山犬と狼	世界動物園	—	—	25-30	自学奨励会	○	○
41	記事	南方 熊楠	1918 (1971)	大正7	紀州俗伝 十五	南方熊楠全集	2	—	362- 364	平凡社	—	○
42	記事	阿部 余四男	1924	大正13	日本石器時代の犬科動物私見	動物学雑誌	—	433	485- 488	日本動物学会	○	○
43	記事	梅村 甚太郎	1925	大正14	をほかみ やまいぬ	東邦薬用動物誌	—	—	13-15	任他楼	○	○
44	参照	内田 亨	1925	大正14	食肉目	萬有科學体系	—	—	568- 569	新光社萬有科學 体系刊行部	○	○
45	参照	神戸 伊三郎	1925	大正14	狼と山犬の類	学習資料百科全書第5巻:児童の動物学 獣類篇	5	—	27-42	東洋図書	—	○
46	参照	岸田 久吉	1925	大正14	シベリアヤマイヌ・オホカミ・ヤマイヌ	哺乳動物図解	—	—	233- 238	日本鳥学会	○	○
47	記事	Batchelor, J (バッチェラー、ジョ ン)	1925	大正14	熊及狼礼拝	アイヌ人とその説話	—	—	370- 371	富貴堂書房	○	○
48	記事	阿部 余四男	1926	昭和元	おほかみ ぬくて やまいぬ	最近中等動物学	—	—	10-11	三省堂	—	○
49	記事	藤沢衛彦	1926	昭和元	狼と人間との變態傳説	変態伝説史	—	—	88-94	文芸資料研究会	—	○
50	記事	緑衣 山人	1926	昭和元	マヤイヌとオホカミ	庭園	8	12	27	日本庭園協会	○	○
51	記事	磯 清	1927	昭和2	狼の噂	民俗怪異篇	—	—	149- 180	磯部甲陽堂	—	○
52	参照	内田 清之助	1927	昭和2	てうせんおほかみ	日本動物圖鑑	—	—	33	北隆館	○	○
53	記事	恵利 恵	1927	昭和2	おほかみ やまいぬ	動物学精義 各論	—	—	462- 463	目黒書店	○	○
54	記事	金田一 京助	1927 (1993)	昭和2	山の神考	金田一京助全集	12	—	609- 613	三省堂	○	○

資料 番号	形態	著者	出版年 (西暦)	出版年 (和暦)	論文名／該当記事名／見出し名	雑誌名 書籍名	巻	号	頁	出版社	エゾ オオカミ	ニホン オオカミ
55	記事	小山 鐵藏	1927	昭和2	オホカミ(Wolf)	世界動物写真集：教科資料	—	—	14	聚英社	—	○
56	記事	寺石 正路	1928	昭和3	狼	土佐郷土民俗譚	—	—	102- 108	日新館書店	—	○
57	記事	矢澤 米三郎	1929	昭和4	豺	信濃天然記念物：信濃郷土叢書	9	—	37-38	信濃郷土文化普及会	—	○
58	論文	Abe Yoshio	1930	昭和5	On the Corean and Japanese Wolves	Journal of science of the Hiroshima University	—	1	33-38	Hiroshima University	○	○
59	参照	川内 國雄	1930	昭和5	おほかみ	北海道 樺太産 哺乳動物	—	—	136- 137	富貴堂書房	○	—
60	記事	ダン, エドウィン (Dun, Edwin)	1930	昭和5	「馬匹改良」[孤筈生(西川吉之助)訳]	『太湖』[八幡町(滋賀縣):太湖社]	—	55	6		○	—
61	記事	ダン, エドウィン (Dun, Edwin)	1930	昭和5	「狼とバツタ」[孤筈生(西川吉之助)訳]	『太湖』[八幡町(滋賀縣):太湖社]	—	56	6		○	—
62	記事	南方 熊楠	1930	昭和5	『芳賀郡土俗資料第1編』を読む	南方熊楠全集	4	—	589- 594	平凡社	—	○
63	論文	南方 熊楠	1930 (1972)	昭和5	千足狼	南方熊楠全集	4	—	338- 362	平凡社	—	○
64	論文	Kishida Kyukichi	1931	昭和6	Notes on Yesso Wolf	蘭山會機関雑誌 LANSANIA Journal of Arachnology and Zoology	—	25	72-75	蘭山會	○	—
65	記事	小松 眞一	1931	昭和6	山犬に就て	狩猟と畜犬	7	8	72-73	狩猟と畜犬社	○	○
66	論文	柳田 国男	1931 (1969)	昭和6	狼と鍛冶屋の婆	定本柳田國男集	8	—	225- 264	筑摩書房	—	○
67	記事	犬飼 哲夫	1932	昭和7	北海道の動物の由来とその変遷	北海道郷土史研究	—	—	32-50	日本放送協会北海道支部	—	—
68	参照	内田 庄次・楠 慶 六・高井 泉・矢野 榮太郎・渡邊 篤	1932	昭和7	ヤマイヌ オオカミ	児童百科大辞典 第一巻 動物篇(一)	1	—	50-51	児童百科大辞典刊行会	○	○
69	記事	金井 紫雲	1932	昭和7	狼	動物と芸術	—	—	213- 220	芸艸堂	○	○
70	記事	齋藤 弘	1932	昭和7	三面村見聞記	日本犬	1	2	45-61	日本犬保存会	—	○
71	参照	下中 彌三郎	1932	昭和7	オーカミ	大百科事典	3	—	464	平凡社	○	○
72	記事	平岩 米吉	1932	昭和7	狼と俗説：其一姿態に関するもの	日本犬	1	1	3-10	日本犬保存会	○	○
73	記事	平岩 米吉	1932	昭和7	狼と俗説：其二動作及習性に関するもの	日本犬	1	2	62-68	日本犬保存会	—	○
74	記事	柳田 国男	1932	昭和7	狼史雑話	日本犬	1	2	9-18	日本犬保存会	—	○

資料 番号	形態	著者	出版年 (西暦)	出版年 (和暦)	論文名／該当記事名／見出し名	雑誌名 書籍名	巻	号	頁	出版社	エゾ オオカミ	ニホン オオカミ
75	記事	阿部 余四男	1933	昭和8	ヤマイヌに就て	日本犬	2	—	13-21	日本犬保存会	—	○
76	記事	犬飼 哲夫	1933	昭和8	満州の毛皮及び毛皮獣	満蒙研究資料	6	—	1-20	北海道帝国大学 満蒙研究会	—	○
77	記事	犬飼 哲夫	1933	昭和8	絶滅した北海道の狼	日本犬	2	1	1-7	日本犬保存会	○	—
78	論文	犬飼 哲夫	1933	昭和8	北海道産狼とその滅亡経路	植物及動物	1	8	11-18	養賢堂	○	—
79	参照	下中 彌三郎	1933	昭和8	ヤマイヌ	大百科事典	25	—	403	平凡社	—	○
80	記事	土屋 正雄	1933	昭和8	津軽の動物: 山犬の話	農業世界	28	13	196- 197	博文社	—	○
81	記事	平岩 米吉	1933	昭和8	馴れた狼の話	日本犬	2	2	36-52	日本犬保存会	—	○
82	記事	平岩 米吉	1933	昭和8	馴れた狼の話	科学と芸術	1	2	60-76	白日荘	—	○
83	記事	柳田 国男	1933	昭和8	狼史雑話	日本犬	2	2	1-12	日本犬保存会	—	○
84	記事	犬飼 哲夫	1934	昭和9	千島の動物概観	千島概況	—	—	87-99	北海道庁	○	—
85	記事	今野美寿	1934	昭和9	放馬狼害之話	奥相拾芥抄 馬史之部: 相馬産馬沿革誌	—	—	140- 141	庄司 巷造	—	○
86	記事	大浦 豊	1934	昭和9	日本狼の現在	日本犬の研究	—	—	68-85	三省堂	○	○
87	記事	尾崎 久彌	1934	昭和9	狼の繪	科学と芸術	2	3	77-78	白日荘	—	○
88	記事	小野 進	1934	昭和9	日本の猛獣格ヤマイヌ盛衰記	秋田犬・奥羽北海の動物を語る	—	—	85-89	小野進著作刊行 会	○	○
89	記事	日本動物研究学会	1934	昭和9	チョウセンオオカミ ヤマイヌ	新集 全動物図鑑	—	—	18-19	泰明道	—	○
90	記事	平岩 米吉	1934	昭和9	狼	文藝春秋	12	2	157- 159	文藝春秋新社	—	○
91	記事	平岩 米吉	1934 (1994)	昭和9	狼の跳躍	動物文学	—	3	23-28	築地書館	—	○
92	記事	平岩 米吉	1934	昭和9	外国書に現はれた日本の犬と狼	日本犬	3	1	41-48	日本犬保存会	—	○
93	記事	平岩 米吉	1934	昭和9	狼と俗説(三)其二 動作及習性に関するもの	日本犬	3	2	38-43	日本犬保存会	—	○
94	記事	平岩 米吉	1934	昭和9	狼の眼	科学と芸術	2	3	70-71	白日荘	—	○

資料番号	形態	著者	出版年 (西暦)	出版年 (和暦)	論文名／該当記事名／見出し名	雑誌名 書籍名	巻	号	頁	出版社	エゾ オオカミ	ニホン オオカミ
95	記事	平岩 米吉	1934	昭和9	犬族の聲	科学と芸術	2	1	57-65	白日荘	—	○
96	記事	柳田 国男	1934 (1970)	昭和9	狗の心	定本柳田國男集	29	—	434- 440	筑摩書房	—	○
97	記事	東 光治	1935 (1994)	昭和10	犬考	萬葉動物考	—	—	77-91	人文書院	—	○
98	記事	阿部 余四男	1935	昭和10	日本狼は現存するか	ケルン	—	27	20-27	ケルン編輯室	○	○
99	記事	小山 勝清	1935 (1994)	昭和10	山村動物誌(4)	動物文学	—	6	47-50	築地書館	—	○
100	記事	齋藤 弘	1935	昭和10	両羽博物図譜の紹介	日本犬	4	1	52-60	日本犬保存会	—	○
101	記事	平岩 常吉	1935 (1994)	昭和10	犬狼交配に関する文献	動物文学	—	6	12-23	築地書館	—	○
102	記事	平岩 常吉	1935 (1994)	昭和10	狼と山犬の辯(弁)	動物文学	—	6	52-53	築地書館	○	○
103	記事	平岩 常吉	1935 (1994)	昭和10	日本狼	動物文学	—	7	写真	築地書館	—	○
104	記事	平岩 米吉	1935 (1994)	昭和10	「日本狼」追補	動物文学	—	8	25	築地書館	—	○
105	記事	平岩 米吉	1935 (1994)	昭和10	狼の大きさ・目方・足跡	動物文学	—	8	64-65	築地書館	—	○
106	記事	平岩 米吉・山崎 謙	1935 (1994)	昭和10	犬の形態及祖先に就いての疑問	動物文学	—	10	7	築地書館	○	○
107	記事	平岩 常吉	1935	昭和10	狼と山犬の辯(弁)	日本犬	4	1	61-63	日本犬保存会	—	○
108	記事	井上 雪雄	1936 (1994)	昭和11	犬・狼に関する語彙抄	動物文学	—	16	33-34	築地書館	—	○
109	記事	—	1936 (1994)	昭和11	日本狼の頭骨・発見(七月七日、大阪朝日新聞抄録)	動物文学	—	20	63	築地書館	—	○
110	論文	阿部 余四男	1936	昭和11	日本領内の狼に就てボコック氏に與ふ	動物学雑誌	48	8-10	639- 644	日本動物学会	○	○
111	記事	阿部 余四男	1936	昭和11	脊椎動物	新撰動物学	—	—	687- 688	同文書院	○	○
112	記事	伊藤 晃・平岩 米 吉	1936 (1994)	昭和11	外蒙古の狼	動物文学	—	16	34-37	築地書館	—	○
113	論文	岸田 久吉	1936	昭和11	絶滅したエゾオホカミの學名と記載	蘭山會機関雑誌 LANSANIA Journal of Arachnology and Zoology	—	79	129- 130	蘭山會	○	○

資料 番号	形態	著者	出版年 (西暦)	出版年 (和暦)	論文名／該当記事名／見出し名	雑誌名 書籍名	巻	号	頁	出版社	エゾ オオカミ	ニホン オオカミ
114	記事	齊藤 弘	1936 (1994)	昭和11	日本犬と狼の関係について	動物文学	—	18	33-37	築地書館	○	○
115	記事	齊藤 弘	1936	昭和11	日本犬の祖先	日本犬	5	1	1-7	日本犬保存会	—	○
116	記事	齊藤 弘	1936	昭和11	石器時代の家犬に就いて	日本犬	5	3	1-5	日本犬保存会	—	○
117	記事	齊藤 弘	1936	昭和11	石器時代犬の骨格とヤマイヌ鑑別私見	日本犬	5	4	1-30	日本犬保存会	—	○
118	記事	齊藤 弘	1936	昭和11	西藏マヌチフは我国に渡来したか	日本犬	5	7	1-17	日本犬保存会	—	○
119	記事	杉村 松之助	1936 (1994)	昭和11	狼追(オヌボヒ)の行事	動物文学	—	16	26-28	築地書館	—	○
120	記事	寺田 傳一郎	1936	昭和11	八十嶽談話	旅と傳説	—	107	15-16	三元社	—	○
121	記事	名取 武光	1936	昭和11	北日本に於ける動物意匠遺物と其の分布相	北大博物館報告	—	—	1-33	北海道帝国大学 農学部附属博物館	○	—
122	記事	平岩 米吉	1936 (1994)	昭和11	狼	動物文学	—	13	写真	築地書館	○	○
123	記事	平岩 米吉	1936 (1994)	昭和11	犬科動物の色彩	動物文学	—	14	77-86	築地書館	—	○
124	記事	平岩 米吉	1936 (1994)	昭和11	山犬雑考:南アルプス山麓の動物・附記	動物文学	—	14	45-47	築地書館	○	○
125	記事	平岩 米吉	1936 (1994)	昭和11	犬狼随筆	動物文学	—	15	25	築地書館	—	○
126	記事	平岩 米吉	1936 (1994)	昭和11	犬族の声(三)	動物文学	—	18	1-9	築地書館	—	○
127	記事	平岩 米吉	1936 (1994)	昭和11	山犬と狼	昭和日本犬の検討	—	—	88-89	犬の研究社	○	○
128	記事	平岩 米吉	1936 (1994)	昭和11	大口の眞神の原	動物文学	—	20	写真	築地書館	—	○
129	記事	平岩 米吉	1936 (1994)	昭和11	犬狼随筆(二)	動物文学	—	20	20-25	築地書館	—	○
130	記事	平岩 米吉	1936 (1994)	昭和11	犬科動物の習性	動物文学	—	23	77-87	築地書館	—	○
131	記事	松山 義雄	1936 (1994)	昭和11	南アルプス山麓の動物	動物文学	—	14	40-45	築地書館	—	○

資料番号	形態	著者	出版年 (西暦)	出版年 (和暦)	論文名／該当記事名／見出し名	雑誌名 書籍名	巻	号	頁	出版社	エゾ オオカミ	ニホン オオカミ
132	記事	松山 義雄	1936 (1994)	昭和11	犬神とお犬様	動物文学	—	16	28-29	築地書館	—	○
133	記事	松山 義雄	1936 (1994)	昭和11	お犬様の糞: 其他	動物文学	—	20	50-53	築地書館	—	○
134	記事	武藤 鐵城	1936	昭和11	狼犬の話	旅と傳説	—	107	15-24	三元社	—	○
135	記事	柳田 国男	1936	昭和11	村の犬・送り狼	日本犬の検討	—	—	92-95	犬の研究社	—	○
136	記事	山崎 謙・平岩 米吉	1936 (1994)	昭和11	犬と狼・耳学問	動物文学	—	16	29-32	築地書館	○	○
137	記事	吉田 元一・平岩 米吉	1936 (1994)	昭和11	播磨と丹波に残る狼の話 狼の話・註記	動物文学	—	24	22-32	築地書館	—	○
138	記事	FK生	1937	1937	悲しき狼の正体	日本犬	6	4	36-37	日本犬保存会	—	○
139	記事	阿部 余四男	1937	昭和12	神谷氏所蔵の山犬(日本狼)頭骨に就て	博物館研究	10	4	236- 238	日本博物館協会	○	○
140	記事	蘆屋 蘆村・金井 紫雲・清水 義雄ほか	1937 (1994)	昭和12	動物の生活を語る	動物文学	—	31	40-50	築地書館	—	○
141	記事	沖野 岩三郎・平岩 米吉	1937 (1994)	昭和12	村の動物	動物文学	—	33	43-47	築地書館	—	○
142	記事	尾崎 久彌	1937 (1994)	昭和12	一九の見聞した鳥獣の怪奇	動物文学	—	36	23-30	築地書館	—	○
143	参照	小野田 伊久馬・小野田 勝造	1937	昭和12	おほかみ・てうせんおほかみ・やまいぬ	内外動物原色大図鑑	2	—	57-58	動物原色大図鑑 刊行会	—	○
144	記事	久保田 珍儀	1937 (1994)	昭和12	狼を殺した話	動物文学	—	31	54-57	築地書館	—	○
145	記事	小松 眞一	1937 (1994)	昭和12	狼話採集: 狼に咬み殺されたる獺	動物文学	—	28	50-53	築地書館	—	○
146	記事	古川 武雄・平岩 米吉	1937 (1994)	昭和12	陸中に残る狼の話 註記(陸中に残る狼の話)	動物文学	—	26	47-56	築地書館	—	○
147	記事	菅野 幸子	1937 (1994)	昭和12	山形の狼話	動物文学	—	32	46-47	築地書館	—	○
148	記事	高島 義則	1937 (1994)	昭和12	文献に現はれた土佐の狼	動物文学	—	29	37-43	築地書館	—	○
149	記事	竹中 勝知	1937 (1994)	昭和12	狼を見た話	動物文学	—	31	58-59	築地書館	—	○

資料 番号	形態	著者	出版年 (西暦)	出版年 (和暦)	論文名／該当記事名／見出し名	雑誌名 書籍名	巻	号	頁	出版社	エゾ オオカミ	ニホン オオカミ
150	記事	仁木 伸	1937 (1994)	昭和12	狼話採集:市右衛門狼(いっちょみおおかみ)	動物文学	—	28	50-53	築地書館	—	○
151	記事	花岡 淳二	1937 (1994)	昭和12	狼話採集:幼児を守つて死んだ少女	動物文学	—	28	50-53	築地書館	—	○
152	記事	平岩 米吉	1937 (1994)	昭和12	狼と虎の畫に就て	美術時代	1	1	16-19	美術時代社	—	○
153	記事	平岩 米吉	1937 (1994)	昭和12	狼(山犬)に関する各地の実話及説話を求む	動物文学	—	27	24	築地書館	—	○
154	記事	平岩 米吉	1937 (1994)	昭和12	犬狼随筆(四)	動物文学	—	27	25-27	築地書館	—	○
155	記事	平岩 米吉	1937 (1994)	昭和12	狼話採集(註記 平岩米吉)	動物文学	—	28	50-53	築地書館	—	○
156	記事	平岩 米吉	1937 (1994)	昭和12	神狼採集	動物文学	—	29	44-96	築地書館	—	○
157	記事	平岩 米吉	1937 (1994)	昭和12	狼畫採集	動物文学	—	30	56-63	築地書館	—	○
158	記事	平岩 米吉	1937 (1994)	昭和12	犬族の声・拾遺(科學と藝術第三輯・動物文学第十七輯、第十八輯参照)	動物文学	—	31	35-29	築地書館	—	○
159	記事	平岩 米吉	1937 (1994)	昭和12	生態觀察より見たる犬の祖先	動物文学	—	37	1-9	築地書館	○	○
160	記事	平岩 米吉	1937	昭和12	家庭動物園:狼を飼ふ	子供之友	24	2	—	婦人之友社	—	○
161	記事	保谷 與三吉	1937 (1994)	昭和12	狼話採集:婦女子狼を殺す	動物文学	—	28	50-53	築地書館	—	○
162	記事	本田 茂雄	1937 (1994)	昭和12	狼話採集:危険な野良犬	動物文学	—	28	50-53	築地書館	—	○
163	記事	松山 義雄・平岩 米吉	1937 (1994)	昭和12	山犬と鹿及び馬:信濃に残る狼の話 註記 (信濃に残る狼の話)	動物文学	—	26	38-46	築地書館	—	○
164	記事	松山 義雄・平岩 米吉	1937 (1994)	昭和12	山犬と山村生活:信濃に残る狼の話(二) 註記	動物文学	—	28	43-49	築地書館	—	○
165	記事	山口 常助・平岩 米吉	1937 (1994)	昭和12	愛媛の狼話	動物文学	—	32	47-49	築地書館	—	○
166	記事	吉田 元一	1937 (1994)	昭和12	狼話採集:狼の啼声	動物文学	—	28	50-53	築地書館	—	○
167	記事	阿部 襄	1938 (1994)	昭和13	山形の狼の話:庄内山寺附近	動物文学	—	38	34	築地書館	—	○

資料番号	形態	著者	出版年 (西暦)	出版年 (和暦)	論文名／該当記事名／見出し名	雑誌名 書籍名	巻	号	頁	出版社	エゾ オオカミ	ニホン オオカミ
168	論文	斉藤 弘吉	1938	昭和13	東京科学博物館倉庫内に発見せられたヤマイヌの全身骨格 並にその他の同資料に就いて	博物館研究	11	4	27-31	日本博物館協会	○	○
169	参照	富山房百科事典編纂部	1938	昭和13	やまいぬ	国民百科大辞典	7	—	633	富山房	—	○
170	記事	平岩 米吉	1938 (1994)	昭和13	日本狼物語に序す	動物文学	—	44	43-52	築地書館	—	○
171	記事	松山 義雄	1938 (1994)	昭和13	伊那狼害誌	動物文学	—	44	52-57	築地書館	—	○
172	記事	吉田 元一・平岩 米吉	1938 (1994)	昭和13	続・丹波の狼の話	動物文学	—	38	32-34	築地書館	—	○
173	記事	一ノ瀬 幸三・平岩 米吉	1939 (1994)	昭和14	甲斐の山犬の話	動物文学	—	60	46-48	築地書館	—	○
174	記事	丹波 茂彦・平岩 米吉	1939 (1994)	昭和14	狼を撃取った話	動物文学	—	55	28-29	築地書館	—	○
175	記事	野知里 慶助・平岩 米吉	1939 (1994)	昭和14	送狼体験記	動物文学	—	55	30-33	築地書館	—	○
176	記事	平岩 米吉	1939 (1994)	昭和14	狼の傳説	動物文学	—	55	1-9	築地書館	○	○
177	記事	古川 嵩・平岩 米 吉	1939 (1994)	昭和14	大臺ヶ原山の狼	動物文学	—	55	18-27	築地書館	—	○
178	記事	松平 俊子	1939 (1994)	昭和14	御庭の狼:皇室と御日常	動物文学	—	57	65-66	築地書館	—	○
179	記事	三浦百朗・平岩米 吉	1939 (1994)	昭和14	宮城の狼話	動物文学	—	55	10-17	築地書館	—	○
180	記事	森永 義一・平岩 米吉	1939 (1994)	昭和14	狼を見たといふ話	動物文学	—	58	12-16	築地書館	—	○
181	記事	八木 誠・平岩 米 吉	1939 (1994)	昭和14	ヤマイヌの話	動物文学	—	57	63-64	築地書館	—	○
182	記事	柳田 国男	1939 (1968)	昭和14	食はぬ狼	定本柳田國男集	6	—	461- 463	筑摩書房	—	○
183	記事	柳田 国男	1939 (1970)	昭和14	狼話雑話	定本柳田國男集	22	—	440- 460	筑摩書房	—	○
184	記事	柳田 国男	1939 (1970)	昭和14	モリの実験	定本柳田國男集	22	—	414- 425	筑摩書房	—	○
185	記事	柳田 国男	1939 (1970)	昭和14	狼のゆくへ:吉野人への書信	定本柳田國男集	22	—	426- 439	筑摩書房	—	○

資料番号	形態	著者	出版年 (西暦)	出版年 (和暦)	論文名／該当記事名／見出し名	雑誌名 書籍名	巻	号	頁	出版社	エゾ オオカミ	ニホン オオカミ
186	記事	柳田 国男	1939	昭和14	食はぬ狼	民間伝承	4	12	141	秋田書店	—	○
187	記事	蘆谷 蘆村	1940 (1994)	昭和15	説話に現れた狼の属性について	動物文学	—	68	22-26	築地書館	—	○
188	記事	井深 勉	1940 (1994)	昭和15	南信の山犬	動物文学	—	62	37-39	築地書館	—	○
189	記事	岡本 正行	1940	昭和15	—	蒙疆の畜産	—	—	83-84	農林省畜産局	—	○
190	記事	金子 總平・平岩 米吉	1940 (1994)	昭和15	越後に残る狼話	動物文学	—	63	38-39	築地書館	—	○
191	記事	金子 總平・平岩 米吉	1940 (1994)	昭和15	福島より(狼の話)	動物文学	—	70	40-41	築地書館	—	○
192	参照	黒田 長礼	1940	昭和15	やまいぬ	原色 日本哺乳類図説	—	—	—	三省堂	○	○
193	記事	小松 眞一・平岩 米吉	1940 (1994)	昭和15	山犬二題	動物文学	—	62	41	築地書館	—	○
194	記事	園江 稔	1940 (1994)	昭和15	新潟の狼	動物文学	—	69	38-42	築地書館	—	○
195	記事	高島 春雄	1940	昭和15	滅亡したヤマイヌ	動物・脊椎動物	—	—	7-20	研究社	○	○
196	記事	直良 信夫	1940 (1994)	昭和15	北海道の狼	動物文学	—	61	80-81	築地書館	○	—
197	記事	中森 澗八郎	1940 (1994)	昭和15	吉野の狼の話	動物文学	—	68	26-36	築地書館	—	○
198	記事	長谷部 言人	1940 (1994)	昭和15	日本の狼:神代の日本犬抜萃	動物文学	—	64	44	築地書館	—	○
199	記事	長谷部 言人	1940	昭和15	神代の日本犬	日本犬	9	3	2-21	日本犬保存会	—	○
200	記事	平岩 米吉	1940 (1994)	昭和15	最後の日本狼に就いて	動物文学	—	69	74	築地書館	—	○
201	記事	平岩 米吉	1940 (1994)	昭和15	録音・狼の遠吠について	動物文学	—	69	77	築地書館	—	○
202	記事	北条 時宗	1940	昭和15	大口真神	小絵馬と俗信	—	—	38-40	旅の趣味会	—	○
203	記事	三原 良吉	1940	昭和15	仙臺領の狼	民間伝承	5	7	74	秋田書店	—	○
204	記事	大藤 時彦	1941	昭和16	犬飼はずなど	民間伝承	13	10	1-7	国書刊行会	—	○

資料番号	形態	著者	出版年 (西暦)	出版年 (和暦)	論文名／該当記事名／見出し名	雑誌名 書籍名	巻	号	頁	出版社	エゾ オオカミ	ニホン オオカミ
205	記事	沖野 岩三郎	1941 (1994)	昭和16	狼問答	動物文学	—	80	30-31	築地書館	—	○
206	記事	尾崎 久彌	1941 (1994)	昭和16	「狼」の文献	動物文学	—	76	1-12	築地書館	○	○
207	記事	金子 總平	1941 (1994)	昭和16	信越の狼伝承	動物文学	—	76	26-27	築地書館	—	○
208	記事	金子 總平・平岩 米吉	1941 (194)	昭和16	火を消す山犬	動物文学	—	80	49	築地書館	—	○
209	記事	金子 總平・平岩 米吉	1941 (1994)	昭和16	狼を見た話	動物文学	—	82	46-47	築地書館	—	○
210	記事	川崎 英一	1941 (1994)	昭和16	肥後の狼伝承	動物文学	—	76	27-29	築地書館	—	○
211	記事	鈴木 小寒朗・平岩 米吉	1941 (1994)	昭和16	小柴山の狼話:武蔵・金澤	動物文学	—	82	44-45	築地書館	—	○
212	記事	直良 信夫	1941	昭和16	根室地方に於けるエゾオホカミ	日本産獣類説話	—	—	126- 128	山岡書店	○	—
213	記事	直良 信夫	1941	昭和16	山犬	古代の漁猟:考古学及び化石動植物学上より見たる日本古代の食料と漁猟の話	—	—	197- 199	葦牙書房	—	○
214	記事	中森 滯八郎	1941 (1994)	昭和16	続・吉野の狼の話	動物文学	—	76	30-38	築地書館	—	○
215	記事	中森 滯八郎・平岩 米吉	1941 (1994)	昭和16	狼怪奇譚:吉野の狼の話・三	動物文学	—	78	23-24	築地書館	—	○
216	論文	長谷部 言人	1941	昭和16	石器時代遺蹟出土日本産狼二種	人類学雑誌	—	56	590- 602	日本人類学会	○	○
217	記事	平岩 米吉	1941 (1994)	昭和16	狼の話・註記	動物文学	—	74	48-49	築地書館	—	○
218	記事	武藤 鐵城	1941 (1994)	昭和16	狼狩記録	動物文学	—	76	14-23	築地書館	—	○
219	記事	武藤 鐵城・平岩 米吉	1941 (1994)	昭和16	狼伝承:秋田縣仙北郡	動物文学	—	81	30-40	築地書館	—	○
220	記事	森永 義一	1941 (1994)	昭和16	伊賀の動物伝承	動物文学	—	74	36-39	築地書館	—	○
221	記事	吉村 九一	1941	昭和16	豺狼用係蹄機設置法	実験狩猟術及網猟法	—	—	55-61	照林堂書店	—	○
222	記事	阿部 余四男	1942	昭和17	—	動物閑談	—	—	66-75	三省堂	○	○

資料番号	形態	著者	出版年 (西暦)	出版年 (和暦)	論文名／該当記事名／見出し名	雑誌名 書籍名	巻	号	頁	出版社	エゾ オオカミ	ニホン オオカミ
223	記事	金子 總平	1942 (1994)	昭和17	上州草津の狼談	動物文学	—	87	73-74	築地書館	—	○
224	記事	金子 總平	1942 (1994)	昭和17	紀州の狼話	動物文学	—	88	58-59	築地書館	—	○
225	記事	高島 春雄	1942	昭和17	榮枯盛衰両面鑑	図解科学	—	10	48-55	朝日新聞社	—	○
226	書籍	平岩 米吉	1942 (1990)	昭和17	—	犬と狼	—	—	—	築地書館	○	○
227	記事	東 光治	1943	昭和18	大口乃眞神考	続万葉動物考	—	—	33-48	人文書院	○	○
228	記事	犬飼 哲夫	1943	昭和18	北海道・樺太・千島に於ける鳥獣の分布	自然科学観察と研究叢書:北海道・樺太・千島列島	—	—	79-97	山雅房	—	○
229	参照	小野田 勝造	1943	昭和18	オホカミ・ヤマヌ	原色圖説 動物大辞典	—	—	59	中文館書店	○	○
230	記事	松山 義雄	1943	昭和18	狼(山犬)	山村動物誌	—	—	5-74	山岡書店	—	○
231	記事	阿部 余四男	1944	昭和19	犬科	支那哺乳動物誌	—	—	89-94	目黒書店	—	○
232	記事	金子 總平	1944 (1994)	昭和19	富士の狼話	動物文学	—	11補遺 (5)	1-2	築地書館	—	○
233	記事	直良 信夫	1944	昭和19	—	日本哺乳動物史	—	—	—	養徳社	○	○
234	記事	平岩 米吉	1944 (1994)	昭和19	犬科動物の色彩・覚書	動物文学	—	11補遺 (8)	1-2	築地書館	—	○
235	記事	名取 武光	1945	昭和20	—	噴火湾アイヌの捕鯨	—	—	—	北方文化出版	○	○
236	記事	更科 源蔵	1946	昭和21	狼興亡史	北方動物記	—	—	36-40	柏葉書院	○	—
237	記事	平岩 米吉	1946 (1994)	昭和21	日本狼・解説	動物文学	—	99	1-13	築地書館	○	○
238	記事	今西 錦司	1947 (1974)	昭和22	遊牧論そのほか	今西錦司全集	2	—	181- 383	講談社	○	○
239	記事	齋藤 弘	1947	昭和22	日本狼の四肢	動物文学	—	101	18-21	動物文学会	—	○
240	記事	高島 春雄	1947	昭和22	榮枯盛衰両面鑑	動物渡来物語	—	—	104- 111	日本出版社	—	○
241	記事	柳田 国男	1947 (1970)	昭和22	関東の民間信仰	定本柳田国男集	31	—	185- 194	筑摩書房	—	○
242	記事	尾崎 久彌	1948 (1994)	昭和23	狼・遺聞	動物文学	—	100	4-7	築地書館	—	○

資料 番号	形態	著者	出版年 (西暦)	出版年 (和暦)	論文名／該当記事名／見出し名	雑誌名 書籍名	巻	号	頁	出版社	エゾ オオカミ	ニホン オオカミ
243	記事	高橋 春雄	1948	昭和23	日本の獣の代表	動物図会	—	—	3-5	日本出版配給	○	○
244	記事	福田 信正	1948	昭和23	東大農学部収蔵のヤマイヌの標本	採集と飼育	—	10	348- 350	日本科学協会	—	○
245	記事	真砂 光男	1948	昭和23	狼の話其の他	民間伝承	12	8・9	247- 249	秋田書店	—	○
246	記事	井之口 章次	1949	昭和24	狼弾きの竹	民間伝承	13	11	20-24	国書刊行会	—	○
247	参照	今泉 吉典	1949	昭和24	ホンドオウカミ・エゾオウカミ	日本哺乳動物図説	—	—	149- 152	洋々書房	○	○
248	記事	仲西 政一郎	1949	昭和24	奥高野の狩の話	あしなか	15	—	5-9	山村民俗の会	—	○
249	記事	福田 信正	1949	昭和24	再びヤマイヌの収蔵標本について	採集と飼育	11	2	45	日本科学協会	—	○
250	論文	末松 四郎	1950	昭和25	新「やまいぬ」標本	和歌山大学学芸学部学芸研究 自然科学	1	—	85-87	和歌山大学学芸学部	—	○
251	記事	古賀 忠道	1950	昭和25	狼	動物と動物園	—	—	150- 159	角川書店	—	○
252	論文	長谷部 言人	1950	昭和25	日本石器時代の大形犬とその起源	人類学雑誌	61	2	55-58	日本人類学会	—	○
253	記事	吉田 浩堂	1950	昭和25	御眷属:大口眞神	山と溪谷	—	135	28-29	山と溪谷社	—	○
254	記事	齊藤 弘	1951	昭和26	日本狼残存説について	動物文学	22	—	17(2)	動物文学会	—	○
255	記事	南方 熊楠	1952	昭和27	狼話に関する書翰	動物文学	18	1	5-6	動物文学会	—	○
256	記事	平岩 米吉	1952	昭和27	狼の話	動物文学	18	1	16-15	動物文学会	○	○
257	参照	黒田 長礼	1953	昭和28	ヤマイヌ(ニホンオオカミ)	日本獣類図説	—	—	70	創元社	○	○
258	記事	知里 真志保	1953 (1975)	昭和28	niaw	知里真志保著作集:植物編	別巻1	—	277	平凡社	○	—
259	記事	平岩 米吉	1953	昭和28	狼の伝説	動物文学	—	118	11-14	動物文学会	—	○
260	記事	北海道	1953	昭和28	有害鳥獣の捕獲	北海道山林史	—	—	586- 590	北海道	—	○
261	記事	阿部 余四男	1954	昭和29	日本狼の毛	動物学雑誌	63	34	123- 124	日本動物学会	—	○
262	記事	犬飼 哲夫	1955	昭和30	北海道の動物誌	日本文化風土記:第1巻(北海道篇)	—	—	28-41	河出書房	—	○
263	記事	斐太 猪之介	1955	昭和30	水鹿	炉辺動物記	—	—	114- 119	中央公論社	—	○

資料番号	形態	著者	出版年 (西暦)	出版年 (和暦)	論文名／該当記事名／見出し名	雑誌名 書籍名	巻	号	頁	出版社	エゾ オオカミ	ニホン オオカミ
264	記事	高島 春雄	1955	昭和30	滅びゆく動物	動物文学	—	127	20- 23,33	動物文学会	—	○
265	記事	平岩 米吉	1955	昭和30	動物愛好会月齢会の講演の一部から:狼の習性 On habitude of wolf	どうぶつと動物園	—	—	2-3	東京動物園協会	—	○
266	記事	平岩 米吉	1955	昭和30	狼と山犬	動物文学	—	128	10-11	動物文学会	—	○
267	記事	伊藤 葦天	1956	昭和31	狼のこと	民間伝承	20	11	665	秋田書店	—	○
268	記事	西田 長男	1956	昭和31	稻荷社の本縁	日本古典の史的研究	—	—	489- 579	理想社	—	○
269	記事	平岩 米吉	1956	昭和31	狼を馴らす	動物とともに	—	—	—	筑摩書房	—	○
270	記事	平岩 米吉	1956	昭和31	狼と山犬	動物とともに	—	—	—	筑摩書房	—	○
271	参照	内田 清之助	1957	昭和32	やまいぬ(にほんおおかみ)	原色動物大圖鑑	—	—	20	北陸館	○	○
272	記事	桐井 雅行 平岩 米吉	1957	昭和32	日本狼は残存するか	ハイカー	—	18	16	山と溪谷社	—	○
273	記事	斐太 猪之介	1957	昭和32	—	奥吉野動物記	—	—	—	朝日新聞社	—	○
274	記事	直良 信夫	1958	昭和33	日本産の化石アオオカミについて	早稲田大学理工学研究所報告	—	10	53-59	早稲田大学理工学研究所	—	○
275	論文	直良 信夫	1958	昭和33	日本の化石オオカミ	自然科学と博物館	25	9・10	1-16	国立科学博物館	—	○
276	記事	近藤 喜博	1959	昭和34	オオカミ談義	藝林	10	4	50-56	藝林会	—	○
277	記事	知里 真志保	1959	昭和34	アイヌ語獣名集	北海道大學文學部紀要	7	—	121- 150	北海道大學文學部	○	—
278	記事	八木沢 元	1959	昭和34	狼の文学:中山狼雜劇を中心として	集刊東洋学	—	2	41-50	中国文史哲研究会	—	○
279	参照	今泉 吉典	1960	昭和35	オオカミ エゾオオカミ	原色日本哺乳類図鑑	—	—	163	保育社	○	○
280	記事	岸田 久吉	1960	昭和35	千島群島の哺乳動物相	鳥獣集報	17	2	283- 306	林野庁	○	—
281	記事	更科 源蔵	1960	昭和35	狼興亡史他	日本山岳風土記 第6:北海道の山々	—	—	273- 282	宝文館	—	—
282	記事	直良 信夫	1960	昭和35	秩父地方産オオカミの頭骨	秩父自然科学博物館研究報告	—	10	1-16	秩父自然科学博物館	—	○
283	記事	朝日新聞社	1961	昭和36	滅びゆく種族:エゾオオカミ	きたぐにの動物たち	—	—	31-33	角川書店	—	—
284	記事	小清水 卓二	1961	昭和36	オオカミ	十津川の生物:動物と植物	—	—	3-14	十津川村役場	—	○

資料番号	形態	著者	出版年 (西暦)	出版年 (和暦)	論文名／該当記事名／見出し名	雑誌名 書籍名	巻	号	頁	出版社	エゾ オオカミ	ニホン オオカミ
285	記事	畠山 三郎太	1961	昭和36	考古学研究メモ:縄文早期遺跡のエゾオオカミについて	北海道地方史研究	—	38	48-49	北海道地方史研究会	—	—
286	記事	東山村史編集委員会	1961	昭和36	室津の送り狼石	東山村史	—	—	710	山添村東山支所	—	○
287	記事	平岩 米吉	1961	昭和36	日本にいたオオカミ	少年少女日本動物記	3	—	80-90	牧書店	○	○
288	記事	地理 真志保	1962 (1975)	昭和37	オオカミ	知里真志保著作集	別巻 I	—	141- 142	平凡社	○	○
289	記事	岡田 弥一郎	1963	昭和38	ヤマイヌ	日本の野生動物	—	—	124- 125	河出書房新社	—	○
290	記事	岸田 日出男	1963	昭和38	日本狼物語	吉野風土記	—	21	1-41	吉野史談会	—	○
291	記事	甲野 勇	1963	昭和38	秋川溪谷の文化を探る	東京の秘境	—	—	21-94	校倉書房	—	○
292	記事	斎藤 弘吉	1963	昭和38	—	犬科動物骨格計測法	—	—	—	国際文献印刷社	—	○
293	参照	昭和出版研究所	1963	昭和38	オオカミ	日本百科大事典	2	—	14	小学館	—	○
294	記事	Dun, E (ダン、エドウィン)	1963	昭和38	オオカミとバツタ	エドウィン・ダン:日本における半世紀の回想	—	—	45-47	エドウィン・ダン 顕彰会	○	○
295	記事	平岩 米吉	1963	昭和38	「原始林に伝わる狼生存説—和歌山県竜神村」註記	動物文学	—	150	見返し	動物文学会	—	○
296	記事	平岩 米吉	1963	昭和38	犬狼随筆(一四)	動物文学	—	159	8,20-21	動物文学会	—	○
297	記事	浅井 得一	1964	昭和39	さいごのニホンオオカミ	日本ふしぎ探検2	—	—	78-86	小峰書店	○	○
298	記事	金田一 京助	1964	昭和39	—	アイヌ叙事詩 ユーカラ集	4	—	—	岩波文庫	○	○
299	記事	国立公園協会	1964	昭和39	丹沢山塊の動物	丹沢/大山学術調査報告書	—	—	255- 407	神奈川県	—	○
300	書籍	斎藤 弘吉	1964	昭和39	—	日本の犬と狼	—	—	—	雪華社	○	○
301	記事	根元 行道	1964	昭和39	丹沢の日本狼	岳人	—	192	92-94	岳人社	—	○
302	記事	長谷部 言人	1964	昭和39	原日本人と当時の獣類	動物文学	—	162	6-7	動物文学会	—	○
303	記事	宮本 常一	1964 (2011)	昭和39	狩人	山に生きる人々	—	—	29-47	河出書房新社	—	○
304	記事	更科 源蔵・谷本 一之	1965	昭和40	—	アイヌ伝統音楽	—	—	—	日本放送出版協 会	○	○

資料番号	形態	著者	出版年 (西暦)	出版年 (和暦)	論文名／該当記事名／見出し名	雑誌名 書籍名	巻	号	頁	出版社	エゾ オオカミ	ニホン オオカミ
305	書籍	直良 信夫	1965	昭和40	—	日本産狼の研究	—	—	—	校倉書房	○	○
306	記事	犬飼 哲夫	1966	昭和41	鹿と狼とトナカイと黒テンとリスと	暮らしの手帖	—	87	174- 181	暮らしの手帖	—	—
307	記事	平岩 米吉	1966	昭和41	白い日本狼—附・白い狸—	動物文学	—	170	11-13	動物文学会	—	○
308	記事	斐太 猪之介	1967	昭和42	幻の狼を追う:赤坊を拾った話	山がたり:なぞの動物たち	—	—	69-93	文藝春秋社	—	○
309	記事	平岩 米吉	1967	昭和42	狼の話・聞き書	動物文学	—	172	8-11	動物文学会	—	○
310	記事	平岩 米吉	1967	昭和42	≪狼の頬の白斑≫——犬狼随筆(二〇)	動物文学	—	172	22	動物文学会	—	○
311	記事	平岩 米吉	1967	昭和42	狼の話・聞き書(追記)	動物文学	—	173	4	動物文学会	—	○
312	記事	平岩 米吉	1967	昭和42	日本狼の古文書	動物文学	—	174	1-9	動物文学会	—	○
313	記事	今西 錦司	1968 (1974)	昭和43	人類の誕生	今西錦司全集	2	—	387- 476	講談社	—	○
314	参照	相賀 徹夫	1968	昭和43	オオカミ	大日本百科事典:ジャポニカ	3	—	36-368	相賀 徹夫	○	○
315	記事	島倉 亨次郎	1968	昭和43	エゾオオカミ	北大時報	—	171	表紙写 真説明	北海道大学事務 局	○	—
316	論文	曾田 文雄	1968	昭和43	上代文献と「虎狼」「熊狼」	万葉	—	67	57-60	萬葉學會	—	○
317	記事	直良 信夫	1968	昭和43	—	狩猟(ものと人間の文化史2)	—	—	—	法政大学出版局	—	○
318	記事	平岩 米吉	1968	昭和43	農夫・婦女子が狼を仕留めた記録	動物文学	—	176	1-10	動物文学会	—	○
319	記事	平岩 米吉	1968	昭和43	農夫・婦女子が狼を仕留めた記録(二)	動物文学	—	177	21-26	動物文学会	—	○
320	記事	平岩 米吉	1968	昭和43	農夫・婦女子が狼を仕留めた記録(三)	動物文学	—	178	26-30	動物文学会	—	○
321	記事	吉田 浩堂	1968	昭和43	秩父の日本狼	藤とその周辺	3	—	291- 294	宝文館出版	—	○
322	記事	今泉 吉典	1969	昭和44	ナゾに包まれるニホンオオカミ 新しい視野でこの“珍獣”の追 及を	科学朝日	29	7	104- 108	朝日新聞社	○	○
323	記事	今泉 吉典	1969	昭和44	絶滅してはいない?ニホンオオカミ	週刊読売	28	28	46	読売新聞社	—	○
324	論文	上野 益三	1969	昭和44	鷲家口とニホンオオカミ	甲南女子大学研究紀要	5	—	89-108	甲南女子大学	—	○
325	記事	小原 秀雄	1969	昭和44	日本野生哺乳動物記 2 :オオカミ	自然	24	11	76-81	中央公論社	○	○

資料番号	形態	著者	出版年 (西暦)	出版年 (和暦)	論文名／該当記事名／見出し名	雑誌名 書籍名	巻	号	頁	出版社	エゾ オオカミ	ニホン オオカミ
326	記事	小原 秀雄	1969	昭和44	日本野生哺乳動物記 3 :オオカミ その2	自然	24	12	80-86	中央公論社	○	○
327	記事	斎藤 清衛	1969	昭和44	カミと国文学	甲南女子大学研究紀要	—	5	1-11	甲南女子大学	—	○
328	記事	千葉 徳爾	1969	昭和44	—	狩猟伝承研究	—	—	—	風間書房	○	○
329	記事	斐太 猪之介	1969	昭和44	ニホンオオカミはいまもいる?: “珍獣”の正体を追う	科学朝日	29	6	104-109	朝日新聞社	—	○
330	記事	斐太 猪之介	1969	昭和44	“山の怪物”追跡記:ニホンオオカミとノヅチにかける情熱	山と溪谷	—	376	128-133	山と溪谷社	—	○
331	論文	今泉 吉典	1970	昭和45	ニホンオオカミの系統的地位について 1:ニホンオオカミの標本	哺乳動物学雑誌	5	1	27-32	日本哺乳動物学会	○	○
332	論文	今泉 吉典	1970	昭和45	ニホンオオカミの系統的地位について 2:イヌ属内での頭骨における類似関係	哺乳動物学雑誌	5	2	62-66	日本哺乳動物学会	○	○
333	記事	早川 昇	1970	昭和45	魔よけの小膚帯	民俗民芸双書54 アイヌの民俗	—	—	71-76	岩崎美術社	○	—
334	記事	原野農芸博物館	1970	昭和45	—	日本狼のゆくえ:いまやまぼろしの動物(原野農芸博物館図録・第5集)	—	—	—	原野農芸博物館	—	○
335	書籍	斐太 猪之介	1970	昭和45	—	オオカミ追跡18年:ニホンオオカミはまだ生きている	—	—	—	実業の日本社	—	○
336	記事	斐太 猪之介	1970	昭和45	オオカミ殺し	文芸春秋	48	6	89-90	文芸春秋	—	○
337	記事	平岩 米吉	1970	昭和45	狼を飼った人々(下)日本の例	動物文学	—	184	1-10	動物文学会	—	○
338	記事	犬飼 哲夫	1971	昭和46	鹿と狼	わが動物記	—	—	107-121	暮しの手帖社	○	—
339	参照	相賀 徹夫	1971	昭和46	ヤマイヌ	大日本百科事典:ジャポニカ	17	—	630	小学館	—	○
340	記事	谷川 健一	1971	昭和46	—	魔の系譜	—	—	23-39	紀伊国屋書店	—	○
341	記事	千葉 徳爾	1971	昭和46	—	続 狩猟伝承研究	—	—	—	風間書房	○	○
342	記事	奈良市史編集審議会	1971	昭和46	文献にあらわれた動物	奈良市史 自然編	—	—	273-277	奈良市	—	○
343	記事	斐太 猪之介	1971	昭和46	—	続山がたり	—	—	—	文芸春秋	—	○
344	記事	平岩 米吉	1971	昭和46	死体をあさる狼—犬狼随筆(二四)	動物文学	—	190	見返し	動物文学会	—	○
345	記事	三浦 百郎	1971	昭和46	墓地をあさる狼	動物文学	—	191	8-9	動物文学会	—	○

資料番号	形態	著者	出版年 (西暦)	出版年 (和暦)	論文名／該当記事名／見出し名	雑誌名 書籍名	巻	号	頁	出版社	エゾ オオカミ	ニホン オオカミ
346	記事	小原 秀雄	1972	昭和47	オオカミ	日本野生動物記	—	—	15-47	中央公論社	—	○
347	記事	河野 本道	1972	昭和47	Aynuの祖先起源伝承における人間と人間以外の動物との婚話	市立旭川郷土博物館研究報告	—	8	7-12	旭川郷土博物館	○	—
348	記事	黒木 正雄	1972	昭和47	御崎馬に関する:第1報 日向における馬産史と御崎牧場の沿革について	宮崎大学 農学部研究報告	19	2	449-468	宮崎大学農学部	—	○
349	記事	斐太 猪之介	1972	昭和47	—	続々山がたり	—	—	—	実業の日本社	—	○
350	記事	斐太 猪之介	1972	昭和47	ニホンオオカミを追って二十年	新評	19	7	264-273	新評社	—	○
351	記事	平岩 米吉	1972	昭和47	狼保護の法令	動物文学	—	193	30-33	動物文学会	—	○
352	記事	平岩 米吉	1972	昭和47	死体をあさる狼・補記	動物文学	—	193	40	動物文学会	—	○
353	記事	平岩 米吉	1972	昭和47	江戸時代の狼狩	動物文学	—	194	1-6	動物文学会	—	○
354	記事	北海道開拓記念館	1972	昭和47	エゾオオカミ	資料解説シリーズNo.2 北海道の動物:哺乳類・爬虫類・両生類	—	—	19	北海道開拓記念館	○	—
355	記事	—	1973	昭和48	オオカミ発見の記事	野生からの声——アニマ	8	—	52	平凡社	—	○
356	記事	阿部 利平	1973	昭和48	じっさまの時代にはオオカミもいた	野生からの声——アニマ	3	—	52-53	平凡社	—	○
357	記事	末松 四郎	1973	昭和48	のろしと狼	動物文学	197	—	20-22	動物文学会	—	○
358	記事	細田 倅市	1973	昭和48	山がたり:我が野生動物記	野生からの声——アニマ	5	—	8-14	平凡社	—	○
359	記事	平岩 米吉	1973	昭和48	外人の見た日本の犬と狼	動物文学	—	198	1-5,9	動物文学会	—	○
360	記事	平岩 米吉	1973	昭和48	外人の見た日本の犬と狼(二)	動物文学	—	199	1-6	動物文学会	—	○
361	記事	平岩 米吉	1973	昭和48	会員通信Ⅱ:日本狼残存の報について	動物文学	—	199	7	動物文学会	—	○
362	記事	山口 冬男	1973	昭和48	ニホンオオカミ	雲母	59	665	13	雲母社	○	○
363	記事	—	1974	昭和49	会員のページ	野生からの声——アニマ	—	21	77	平凡社	—	○
364	記事	阿部 永	1974	昭和49	北海道における哺乳類とその保護	哺乳類科学	—	28・29 合併号	4-18	日本哺乳類学会	○	—
365	参照	坂本 幸雄	1974	昭和49	ニホンオオカミ	ブリタニカ国際大百科事典	4	—	1028	ティビーエス・ブリタニカ	—	○

資料 番号	形態	著者	出版年 (西暦)	出版年 (和暦)	論文名／該当記事名／見出し名	雑誌名 書籍名	巻	号	頁	出版社	エゾ オオカミ	ニホン オオカミ
366	記事	瀬川 拓男	1974	昭和49	民話に踊る動物たち 8 オオカミ	科学朝日	34	8	60-64	朝日新聞社	—	○
367	記事	直良 信夫	1974	昭和49	シベリアオオカミ	失われた日本の生物	—	—	128- 129	講談社	—	—
368	記事	斐太 猪之介	1974	昭和49	—	続 ニッポン動物記	—	—	—	山と溪谷社	—	○
369	記事	斐太 猪之介	1974	昭和49	オオカミと山神	歴史と旅	1	3	144- 145	秋田書店	—	○
370	記事	平岩 米吉	1974	昭和49	ニホンオオカミはもういない:その残存説六十六年の記録	野生からの声——アニマ	—	19	44-54, 78	平凡社	○	○
371	記事	宮尾 嶽雄	1974	昭和49	追われゆく哺乳動物の背景	野生からの声——アニマ	—	21	45-46	平凡社	—	○
372	記事	犬飼 哲夫	1975	昭和50	オオセカムイはクマより上位	北方動物誌	—	—	180-26	北苑社	○	—
373	記事	関 秀志	1975	昭和50	明治初期～中期における北海道の博物館:札幌を中心に	北海道開拓記念館研究年報	—	4	47-64	北海道開拓記念館	○	—
374	記事	谷川 健一	1975	昭和50	葛葉の神秘と幻想<狐>	神・人間・動物:伝承を生きる世界	—	—	—	平凡社	—	○
375	記事	直良 信夫	1975	昭和50	日本の狼	日本産動物雑話	—	—	331- 334	有峰書店	○	○
376	書籍	斐太 猪之介	1975	昭和50	—	山中奇談:白いオオカミも見た	—	—	—	みき書房	—	○
377	記事	更科 源蔵・更科 光	1976	昭和51	オオカミ(やまいぬ)	コタン生物記 II 野獣・海獣・魚族篇	—	—	289- 293	法政大学出版局	○	—
378	記事	宮木 雅美	1976	昭和51	新しいオオカミか	野生からの声——アニマ	—	45	6-12	平凡社	—	○
379	記事	四手井 綱英	1976	昭和51	野生動物の保護	追われる[けもの]たち	—	—	166- 175	築地書館	—	○
380	記事	朝日 稔	1977	昭和52	オオカミ	日本の哺乳動物	—	—	126- 135	玉川大学出版部	○	○
381	記事	更科 源蔵・更科 光	1977	昭和52	タンチョウヅル	コタン生物記:野鳥・水鳥・昆虫篇	—	—	655- 659	法政大学出版局	○	—
382	記事	千葉 徳爾	1977	昭和52	—	狩猟伝承研究 後篇	—	—	—	風間書房	○	○
383	記事	野田 耕一郎	1977	昭和52	佐川町鳥ノ巣一ツ淵鉤山産狼下顎骨	日本地質学会学術大会講演要旨	—	84	299	日本地質学会	—	○
384	書籍	斐太 猪之介	1977	昭和52	—	オオカミは生き残った	—	—	—	住宅新報社	—	○
385	記事	松山 義雄	1977	昭和52	—	狩りの語部:伊那の山奥より	—	—	—	法政大学出版局	—	○

資料番号	形態	著者	出版年 (西暦)	出版年 (和暦)	論文名／該当記事名／見出し名	雑誌名 書籍名	巻	号	頁	出版社	エゾ オオカミ	ニホン オオカミ
386	記事	—	1978	昭和53	幻のニホンオオカミの真贋論争「犬とキツネの交配」説まで出たニュー・ネッシー以来の“ナブときさわぎ”	週刊ポスト	10	8	168-170	小学館	—	○
387	記事	川崎 勉	1978	昭和53	オオカミ	動物101話	—	—	40-43	内田老鶴圃新社	○	○
388	記事	斉藤 広一	1978	昭和53	秩父地方におけるヤマトタケルノミコの伝説	秩父民俗	—	13	50-57	秩父民俗研究会	—	○
389	記事	戸川 幸夫	1978	昭和53	ニホンオオカミの噂	文藝春秋	56	4	88-89	文藝春秋	—	○
390	記事	安野 光雅	1978	昭和53	動物今昔談9:狼よさらば(上)	野生からの声——アニマ	—	66	78	平凡社	—	○
391	記事	安野 光雅	1978	昭和53	動物今昔談9:狼よさらば(下)	野生からの声——アニマ	—	67	82-83	平凡社	—	○
392	記事	岡田 章雄	1979	昭和54	狼	日本史小百科14:動物	—	—	98-99	近藤出版社	—	○
393	記事	末岡 外美夫	1979	昭和54	ホルケウノチウ:乙女座α	旭川叢書:アイヌの星	12	—	119-129	旭川振興公社	○	—
394	記事	俵 浩三	1979 (1987)	昭和54	エゾオオカミ	北海道の自然保護:その歴史と思想(増補版)	—	—	102-111	北海道大学図書刊行会	○	—
395	記事	日本地誌研究所・ 青野 壽郎・尾留川 正平	1979	昭和54	ヒグマ・オオカミ	日本地誌 第2巻:北海道	—	—	71-72	二宮書店	—	—
396	記事	長谷川 善和	1979	昭和54	日本産食肉獣の概要	哺乳類科学	—	38	23-28	日本哺乳類学会	—	○
397	記事	北海道新聞社	1979	昭和54	恐竜の里と日勝道路	各駅停車:全国歴史散歩1・2 北海道	—	—	336	北海道新聞社	—	○
398	記事	宮崎 茂夫	1979	昭和54	狼の神札	あしなか	—	160	20	山村民俗の会	—	○
399	記事	—	1979	昭和54	狼豺聞書	あしなか	—	160	1-19	山村民俗の会	—	○
400	記事	塚本 学	1979	昭和54	犬をめぐる政治:十七世紀を中心に	月刊百科	—	205	8-17	平凡社	—	○
401	記事	佐藤 正彦	1980	昭和55	岩手のマタギ	東北民俗資料集	9	—	1-21	萬葉堂書店	—	○
402	記事	犬飼 哲夫	1981	昭和56	北海道の開拓と自然	月刊文化財 / 文化庁文化財部 監修.	—	209	4-10	第一法規	○	○
403	記事	樺山 紘一	1981	昭和56	西東禽獣譚6 狼:隣人の恩義	現代詩手帖	24	6	10-13	世代社	—	○
404	記事	更科 源蔵	1981	昭和56	—	アイヌ伝説集	—	—	—	みやま書房	○	○
405	記事	更科 源蔵	1981	昭和56	—	アイヌの神話	—	—	—	みやま書房	○	○

資料番号	形態	著者	出版年 (西暦)	出版年 (和暦)	論文名／該当記事名／見出し名	雑誌名 書籍名	巻	号	頁	出版社	エゾ オオカミ	ニホン オオカミ
406	書籍	平岩 米吉	1981	昭和56	—	狼:その生態と歴史	—	—	—	築地書館	○	○
407	参照	芳賀 良一	1981	昭和56	エゾオオカミ	北海道大百科事典	上	—	211- 212	北海道新聞社	○	—
408	記事	宮沢 光顕	1981	昭和56	—	狐と狼の話	—	—	—	有峰書店新社	○	○
409	記事	—	1982	昭和57	動物界ニュース:縄文期の鹿児島にオオカミがいた	動物と自然	12	4	35	ニュー・サイエンス社	—	○
410	記事	犬飼 哲夫	1982	昭和57	北海道の動物今昔	動物と自然	12	2	2-3	ニュー・サイエンス社	○	—
411	記事	内田 亨	1982	昭和57	遺稿 家犬と野生犬	動物と自然	12	1	2-10	ニュー・サイエンス社	—	○
412	記事	更科 源蔵	1982	昭和57	—	アイヌの民俗	上	—	—	みやま書房	○	○
413	記事	更科 源蔵	1982	昭和57	—	アイヌ文学の謎	—	—	—	みやま書房	○	○
414	記事	朝日 稔・米田 政明	1983	昭和58	開拓と絶滅:エゾオオカミへの挽歌	滅びゆく動物たち	—	—	105- 124	東海大学出版会	○	○
415	記事	井上 泰男・石城 謙吉	1983	昭和58	生態系の変貌	北海道の資源:その開発と保存	—	—	27-38	北海道大学図書刊行会	○	○
416	記事	江刺市史編纂委員会	1983	昭和58	狼害	江刺市史 第1巻(通史篇 原始・古代・中世)	1	—	359- 360	江刺市	—	○
417	記事	更科 源蔵	1983	昭和58	—	コタンの童話	—	—	—	みやま書房	○	○
418	記事	丹羽 百合子	1983	昭和58	オオカミは神だった:縄文人の狩猟呪術	野生からの声——アニマ	—	121	18-21	平凡社	—	○
419	記事	西中川 駿・松本 光春・大塚 閔一・河口 貞徳	1983	昭和58	古代遺跡出土の動物骨に関する研究	鹿児島大学農学部学術報告	—	33	147- 157	鹿児島大学	—	○
420	記事	吉田 巖	1983	昭和58	—	アイヌの衣食住	—	—	—	北海道出版企画センター	○	○
421	論文	宮本 典子・牧 岩男	1983	昭和58	ニホンオオカミ剥製標本の改作と新しくとり出された頭骨について	和歌山大学教育学部紀要 自然科学	—	32	9-16	和歌山大学教育学部	—	○
422	論文	小原 巖	1984	昭和59	絶滅した日本のオオカミ	動物と自然	14	11	2-6	ニュー・サイエンス社	○	○
423	記事	河野 常吉	1984	昭和59	—	アイヌ史資料集:第二期出版第七巻河野常吉資料編(一)ノ一	—	—	—	北海道出版企画センター	○	○

資料番号	形態	著者	出版年 (西暦)	出版年 (和暦)	論文名／該当記事名／見出し名	雑誌名 書籍名	巻	号	頁	出版社	エゾ オオカミ	ニホン オオカミ
424	記事	仲村 禎里	1984	昭和59	—	日本人の動物観:変身譚の歴史	—	—	—	星雲社	—	○
425	論文	西本 豊弘			北海道の縄文・続縄文文化の狩猟と漁撈:動物異存体の分析を中心として	国立歴史民俗博物館研究報告	—	4	1-15	国立歴史民俗博物館	○	—
426	記事	野本 寛一	1984	昭和59	山犬信仰の発生と展開	焼畑民俗文化論	—	—	422-442	雄山閣出版	○	○
427	記事	吉田 巖	1984	昭和59	—	アイヌ史資料集:第二期 第三巻吉田巖著作編(三)ノ四	—	—	—	北海道出版企画センター	○	○
428	記事	田名部 雄一	1985	昭和60	縄文期のイヌと日本のオオカミは無関係	犬から探る古代日本人の謎:ヒトとともに生きてきたイヌの遺伝子が日本人のルーツを語る	—	—	36-37	PHP研究所	—	○
429	記事	千葉 徳爾	1985	昭和60	人獣交渉史の視点:秩父山地のオイヌ信仰を通して	歴史手帖	13	3	35-40	名著出版	—	○
430	記事	戸川 幸夫	1985	昭和60	最期のニホンオオカミ	週刊朝日百科日本の歴史 7 近世 I	—	71	159-160	朝日新聞社	—	○
431	記事	中村 禎里	1985	昭和60	ウマ・ネコ・ヘビ	週刊朝日百科日本の歴史 7 近世 I	—	71	130-137	朝日新聞社	—	○
432	記事	西原 悦男	1985	昭和60	秩父のオオカミ考:石像・絵馬・お札	歴史手帖	13	3	48-55	名著出版	○	○
433	記事	藤村 久和	1985	昭和60	神々とアイヌ	アイヌ、神々と生きる人々	—	—	10-64	福武書店	○	○
434	記事	藤原 英司	1985	昭和60	北加伊エゾシカ物語26:オオカミの復讐	朝日ジャーナル	27	29	55-59	朝日新聞社	○	—
435	記事	藤原 英司	1985	昭和60	北加伊エゾシカ物語27:雪、雪、雪	朝日ジャーナル	27	30	53-57	朝日新聞社	○	—
436	記事	安田 健	1985	昭和60	滅びゆく動物たち(「享保・元文産物帳」)から	週刊朝日百科日本の歴史 7 近世 I	5	71	144-145	朝日新聞社	—	○
437	記事	遠藤 公男	1986	昭和61	—	韓国の虎はなぜ消えたか	—	—	—	講談社	○	○
438	参照	酒井 堇美	1986	昭和61	狼報恩	日本 伝記伝説大事典	—	—	175-176	角川書店	—	○
439	記事	茂原 信生	1986	昭和61	—	東京大学総合資料館所蔵 長谷部言人博士収集犬科動物資料カタログ	—	—	—	東京大学総合研究資料館	—	○
440	記事	千葉 徳爾	1986	昭和61	歴史の中の動物 20:狼	週刊朝日百科	5	21	表紙	朝日新聞社	—	○
441	記事	千葉 徳爾	1986	昭和61	—	狩猟伝承研究 総括篇	—	—	—	風間書房	—	○
442	記事	早川 由宇子	1986	昭和61	狼の伝承	西郊民俗	—	116	21-25	西郊民俗談話会	—	○
443	記事	坂本 正行	1987	昭和62	ホルケウカムイ(狼)	北の神々と先住民族	—	—	29-38	マービス	○	○

資料番号	形態	著者	出版年 (西暦)	出版年 (和暦)	論文名／該当記事名／見出し名	雑誌名 書籍名	巻	号	頁	出版社	エゾ オオカミ	ニホン オオカミ
444	記事	桜井 伴	1987	昭和62	長野県伊那谷の山犬信仰と憑きもの	信濃	39	1	51-59	信濃史学会	—	○
445	記事	中村 禎里	1987	昭和62	オオカミ	日本動物民俗誌	—	—	64-69	海鳴社	—	○
446	記事	西中川 駿・臂 博 美・松本 光春・大塚 閏一・中島 哲郎	1987	昭和62	古代遺跡出土の動物骨に関する研究 IV. 鹿児島県表之浦貝塚出土骨の概要	鹿児島大学農学部学術報告	—	37	105-113	鹿児島大学	—	○
447	記事	日本野生生物研究センター	1987	昭和62	—	過去における鳥獣分布情報調査報告書	—	—	—	環境庁	—	○
448	書籍	東吉野村教育委員会	1987	昭和62	—	幻のニホンオオカミ—ニホンオオカミに関する資料—	—	—	—	東吉野村教育委員会	—	○
449	記事	小原 秀雄	1988	昭和63	まだ早い「狼の挽歌」(ニッポン「幻の動物」記<特集>)	科学朝日	46	6	26-29	朝日新聞社	○	○
450	記事	磯野 直秀	1988	昭和63	両羽獣類図譜(ニホンオオカミ、テン、ムササビ、アシカなど)	鳥獣虫魚譜:「両羽博物図譜」の世界	—	—	10-11	八坂書房	—	○
451	記事	河野 真知朗	1988	昭和63	中世鎌倉動物誌:都市遺跡出土の動物遺体と関連異物からの予報	歴史と民俗	3	—	68-	平凡社	—	○
452	論文	篠田 知和基	1988	昭和63	人狼伝承の起源を求めて	名古屋大学文学部研究論集	—	103	321-337	名古屋大学文学部	—	○
453	記事	鈴木 延夫	1988	昭和63	エゾオオカミ絶滅の謎	アラスカの雪原にて:動物一家オオカミに逢う	—	—	9-35	日本放送出版協会	○	—
454	書籍	世古 孜	1988	昭和63	—	ニホンオオカミを追う	—	—	—	東京書籍	○	○
455	記事	千葉 末吉	1988	昭和63	鶴、鷹、白鳥、熊、狼討上	沢内村郷土史シリーズ第十二集:雑書にみる沢内	—	—	137-141	沢内村郷土史研究会	○	○
456	記事	戸川 幸夫	1988	昭和63	狼は人を喰うか?	潮	—	350	366-369	潮出版社	○	○
457	記事	平岩 由伎子	1988	昭和63	矢野巡回動物園の狼	動物文学	—	244	10-12	動物文学会	—	○
458	論文	飯塚 好	1989	平成元	お犬さま信仰とその周辺:秩父地方を中心として	埼玉県立博物館紀要	—	15	95-125	埼玉県立博物館	—	○
459	記事	木村 盛武	1989	平成元	何故滅んだオオカミ	野生の事件簿:北の動物たち	—	—	209-220	北海道新聞社	○	—
460	書籍	小山 宏	1989	平成元	—	ニホンオオカミ:日本特産・絶滅種	—	—	—	渋川・北群馬郷土館	—	○
461	記事	西本 豊弘・松井 章	1989	平成元	日本の家畜の区分:1 イヌ	考古学と自然科学②:考古学と動物学	—	—	162-164	同成社	—	○
462	記事	山田 あおい	1989	平成元	山ふるわしてオボル(吠える)で!:熊野の狼によせるロマン	あすの農村	—	180	52-59	新日本出版社	—	○

資料番号	形態	著者	出版年(西暦)	出版年(和暦)	論文名/該当記事名/見出し名	雑誌名 書籍名	巻	号	頁	出版社	エゾ オオカミ	ニホン オオカミ
463	記事	大島 広志	1990	平成2	狼の御札	ふるさとの伝説 9 鳥獣・草木	9	—	90	ぎょうせい	—	○
464	論文	小原 巖	1990	平成2	神奈川県厚木市および愛甲郡清川村の民家に保存されているニホンオオカミの頭骨	神奈川県自然誌資料	—	11	53-65	神奈川県立生命の星・地球博物館	—	○
465	記事	小原 秀雄	1990	平成2	狼動物学入門	狼:シベリアの牙王	—	—	121-142	潮出版社	○	○
466	記事	萱野 志郎	1990	平成2	萱野茂「二風谷アイヌ語教室」講義 (十七回目)	やさしいアイヌ語	2	—	189-205	平取二風谷アイヌ語教室	○	—
467	記事	北川 尚史	1990	平成2	奈良県とニホンオオカミ(1)	自然と教育	2	—	14-17	奈良教育大学附属農場・演習林	—	○
468	記事	佐々木 利和	1990	平成2	犬は先祖なりや:アイヌの創世説話と和夷同祖論	北からの日本史 第2集	—	—	189-226	三省堂	○	—
469	記事	佐藤 芝明	1990	平成2	丹沢・南都留の山の神	山の神とヲコゼ	7	—	61-90	エンタプライズ	—	○
470	記事	関 秀志・中田 幹雄・千代肇	1990	平成2	明治期における北海道の博物館(1)	北海道開拓記念館調査報告	—	29	113-139	北海道開拓記念館	○	—
471	記事	千葉 徳爾	1990	平成2	—	狩猟伝承研究補遺篇	—	—	—	風間書房	○	○
472	記事	戸川 幸夫	1990	平成2	俳句動物記 4 日本の狼	俳句研究	57	4	30-33	富士見書房	○	○
473	記事	川合 禎次	1990	平成2	ニホンオオカミ	奈良県史 第二巻 動物・植物	2	—	31-36	奈良県史編集委員会	—	○
474	記事	蓮池 悦子	1990	平成2	アイヌの「犬・狼祖説話」とユーカラ(佐々木報告へのコメント)	北からの日本史 第2集	—	—	226-130	三省堂	○	—
475	記事	北川 尚史	1991	平成3	奈良県とニホンオオカミ(2)	自然と教育	3	—	15-17	奈良教育大学附属農場・演習林	—	○
476	記事	北川 尚史	1991	平成3	奈良県とニホンオオカミ(3)	自然と教育	4	—	10-12	奈良教育大学附属農場・演習林	—	○
477	記事	小池 昌弘	1991	平成3	大口の真神考:通説は正しいのか	歴史研究	—	361	54-56	新人物往来社	—	○
478	記事	五味 靖嘉	1991	平成3	犬の顔貌に関して…[その2]	柴犬	—	8	11-13	天然記念物柴犬研究会	—	○
479	記事	関 秀志	1991	平成3	明治期における北海道の博物館(2)	北海道開拓記念館調査報告	—	30	91-118	北海道開拓記念館	○	○
480	記事	関本 快哉	1991	平成3	読物・連載:岳人サイエンス(7)山犬信仰から見るニホンオオカミの絶滅	岳人	—	533	138-141	ネイチュアエンタープライズ	—	○

資料番号	形態	著者	出版年 (西暦)	出版年 (和暦)	論文名／該当記事名／見出し名	雑誌名 書籍名	巻	号	頁	出版社	エゾ オオカミ	ニホン オオカミ
481	記事	田隈 本生	1991	平成3	“ニホンオオカミ”の実態を頭骨から探る	The Bone	5	2	119-128	メディカルレビュー社	○	○
482	記事	戸田 亜里	1991	平成3	—	狼擬:日本人北方起源の再興	—	—	—	アテネ書房	—	○
483	記事	塚本 学	1991	平成3	生活をめぐる動物Ⅱ:イヌとオオカミ	歴史と地理	—	433	47-58	山川出版	—	○
484	記事	西尾 俊彦	1991	平成3	イソップ物語風農業研究論9:さまざまな「オオカミ」、研究の パラレルワールド	農業技術	46	9	30-33	農業技術協会	—	○
485	参照	増井 光子	1991	平成3	イヌ科の分類	世界の動物 分類と飼育(2)食肉目	—	—	125-149	東京動物園協会	○	○
486	論文	宮本 典子	1991	平成3	和歌山大学所蔵のニホンオオカミ剥製標本からとり出された 頭骨について	和歌山大学教育学部紀要 自然科学	—	40	55-60	和歌山大学教育学部	—	○
487	論文	小原 巖・中村 一 恵	1992	平成4	南足柄市郷土資料館所蔵の、いわゆるヤマイヌ頭骨につい て	神奈川県立博物館研究報告 自然科学	—	21	105-110	神奈川県立生命の星・地球博物館	—	○
488	記事	門崎 允昭	1992	平成4	積丹半島の動物相:哺乳類・爬虫類・両生類	北海道開拓記念館研究報告:積丹半島の自然と歴史 自然編	—	12	35-62	北海道開拓記念館	○	○
489	記事	五味 靖嘉	1992	平成4	犬の顔貌に関連して…(その2)	柴犬	—	9	3-5	天然記念物柴犬研究会	—	○
490	記事	田淵 実夫	1992	平成4	ちちしろ水	日本民俗文化資料集成:動植物のフォークロア I	11	—	70-86	三一書房	—	○
491	記事	戸川 幸夫	1992	平成4	俳句動物記25 狼(外国)	俳句研究	59	1	48-51	富士見書房	—	○
492	記事	西中川 駿・松本 光春・大塚 閔一・ 出口 浩	1992	平成4	縄文後期の草野貝塚出土の哺乳類遺体	鹿児島大学農学部学術報告	—	42	19-27	鹿児島大学農学部	—	○
493	論文	牧野 真一	1992	平成4	山犬信仰の諸相	民俗宗教の西日本と東日本における構造的相違に関 する総合的調査研究 平成3年度科学研究費補助金 (総合研究A)研究成果報告書	—	—	65-100	—	—	○
494	記事	村上 和潔	1992	平成4	—	日本狼	—	—	—	非売品	—	○
495	参照	今泉 忠明	1993	平成5	ニホンオオカミ: 異名ヤマイヌ、ホンドオオカミ	野生イヌの百科	—	—	38-41	データハウス	—	○
496	記事	桑原 康彰	1993	平成5	幻の北海道オオカミを見た:吉田権三郎	日高の動物記	—	—	141-142	南雲堂	○	○
497	記事	古河 三樹	1993	平成5	珍崎鳥獣	図説庶民芸能:江戸の見世物	—	—	153-178	雄山閣	—	○
498	記事	塚本 学	1993	平成5	御犬様始末	生類をめぐる政治:元禄のフォークロア	—	—	161-236	平凡社	—	○

資料 番号	形態	著者	出版年 (西暦)	出版年 (和暦)	論文名／該当記事名／見出し名	雑誌名 書籍名	巻	号	頁	出版社	エゾ オオカミ	ニホン オオカミ
499	論文	千葉 徳爾	1993	平成5	近世金沢平野地域の野獣害:特にニホンオオカミについて	歴史地理学	—	163	38-47	歴史地理学会	—	○
500	記事	千葉 徳爾	1993	平成5	金沢近郊に山没!!ニホンオオカミ	はくさん	21	1	2-7	石川県白山自然保護センター	—	○
501	記事	永戸豊野	1993	平成5	『悪役』オオカミは悲劇の主人公	Newton	13	8	133	ニュートンプレス	—	○
502	記事	西中川 駿・松本 光春・大塚 閏一・ 河口 貞徳	1993	平成5	鹿児島島の縄文、弥生遺跡出土の動物遺体	鹿児島大学農学部学術報告	—	43	19-24	鹿児島大学農学部	—	○
503	記事	大和 岩雄	1993	平成5	伏見稲荷大社:稲荷信仰の白鳥・白狐・狼	秦氏の研究:日本の文化と信仰に深く関与した渡来集団の研究	—	—	289- 311	大和書房	—	○
504	論文	山本 則之	1993	平成5	昔話「狼報恩」と唱導文芸と	国学院雑誌	94	5	38-50	國學院大學	—	○
505	記事	—	1994	平成6	洋犬カメ、狼たちの挽歌	ニュースで追う:明治日本発掘	3	—	140- 142	河出書房新社	—	○
506	記事	石川 純一郎	1994	平成6	遠江地方のオオカミ信仰	あしなか	—	238	32	山村民俗の会編	—	○
507	記事	磯野 直秀	1994	平成6	松森胤保	彩色 江戸博物学集成	—	—	429- 447	平凡社	—	○
508	記事	今泉 忠明	1994	平成6	東京国立博物館蔵『博物館獣譜面』より	彩色 江戸博物学集成	—	—	—	平凡社	○	○
509	記事	上田 恭一郎	1994	平成6	川原慶賀	彩色 江戸博物学集成	—	—	293- 308	平凡社	—	○
510	記事	遠藤 公男	1994	平成6	早くも乱獲のきざし	盛岡藩御狩り日記:江戸時代の野生動物誌	—	—	220- 254	講談社	—	○
511	記事	遠藤 聖一	1994	平成6	奥多摩二山の石の狼	あしなか	—	238	21	山村民俗の会編	—	○
512	記事	小西 正泰	1994	平成6	細川重賢	彩色 江戸博物学集成	—	—	89-105	平凡社	—	○
513	記事	佐々木 利和	1994	平成6	馬場大助	彩色 江戸博物学集成	—	—	265- 277	平凡社	○	○
514	記事	佐藤 芝明	1994	平成6	丹沢周辺の山犬信仰:丹沢・桂秋・箱根山城	あしなか	—	238	22-26	山村民俗の会編	—	○
515	記事	篠田 知和基	1994	平成6	—	人狼変身譚:西欧の民話と文学から	—	—	—	大修館書店	—	○
516	記事	野本 寛一	1994	平成6	狼	共生のフォークロア:民俗の環境思想	—	—	154- 172	青土社	—	○

資料番号	形態	著者	出版年 (西暦)	出版年 (和暦)	論文名／該当記事名／見出し名	雑誌名 書籍名	巻	号	頁	出版社	エゾ オオカミ	ニホン オオカミ
517	記事	藤原 仁	1994	平成6	—	まぼろしのニホンオオカミ:福島県の棲息記録	—	—	—	歴史春秋社	—	○
518	記事	武藤 鐵城	1994	平成6	—	秋田マタギ聞書	—	—	—	慶友社	—	○
519	記事	村元 直人	1994	平成6	捕殺により絶滅したエゾオオカミ	蝦夷地のナチュラリストたち	—	—	163-164	幻洋社	○	—
520	記事	安田 健	1994	平成6	丹羽正伯	彩色 江戸博物学集成	—	—	54-72	平凡社	—	○
521	記事	松尾 翔	1994	平成6	秩父地方の狼像	あしなか	—	238	8-15	山村民俗の会編	—	—
522	記事	丸山 直樹	1994	平成6	1993年 IUCNオオカミ専門家会議 オオカミ国際シンポジウム	フォレスト・コール	—	1	10-13	日本オオカミ協会	—	○
523	記事	山田 孝子	1994	平成6	霊魂とカムイ	アイヌの世界観	—	—	60-112	講談社	○	—
524	参照	今泉 忠明	1995	平成7	ニホンオオカミ(一名ヤマイヌ、ホンドオオカミ) エゾオオカミ	絶滅野生動物の事典	—	—	35-51	東京堂出版	○	○
525	記事	今泉 忠明	1995	平成7	オオカミのたどる道	週刊現代	37	17	18	講談社	—	○
526	記事	神崎 伸夫・丸山直樹・井上 剛	1995	平成7	オオカミに対する日本人の意識(1993)	フォレスト・コール	—	2	1-3	日本オオカミ協会	—	○
527	記事	Perzanowski, K (ベジヤノフスキー、カイエタン)	1995	平成7	オオカミの復活:日光の場合	フォレスト・コール	—	2	26-27	日本オオカミ協会	—	○
528	記事	石田 健	1995	平成7	ツキノワグマの食性と生活史特性	哺乳類科学	35	1	71-78	日本哺乳類学会	—	○
529	記事	今泉忠明	1995	平成7	オオカミのたどる道は人類の未来を暗示する	本	20	5	52-54	講談社	—	○
530	記事	梶 光一	1995	平成7	シカの爆発的増加:北海道の事例	哺乳類科学	35	1	35-42	日本哺乳類学会	○	○
531	記事	小金澤 正昭	1995	平成7	ニホンザルとイヌ:猟犬によるニホンザル追跡私見から	哺乳類科学	35	1	49-52	日本哺乳類学会	—	○
532	記事	志村 真幸	1995	平成7	ニホンオオカミは生きているか?	人環フォーラム	—	16	54-55	京都大学大学院人間・環境学研究科	—	○
533	記事	高橋 正男	1995	平成7	『オオカミCanis lupus 関連文書目録』	フォレスト・コールNo.2 特別分冊	特別分冊	—	全	日本オオカミ協会	—	○
534	記事	高橋 成紀	1995	平成7	ニホンオオカミ	東京大学コレクション(Ⅱ):動く大地とその生物	—	—	182-190	東京大学総合研究資料館	○	○

資料番号	形態	著者	出版年 (西暦)	出版年 (和暦)	論文名／該当記事名／見出し名	雑誌名 書籍名	巻	号	頁	出版社	エゾ オオカミ	ニホン オオカミ
535	記事	竹中 修	1995	平成7	—	絶滅したヤマイヌのDNAに基づく系統解析	—	—	—	京都大学	○	○
536	書籍	千葉 徳爾	1995	平成7	—	オオカミはなぜ消えたか：日本人と獣の話	—	—	—	新人物往来社	○	○
537	記事	塚本 学	1995	平成7	犬と狼：生活をめぐる動物2	江戸時代人と動物	—	—	154-174	日本エディターズスクール出版部	—	○
538	記事	常田 邦彦	1995	平成7	シカ個体群の制限要因としてのオオカミ	哺乳類科学	35	1	45-48	日本哺乳類学会	—	○
539	記事	丸山 直樹	1995	平成7	学会レポート：「日本の哺乳類学の盲点を突く—オオカミ不在のエコロジー」を開催して	フォレスト・コール	—	2	4-7	日本オオカミ協会	—	○
540	記事	丸山 直樹	1995	平成7	明治時代末から昭和時代にかけての奈良県でのオオカミの分布と生態：岸田日出夫氏の郵送アンケートによる考察	フォレスト・コール	—	2	11-12	日本オオカミ協会	—	○
541	記事	丸山 直樹	1995	平成7	第38回シンポジウム記録：第38回シンポジウム「オオカミ不在のエコロジー」についての主催者総括	哺乳類科学	35	1	21-27	日本哺乳類学会	—	○
542	記事	水野 昭憲	1995	平成7	コメント：ニホンザルとイヌとオオカミ	哺乳類科学	35	1	52-55	日本哺乳類学会	—	○
543	記事	安田 喜憲	1995	平成7	洪水を防いだオオカミ	FRONT	—	—	56-57	リバーフロント整備センター	—	○
544	記事	山中 正実	1995	平成7	コメント：オオカミ不在の北海道のヒグマ	哺乳類科学	35	1	65-70	日本哺乳類学会	○	—
545	記事	小田島久恵	1996	平成8	三面記事探検隊がゆくシカの食書対策に『オオカミ投入』は名案か？	週刊文春	38	5	60-61	文藝春秋	—	○
546	参照	門崎 充昭	1996	平成8	鹿の興亡と狼の絶滅	Dr.カドサキの実用鑑定野性動物痕跡学事典	—	—	246-248	北海道出版企画センター	○	○
547	記事	佐藤 芝明	1996	平成8	秩父・三峰山でニホンオオカミ誘い出し作戦	岳人	—	583	64-65	ネイチュアエンタープライズ	—	○
548	記事	高橋 正男	1996	平成8	ニホンオオカミはいるのだろうか：第2回ニホンオオカミ・フォーラムより	フォレスト・コール	3	—	36-38	日本オオカミ協会	—	○
549	記事	豊原 照司	1996	平成8	ウンメムケにおける穿孔位置について	環オホーツク：第3回環オホーツク海文化のつどい報告 署	—	3	63-69	北の文化シンポジウム実行委員会	○	—
550	記事	長沢 武	1996	平成8	今は幻、怖さの象徴：オオカミ	山の動物民俗記	—	—	47-103	ほおずき書籍	○	○
551	記事	中田信哉	1996	平成8	物流の生態学：クマとオオカミ	流通設計	27	3	70-71	輸送経済新聞社	—	○
552	記事	中村 一恵	1996	平成8	オオカミ・シカ・カラス：エゾオオカミの復元に向けて	フォレスト・コール	—	3	2-5	日本オオカミ協会	○	—

資料番号	形態	著者	出版年 (西暦)	出版年 (和暦)	論文名／該当記事名／見出し名	雑誌名 書籍名	巻	号	頁	出版社	エゾ オオカミ	ニホン オオカミ
553	記事	長谷部 一弘	1996	平成8	在サンクトペテルブルグのアイヌ民族資料	地域史研究:はこだて	—	23	1-18	函館市史編纂室	○	—
554	記事	波多野 幾也	1996	平成8	もっとデータを、もっと議論を	フォレスト・コール	—	3	46-53	日本オオカミ協会	—	○
555	記事	『フォレスト・コール』編集部	1996	平成8	マスコミにみるオオカミ関係？情報	フォレスト・コール	—	3	57-58	日本オオカミ協会	—	○
556	記事	『フォレスト・コール』編集部	1996	平成8	中国のオオカミ研究、ついにスタート！	フォレスト・コール	—	3	59-60	日本オオカミ協会	—	○
557	記事	プロジェクトチーム	1996	平成8	近代化に敗れた[守り神]ニホンオオカミ	失われた動物たち:20世紀絶滅動物の記録	—	—	228- 229	広葉書林	○	○
558	記事	丸山 直樹	1996	平成8	ニホンオオカミは独立種？	フォレスト・コール	—	3	54-56	日本オオカミ協会	—	○
559	記事	三重県	1996	平成8	—	三重県史 別編自然	—	—	—	三重県	—	○
560	記事	山田あおい	1996	平成8	ほえよ、ニホンオオカミ！秩父山中で呼びだし作戦	子どもの本棚	—	327	35	日本子どもの本研究会	—	○
561	記事	山根 一眞	1996	平成8	山根一眞の動物事件簿一狼 「第1回:四年前、私はオオカミに遭った!？」	シンラ	—	25	113- 120	新潮社	○	○
562	記事	山根 一眞	1996	平成8	山根一眞の動物事件簿一狼 「第2回:オオカミの遠吠えが、ある男の一生を変えた」	シンラ	—	26	113- 120	新潮社	○	○
563	記事	山根 一眞	1996	平成8	山根一眞の動物事件簿一狼 「第4回:最後のニホンオオカミを見た、最後の日本人」	シンラ	—	28	115- 122	新潮社	○	○
564	記事	山根 一眞	1996	平成8	山根一眞の動物事件簿一狼 「第3回:DNA鑑定のとある朗報」	シンラ	—	27	115- 122	新潮社	○	○
565	記事	山根 一眞	1996	平成8	山根一眞の動物事件簿一狼 「第5回:世界で六体目のニホンオオカミの標本」	シンラ	—	29	113- 120	新潮社	○	○
566	記事	山根 一眞	1996	平成8	山根一眞の動物事件簿一狼 「第6回:イギリスにある標本データ」	シンラ	—	30	115- 121	新潮社	—	○
567	記事	山根 一眞	1996	平成8	山根一眞の動物事件簿一狼 「第9回:奥日光の自然崩壊」	シンラ	—	33	121- 127	新潮社	—	○
568	記事	山根 一眞	1996	平成8	山根一眞の動物事件簿一狼 「第10回:シーボルトのニホンオオカミ」	シンラ	—	34	105- 111	新潮社	—	○
569	記事	山根 一眞	1996	平成8	山根一眞の動物事件簿一狼 「第11回:京都大学のDNA鑑定は今」	シンラ	—	35	125- 131	新潮社	○	○
570	記事	山根 一眞	1996	平成8	山根一眞の動物事件簿一狼 「第12回:最初のニホンオオカミをめぐって」	シンラ	—	36	125- 131	新潮社	○	○

資料番号	形態	著者	出版年 (西暦)	出版年 (和暦)	論文名／該当記事名／見出し名	雑誌名 書籍名	巻	号	頁	出版社	エゾ オオカミ	ニホン オオカミ
571	記事	—	1997	平成9	哺乳類	加計町誌 地誌編	—	—	174- 196	加計町	—	○
572	記事	岩田 栄之	1997	平成9	ニホンオオカミは残存するか	フォレスト・コール	—	4	19-21	日本オオカミ協 会	—	○
573	記事	小金澤 正昭ほか	1997	平成9	オオカミに対する日本人の意識:第2回アンケート調査	フォレスト・コール	—	4	2-6	日本オオカミ協 会	—	○
574	記事	小谷 凱宣	1997	平成9	欧米アイヌ・コレクションの比較研究	平成6~8年度文部科学省科学研究費補助(国際学術 研究・国際学術調査)研究成果報告書	—	—	63-72	名古屋大学大 学院	○	—
575	記事	小松 和彦・篠原 徹・塚本 学ほか	1997	平成9	—	歴博フォーラム 動物と人間の文化史	—	—	—	吉川弘文館	—	○
576	記事	浄法寺町史編纂委 員会	1997	平成9	狼害と牧野	浄法寺町史:上巻	上	—	404- 408	浄法寺町	—	—
577	記事	高橋 紀夫・丸山 直樹	1997	平成9	復活オオカミが生息できる場所が日本に残っているか?	フォレスト・コール	—	4	14-18	日本オオカミ協 会	○	○
578	記事	谷口 研語	1997	平成9	狼	地名の博物史	—	—	23-27	PHP研究所	—	○
579	記事	千葉 徳爾	1997	平成9	—	狩猟伝承研究 再考篇	—	—	—	風間書房	—	○
580	記事	塚本 学	1997	平成9	江戸時代人のイヌとのつきあい	動物と人間の文化誌	—	—	18-98	吉川弘文館	—	○
581	記事	中川 裕	1997	平成9	カムイの世界	アイヌの物語世界	—	—	18-76	平凡社	○	—
582	記事	日本哺乳類学会	1997	平成9	オオカミ:ニホンオオカミ エゾオオカミ	レッドデータ:日本の哺乳類	—	—	96	文一書房	○	—
583	記事	増田 隆一・茂原 信夫	1997	平成9	日本産食肉目の種名の検討	哺乳類科学	37	1	87-93	日本哺乳類学会	○	○
584	書籍	村上一潔	1997	平成9	—	紀伊山中の日本狼(復刻版)	—	—	—	紀州野生動物調 査研究会	○	○
585	記事	森 俊	1997	平成9	狼について	狼の記憶	—	—	164- 169	桂書房	—	○
586	記事	山根 一眞	1997	平成9	山根一眞の動物事件簿—狼「第13回:誰がニホンオオカミ を命名したのか」	シンラ	—	37	123- 129	新潮社	○	○
587	記事	山根 一眞	1997	平成9	山根一眞の動物事件簿—狼「第14回:ヤマイヌとは?」	シンラ	—	38	125- 131	新潮社	○	○
588	記事	山根 一眞	1997	平成9	山根一眞の動物事件簿—狼「第15回:突如、現れた秩父 野犬」	シンラ	—	39	121- 127	新潮社	—	○
589	記事	山根 一眞	1997	平成9	山根一眞の動物事件簿—狼「第16回:今も続く一七〇年前 の混乱」	シンラ	—	40	121- 127	新潮社	○	○

資料番号	形態	著者	出版年 (西暦)	出版年 (和暦)	論文名／該当記事名／見出し名	雑誌名 書籍名	巻	号	頁	出版社	エゾ オオカミ	ニホン オオカミ
590	記事	山根 一真	1997	平成9	山根一真の動物事件簿—狼「第17回:オオカミはいた。そしてヤマイヌも。」	シンラ	—	41	121-127	新潮社	○	○
591	記事	山根 一真	1997	平成9	山根一真の動物事件簿—狼「第18回:ロンドン動物園にニホンオオカミを送った人」	シンラ	—	42	121-127	新潮社	—	○
592	記事	山根 一真	1997	平成9	山根一真の動物事件簿—狼「最終回:私たちはなぜ、ニホンオオカミの生存を信じるのか。」	シンラ	—	43	121-127	新潮社	○	○
593	記事	SPb-アイヌプロジェクト調査団編著	1998	平成10	LIST	ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館所蔵アイヌ資料目録	—	—	189	草風館	○	○
594	記事	石橋 博	1998	平成10	銅鐸に描かれた謎の動物はオオカミか	フォレスト・コール	—	5	14-15	日本オオカミ協会	—	○
595	記事	井上 剛	1998	平成10	オオカミ復活に夢乗せて	フォレスト・コール	—	5	2-8	日本オオカミ協会	—	○
596	記事	井上 百合子	1998	平成10	ニホンオオカミの絵を描くまで	特別展図録 オオカミとその仲間たち:イヌ科動物の世界	—	—	78-79	神奈川県立生命の星・地球博物館	—	○
597	記事	今泉 吉典	1998	平成10	—	哺乳動物進化論	—	—	—	ニュートンプレス	○	○
598	記事	岩田 栄之	1998	平成10	鷲家ロブロンズオオカミが何故小さかったか	フォレスト・コール	—	5	11-13	日本オオカミ協会	—	○
599	記事	遠藤 秀紀	1998	平成10	オオカミを切る	特別展図録 オオカミとその仲間たち:イヌ科動物の世界	—	—	72-76	神奈川県立生命の星・地球博物館	—	○
600	論文	小野田 正樹	1998	平成10	イヌの家畜化の起源について:イヌとオオカミの判別をめぐって	基礎科学論集:教養課程紀要	—	16	106-114	神奈川歯科大学	—	○
601	記事	神崎 伸夫	1998	平成10	オオカミはイノシシを救う:東北地方からなぜイノシシが消えたのか	別冊太陽	—	103	157-158	平凡社	—	○
602	記事	五味 靖嘉	1998	平成10	物語「ニホンオオカミ」—(1)	柴犬	—	50	30-34	天然記念物柴犬研究会	—	○
603	記事	小山 宏	1998	平成10	柴犬保存の重要性(イヌとオオカミ展・講演から)	柴犬	—	48	8-9	天然記念物柴犬研究会	—	○
604	記事	谷川 健一	1998	平成10	[オオカミ] 狼河原	動物地名をたずねて	—	—	68-75	岩波書店	—	○
605	記事	中村 一恵	1998	平成10	オオカミの分布と地理的変異	特別展図録 オオカミとその仲間たち:イヌ科動物の世界	—	—	49-53	神奈川県立生命の星・地球博物館	○	○

資料番号	形態	著者	出版年 (西暦)	出版年 (和暦)	論文名／該当記事名／見出し名	雑誌名 書籍名	巻	号	頁	出版社	エゾ オオカミ	ニホン オオカミ
606	記事	中村 一恵	1998	平成10	ニホンオオカミはなぜ小さいか	特別展図録 オオカミとその仲間たち:イヌ科動物の世界	—	—	54-60	神奈川県立生命の星・地球博物館	—	○
607	論文	中村 一恵	1998	平成10	ニホンオオカミの分類に関する生物地理学的視点	神奈川県立博物館研究報告 自然科学	—	27	49-60	神奈川県立生命の星・地球博物館	○	○
608	記事	中村 一恵	1998	平成10	日本産オオカミの絶滅	特別展図録 オオカミとその仲間たち:イヌ科動物の世界	—	—	80-83	神奈川県立生命の星・地球博物館	○	○
609	記事	中村 一恵・新井田 秀一	1998	平成10	CGで見る丹沢山オオカミの生息地	特別展図録 オオカミとその仲間たち:イヌ科動物の世界	—	—	84-87	神奈川県立生命の星・地球博物館	—	○
610	記事	中村 一恵・土屋 定夫	1998	平成10	本の紹介2 オオカミをもっと知りたい人のために	特別展図録 オオカミとその仲間たち:イヌ科動物の世界	—	—	94	神奈川県立生命の星・地球博物館	—	○
611	記事	中村 浩	1998	平成10	狼は“大神”か	動物名の由来	—	—	52-55	東京書籍	○	○
612	記事	西原 悦男	1998	平成10	チョウセンオオカミ	北東アジア陸生哺乳類誌:中国黒龍省 内モンゴ北部・シベリア極東編	—	—	38-40	鳥見書房	—	○
613	記事	長谷川 善和	1998	平成10	日本のオオカミ化石の変遷	特別展図録 オオカミとその仲間たち:イヌ科動物の世界	—	—	62-65	神奈川県立生命の星・地球博物館	—	○
614	論文	菱川 晶子	1998	平成10	オオカミの民俗:『送り狼』をめぐる	動物考古学	—	10	65-80	動物考古学研究会	—	○
615	記事	平岩 由伎子	1998	平成10	日本狼とは何か、その残存の可能性	フォレスト・コール	—	5	16-21	日本オオカミ協会	—	○
616	記事	本多 勝一	1998	平成10	エゾオオカミ	きたぐにの動物たち	—	—	65-67	朝日新聞社	○	—
617	記事	町田 定男	1998	平成10	ニホンオオカミ:その特徴と追跡の記録	セイフティダイジェスト	44	7	44-50	日本保安用品協会	—	○
618	記事	間野 勉	1998	平成10	狩猟獣の濫獲、絶滅、防除、管理、保護の検証:鳥獣統計の分析	哺乳類科学	38	1	61-74	哺乳類学会	○	○
619	記事	丸山 直樹, 神崎 伸夫	1998	平成10	よみがえれ!!ニホンオオカミ	別冊太陽	—	103	145-158	平凡社	—	○
620	記事	丸山 直樹	1998	平成10	「オオカミ捜し」を考える!:生態学的情報も参考に	フォレスト・コール	—	5	22-26	日本オオカミ協会	—	○

資料番号	形態	著者	出版年 (西暦)	出版年 (和暦)	論文名／該当記事名／見出し名	雑誌名 書籍名	巻	号	頁	出版社	エゾ オオカミ	ニホン オオカミ
621	記事	丸山 直樹	1998	平成10	人食いオオカミの話！	フォレスト・コール	—	5	59-60	日本オオカミ協会	—	○
622	記事	丸山 直樹	1998	平成10	ニホンオオカミについて	別冊太陽	—	103	150-156	平凡社	—	○
623	論文	浅見 由ミ・上北 尚正・河西 恭子ほか	1999	平成11	哺乳類の毛皮標本からのDNA抽出ならびに機能遺伝子の回収に関する研究	日本畜産学会報	70	10	351-362	日本畜産学会	—	○
624	論文	相見 満	1999	平成11	絶滅したヤマイヌの研究	I. F. Report	—	26	40-53	石田科学経済研究財団	○	○
625	記事	新川忠孝	1999	平成11	オオカミでシカ退治？	新聞研究	—	570	5-6	日本新聞協会	—	○
626	記事	池田 貴夫	1999	平成11	ヒグマをとりまく猛獣群の民族学的位置づけ—北東アジアにおけるツキノワグマ、オオカミ、トラとの比較	北海道開拓記念館研究紀要	—	27	95-112	北海道開拓記念館	○	○
627	記事	井上 剛	1999	平成11	自由集会記録：オオカミ復活に夢乗せて：捕食者不在の日本の生態系を考える	哺乳類科学	39	1	106-107	哺乳類科学編集部	—	○
628	記事	井上 剛	1999	平成11	野生生物保護学会自由集会報告：オオカミ再導入への期待と可能性	フォレスト・コール	—	6	27-28	日本オオカミ協会	—	○
629	論文	小野 美喜夫・高橋 信武	1999	平成11	オオカミの根付け	動物考古学	—	13	73-76	動物考古学研究会	—	○
630	論文	小野田 正樹	1999	平成11	イヌとオオカミとの判別について：日本におけるイヌの起源をめぐって	基礎科学論集：教養課程紀要	—	17	31-43	神奈川歯科大学	—	○
631	記事	小原秀雄	1999	平成11	激動の時代、“群れる”オオカミは絶滅した	Wedge	11	3	43	ウェッジ	—	○
632	記事	門崎 允昭・関 秀志	1999	平成11	蝦夷地における動物相の文献学的研究	北海道開拓記念館調査報告	—	38	93-112	北海道開拓記念館	○	○
633	記事	金子 善光	1999	平成11	三峯神社の狛犬信仰をめぐって	山岳修験	—	24	37-50	日本山岳修験学会	—	○
634	記事	川道 武男	1999	平成11	日本哺乳類学界のレッドデータと課題	哺乳類科学	39	1	37-44	哺乳類学会	—	○
635	記事	栗栖 健	1999	平成11	我が国にいた？謎のオオカミ型動物	フォレスト・コール	—	7	2-6	日本オオカミ協会	—	○
636	記事	小金澤 正昭	1999	平成11	日光におけるシカの増加と森林生態系への影響、そしてオオカミ導入の必要性	フォレスト・コール	—	6	4-6	日本オオカミ協会	—	○
637	記事	五味 靖嘉	1999	平成11	物語「ニホンオオカミ」—(2)	柴犬	—	51	15-18	天然記念物柴犬研究会	—	○
638	記事	五味 靖嘉	1999	平成11	物語「ニホンオオカミ」—(3)	柴犬	—	52	6-8	天然記念物柴犬研究会	—	○

資料番号	形態	著者	出版年 (西暦)	出版年 (和暦)	論文名／該当記事名／見出し名	雑誌名 書籍名	巻	号	頁	出版社	エゾ オオカミ	ニホン オオカミ
639	書籍	小山宏	1999	平成11	—	日本オオカミ:これ以上の絶滅をふせぐために	—	—	—	北群馬渋川郷土館	—	○
640	記事	小山 宏	1999	平成11	ニホンオオカミの最期は1905年か:「イヌとオオカミ展」(企画展)によせられた資料などから	フォレスト・コール	—	7	30-35	日本オオカミ協会	—	○
641	記事	佐治 卓也	1999	平成11	ニホンオオカミ再導入の意義と是非	奈良大地理	—	5	41-47	奈良大学地理学会	○	○
642	論文	立石 展大	1999	平成11	日中「古屋の漏り」の比較研究	国学院大学大学院紀要 文学研究科	—	31	269-289	国学院大学大学院	—	○
643	記事	長岡 郁生	1999	平成11	盛り上がる狼ブームへの期待	フォレスト・コール	—	7	11-12	日本オオカミ協会	—	○
644	論文	長岐 喜代次	1999	平成11	男鹿の鹿狩りと藩内の狼狩り	北方風土	—	37	94-97	イズミヤ出版	—	—
645	論文	中村 一恵	1999	平成11	宮ヶ瀬遺跡から出土したニホンオオカミの下顎骨標本について	神奈川県立博物館研究報告 自然科学	—	28	107-108	神奈川県立生命の星・地球博物館	—	○
646	記事	中村 一恵	1999	平成11	ニホンオオカミのルーツ	フォレスト・コール	—	6	11-14	日本オオカミ協会	○	○
647	記事	長谷川 善和	1999	平成11	化石が語る類縁と系統:オオカミを中心として(自由集會記録 哺乳類の類縁をさぐる:比較形態からのアプローチ)	哺乳類科学	39	1	104-105	日本哺乳類学会	—	○
648	記事	菱川 晶子	1999	平成11	人獣交渉史:狼と塩	フォレスト・コール	—	7	7-10	日本オオカミ協会	—	○
649	記事	平岩 由伎子	1999	平成11	狼のロマンにつかかれた人々	フォレスト・コール	—	7	13-14	日本オオカミ協会	—	○
650	記事	増田 隆一	1999	平成11	ブラキストン線(津軽海峡)に関する食肉類の生物地理と遺伝的特徴	哺乳類科学	39	2	351-358	日本哺乳類学会	○	○
651	記事	丸山 直樹	1999	平成11	オオカミの復活にむけて	フォレスト・コール	—	6	15-26	日本オオカミ協会	○	○
652	論文	南 雅代・北村 直司・中村 俊夫	1999	平成11	熊本県八代郡泉村京丈山洞穴より産出したニホンオオカミ全身骨格標本のAMS14C年代	名古屋大学加速器質量分析計業績報告書	—	10	189-198	名古屋大学	—	○
653	記事	山口 民弥	1999	平成11	オオカミと御眷属信仰	山岳修験	—	24	51-63	日本山岳修験学会	—	○
654	記事	山口 稔	1999	平成11	「イヌとオオカミ展」に参加して	フォレスト・コール	—	6	31-35	日本オオカミ協会	—	○
655	記事	与板町	1999	平成11	狼ヤツツガムシの被害	与板町史:通史編 上巻	—	—	590-597	与板町	—	—

資料番号	形態	著者	出版年 (西暦)	出版年 (和暦)	論文名／該当記事名／見出し名	雑誌名 書籍名	巻	号	頁	出版社	エゾ オオカミ	ニホン オオカミ
656	論文	吉田 智洋・遠藤 秀紀・九郎 丸正 道・林 良博	1999	平成11	ニホンオオカミとイヌに関する頭骨形態の三次元的鑑定	哺乳類科学	39	2	239- 246	哺乳類科学編集部	—	○
657	参照	阿部 永	2000	平成12	イヌ属	日本産哺乳類頭骨図説	—	—	241- 245	北海道大学図書 刊行会	○	○
658	記事	石塚 正英	2000	平成12	秩父オオカミ信仰の民俗	歴史知とフェティシズム:信仰・歴史・民俗	—	—	113- 137	理想社	—	○
659	記事	今泉 忠明	2000	平成12	日本:ニホンオオカミと小笠原での鳥類の絶滅	絶滅動物誌	—	—	247- 291	講談社	—	○
660	記事	今泉 忠明	2000	平成12	縄文人が連れてきた日本のイヌ	イヌの力	—	—	168- 170	平凡社	—	○
661	記事	小山 宏	2000	平成12	「朝日新聞、絶滅のニホンオオカミに似ている」について一写真から知り得る情報を中心として一	柴犬	—	63	6-7	天然記念物柴犬 研究会	—	○
662	記事	田口 洋美	2000	平成12	現代のマガギ	歴史と民族:神奈川大学日本常民文化研究所論集	—	16	—	平凡社	○	○
663	記事	田中 絢子	2000	平成12	オオカミを考える:関連文献の紹介	文献探索 2000	—	—	351- 356	金沢文圃閣	—	○
664	記事	谷口 研吾	2000	平成12	狂犬病は犬と人の共通の敵	犬の日本史:人間とともに歩んだ一万年の物語物語	—	—	166- 179	PHP研究所	—	○
665	記事	中川 裕	2000	平成12	アイヌ口承文芸テキスト集1:白沢ナベロ述 狼から逃れた娘	千葉大学ユーラシア言語文化論集	—	3	52-66	千葉大学	○	—
666	記事	永戸 豊野	2000	平成12	失われた野生動物 ニホンオオカミ	Newton	20	5	69-76	ニュートンプレス	—	○
667	記事	天然記念物柴犬研 究会	2000	平成12	170万年前の地層から国内最古の「オオカミ」の化石	柴犬	—	58	15	天然記念物柴犬 研究会	—	○
668	記事	畠山 康英	2000	平成12	いつも人のそばにいた「イヌ」の源流を探る	サイアス	—	72	32-37	朝日新聞社	○	○
669	記事	三浦 泰之	2000	平成12	明治初期の地方博覧会と開拓使:開拓使、北海道はどのように「見られていた」のか?	北海道開拓記念館研究紀要	—	28	153- 178	北海道開拓記念 館	○	—
670	記事	村上 健司	2000	平成12	石の動物園:狼【大口真神とよばれた動物】	月刊 歴史と旅	27	8	244- 247	秋田書店	○	○
671	記事	安部 みき子	2001	平成13	ニホンオオカミとモンゴルオオカミの頭骨について	フォレスト・コール	—	8	22-26	日本オオカミ協 会	—	○
672	記事	小山 宏	2001	平成13	朝日新聞、「絶滅のニホンオオカミ、似てる」について	フォレスト・コール	—	8	27-29	日本オオカミ協 会	—	○

資料番号	形態	著者	出版年 (西暦)	出版年 (和暦)	論文名／該当記事名／見出し名	雑誌名 書籍名	巻	号	頁	出版社	エゾ オオカミ	ニホン オオカミ
673	記事	沖野 慎二	2001	平成13	北海道大学農学部博物館のアイヌ民族資料(下)	北海道立アイヌ民族文化研究センター	—	7	1-19	北海道立アイヌ 民族文化研究セ ンター	○	—
674	記事	簾内 敬司	2001	平成13	きみはオオカミを見たか？	図書	—	626	38-41	岩波書店	—	○
675	記事	高橋 正男	2001	平成13	オオカミあれこれ	フォレスト・コール	—	8	36-38	日本オオカミ協 会	—	○
676	記事	中川 裕	2001	平成13	アイヌ口承文芸テキスト集2:白沢ナベ口述 主人を助けられ なかった犬	千葉大学ユーラシア言語文化論集	—	4	77-94	千葉大学	○	—
677	論文	中沢 利明	2001	平成13	武州御嶽講と御師の配札	西郊民俗	—	174	1-11	西郊民俗談話会	—	○
678	記事	中西 進	2001	平成13	日本人の忘れもの<狼>	WEDGE	13	2	78-80	ウエッジ	—	○
679	記事	二戸市史編さん委 員会	2001	平成13	馬産と狼害	二戸市史:第2巻(近世・近代・現代)	—	—	158- 163	二戸市	—	—
680	記事	藤田 一咲	2001	平成13	エゾオオカミ:開拓時代の彼方に消えた ニホンオオカミ:かつて「神」とよばれた	絶滅危惧種を見に行く:滅びゆく日本の動植物たち	—	—	9-11	マガジンハウス	○	○
681	記事	丸山 直樹	2001	平成13	意見:日本の森林生態系保護・林業再生・オオカミの役割: 森林野生動物研究の課題	ワイルドライフ・フォーラム	7	1	1-4	野生生物保護学 会	—	○
682	記事	三浦 泰之	2001	平成13	ウィーン万国博覧会と開拓使・北海道	北海道開拓記念館研究紀要	—	29	177- 205	北海道開拓記念 館	○	—
683	記事	宮本 拓海	2001	平成13	NEWSY ANIMALS 動物事件の読み解き方4:ニホンオオカミ 目撃騒動	Relatio	3	1	88-91	チクサン出版社	—	○
684	論文	宮本 典子	2001	平成13	現存する6体のニホンオオカミの剥製とその頭骨に見られる 形態の研究	和歌山大学教育学部紀要 自然科学	—	51	23-32	和歌山大学教育 学部	—	○
685	書籍	山田 伸一・堀繁 久・水島 未記	2001	平成13	—	豆本30 北海道開拓記念館第130回テーマ展:開拓史 とエゾオオカミ	—	—	—	北海道開拓記念 館	○	—
686	記事	渡辺 裕二	2001	平成13	神林家の伝承—オオカミを祀るお宮(特集 吉野・下北山の 伝承)	民話と文学	—	32	54-58	民話と文学の会	—	○
687	参照	—	2002	平成14	ニホンオオカミ:絶滅した守護神	生物多様性キーワード事典	—	—	14-15	中央法規出版	○	○
688	参照	石井 信夫	2002	平成14	ニホンオオカミ エゾオオカミ	改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物:レッド データブック 1 哺乳類	—	—	23-25	自然環境セン ター	○	○
689	記事	今井 泰男・五味 靖嘉	2002	平成14	対談	柴犬	—	74	19	天然記念物柴犬 研究会	—	○
690	論文	小原 巖	2002	平成14	ライデン国立自然史博物館所蔵のニホンオオカミ及び日本 在来犬標本について	Animate	—	3	17-24	農大動物研究会	—	○

資料番号	形態	著者	出版年(西暦)	出版年(和暦)	論文名/該当記事名/見出し名	雑誌名 書籍名	巻	号	頁	出版社	エゾ オオカミ	ニホン オオカミ
691	記事	梶島 孝雄	2002	平成14	オオカミ(やまいぬ)	資料 日本動物史	—	—	526-527	八坂書房	—	○
692	記事	神崎 伸夫	2002	平成14	特集:第3回アンケート調査結果:オオカミに対する日本人の意識	フォレスト・コール	—	9	2-6	日本オオカミ協会	—	○
693	記事	小泉 明裕	2002	平成14	特別陳列:長谷川コレクションIV 日本最古のオオカミ類化石	柴犬	—	69	20	天然記念物柴犬研究会	—	○
694	論文	小林 正・森 俊哉	2002	平成14	イエローストーン国立公園における自然環境の保護・保全について:絶滅したオオカミ復活への試み	研究報告	—	8	187-202	三重県環境保全事業団	—	○
695	記事	高橋 正男	2002	平成14	狼は人を襲うか	動物文学	—	273	—	動物文学会	—	○
696	記事	中村 一恵	2002	平成14	オオカミ類の進化史を追う	柴犬	—	72	2-6	天然記念物柴犬研究会	—	○
697	記事	南部 成美	2002	平成14	ディズニーランドとオオカミ(今、「日本の自然」に必要なもの):日本でオオカミの再導入を考える意義	フォレスト・コール	—	9	7-9	日本オオカミ協会	—	○
698	論文	福江 佑子・金子 弥生・佐伯 緑ほか	2002	平成14	首都圏近郊都市住民が共存を望む野生哺乳類とその要因	野生生物保護	7	2	83-97	野生生物保護	—	○
699	論文	山田 伸一	2002	平成14	オオカミ・ヒグマ・カラス:明治期北海道における「有害鳥獣獲殺手当」をめぐる	北海道開拓記念館調査報告	—	41	67-92	北海道開拓記念館	○	—
700	記事	遠藤 秀紀	2003	平成15	ウチの目玉収蔵品 紹介:国立科学博物館Collection20<<ニホンオオカミ Canis hodophilax 一絶滅集団の姿を伝えて>>	生物の科学:遺伝	57	2	1	裳華房	—	○
701	論文	遠藤 秀紀・酒井 健夫・林 良博ほか	2003	平成15	イヌ属3種の頭蓋と毛皮におけるサイズの関係	Japanese journal of zoo and wildlife medicine	8	1	75-78	日本野生動物医学学会	—	○
702	記事	川合 禎次	2003	平成15	日本の狼	昆虫少年の博物誌:水棲昆虫とともに	—	—	48-72	東海大学出版	○	○
703	論文	小泉 明裕	2003	平成15	東京都昭島市多摩川の鮮新:更新統から産出した日本初記録の純肉食性オオカミ化石Canis (Xenocyon) falconeri	第四紀研究	42	2	105-111	日本第四紀学会	—	○
704	記事	高橋 正男	2003	平成15	狼は人を襲うか	柴犬	—	75	4-8	天然記念物柴犬研究会	—	○
705	記事	南部 成美	2003	平成15	日本におけるオオカミ及び自然生態系の復元についての人々の意識	フォレスト・コール	—	10	21-22	日本オオカミ協会	—	○
706	論文	菱川 晶子	2003	平成15	オオカミ:名称についての一考察	伝承文化研究	—	2	18-42	國學院大學伝承文化学会	—	○
707	論文	菱川 晶子	2003	平成15	図像化された動物:オオカミの表象と形態認識	国立歴史民俗博物館研究報告	—	105	267-294	国立歴史民俗博物館	—	○

資料番号	形態	著者	出版年 (西暦)	出版年 (和暦)	論文名／該当記事名／見出し名	雑誌名 書籍名	巻	号	頁	出版社	エゾ オオカミ	ニホン オオカミ
708	記事	『フォレスト・コール』編集部	2003	平成15	フォレストコールのバックナンバーを読む:オオカミ再導入入門	フォレスト・コール	—	10	23-31	日本オオカミ協会	—	○
709	記事	湯本 豪一	2003	平成15	蝦夷の狼	妖怪百物語絵巻	—	—	—	国書刊行会	○	○
710	論文	吉行 瑞子・今泉 古典	2003	平成15	福井城内で射殺されたニホンオオカミ	Animate	—	4	69-72	農大動物研究会	—	○
711	論文	遠藤 秀紀・酒井 健夫・伊藤 琢也ほか	2004	平成16	山梨県の民家で発見されたニホンオオカミ頭蓋の骨学のおよび画像解析学的検討	Japanese journal of zoo and wildlife medicine	9	2	109-114	日本野生動物医学学会	—	○
712	記事	大石 雅之	2004	平成16	学芸員室より ニホンオオカミの謎にふれる:企画展「消えゆく岩手の自然—生き物たちのメッセージ」によせて	岩手県立博物館だより	—	103	3	岩手県立博物館	—	○
713	記事	木村 吉幸	2004	平成16	オオカミとカワウソの剥製標本	Animate	—	5	17-18	農大動物研究会	—	○
714	書籍	栗栖 健	2004	平成16	—	日本人とオオカミ:世界でも特異なその関係と歴史	—	—	—	雄山閣	○	○
715	記事	五味 靖嘉	2004	平成16	犬とニホンオオカミの臍(所謂、パッド)について	柴犬	—	80	12-14	天然記念物柴犬研究会	—	○
716	記事	佐々木 徳夫	2004	平成16	—	狼の眉毛:陸前・陸中の昔話	—	—	—	本の森	—	○
717	記事	簾内 敬司	2004	平成16	—	獅子ヶ森に降る雨	—	—	—	平凡社	○	○
718	論文	中村 一恵	2004	平成16	ニホンオオカミの頭骨記録	神奈川県立博物館研究報告 自然科学	—	33	91-96	神奈川県立生命の星・地球博物館	—	○
719	記事	中村 一恵	2004	平成16	ニホンオオカミ(ヤマイヌ)の学名とその由来	柴犬	—	83	17	天然記念物柴犬研究会	—	○
720	記事	中村 一恵	2004	平成16	Howling:第2回 犬落とし	柴犬	—	84	17	天然記念物柴犬研究会	—	○
721	記事	南部 成美・若林 史子	2004	平成16	自由集会報告 野生生物保護学会第8回大会 自由集会報告「オオカミ日本復活計画」	ワイルドライフ・フォーラム	98	1-2	45-48	野生生物保護学会	—	○
722	記事	原 亨	2004	平成16	(紹介)ウルフ・ネットワーク・ジャパン(Wolf Network Japan)	柴犬	—	83	4-5	天然記念物柴犬研究会	—	○
723	記事	松谷 みよ子	2004	平成16	狼・山犬考	現代民話考10 狼・山犬 猫	—	—	18-209	筑摩書房	—	○
724	記事	吉家 世洋・丸山 直樹	2004	平成16	—	日本の森にオオカミの群れを放て	—	—	—	ビイグ・ネット・プレス	○	○
725	書籍	野外調査研究所	2004	平成16	—	狼:伝承と科学	—	—	—	—	—	○

資料 番号	形態	著者	出版年 (西暦)	出版年 (和暦)	論文名／該当記事名／見出し名	雑誌名 書籍名	巻	号	頁	出版社	エゾ オオカミ	ニホン オオカミ
726	記事	相見 満	2005	平成17	ニホンオオカミはなぜ消えたのか	日本の動物はいつどこから来たのか	—	—	87-89	岩波書店	○	○
727	記事	新家 猷佑	2005	平成17	絶滅せし狼、暴れ候	狼、暴れ候：日記に見る尾張藩事件簿	—	—	10-21	新風社	—	○
728	記事	池内 紀	2005	平成17	オオカミ	森の紳士録：ぼくの出会った生き物たち	—	—	198- 206	岩波書店	—	○
729	記事	池内 紀	2005	平成17	森の文化人 オオカミ	グリーン・パワー	—	316	16-18	森林文化協会	—	○
730	論文	石城 謙吉	2005	平成17	「100平方メートル運動の森・トラスト」と絶滅種の復元	知床博物館研究報告	—	26	25-27	知床博物館	○	—
731	論文	石城 謙吉・中川 元	2005	平成17	肉食獣再導入問題をめぐって	知床博物館研究報告	—	26	29-36	知床博物館	○	—
732	記事	上野 一夫	2005	平成17	熊野の日本狼：世界遺産の森・大峰奥駈道を巡る四季	フォレスト・コール	—	11	12-23	日本オオカミ協会	—	○
733	記事	遠藤 秀紀	2005	平成17	絶滅動物の履歴	パンダの死体はよみがえる	—	—	171- 184	ちくま新書	—	○
734	論文	大島 建彦	2005	平成17	岩蔵のオオカミ：東京都青梅市小曾木五丁目	西郊民俗	—	193	10-14	西郊民俗談話会	—	○
735	論文	加藤 峰夫	2005	平成17	絶滅種の人為的導入に関する法制度および社会的側面の 課題：オオカミとカワウソを例として	知床博物館研究報告	—	26	47-54	知床博物館	○	—
736	論文	亀山 明子・仲村 昇・宇野 裕之ほか	2005	平成17	オオカミ(Canis lupus)の保護管理及び再導入事例について	知床博物館研究報告	—	26	37-46	知床博物館	○	—
737	記事	川村 正一	2005	平成17	エゾオオカミ	アイヌ語の動植物採集	—	—	22-23	文泉堂	○	—
738	記事	茂原 信生・江木 直子	2005	平成17	荒井猫田遺跡出土の中世ニホンオオカミの全身骨格	日本犬の時代的変遷の総括と、日本人の変遷との関係についての研究(文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書)	—	—	68-79	京都大学	—	○
739	論文	志村 真幸	2005	平成17	ニホンオオカミは「いつ」絶滅したのか?—平岩米吉と南方熊 楠	熊楠研究	—	7	42-60	南方熊楠顕彰会	—	○
740	記事	栃原 嗣雄	2005	平成17	お犬さまの神札	秩父の民俗：山里の祭り暮らし	—	—	267- 269	幹書房	—	○
741	記事	長岡 郁生	2005	平成17	ニホンオオカミの謎を考える	柴犬	—	86	17-18	天然記念物柴犬研究会	—	○
742	記事	長岡 郁生	2005	平成17	ニホンオオカミの謎を考える	柴犬	—	87	6-7	天然記念物柴犬研究会	—	○
743	記事	長澤 武	2005	平成17	信仰・まじない・占いと動物たち	動物民俗Ⅰ	—	—	95-166	法政大学出版局	—	○
744	記事	長澤 武	2005	平成17	人間生活に害を加える動物たち	動物民俗Ⅱ	—	—	1-58	法政大学出版局	—	○

資料番号	形態	著者	出版年 (西暦)	出版年 (和暦)	論文名／該当記事名／見出し名	雑誌名 書籍名	巻	号	頁	出版社	エゾ オオカミ	ニホン オオカミ
745	論文	長沢 利明・金井塚 正道	2005	平成17	岩根神社の大口真神信仰:埼玉県秩父郡長瀨町井戸	西郊民俗	—	193	1-9	西郊民俗談話会	—	○
746	論文	中村 一恵	2005	平成17	江戸中期・諸国産物帳に記載されたイヌ属動物の名称	神奈川県立博物館研究報告 自然科学	—	34	69-73	神奈川県立生命の星・地球博物館	—	○
747	記事	中村 一恵	2005	平成17	Howling: 第3回 狼毒殺	柴犬	—	85	16	天然記念物柴犬研究会	○	○
748	記事	中村 一恵	2005	平成17	Howling: 第5回 犬落とし(その2)―クレプトパラサティズム―	柴犬	—	87	4-5	天然記念物柴犬研究会	—	○
749	記事	中村 一恵	2005	平成17	Howling: 第7回 エチオピアオオカミ―分子情報が明らかにしたアフリカの「オオカミ」	柴犬	—	89	18	天然記念物柴犬研究会	—	○
750	記事	中村 一恵	2005	平成17	Howling: 第6回 狼の黒焼	柴犬	—	88	12-13	天然記念物柴犬研究会	—	○
751	記事	南部 成美	2005	平成17	「知床にオオカミが戻れば観光船が儲かる」って本当?	フォレスト・コール	—	11	26-27	日本オオカミ協会	○	—
752	記事	南部 成美	2005	平成17	動物園来園者のオオカミに対する言動	フォレスト・コール	—	11	40-44	日本オオカミ協会	—	○
753	記事	南部 成美	2005	平成17	特集 オオカミに対する日本人の意識:第4回アンケート調査結果	フォレスト・コール	—	11	2-5	日本オオカミ協会	—	○
754	記事	菱川 晶子	2005	平成17	「熊野の本地」に現れた動物	伝承文学研究の方法	—	—	314-331	岩田書院	—	○
755	記事	姫原 江利子	2005	平成17	—	フォレスト・コール	—	11	9-11	日本オオカミ協会	—	○
756	記事	丸山 直樹・吉田 光宏	2005	平成17	獣害防止へオオカミ再導入急げ:日本オオカミ協会 丸山直樹会長(東京農工大学農学部教授)に聞く	農林経済	—	9681	2-6	時事通信社	—	○
757	記事	八木 博	2005	平成17	奈良県上山北山村西原、天ヶ瀬にて捕獲されたニホンオオカミの上顎骨	CANIS	—	12	1-6	秩父宮記念三峰山博物館	—	○
758	記事	青柳 信克	2006	平成18	オオカミ	みゆじあむ MUSEUM	—	23	3	旭川市博物館	○	—
759	記事	本川 雅治・下稲葉 さやか・鈴木 聡	2006	平成18	日本産哺乳類の最近の分類体系:阿部(2005)とWilson and Reeder(2005)の比較	哺乳類科学	46	2	181-191	日本哺乳類学会	○	○
760	記事	池田 澄子	2006	平成18	あさがや草紙10:狼は松茸に痺れたか	俳句	55	11	26-29	角川学芸出版	—	○
761	記事	片野 ゆか	2006	平成18	狼との対話	愛犬王 平岩米吉	—	—	241-278	小学館	—	○
762	記事	加藤 由香・山中 正実	2006	平成18	合同シンポジウム専門家会議コメント要約	世界自然遺産 知床とイエローストーン:野生をめぐる二つの国立公園の物語	—	—	160-164	知床財団	○	—

資料番号	形態	著者	出版年 (西暦)	出版年 (和暦)	論文名/該当記事名/見出し名	雑誌名 書籍名	巻	号	頁	出版社	エゾ オオカミ	ニホン オオカミ
763	記事	亀山 明子	2006	平成18	北海道におけるエゾオオカミ絶滅の歴史と知床国立公園におけるオオカミ再導入の可能性について	世界自然遺産 知床とイエローストーン:野生をめぐる二つの国立公園の物語	—	—	87-89	知床財団	○	—
764	書籍	工藤 利栄	2006	平成18	—	狼が遺したもの:北東北の民俗を中心に	—	—	—	北方新社	○	○
765	記事	黒岩 聡奈	2006	平成18	明治初期における博覧会から見たアイヌの生活	アジア文化研究	—	6	39-66	東北学院大学大学院文学研究科 アジア文化史専攻	○	—
766	記事	橘 宏	2006	平成18	レポート:剥製標本のエゾオオカミを尋ねて	柴犬	—	94	13-15	天然記念物柴犬研究会	○	—
767	記事	中川 裕	2006	平成18	アイヌ口承文芸テキスト集7 白沢ナベ口述 狼が人間の母親に虐待された	千葉大学ユーラシア言語文化論集	—	9	219-256	千葉大学	○	—
768	記事	中村 一恵	2006	平成18	Howling:第8回 送りイヌ—導犬説一	柴犬	—	90	2-4	天然記念物柴犬研究会	—	○
769	記事	中村 一恵	2006	平成18	Howling:第9回 「驚家口オオカミ」はなぜ重要か	柴犬	—	91	2-3	天然記念物柴犬研究会	—	○
770	記事	中村 禎里	2006	平成18	狼	精選 日本民俗辞典	—	—	91-92	吉川弘文館	—	○
771	記事	McCullough, D.R (マッカロー、デール・R)	2006	平成18	知床国立公園における野生動物管理	世界自然遺産 知床とイエローストーン:野生をめぐる二つの国立公園の物語	—	—	165-174	知床財団	○	—
772	記事	山中 正実・梶 光一	2006	平成18	イエローストーンからの提言を受けて	世界自然遺産 知床とイエローストーン:野生をめぐる二つの国立公園の物語	—	—	175-182	知床財団	○	—
773	書籍	山梨県立博物館	2006	平成18	—	かいじあむ通信「交い」	—	4	—	山梨県立博物館	—	○
774	論文	米田 政明	2006	平成18	知床に再導入したオオカミを管理できるか	知床博物館研究報告	27	27	1-8	知床博物館	○	—
775	記事	石黒 直隆	2007	平成19	古代DNA分析からみた日本在来犬の系統とニホンオオカミとの関係	生物の科学:遺伝	61	4	70-76	北隆館	○	○
776	記事	石黒 直隆	2007	平成19	イヌの分子系統進化	生物科学	58	3	140-147	日本生物科学者協会	—	○
777	記事	上野 一夫	2007	平成19	熊野の日本狼と黒船	フォレスト・コール	—	12	46-50	日本オオカミ協会	—	○
778	記事	梶 光一	2007	平成19	知床世界自然遺産地域のエゾシカ保護管理計画:管理すべきか、遷移に委ねるべきか	生物の科学 遺伝	61	5	18-21	北隆館	○	○
779	記事	桑原 康生	2007	平成19	人を襲わないオオカミ、襲うオオカミ	オオカミを放つ:森・動物・人のよい関係を求めて	—	—	163-183	白水社	○	○

資料番号	形態	著者	出版年(西暦)	出版年(和暦)	論文名/該当記事名/見出し名	雑誌名 書籍名	巻	号	頁	出版社	エゾ オオカミ	ニホン オオカミ
780	記事	桜井 良	2007	平成19	環境主義の発展の指標としてのオオカミ復活運動:米欧日におけるモデル比較	フォレスト・コール	—	12	11-33	日本オオカミ協会	—	○
781	記事	茂原 信生	2007	平成19	形から探る——イヌ	生物科学	58	3	130-139	日本生物科学者協会	—	○
782	記事	田名部 雄一	2007	平成19	日本犬を含む東アジア犬の形態の比較	人と犬のきずな:遺伝子からそのルーツを探る	—	—	77-79	裳華房	—	○
783	記事	中村 一恵	2007	平成19	オオカミは大きくもなり、小さくもなる	柴犬	—	92	1-6	天然記念物柴犬研究会	—	○
784	記事	須田 知樹	2007	平成19	崩壊する生態系—オオカミ絶滅がもたらしたこと	オオカミを放つ:森・動物・人のよい関係を求めて	—	—	22-51	白水社	○	○
785	記事	中沢 智恵子	2007	平成19	オオカミは日本に帰ってきたら何を食べるのか	オオカミを放つ:森・動物・人のよい関係を求めて	—	—	94-106	白水社	○	○
786	論文	中村 生雄	2007	平成19	人と自然の対抗と親和について—“オオカミ問題”を一つの手がかりとして—	東アジアにおける人と自然の対抗/親和の諸関係に関する宗教民俗学的研究(平成16年度~18年度科学研究費補助金〔基盤研究(B)〕研究成果報告書)	—	—	183-197	—	○	○
787	記事	南部 成美	2007	平成19	第5回アンケート調査結果:オオカミに対する日本人の意識	フォレスト・コール	—	12	17-21	日本オオカミ協会	—	○
788	記事	南部 成美	2007	平成19	日本人のオオカミ観	オオカミを放つ:森・動物・人のよい関係を求めて	—	—	152-162	白水社	○	○
789	記事	西川 真理	2007	平成19	オオカミは何を食べているのか	オオカミを放つ:森・動物・人のよい関係を求めて	—	—	74-93	白水社	—	○
790	書籍	西田 智	2007	平成19	—	ニホンオオカミは生きている:九州、祖母山系に狼を追う	—	—	—	二見書房	○	○
791	論文	菱川 晶子	2007	平成19	『狼報恩譚』:解釈と発展	一般教育論集	—	33	90-102	愛知大学一般教育論集編集委員会	—	○
792	論文	菱川 晶子	2007	平成19	東北地方における狼の民俗儀礼:岩手県上閉伊郡大槌町の「オイノ祭り」を中心に	国立歴史民俗博物館研究報告	—	136	159-185	詳文社	—	○
793	記事	丸山 直樹	2007	平成19	復活オオカミによって家畜の被害は起きるのか?:北海道の牧場訪問から	フォレスト・コール	—	12	2-16	日本オオカミ協会	○	○
794	記事	丸山 直樹・須田 知樹・小金澤 正昭	2007	平成19	日本におけるオオカミ絶滅100年を迎えて	オオカミを放つ:森・動物・人のよい関係を求めて	—	—	15-21	白水社	○	○
795	論文	村上一馬	2007	平成19	弘前藩における狼と熊による被害	東アジアのなかの日本文化に関する総合的な研究:平成14年度~平成18年度私立大学学術研究高度化推進事業「オープン・リサーチ・センター整備事業」研究成果報告書1	1	—	119-128	東北芸術工科大学東北文化研究センター	—	—
796	書籍	山梨県立博物館	2007	平成19	—	(図録)オオカミがいた山:消えたニホンオオカミの謎に迫る	—	—	—	山梨県立博物館	—	○

資料番号	形態	著者	出版年 (西暦)	出版年 (和暦)	論文名／該当記事名／見出し名	雑誌名 書籍名	巻	号	頁	出版社	エゾ オオカミ	ニホン オオカミ
797	記事	井上 剛	2008	平成20	JWA自由集会「オオカミを放つ」報告	フォレスト・コール	—	13	7-17	日本オオカミ協会	—	○
798	記事	井上 剛・須田 知樹・角田 裕志ほか	2008	平成20	2007年度大会自由集会記録:「オオカミを放つ」日本オオカミ協会 (JWA) 自由集会	哺乳類科学	48	1	179-184	日本哺乳類学会	○	○
799	論文	植月 学	2008	平成20	甲州周辺における狼信仰: 笛吹市御坂町に伝わるニホンオオカミ頭骨をめぐって	山梨県立博物館研究紀要	—	2	11-26	山梨県立博物館	—	○
800	論文	岡 恵介	2008	平成20	明治・大正期の岩手県周辺における大型哺乳類の狩猟: オオカミ・シカ・イノシシ・サル狼の地域性	総合政策論集: 東北文化学園大学総合政策学部紀要	7	1	33-47	東北文化学園大学	—	○
801	記事	岡 恵介	2008	平成20	重層的な森林の利用と山村の暮らし	視えざる森の暮らし: 北上山地・村の民族生態史	—	—	78	大河書房	—	○
802	論文	岡田 充博	2008	平成20	日本昔話「狼のまつ毛」の原話: 『逸史』・『三国遺事』・インドの伝承をめぐって	新しい漢字漢文教育	—	46	16-27	全国漢文教育学会	—	○
803	記事	加藤 克	2008	平成20	北海道大学植物園所蔵アイヌ民族資料について: 歴史的背景を中心に	北大植物園研究紀要	—	8	35-91	北海道大学	○	○
804	記事	菊池 勇夫	2008	平成20	研究ノート: 丸小屋と移動する人々	非文字資料から人類文化へ — 研究参画者論文集 —	—	—	91-100	神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議	○	—
805	記事	JWA事務局	2008	平成20	オオカミ復活運動第三段階: ロビー活動	フォレスト・コール	—	13	25-27	日本オオカミ協会	—	○
806	記事	須田 和樹	2008	平成20	オオカミ復活という自然保護	学会会報	—	4	75-80	学会	○	○
807	記事	田辺 安一	2008	平成20	—	お雇い農業教師 エドウィン・ダン: ヒツジとエゾオオカミ	—	—	—	北海道出版企画センター	○	—
808	記事	俵 浩三	2008	平成20	オオカミを殺し尽くすため	北海道・緑の環境史	—	—	71-75	北海道大学出版会	○	—
809	記事	鶴見 太郎	2008	平成20	今西錦司の眼	柳田国男入門	—	—	25-31	角川学芸出版	—	○
810	論文	中沢 智恵子	2008	平成20	明治時代東北地方におけるニホンオオカミの駆除	フォレスト・コール	—	13	18-21	日本オオカミ協会	○	○
811	論文	中村 一恵	2008	平成20	日本産オオカミとその近縁亜種の下顎第1大白歯・歯冠長比較	神奈川県立博物館研究報告	—	37	47-54	神奈川県立生命の星・地球博物館	○	○
812	論文	西村 敏也	2008	平成20	武州三峰山と狼信仰: 産見舞い・オタキアゲの儀礼の考察を中心に	武蔵大学総合研究所紀要	—	18	355-370	武蔵大学総合研究所	—	○
813	記事	野本 寛一	2008	平成20	狼	生態と民俗: 人と動植物の相渉譜	—	—	189-211	講談社	—	○

資料番号	形態	著者	出版年 (西暦)	出版年 (和暦)	論文名／該当記事名／見出し名	雑誌名 書籍名	巻	号	頁	出版社	エゾ オオカミ	ニホン オオカミ
814	論文	菱川 晶子	2008	平成20	『狼の眉毛』:授けられる富	一般教育論集	—	34	172-180	愛知大学一般教育論集編集委員会	—	○
815	論文	菱川 晶子	2008	平成20	狼の産見舞い:群馬県六合村の十二様信仰をめぐる	一般教育論集	—	35	76-98	愛知大学一般教育論集編集委員会	—	○
816	記事	藤井 忠志	2008	平成20	ニホンオオカミ雑稿	柴犬	—	100	—	天然記念物柴犬研究会	—	○
817	記事	丸山 直樹	2008	平成20	道東、エゾシカの異常繁殖に悲鳴	フォレスト・コール	—	13	2-3	日本オオカミ協会	○	—
818	記事	飯村 武	2009	平成21	消えた生き物復元のために:かながわのオオカミとトキ	フォレスト・コール	—	15	—	日本オオカミ協会	—	○
819	論文	池田 透	2009	平成21	生物の再導入・移植問題を考える	北海道の自然	—	47	82-85	北海道自然保護協会	—	○
820	記事	井上 剛	2009	平成21	日本哺乳類学会2008年度大会参加報告	フォレスト・コール	—	15	26-27	日本オオカミ協会	—	○
821	記事	小金澤 正昭・須田和樹	2009	平成21	オオカミ復活の道を探る:Yes、No、それぞれの立場から(第14回長崎・佐世保大会テーマセッション報告 5)	ワイルドライフ・フォーラム	14	1	14-15	野生生物保護学会	—	○
822	記事	須田 知樹	2009	平成21	オオカミ復活という自然保護	フォレスト・コール	—	14	10-12	日本オオカミ協会	○	○
823	記事	平岩 由伎子	2009	平成21	狼導入のあやまり	動物文学	75	1 (286)	33-34	動物文学会	○	○
824	記事	丸山 直樹	2009	平成21	島とオオカミ:「島でオオカミは生きられるの?」	フォレスト・コール	—	14	2-7	日本オオカミ協会	—	○
825	記事	丸山 直樹	2009	平成21	続・島とオオカミ:オオカミ不在で島の生態系は守れるか?	フォレスト・コール	—	15	14-15	日本オオカミ協会	—	○
826	記事	—	2009	平成21	オオカミ(山狗信仰)	特別展 多摩のどうぶつ物語	—	—	20	パルテノン多摩	—	○
827	記事	—	2009	平成21	オオカミのはなし…狼谷戸	特別展 多摩のどうぶつ物語	—	—	24	パルテノン多摩	—	○
828	論文	Ishiguro Naotaka・Inoshima Yasuo・Shigehara Nobuo	2009	平成21	Mitochondrial DNA Analysis of the Japanese Wolf (Canis lupus hodophilax Temminck, 1839) and Comparison with Representative Wolf and Domestic Dog Haplotypes	Zoological Society of Japan	—	26	765-770	Zoological Society of Japan	—	○
829	書籍	Walker, B. L (ウォーカー、ブレット・L)	2009	平成21	—	絶滅した日本のオオカミ:その生態と歴史学	—	—	—	北海道大学図書刊行会	○	○

資料番号	形態	著者	出版年 (西暦)	出版年 (和暦)	論文名／該当記事名／見出し名	雑誌名 書籍名	巻	号	頁	出版社	エゾ オオカミ	ニホン オオカミ
830	論文	植月 学	2009	平成21	王勢籠権現の狼信仰	山梨県立博物館研究紀要	—	3	100-95	山梨県立博物館	—	○
831	参照	門崎 充昭	2009	平成21	オオカミ Canis lupus	野生動物痕跡学辞典	—	—	392-393	北海道出版企画センター	○	○
832	記事	角田 裕志	2009	平成21	オオカミの進化と世界分布	フォレスト・コール	—	14	22-27	日本オオカミ協会	○	○
833	記事	小山 慶太	2009	平成21	狼の話英知	犬と人のいる文学誌	—	—	83-116	中央公論社	—	○
834	記事	佐々木 喜善	2009	平成21	遠野郷の狼を語る	遠野奇談	—	—	48-73	河出書房新社	—	○
835	記事	志賀 雪湖	2009	平成21	コラム:アイヌ犬の話	世界の犬の民話	—	—	50-51	三弥井書店	○	○
836	記事	清水 裕介	2009	平成21	[資料紹介]「明治十七年 御猟場日記簿」	特別展 多摩のどうぶつ物語	—	—	66-74	パルテノン多摩	—	○
837	記事	白水 智	2009	平成21	野生と中世	動物と中世: 獲る・使う・食らう	—	—	49-72	高志書院	—	○
838	記事	末岡 外美夫	2009	平成21	ホロケウ・ノチウ	人間達のみた星座と伝承	—	—	280-292	末岡由喜江	○	○
839	記事	中村 生雄	2009	平成21	コラム ヤマイヌ:小箱に込められた御神体	人と動物の日本史(4): 信仰の中の動物たち	—	—	68-71	吉川弘文館	—	○
840	論文	西村 敏也	2009	平成21	秩父武甲山に関する一考察:狼信仰とヤマトタケルの由緒	武蔵大学総合研究所紀要	—	19	224-207	武蔵大学総合研究所紀要	—	○
841	書籍	菱川 晶子	2009	平成21	—	狼の民俗学: 人獣交渉史の研究	—	—	—	東京大学出版	—	○
842	記事	菱川 晶子	2009	平成21	光と闇のあわいに一狼の民俗こぼればなし	UP	38	8	8-12	東京大学出版会	—	○
843	記事	藤井 忠志	2009	平成21	東京大学所蔵のニホンオオカミ剥製標本	Jomon Shiba	—	1	8-9	縄文柴研究センター	○	○
844	記事	北海道観光振興機構 アイヌ文化部会 ワーキンググループ	2009	平成21	エゾオオカミ:ホロケウ、ホロケウカムイ	ガイド教本・アイヌ民族編<動物編>	—	—	6-7	北海道観光振興機構	○	○
845	記事	山崎 祐子	2009	平成21	境界に住む動物たち:多摩市の世間話から	特別展 多摩のどうぶつ物語	—	—	61-65	パルテノン多摩	—	○
846	記事	和田 一雄	2009	平成21	近世の北奥地域のイノシシとオオカミ	フォレスト・コール	—	14	13-15	日本オオカミ協会	—	○

資料番号	形態	著者	出版年 (西暦)	出版年 (和暦)	論文名／該当記事名／見出し名	雑誌名 書籍名	巻	号	頁	出版社	エゾ オオカミ	ニホン オオカミ
847	論文	Ishiguro Naotaka・ Inoshima Yasuo・ Shigehara Nobuo <i>et.al</i>	2010	平成22	Osteological and Genetic Analysis of the Extinct Ezo Wolf ( <i>Canis lupus hattai</i> ) from Hokkaido Island, Japan	Zoological Society of Japan	—	27	320- 324	Zoological Society of Japan	○	○
848	記事	煎本 孝	2010	平成22	熊祭りの地域的差異	アイヌの熊祭り	—	—	83-157	雄山閣	○	—
849	記事	小林 茂	2010	平成22	人類史とオオカミ、狼習俗と信仰についての断章:直良信夫 先生とその仕事を偲んで	秩父 山の民俗考古	—	—	255- 486	言叢社	—	○
850	記事	小宮 輝之	2010	平成22	ニホンオオカミの収集	物語 上野動物園の歴史	—	—	10-13	中央公論新社	—	○
851	記事	JWA	2010	平成22	「オオカミが怖い」病とオオカミによる人身被害の対策は?	フォレスト・コール	—	16	46-49	日本オオカミ協 会	—	○
852	記事	関 武志	2010	平成22	生物多様性の保全と持続可能な利用の取組	論及 Journal of the Research Bureau of the House of Representatives	—	7	236- 249	衆議院調査局	—	○
853	論文	中沢 智恵子	2010	平成22	明治時代東北地方におけるニホンオオカミの駆除	野生生物保護	12	2	19-38	野生生物保護学 会	○	○
854	記事	中村 生雄	2010	平成22	オオカミをとおして見る人と自然	日本人の宗教と動物観:殺生と肉食	—	—	101- 141	吉川弘文館	○	○
855	論文	西村 敏也	2010	平成22	狼信仰に関する一試論:狼信仰神社とその由緒	武蔵大学人文学会	41	2	181- 200	武蔵大学人文学 会	—	○
856	論文	西村 敏也	2010	平成22	秩父若御子神社の狼信仰に関する一考察	武蔵大学総合研究所紀要	—	20	234- 221	武蔵大学総合研 究所紀要	—	○
857	論文	西村 敏也	2010	平成22	秩父地方に展開する狼信仰神社とその由緒	動物観研究	—	15	9-18	ヒトと動物の関係 学会	—	○
858	記事	野本 寛一	2010	平成22	生き物の多様性と民俗思想	BIOSTORY	—	13	44-49	誠文堂	—	○
859	記事	野本 寛一	2010	平成22	鳥獣害をめぐる民俗構造	鳥獣被害:〈むらの文化〉からのアプローチ	—	—	16-43	農山漁村文化協 会	—	○
860	論文	福本 俊	2010	平成22	Wolfologyに関する授業研究:受講生は先入観を如何に変え て行ったか	日本女子大学紀要. 家政学部	—	57	41-51	日本女子大学	—	○
861	論文	福本 俊	2010	平成22	Wolfologyに関する授業研究2:受講生は先入観を如何に変 えて行ったか	日本女子大学大学院紀要:家政学研究科・人間生活 学研究科	—	16	165- 176	日本女子大学	—	○
862	記事	藤田 郁男	2010	平成22	体験的学習を通して学んだ共生観	共生科学	—	1	42-54	日本共生科学会	—	○
863	記事	三浦 佑之・赤坂 憲雄	2010	平成22	鉄とメスオオカミの一騎打ち	遠野物語へようこそ	—	—	77-90	筑摩書房	—	○
864	書籍	三木 一彦	2010	平成22	—	三峰信仰の展開と地域的基盤	—	—	—	古今書院	—	—

資料番号	形態	著者	出版年(西暦)	出版年(和暦)	論文名/該当記事名/見出し名	雑誌名 書籍名	巻	号	頁	出版社	エゾ オオカミ	ニホン オオカミ
865	記事	井上 剛	2011	平成23	2010年度 野生生物保護学会自由集会報告・日本哺乳類学会合同大会自由集会記録	フォレスト・コール	—	17	30-46	日本オオカミ協会	—	○
866	記事	井上 剛	2011	平成23	第16回野生生物保護学会・日本哺乳類学会2010年度合同大会 自由集会報告:管理主義から生態系主義へ～カワウソ・オオカミの復活	ワイルドライフ・フォーラム	15	2	24-25	野生生物保護学会	—	○
867	記事	井上 剛	2011	平成23	オオカミ絶滅に関する研究者の変(偏)な見解	フォレスト・コール	17	17	47	日本オオカミ協会	—	○
868	記事	井上 剛・南部 成美・朝倉 裕ほか	2011	平成23	2010年度大会自由集会記録 管理主義から生態系主義へ:カワウソ・オオカミの復活	哺乳類科学	51	1	147-151	哺乳類科学編集部	—	○
869	記事	井上 守	2011	平成23	地方議会ではオオカミ再導入をめぐるどう議論されているか?	フォレスト・コール	—	17	29	日本オオカミ協会	—	○
870	書籍	小倉 美恵子	2011	平成23	—	オオカミの護符	—	—	—	新潮社	—	○
871	記事	菊池 勇夫	2011	平成23	盛岡藩牧の維持と狼駆除	山と森の環境史(シリーズ日本列島の三万五千年一人と自然の環境史)	5	—	141-160	文一総合出版	—	○
872	論文	小山 宏・茂原 信生・石黒 直隆ほか	2011	平成23	群馬県で発見されたニホンオオカミ遺骸	群馬県立自然史博物館研究報告	—	15	167-170	群馬県立自然史博物館	—	○
873	記事	JWA	2011	平成23	オオカミ復活を急げ!	フォレスト・コール	—	17	3-9	日本オオカミ協会	—	○
874	論文	柴村 紀代	2011	平成23	赤羽末吉「けちんぼおおかみ」論:アイヌ民話を絵本にすること	藤女子大学紀要,第2部	—	48	177-182	藤女子大学	○	—
875	記事	新津 健	2011	平成23	狼札に託した願い	猪の文化史 歴史編:文献などからたどる猪と人	—	—	88-92	雄山閣	—	○
876	論文	西村 敏也	2011	平成23	埼玉県秩父市贅川猪狩神社の狼信仰に関する一考察	研究紀要:東京成徳大学人文学部・応用心理学部	—	18	162-153	東京成徳大学人文学部・応用心理学部	—	○
877	論文	西村 敏也	2011	平成23	秩父宝登山の狼信仰:オタキアゲと七日会の考察を通して	日本山岳文化学会論集	—	9	3-10	日本山岳文化学会論集	—	○
878	記事	新田 由美子	2011	平成23	オオカミにかかわる新たな戦略、『絶滅のニホンオオカミ復活へ』について	フォレスト・コール	—	17	56-62	日本オオカミ協会	—	○
879	論文	福本 俊	2011	平成23	Wolfologyに関する授業研究3:受講生は先入観を如何に変えて行ったか	日本女子大学紀要:家政学部	—	58	31-39	日本女子大学	—	○
880	論文	福本 俊	2011	平成23	Wolfologyに関する授業研究4:受講生は先入観を如何に変えて行ったか	日本女子大学紀要:家政学研究科・人間生活学研究科	—	17	137-144	日本女子大学	—	○
881	記事	丸山 直樹	2011	平成23	狼信仰とオオカミ復活との関係は?	フォレスト・コール	—	17	50-55	日本オオカミ協会	○	○

資料 番号	形態	著者	出版年 (西暦)	出版年 (和暦)	論文名／該当記事名／見出し名	雑誌名 書籍名	巻	号	頁	出版社	エゾ オオカミ	ニホン オオカミ
882	記事	三浦 佑之	2011	平成23	オオカミをめぐる断章 (小特集 日本文化のなかの生と死— 中村生雄の仕事)	季刊 東北学	26	—	162- 165	東北芸術工科大学 東北文化研究 センター	—	○
883	記事	森永 智子	2011	平成23	オオカミ復活に向けて初の狼煙!	フォレスト・コール	—	17	76-78	日本オオカミ協 会	—	○
884	記事	三井 敏朗	2011	平成23	窓からオオカミを見る—ローラ・インガルス・ワイルダーの自然 観	相模女子大学紀要	75	—	1-9	相模女子大学	—	○
885	論文	山田 伸一	2011	平成23	オオカミ・ヒグマ・カラスに関する「有害鳥獣獲殺手当」	近代北海道とアイヌ民族:狩猟規制と土地問題	—	—	115- 160	北海道大学出版 会	○	—
886	記事	山野井 英俊	2011	平成23	東日本大震災から考える復興とオオカミ復活への期待	フォレスト・コール	—	17	70-72	日本オオカミ協 会	—	○
887	記事	湯本 貴和	2011	平成23	日本列島の獣と人間の歴史	生物多様性 どう生かすか:保全・利用・分配を考える	—	—	109- 119	昭和堂	—	○
888	論文	石黒 直隆	2012	平成24	絶滅した日本のオオカミの遺伝的系統	日本獣医師会雑誌	65	3	225- 231	日本獣医師会	○	○
889	論文	石黒 直隆	2012	平成24	動物遺存体の古DNA分析:イヌ、オオカミ、家畜ブタのミトコ ンドリアDNA解析を中心に	考古学ジャーナル	—	633	19-23	ニュー・サイエン ス者	—	○
890	記事	磯野 直秀	2012	平成24	—	日本博物誌総合年表	—	—	—	平凡社	—	○
891	記事	碓井 哲也	2012	平成24	月の輪熊とニホンオオカミ	木地師・熊・狼	—	—	93-131	鉦脈社	—	○
892	記事	江副 水城	2012	平成24	オオカミ	獣名源	—	—	47-55	パレード	—	—
893	記事	菊池 勇夫	2012	平成24	—	東北から考える近世史:環境・災害・食料、そして東北 史像	—	—	—	清文堂出版	—	○
894	記事	JWA事務局	2012	平成24	オオカミ復活についての疑問に答える最新Q&A	フォレスト・コール	—	18	4-39	日本オオカミ協 会	—	○
895	記事	成川 順	2012	平成24	仁淀村の巨大狼、その頭骨が語る真実	メーテレ本	—	—	82-83	朝日新聞出版	—	○
896	記事	成川 順	2012	平成24	市井の壮大な試み「平成のもどり狼」	メーテレ本	—	—	84-85	朝日新聞出版	—	○
897	記事	西村 敏也	2012	平成24	釜山神社の狼信仰:オタキアゲの考察を中心に	山岳信仰と村落社会	—	—	175- 202	岩田書院	—	○
898	論文	西村 敏也	2012	平成24	檜原村の狼信仰	武蔵大学総合研究所紀要	—	22	176- 163	武蔵大学総合研 究所	—	—
899	記事	畑中 章宏	2012	平成24	鯨や狼が江戸の世にもてはやされたという事	災害と妖怪:柳田国男と歩く日本の天変地異	—	—	137- 179	亜紀書房	—	○

資料番号	形態	著者	出版年 (西暦)	出版年 (和暦)	論文名／該当記事名／見出し名	雑誌名 書籍名	巻	号	頁	出版社	エゾ オオカミ	ニホン オオカミ
900	記事	菱川 晶子	2012	平成24	狼の落とし物:伝承と記録のはざまに	BIOSTORY	—	17	100- 103	誠文堂	—	○
901	記事	菱川 晶子	2012	平成24	民間伝承にみる日本人と狼信仰	メーテレ本	—	—	80-81	朝日新聞出版	—	○
902	記事	平川 南	2012	平成24	人と自然のかかわりの歴史:『環境の日本史』の視座	環境の日本史1:日本史と環境:人と自然	—	—	26-29	吉川弘文館	—	○
903	記事	丸山 直樹	2012	平成24	獣害から国土を守る!日本の森にオオカミを	メーテレ本	—	—	86-87	朝日新聞出版	—	○
904	記事	三浦 祐之	2012	平成24	オオカミはいかに論じられたか:柳田国男の思考回路	現代思想 一〇月臨時増刊号	40	12	136- 147	青土社	—	○
905	記事	石倉 敏明・田附 勝	2013	平成25	野生めぐり:山と人をつなぐ、オオカミの神	なごみ	34	1	98-105	淡交社	—	○
906	論文	川崎 瑞穂	2013	平成25	秩父市旧荒川村におけるヤマトタケル伝承と狼信仰	風俗史学:日本風俗史学会誌	—	53	45-65	日本風俗史学会	—	—
907	記事	兼平 賢治	2013	平成25	南部馬にみる近世馬の一生	環境の日本史2:人々の営みと近世の自然	2	—	146- 151	吉川弘文館	—	○
908	記事	柄谷 行人	2013	平成25	遊動論:山人と柳田国男(中編)	文学界	67	11	271-289	文藝春秋	—	○
909	記事	近藤 誠司	2013	平成25	狩猟の起源・文化・歴史	野生動物管理のための狩猟学	—	—	1-9	朝倉書店	—	○
910	記事	鳥居 高	2013	平成25	【映像資料プログラム】「オオカミの護符——里びとと山びとのあわいに」	いすみあ:明治大学大学院教養デザイン研究科紀要	—	5	153- 155	明治大学大学院 教養デザイン研 究科	—	○
911	論文	西村 敏也	2013	平成25	狼信仰の諸相:東京都西多摩郡檜原村の事例から	武蔵大学総合研究所紀要	—	23	128- 117	武蔵大学総合研 究所	—	—
912	記事	丸山 直樹	2013	平成25	伝統的信仰とオオカミの復活(上)	Plan B	—	41	10-15	ログス社	○	○
913	記事	丸山 直樹	2013	平成25	伝統的信仰とオオカミの復活(下)	Plan B	—	42	32-37	ログス社	○	○
914	記事	村上一馬	2013	平成25	人馬を喰う狼、狼を獲る人びと:「盛岡藩家老席日記 雑書」から	東北歴史博物館研究紀要	—	14	9-28	東北歴史博物館	—	○
915	記事	和田 一雄	2013	平成25	どうやって野生動物の被害を防ぐか	ジビエを食べれば「害獣」は減るのか:野生動物問題を解くヒント	—	—	15-54	八坂書房	○	○
916	書籍	朝倉 裕	2014	平成26	—	オオカミと森の教科書	—	—	—	雷鳥社	○	○
917	論文	江口 祐輔・上田 弘則	2014	平成26	国内情報:イノシシはオオカミ尿に対して忌避しない	畜産技術	—	704	35-37	畜産技術連盟	—	○
918	書籍	桑原 康生	2014	平成26	—	オオカミの謎:オオカミ復活で生態系は変わる!?	—	—	—	誠文堂新光社	○	○

資料番号	形態	著者	出版年 (西暦)	出版年 (和暦)	論文名／該当記事名／見出し名	雑誌名 書籍名	巻	号	頁	出版社	エゾ オオカミ	ニホン オオカミ
919	記事	田中 康裕	2014	平成26	近代と前近代の狭間で消え去るお話たちのお話:「狼」話群からみた「遠野物語の意識」	遠野物語:遭遇と鎮魂	—	—	55-78	岩波書店	—	○
920	記事	中西 博之	2014	平成26	「瑞穂国」の農と食をゆく 第40回オオカミと五穀豊穰:農耕に基層を持つくお犬さまの護符	農業協同組合経営実務	69	11	64-67	全国共同出版	—	—
921	論文	中村 一恵	2014	平成26	ニホンオオカミとアカオオカミの起源と種分化に関する考察	神奈川県立博物館研究報告 自然科学	—	43	23-32	神奈川県立博物館	—	○
922	論文	菱川 晶子	2014	平成26	岩手の狼伝承考:紫波町と遠野市を中心に	愛知大学一般教育論集	—	47	78-92	愛知大学一般教育論集編集委員会	—	○
923	論文	平野 哲也	2014	平成26	江戸時代の下野における野生獣の防除と利用	栃木県立文書館研究紀要	—	18	85-104	栃木県立文書館	—	○
924	記事	深澤優美	2014	平成26	物語の中の狼:『遠野物語』を中心に	遠野学	—	3	117-149	遠野文化研究センター	—	○
925	記事	堀口 翔平	2014	平成26	学生投稿:増加するシカの食害:解決の鍵はオオカミの導入か?	北方林業	—	782	17-20	北方林業会	—	—
926	書籍	丸山 直樹	2014	平成26	—	オオカミが日本を救う!:生態系での役割と復活の必要性	—	—	—	白水社	○	○
927	記事	丸山 直樹・ビートたけし	2014	平成26	達人対談:オオカミ復活で生態系を取り戻せ(オオカミの達人・丸山直樹 東京農工大学名誉教授 一般社団法人 日本オオカミ協会会長vs.ビートたけし)	新潮45	33	5	276-287	新潮社	○	○
928	記事	宗像 充	2014	平成26	狼淡々録 オオカミが来た!?(1)	望星	45	6	87-95	東海教育研究所	○	○
929	記事	宗像 充	2014	平成26	狼淡々録 オオカミが来た!?(2)	望星	45	7	82-91	東海教育研究所	○	○
930	記事	宗像 充	2014	平成26	狼淡々録 オオカミが来た!?(3)	望星	45	9	79-88	東海教育研究所	○	○
931	記事	宗像 充	2014	平成26	狼淡々録 オオカミが来た!?(4)	望星	45	10	80-88	東海教育研究所	○	○
932	記事	宗像 充	2014	平成26	狼淡々録 オオカミが来た!?(5)	望星	45	11	79-87	東海教育研究所	○	○
933	記事	宗像 充	2014	平成26	狼淡々録 オオカミが来た!?(6)	望星	45	12	7-87	東海教育研究所	○	○
934	論文	森田 正純・八木博	2014	平成26	ライデン自然史博物館のニホンオオカミ:タイプ標本に対する歯科的な一考察	Animate	—	11	1-6	農大動物研究会	—	○
935	論文	森田 正純・八木博	2014	平成26	海を渡ったニホンオオカミは90ヶ月生き延びた.その後…	Animate	—	11	7-10	農大動物研究会	—	○
936	論文	森田 正純・八木博	2014	平成26	大英自然史博物館に在籍するニホンオオカミ頭骨標本(B.M.No.86.1.28.1)の詳細	Animate	—	11	11-18	農大動物研究会	—	○

資料番号	形態	著者	出版年 (西暦)	出版年 (和暦)	論文名／該当記事名／見出し名	雑誌名 書籍名	巻	号	頁	出版社	エゾ オオカミ	ニホン オオカミ
937	記事	石黒 直隆	2015	平成27	頭骨から見えてくる「ニホンオオカミ」の正体とは？	季刊 東北学(第3期)	—	6	103-117	東北芸術工科大学東北文化研究センター	○	○
938	書籍	今村 豊	2015	平成27	—	三河のオオカミ・山犬:少年の頃に見た妙で不思議な犬の消息を尋ねて	—	—	—	文藝春秋出版企画	—	○
939	書籍	菊水 健史	2015	平成27	—	日本の犬:人とともに生きる	—	—	—	東京大学出版会	○	○
940	記事	川島秀一	2015	平成27	三陸地方のオオカミ伝承	季刊 東北学(第3期)	—	6	87-102	東北芸術工科大学東北文化研究センター	—	—
941	記事	桑原 康生	2015	平成27	北海道では絶滅してしまったハイロオオカミ [特集 世界から見た北海道 (2) 北米]	モーリー:北海道ネイチャーマガジン	—	39	18-21	北海道新聞野生生物基金]	○	○
942	記事	田口 洋美	2015	平成27	列島開拓とオオカミの絶滅:富士山麓の事例から	季刊 東北学(第3期)	—	6	38-61	東北芸術工科大学東北文化研究センター	○	○
943	記事	深尾葉子	2015	平成27	大神から害獣へ:ニホンオオカミの絶滅と「異界」の喪失・魂の植民地化という視点から	東洋文化	—	95	18-21	埼玉郷土會	—	—
944	記事	丸山直樹	2015	平成27	オオカミを急いで呼び戻せ!:森と山をまもるために	山の本	—	94	36-43	埼玉郷土會	—	○
945	記事	村上一馬	2015	平成27	江戸時代のオオカミ:弘前藩・盛岡藩の藩日記から	季刊 東北学(第3期)	—	6	69-86	東北芸術工科大学東北文化研究センター	—	—
946	論文	森田 正純・八木 博	2015	平成27	『秩父野犬』の写真測定による大きさの推測:寸法が判明している構造物との比較とスーパーインポーズ法による検討	Animate	—	12	1-10	農大動物研究会	—	○
947	書籍	山田健	2015	平成27	—	オオカミがいなくて、なぜウサギが減るのか	—	—	—	集英社インターナショナル	—	○
948	記事	荒井経	2016	平成28	文化財復元の現在:福島県飯舘村。山津見神社オオカミ天井絵の事例から	文化資源学	—	14	67-72	文化資源学会	—	○
949	記事	今泉忠明	2016	平成28	ニホンオオカミを研究する,ということ.	StarPeople	—	58	38-40	ナチュラルスピリット	—	○
950	論文	植月 学	2016	平成28	ニホンオオカミ研究史の一断面:栗島公喜氏収集資料	山梨県立博物館研究紀要	—	—	1-7	山梨県立博物館	—	○
951	記事	川本三郎	2016	平成28	東京つれづれ日誌75:福島でオオカミと出会う.	東京人	—	375	142-145	都市出版	—	○
952	記事	廣瀬爲人	2016	平成28	日本狼の仔を育てたところ:秩父郡野上町:井戸と植平	埼玉史談	62	3	7-10	埼玉郷土會	—	○
953	記事	廣瀬爲人	2016	平成28	秩父のオオカミ信仰:両神神社・三峰神社を訪ねて思う	埼玉史談	63	1	18-23	埼玉郷土會	—	○

資料番号	形態	著者	出版年 (西暦)	出版年 (和暦)	論文名／該当記事名／見出し名	雑誌名 書籍名	巻	号	頁	出版社	エゾ オオカミ	ニホン オオカミ
954	論文	八木博・井上百合子・大場列夫・森田正純	2016	平成28	ベルリン自然史博物館に所属するニホンオオカミ3個体の標本:頭骨・全身骨格・毛皮について	Animate	—	13	78-81	農大動物研究会	—	○
955	記事	八木博	2016	平成28	歴史と神社から狼信仰を紐解く	StarPeople	—	58	20-33	ナチュラルスピリット	—	○
956	論文	森田 正純・八木博	2016	平成28	Pryer, H. J. Sがロンドン動物学協会に贈ったJapanese wild dogと考えられる画像の検証	Animate	—	13	71-75	農大動物研究会	—	○
957	論文	杉浦篤子・柴村紀代・久保田千恵子・清水貴子・高橋晶子・横田由紀子	2017	平成29	あべ弘士の絵本『エゾオオカミ物語』論:野生動物の死の描き方を中心に	絵本学:絵本学会研究紀要	—	19	13-22	絵本学会	○	—
958	記事	星野 瑞子	2017	平成29	よみがえるオオカミ:飯館村・山津見神社	聴く語る創る	—	25	16-18	日本民話の会	—	○
959	論文	Matsubayashi, Jun, Tamihisa Ohta, Osamu Takahashi, Ichiro Tayasu	2017	平成29	Reconstruction of the extinct Ezo wolf's diet (絶滅種エゾオオカミの食性復元)	Journal of Zoology	302	2	88-93	Zoological Society of London (ZSL)	○	—
960	書籍	宗像 充	2017	平成29	—	ニホンオオカミは消えたか?	—	—	—	旬報社	—	○
961	記事	石黒 伸一郎	2018	平成30	オオカミに守られている村:福島県飯館村の狼信仰	東北民俗	—	52	59-68	東北民俗	—	○
962	書籍	遠藤公男	2018	平成30	—	ニホンオオカミの最後:狼酒・狼狩り・狼祭りの発見	—	—	—	山と溪谷社	—	○
963	書籍	大橋昌人	2018	平成30	—	信州の狼(山犬)伝承と歴史:〈付〉野生鳥獣	—	—	—	ほおずき書籍	—	○
964	書籍	近藤雄生・澤井聖一	2018	平成30	—	オオカミと野生のイヌ	—	—	—	エクスナレッジ	○	○
965	書籍	橋本伸	2018	平成30	—	日本列島にいたオオカミたち	—	—	—	本の泉社	○	○
966	書籍	菱川 晶子	2018	平成30	—	狼の民俗学:人獣交渉史の研究(増補版)	—	—	—	—	—	○
967	論文	清水勇・細 将貴	2018	平成30	シーボルトのJamainu(ヤマイヌ)とOokame(オオカミ)	生物科学	69	3	165-175	—	—	○
968	記事	星野 正興	2018	平成30	オオカミ復活と農村伝道	福音と世界	73	5	68-71	—	—	—
969	記事	増田隆一	2018	平成30	—	日本の食肉類:生態系の頂点に立つ哺乳類	—	—	—	東京大学出版会	○	○
970	記事	依田健太郎	2018	平成30	野生動物	いきものをとむらう歴史	—	—	—	社会評論社	—	○

## 2. 市町村史におけるオオカミの記述

### 凡例

- (1) 「見出し」欄については、編（篇）、章、節、項のほか、文頭に付されるナンバリングのないものも「小見出し」とみなして記載を行った。
- (2) 内容は、市町村によってオオカミに関わる情報が数行程度の場合もあれば数ページにわたる分量となる場合もあるため、簡易なキーワードにまとめて表した。とくに博士論文中の議論に関わる内容や、確認が必要となる重要な記録は、備考欄に引用して記載した。キーワードについてとくに捕捉を行っていない場合は、基礎的・概要的な記述である。

愛別町	
書誌情報	愛別町史編集委員会編 1969（昭和44）年 『愛別町史』 愛別町.
見出し	第三編 環境／第四章 動物・植物・鉱物／第一章 動物
執筆者	明示なし
頁	267 内容／生息（推測）
備考	—

赤平市	
書誌情報	赤平市編纂委員会編 2001（平成13）年 赤平市史 上巻』 赤平市.
見出し	第四編 赤平とアイヌ／第二章 赤平付近のアイヌ／赤平付近のアイヌの生活
執筆者	（更科源蔵）
頁	159-160 内容／地名由来（セタ・ウシ・ホロケウ・トノ*1）
備考	*1：更科源蔵『赤平付近のアイヌの生活』より抜粋・紹介

阿寒町	
書誌情報	阿寒町史編纂委員会編 1966（昭和41）年 『阿寒町史』 阿寒町.
見出し	第10編 自然／第3章 動物／エゾシカ
執筆者	合田寅彦，鈴木節三
頁	1073 内容／エゾシカの減少による絶滅
備考	—
書誌情報	阿寒町史編纂委員会編 1986（昭和61）年 『阿寒町百年史』 阿寒町

見出し	第1編 自然環境／第3章 動物／第1節 阿寒とその付近に見られる獣
執筆者	明示なし
頁	31-32
備考	内容／エゾシカの減少による絶滅
	1966（昭和41）年『阿寒町史』と同一内容.

旭川市	
書誌情報	旭川市 1931（昭和6）年 『旭川市史稿 上巻』 旭川市.
見出し	当時尚ほ熊狼の害
執筆者	明示なし
頁	123-124
備考	内容／出沒，遠吠え，銃で撃つ，絶滅（*1），被害（*2） *1：「忠別附近に後を絶ちたるは明治二十三年頃」 *2：「狼来り、小屋に干し置きし川魚を取り、喰ひつゝあるを認めたり」
見出し	動物
執筆者	明示なし
頁	133
備考	内容／生息（狼糞） —
書誌情報	旭川市史編集委員会編 1959（昭和34）年 『旭川市史 第1巻』 国書刊行会.
見出し	動物
執筆者	明示なし
頁	55-56
備考	内容／生息 引用／上川離宮建設地調査報告 —
見出し	宗教
執筆者	明示なし
頁	55-56
備考	内容／オオカミ神（アイヌ文化） —
書誌情報	旭川市史編集委員会編 1972（昭和47）年 『旭川市史 第5巻』 旭川市
見出し	第一編 自然環境と戸口／第五章 動物および天産／第一節 動植物／二、最近に於ける動植物相
執筆者	今野良一
頁	46
備考	内容／生息（推測），絶滅 —
書誌情報	旭川市史編集会議編 1994（平成6）年 『新旭川市史 第1巻：通史1』 旭川市.

見出し	序編 上川盆地の自然環境／第3章 生物とその自然環境／一、開拓以前の動物たち／野生動物
執筆者	木村光夫
頁	91
備考	内容／出没 (*1), 生息 (*2) *1:「明治二十一年(一八八八)、石狩側の忠別川合流地点近くに設けられた測候所の気象観測員の言い伝えとして、夜間出没して吠えるオオカミを追い払うため、銃を放ってから庭に出た」 *2:「明治中期までは全道各地に群棲していた」
見出し	序編 上川盆地の自然環境／第3章 生物とその自然環境／二、開拓の進展と動物たちの盛衰／野生動物の盛衰
執筆者	木村光夫
頁	95-96
備考	内容／オオカミ観 (*1), エゾシカ減少による絶滅, 家畜被害, 駆除, 賞金, 毒殺, 絶滅 (明治中期) *1「人間に害を与えるような熊や狼はさっさと駆逐さるべきものであった」
見出し	第1編 上川の先史文化／第2章 縄文, 続縄文時代の上川／二、狩猟と漁労／弓矢と落とし穴
執筆者	斎藤傑
頁	207
備考	—
見出し	第3編 近代社会の成立と上川開発の胎動／第3章 上川初期開発事業の着手／忠別太・空知太間の改修工事
執筆者	関秀志
頁	832-835
備考	内容／オオカミへの恐怖 引用／北海道毎日新聞・第419号・明治21年12月4日付 (*1) *1: 該道路線に当る地は、元来土人も住居せぬ所にて、真に熊、狼、狐、狸の巢窟なるか上に、蚊、虻群を為して人に迫り、其工事の困難なる到底普通工夫の克く為し得る処にあらず。爰に於て樺戸監獄所典獄安村治孝氏、岩村前長官の命を請け、囚徒を役して此苦行に就かしめたり。蓋し囚徒は往の犯罪を償はんと欲する情実あるを以て、艱苦を忍ひて業を励み、土工の進歩を見る容易なればなり。然れとも其実際に至っては、工事の半は突然熊、狼に出逢ひ、蒼皇其場を避るか如きは最も恐るべく、最も厭ふべき事にて、剩え昼夜の別なく毒虫襲来し、夜間は天幕外数ヶ所に焚火を為し、交番して害虫を防くといへとも、猶ほ被害を免れず。為に安眠する能はず。又其蟄害を治するには、僅かに「カンプラチンキ」を擦布して一時の痛苦を凌ぐ。百名の役囚日々用ゆる処の「チンキ」平均拾瓶の多きに至れり。以て其業の困難なるを推知すべし。
書誌情報	旭川市史編集会議編 2002 (平成14)年 『新旭川市史 第2巻:通史2』 旭川市.

見出し	第4編 旭川村の形成／第1章 旭川村の創置／三、道庁による上川離宮の建設構想
執筆者	原田一典
頁	55-60 引用／『北海道庁第五回勸業年報』・『北海道之殖産 第十号』「復命書」(*1)
備考	*1：五 右離宮地内森林ニ栖息スル禽獸ヲ調査スル事 獸ハ狐, 狸, 兎ニシテ最モ多ク間々該野ノ南北隅ニ於テ熊跡狼糞ヲ認ムルコトアレトモ人馬ノ往復ニ頻繁ナルニ随ヒ其跡ヲ経ツニ至ルヘシ, 又「ピエイ」, 「チュプペツ」両川沿岸及ヒ「ナエオサニ」山腹ニ今尚ホ鹿窟判明ナリ, 是レ昔日此地ニ鹿ノ群居セシヲ想ヒ見ルヘク今ヨリ其蕃殖ヲ計ラハ旧ニ復スルヲ得ヘキル, 鳥ハ鷲, 鷹数種, 鳶, 山鳥, 啄木鳥数種, 鶇, 鶉, 山鳩, ヒヨ, プンテウ, カツコウ, 杜鵑等ニシテ其他小鳥数十種名称詳ニセサルモノアリ
見出し	第4編 旭川村の形成／第7章 近文アイヌと給与予定地／土地「割渡」以前の上川アイヌの生活
執筆者	原田一典
頁	890-892 内容／オオカミの仔の飼育（上川アイヌ） 引用／『旭川調査資料』(*1)
備考	*1：「狼ハ二十三年迄ハ藪ニ付近ニ居レリ。土人中ニ狼児ヲ飼フモノアリ」（「豊倉技師ノ談」*2 明治二十三年ころ、忠別村） *2（※北海道立図書館所蔵の『旭川調査資料』河野常吉資料 No.106）

芦別市	
書誌情報	芦別市 1994（平成6）年 『新芦別市史 第1巻』 芦別市.
見出し	オオカミ
執筆者	明示なし
頁	20-21 内容／オオカミの種類（北方の大陸系オオカミ*1）、生息（滝川市*2）、アイヌ語名 [ホルケウ・カムイ（狼神）、ウオセ・カムイ（吠える神）釧路地方ではオンルプシ・カムイ（狩りをする神）、十勝地方ではユクコイキ・カムイ（鹿を獲る神）空知地方でもオオカミはホルケウ・カムイトノ（狼神の王）]、アイヌの伝承、オオカミ観（*4）、被害（新冠*5）、駆除、賞金（*5）、エゾシカの減少、絶滅、引用／永山（1906）、松浦竹四郎（*3）、更科源蔵『コタン生物記』
備考	*1：シベリアなど、北方の大陸系オオカミで、やはりその昔、本州にも生息していたいわゆるニホンオオカミよりも、その体長はひとまわりもふたまわりも大きかったという。 *2：近隣の滝川市には、この地方にもオオカミがちゃんと存在していたことを示す以下のような記録が残っている。一九〇六（明治二十九年）、上川地方を視察した、時の北海道庁長官・永山武四郎によるものである。「江部乙の板橋を渡り、前途に長坂あり。頂上

	<p>高さ海拔三十八尺なり。然れども其勾配頗る低く以て車を通すべし。坂のある処狼谷と云ふ。常に狼糞あるを以て此名あり」。</p> <p>*3：一八五六（安政三年）五月、幕末の蝦夷地探検家・松浦武四郎は、その探検記録に次のようなオオカミの話を書き残している。</p> <p>「狼と申すも（中略）土人は是をヲヲセカモイと申し候、此獣ソラチよりユフバリの山へかけて居り候申し候」。</p> <p>さらに翌年五月二八日には、石狩側上流で「狼を見ること三度、土人も必ず是を取らず」としている。</p> <p>*4：「私たち現代人にとってのオオカミのイメージは、いつも悪いものであったように思う。狼男やドラキュラ伯爵からも想像できるように、ヨーロッパでもオオカミは悪魔の使いたる役回が多い。ましてや開拓当初の和人にとって、オオカミなど神どころか放牧している馬を狙ってやってくる害獣以外のなにものでもなかつたろう」「いつの頃からか、人間が自然の恵みだけでは満足できなくなり、いわゆる「経済的な動物」になったことで、オオカミは突然、神から悪魔へと否応なく引きずり降ろされてしまった。一方的に魔犬の烙印を捺された哀れな獣は、よって滅ぼされるべくして滅ぼされたわけであるが、エコノミック・アニマルの心根に潜む本当の悪魔の方は、以来、世界の以前をますます痛みつける一方のようである」</p> <p>*5：「一八七六年（明治九年）には、日高の新冠で放牧馬が一八〇頭もオオカミの餌食となったという記録がある」</p> <p>*6：「開拓使では一時ヒグマの皮五銭の買い上げに対し、オオカミの足四本で一〇銭という時もあったという。」</p>
--	---

足寄町	
書誌情報	足寄町町史編纂臨時専門委員会 編 1973（昭和48）年 『足寄町史』 足寄町
見出し	第二編 開発のあゆみ／その二 開発前期／第二章 三県時代／中川郡の状態
執筆者	明示なし
頁	142-144
	内容／中川郡安骨（チャシコツ*1）村のオオカミ皮（*2） 引用／道資料編集室所蔵の「民事局勸業課編・明治十三、十四年諸産物表」
備考	*1：村によって獺・狐・熊などを扱っているところもあるが、狼を出しているのは安骨村のみ。 *2：「狼 二頭 手当十四円」

厚岸町	
書誌情報	厚岸町史編集委員会編 2012（平成24）年 『新厚岸町史：通史編 第1巻』 厚

	岸町.
見出し	第2編 厚岸の考古学/第2章 先住の人々の暮らし
執筆者	西幸隆
頁	308
	内容/マンモス動物群のオオカミ
備考	—
見出し	第3編 古代・中世から近世の厚岸地方/第8章 幕末期のアッケシ/三 生活の一面/動物たち
執筆者	追塩 千尋
頁	742-743
	内容/出沒, 被害, 名称 (山犬), 遭遇 (*1), 駆除, オオカミ観 (*2), シカとの関わり (*3) 言及/「三代靈雲日鑑記」文化十三年九月十六日<新曆十一月五日>・「七代真州日鑑記」嘉永三年十一月十七日<新曆十二月九日>
備考	*1:「蝦夷狼は明治の後半に絶滅したとされるが、絶滅の半世紀ほど前の様子を記すものとして注目されよう。このころは、狼は人間と遭遇する頻度が比較的高かったことも知られよう」 *2:「熊・狼などの駆除は殺生行為であるが、そのことに批判めいた記述はなされていない。人間の生命を守るためには駆除も止む無し、ということなのであろう」 *3:「常に目にしていたであろうエゾシカやキタキツネなどの記載が見られないのは、それらは害獣ではなかったからなのかもしれない。ただ、栽培作物に対するエゾシカの被害記録が見られないのは、当時は山中に鹿たちの食糧が豊富であり、オオカミなどの天敵により適正な数が維持されていたためと考えられる」

<b>網走市</b>	
書誌情報	網走市史編纂委員会編 1958 (昭和 33) 年 『網走市史 (上巻)』 網走市.
見出し	先史時代編/第三章 遺跡/第四説 住居址/3. 竪穴住居跡/A. 網走川遺跡
執筆者	明示なし
頁	58-59
	内容/獣骨 (第十号竪穴内から出土)
備考	—
書誌情報	網走市史編纂委員会編 1971 (昭和 46) 年 『網走市史 (下巻) : 開拓時代篇』 網走市.
見出し	第一章 明治時代中期/第一節 北見の夜明け/2 夜明け前の姿
執筆者	明示なし
頁	31-38
	内容/オオカミ皮 (*1) 引用/北見四郡物産高表<道庁所蔵簿書> (明治十三年・網走郡役所), 「日高、

	十勝、釧路、北見、根室巡回復命書(抄) (*2)
備考	<p>*1:「オオカミなどもまだ残っており、その皮は一枚一円もした。クマの四～五円にはおよばないが、カワウソと同格である」</p> <p>*2:「此地方ニハ熊狼頗ル多ク徘徊スルト見へ、土人ノ家ニ至ル毎ニ之飼置ザルナク、加フニ大羆ノ皮ヲ曝サザルナキガ如シ。而シテ北見国トコロ村ニ至レバ狼を放飼シアルヲ見ル、亦一奇事ト云フ可シ。而シテ其飼主ノ言ニ拠レバ、今日ニ至ルマデ二年間之ヲ放飼シ置クト雖モ、能ク人ニ慣レ、山野ニ帰ルナク、但鹿ノ多ク来ル頃ニハ山野ニ至リ之ヲ捕へ食シテ後又此に帰り来ルト」</p>

虻田町	
書誌情報	虻田町 1962 (昭和 37) 年 『虻田町史』 虻田町役場.
見出し	第二編 先史時代／第二章 アイヌ文化／第二節 虻田アイヌ地名語解
執筆者	明示なし
頁	173 内容／地名 (ユクウンコッ*1)
頁	174 内容／地名 (ウキンシリ*2)
頁	179 内容／地名 (セタエト° シマクモイ*3)
備考	<p>*1:「役場前から日鉄鉱業所へ行く途中の、左手の沢。鹿のいる沢という意。冬になると鹿が集まるところで、鹿を狙って狼もたくさんいたという。(昼は有珠岳で昼寝をしていて、夜に成ると鹿をとりに降りて来たという)」</p> <p>*2:「町はずれの崖の名で、悪い山という意味。悪いという場合、足場が悪くて歩きにくいとか、川の場合などは、水質が悪くて飲めないというように、自分たちの生活に都合の悪いという意味で、この場合も上ることも歩くこともできないところ、おまけに地獄穴のある気持の悪い山という意味である。ユクウンユクにいる鹿が狼に追われて、峯伝いに逃げてきて、よくこの崖から追いおとされて死んだという」</p> <p>*3:「永田氏の地名解に出ている地名で、「犬回ル後ノ湾」と訳されている。セタは犬(古くは狼もそういらしい) エト° シはエト° ・ウシのつまったので鼻のあるということ、犬または狼の鼻の形をした岩か何かあって、それに名付けたものと思われる」</p>
見出し	第二編 先史時代／第二章 アイヌ文化／第三節 伝承と記録
執筆者	明示なし
頁	185-187 内容／アイヌ民話(「洞爺の兄妹」)
備考	—
見出し	鳥獣害
執筆者	明示なし
頁	489 内容／捕獲記録がない (*1)

備考	*1: 明治 19 (1886) 年の記録として「この年は獣害が多く、『北海道庁勸業年報』では『但し獣害をこうむり、その収穫を減ず』と報じ、熊だけでもこの年五頭とっているが、この当時は有害獣殺獲手当というのがあって、熊は一頭について三年の手当を与えられたもので、五頭とって金一五円の手当をもらっている。狼は熊のように獲っても皮なども金にならなかったため、熊よりも手当が多く五円を与えられることになっていたが、狼を獲った記録はない」
----	---

池田町	
書誌情報	池田町史編集委員会編 1988 (昭和 63) 年 『池田町史 上巻』 池田町役場
見出し	第四編 馬産／第六章 農家と馬／第一節 委託牧場と野獣の害／二、野獣による被害
執筆者	明示なし
頁	563-564
	内容／有害獣, 人畜への被害, 鳥獣猟規則 (*1), エドウィン・ダン, 新冠牧場, 毒殺, 引用／「ダンの回想録」
備考	*1: 「函館支庁は明治八年十二月、鳥獣猟規則を設けて、鳥、熊、狼などを銃殺して防御させ、九年十月には七飯官園の吏員に禽獣を毒殺させ、十年九月には札幌本庁が管内に諭告して、「自今、熊、狼を猟殺したときは両耳を添えて官に申出れば賞金二円を与える。」こととし、さらに翌十一年五月にはこの額を増額して熊一頭五円、狼は七円とし、届書には必ず四足を添えて戸長の証印を受けさせるようにした。そして十二年には鳥獣殺獲熟練者二名を東京から募り対雁村漁場へ派遣するなど対策に努めたのである」
書誌情報	池田町史編集委員会編 1989 (平成元) 年 『池田町史 下巻』 池田町役場.
見出し	資料編／年表
執筆者	明示なし
頁	747
	内容／賞金
備考	—

石狩市	
書誌情報	石狩町 1972 (昭和 47) 年 『石狩町誌 上巻』 石狩町.
見出し	第一編 石狩の自然環境と人口／／第二節 動物／エゾオオカミ <i>Canis lupus hattai</i>
執筆者	明示なし
頁	64
	内容／生息, 賞金, 絶滅

備考	—
見出し	第二編 石狩の先史時代／第二章 通史／第一節 前期（～約八〇〇〇年前）
執筆者	明示なし
頁	89 内容／マンモス動物群
備考	—
書誌情報	石狩町 1985（昭和60）年 『石狩町誌 中巻1』 石狩町.
見出し	第二編 産業編／第二節 畜産業
執筆者	明示なし
頁	317 内容／「熊狼ノ害ナク」 引用／『札幌県勸業課第一年報』（明治一五年一二月）
備考	*「当別村ノ牧牛ハ該村移民吾妻謙等数名ノ起業ニ係リ明治十四年十一月本邦種牝牛五頭ヲ真駒内牧場ヨリ払下ケ■十二頭ヲ山鼻村ヨリ購入セシニ創マル其牛群ハ十五年四月ヲ以テ假ニミソマップ（地名）牧場ニ放牧シ尋テ洋酒牝牛ハイグレード一頭ヲ真駒内ヨリ払下ケ五月下旬俱ニ之ヲ当別ノ原野ニ移セリ偶々牛蹄病ヲ患ルモノ数頭アリ蓋シ地勢卑濕ナルニ原因セルナラン因テ之ヲ海浜適宜ノ地ニ転スルノ議ニ決シ石狩厚田間ノ原野ニ於テ三十万坪ノ地ヲ相シテ茲ニ放牧セリ此地タル野草生茂ノ美ナラサルモ位置高燥ニシテ熊狼ノ害ナク一牛ノ病患ニ罹ルモノナシ十二月ニ至テ更ニ当別ノ原野苫場内皮ヲ距ル三四町許ノ所ニ移シ冬間舎中に飼養セリ」

<b>今金町</b>	
書誌情報	今金町史編集委員会編 1991（平成3）年 『今金町史 改訂 上巻』 今金町.
見出し	今金の自然と環境 / 今金庁の分布／哺乳類・鳥類・魚類・昆虫類
執筆者	明示なし
頁	158 内容／「実際に捕獲したことはないと考えられる」（*1） 哺乳類・鳥類・魚類・昆虫類 動物分布の上から、
備考	*1「特色ある生物がこの地方に住んでいる状態は殆どみられないが、北海道では明治一〇年（一八七七）「猛獣獲殺に関する規定」が設けられてから以降は特に狼は少なくなり、やがて絶滅したといわれるので利別村開村の頃には話として聞くことはあっても実際に捕獲したことはないと考えられる」

<b>歌志内市</b>	
書誌情報	歌志内市史編さん委員会編 1964（昭和39）年 『歌志内市史』 歌志内市.
見出し	第2編 行政／第1章 開拓時代の歌志内

執筆者	林 義実
頁	119 内容／生息 引用／昭和 27 年発行の『町勢要覧』
備考	—

<b>浦河町</b>	
書誌情報	浦河町町史編さん委員会編 2002 (平成 14) 年 『新浦河町史 上巻』 浦河町.
見出し	旧石器時代
執筆者	明示なし
頁	54-55 内容／マンモス動物群
備考	—
見出し	擦文からアイヌ文化期の浦河／送り場
執筆者	明示なし
頁	123 内容／オオカミ送り (推測)
備考	—

<b>浦幌町</b>	
書誌情報	浦幌町史編さん委員会編 1971 (昭和 46) 年 『浦幌町史』 浦幌町
見出し	第四編 部落探訪記／四、留真、川端梅吉宅訪問
執筆者	明示なし
頁	825-826 内容／生息, アイヌ文化におけるオオカミとイヌ (*1)
備考	*1:「狼もいたが、ほとんど獲っていないという。アイヌの古老の話に、『狼は自分の神様である。狼がおさえた犬を、助けてくれと頼むと、必ず離してくれるので、決して撃たなかった』という逸話がある故かも知れない」

<b>江差町</b>	
書誌情報	江差町史編集室編 1982 (昭和 57) 年 『江差町史 第 5 巻：通説 1』 江差町.
見出し	家畜の飼育
執筆者	明示なし
頁	687 内容／被害 (馬*1)
備考	*1: 箱館奉行の馬産政策のなかで、場所請負人への委託飼育には問題があり順調ではなかったようである。即ち場所請負人は鯉場 (鮭場) からの利潤にのみ走り、場所請負人

	としての付帯義務（アイヌの撫育・官馬の飼育等）には身を入れず、馬匹の飼育増殖を厭ひ、或いは馬を酷使し、且つ四季を通じて放牧して管理・飼育を怠ったため、馬体は漸次退化して瘠小となり、又冬期大雪にあう時は飼料を得ることができずに斃死したり、その他熊・狼の害を被り、或いはアイヌ犬に嚙殺されるものも少なくなかったという
--	--

枝幸町	
書誌情報	枝幸町史編纂委員会編 1967（昭和42）年 『枝幸町史 上巻』 枝幸町.
見出し	開拓使のころ／巡行記録／『關幽日記』
執筆者	明示なし
頁	479  引用／佐藤正克の『關幽日記』
備考	*1：マテシベ（音標）からフウレプ（風烈布）間「処々ニ獺・狼・狐等足跡ヲ見ル」

えりも町	
書誌情報	渡辺茂編著 1971（昭和46）年 『えりも町史』 えりも町.
見出し	アイヌ民族の伝説
執筆者	明示なし
頁	99-104  引用／金田一京助『ユーカー概説』
備考	—

遠別町	
書誌情報	遠別町 1957（昭和32）年 『遠別町史』 遠別町.
見出し	北辺の事情
執筆者	明示なし
頁	10  内容／オオカミ観（*1）
備考	*1：「松前藩の成立は蝦夷地の発展のいとぐちとなったが、国内一般の認識は浅く、熊と狼（現在全滅）がほえ、アイヌが住んでいる一大未開地という漠然としたものであった」

大野町	
書誌情報	飯田吉次郎編 1970（昭和45）年 『大野町史』 大野町役場
見出し	宗教編／民間信仰／異色な馬頭観音

執筆者	明示なし
頁	751-752
内容／オオカミ観 (*1)	
備考	<p>*1:「宝冠に馬頭をいただき、怒りの形相ものすごく、そのするどいまなこには近寄ることもできないと見えるのは、観音さま中ただ一つ馬頭観音である。このおそろしい馬頭観音をなぜお祭りするのであろうか。世の中には慈悲柔和な、観音さまの気持ちも、通じないものがあり、どのようなよい導きも、解することのできないものもある。このような慈悲の気持ち、柔和な相も通じないものには、馬頭観音が必要となる。馬頭観音は安全をみだし、危害を及ぼす悪魔を屈服させ、世の中を平和にする役目を持ち、これがとりもなおさず、大慈悲と説かれている。おもうにムカシのエゾ地時代は、人間世界の悪魔よりも、家畜の筆頭にある馬に危害を与える悪魔は熊であり、おおかみであったので、先祖の人たちのそばくで純真なねがいは、馬頭観音でなければならなかったことが容易に推察でき、これが馬頭観音信仰の原型となったものと考えられる」</p>

<b>興部町</b>	
書誌情報	興部町史編纂委員会編 1961 (昭和 36) 年 『興部町史』 興部町.
見出し	興部町年代表
執筆者	畠山弥六
頁	630
内容／手当金制度	
備考	—

<b>長万部町</b>	
書誌情報	長万部町史編集室編 1977 (昭和 52) 年 『長万部町史』 長万部町.
見出し	戸長役場
執筆者	明示なし
頁	207
内容／オオカミ観 (*1)	
備考	<p>*1:「明治八年三月、長万部に電信局が開設され一般公衆電報の取扱いが始ったことは前にも書いた。電信線架設の測量や架線工事は、箱館・森間は本道に沿って順調に進んだが、森・室蘭間の噴火湾海岸は険しく困難であったらしい。点在するアイヌ部落のほかは人跡未踏の自然で、川の流にそい、尾根づたいに歩かねばならず、昼も位密林や身のたけをこす雑草の中は案内なしでは歩けなかった。熊の足跡におびえ、夜は狼の遠ぼえにからだを固くし、ぶよや蚊にも苦しめられた。こうして明治七年十一月に完了した架線は全長四七七、七kmであった」</p>

小樽市	
書誌情報	小樽市 1958 (昭和 33) 年 『小樽市史 第 1 巻』 小樽市
見出し	第二編 開拓使及び札幌県時代／第九章 農業, 植樹, 工業／鳥獣害
執筆者	明示なし
頁	482-484
備考	<p>内容／被害, 手当金制度, 賞金額, オオカミの種類 (シベリヤ種*1), オオカミ観 (*2), アイヌ民族との関わり (*3), 絶滅</p> <p>*1: 「道の狼はシベリヤ種で、内地府県のものとは異なり、大きさは其の二倍もあり、性質は極めて獐猛であつた。開拓し時代には盛んに馬を襲撃して大害をなしたから、開拓使は十年から捕獲者に賞金を与え本て其の滅亡を期した。賞金は十一年七円、十五年には十円となつたが、その故か本道狼はそれ以来殆ど影を没するに至つた」</p> <p>*2: 狼は牛馬畜犬等を襲撃したが、人間には滅多に危害を加えなかつたと言伝えられている。</p> <p>*3: アイヌは狼を殺す事を嫌い、却てこれを神として敬い、一部の者は狼は熊の親とさえ信じたといふ、狼の仔を獲れば熊の子同様これを丁寧に飼育して後、熊と同じく祭つたものだという。</p>

音威子府村	
書誌情報	音威子府村史編さん委員会編 1976 (昭和 51) 年 『音威子府村史』 音威子府村
見出し	セタオマナイ
執筆者	明示なし
頁	66
備考	<p>内容／アイヌ語地名 (セタオマナイ*1)</p> <p>*1: 「天塩川左岸。セタ・オマ・ナイ (犬・いる・ところ) でセタがつく地名は、単に犬を表す場合とホルケウ (狼) を意味する場合がある。犬の意味のときは地名傳説がある場合が多い。音威子府村の場合ほどのようなものであつたか知るよしもない」</p>

帯広市	
書誌情報	帯広市史編纂委員会編 1984 (昭和 59) 年 『帯広市史』 帯広市役所
見出し	第二編 自然／第三章 植物と動物／第二節 動物
執筆者	明石博志
頁	70
備考	—

書誌情報	帯広市史編纂委員会編 2003 『帯広市史』 帯広市.
見出し	第二編 自然／第三章 植物と動物／第二節 動物
執筆者	明石 博志
頁	55 内容／生息 (*1)
備考	*1：昭和 59 年版と同一内容

上磯町	
書誌情報	上磯町 1997 (平成 9) 年 『上磯町史 上巻』 上磯町.
見出し	第二編 原始・古代の上磯町／第一章 先史時代の上磯／第四節 貝塚の時代
執筆者	明示なし
頁	231 内容／遺存体 (寺町貝塚から出土)
備考	—
見出し	第二編 原始・古代の上磯町／第三章 擦文文化の流入と上磯／第二節 擦文文化／擦文時代の漁撈と海獣猟
執筆者	明示なし
頁	337 内容／イヌ類 (オオカミの可能性も指摘される) の骨 (札前遺跡から出土)
備考	—
書誌情報	上磯町史編纂委員会編 1975 (昭和 50) 年 『上磯町史：年史編』 上磯町.
見出し	大古・幕末編／文化八年～文化十年
執筆者	明示なし
頁	83 内容／鉄砲 (*1)
備考	*1：「○文化年間 (一八〇四—一八一七) 市在人家接近に熊狼出没するときは、期を定め、証書を取り鉄砲を貸付する規定を作ったが文政五年 (一八二二) 松前史復領と同時にこの法も有名無実になった」

上砂川町	
書誌情報	上砂川町史編纂委員会 1988 (昭和 63) 年 『新上砂川町史』 上砂川町.
見出し	野性動物
執筆者	明示なし
頁	10 内容／駆除, 絶滅
備考	—

上ノ国町	
書誌情報	松崎岩穂 1962 (昭和 37) 年 『上ノ国村史 続』 上ノ国町.
見出し	第二章 産業の推進／第二節 漁業
執筆者	明示なし
頁	122-123  引用／「明治十三、四年諸産物表 民事業勸業課」(*1)
備考	*1:「有害鳥獣銃殺高」「狼 一 七円 」

北檜山町	
書誌情報	北檜山町 1981 (昭和 56) 年 『北檜山町史』北檜山町.
見出し	北檜山町の自然／獣
執筆者	明示なし
頁	11-12 内容／生息, 駆除
備考	—

北見市	
書誌情報	北見市 1981 (昭和 56) 年 『北見市史 上巻』 北見市.
見出し	自然環境編／植生・動物／動物 (常呂川水系流域の野生鳥獣)／先住民族と野生鳥獣
執筆者	大西重利
頁	147-148 内容／骨 (貝塚や貝塚とおぼしき箇所からの出土)
備考	—
見出し	自然環境編／植生・動物／北見地方の野生獣類／シカ科エゾシカ
執筆者	大西重利
頁	185-186 内容／エゾシカとの関係 (*1)
備考	*1:「鹿の天敵は集団で襲うエゾオオカミであったが、これとて生息数を調整する役目を果たしたに過ぎなかった。天明年間とその後明治十二年 (一八七九) の二回の大豪雪でさえも、一時的に生息数に打撃を与えても滅亡に追いこむ事はなかった。鹿に決定的な打撃をあたえたのは人間である」
見出し	自然環境編／植生・動物／北見地方の野生獣類／幻の獣 カワウソとオオカミ／エゾオオカミ
執筆者	大西重利
頁	193-194 内容／種類 (北方系のオオカミ), 骨格 (常呂貝塚から出土), 絶滅 (*1), 被害

		(人畜/家畜), 大雪によるエゾシカの減少, 新冠牧場, 駆除, 賞金, 毒殺 引用/明治十六年(一八八三)根室県内復命書
備考		*1)「本道では明治三十三年(一九〇〇)に絶滅してしまったといわれている」 『狼馬ヲ害スル事昨年殊ニ甚シク死傷廿四頭。偶々母馬ハ喰殺サレ、其ノ子ハ尻肉ヲ喰 ヒ取ラレタニ逢フ。其ノ惨状殆ト熟視スルニ忍ビズ。鹿ノ減少セシハケダシ馬ノ害セラ ルル甚ダシキ一因ナリト聞ク』
見出し		考古学からみた北見市と周辺地域/海面低下とマンモス動物群
執筆者		鶴丸俊明
頁	258-261	内容/マンモス動物群, 絶滅
備考		—

<b>北村</b>		
書誌情報		北村編 1985(昭和60)年『北村史 上巻』北村.
見出し		開拓期の動物
執筆者		明示なし
頁	229	内容/出没
備考		—

<b>京極町</b>		
書誌情報		京極町史編さん委員会編 1977(昭和52)年『京極町史』京極町.
見出し		武四郎の尻別川下り
執筆者		明示なし
頁		内容/表現(*1) 引用/松浦竹四郎『後方要諦日誌』
備考		*1:『鬮熊豺狼』(ひぐま、やま犬や狼)を見たというのは大げさとしても、当時の川筋 の情景が浮かんでくる」

<b>釧路市</b>		
書誌情報		渡辺茂 1957(昭和32)年『釧路市史』釧路市
見出し		釧路市の自然環境
執筆者		明示なし
頁	28-29	内容/生息

備考	—
書誌情報	釧路市 1974 (昭和 49) 年 『新釧路市史 第 1 巻：自然・先史篇・近世篇・政治・行政篇』 釧路市.
見出し	第一編 自然・先史編／第一章 釧路の自然史／三「地中海」時代の寒暖と遺産
執筆者	岡田由夫
頁	88-89
	内容／周口店動物群
備考	—
見出し	第一編 自然・先史編／第一章 釧路の自然史／四、マンモス動物群と氷河期のレリック
執筆者	岡田由夫
頁	99-100
	内容／マンモス動物群
備考	—
見出し	第一編 自然・先史編／第三章 縄文時代の釧路／海獣類の捕獲
執筆者	沢四郎
頁	193
	内容／出土 (東釧路貝塚*1)
備考	*1:「エゾオオカミよりも大きい、シベリアオオカミの疑いのある幼獣が一頭発見されている」

<b>釧路町</b>	
書誌情報	釧路町史編集委員会編 1990 (平成 2) 年 『釧路町史』 釧路町役場
見出し	第五編 産業と経済／第二章 畜産業／第二節 釧路町の牧場の推移／馬匹改良と種付所
執筆者	明示なし
頁	691
	内容／被害 (馬)
備考	—

<b>栗山町</b>	
書誌情報	栗山町史編さん委員会編 1971 (昭和 46) 年 『栗山町史』 栗山町.
見出し	動物の種類
執筆者	明示なし
頁	96
	内容／生息
備考	—

黒松内町	
書誌情報	黒松内町編 1987 (昭和 62) 年 『黒松内町史 上巻』 黒松内町.
見出し	第二章 沿革
執筆者	明示なし
頁	165  引用／「後志国歌棄郡作開村起源より沿革調」(*1)
備考	*1: 1880 (明治 13) 年, 棄郡郡 (熟鄂作開) 戸長による報告書 (有害鳥獣表に「狼」の欄があるが、「撲殺数」は○表記)

訓子府村	
書誌情報	訓子府村史編さん委員会 1951 (昭和 26) 年 『訓子府村史』 訓子府村.
見出し	動植物
執筆者	明示なし
頁	54 内容／生息, 絶滅
備考	—

小清水町	
書誌情報	小清水町史編さん委員会 編 2000 『新小清水町史』 小清水町.
見出し	生物／動物／獣類
執筆者	明示なし
頁	8 内容／種類 (シベリア系), 絶滅
備考	—

札幌市	
書誌情報	札幌区 1911 (明治 44) 年 『札幌区史』 札幌区.
見出し	第一編 総論／第一章 緒論
執筆者	明示なし
頁	9 内容／生息
備考	—
見出し	第一編／第二章 札幌の天然／第三節 動物
執筆者	明示なし

頁	36	内容／標本 (*1)
備考		*1:「札幌産動物の札幌博物館所蔵標本等に拠りて調査するに左の如しとす (略) おほかみ (明治十四年六月捕獲本州に棲む「やまいぬ」(豺) とは別種にして大陸の「おほかみ」に等し往昔は群を為して牧場に出て家畜を害せしこと甚しかりしが官費を以て捕獲せしめたと土地開拓の進歩と共に漸く減じ目下殆ど見るることかたし)」
書誌情報		加藤清英編 1927 (昭和2) 年 『札幌村史』 札幌村.
見出し		第一編 概論／第一章 開発前の札幌付近
執筆者		明示なし
頁	1	内容／生息
備考		—
見出し		第二編 地誌／第一章 札幌村地理
執筆者		明示なし
頁	19-20	内容／標本
備考		—
見出し		第三編 沿革／第七章 移民の撫育督勵
執筆者		明示なし
頁	40-41	内容／被害 (*1)
備考		*1:「当時移住農夫の最も苦しむ所は熊、狼、毒蛇にあらずして鹿なりき、熊狼の出没は常なしと雖も容易に人を害せず却つて人を見て逃る、鹿は人を害せずと雖も常に群を為し来たりて畠圃を襲ひ穀菜を食い尽す、為めに作付地の四圍には鹿圍なるものを作るの必要ありき、因りて明治四年正月十二日庚午建設の三村 (苗穂村、丘珠村、圓山村) 及札幌、篠路の両村に対し鹿圍及薪材に関し布達する所あり、此等の業は雪中之れを整へて以て春耕の妨なからしめ又三月角場の外實弾、空砲を禁止せしも獨り鹿の菜園を荒す者の威銃を許したり」
書誌情報		札幌村史編纂委員會編 1950 (昭和25) 年 『札幌村史』 札幌村.
見出し		第一編 概説／第一章 開発前の札幌付近
執筆者		明示なし
頁	1	内容／生息
備考		—
見出し		第三編 沿革／第六章 移民生活の概況
執筆者		明示なし
頁	72-73	内容／被害
備考		*1: 昭和2年版とほぼ同様の内容
書誌情報		札幌市史編集委員会 1953 (昭和28) 年 『札幌市史: 政治行政編』 札幌市役所.
見出し		第一章 創建以前——札幌の夜明け前——

執筆者	明示なし
頁	3-4
備考	内容／生息
見出し	—
執筆者	／産業
執筆者	明示なし
頁	22
備考	内容／アイヌ民族の狩猟・交易 (*1)
備考	*1: 札幌地方には熊・狼・いたち・狐・鹿・兎等の獣や、さまざまな鳥類が住んでいて、これはアイヌの食糧・被服の資源となり、和人との重要な交易品ともなった。
書誌情報	札幌市史編集委員会編 1958 (昭和 33) 年 『札幌市史：産業経済編 附：自然環境編』札幌市。
見出し	第一章 農業／第一節 農畜林業概説／創建及び開拓時代：官営及び直接保護時代／資源保護、災害防止
執筆者	明示なし
頁	10-11
備考	内容／駆除, 絶滅
備考	—
見出し	第四章 生物／動物／開拓と動物
執筆者	明示なし
頁	579-580
備考	内容／絶滅
備考	—
見出し	第四章 生物／動物／獣類
執筆者	明示なし
頁	583-584
備考	内容／種類 (いわゆるシベリヤ狼), アイヌ語名 (ユクコイキ), 人を襲わない, 被害 (馬), 毒殺, 賞金 (*1), 標本 (*2)
備考	*1: 「手稲村の記録によれば『明治十九年熊十八頭、狼三十一頭、その手当金五百三十四円』 *2: 「標本は北大附属博物館に残されたもの以外にはなく、その雄は明治十二年の白石村産、雌は明治十四年の豊平村産である」
書誌情報	札幌市史編集委員会編 1958 (昭和 33) 年 『札幌市史：文化社会編』札幌市
見出し	第二章 宗教／第一節 神社
執筆者	明示なし
頁	329-330
備考	内容／出没 (札幌神社)
備考	—
書誌情報	札幌市教育委員会編 1989 (平成元) 年 『新札幌市史 第1巻：通史1 札幌の誕生』札幌市。

見出し	第二編 先史の札幌／第三章 縄文時代／三、その他の遺物
執筆者	明示なし
頁	230
備考	—
見出し	第四編 イシカリの改革とサッポロ／第一章 イシカリ役所とサッポロ／三、イシカリ役所と機構
執筆者	明示なし
頁	596-597
備考	<p>*1:「当時、イシカリでは出稼人・職人・商人も増え、家作がさかんとなっており、建築材にあてられたと思われる。材木はハッサム・イシカリ川を流送しておこなわれていた。第二に、熊・狼・鷲皮等の軽物交易物の収集であった。軽物類は本来、アイヌとの交易でなされていた。しかし、ハッサム近在にはアイヌも少なく、またこの時期には軽物交易物も減少していた。そのために、足軽の丑太郎自身が獣皮の捕獲につとめていたのであった。獣皮は衣服・敷物に利用され、和人に珍重されたほか、カラフト交易にもあてられていた。軽物はもともと、運上屋のみの交易では不足であったので、番人が番屋に越年して捕獲と収集にあたることも多かった。足軽も番人の役割をひきついたのである。吉田茂八が丑太郎のもとにいたのも、軽物の捕獲と関係をもつ。軽物交易物の収集は冬季間になされるが、これにより丑太郎は冬季も番所につめていたことがわかる」</p>
書誌情報	札幌市教育委員会編 1991（平成3）年 『新札幌市史 第2巻：通史2 札幌のおいたち』 札幌市.
見出し	第五編 札幌本府の形成／第九章 札幌生成期の社会と文化／第五節 医療と災害への対応／四、災害と救済事業
執筆者	明示なし
頁	593-594
備考	—
見出し	第六編 道都への出発／第七章 札幌進展期の社会生活と文化／第五節 都市衛生の整備と災害／五、水害とその他の災害／熊害
執筆者	明示なし
頁	1009-1010
備考	<p>*1:「十九年の札幌群における有害獣獲殺数は、熊六六頭、狼二三八頭におよび、その手当金は二五七八円にのぼっている」</p>

### 様似町

書誌情報	様似町史編さん委員会編 1992（平成4）年 『様似町史 改訂』 様似町
------	--------------------------------------

見出し	先史遺跡と先住民族／アイヌ語地名
執筆者	明示なし
頁	35
	内容／アイヌ語地名 [ホーリキオイ (Horikioi) *1]
備考	*1: ホーリキ……狼 (山犬?)、ホ……多い、イ……ところ／◎狼の多いところの意／注 昔はこの辺ばかりでなく、全道に狼 (山犬) が多く、開拓使時代から北海道庁時代まで その狩猟を奨励し、懸賞付きでその撲滅を図ったといわれている」
見出し	原田 安太郎
執筆者	明示なし
頁	780
	内容／出没
備考	——

<b>猿払村</b>	
書誌情報	猿払村史編さん発行委員会編 1976 (昭和 51) 年 『猿払村史』 猿払村.
見出し	第 3 編 原史時代／第 3 章 前幕府直轄時代／第 2 節 ロシア艦船の侵略
執筆者	明示なし
頁	122-125
	引用／『クルウゼンシュテルン日本紀行』
備考	——

<b>砂原町 (現在: 森町)</b>	
書誌情報	砂原町史編さん室編 2000 (平成 12) 年 『砂原町史 第一巻: 通史編』 砂原町
見出し	第 11 編 宗教・教育・文化／第 2 章 教育／砂原村学校教育年表
執筆者	明示なし
頁	1011
	内容／動物園 (*1)
備考	*1: 大正元 (1912) 年「10・9 (砂小) 修学旅行 森村 矢野動物園見学 (ライオン・虎・ 駝鳥・エミュー・狼等珍奇なもの数十種)」

<b>鹿部町</b>	
書誌情報	鹿部町史編集室編 1994 (平成 6) 年 『鹿部町史』 鹿部町.
見出し	陸路／東海岸道
執筆者	明示なし

頁	870	内容／出没
備考	—	
見出し	陸路／本願寺道路	
執筆者	明示なし	
頁	880-881	内容／出没
備考	—	

静内町		
書誌情報	静内町史編纂委員会編 1975（昭和 50）年 『静内町史 増補改訂版』 静内町.	
見出し	アイヌ文化／信仰	
執筆者	明示なし	
頁	97	内容／オオカミ神（アイヌ文化*1）
備考	*1：「海浜の祭壇というのがある。漁業で生活する人々の平安と漁業の加護を祈念したところで、中心の高祭壇に左から最初に礼拝する神、みだりに口にしない秘仏的な、おそらく獲物をさずける神と思われる。次にミヤマカケスの神、部落の守護神（縞鼻神）、狼神、山にいるミソサザイ神、狐神の王、波打ちぎわの神、沖の神の老爺という順に祭られている。海岸のものでありながら、多くの山狩りの神々が祭られているのは、おそらく昔、部落共同の大祭をやった名残であろうと思われる」	
見出し	畜産／明治初期の畜産	
執筆者	明示なし	
頁	652-654	内容／被害（馬）
備考	—	
書誌情報	静内町史編さん委員会編 1996（平成 8）年 『静内町史 増補改訂版 上巻』 静内町.	
見出し	アイヌ文化／信仰／海浜の祭壇	
執筆者	明示なし	
頁	101	内容／オオカミ神（昭和 50 年版と同様の内容）
備考	—	
見出し	アイヌ文化／メナシベツ川筋（東の沢）	
執筆者	明示なし	
頁	150	内容／アイヌ語地名 [ポヨブ*1]
備考	*1：「≪ホヨ（右方）名義、狼のことなり」[ポヨブ 狼 此辺狼多し故に名く「ポヨブ」は凶害を為す者の義] 意味不明。昔鱒を獲りによく入った沢だという」	
見出し	畜産／明治以前の畜産	

執筆者	明示なし
頁	854
備考	—
見出し	畜産／農林水産省家畜改良センター新冠牧場
執筆者	明示なし
頁	1003
備考	引用／エドウィン・ダン『日本における半世紀の回想』・『御料牧場沿革誌』明治27（1894）年編集
備考	——

標茶町	
書誌情報	標茶町史編纂委員会編 1978（昭和53）年 『標茶町史考：後篇』 標茶町.
見出し	第十一章 熊牛村の黎明
執筆者	明示なし
頁	4
備考	—
見出し	第十八章 馬産王国
執筆者	明示なし
頁	382-383
備考	内容／被害（馬） 引用／「明治十六年を記録した河野文書」（*1） *1：「佐野氏所有馬百四十頭馬追人ノ所有馬五十余頭、飼料ハ皆此平野ノ草ニ□ル豺狼馬ヲ害スル事一特ニ甚ダシク死傷已ニ二十四頭」と記している。当時の標茶附近には河岸に数戸の旧土人の茅屋や物置、倉庫があるのみで、全く無人の境であった。鬱蒼たる原始林の小径を、硫黄の吠を背にした駄馬が一群又一群と延々二十数群続き、これに赤壁等県官の一港が遭遇したのであろう。まことに、映画の一駒を見るがごとき情景である」
書誌情報	標茶町史編さん委員会編 1998（平成10）年 『標茶町史 通史編 第1巻』 標茶町.
見出し	第4章 明治初年の標茶と戸長役場の設置／第二節 明治初年の熊牛の状況
執筆者	船津 功
頁	383-384
備考	引用／「釧路巡回復命書」[1883（明治16）年，御用掛赤壁二郎、酒井純明] 「標茶ヨリ陸路熊牛村ヲ経テ熊牛台ニ至ル道程」・「豺狼ノ馬ヲ害スルヤ昨年来特ニ甚シク死傷已ニ二十四頭偶々母馬ハ喰殺サレ其子ハ臀肉ヲ喰ヒ取ラルトニ遇フ其惨状殆ト熟視スルニ忍ヒス蓋馬ノ害ヲ被フル此ノ如ク其レ甚シキモノハ鹿ノ減少ヲ来セシヨリ或ハ一ノ原由トナラン歟」

清水町	
書誌情報	清水町史編さん委員会 編 2005 『清水町百年史』 清水町
見出し	「エゾオオカミ」の挽歌
執筆者	明示なし
頁	67 内容／生息，エゾシカとの関わり，被害（馬），手当金制度，駆除，新冠牧場，毒殺，絶滅，遠吠え（*1）
備考	*1：「晩成社の依田勉三が明治一九年、当縁村オイカマナイ（現大樹町生花苗）に初めて牧場を開いたころ、四、五〇頭のオオカミの遠吠えが聞こえたという記録が残っているが、牧場がオオカミに襲撃されたということはなく、十勝地方でもこれを最後にエゾオオカミの消息が絶えている」

斜里町	
書誌情報	斜里町史編纂委員会編 1955（昭和 30）年 『斜里町史』 斜里町.
見出し	第二編 明治前史／第一章 斜里場所／四 産業
執筆者	更科源蔵
頁	112 内容／被害（馬）
備考	—

白老町	
書誌情報	白老町町史編さん委員会編 1992（平成 4）年 『新白老町史 上巻』 白老町.
見出し	哺乳類
執筆者	明示なし
頁	73-74 内容／生息
備考	—

白滝村	
書誌情報	白滝村史編さん委員会編 1971（昭和 46）年 『白滝村史』 白滝村.
見出し	五、産業・経済／第四章 畜産／第一節 馬産と酪農／馬
執筆者	明示なし
頁	230-231 内容／被害（馬）
備考	—

見出し	九、育ちゆく郷土／第二章 炉端談話／熊と狼
執筆者	明示なし
頁	543-544 内容／オオカミ観 (*1), 賞金
備考	*1:「蝦夷地における開拓者の深刻な悩みの一つは、クマとオオカミに対する恐怖であった。犬ににて瘠せて大きく、口も大きく耳は小さく、全身茶褐色系で夜光る三角型の目はみるからに兇猛で、熊とともに人畜に害を加える猛獣である。熊狼の被害続出に手をやいた開拓使は、明治十年熊狼捕獲奨励金制度を決め、熊狼一頭につき二円の奨励金を出して捕獲に乗り出した。この年あまり成果があがらず、翌十一年熊一頭につき五円、狼一頭につき七円に値上げしたがため捕獲成果が大いにあがったが、この高い奨励金に悪知恵を働かせる者もあったという。それは捕獲の証拠として熊狼の足首から先を切り落として持参することになっていたが、捕獲もせずアイヌ部落から狼によく似たアイヌ犬を安価で買い求めて、その足を切り落として持参し、高い奨励金を手に入れるふとどき者もあったそうであろう。いずれにしてもその後奨励金の額には変動があったが、こうした制度がやがて功を奏し、明治二十二年頃に至り狼への恐怖は全くなくなったといわれている」

<b>新篠津村</b>	
書誌情報	新篠津村史編さん委員会編 1975 (昭和 50) 年 『新篠津村史』 新篠津村.
見出し	むかしの石狩低地帯／先住民の生活
執筆者	明示なし
頁	61 内容／オオカミを食べなかった (アイヌ文化*1)
備考	*1:「ただ食べなかったものは、オオカミ、クジラなどで、宗教的タブーとしてこれをきらったし、キツネだけはチロンヌップ・カムイといってこれを食べることはまったくなかった」
見出し	地方の自然／シカやオオカミも群生
執筆者	明示なし
頁	98-103 種類 (シベリア系), アイヌ語名 (オオセ・カムイ), エゾシカとの関わり, 被害 (家畜), 賞金, 駆除, 新冠牧場, 毒殺, オオカミとイヌを交配させる, 民話 (オオカミの群れを火で退けたアイヌの娘*1), 絶滅, 標本
備考	*1: 文中に「一八八七年 (明治二〇) 千歳郡長都村にあった実話」とある。「あるメノコ娘が隣のコタンに用足しにいったの帰りみち、日が暮れて暗がりの道を馬にまたがって家路を急いだ。原始林がおおいかぶさって空の薄明かりもみえない小道にさしかかったとき、急に載っている馬が棒立ちに止まった。年若な乙女の胸は不安におののき、恐

怖の念で全身がふるえた。一瞬、前方の暗がりには視線を集中していた彼女の目に、青白く光るケモノの目がうつった。しかも光る二つの目はまたたくまにふえはじめ、左右に目を転じさらにうしろをふりかえると、どこもかしこも光る目が無数にこちらをにらみ、音もなく迫ってくる気配。彼女は、はじめてオオカミの大群に包囲されてしまっていることを知った。／ここで彼女は、相手がオオカミであることがわかると、とっさに落ち着きを取りもどした。危険が迫っているとき、まず「冷静であれ！」と自分にいいかけながら左手で腰のマキリ（小刀）を抜き放ち、刃先を上になぎりしめるとともに右手はふところからマッチをとりだした。まずこれで危急防戦の措置として最初の身がまえばできた。女性の身でこれだけ沈着に護身のかまえばできるのも、常に野性の猛獣が身辺間近に現れることが多い環境に育ち、幼少のころから防禦と護身の危急措置を訓練されてきたからで、この民族の不断の生活態度のあらわれである。／こうしている間もオオカミの群れは、じりじりと間近に迫ってきた。そしてついに、なかの一匹が飛んで馬の腹下をくぐった。同時に他の一匹が宙を飛んで彼女の頭上を越えた。彼女はマキリをかざしたが届かなかった。続いてこの馬の腹下くぐりと宙飛びが交互に数匹にふえてはじまった。オオカミが宙飛びをするのは、偵察からはじまって威嚇にうつり、さらに騎乗者を傷つけるため、腹下をくぐるのは馬の腹を爪やキバで引き裂き倒す攻撃戦法だという。／馬は恐怖してすくみ、首を上下に振って立ち上がり、足を乱して全身を不規則に動かすはじめる、もう一刻を争うべき危急のときである。彼女は首にまいた手ぬぐいを解き、マッチを擦って手ぬぐいの先端に火をつけた。右手にこれをもちかえて振りまわすと火の輪を描いた。左手は馬ノ手綱とマキリ、まさに人馬一体の万全の防衛態勢だ、オオカミがもしもこれ以上、腹下や頭上をかすめたら、毛皮に炎が燃えうつるだろうし、そのスキにマキリで刺し傷をあてることもできる。／本能的に火炎をこわがるケモノの習性は、彼女のとっさの、しかも敵の虚をついたみごとな守備態勢をまたたくまに布陣した機転に尻尾を巻かざるをえなくされ、ここで形成は逆転した。先頭のオオカミは一瞬にしてひるみ、後方の群は早くも退却をはじめた。こうなると敵は逃げ腰の総ぐずれ。彼女は火のついた手ぬぐいをふりかざし、火の粉と火炎を散らしながら馬の腹をけって一目散に全速力、ついに虎口ならぬ狼口を脱した。北海道の広野をわがもの顔に自由に疾走していたオオカミが人間の開拓という動機の前に滅び去る直前の、最後の人と獣との争闘史の哀話である」

### 寿都町

書誌情報	寿都町教育委員会編 1974（昭和49）年 『寿都町史』 寿都町.
見出し	開拓のころ
執筆者	明示なし
頁	59-60 内容／生息（推測*1）、賞金、絶滅

備考	—
----	---

瀬棚町																																															
書誌情報	瀬棚町史編纂委員会編 1991（平成3）年 『瀬棚町史』 瀬棚町.																																														
見出し	地誌概況／哺乳動物																																														
執筆者	明示なし																																														
頁	66-67																																														
	内容／駆除, 賞金 (*1)																																														
備考	<p>*1:「明治一九年、二〇年の瀬棚・太櫓・久遠三郡のクマ・オオカミの獲殺実績は別表のとおりで、オオカミは少なくなり、やがて絶滅した」</p> <p style="text-align: center;">熊・狼獲殺数と手当（北海道庁統計書による）</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th>区分</th> <th></th> <th></th> <th>瀬棚郡</th> <th>太櫓郡</th> <th>久遠郡</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="2">熊</td> <td rowspan="2">明治19年</td> <td>頭数手当</td> <td>17頭</td> <td>1頭</td> <td>—</td> </tr> <tr> <td></td> <td>—</td> <td>—</td> <td>—</td> </tr> <tr> <td rowspan="2">熊</td> <td rowspan="2">明治20年</td> <td>頭数手当</td> <td>17頭</td> <td>5頭</td> <td>2頭</td> </tr> <tr> <td></td> <td>51円</td> <td>19円</td> <td>8円</td> </tr> <tr> <td rowspan="2">狼</td> <td rowspan="2">19年</td> <td>頭数手当</td> <td>8頭</td> <td>—</td> <td>2頭</td> </tr> <tr> <td></td> <td>—</td> <td>—</td> <td>—</td> </tr> <tr> <td rowspan="2">狼</td> <td rowspan="2">20年</td> <td>頭数手当</td> <td>—</td> <td>5頭</td> <td>14頭</td> </tr> <tr> <td></td> <td>—</td> <td>15円</td> <td>74円</td> </tr> </tbody> </table>	区分			瀬棚郡	太櫓郡	久遠郡	熊	明治19年	頭数手当	17頭	1頭	—		—	—	—	熊	明治20年	頭数手当	17頭	5頭	2頭		51円	19円	8円	狼	19年	頭数手当	8頭	—	2頭		—	—	—	狼	20年	頭数手当	—	5頭	14頭		—	15円	74円
区分			瀬棚郡	太櫓郡	久遠郡																																										
熊	明治19年	頭数手当	17頭	1頭	—																																										
			—	—	—																																										
熊	明治20年	頭数手当	17頭	5頭	2頭																																										
			51円	19円	8円																																										
狼	19年	頭数手当	8頭	—	2頭																																										
			—	—	—																																										
狼	20年	頭数手当	—	5頭	14頭																																										
			—	15円	74円																																										
見出し	瀬棚地方の地名／瀬棚地方の地名の由来																																														
執筆者	明示なし																																														
頁	79																																														
	内容／アイヌ語地名 [セタ・ルペシペ・ナイ (狼の越える沢)]																																														
備考	<p>*1: 更科源蔵による「セタとは古くは狼もそう呼んでいて、ここをセタ・ルペシペ・ナイ (狼の越える沢) といって昔狼がシカを追って川を泳ぎくだって来て、勢いあまって海にまでとび出して、おぼれて石になった」</p>																																														

壮瞥町	
書誌情報	壮瞥町史編さん委員会編集 1979（昭和54）年 『壮瞥町史』 壮瞥町.
見出し	第三編 / 第一章 沿革／第一節 概況
執筆者	明示なし
頁	37
	内容／生息
備考	—
見出し	第四編 行政／第一章 自治の沿革／第一節 創始時代／動物の変遷

執筆者	明示なし
頁	164-165
内容	内容／生息，絶滅 (*1)
備考	*1:「狼は十七年よりは早く跡を絶ってしまった」
見出し	第十三編 余録／第一章 由来／第三節 昔話に花咲く
執筆者	明示なし
頁	1551
内容	内容／古老座談会 (*1)
備考	*1:「○その頃いた獣は？ 座談 熊、狼、蛇、まむし、狐、鹿などがいた。庄司さんの話によると、滝之下の壮瞥穴の中に、何か落ち込んでいるので、アイヌを連れてきて撃たせたところ、狼であったという実話がある」
見出し	第十三編 余録／第一章 由来／第四節 動物、植物
執筆者	明示なし
頁	1556
内容	内容／聞き取り記録 (*1)，エゾシカとの関わり (*2)
備考	*1:「或る時（明治十七年頃）私（佐藤喜重）の父が、今の中学校の裏辺りの畑に行ったら、例の壮瞥穴の中から、ウーウーという唸り声が聞こえるので、通りがかりのアイヌに聞いた処、アイヌは暗い穴の中をのぞき込んで、これは狼に違いない。捕ってやると特異のロープで輪を作り穴の中に五米程下げてやって、うまく首をしめて引張り上げたが、危険なので撲殺して見たところ、全く絵にある狼と寸分違わないものであった」 *2:「鹿は、多く草原に棲息していた。彼等は体質上密林を避け、熊、狼の襲撃を恐れ、星野周辺を適地としていたが、人跡漸く繁くなるに及び、伊達方面の平地を辿り漸次東へ東へと移動し、現在の日高地方で、僅かに生存の足溜りを残したものらしい」
見出し	第十三編 余録／第一章 由来／第五節 伝説その外の記録／壮瞥穴
執筆者	明示なし
頁	1560
内容	内容／捕獲 (*1)
備考	*1:「今の滝之上町第三（旧字星野）の辺には、到る処に壮瞥穴といわれる、直径一尺くらいから三尺位の深い穴が、畑や道路に、ぽっかり口をあけて、通行人や農夫を困らせたものである。これは昔大木が樽前山爆発の際降った荒い火山灰に埋もれ、その上に有珠岳の細かい灰がかぶさって、長い年月を経て、地中で木が腐って、自然に穴になったものち推定される。馬耕などの時、馬がこの穴に落ちて困ったこともあったという。この穴で狼を捕った話は別項の通り」

<b>大樹町</b>	
書誌情報	大樹町 1969（昭和44）年 『大樹町史』 大樹町.
見出し	第二章 自然環境／第五節 大樹の主な野生動物
執筆者	明示なし

頁	25	内容／種類（シベリヤ系），絶滅，遠吠え，駆除
備考		—

<b>大成町</b>		
書誌情報	大成町史編集委員会編 1984（昭和 59）年 『大成町史』 大成町.	
見出し	牧畜	
執筆者	明示なし	
頁	280	内容／被害（馬）
備考		—

<b>滝川市</b>		
書誌情報	滝川市史編さん委員会編 1962（昭和 37）年 『滝川市史』 滝川市.	
見出し	動植物	
執筆者	明示なし	
頁	123	内容／生息
備考		—
見出し	アイヌの伝説	
執筆者	明示なし	
頁	168-169	内容／アイヌの祖先伝承 [ユウコキカムイ（山犬の精を持った神）]
備考		—

<b>滝上町</b>		
書誌情報	滝上町史編さん委員会編 1976 『新撰 滝上町史』 滝上町.	
見出し	アイヌ地名と文献	
執筆者	明示なし	
頁	55	内容／アイヌ語地名 [オセウシ川（オシラネツプ右股）*1]
備考	*1：「雄柏熱布十二号の小学校の対岸に出ている川で、現在はオセウシになり、雄背牛地区となっているが、古くはオオセウシで、永田方正も「オオセウシ、狼多き処、狼出デ 夥シク鹿ヲ食ヒシ処ナリシガ今ヤ鹿尽キテ狼モ亦ナシ」と説明している。この付近では狼をヲヲセカムイ（叫ぶ神様）と呼んでいるから、この沢は昔狼が多くいた狼沢であったのであろう」	

伊達市	
書誌情報	渡辺 茂 1972 『新稿 伊達町史 上巻』 伊達町.
見出し	苦役に等しい開墾
執筆者	明示なし
頁	115-116 内容／出沒, 遠吠え
備考	—

端野町	
書誌情報	端野小史編集委員会編 1989 (平成元) 年 『端野の夜明け：端野小史第2集』 端野町.
見出し	拓殖／囚人・熊の不安
執筆者	明示なし
頁	115-116 内容／被害 (馬), 新冠牧場, 毒殺, 絶滅, 「移民の脅威とはならなかった」
備考	—

秩父別町	
書誌情報	秩父別町史編さん委員会編 1987 (昭和 62) 年 『秩父別町史』 秩父別町.
見出し	エゾオオカミ
執筆者	明示なし
頁	39 内容／生息, エゾシカの減少, 絶滅, 駆除, 賞金
備考	—

千歳市	
書誌情報	更科源蔵編著 1969 (昭和 44) 年 『千歳市史』 千歳市.
見出し	戸長役場時代／明治天皇の行幸
執筆者	更科源蔵
頁	187-195 内容／陸産物
備考	—
見出し	「アイヌ文化」の章：「血統」の見出し
執筆者	更科源蔵

頁	801-802	内容／アイヌ民族の祖先伝承 (*1)
備考		*1:「平取の方から移ったという人々で、日高幌尻だけの山を支配する神である熊が、人間の女に懸想して子供を産んだ子孫というのがある。それらの人々は礼式のとき頭に頂く冠に熊の頭の彫刻をつける。この熊との混血、あるいは狼(白犬と間違えられている場合が多い)が日本女性を妻にしたという伝説は各地に多いが、この科学的には否定される、一見荒唐無稽に思われる伝説も、古い狩猟時代に野獣と血縁になることにより、神である野獣が、血縁のつながる人間を訪れ易くするという事は、猟運に恵まれ生活に不安がないということであって、自然物を採集して生きた時代の、生きる不安から生まれた信仰の処産であるように思われる」
書誌情報		千歳市史編さん委員会編 1983(昭和58)年 『千歳市史:増補』 千歳市.
見出し		戸長役場時代／明治天皇御巡幸
執筆者		明示なし
頁		内容／陸産物
備考		—
書誌情報		千歳市史編さん委員会編 2010(平成22)年 『新千歳市史』 千歳市.
見出し		自然環境とその変遷／人為による生物相の攪乱
執筆者		明示なし
頁	114	内容／生息(推測)
備考		—
見出し		戸長役場と千歳村の行財政／千歳アイヌと狩猟／開拓使の捕殺奨励／／千歳アイヌと狩猟
執筆者		明示なし
頁	563-564	内容／オオカミ観(*1), 駆除, 賞金, 捕殺数(*2)
備考		*1:「明治初年の段階では、熊皮や熊肝は鹿皮などと共に一定の商品価値を持つものとされていたが、明治十年代以降になると、熊や狼の生息すること自体が北海道への移住・開拓の上で一種の阻害要因とみなされるようになってきたのである」 *2:「北海道全体の狼の捕殺数は明治十年の一二頭が十四年の一二一頭、十九年には四二二頭と年々増加しているが、被害が減少したことから明治二一年に捕獲奨励金が廃止された。地域別の捕殺傾向をみると、明治十年代では胆振・日高・十勝・釧路・根室方面など道東方面での捕獲が目立っていたが、明治十九年以降になると、石狩・渡島・檜山・後志方面といった道央・道南地方での捕獲が増加している」

### 忠類村

書誌情報	忠類村史編さん委員会 編 2000 『忠類村史』 忠類村.
------	-------------------------------

見出し	【エゾオオカミ】
執筆者	明示なし
頁	75 内容／生息（十勝） 松浦武四郎『東蝦夷日誌』、『大樹町史』（昭和四四年版）
備考	—

<b>月形町</b>	
書誌情報	月形町史編さん委員会 編 1985 『月形町史』月形町
見出し	開鑿
執筆者	明示なし
頁	127 内容／生息 引用／海賀直常『月形村沿革史』（*1）
備考	*1：「狼ハ室蘭方面ニ多ク石狩地方ハ尠シ狼ノ害ハ最モ甚シク実ニ恐ルヘキモノナリ故ニ開拓使ニ於テ狼一頭銃殺シテ其四肢ヲ差出ス者ニハ金拾円熊一頭ヲ獲タル者ニハ金五円ヲ与ヘタル程ナリ明治十五年後是ヲ廃止セラル漸次減少シテ奨励ノ必要ナキに依レリ」

<b>天塩町</b>	
書誌情報	天塩町史編さん委員会編 1971 『天塩町史』天塩町
見出し	動植物と自然環境
執筆者	明示なし
頁	108-112 内容（*1）／種類（シベリア系）、アイヌ語名（「オオセ・カムイ」）、肉は食べない、エゾシカとの関わり、被害（家畜）、賞金、駆除、新冠牧場、毒殺、オオカミとイヌを交配させる、民話（オオカミの群れを火で退けたアイヌの娘*1）、絶滅、標本
備考	*1：新篠津村史の内容とほとんど重複する。 *2：「あるメノコ娘が隣りのコタンに用足しに行つての帰りみち、日が暮れて暗がりの道を馬にまたがって家路を急いだ。原始林がおおいかぶさつて空の薄明かりも見えない小道にさしかかったとき、急に馬が棒立ちに止まった。年若な乙女の旨は不安におののき、恐怖の念が彼女の全身をしびれさせた。一瞬、前方の暗がりをにらんでいた彼女の目に、青白く光るケモノの両眼がうつつた。しかも光る二つの目はまたたくまにふえはじめ、一匹や二匹ではなく、前後、左右に音もなく無数に光り、近づき迫ってくる様子なのである。 彼女は瞬間に感じた。オオカミの大群に包圍されたことを。しかし、同時に、彼女は落

	<p>着きの冷静さを取戻し、危急の防戦措置としてぎりぎりに身がまえることを忘れなかった。突嗟に左手が動いて腰のマキリ（小刀）を抜き放ち、刃先を植えににぎりしめるとともに、右手はふところからマッチを取り出した。女性の身で危急の場合にこれだけの護身のかまえができるのも常に野性の動物が身辺間近に現れることが多い環境にあることと、この民族特有の健気な生活態度がそうさせるのだろう。／こうしている間もオオカミの群れは、じりじりと間近に迫ってきた。そして、ついに、なかの一匹が飛んで馬の腹下をくぐった。同時に他の一匹が宙を飛んで彼女の頭上を越えた。彼女はマキリをかざしたが届かなかった。続いてこの馬の腹下くぐりと宙飛びが交互に数匹にふえてはじまった。オオカミが腹下をくぐるのは馬の腹を爪やキバで引き裂くことをねらい、宙を飛ぶのは偵察からはじまり、威嚇にうつり、さらに騎乗者を傷つけるための攻撃戦法だという。／馬は恐怖してすくみ、首を上下に振って立ち上がり、足を乱して全身を不規則に動かしはじめる。もう一刻を争うべきときである。彼女はスキをみてマッチを擦り、首に結んだタオルに火をつけた。右手でこれを振りまわすと火輪を描いた。オオカミはひるみ、一瞬にして攻撃をやめ、周囲を退きはじめた。／危機一髪、みごとな撃退戦法である。彼女は火のついたタオルをふりかざし、馬のあぶみをけて一目散ついに虎口ならぬ狼口を脱したという。以上の話は、一八八七年（明治二〇）、千歳郡長都村にあった実話である。これと似た話は道東、道北にもあったと、現地の古老は語っている」</p>
--	---

弟子屈町	
書誌情報	更科源藏編 1949（昭和24）年 『弟子屈町史』 弟子屈町
見出し	畜産
執筆者	明示なし
頁	20-21
	内容／被害（馬）、エゾシカの減少、新冠牧場、毒殺、絶滅（*1） 引用／明治十六年の七月に川上郡の土人の調査に出張した根室県の、赤壁、酒井といふ二人の復命書
備考	*1：「鹿の減たが為に狼が馬を食ひ荒す原因になつたといふやうに書いてあるが、鹿の減少したのは明治十二年の大雪の為であり、それで鹿がほとんど全滅に瀕し、その為に新冠御料牧場の全身である新冠牧場では、牧馬が全滅しさうになり、狼退治の為に東京、横浜のストリキニイネだけではたりなくて、ニューヨークまでも注文してやつと危機を脱し狼を絶滅させたといふのが、北海道の鹿と狼と馬の興亡の歴史なのである。この狼の為硫黄運搬の駄馬が荒されたことは先の報文にも見える通りであるが、実際はもつとひぢかつたらしく、当時駄送に従事してゐた人の話によると、一晩に五頭も六頭も斃され、しまひには家の前までも追つて来て馬を斃すといふ有様で、とても駄送の仕事ができなくて引上げてしまつたといふことであるところをみると、高山鉄道の敷設を促進させたかげの力として、或いはこの狼の被害も全く縁のないことではないかとも想像され

	るのである」  (熊牛台) 餓狼馬ヲ害スル事昨年末殊ニ甚シク死傷既二十四頭偶々母馬ハ喰殺サレ其子ハ臀肉ヲ喰ヒ取ラレタルニ逢フ。其惨状殆ンド熟視スルニ忍ヒス。鹿ノ減少セシハ蓋シ馬ノ害セラルハ甚シキ一因ナリト聞ク。
見出し	生活
執筆者	明示なし
頁	32-33
備考	内容／オオカミ神 (アイヌ文化)
	—


戸井町	
書誌情報	戸井町史編纂委員会編 1973 (昭和 48) 年 『戸井町史』 戸井町.
見出し	第三章 伝説と逸話／第十五章 狼と鹿の話／一、戸井と狼
執筆者	
頁	402-406
備考	内容／オオカミ観 (*1), 種類 (シベリヤに棲むものと同じ種類), 鯨を食べる, アイヌ語名 (オオセカムイ), エゾシカとの関わり, 賞金, 駆除, 新冠牧場, 毒殺, 地域の記録 (*2), 絶滅  *1: 「昔『オオカミがくるぞ』と、おどした狼は今北海道にはいないが、昔は下海岸にもたくさんいて、子どもたちばかりではなく大人も恐れたのである。昔のこわいもの、恐ろしいものの双璧は『モンコ』と『オオカミ』であったのである。昔の修身の教科書に『オオカミがキタ、オオカミがキタ』とたびたび人をだました子が、ほんとうにオオカミが出てきた時に、「オオカミがキタ、たすけてくれ」と叫んだが、またうそをいっているのだろうと誰も助けてくれなかった』という内容のことが書かれ、子どもが狼に追われて、追いつかれそうになっている挿絵が載っていた。／修身の教材になった、狼のいた村はどこかわからないが、昔は全道各地に狼がたくさんいて、人畜に危害を加えたのである」  *2: 明治十三年頃、木古内地方でも、狼のために馬の放牧が不可能なこともあったと記録に残っている。この頃は戸井地方にも狼が出没し、「オオカミがくるぞ」といって泣く子をだましたものと思われる。
見出し	資料 (補遺) / 戸井町史年表
執筆者	明示なし
頁	1241
備考	内容／賞金
	—

洞爺村	
書誌情報	洞爺村 編 1976 『洞爺村史：本編』 洞爺村
見出し	新道開発
執筆者	明示なし
頁	437 内容／生息，脅威
備考	—

椴法華村	
書誌情報	椴法華村編 1989（平成元）年 『椴法華村史』 椴法華村.
見出し	椴法華村発達史
執筆者	明示なし
頁	96 内容／賞金，被害（家畜）
備考	—
見出し	年表
執筆者	明示なし
頁	1259 内容／賞金，捕獲 [*1]，被害（馬*2）
備考	*1：1878（明治11）年「駒ヶ岳近傍より狼を二頭生獲し東京博物館に差出すように十八大区長、総代に指令あり。『明治十一年各区文移録』」 *2：1880（明治13）年9月「この年、一月より九月までに、椴法華村で狼に害され死傷する馬五頭、傷を受けたもの一頭、熊害により死傷するもの一頭。『管内郡区役所文移録』」

苫小牧市	
書誌情報	苫小牧市 1975 『苫小牧市史 上巻』 苫小牧市
見出し	哺乳類
執筆者	明示なし
頁	170 内容／生息，絶滅（*1），骨（植苗貝塚から出土）
備考	*1：「北海道を代表したもうひとつの猛獣エゾオオカミは、明治二十八年の記録を最後に絶滅した」
見出し	植苗貝塚
執筆者	明示なし
頁	263 内容／遺存体（植苗貝塚，柳館貝塚から出土*1）
備考	*1：「キツネとかオオカミなどは食糧というよりはむしろ、衣服の素材として捕獲される

		ものと思われる」
見出し		巫術と呪術
執筆者		明示なし
頁	351	内容／アイヌ民族の憑神
備考		—
見出し		明治初期の牧畜業
執筆者		明示なし
頁	1689	内容／被害（馬） 引用／『民間牧畜実況取調復命書』（*1）
備考		*1：明治十六年の『民間牧畜実況取調復命書』から苦小牧村と植苗村について「右両村共ニ牧畜ニ適シ民間放牧スル所ノ馬数甚ダ多ク皆近傍ノ山野ニ放育シ来リ一定ノ牧場ヲ区画セズ、放牧者ハ概ネ固陋ニシテ旧慣ニ安ンジ馬種改良ノ気象ニ乏シ、此辺ハ熊狼ノ害最モ甚シク毎年数十頭ノ損害被ラザルナシ然ルニ本年ハ被害甚ダ少ナク仔ノ産殖甚多シト云フ、是全ク本年千歳近傍ニ於テ数十頭ノ熊狼ヲ獲殺セシ為ナリ」と述べている

<b>豊頃町</b>		
書誌情報		豊頃町史編さん委員会編 1971（昭和46）年 『豊頃町史：本編』 豊頃町.
見出し		第三編 農業／第三章 畜産／
執筆者		明示なし
頁	469	内容／被害（牛*1）
備考		*1：「附近の牧場では牧夫が一頭の牛の睾丸を洗浄していたので、その理由を問うと、この附近は狼が多く、このための子牛の睾丸を食い切られたので、薬で洗っているとのことであった、とも記している。推して当時の牛の飼い方がしれよう」
見出し		第三編 農業／第五章 災害／鳥、獣害
執筆者		明示なし
頁	541	内容／エゾシカの減少による絶滅
備考		—
見出し		第五編 商業／第一章 商業の歩み
執筆者		明示なし
頁	784	内容／「  金平楼解体時壁より出る くま、おおかみの値段表」（写真*1）
備考		*1：本文中では言及されない。酒井庄太郎『十勝史』1907（明治40）年が典拠の可能性。

豊富町	
書誌情報	豊富町史編さん委員会編 1986（昭和 61）年 『豊富町史』 豊富町史編さん委員会.
見出し	第1編／第4章 動物／一 哺乳類／Canis lupus hattai
執筆者	明示なし
頁	23
	内容／被害（「馬、牛、豚など」）、賞金、駆除、絶滅、分布（*1）
備考	*1：「天北一帯は冬季間オオカミの主餌であったシカがいなかったこともあって（天北一帯のシカは積雪多い冬季間は、十勝地方に移動し越冬していた）もともとオオカミの生息数が少ない地域であったが、前記の理由により、ここも明治二十年代末には絶滅したと見てよい」
見出し	第4編 部落史／第1章 町内各部落の変遷／
執筆者	明示なし
頁	228
	引用／『北夷談』
備考	—

奈井江町	
書誌情報	奈井江町史編さん室 編 1975 『奈井江町史』 奈井江町.
見出し	エゾシカの盛衰
執筆者	明示なし
頁	15
	内容／生息，エゾシカの減少による絶滅
備考	—

長沼町	
書誌情報	長沼町史編さん委員会 編 1962 『長沼町の歴史 上巻』 長沼町
見出し	「前進基地千歳村」
執筆者	明示なし
頁	
	内容／捕獲
備考	—
書誌情報	長沼町史編さん委員会編 1977 『長沼町九十年史』 長沼町.
見出し	動物
執筆者	明示なし
頁	78
	内容／生息

備考	—
見出し	「明治天皇行幸時の千歳の概況」
執筆者	明示なし
頁	269-270 内容／捕獲（陸産物）
備考	—

<b>七飯町</b>	
書誌情報	七飯町 1976 『七飯町史』七飯町.
見出し	村むらの創業と発展
執筆者	明示なし
頁	235-236 内容／捕殺（*1）
備考	*1：「この時鶴野には人家がなく、四、五軒になったのは、相当後日で、当時ここには狐と狼が多く、これらに随分悩まされたが、狼は手やりで刺殺した」

<b>名寄市</b>	
書誌情報	名寄市史編さん委員会編 2002 『新名寄市史』名寄市.
見出し	第5部 自然／第2編 名寄盆地の植物と動物／脊椎動物／
執筆者	明示なし
頁	68 内容／生息
備考	—

<b>南幌町</b>	
書誌情報	南幌町史編纂委員会 1962 『南幌町史』南幌町.
見出し	町のどうぶつ
執筆者	明示なし
頁	68 内容／生息
備考	—

<b>新冠町</b>	
書誌情報	新冠町史編さん委員会 編 1966 『新冠町史』新冠町

見出し	新冠町史のあらまし／新冠小史
執筆者	明示なし
頁	12
備考	内容／エゾシカの減少，被害（馬）
見出し	部落発達のあしあと／節婦郷土史
執筆者	明示なし
頁	96-97
備考	内容／生息
見出し	アイヌ文化／衣服
執筆者	明示なし
頁	
備考	内容／サパウンペ
見出し	新冠御料牧場／新冠の狼
執筆者	明示なし
頁	585-586
備考	紹介／エドウィン・ダンの手記
書誌情報	新冠町史編さん委員会編 1996 『続新冠町史』新冠町.
見出し	植物・動物／エゾオオカミ
執筆者	明示なし
頁	32
備考	内容／エゾシカの減少，被害（馬），絶滅（*1） *1：「最後の一头が仕留められたのは明治末期のこと、新冠においてであると言われている」
見出し	野生動物の盛衰
執筆者	明示なし
頁	37-38
備考	引用／八木勉『新冠動物盛衰記』
見出し	新冠御料牧場経営略史
執筆者	明示なし
頁	280
備考	引用／『牧場沿革誌』（*1） *1：「獯猛ナル狼犬兎馬ヲ惨害スルコト此利益甚シ」
見出し	日高の畜産と新冠の畜種変遷／馬産に適した日高の自然環境
執筆者	明示なし
頁	586
備考	内容／被害（馬），毒殺

狩太村（現・ニセコ町）	
書誌情報	狩太町史編纂委員会 1960 『狩太町史』 狩太町.
見出し	狼のこと
執筆者	明示なし
頁	9 内容／目撃，オオカミ観（アイヌ*1） 引用／「五月二十八日日誌」
備考	*1：「アイヌ人は必ずこれを捕獲しないという。（狼の慄悍さに、一種の神性を認めたからであろう）」

沼田町	
書誌情報	沼田町 編 1982 『新編沼田町史』 沼田町.
見出し	シカの角、オオカミ
執筆者	明示なし
頁	105 内容／エゾシカの減少，被害（家畜，馬），絶滅
備考	—

根室市	
書誌情報	根室市 編 1968 『根室市史 上巻』 根室市.
見出し	第一編 幕藩時代／第一章松前藩と根室／第一節 蝦夷地の推移／動植物の分布
執筆者	明示なし
頁	29 内容／生息
備考	—
書誌情報	根室市 編 1968 『根室市史 下巻』 根室市.
見出し	第三編 畜産と経済／第三章 畜産と林産／第一節 初期の畜産
執筆者	明示なし
頁	457-458 紹介／「休明光記」
備考	—

登別市	
書誌情報	登別町史編纂委員会編 1967年 『登別町史：開基百年記念』 登別町.
見出し	第3編部落史：一、幌別地区
執筆者	明示なし
頁	434-435
	内容／生息（推測*1）
備考	*1：「明治二十一年（一八八八）には役場から有害獣の報告記録が出されている。これによれば熊の害は四月下旬から十一月下旬で、狼出没常なしとっている。鹿を食糧とする狼は、鹿のたくさんいた幌別にもいたことは想像に難くない。また登別牧場では明治十六年、熊及び野犬に馬二頭をたおされた記録がある。同年には幌別だけで八頭の熊が獲殺されている」
見出し	第3編部落史：六、富浦地区
執筆者	明示なし
頁	474
	内容／オオカミはいなかった（*1）
備考	*1：「明治中期以降も狐がたくさんいて、よく人家の近くまで姿を現した。ひと晩中化かされて山の中を歩かされたという話を聞く。しかし熊や狼を見かける人はいなかったようだ」
見出し	第4章 往事を語る／二、古老座談会
執筆者	明示なし
頁	1201-1203
	内容／古老座談会 [エゾシカとの関わり、オオカミはいなかった（*1）]
備考	*1： 「幌別会場 とき 昭和四十年五月二十日 場所 登別町中央公民館和室 <出席者> 町史編さん関係 町史編纂委員長 志賀裕 〃 委員 前川悦郎 〃 委員 大山吉次 〃 委員（司会）柳沼高杉 古老 幌別地区 津村アイ（明二〇・一〇・一三生） 〃 竹村タケ（明二一・一二・一四生） 〃 三好秀一（明二五・七・二五生） 〃 佐野督（明二八・三・二八生） 札内地区 三原順一（明三五・四・八生）

	<p>高山地区 長内栄久（大九・一一・一生） （略）</p> <p>司会 （略）鹿と狼の関係ですが、狼は鹿を主食にして繁殖していた時代が北海道にあるそうですが、その狼についてご記憶はないですか、話を聞いたとか.....</p> <p>三好 私は幌別では聞いたことはありませんね.</p> <p>佐野 この辺には狼はいなかったようですね.</p> <p>三好 伊達男爵の家老の田村さんね、雄一郎さんという人は、伊達の町で狼に追われたことが何回もあると言っていました.</p> <p>司会 そうですか. ほほう.....</p> <p>三好 それは明治二十三年頃の話ですからね.</p> <p>志賀 それは伊達の話だから、ここではあてはまらないね（笑い）」</p>
見出し	第4章 往事を語る／二、古老座談会
執筆者	明示なし
頁	内容／古老座談会 [オオカミはいなかった (*1)]
備考	<p>*1：登別温泉会場</p> <p>とき 昭和四十年五月十九日</p> <p>場所 登別温泉旅館梅之家</p> <p>&lt;出席者&gt;</p> <p>町史編さん関係</p> <p>町史編纂委員長 志賀裕</p> <p>〃 委員 日野謙一</p> <p>〃 委員（司会）柳沼高杉</p> <p>古老</p> <p>登別温泉地区 吉田富次郎（明一七・一〇・二四生）</p> <p>〃 石川脩次（明一九・八・一生）</p> <p>〃 堅田久次郎（明二九・九・一生）</p> <p>〃 秋吉勇雄（明三〇・一・一〇生）</p> <p>カルルス地区 日野昇（明治二二・三・二七生）</p> <p>（略）</p> <p>明治中期以降も狐がたくさんいて、よく人家の近くまで姿を現した。ひと晩中化かされて山の中を歩かされたという話を聞く。しかし熊や狼を見かける人はいなかったようだ。</p>

## 函館市

書誌情報

函館市 1980 『函館市史：通説編 第1巻』 函館市.

見出し	動物／エゾヒグマ
執筆者	明示なし
頁	76
備考	内容／絶滅
	—

<b>東神楽町</b>	
書誌情報	堀口 喜三郎 編 1973 『東神楽町史』 東神楽町.
見出し	動物
執筆者	明示なし
頁	38-39
備考	内容／生息, エゾシカとの関わり
	—

<b>東川町</b>	
書誌情報	東川町史編集委員会 1995 『東川町史 第2巻』 東川町.
見出し	総説／動物／明治期の東川の動物たち
執筆者	明示なし
頁	39-40
備考	内容／遭遇, 絶滅, 生息 引用／明治23年「上川離宮建設地調査書」
	—

<b>東藻琴村</b>	
書誌情報	東藻琴村史第二巻編さん委員会 編 1972 『東藻琴村史』 東藻琴村.
見出し	第3節 開墾／四, 開墾のころの苦勞／鳥獣の害
執筆者	明示なし
頁	52-53
備考	内容／賞金
	—
書誌情報	東藻琴村史第二巻編さん委員会 編 1999 『東藻琴村史 第2巻』 東藻琴村
見出し	前編／第2章 開拓／六, 自然とのたたかい／鳥獣の被害と恐怖
執筆者	明示なし
頁	37
備考	内容／賞金, 生息は疑問 (*1)
	*1:「史料などから狼がいたかどうかは疑問であるが、熊の五円、狼の七円はかなりの高

	額である。しかし、鉄砲を持たない開拓者には手の施しようのない奨励金であったと思われる」
--	---

比布町	
書誌情報	比布町史刊行委員会編 1964（昭和39）年 『比布町史』 比布町.
見出し	脊椎動物
執筆者	明示なし
頁	102-103 内容／生息（推測）
備考	—
書誌情報	比布町史編さん委員会 編 1985 『比布町史 第2巻』 比布町.
見出し	哺乳類
執筆者	明示なし
頁	20 内容／ニホンオオカミ（比喻？*1）
備考	*1：「比布町の開拓当初は、熊、鹿、兎などが至る所に出没して人畜に危害を加えたり、トウモロコシ、麦類など農作物に損失を与えたりすることが多く、人間生活にとってまことに迷惑な存在であったが、開拓が進むにつれて山中に深く入り、ほとんど人目に触れることもなくなってきた。なかには、ニホンオオカミやニホンカワウソ（四国の一部で確認されるのみで、肥大したテンやミンクなどと見間違ふことが多いという）のように、本道では絶滅とみられているものもいる」
書誌情報	比布町史編さん委員会 編 1997 『比布町史 第3巻』 比布町.
見出し	記録にのこる動物たち
執筆者	明示なし
頁	34 内容／生息（推測）
備考	—

美唄市	
書誌情報	美唄市史編さん委員会編 1970（昭和45）年 『美唄市史』 美唄市.
見出し	野生動物の盛衰
執筆者	明示なし
頁	180 内容／エゾシカの減少による絶滅，種類（北方系のおおかみ），被害（家畜），毒殺，絶滅
備考	—
書誌情報	美唄市百年史編さん委員会編 1991 『美唄市百年史：通史編』 美唄市.

見出し	山地帯にみられるセキツイ動物
執筆者	明示なし
頁	38
備考	内容／エゾシカの減少による絶滅
見出し	氷河期の動物たち
執筆者	明示なし
頁	57
備考	内容／マンモス動物群
備考	—

<b>美深町</b>	
書誌情報	美深町史編さん事務局 編 1971『美深町史』 美深町.
見出し	資料：郷土の動物／獣類
執筆者	明示なし
頁	9
備考	内容／生息（シベリヤオオカミ）
備考	—

<b>平取町</b>	
書誌情報	渡辺 茂,・河野 本道 編 1974『平取町史』 平取町.
見出し	前近代後期／主なる動物
執筆者	明示なし
頁	134
備考	内容／生息
備考	—

<b>広尾町</b>	
書誌情報	広尾町史編纂委員会編 1960『広尾町史』 広尾町.
見出し	往昔の記録
執筆者	明示なし
頁	1007
備考	内容／捕獲，賞金（*1）
備考	*1：「明治十四年（一八八一）広尾、当縁二郡各村戸長からの報告によると、この年捕獲した熊は四十三頭、オオカミ五頭となっていて前年に比較し熊では三十頭、狼では三頭の増となっている。そしてこの捕獲に手当金として二百五十円を支出していて、価格は

	熊が七十円、狼が十二円となっている。このように捕らえたものは、毛皮となり、熊の膽となり或いは角として遠く本州方面へ十勝の特産品として移出されたのである」
--	--

風連町	
書誌情報	風連町史編さん委員会 編 1967 『風連町史』 風連町.
見出し	動物
執筆者	明示なし
頁	11
	内容／エゾシカとの関わり (*1), 「エゾ熊」との比較 (*2)
備考	<p>*1: 「シカの減少によってアイヌとともに大きな打撃をこおむったのは、エゾオオカミである。エゾオオカミはシカとはちがい、シベリヤに本拠をもつ大陸系の野獣で、北海道にはシカ、狸などの南方の動物とが混在していた。このオオカミはシカの減少によって生存を脅かされたばかりでなく、山野に身をしのばせて、虫けらまでもあさって食い命をつないでも、冬ともなればかくれ場もなく、雪の下に体をさらけ出し、行動の自由も束縛されて猟師のよき的となった。だんだん開拓も進んで牛馬が飼育されるようになったころ、飢えにさまようオオカミは背に腹はかえられず危険をおかして牧場をねらい、遠く離れた山野のオオカミもだんだんと人の住む地方に移動し、集団で、家畜を襲った。このようなことから開拓に大きな障碍を来たしたので、官庁は獲ったオオカミを買い上げて退治を奨励することにした、それからはオオカミは急に減りはじめ、明治20年頃には山野からほとんど姿を消してしまった。このようにシカとオオカミは未開の地に生存していたのである」</p> <p>*2: 「オヤジの愛称で呼ばれるエゾ熊は北海道を代表する動物で、今でも本州の人々は北海道といえば、まず熊を連想する位に有名である。オオカミと同じくこの熊も人家附近に出没しては農作物を荒したり、人畜に大きな被害を加えることが多かった。冬は穴の中に冬眠し、5・6月ころになると、このことはい出しては餌をもとめてあるくのである」</p>
見出し	開拓のころ
執筆者	明示なし
頁	38-39
	内容／エゾシカとの関わり
備考	—

深川市	
書誌情報	深川市 編 1994 『新深川市史』 深川市.
見出し	岩村通俊の視察

執筆者	明示なし
頁	107-108
	引用／明治18年8月に上川原野に視察にきた司法大輔岩村通俊の紀行文『上川紀行』
備考	<p>*1：「明治十八年八月、余、司法大輔の職にあり、命あつて北海道及び奥羽の諸裁判所を巡視す。すなわちその九日をもって東京を發して十五日札幌にいたる。この行別命ありて上川に至り、その原野を検す、余さきに開拓判官たりし時、上川の曠漠肥沃なるを聞きてその開拓に意あり、いくばくもなくして官をやめて果たさず、後、会計検査院長を以て本道を巡視するや、究問すこぶる密、ますますその耕牧に適するを知り、京に帰るに及んで、状を具してこれを当路に言うことはなほだ悉すも、未だ一たびもその地を踏まざるを憾む、今やこの命あり、喜び望外に出ず、上川はもとより未だ人跡を通ぜず、昼はすなわち舟を石狩側に遡らすに、まさに傾覆せんとすることしばしばなり、夕べはすなわち幕を張って山に臥すに、狼吠え、熊哮ぶ、その難苦知るべきなり、よつて他年開拓の業なり、道路すでにたいらかに、人煙また蕃く、その間を往来するに、馬に車に、意の如くならざるなきを想わば、すなわち誰かまた今日の状を知る者あらんや」</p>
見出し	第2編北海道と深川の開拓／第2章 深川の開拓
執筆者	明示なし
頁	125
	引用／1888（明治21）年10月14日付『北海道毎日新聞』野中掬泉「上川紀行」
備考	<p>*1：「九月二十二日 午前七時空知太を發す。今日小田恭包氏別れて雨竜野に向う。氏は淡路の人なり。年尚ほ壯といへども夙に開墾事業に志し、曩に札幌農学校を修め卒業の期己に近づき又這回永山長官巡視の挙あるを機会として、此処迄隨行し余て囑望する処の雨竜原野に至りて地を相し招來の計画を為さんと欲し單騎雨竜に向へるなり。今日向ふる所は昨日に反し大道砥の如く又髮の如く一同馬を驅って行く。行くこと數町樹林に中斷する所、茅芦雜生す標杭あり、左を北海道庁用地と為し右を樺戸監獄署用地となす。大道より左石狩川を距る僅に八丁余なりと、宇良畝内覺脂を経て坂あり熊穴坂と云ふ。昨年此地を開墾するに当り囚徒一大土窟を發見す。皆云ふ是れ古昔源延尉の此地方を過ぎりし時居住せし跡ならんと、偶々一土人來り之れを見て曰く彼の懼るべき熊の窟なり。蓋し昨年まで棲息せしものならんと。是れに由り字して熊穴坂と云へり。進んで字大谷地に至る。地質茫地、大なる排水を通し二ヶ所に板橋あり。又江部乙の板橋を渡り前途に長坂あり頂上高さ海面を抜くこと三十八尺なり。然れども其紅梅頗る低く以て車を通すべし、坂のある処狼谷と云ふ。常に狼糞あるを以て此名あり。進んで須磨馬内に至る。今だ至らざる數町路傍の林間に茅屋あり、土土工に従事する囚徒の宿泊する処なりと、須磨馬内橋を渡る。一昨十九年十一月三日高畑氏此近傍に於て熊大小を銃殺し獲たりと」</p>

別海町	
書誌情報	別海町百年史編さん委員会 編 1978 『別海町百年史』別海町
見出し	第五章 別海町の動物／ふえてきたエゾシカ／エゾシカの衰退
執筆者	明示なし
頁	88-89 内容／エゾシカの減少による絶滅,
備考	—

北竜町	
書誌情報	北竜町 編 1968 『北竜町史』 北竜町.
見出し	獣たち
執筆者	明示なし
頁	3 内容／種類（本州の「オオカミ」と別種のものでシベリヤの狼と同種）
備考	—

穂別町	
書誌情報	穂別町史編纂委員会編 1991 『新穂別町史』穂別町.
見出し	巫術と呪術
執筆者	明示なし
頁	203-204 内容／アイヌ民族の憑神
備考	—

幌加内町	
書誌情報	幌加内町史編さん委員会 編 1971 『幌加内町史』 幌加内町.
見出し	ほろかないの動物
執筆者	明示なし
頁	26 内容／生息（推測）
備考	—

幌延町	
書誌情報	白山 友正 編 1974 『幌延町史』 幌延町.
見出し	開拓前史
執筆者	明示なし
頁	190  引用／「協和私役」
備考	*1:「協和私役」における「是熊及狼の鯨肉を引き山に入り、或いは白日此の間にて集り食ひ、人の過るを見て逃れ避るならん。人をして心寒からしむ」部分を紹介

本別町	
書誌情報	本別町史編さん委員会 編 1977 『本別町史』 本別町.
見出し	サマイクルの干し場
執筆者	明示なし
頁	92  内容／アイヌ民族の伝承 (*1)
備考	<p>*1:「義経山（二九四メートル）は昔、サマイクル・サンとよばれた。サマイクルの干し棚という意味である。サミクルは、人間の生活に必要ないろいろな事を教えた文化神である。／ある年、サマイクルが十二匹のオルケオカムイ（おおかみ）を引きつれて、いまの義経山に家をつくって住みついた。そして、まいにちのように幾匹かのオルケオカムイを、かわるがわるつれては狩りに出て、とった獲物の肉は、頂上に干した。狩りに出ないオルケオカムイは、干し場の番をした。十二匹のオルケオカムイには、それぞれ名前があったという。</p> <p>サマイクルが狩りに出て、散らばっているオルケオカムイを呼び集めるときには、いつもチョーチョと連呼した。すると、たちまち、サマイクルのところに駆け寄っていくのであった。アイヌが犬を呼ぶとき、チョーチョというのはサマイクルをまねたのだという」</p>
書誌情報	本別町史編さん委員会 編 1992 『本別町史：追補』 本別町.
見出し	一二匹のおおかみ
執筆者	明示なし
頁	340  内容／アイヌ民族の伝承 (*1)
備考	<p>*1:「一二匹のおおかみ このころ、サマイクルはこの地方にやってきて、義経山に住みついた。そして、熱心にアイヌたちに生活の技術などを教え、サマイクルカムイとして尊敬されていた。／彼は一二匹のオルケオカムイ（おおかみ）を従えており、毎日何匹かオルケオカムイを連れて鹿や熊を獲りにでかけ、獲物は頂上近くの険しい崖で干し肉にした。残されたオルケオカムイは干し肉の番をした。</p>

	一二匹のオルケオカムイにはそれぞれ名前があって、サマイクルが狩りに連れていく者の名を呼ぶとすぐに駆け寄ってきた。サマイクルが山の中で散らばっているオルケオカムイを呼ぶときは、いつも「チョーチョ」「チョーチョ」と呼んでいた。アイヌが犬を呼ぶとき「チョーチョ」と呼ぶのはサマイクルカムイのまねだといわれる」
--	---

増毛町	
書誌情報	新增毛町史編さん委員会 編 2006 『新增毛町史』 増毛町.
見出し	明治時代
執筆者	明示なし
頁	1007  引用／「北海道巡行記・根室北見手塩国巡行記 乙 明治十二年（一八七九）」
備考	*1：開拓使八等属酒井忠郁が、明治12（1879）年5月から各地を巡行し、各地の状況を詳細に記した「北海道巡行記・根室北見手塩国巡行記 乙 明治十二年（一八七九）」の記載を「天塩国増毛郡」部分を紹介。物産の項の「禽獣」に「狼」がある
見出し	史資料・補遺編／野生動植物の記録
執筆者	明示なし
頁	1126  内容／エゾシカとの関わり，捕獲記録，賞金
備考	—

松前町	
書誌情報	松前町史編集室 編 1984 『松前町史：通説編 第1巻上』 松前町.
見出し	原始・古代の松前／狩猟
執筆者	明示なし
頁	149  内容／骨（貝塚からの出土*1）
備考	*1：「漁労、食用植物の採集とともに、狩猟は縄文人にとって重要な生業であった。貝塚からは食用にされたエゾシカ、ヒグマ、キタキツネ、エゾタヌキ、カワウソ、テン、ウサギ、エゾオオカミ、イノシシなどの骨が出土する」
書誌情報	松前町史編集室 編 1988 『松前町史：通説編 第1巻下』 松前町.
見出し	明治道政下の松前／各産業の近代化／熊による畜産被害
執筆者	明示なし
頁	538-539  内容／被害（馬*1）
備考	*1：「近世から明治初期にかけての馬を主体とする畜産業の最大の隘路は、狼と熊の馬に対する被害であった。明治十四年八月二十日の『函館新聞』雑報によれば、「福島郡にて狼害の馬二十五頭、熊害の馬二十四頭、通計四十九頭此の価格金九百六十五円、同津軽

	<p>郡にて狼害の馬八頭（熊害無し）、此の価格百十一円五十銭、…」とあって、熊害と同様に狼の馬に対する害が多かったことを示唆している。さらに二十年七月二日の『函館新聞』では、「六月中松前郡に於て獲殺せし猛獣ハ原口村ヲクスエ沢に於て狼六頭熊六頭獲殺」とあり、さらに二十二年一月二十二日の同新聞では、「客歳七月より十二月まで松前郡に於て獲殺したる狼の数ハ三十一頭、熊十一頭此の手当金額百二十六円なり獲殺人ハ重ニ勇払石狩辺の旧土人なりといふ」とあってこの時点まで狼害が多く、勇払や石狩付近の旧土人の狩猟の名手を招いて駆除するという状況であった。しかし、二十三年から二十四年の大雪と厳冬のためか、以後北海道の狼は絶滅したといわれている</p>
--	---

丸瀬布町	
書誌情報	丸瀬布町史編集委員会 編 1994 『新丸瀬布町史 下巻』丸瀬布町.
見出し	方言と伝説／伝承／ユウカラ・ウエペケレ
執筆者	明示なし
頁	580-612 内容／「ユウベツ文化」としてのアイヌ民族伝承
備考	*1：オオカミに言及があるのは13件ある伝承の摘抄中、①「アイヌの台地で狼がこう語りました」、②「眠りを与えるお婆さんの話」（「狼の嫁さん」）、③「トミサンベツ・シヌタツプ・ウン・ポイヤウンベのユウカラ」（「ホロケウ神」）、④「『氷の上になが転んだ』に始まる、イタク・ウコラムヌカラ」（小さな狼の子）の4件。

三笠市	
書誌情報	三笠市史編さん委員会 編 1993 『新三笠市史：通史編』三笠市.
見出し	ほ乳類
執筆者	明示なし
頁	21-22 内容／種類（シベリア系）
備考	—

南富良野町	
書誌情報	南富良野町史編さん委員会 編 1991 『南富良野町史 上巻』南富良野町.
見出し	オオカミ（ <i>Canis lupus hattai</i> ）
執筆者	明示なし
頁	16 内容／生息（推測*1）
備考	*1：「オオカミが当町にかつていたことを示す具体的な資料はないが、明治一〇ごろまで

	<p>はオオカミが全道的に広く生息していたらしいことと合わせ、生息していたことは確実であろう。本道のオオカミは彼らの主餌であった鹿の生息数の減少に伴って家畜として移入した馬・牛・豚などを群れをなして襲い、牧場経営が成り立たない程の被害を及ぼしたことから、開拓使が捕獲奨励金（年次によって金額が異なるが一頭につき二円から一〇円を支給）を出してまでオオカミの駆除を奨励した。そして最後にはエドウィン・ダン（開拓使農学教師）の進言で毒餌を使って駆除した。それが原因で本道のオオカミは明治二〇年代末までにはとうとう絶滅してしまった」</p>
--	--

室蘭市	
書誌情報	室蘭市総務部総務課 編 1981 『新室蘭市史 第1巻』 室蘭市.
見出し	片倉家の道路開削
執筆者	明示なし
頁	650
	内容／生息, 出没, 脅威 (*1)
備考	<p>*1:「絵鞆半島や室蘭が全く未開の地であったわけではない。これよりさき幌別郡を支配していた片倉小十郎は明治三年七月に角田藩石川邦光が支配を免ぜられた後、この室蘭郡をも支配しており、輪西、チリベツの両村は、邦光の旧臣らの手でわずかながら開墾していた。そのころ絵鞆半島は無人の陸地で熊、狼をはじめ野犬がたむろしていたが、片倉小十郎は漁場を開く計画を試みた。／同年九月、国分喜右門、片岡慶次郎を遣し、アイヌ七人を率いて幌別郡鷺別村字トリエより室蘭港、絵鞆に通じる里道を測量した。が、十一月に入り、寒さがきびしく、かつ雪のため測量を中止し、翌四年雪どけを待つて移住者十人、アイヌ二十人を募り、河田新太郎、大野勇治らを中心に測量させ、里道十二里二十二町を開いた。だが、熊、狼などの出没を恐れ定住するものはいなかった」</p>

芽室町	
書誌情報	芽室町 1982 『芽室町八十年史』 芽室町.
見出し	和人の往来
執筆者	明示なし
頁	20
	内容／生息
備考	—
見出し	移住のころ
執筆者	明示なし
頁	33
	内容／生息
備考	—

妹背牛町	
書誌情報	妹背牛町編 1979 『妹背牛町史』 妹背牛町.
見出し	野生獣
執筆者	明示なし
頁	99 内容／生息
備考	—

門別町	
書誌情報	門別町史編纂委員会 編 1995 『新門別町史 上巻』 門別町.
見出し	日高に人が住み始めた時代／人と動物の移動
執筆者	明示なし
頁	110 内容／マンモス動物群
備考	—
書誌情報	門別町史編纂委員会 編 1995 『新門別町史 中巻』 門別町.
見出し	農業災害／鳥獣虫害
執筆者	明示なし
頁	963 内容／被害, 駆除, 賞金, 新冠牧場, 毒殺, エゾシカの減少, 絶滅
備考	—

八雲町	
書誌情報	八雲町 2013 『八雲町史 三訂 上巻』 八雲町.
見出し	開拓初期の状況
執筆者	明示なし
頁	628-629 内容／生息 (*1)
備考	*1:「明治一一年遊楽部原野に旧尾張藩士が入植した当時では、なお原生林が生い茂り、オオカミ、ヒグマなどがひんぱんに出没する状況であった」

夕張市	
書誌情報	夕張市史編さん委員会 編 1981 『夕張市史 増補改訂 上』 夕張市.

見出し	夕張の旧地名／先住者時代
執筆者	明示なし
頁	138
備考	<p>内容／生息（多数*1），エゾシカの減少による絶滅</p> <p>*1：『わしらがいる附近は、昔フシコベツ部落（長沼町舞鶴）と呼んでいました。わしの祖先の川村家は、昔オサツにいたが、さけとりが禁漁になったんで、いま住んでいる所が、土地もいいし、湧水もきれいだというんで、仲間七、八件が集団で入ったわけです。それは婆さんが元気なころでしたね（明治五年ころ）。わしの母が言うのには、夜になって、くまがくるみの実をかじるガリッ、ガリッ、という音を聞いたときは、恐ろしくて、夜はろくろく眠れなかった、と。また、わしの親父は、よく言っていたことに、昔は、山にはおおかみがものすごくいた。それらがおおぜい群れをなして、しかを襲って、それを餌にしていた。しかし、ある年のこと（明治十二年ごろか）、大雪が降ってからは多くのしかが死に絶え、その餌をとることができなかつたんで、おおかみが全滅した。その後は、わずかに残ったしかが生き延びて、その子孫が日高で増えたんですね。この附近は、父の代にはしかやくまがいたんだね。わしが知っているのは、開墾当時は、畠をおこそうと鍬を入れると、カチット当たるので、掘り起こすとしかの角がごろごろ出て来ましたよ』（川村顕作談）。ここフシコベツの火口付近は、明治初期には、しかやくま、それに山のほうにおおかみがいたことである」</p>

<b>湧別町</b>	
書誌情報	湧別町史編さん委員会 編 1965 『湧別町史』 湧別町.
見出し	行政／行政の変遷／札幌に道庁置かれる
執筆者	明示なし
頁	87
備考	<p>引用／「根室県網走郡役所引継書（住民之件）」（*1）</p> <p>*1：</p> <p>「北見四郡ノ地ハ東西六十里程ニシテ南北拾有余里樹林ニ富ミ陸産ノ地ニ適スルヤ庁下ニ冠タリ。水産ノ如キモ又他ニ劣ラズ其ノ人口ヲ算スレバ僅ニ千二百余、恰モ海水ノ一滴ニ若カズ、到底自然ノ移住ヲ待チテ開拓スルモ最モ難シトス、於之植民之忽カニスベカラザルヲ知ルベシ、然而メ部下年々漁夫ノ来住スル四百余名ヲ下ラス、耆人ニ対シ消費スル給料等ノ如キ凡三十五円トス合金一八、一六三円三十銭余、然シテ其得ル所ノモノハ藤野四郎兵衛出店ノ如キ、悉ク之ヲ内地ハ携帯スルヲ以テ地方ノ潤益トナラス、其幣習ヲ論スレバ殊ニ当四郡ノ如キハ漁期ノ外平常漁場ニ居ヲ占ムルモノ殆ト稀ナリ、故ヲ以テ幾星霜ヲ経過スルモ、土地開ケズ自然熊狼ノ窟巢ヲ免レス、依之考フルニ植民ヲ計ルハ、各漁場近傍耕転適宜ノ地ヲトシ、其農間ニハ漁夫トナリ、水陸ノ収利ニヨッテ生路ヲ計ルナラハ出産人ノ便益ハ勿論被雇者ニ於テ両得ナルベシ、果シテ然ラバ雇給ニ消費スル金員ハ四郡ノ融通トナリ部民ヲシテ幸福ノ点ニ至ラシムベキハ必然ナリ、其移</p>

	<p>住費ノ如キハ規則ニ拠リ之ヲ給ス、其他ハ郡衙ノ注意保護スル所ヲ因テ四郡漁夫費用表ヲ付シ聊カ植民ノ急務ナルヲ陳ス。</p> <p>明治19年3月4日</p> <p style="text-align: right;">元網走外三郡</p> <p>長 長尾 助信</p>
--	---

<b>由仁町</b>	
書誌情報	由仁町史編纂委員会 編 1994 『由仁町史 上巻』 由仁町.
見出し	先住民族
執筆者	明示なし
頁	68 内容／狩猟 (アイヌ民族)
備考	—

<b>蘭越町</b>	
書誌情報	蘭越町史編集委員会編 1964 『蘭越町史』 蘭越町.
見出し	鳥獣の害
執筆者	明示なし
頁	694 内容／賞金, 捕獲 (全道)
備考	—

<b>陸別町</b>	
書誌情報	陸別町広報広聴町史編さん室 編 1994 『陸別町史：通史編』 陸別町.
見出し	哺乳類
執筆者	明示なし
頁	85 内容／害獣, 駆除, 絶滅, ヒグマとの違い
備考	—
見出し	マンモス動物群
執筆者	明示なし
頁	157 内容／マンモス動物群
備考	—

留辺蘂町	
書誌情報	新留辺蘂町史編さん委員会 編 1985 『新留辺蘂町史』留辺蘂町.
見出し	先史時代から明治の時代へ／「むかし、むかし」るべしべ物語
執筆者	明示なし
頁	4 生息（推測）
備考	—

留萌市	
書誌情報	留萌市 編 2003 『新留萌市』史留萌市.
見出し	動物／エゾヒグマ
執筆者	明示なし
頁	内容／捕獲
備考	—

稚内市	
書誌情報	稚内市史編纂室 1968 『稚内市史』 稚内市.
見出し	郡総代に桐山三四郎
執筆者	明示なし
頁	257 引用／松本十郎の1875（明治8）年「石狩十勝両河紀行」
備考	*1：「北見等一等熊狼ノ夥多ナルトコロ、海浜ノ草根掘り喰フ跡、殆ンド畑ノ区域ヲ立ルガ如キナリ。白昼ト雖モ往々見ルコトアリト云フ／と書いている。巡視の際アイヌの厚司を着たり、十勝川の濁流を素裸になって泳ぎ切ったりの十郎は、厚司判官とかハダカ判官といわれ、下僚やアイヌに親しまれていたが、熊や狼の出没するところも恐れずに駆け抜け、まさに開拓判官にふさわしいものがあった。
見出し	「畜産」編／酪農にかける夢
執筆者	明示なし
頁	685 内容／被害 引用／エドキン・ダン『在日本半世紀の思出』
備考	—

### 3. 附表① 調査対象「市町村史」一覧

#### 凡例

- (1) ①旧支庁名、②市町村、の順で、機械的に五十音順表記とした。
- (2) 市町村名について、合併による名称変更があるなど資料名と見分けが必要な場合は該当の市町村名を太字表記とした。
- (3) オオカミに関する記述が見られた市町村・資料は色づけした。

市町村数	市町村名 (合併前)	市町村名 (合併後)	出版年	番号	資料名	記述 有無
------	---------------	---------------	-----	----	-----	----------

網走支庁：3市20町3村（26市町村）→現オホーツク総合振興局：3市14町1村（18市町村）							
1	網走市	網走市	1955	昭和30	1	網走小史	×
			1958	昭和33	2	網走市史（上巻）：先史時代篇・原始時代	○
			1971	昭和46	3	網走市史（下巻）：開拓時代篇	○
2	生田原町	遠軽町	1981	昭和56	4	生田原町史	×
			1997	平成9	5	生田原町史 続	×
3	遠軽町	遠軽町	1977	昭和52	6	遠軽町史	×
			1998	平成10	7	遠軽町百年史	×
4	雄武町	雄武町	1962	昭和37	8	雄武町の歴史	×
5	置戸町	置戸町	1985	昭和60	9	置戸町史 上巻：戦前編	×
6	興部町	興部町	1961	昭和36	10	興部町史	○
7	上湧別町	湧別町	1968	昭和43	11	上湧別町史	×
8	北見市	北見市	1981	昭和56	12	北見市史 上巻	○
			1983	昭和58	13	北見市史 下巻	×
9	清里町	清里町	1978	昭和53	14	清里町史	×
10	訓子府町	訓子府町	1951	昭和26	15	訓子府村史	○
11	小清水町	小清水町	1955	昭和30	16	小清水町史	×
			2000	平成12	17	新小清水町史	○
12	斜里町	斜里町	1955	昭和30	18	斜里町史	○
13	佐呂間町	佐呂間町	1966	昭和41	19	佐呂間町史	×
14	白滝村	遠軽町	1971	昭和46	20	白滝村史	○
15	滝上町	滝上町	1976	昭和51	21	新撰 滝上町史	○
16	端野町	北見市	1965	昭和40	22	端野町史	×
			1987	昭和62	23	端野の夜明け：端野小史第1集	×
			1989	平成元	24	端野の夜明け：端野小史第2集	○
			1990	平成2	25	端野の夜明け：端野小史第3集	×
			1993	平成5	26	端野の夜明け：端野小史第4集	×
17	津別町	津別町	1954	昭和29	27	津別町史	×
18	常呂町	北見市	1969	昭和44	28	常呂町史	×
19	西興部村	西興部村	1977	昭和52	29	西興部村史	×
20	東藻琴村	大空町	1972	昭和47	30	東藻琴村史	○
			1999	平成11	31	東藻琴村史 第2巻	○
21	美幌町	美幌町	1972	昭和47	32	美幌町史	×
22	丸瀬布町	遠軽町	1974	昭和49	33	丸瀬布町史 上	×
			1974	昭和49	34	丸瀬布町史 下	×
			1994	平成6	35	新丸瀬布町史 上巻	×
			1994	平成6	36	新丸瀬布町史 下巻	○
23	女満別町	大空町	1969	昭和44	37	女満別町誌	×
24	紋別市	紋別市	1960	昭和35	38	紋別市史	×
25	湧別町	湧別町	1965	昭和40	39	湧別町史	○
26	留辺蘂町	北見市	1964	昭和39	40	留辺蘂町史	×
			1985	昭和60	41	新留辺蘂町史	○
—	—	大空町	2018	平成30	42	大空町史	×

石狩支庁：6市1町3村（10市町村）→石狩振興局：6市1町1村（8市町村）							
1	厚田村	石狩市	1969	昭和44	43	厚田村史	×

2	石狩市	石狩市	1972	昭和47	44	石狩町史 上巻	○
			1985	昭和60	45	石狩町史 中巻1	○
			1991	平成3	46	石狩町史 中巻2	×
			1997	平成9	47	石狩町史 下巻	×
3	恵庭市	恵庭市	1979	昭和54	48	恵庭市史	×
4	江別市	江別市	1970	昭和45	49	江別市史 上巻	○
			1970	昭和45	50	江別市史 下巻	×
5	北広島市	北広島市	1972	昭和47	51	広島町のあゆみ	×
			2007	平成19	52	北広島市史 上巻	×
			2007	平成19	53	北広島市史 下巻	×
6	札幌市	札幌市	1897	明治30	54	札幌沿革史	×
			1911	明治44	55	札幌区史	○
			1927	昭和2	56	札幌村史	○
			1950	昭和25	57	札幌村史	○
			1953	昭和28	58	札幌市史：政治行政編	○
			1958	昭和33	59	札幌市史：産業経済編 附：自然環境編	○
			1958	昭和33	60	札幌市史：文化社会編	○
			1989	平成元	61	新札幌市史 第1巻：通史1 札幌の誕生	○
			1991	平成3	62	新札幌市史 第2巻：通史2 札幌のおいたち	○
			1994	平成6	63	新札幌市史 第3巻：通史3 札幌の形成	×
			1997	平成9	64	新札幌市史 第4巻：通史4	×
			2002	平成14	65	新札幌市史 第5巻：通史5（上）	×
2005	平成17	66	新札幌市史 第5巻：通史5（下）	×			
7	新篠津村	新篠津村	1975	昭和50	67	新篠津村史	○
8	千歳市	千歳市	1969	昭和44	68	千歳市史	○
			1983	昭和58	69	千歳市史 増補	○
			2010	平成22	70	新千歳市史	○
9	当別町	当別町	1972	昭和47	71	当別町史	×
10	浜益村	石狩市	1980	昭和55	72	浜益村史	×

胆振支庁：4市9町2村（15市町村）→胆振総合振興局：4市7町（11市町）							
1	厚真町	厚真町	1956	昭和31	73	厚真村史	×
2	虻田町	洞爺湖町	1962	昭和37	74	虻田町史	○
			2004	平成16	75	物語虻田町史 第1巻：行政編・資料編	×
			1981	昭和56	76	物語虻田町史 第2巻：江戸時代編	×
			2001	平成13	77	物語虻田町史 第3巻：教育・文化編	×
			1986	昭和61	78	物語虻田町史 第4巻：産業編	×
			1983	昭和58	79	物語虻田町史 第5巻：洞爺湖温泉発展史	×
3	追分町	安平町	1986	昭和61	80	追分町史	×
4	大滝村	伊達市	1985	昭和60	81	大滝村史	×
5	白老町	白老町	1992	平成4	82	新白老町史 上巻	○
			1992	平成4	83	新白老町史 下巻	×
6	壮瞥町	壮瞥町	1979	昭和54	84	壮瞥町史	○
7	洞爺村	洞爺湖町	1976	昭和51	85	洞爺村史：本編	○
			1976	昭和51	86	洞爺村史：資料編	×
8	伊達町	伊達市	1972	昭和47	87	新稿 伊達町史 上巻	○
			1972	昭和47	88	新稿 伊達町史 下巻	×
			1994	平成6	89	伊達市史	×
9	苫小牧市	苫小牧市	1975	昭和50	90	苫小牧市史 上巻	○
			1976	昭和51	91	苫小牧市史 下巻	×
10	豊浦町	豊浦町	1972	昭和47	92	豊浦町史	×
11	登別市	登別市	1967	昭和42	93	登別町史：開基百年記念	○
12	早来町	安平町	1973	昭和48	94	早来町史	×
			1998	平成10	95	早来町史 続刊	×
13	穂別町	むかわ町	1968	昭和43	96	穂別町史	×
			1991	平成3	97	新穂別町史	○
14	鷲川町	むかわ町	1968	昭和43	98	鷲川町史	×

15	室蘭市	室蘭市	1981	昭和56	99	新室蘭市史 第1巻	○
			1983	昭和58	100	新室蘭市史 第2巻	×
			1985	昭和60	101	新室蘭市史 第3巻	×
			1987	昭和62	102	新室蘭市史 第4巻	×

渡島支庁：1市15町1村（17市町村）→渡島総合振興局：2市9町（11市町村）							
1	恵山町	函館市	2007	平成19	103	恵山町史	×
2	大野町	北斗市	1970	昭和45	104	大野町史	○
3	長万部町	長万部町	1977	昭和52	105	長万部町史	○
4	上磯町	北斗市	1997	平成9	106	上磯町史 上巻	○
			1997	平成9	107	上磯町史 下巻	×
			1975	昭和50	108	上磯町史 年史編	○
5	木古内町	木古内町	1982	昭和57	109	木古内町史	×
6	砂原町	森町	2000	平成12	110	砂原町史 第一巻 通史編	○
7	鹿部町	鹿部町	1994	平成6	111	鹿部町史	○
8	知内町	知内町	1986	昭和61	112	知内町史	×
9	戸井町	函館市	1973	昭和48	113	戸井町史	○
10	榎法華村	函館市	1989	平成元	114	榎法華村史	○
11	七飯町	七飯町	1976	昭和51	115	七飯町史	○
12	函館市	函館市	1911	明治44	116	函館区史	×
			1980	昭和55	117	函館市史：通説編 第1巻	○
			1975	昭和50	118	函館市史：通説編 第2巻	×
			1997	平成9	119	函館市史：通説編 第3巻	×
			2002	平成14	120	函館市史：通説編 第4巻	×
			1978	昭和53	121	函館市史 別巻：亀田市編	×
13	福島町	福島町	1995	平成7	123	福島町史 第2巻：通説編 上巻	×
			1997	平成9	124	福島町史 第3巻：通説編 下巻	×
14	松前町	松前町	1984	昭和59	125	松前町史：通説編 第1巻上	○
			1988	昭和63	126	松前町史：通説編 第1巻下	×
			1993	平成5	127	松前町史：通説編 第2巻	○
15	南茅部町	函館市	1987	昭和62	128	南茅部町史 上巻	×
			1987	昭和62	129	南茅部町史 下巻	×
16	森町	森町	1980	昭和55	130	森町史	×
17	八雲町	八雲町	2013	平成25	131	八雲町史 三訂 上巻	○
			2013	平成25	132	八雲町史 三訂 下巻	×

上川支庁：4市18町2村（24市町村）→上川総合振興局：4市16町2村（23市町村）							
1	愛別町	愛別町	1969	昭和44	133	愛別町史	○
2	旭川市	旭川市	1931	昭和6	134	旭川市史稿 上巻	○
			1931	昭和6	135	旭川市史稿 下巻	×
			1959	昭和34	136	旭川市史 第1巻	○
			1981	昭和56	137	旭川市史 第2巻	×
			1981	昭和56	138	旭川市史 第3巻	×
			1981	昭和56	139	旭川市史 第4巻	×
			1971	昭和46	140	旭川市史 第5巻	○
			1994	平成6	141	新旭川市史 第1巻：通史1	○
			2002	平成14	142	新旭川市史 第2巻：通史2	○
			2006	平成18	143	新旭川市史 第3巻：通史3	×
2009	平成21	144	新旭川市史 第4巻：通史4	×			
2012	平成24	145	新旭川市史 第5巻：通史5	×			
3	朝日町	士別市	1981	昭和56	146	朝日町史	×
			2008	平成20	147	続朝日町史	×
4	音威子府町	音威子府町	1976	昭和51	148	音威子府村史	○
5	上川町	上川町	1966	昭和41	149	上川町史	×
6	上富良野町	上富良野町	1998	平成10	150	上富良野町百年史	×

7	剣淵町	剣淵町	1979	昭和54	151	剣淵町史	×
			1999	平成11	152	剣淵町史 続史1：百年のあゆみ	×
8	士別市	士別市	1969	昭和44	153	士別町史	×
9	下川町	下川町	1968	昭和43	154	下川町史	×
10	占冠村	占冠村	1963	昭和38	155	占冠村史	×
11	鷹栖町	鷹栖町	1973	昭和48	156	鷹栖町史	×
12	当麻町	当麻町	1975	昭和50	157	当麻町史	×
13	中川町	中川町	1975	昭和50	158	中川町史	×
14	中富良野町	中富良野町	1986	昭和61	159	中富良野町史 上巻	×
			1986	昭和61	160	中富良野町史 下巻	×
15	名寄市	名寄市	1971	昭和46	161	名寄市史	×
			1999	平成11	162	新名寄市史：第1巻	×
			2000	平成12	163	新名寄市史：第2巻	×
			2000	平成12	164	新名寄市史：第3巻	○
16	美瑛町	美瑛町	1957	昭和32	165	美瑛町史 第1巻	×
			1959	昭和34	166	美瑛町史 第2巻	×
			1970	昭和45	167	美瑛町史 第3巻	×
			1980	昭和55	168	美瑛町史 第4巻	×
			1991	平成3	169	美瑛町史 第5巻	×
17	東神楽町	東神楽町	1973	昭和48	170	東神楽町史	○
18	東川町	東川町	1975	昭和50	171	東川町史 第1巻	×
			1995	平成7	172	東川町史 第2巻	○
19	比布町	比布町	1964	昭和39	173	比布町史	○
			1985	昭和60	174	比布町史 第2巻	○
			1997	平成9	175	比布町史 第3巻	○
20	美深町	美深町	1971	昭和46	176	美深町史	○
21	風連町	名寄市	1967	昭和42	177	風連町史	○
22	富良野市	富良野市	1968	昭和43	178	富良野市史 第1巻	×
			1994	平成6	179	富良野市史 第2巻	×
			1973	昭和48	180	富良野市史 第3巻	×
—	(旧空知支庁)	幌加内町	—	—	—	—	—
23	南富良野町	南富良野町	1991	平成3	181	南富良野町史 上巻	○
			1991	平成3	182	南富良野町史 下巻	×
24	和寒町	和寒町	1975	昭和50	183	和寒町史	×

釧路支庁：1市8町1村（10市町村）→釧路総合振興局：1市6町1村（8市町村）							
1	阿寒町	釧路市	1966	昭和41	184	阿寒町史	○
			1986	昭和61	185	阿寒町百年史	○
2	厚岸町	厚岸町	1975	昭和50	186	厚岸町史 上巻	×
			2012	平成24	187	新厚岸町史：通史編 第1巻	○
3	音別町	釧路市	1985	昭和60	188	音別町史	×
4	釧路市	釧路市	1936	昭和11	189	釧路市郷土史考	○
			1957	昭和32	190	釧路市史	○
			1974	昭和49	191	新釧路市史 第1巻：自然・先史篇・近世篇・政治・行政篇	○
			1973	昭和48	192	新釧路市史 第2巻：産業・経済篇	×
			1972	昭和47	193	新釧路市史 第3巻：社会・文化篇	×
5	釧路町	釧路町	1990	平成2	194	釧路町史	○
6	標茶町	標茶町	1966	昭和41	195	標茶町史考 前篇	×
			1978	昭和53	196	標茶町史考 後篇	○
			1998	平成10	197	標茶町史 通史編 第1巻	○
			1998	平成10	198	標茶町史 通史編 第2巻	×
			2006	平成18	199	標茶町史 通史編 第3巻	○
7	白糠町	白糠町	1987	昭和62	200	白糠町史 上巻	×
			1989	平成元	201	白糠町史 下巻	×
8	鶴居村	鶴居村	1987	昭和62	202	鶴居村史	×
9	弟子屈町	弟子屈町	1949	昭和24	203	弟子屈町史	○
			1981	昭和56	204	弟子屈町史	○
10	浜中町	浜中町	1975	昭和50	205	浜中町史	×

後志支庁：1市13町6村（20市町村）→後志総合振興局：1市13町6村（20市町村）							
1	赤井川村	赤井川村	1981	昭和56	206	郷土のあゆみ：追録再版	×
2	岩内町	岩内町	1966	昭和41	207	岩内町史	×
3	小樽市	小樽市	1914	大正3	208	小樽区史	×
			1958	昭和33	209	小樽市史 第1巻	○
			1963	昭和38	210	小樽市史 第2巻	×
			1934	昭和9	211	小樽市史 第3巻	×
			1966	昭和41	212	小樽市史 第4巻	×
			1967	昭和42	213	小樽市史 第5巻	×
			1969	昭和44	214	小樽市史 第6巻	×
			1993	平成5	215	小樽市史 第7巻：行政編 上	×
			1994	平成6	216	小樽市史 第8巻：行政編 中	×
1995	平成7	217	小樽市史 第9巻：行政編 下	×			
4	神得内村	神得内村	1972	昭和47	218	郷土かもえない	×
5	喜茂別町	喜茂別町	1969	昭和44	219	喜茂別町史	×
6	京極町	京極町	1977	昭和52	220	京極町史	○
			1998	平成10	221	追補京極町史	×
7	共和町	共和町	1960	昭和35	222	共和町史	×
8	倶知安町	倶知安町	1961	昭和36	223	倶知安町史	×
9	黒松内町	黒松内町	1987	昭和62	224	黒松内町史 上巻	○
			1993	平成5	225	黒松内町史 下巻	×
10	島牧村	島牧村	1990	平成2	226	島牧村史	×
11	積丹町	積丹町	1985	昭和60	227	積丹町史	×
12	寿都町	寿都町	1974	昭和49	228	寿都町史	○
13	泊村	泊村	1967	昭和42	229	泊村史	×
			2001	平成13	230	泊村史 II	×
14	仁木町	仁木町	2000	平成12	231	新仁木町史	×
15	二セコ町	二セコ町	1960	昭和35	232	狩太町史	○
			1982	昭和57	233	二セコ町史	×
16	古平町	古平町	1973	昭和48	234	古平町史 第1巻	×
			1977	昭和52	235	古平町史 第2巻	×
			1998	平成10	236	古平町史 第3巻	×
17	真狩村	真狩村	1965	昭和40	237	真狩村史	×
18	余市町	余市町	1966	昭和41	238	余市郷土史 第1巻：余市漁業発達史	×
			1968	昭和43	239	余市郷土史 第2巻：余市農業発達史	×
			1982	昭和57	240	余市郷土史 第3巻：余市文教発達史（戦前）	×
19	蘭越町	蘭越町	1964	昭和39	241	蘭越町史	○
20	留寿都村	留寿都村	1969	昭和44	242	留寿都村史	×

宗谷支庁：1市8町1村（10市町村）→宗谷総合振興局：1市7町1村（9市町村）							
1	歌登町	枝幸町	1980	昭和55	243	歌登町史	×
2	枝幸町	枝幸町	1967	昭和42	244	枝幸町史 上巻	○
			1971	昭和46	245	枝幸町史 下巻	×
			2010	平成22	246	枝幸町史 第3巻	×
			2010	平成22	247	枝幸町史 第4巻	×
3	猿払村	猿払村	1976	昭和51	248	猿払村史	○
4	豊富町	豊富町	1986	昭和61	249	豊富町史	○
5	中頓別町	中頓別町	1997	平成9	250	中頓別町史	×
6	浜頓別町	浜頓別町	1995	平成7	251	浜頓別町史	×
—	(旧留萌支庁)	幌延町	—	—	—	—	—
7	利尻町	利尻町	2000	平成12	252	利尻町史：通史編	×
8	利尻富士町	利尻富士町	1998	平成10	253	利尻富士町史	×
9	礼文町	礼文町	1972	昭和47	254	礼文町史	×
10	稚内市	稚内市	1968	昭和43	255	稚内市史	○

空知支庁：10市16町1村（27市町村）→空知総合振興局（24市町）10市14町							
1	赤平市	赤平市	2001	平成13	256	赤平市史 上巻	○
			2001	平成13	257	赤平市史 下巻	×
2	芦別市	芦別市	1994	平成6	258	新芦別市史 第1巻	○
			1994	平成6	259	新芦別市史 第2巻	×
3	岩見沢市	岩見沢市	1963	昭和38	260	岩見沢市史	×
			1985	昭和60	261	岩見沢百年史	×
4	歌志内市	歌志内市	1964	昭和39	262	歌志内市史	○
5	浦臼町	浦臼町	1967	昭和42	263	浦臼町史	×
6	雨竜町	雨竜町	1969	昭和44	264	雨竜町史	×
7	上砂川町	上砂川町	1988	昭和63	265	新上砂川町史	○
8	北村	岩見沢市	1985	昭和60	266	北村史 上巻	○
			1985	昭和60	267	北村史 下巻	×
9	栗沢町	岩見沢市	1964	昭和39	268	栗沢町史	×
10	栗山町	栗山町	1940	昭和15	269	角田村史	×
			1971	昭和46	270	栗山町史	○
11	新十津川町	新十津川町	1966	昭和41	271	新十津川町史	×
12	砂川市	砂川市	1991	平成3	272	私たちの砂川市史 上巻	○
			1991	平成3	273	私たちの砂川市史 下巻	×
13	滝川市	滝川市	1932	昭和7	274	江部乙村史	×
			1962	昭和37	275	滝川市史	○
14	秩父別町	秩父別町	1964	昭和39	276	秩父別町史	×
			1987	昭和62	277	秩父別町史	○
15	月形町	月形町	1985	昭和60	278	月形町史	○
16	奈井江町	奈井江町	1975	昭和50	279	奈井江町史	○
17	長沼町	長沼町	1962	昭和37	280	長沼町の歴史 上巻	○
			1962	昭和37	281	長沼町の歴史 下巻	×
			1977	昭和52	282	長沼町九十年史	○
18	南幌町	南幌町	1962	昭和37	283	南幌町史	○
19	沼田町	沼田町	1982	昭和57	284	新編沼田町史	○
20	美唄市	美唄市	1970	昭和45	285	美唄市史	○
			1991	平成3	286	美唄市百年史：通史編	○
21	深川市	深川市	1994	平成6	287	新深川市史	○
22	北竜町	北竜町	1968	昭和43	288	北竜町史	○
23	幌加内	—	1971	昭和46	289	幌加内町史	○
24	三笠市	三笠市	1993	平成5	290	新三笠市史：通史編	○
25	妹背牛町	妹背牛町	1979	昭和54	291	妹背牛町史	○
26	夕張市	夕張市	1959	昭和34	292	夕張市史	×
			1981	昭和56	293	夕張市史 増補改訂 上	○
			1981	昭和56	294	夕張市史 増補改訂 下	×
27	由仁町	由仁町	1994	平成6	295	由仁町史 上巻	○
			1994	平成6	296	由仁町史 下巻	×

十勝支庁：1市16町3村（20市町村）→十勝総合振興局：1市16町2村（19市町村）							
1	足寄町	足寄町	1973	昭和48	297	足寄町史	○
2	池田町	池田町	1988	昭和63	298	池田町史 上巻	○
			1989	平成元	299	池田町史 下巻	○
3	浦幌町	浦幌町	1971	昭和46	300	浦幌町史	○
4	帯広市	帯広市	1984	昭和59	301	帯広市史	○
			2003	平成15	302	帯広市史	○
5	音更町	音更町	1980	昭和55	303	音更町史	×
6	上士幌町	上士幌町	1970	昭和45	304	上士幌町史	×
			1992	平成4	305	上士幌町史 追補版	×
7	更別村	更別村	1972	昭和47	306	更別村史	×
8	鹿追町	鹿追町	1978	昭和53	307	鹿追町史	×

9	清水町	清水町	2005	平成17	308	清水町百年史	○
10	士幌町	士幌町	1962	昭和37	309	士幌村史	×
11	新得町	新得町	1990	平成2	310	新得町史	×
12	大樹町	大樹町	1969	昭和44	311	大樹町史	○
13	忠類村	幕別町	2000	平成12	312	忠類村史	○
14	豊頃町	豊頃町	1971	昭和45	313	豊頃町史：本編	○
15	中札内村	中札内村	1968	昭和43	314	中札内村史	×
16	広尾町	広尾町	1960	昭和35	315	広尾町史	○
17	本別町	本別町	1977	昭和52	316	本別町史	○
			1992	平成4	317	本別町史：追補	○
18	幕別町	幕別町	1967	昭和42	318	幕別町史	×
19	芽室町	芽室町	1982	昭和57	319	芽室町八十年史	○
20	陸別町	陸別町	1994	平成6	320	陸別町史：通史編	○
			1994	平成6	321	陸別町史：別巻	×

## 根室支庁：1市4町（5市町）→根室振興局：1市4町（5市町）

1	標津町	標津町	1968	昭和43	322	標津町史	×
2	中標津町	中標津町	1981	昭和56	323	中標津町史	×
3	根室市	根室市	1968	昭和43	324	根室市史 上巻	○
			1968	昭和43	325	根室市史 下巻	○
4	別海町	別海町	1966	昭和41	326	別海村小史	×
			1978	昭和53	327	別海町百年史	○
5	羅臼町	羅臼町	1970	昭和45	328	羅臼町史	×

## 日高支庁：（9町）→日高振興局：（7町）

1	浦河町	浦河町	2002	平成14	329	新浦河町史 上巻	○
			2002	平成14	330	新浦河町史 下巻	×
2	えりも町	えりも町	1971	昭和46	331	えりも町史	○
3	様似町	様似町	1992	平成4	332	様似町史 改訂	○
			1993	平成5	333	新様似町史	×
4	静内町	新ひだか町	1975	昭和50	334	静内町史 増補改訂版	○
			1996	平成8	335	静内町史 増補改訂版 上巻	○
			1996	平成8	336	静内町史 増補改訂版 下巻	×
5	新冠町	新冠町	1966	昭和41	337	新冠町史	○
			1996	平成8	338	続新冠町史	○
6	日高町	日高町	1977	昭和52	339	日高町史	×
7	平取町	平取町	1974	昭和49	340	平取町史	○
8	門別町	日高町	1995	平成7	341	新門別町史 上巻	○
			1995	平成7	342	新門別町史 中巻	○
			1996	平成8	343	新門別町史 下巻	×
9	三石町	新ひだか町	1971	昭和46	344	三石町史	×

## 檜山支庁：（10町）→檜山振興局：（7町）

1	厚沢部町	厚沢部町	1969	昭和44	345	桜鳥 第1巻：厚沢部町の歩み	×
			1981	昭和56	346	桜鳥 第2巻：厚沢部町の歩み	×
2	今金町	今金町	1991	平成3	347	今金町史 改訂 上巻	○
			1994	平成6	348	今金町史 改訂 下巻	×
3	江差町	江差町	1982	昭和57	349	江差町史 第5巻：通説1	○
			1983	昭和58	350	江差町史 第6巻：通説2	×
4	奥尻町	奥尻町	1997	平成9	351	新奥尻町史 上巻	×
			2003	平成15	352	新奥尻町史 下巻	×
5	乙部町	乙部町	1979	昭和54	353	乙部町抄史：前編・後編	×

6	上ノ国町	上ノ国町	1956	昭和31	354	上ノ国村史	×
			1962	昭和37	355	上ノ国村史 続	○
7	北檜山町	せたな町	1981	昭和56	356	北檜山町史	○
8	熊石町	(八雲町) ※渡島	1987	昭和62	357	熊石町史	×
9	瀬棚町	せたな町	1991	平成3	358	瀬棚町史	○
10	大成町	せたな町	1984	昭和59	359	大成町史	○

留萌支庁：1市7町1村（9市町村）→留萌振興局：1市6町1村（8市町村）							
1	遠別町	遠別町	1957	昭和32	360	遠別町史	○
2	小平町	小平町	1976	昭和51	361	小平町史	×
3	初山別村	初山別村	1972	昭和47	362	初山別村史	×
4	天塩町	天塩町	1971	昭和46	363	天塩町史	○
			1993	平成5	364	新編天塩町史	×
5	苫前町	苫前町	1982	昭和57	365	苫前町史	×
6	羽幌町	羽幌町	1968	昭和43	366	羽幌町史	×
7	幌延町	—	1974	昭和49	367	幌延町史	○
8	増毛町	増毛町	2006	平成18	368	新增毛町史	○
9	留萌市	留萌市	2003	平成15	369	新留萌市史	○

#### 4. 附表② アイヌ口承文芸一覧

以下、資料は話者の出身地50音昇順に列記する。同じ出身地者がいる場合は生年昇順、同一話者のテキストは資料刊行年昇順で登録した。  
 [ ※ 印は伝承先かつ出身市町村が異なる話者を示した ]

資料 番号	話者出身 (市町村)	伝承先	話者	話者 生年	資料 刊行年	タイトル	形態	出典
1	旭川	—	杉村キナラブック	1888	1983	神々や妖怪に欺かれた姉を救ったオタサの子供の話	散文説話	アイヌ無形文化伝承保存会編 1983『人々の物語: Fables of men(アイヌ無形民俗文化財記録第3輯)』アイヌ無形文化伝承保存会。
2	旭川	イトモシマツ	杉村キナラブック	1888	1969	けちんぼ狼	神謡	杉村キナラブック 1969『キナラブック・ユーカラ集(旭川叢書第3巻)』
3	旭川	北風磯吉	杉村キナラブック	1888	1994	犬＝狼神に育てられたオタサム人の自叙	散文説話	大塚一美訳 1984『キナラブック口承説話「犬＝狼神に育てられたオタサム人の自叙」』アイヌ口承芸術学協会。
4	旭川	砂沢智一郎	砂沢クラ	1899	1982	ルロアイ神とポイヤンベの戦	英雄叙事詩	アイヌ無形文化伝承保存会編 1982『アイヌ無形民俗文化財記録:英雄の物語』アイヌ無形文化伝承保存会。
5	旭川	川村ムイサシマツ	砂沢クラ	1899	1983	海の怪物の話	メノココカラ	アイヌ無形文化伝承保存会編 1983『アイヌ無形民俗文化財記録:アイヌの民話 1』アイヌ無形文化伝承保存会。
6	有珠	—	—	—	1989	神の子が父親である神から、宝物を授かった話	散文説話	北海道教育庁社会教育部文化課編 1985『昭和63年度 アイヌ民俗文化財調査報告書(アイヌ民俗調査Ⅶ 静内・浦河・様似地方)北海道文化財保護協会。
※	(歌志内)	—	砂沢智一郎	—	1982	ルロアイ神とポイヤンベの戦	英雄叙事詩	アイヌ無形文化伝承保存会編 1982『アイヌ無形民俗文化財記録:英雄の物語』アイヌ無形文化伝承保存会。
7	浦河	—	浦河タレ	1897	1984	狼の神の話	イソイタツキ	北海道教育庁社会教育部文化課編:『昭和59年度 アイヌ民俗文化財調査報告書(アイヌ民俗調査Ⅳ)』
8	静内	—	織田ステノ	1899	1985	狼の神が子供を授けた話	散文説話	北海道教育庁社会教育部文化課編:『昭和59年度 アイヌ民俗文化財調査報告書(アイヌ民俗調査Ⅳ)』
9	静内	—	織田ステノ	1899	1993	ユカラ7	英雄叙事詩	北海道静内町教育委員会 1993『静内地方の伝承Ⅳ—織田ステノの口承文芸(3)』北海道静内町教区委員会。
10	静内	—	織田ステノ	1899	1994	ユカラ8	英雄叙事詩	北海道静内町教育委員会 1994『静内地方の伝承Ⅳ—織田ステノの口承文芸(4)』北海道静内町教区委員会。
11	静内	—	織田ステノ	1899	1994	ユカラ12	英雄叙事詩	北海道静内町教育委員会 1994『静内地方の伝承Ⅳ—織田ステノの口承文芸(4)』北海道静内町教区委員会。
12	千歳	—	白沢ナベ	1905	2000	狼から逃れた娘	散文説話	中川裕 2000『アイヌ口承文芸テキスト集1:白沢ナベ口述 狼から逃れた娘』千葉大学ユーラシア言語文化論集(3), pp.52-66, 千葉大学。
13	千歳	—	白沢ナベ	1905	2001	主人を助けられなかった犬	散文説話	中川裕 2001『アイヌ口承文芸テキスト集2:白沢ナベ口述 主人を助けられなかった犬』千葉大学ユーラシア言語文化論集(4), pp.77-94, 千葉大学。
14	千歳	—	白沢ナベ	1905	2006	狼が人間の母親に虐待された	散文説話	中川裕 2006『アイヌ口承文芸テキスト集7:白沢ナベ口述 狼が人間の母親に虐待された』千葉大学ユーラシア言語文化論集(9), pp.219-256, 千葉大学。
15	鶴居	—	八重九郎	1896	1994	ポンオタストウクンルヤエユカラ	散文説話	北海道教育庁生涯学習部文化課編 1994『平成5年度 アイヌ民俗文化財口承文芸シリーズⅩⅡ:八重九郎の伝承(2)』北海道教育委員会。
※	(名寄)	—	北風磯吉	1880	1994	犬＝狼神に育てられたオタサム人の自叙	散文説話	大塚一美訳 1984『キナラブック口承説話「犬＝狼神に育てられたオタサム人の自叙」』アイヌ口承芸術学協会。
16	登別	—	知里幸恵	1903	2003	小狼の神が自ら歌った歌「ホテナオ」	神謡	知里幸恵著訳、北道邦彦編注 2003『注解アイヌ神謡集』北海道出版企画センター。
17	登別	—	知里幸恵	1903	①1984 ②1985 ③1986	オマンベシ・ウン・マツ	英雄叙事詩	①北海道教育庁社会教育部文化課編 1984『昭和58年度 アイヌ民俗文化財口承文芸シリーズⅢ:知里幸恵ノート』北海道教育委員会。 ②北海道教育庁社会教育部文化課編 1985『昭和59年度 アイヌ民俗文化財口承文芸シリーズⅣ:知里幸恵ノート』北海道教育委員会。 ③北海道教育庁社会教育部文化課編 1986『昭和60年度 アイヌ民俗文化財口承文芸シリーズⅢ:知里幸恵ノート』北海道教育委員会。
18	登別	—	金成マツ	1875	1993	虎杖丸別伝	英雄叙事詩	③北海道教育庁社会教育部文化課編 1985『昭和59年度 アイヌ民俗文化財口承文芸シリーズⅣ:知里幸恵ノート』北海道教育委員会。
19	登別	—	金成マツ	1875	1963	小和人	英雄叙事詩	金成マツ、金田一京助筆録・訳注 1963『アイヌ叙事詩ユーカラ集3: PONSAMORUNKUR(小和人), KAMUIKARSAPA KAMUIKARTUMAM(神造頭・神造洞)』三省堂。
20	登別	—	金成マツ	1875	1963	神造頭・神造洞	英雄叙事詩	金成マツ、金田一京助筆録・訳注 1963『アイヌ叙事詩ユーカラ集3: PONSAMORUNKUR(小和人), KAMUIKARSAPA KAMUIKARTUMAM(神造頭・神造洞)』三省堂。
21	登別	—	金成マツ	1875	1964	朱の輪	英雄叙事詩	金成マツ、金田一京助筆録・訳注 1964『アイヌ叙事詩ユーカラ集4: KEMKA KARIP(朱の輪)』三省堂。
22	登別	—	金成マツ	1875	1965	ニシマク姫	英雄叙事詩	金成マツ、金田一京助筆録・訳注 1965『アイヌ叙事詩ユーカラ集5: NISHIMAKUNMAT(ニシマク姫)』三省堂。
23	登別	—	金成マツ	1875	1966	余市姫	英雄叙事詩	金成マツ、金田一京助筆録・訳注 1966『アイヌ叙事詩ユーカラ集6: IYOCHIUNMAT(余市姫)』三省堂。
24	登別	—	金成マツ	1875	1967	耳輪の曲	英雄叙事詩	金成マツ、金田一京助筆録・訳注 1966『アイヌ叙事詩ユーカラ集7: UCHIU NINKARI(耳輪の曲), AKEUSUTU IWENRESU(恵伯父物語)』三省堂。
25	登別	—	金成マツ	1875	1975	草人形・くさひとかた	英雄叙事詩	金成マツ、金田一京助筆録・訳注 1975『アイヌ叙事詩ユーカラ集9: KINA CHISHINAP MUN CHISHINAP(草人形), TUPESAN KAMIMANIT OTUMIOSHMA(八串の肉串くさ物語)』三省堂。
26	登別	—	金成マツ	1875	1979	金の下駄	英雄叙事詩	北海道教育庁社会教育部文化課編 1979『昭和五十三年度 アイヌ民俗文化財ユーカラシリーズⅠ:金の下駄(カニ ピラッカ)』北海道教育委員会。

4. 附表② アイヌ口承文芸一覧

27	登別	—	金成マツ	1875	①1980 ②1981 細糸 柔糸 ③1982	英雄叙事詩	①北海道教育庁社会教育部文化課編 1980『昭和五十四年度 アイヌ民俗文化財ユーカラシリーズⅡ:細糸 柔糸(カノカムベ カリテムベ)』北海道教育委員会。 ②北海道教育庁社会教育部文化課編 1981『昭和五十五年度 アイヌ民俗文化財ユーカラシリーズⅢ:細糸 柔糸(カノカムベ カリテムベ)』北海道教育委員会。 ③北海道教育庁社会教育部文化課編 1982『昭和五十六年度 アイヌ民俗文化財ユーカラシリーズⅣ:細糸 柔糸(カノカムベ カリテムベ)』北海道教育委員会。
28	登別	—	金成マツ	1875	①1982 ②1983	英雄叙事詩	①北海道教育庁社会教育部文化課編 1983『昭和五十七年度 アイヌ民俗文化財ユーカラシリーズⅤ:鹿男の勇者 私を助ける(シ ユク ラメク イカオ ビウキ)』北海道教育委員会。 ②北海道教育庁社会教育部文化課編 1984『昭和五十八年度 アイヌ民俗文化財ユーカラシリーズⅥ:鹿男の勇者 私を助ける(シ ユク ラメク イカオ ビウキ)』北海道教育委員会。
29	登別	—	金成マツ	1875	①1985 ②1986 踊ろう跳ねよう物語 ③1987	英雄叙事詩	①北海道教育庁社会教育部文化課編 1985『昭和五十九年度 アイヌ民俗文化財ユーカラシリーズⅦ:踊ろう跳ねよう物語(一)(メノコ ユカラ ホリビアシナ テレケアシナ)』北海道教育委員会。 ②北海道教育庁社会教育部文化課編 1986『昭和六十年年度 アイヌ民俗文化財ユーカラシリーズⅧ:踊ろう跳ねよう物語(二)(メノコ ユカラ ホリビアシナ テレケアシナ)』北海道教育委員会。 ③北海道教育庁社会教育部文化課編 1987『昭和六十一年度 アイヌ民俗文化財ユーカラシリーズⅨ:踊ろう跳ねよう物語(三)(メノコ ユカラ ホリビアシナ テレケアシナ)』北海道教育委員会。
30	登別	—	金成マツ	1875	①1987 ②1988	英雄叙事詩	①北海道教育庁社会教育部文化課編 1987『昭和六十一年度 アイヌ民俗文化財ユーカラシリーズⅩ:踊ろう跳ねよう物語(三)(メノコ ユカラ ホリビアシナ テレケアシナ)』北海道教育委員会。 ②北海道教育庁社会教育部文化課編 1988『昭和六十二年度 アイヌ民俗文化財ユーカラシリーズⅩ:星上姫(一)(チウカ ウン マツ)』北海道教育委員会。 ③北海道教育庁社会教育部文化課編 1988『昭和六十二年度 アイヌ民俗文化財ユーカラシリーズⅩ:星上姫(二)(チウカ ウン マツ)』北海道教育委員会。
31	登別	—	金成マツ	1875	①1988 ②1989 急流川の女が自分の悪き神を鹿にした ③1990	英雄叙事詩	①北海道教育庁社会教育部文化課編 1988『昭和六十二年度 アイヌ民俗文化財ユーカラシリーズⅩ:星上姫(二)(チウカ ウン マツ)』北海道教育委員会。 ②北海道教育庁社会教育部文化課編 1989『昭和六十三年度 アイヌ民俗文化財ユーカラシリーズⅩⅠ:急流川の女が自分の悪き神を鹿にした(一)(チウシベトウマツ トゥレンベ ユクネカラ)』北海道教育委員会。 ③北海道教育庁生涯学習部文化課編 1990『平成元年度 アイヌ民俗文化財ユーカラシリーズⅩⅡ:急流川の女が自分の悪き神を鹿にした(二)(チウシベトウマツ トゥレンベ ユクネカラ)』北海道教育委員会。
32	登別	—	金成マツ	1875	①1990 ②1991 おば・妹 ③1992	英雄叙事詩	①北海道教育庁生涯学習部文化課編 1990『平成元年度 アイヌ民俗文化財ユーカラシリーズⅩⅡ:急流川の女が自分の悪き神を鹿にした(三)(チウシベトウマツ トゥレンベ ユクネカラ)』北海道教育委員会。 ②北海道教育庁生涯学習部文化課編 1991『平成二年度 アイヌ民俗文化財ユーカラシリーズⅩⅢ:おば・妹(一)(ウナラベ・トゥレン)』北海道教育委員会。 ③北海道教育庁生涯学習部文化課編 1992『平成三年度 アイヌ民俗文化財ユーカラシリーズⅩⅣ:おば・妹(二)(ウナラベ・トゥレン)』北海道教育委員会。
33	登別	—	金成マツ	1875	①1992 ②1993	英雄叙事詩	①北海道教育庁生涯学習部文化課編 1992『平成三年度 アイヌ民俗文化財ユーカラシリーズⅩⅣ:おば・妹(三)(ウナラベ・トゥレン)』北海道教育委員会。 ②北海道教育庁生涯学習部文化課編 1993『平成四年度 アイヌ民俗文化財ユーカラシリーズⅩⅤ:湖口のひと、救いに来る物語(一)(トブツンクル イエイカスイ)』北海道教育委員会。
34	登別	—	金成マツ	1875	①1993 ②1993	英雄叙事詩	①北海道教育庁生涯学習部文化課編 1993『平成四年度 アイヌ民俗文化財ユーカラシリーズⅩⅤ:湖口のひと、救いに来る物語(二)(トブツンクル イエイカスイ)』北海道教育委員会。 ②北海道教育庁生涯学習部文化課編 1994『平成五年度 アイヌ民俗文化財ユーカラシリーズⅩⅥ:湖口のひと、救いに来る物語(三)(トブツンクル イエイカスイ)』北海道教育委員会。
35	登別	—	金成マツ	1875	1994	英雄叙事詩	北海道教育庁生涯学習部文化課編 1995『平成六年度 アイヌ民俗文化財ユーカラシリーズⅩⅦ:若きチクベニ神がオタサム村を撃つ物語(ヤイラフホシチクベニカムイ オタサムコタン キクカラ)』北海道教育委員会。
36	登別	—	金成マツ	1875	2002	英雄叙事詩	北海道教育庁生涯学習部文化課編 2002『平成十三年度 アイヌ民俗文化財(ユーカラシリーズ24)オキクルミが私・ポイヤウンベに伝言を寄こした(オイヤウンイ アトウイコカムイ ウイテワヤケ)』カニシリの若者をのろった狼(カニシリウクルウレンシヨッカネアカラ)』北海道教育委員会。
37	登別	—	金成マツ	1875	2003	英雄叙事詩	北海道教育庁生涯学習部文化課編 2003『平成十四年度 アイヌ民俗文化財(ユーカラシリーズ25)わが甥 我を争わず(アカラフ イウコイキレ)』北海道教育委員会。
38	登別	—	金成マツ	1875	2004	英雄叙事詩	北海道教育庁生涯学習部文化課編 2004『平成十五年度 アイヌ民俗文化財(ユーカラシリーズ26)海の妖精十二人の兄妹(アトウイコシブク イウンイワクネ イウンツウレンネワ アイベレ)』北海道教育委員会。
39	登別	—	金成マツ	1875	2005	英雄叙事詩	北海道教育庁生涯学習部文化課編 2005『平成十六年度 アイヌ民俗文化財(ユーカラシリーズ27)隠された人喰い刀(ムツケ イベタム) 六代を生きたおじいさん 自ら育つ(イワンアイヌシキリ エボソ エカシ アイコレス)』北海道教育委員会。
40	登別	—	金成マツ	1875	2006	英雄叙事詩	北海道教育庁生涯学習部文化課編 2006『平成十七年度 アイヌ民俗文化財(ユーカラシリーズ28)私を助ける為に神が大腕を頼んだ(レブン エカシアニスク) 自分を振って回り歩く(シ スエ アプカシ カリ アプカシ)』北海道教育委員会。
41	登別	—	金成マツ	1875	2007	英雄叙事詩	北海道教育庁生涯学習部文化課編 2007『平成十八年度 アイヌ民俗文化財(ユーカラシリーズ29)白い幣棚に黒い幣棚が打ち重なる物語(レタラバイイウサシ ウンネバイ イウサシ ウオウシ)』北海道教育委員会。
42	登別	—	金成マツ	1875	2008	英雄叙事詩	北海道教育庁生涯学習部文化課編 2008『平成十九年度 アイヌ民俗文化財(ユーカラシリーズ30)私のおぼが草小舟にわたしを乗せて流す(アコロ ウナラベ キナボンチブ イオレ ワ イモムカ)』北海道教育委員会。
43	登別	—	金成マツ	1875	2009	英雄叙事詩	蓮池悦子編・訳 2009『平成二十年度 アイヌ民俗文化財(ユーカラシリーズ31)アイヌ英雄叙事詩(アトウイヤの女 レポツトト キモツトト)』北海道教育委員会。
44	登別	—	金成マツ	1875	2010	英雄叙事詩	蓮池悦子編・訳 2010『平成二十一年度 アイヌ民俗文化財(ユーカラシリーズ34)アイヌ英雄叙事詩 金の小さな耳輪(コンカニ ポンウチウ ニンカリ)』北海道教育委員会。
45	登別	—	金成マツ	1875	2011	英雄叙事詩	高橋靖以訳 2011『平成二十二年度 アイヌ民俗文化財(ユーカラシリーズ38)アイヌ英雄叙事詩 背鰭長の鯨(シヤンベタンネ)』北海道教育委員会。
46	平取	—	木村政吉	—	1969	英雄叙事詩	門別町郷土史研究会編「鶴沢元蔵筆録・扇谷昌康御注」1969『門別町文化財調査シリーズ第4集:アイヌの叙事詩』門別町郷土史研究会。

4. 附表② アイヌ口承文芸一覧

47	平取	—	鍋沢ワカルバ	1863	1993	虎杖丸	英雄叙事詩	金田一京助全集編集委員会編 1993『金田一京助全集 第九巻 アイヌ文学Ⅲ』三省堂.
48	平取	—	鍋沢元蔵	1886	1965	クト <sup>o</sup> ネシリカ	英雄叙事詩	門別町郷土史研究会編『鍋沢元蔵筆録』1965『門別町文化財調査シリーズ第1集 クト <sup>o</sup> ネシリカ:お化けの悪物、魔物の悪物、アイヌ叙事詩』門別町郷土史研究会.
49	平取	—	貝沢とるしの	1889	1974	白狼が人間の妻になった	散文説話	萱野茂、環太平洋民族文化保存研究会編 1974『ウエベケレ集大成:アイヌ民族の生活教典 第1巻』アルドオ.
50	平取	—	二谷一太郎	1892	1998	カッコウ鳥の絵のある小袖	英雄叙事詩	萱野茂 1998b『萱野茂のアイヌ神話集成8:ユカラ編Ⅱ』ピクチャーエンタテインメント.
51	平取	—	黒川てしめ	1895	1998	襟裳岬のシャチの神	神謡	萱野茂 1998a『萱野茂のアイヌ神話集成2:カムユカラ編Ⅱ』ピクチャーエンタテインメント.
52	平取	—	西島てる	1896	1974	木彫りの狼が、わたしを助けてくれた	散文説話	萱野茂、環太平洋民族文化保存研究会編 1974『ウエベケレ集大成:アイヌ民族の生活教典 第1巻』アルドオ.
53	平取	—	上田トシ	1912	1996	狼の襲撃から危うく難を逃れた女の話	散文説話	北海道教育庁生涯学習部文化課編 1997『平成8年度 アイヌ民俗文化財調査報告書(アイヌ民俗調査XVI:補足調査3)』北海道教育委員会.
54	平取	—	川上まつ子	1912	1999	子犬たち	メノユカラ	早稲田大学語学教育研究所アイヌ語研究会編著 1999『アイヌ語音声資料10 カタカナ版—川上まつ子さんの昔話と神謡(ペナコリ)』早稲田大学語学教育研究所.
55	本別	清川ネウサルモン (1871生)	沢井トメノ	1906	1997	カムイ・ウチャシコマ	散文説話	澤井善美 1997「本別コタンとサマイルカムイのウチャシコマ」北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要③(3)、北海道立アイヌ民族文化研究センター.
56	芽室	—	—	—	1965	狼神の神謡	神謡	更科源蔵・谷本一之 1965『アイヌ伝説音楽』日本放送出版協会.
57	門別	—	平賀ヤヤシ	—	①1987 ②1988 ③1989 ④1990	KUTUNE SHIRKA	英雄叙事詩	①北海道教育庁生涯学習部文化課編 1987『アイヌ民俗文化財口承文芸シリーズVI:久保寺逸彦ノート』北海道教育委員会. ②北海道教育庁生涯学習部文化課編 1988『アイヌ民俗文化財口承文芸シリーズVII:久保寺逸彦ノート』北海道教育委員会. ③北海道教育庁生涯学習部文化課編 1989『アイヌ民俗文化財口承文芸シリーズVIII:久保寺逸彦ノート』北海道教育委員会. ④北海道教育庁生涯学習部文化課編 1990『アイヌ民俗文化財口承文芸シリーズIX:久保寺逸彦ノート』北海道教育委員会.
58	門別	—	平賀エテノア	1880	1977	狼の女神の自叙	神謡	久保寺逸彦編1977『アイヌ叙事詩:神謡・聖伝の研究』岩波書店.
59	門別	—	平賀エテノア	1880	1977	斑文鳥の神の自叙	神謡	久保寺逸彦編1977『アイヌ叙事詩:神謡・聖伝の研究』岩波書店.
60	門別	—	平賀エテノア	1880	1977	村主の鼻神の妹神の自叙	神謡	久保寺逸彦編1977『アイヌ叙事詩:神謡・聖伝の研究』岩波書店.
61	門別	—	平賀エテノア	1880	1977	狩人の旦那(大将)の自叙	神謡	久保寺逸彦編1977『アイヌ叙事詩:神謡・聖伝の研究』岩波書店.
62	門別	—	平賀エテノア	1880	1977	シヌタツカ媛の自叙	神謡	久保寺逸彦編1977『アイヌ叙事詩:神謡・聖伝の研究』岩波書店.
63	門別	—	平賀エテノア	1880	1977	始祖神の自助	神謡	久保寺逸彦編1977『アイヌ叙事詩:神謡・聖伝の研究』岩波書店.
64	門別	—	平賀エテノア	1880	1961	KAMUI OINA	英雄叙事詩	久保寺逸彦編1977『アイヌ叙事詩:神謡・聖伝の研究』岩波書店.
65	門別	—	平賀エテノア	1880	1998	オオカミ神と村おさ	神謡	萱野茂 1998a『萱野茂のアイヌ神話集成2:カムユカラ編Ⅱ』ピクチャーエンタテインメント.
66	門別	—	平賀エテノア	1880	1998	自分の憑き神と戦う	英雄叙事詩	萱野茂 1998b『萱野茂のアイヌ神話集成8:ユカラ編Ⅱ』ピクチャーエンタテインメント.
67	門別	—	平賀さだも	1895	1991	トゥミクミク 悪党カワウソとオオカミ	神謡	中川裕 1991「トゥミクミク 悪党カワウソとオオカミ」母と子のアイヌ語教室(第11回)教材.
68	門別	—	松島トミ	1922	2002	オオカミの木彫りを持つ女を救った男のウエベケレ	散文説話	大谷洋一 2002「調査報告:松島トミさんの口承文芸4」北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要③(8)、pp.89-128、北海道立アイヌ民族文化研究センター.

5. 付表③「コタン探訪帳」中に確認できるオオカミに関する記述

項目 番号	ノート No.	ページ 番号	調査地	見出し	オオカミに関わる記載	備考
1	1	9	美幌	狼	カムイとしての名称	記載がある日付: 昭和25年10月16日
2	3	33	美幌	—	オオカミ(が野獣になった?)と同様に鶴が 野鳥になった	昭和26.4.16
3	4	24	標茶 虹別	狼の神	カムイとしての名称	昭和26.4.21
4	5	21	千歳	—	カムイとしての名称	昭和26.6.11
5	6	48	足寄	山で使っていけな い言葉	山で悪口を言っはいけないカムイとして	昭和26.8.28
6	6	103	名寄	horokeu Kamui	オオカミを獲ると祭る	昭和27.6.7
7	8	20	標茶 虹別	iri Kimun nusa	山で熊を獲ったら肉の一部を約束したオオ カミや魚に与える オオカミの頭を祭る	昭和28.5.22
8	8	55	弟子屈	狼の神	(判読不能文字あり)	昭和28.6.8
9	8	56	弟子屈	—	カムイとしてのあつかい	昭和28.6.8
10	8	86 87	新冠 去童	tabu	カムイとしての名称	昭和28.6.30
11	8	103	鷓川村 鱒部落	iomande	イオマンテをする対象としてオオカミのカムイ の名称	昭和28.7.1
12	8	107	鷓川村 鱒部落	(狼に追はれたら)	オオカミに追われたら木にのぼり、皮針で耳 をほじってみせる。	昭和28.7.1
13	8	108	鷓川村 鱒部落	—	白いオオカミ 赤いオオカミ	昭和28.7.1
14	8	200_08	上士幌?	上士幌	オオカミを獲った人物 オオカミとイヌの足跡	※ 日付不明 手描きのイヌ・オオカミ足跡 の図あり
15	9	19	鶴居	—	カムイとしての名称	昭和29.1.14
16	10	9	屈斜路	狼	オオカミの筋を手首に巻く	昭和30.3.10
17	10	022+02 3_01	鶴居	MEMO	昔、狼を祭ったか問合せ	昭和30.0.7
18	10	022+02 3_02	鶴居	—	問合せへの答え オオカミを送った	昭和30.3.7
19	10	34	塘路	—	オオカミの子を送った	昭和30.8.17
20	10	122	虻田	海の狼のタブー	海の上でオオカミの悪口を言わない	※ 日付不明
21	10	145	新十津川	狼	咳払いをすると獲ったシカを譲ってくれる カムイとしての名称	昭和31.1.9
22	10	147	新十津川	天	オオカミやクマの一番偉いカムイが住む世界	昭和31.1.9
23	10	173	阿寒	オタシト°ンクル	オオカミ神の娘	昭和31.2.18

## 5. 付表③ 「コタン探訪帳」中に確認できるオオカミに関する記述

項目 番号	ノート No.	ページ 番号	調査地	見出し	オオカミに関わる記載	備考
24	11	19	帯広	鶴	悪い熊に追われたらツルかオオカミに頼む	昭和31.6.26
25	11	21	東静内	pisyun nusa	ヌササンにオオカミを祭る位置	※ 日付不明
26	11	87	荷負 (平取)	狼(ホルケウカム イ)	<u>オオカミを飼ってから送った</u>	昭和32.8.13
27	11	125	空知	カムイシリ	オオカミが住む山	昭和33.1.9
28	11	126	空知	—	オオカミが住む山	昭和33.1.9
29	11	159	紋別	狼	カムイとしての名称	昭和34.2.1
30	11	173	清水	シタマシヌプリ	「大犬」が天から下ろされた山	昭和34.3.5
31	11	178	清水	狼	オオカミのカムイの名称 オオカミが鳴く=鹿を獲って呼んでいるので イヌを連れて探しに行った	昭和34.3.6
32	11	191	近文	狼	発情期の犬につく オオカミを送ったということは聞いたことがない	昭和34.8.2
33	12	4	静内 農屋	セタウシ山	昔オオカミが沢山いたところ	昭和34.9.1
34	12	92	虻田	狼(horukeu Kamuy)	<u>誤って獲ると送る</u> 飼うことはない	昭和35.6.23
35	12	99	虻田	狼(horokeu)	天から有珠山にオオカミが下りた	昭和15.10.3
36	12	151	雪裡	狼	飼うことはないが、先祖が犬との仔を飼って いた <u>誤って獲ると丁寧</u> に送る	昭和36.4.12
37	12	192	長万部	狼の娘(menoko yukara)1/5	「オオカミの神の娘」 メノコユカラ	昭和36.4.29
38	12	193	長万部	狼の娘(menoko yukara)2/5	「オオカミの神の娘」 メノコユカラ	昭和36.4.29
39	12	194	長万部	狼の娘(menoko yukara)3/5	「オオカミの神の娘」 メノコユカラ	昭和36.4.29
40	12	195	長万部	狼の娘(menoko yukara)4/5	「オオカミの神の娘」 メノコユカラ	昭和36.4.29
41	12	196	長万部	狼の娘(menoko yukara)5/5	「オオカミの神の娘」 メノコユカラ	昭和36.4.29
42	13	57	平取 荷菜	熊の子守歌	牡ジカの群れとオオカミのウボボ	昭和36.9.29
43	13	139	貫気別 荷負本村	⑧	(判読不能文字あり) オロロビンネシリにいたオオカミがコタンの近 くに来たというウボボの由来	昭和36.10.30
44	15	11	静内 農畑 サムタイ	Seta ushi nupuri	オオカミが住むところ	昭和37.3.17
45	15	28	静内 農畑	動物婚縁	オオカミとの婚姻譚	昭和37.3.18
46	15	30	静内 農畑	熊と狼と狐1/3	オオカミとの婚姻譚	昭和37.3.18
47	15	31	静内 農畑	熊と狼と狐2/3	オオカミとの婚姻譚	昭和37.3.18
48	15	32	静内 農畑	熊と狼と狐3/3	オオカミとの婚姻譚 男熊や男狼は人間の女には惚れない	昭和37.3.18

## 5. 付表③ 「コタン探訪帳」中に確認できるオオカミに関する記述

項目 番号	ノート No.	ページ 番号	調査地	見出し	オオカミに関わる記載	備考
49	15	164	鶴川 平取町平賀	⑧kamui yukar(狼 の子)1/2	オオカミの子のカムイユカラ	昭和37.5.26
50	15	165	鶴川 平取町平賀	⑧kamui yukar(狼 の子)2/2	オオカミの子のカムイユカラ	昭和37.5.26
51	17	158+15 9- 002_07	—	horokeu kamuy	オオカミの名称	※ 日付不明
52	18	77	白糠	狼	オオカミを飼ってシカを獲らせたというトウイタ クがある	昭和38.2.1
53	18	111	近文	悪い狼 oina1/2	浜へでてクジラを見つけたオオカミと2人のカ ムイ	昭和38.7.20
54	18	112	近文	悪い狼 oina2/2	浜へでてクジラを見つけたオオカミと2人のカ ムイ	昭和38.7.20
55	18	134	鶴川	pon kut	熊やオオカミに対する魔除けとしてのpon kut?	昭和38.9.22
56	19	44	富川	—	oynaはクマ, オオカミ, キツネなどの話	昭和42.2.17